

を名乗る一族が大名主として勢力を振っていたらしい。

元寇に際して異国調伏の祈禱をした西大寺の僧叡尊（興正）は、弘安八年（一二八五）に葦屋氏宅に宿泊し、住民に菩薩戒を授けている。この頃には全国的に社会秩序に抗する風潮があらわれ、摂津国にもその例は多く、東大寺・興福寺の管下である兵庫関の騒擾事件には打出を本貫とする後藤らいわゆる悪党三名が参加している。

南北朝時代になると当市域も戦乱の巷となり、元弘三年閏二月（一三三三）には鎌倉幕府の六波羅勢と播磨の赤松円心（則村）との合戦、延元元年二月（一三三六）の足利尊氏勢と楠木正成らの打出・西宮浜の合戦、觀応二年二月（一三五一）の足利尊氏と直義の打出浜合戦などが有名である。

室町幕府治下においても一時的な安定期はあつたものの、將軍と守護大名の対立抗争、世情不安からくる下剋上の風潮、郷惣村形成の風潮は度を増していく。このようない社会情勢を反映して、從来から当地域に設置された諸莊園、長講堂領葦屋荘・大光明寺領葦屋荘・北野

社領葦屋荘・神祇伯家領葦屋荘などが多くは不知行の相を呈し、在地の土豪・国侍・被官などの進出がいちじるしくなる。

応仁の乱に端を発した菅領細川氏の内紛はいわゆる足軽大名河原林正頼（瓦林政頼）らの奔走によってかえって激化し、芦屋の鷹尾城、西宮の越水城の動きが当地方をしきりと刺激し、中央の権門たちの関心をひきつけた。

戦国末期に三好長慶の勢力は五畿内を制したが、天文二十四年（一五五五）の頃、芦屋庄持山東西十八町をめぐつて、東の西宮社家郷、西の本庄と吉屋庄民との間に起つた山論は長期にわたった。芦屋庄民が挙げて三好長慶の居城芥川へ逃散したとも伝えられ、永禄三年（五六〇）冬に長慶の家臣松永久秀の斡旋により、五年のち帰村するという歴史的大事件も経験している。

また、遺存数は多くないが、中世の金石文・石造美術品も市内から発見されている。

第一篇 考古篇

第一章 旧石器・縄文時代

1 旧石器時代

氷河時代と人類の出現

期と温暖な間氷期がくり返され、この間に旧石器時代人の活動があった。

地球の長い歴史のなかに新生代と呼ばれる時期がある。この新生代は第三紀と第四紀に分かれ、人間が地球上で活躍しはじめるのは第四紀の洪積世である。洪積世は

約二〇〇万年前から約一万年前までの長い時期であり、別名を氷河時代ともいわれている。

ヨーロッパではアルプスを中心にドナウ・ギュンツ・

ミンデル・リス・ビュルムの各氷河期があり、寒冷な気候とその間に温暖な間氷期があつた。かような寒冷な水

二〇〇万年～六〇万年前位にアフリカに人類の文化が始まつたとされ、タンザニアのオルドワイ峡谷や南アフリカ等からかなりの化石骨が発見され、アウストラロピテクスと呼ばれている。

六〇万年～三〇万年前になるとアジアにも人類が出現する。ジャワ原人、北京原人がそれである。

三〇万年～一五万年前になると北京原人が中国では多くなり、動物では温暖な気候の森林地帯にナウマン象が出現した。

一五万年～一万年前になるとシベリア地方ではマンモス象が多く出現し、日本でもナウマン象が出現した。放

放射性炭素による年代測定の結果、一万六、〇〇〇年前を

示す長野県野尻湖底出土化石もある。

次は新石器時代になり、地質学では沖積世と呼ばれ、縄文時代になる。

旧石器時代研究のあゆみ

旧石器時代、先土器時代の呼称 昭和二十四年に群馬県岩宿遺跡が発見され、その遺跡が土器の製作を知るなり時代のものだと確認されて二五年以上になる。それ以後、その石器時代は先縄文時代、プレ縄文時代、無土器時代、先土器時代、旧石器時代と様々な名称で呼ばれてきた。しかし最近は先土器時代、旧石器時代の名称が一般に使用されている。

特に先土器時代の名称は旧石器時代 (Palaeolithic age)

・中石器時代 (Mesolithic age) の代用語として使用されている。また最近は旧石器時代の名称使用も多くなり、旧石器時代を前期旧石器時代 (チヨッパーと剥片尖頭器の文

化) → 後期旧石器文化 (ナイフ形石器文化 → 細石刃文化) ↓ 晩期旧石器文化 (有舌尖頭器文化) に分類している学者も(1)ある。

旧石器文化探求のはじめ 旧石器文化の探求はかなり

古くから行なわれ、明治四十一年（一九〇八年）横浜で開業医をしていたイギリス人のマンローの著書「先史の日本」(Pre-historic Japan)には、旧石器時代の存在が書かれてある。

大正六年（一九一七年）には、大阪府国府遺跡を発掘した喜田貞吉博士が砂利層の下に粘土層があり、その層から石鎌や石槍とは異った大型の石器が多数発見され、それが日本では珍しく、ヨーロッパ的な遺跡だとして旧石器時代の存在を提唱した。

明石原人の発見 昭和六年五月、六月の「人類学雑誌」に直良信夫は、「播磨国西八木海岸洪積層中発見の人類遺品」という論文を発表して、旧石器時代研究を一步前

進させた。さらに直良信夫は西八木海岸の崩壊礫層中から人類の左腰骨を発見した。この腰骨は長谷部言人博士によつて研究され、のちにニッポントロプス・アカシエンシスと命名された。しかしこの腰骨は直良信夫の自宅と共に昭和二十年春、戦火のため焼失したが、東京大学人類学教室にその石膏模型と写真が保存されていたので長谷部博士はこれによつて研究した。その論文は昭和二十三年七月の「人類学雑誌」の「明石市附近西八木最新世前期堆積出土人類の腰骨の原始性に就いて」である。

この頃、群馬県桐生市郊外では一青年によつて赤土層中に石器や剝片が包含されているのが発見された。それが岩宿遺跡であり、発見者が相沢忠洋であった。この発見は日本の旧石器時代研究に画期的な進展をもたらした。

旧石器時代とその年代 この石器は何年前のものだろうか、ナウマン象・マンモス象はいつ頃住んでいたのだろう

うかといつたいろいろな疑問に対する一つの解答として、その絶対年代はわからないが、ある程度の年代を知る方法が昭和二十二年に当時シカゴ大学教授であつたりビーによつて明らかにされた。それは空気中の炭酸ガスの炭素中に、質量数一四の放射性炭素が存在し、それを生物は常に受け入れており、それが生命を失うと炭素一四の補給が止まり、それは減少しその半減期が約五、八〇〇年で比較的長いので考古学に応用した。しかしこの放射性炭素一四による測定は、年代を知りたい遺物そのものが対象になるのではなく、それと伴出する木材や木炭が対象になり、その伴出物がなければその方法は用いることができない。

しかし現在では他に遺物そのものを測定し、年代を決定する方法が見出された。それは黒曜石水和層年代測定法といわれ、黒曜石は長い年月がたつと新しかった剝離面も風化したり、その他の理由により変化がおこる。この石質変化 (Patina) の進度によつて年代を測定する。この方法は昭和三十五年、アメリカ地質調査のフリードマ

表1 放射性炭素による年代測定(旧石器時代)

年 代 (B P)	資 料 番 号	資 料	年 代 の 判 明 し た 層	関 連 文 化	土 器 時 代 ↑ ↓ 先 土 器 時 代
6160±120	GaK - 254	珊瑚	沼珊瑚層	…有楽町海進	土器時代
8400±350	M - 237	貝殻	黄島貝塚貝層	—押型文土器	先土器時代
9240±500	M - 770-771	木炭	夏島貝塚第1貝層	—夏島Ⅱ式土器	
9450±400	M - 769	貝殻	"		
10085±320	I - 943	木炭	上黒岩岩陰第6層	—無文土器 —細石器文化?	
10700±300	I - 946	木炭	福井岩陰第7層	—?	
9000	48 - 6b	黑曜石	上ノ平石器文化	—尖頭器文化	
11000	48 - 6a	黑曜石	"	—尖頭器文化	
10650±250	GaK - 311	木材	浅間第2輕石層—上部ローム層・板鼻黃色輕石層	—	
11300±400	M - 1430	木材	"		
11330±260	GaK - 171	泥炭	江古田泥炭層	"	
11840±290	GaK - 172	泥炭	"		
13130±600	I - 947	木炭	福井岩陰第9層	—?	
13130±230	GaK - 159	木材	板鼻褐色輕石層下層総社町泥炭層(寒相)	"	
14800±350	GaK - 210	泥炭	白滝第31地点堆積物	"	
15800±400	GaK - 160	泥炭	"		
15800±380	GaK - 212	泥炭	"		
15750±390	GaK - 161	木材	波田ローム層・吐中植物化石層	"	
15900±140	Y - 641	木材	"		
16150±550	GaK - 267	木材	野尻湖底堆積物1(ナウマン象化石)	"	
16500±400	GaK - 318	木材	立川ローム層・蓮花寺泥炭層	"	
17000	48 - 7b	黑曜石	茂呂石器文化	—刃器文化	
18700	48 - 7a	黑曜石	"	—刃器文化	
21600±900	GaK - 268	木材	野尻湖底堆積物2(寒相)	"	
23700±600	Y - 591	泥炭	江古田植物化石層(寒相)	"	
26600±1600	GaK - 204a	木材	波田ローム層・末川泥流	"	
27800±2000	GaK - 204b	木材	"		
28400±1800	GaK - 312	木材	塩田泥炭層(ナウマン象化石)	"	
31100±2500	GaK - 269	木材	野尻湖底堆積物3	"	
30000<	GaK - 158	木材	小坂田ローム層	"	敲打器文化

シとスミスによるものである。これらを用いて測定された日本の旧石器時代の遺物の年代表が表1である。

旧石器文化の研究の進展　わが国で旧石器が発見され、学界に認められたのは岩宿遺跡のローム層中に遺物の存在が知られてからである。それまではローム層には遺物の存在が否定されており、発掘調査もローム層の上面で終了していたが、その発見以来ローム層中も注意されるようになつた。ローム層はいわゆる火山灰層で火山の爆発と共に降下した火山灰である。このローム層の研究は関東地方において早くから行なわれ、関東ローム研究グループも発足し、さらに全国的に日本第四紀総合変動に伴う地形の変化等が研究され、その当時の自然環境も次第に判明しつつある。

現在日本では約一、〇〇〇か所の旧石器時代の遺跡が知られている。しかし層位的に調査された遺跡は非常に

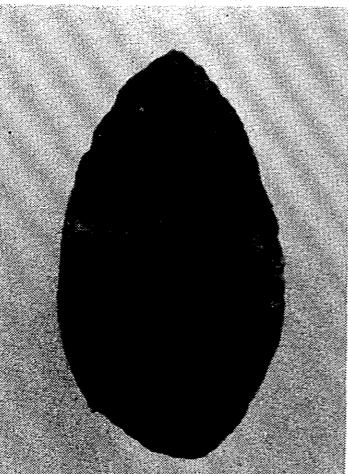


写真1 兵庫県多紀郡藤岡山遺跡
出土尖頭器(縮尺%)

熊本県水俣市石坂川石飛遺跡

岡山県倉敷市下津井鶴羽山遺跡
香川県香川郡直島町井島遺跡
大阪府枚方市楠葉遺跡

等である。このような層位的発掘により石器の新旧がわかり、石器の相対的編年を作ることも可能になった。しかし畿内における旧石器時代の遺跡も他地域と同様に、層位的発掘がなされておらず、不明な点が多いが、昭和四十七年に兵庫県多紀郡城東町藤岡山遺跡の発掘調査で、非常に硬い火山灰層中から両面加工の尖頭器が発見された(写真1)。この遺跡のある地点では古墳時代→弥生時代→縄文時代→旧石器時代の層位を示している。

播磨地方においては洪積世の土壤を掘り込んで池を作っているが、この際に旧石器がかなり発見されている。全国の各遺跡で発見される石器は同じ石材で製作されていない。付近で産出される石材を用いて製作されることが多く、例えば北海道の白滙地方では黒曜石、東北地

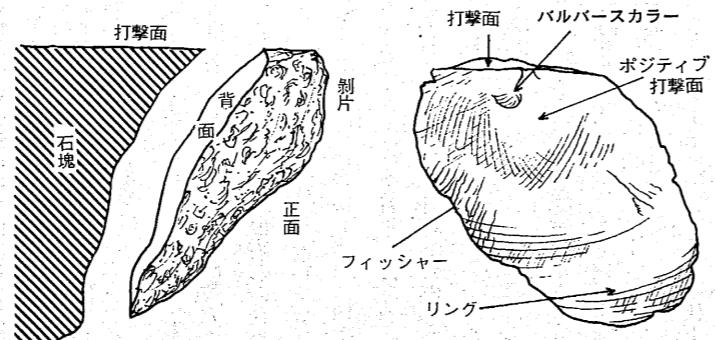


図1 剥片の名称

石材の端を圧迫することにより、うすく剥離することができる押圧剥離があり、有舌尖頭器や細石刃を製作する時に用いている。

石器の種類と名称 前述した方法により製作された石器はその機能、形態により何種類にも分類され、さらに特殊な場合は遺跡名をつけて細分している。ここでは石器名をアルファベット順にならべて説明していきたい。

石錐 (Awl・Dril)

剥片又は石刃を素材として先端を加工してとがらせて孔を穿ける道具で、わが国の千枚通しと同様の機能を持つものである。

石刃 (Blade)

縦長剥片で長さが幅の二倍以上あり、表面に二条あるいは数条の稜が平行してはしつているもの。典型的な石刃を作るためには、あらかじめ石核が柱状に調整されなければならない。その調整された石核から連続的に剥離されたものであり、高度の石器製作技術がいる。

方では頁岩、長野県を中心とした地方では黒曜石、近畿地方では安山岩系のサヌカイト、九州地方では黒曜石である。しかしこれは一般論であって、チャート、石英、水晶、砂岩等の石材で製作されたものもある。

石器の製作法 旧石器はすべて打製であり、それを製作する原材料は二種類ある。一つは礫塊から製作するもので、他是大きな岩の一部分を石器が製作できる程度に割つてするもので前者を石塊、後者を母岩といつてゐる。この石塊、母岩から石器を作るべく第一打が加えられ、それによつて剥離されたものは剥片(Flake)であり、その母体となるものが石核(Core)である。

このような石器製作法には河原石や鹿角等をハンマーとして直接石材に打撃を加えるのが直接打法であり、石材の上にタガネを当て、その基部をハンマーでたたいて剥離する方法を間接打法あるいはパンチ打法といつており、彫刻器(Graver)の刃先を作る時にも使用している。

さらに特殊な加工方法として細かい作業を行なう場合に

の調整された柱状石核を石刃核 (Blade core) と呼んで
くる。

チヨパー・チョッピングトゥール (Chopper, Chopping tool)

礫の先端をあらかじめ加工した片刃の粗製石器がチヨパーで、両刃の粗製石器がチヨビングトゥールである。打割を主目的とした石器で、前期旧石器時代のものである。

鉈状石器 (Cleaver)

先端部をとがらせずに打製石斧状に刃をつけた石器。アフリカやヨーロッパの前期旧石器時代の遺跡から握槌状石器に伴って出土する。

核石器 (Core tool)

石核そのものを素材として製作されたもので、握槌状

石器が代表的である。

舟底形石器 (Keel scraper)

舟の底あるいはボートのような形に仕上げられている。

上面には長円形の平面をもち、その縁辺から下方に

向って剥離が周辺をめぐっている。その機能はまだ判明してこない。

剝片石器 (Flake tool)

石核から剝片をはがしたり、その剝片を加工して石器としたもの。核石器に対する用語であり、石器の大部分は剝片石器である。

彫刻刀形石器 (Graver)

日本では彫刀、彫刻刀、彫器等と呼ばれている。剝片または石核の一端に一条または数条の細長い溝状の剥離をほどこした石器である。外国では後期旧石器時代に盛んに用いられ、日本においても多種類の彫刻刀形石器が出土しており、それらの特殊な形態を区別するために遺跡名をつけたものもある。例えば神山型彫刻刀、荒屋型彫刻刀等である。

握槌状石器 (Hand axe)

ヨーロッパ、アフリカにおける前期旧石器時代の代表的な石器である。ハンドアックスは一般には石核石器で、表面、裏面とも剥離痕でおおわれ、先端部と両側面

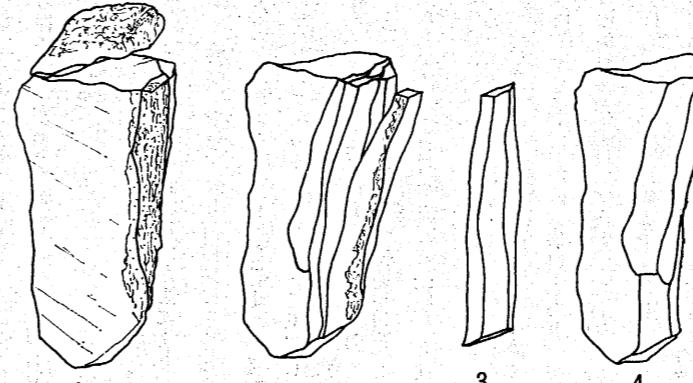
はかなり鋭利である。日本でも数か所の遺跡から出土している。

ナイフ形石器 (Knife blade · Backed blade)

ブレイドや縦長の剝片、横剥ぎの剝片を用いて、西洋ナイフ状に製作された石器である。ナイフ形石器は何種類かの形態に分類され、ヨーロッパではオーディ型、シャーテルペロン型、グラベット型に分類されている。日本においても茂呂型ナイフ（東京都茂呂遺跡出土標式）、杉久保型ナイフ（長野県杉久保遺跡出土標式）、国府型ナイフ（大阪府国府遺跡出土標式）、切出形ナイフ（縦よりもやや横が長い剝片を用い、切出し小刀の刃に類似した形に仕上げたもの。東京周辺が多いが現在は九州から北海道まで出土例が知られる）等、特色のあるナイフ形石器が存在し、他にもかなり特色のあるナイフ形石器が知られている。

特に国府型ナイフは安山岩（サヌカイト）を素材とし、横剥ぎの翼状剝片を用いて製作されており、その横剥ぎの剥離方法を瀬戸内技法と呼んでいる。

この瀬戸内技法によって作られたナイフ形石器は、中



1. 石核の第一段階 2. 剥離の順序 3. 中央部よりの剥離 4. 残された石核
図2 石刃の整作順序 (『兵庫県史』第1巻より)

国、近畿地方を中心として出土していく。

細石器 (Microlith)

小型石器の一群を呼び、三角形、台形、半月形等の幾何学的な形態をもつ細石器を幾何形細石器 (Geometric microlith) と呼んでいる。台形石器 (Trapeze) は九州地方を中心としてかなり出土し、細石刃と共に細石器文化を知るための好資料である。また細石器はあまりにも小型であるため、使用方法としてそれらをいくつか組合せて、一つの道具として使用した。一般に組合せ器具 (Composite tool) と呼ばれてくる。

砾 器 (Pebble tool)

石器の中で最も古いと考えられる石器で河原石の先端をあらく打ち砕き、自然面を多く残しているもの。前期旧石器時代のものである。

尖頭器 (Point)

ポイントという用語はかなり広い意味で使用される。先端がとがって、刺したり突いたりする役目を果たす石器はすべてポイントである。しかし旧石器時代研究



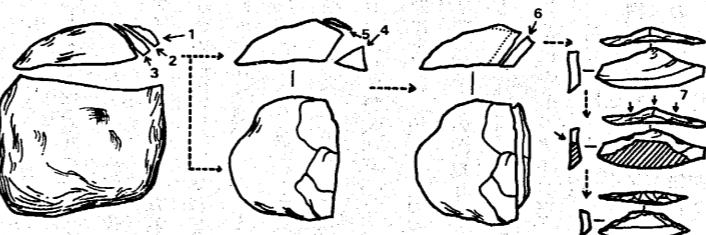
図4 細石器の着装

スクレイパー (Scraper)

物を削るための道具である。一般には削ったり、切ったりするための道具の削器 (Side-scraper) と搔きとりたり、抉りとつたりするための搔器 (End-scraper) に分けているが、他にも形態によって幾種類かに分類されている。

石器群の編年 多くの資料を整理し、分類してどれが古くてどれが新しいかを決め、それに年代的な順序を与えることが旧石器時代研究の基本的態度である。しかし前述したように遺跡は一、〇〇〇か所以上知られているが、層位的な発掘調査が行われたのはその内の二パーセントから三パーセントにすぎない。しかしい層位的出土例の石器と対照させながら特定の時期と地域における人間集団の生活を知り、その年代を知ることも可能である。それが編年の仕事であり、現在旧石器時代の編年を大きくチョバー、チョピングツール文化→ナイフ形石器文化→尖頭器文化→細石器文化→有舌尖頭器文化に分

図3 濱戸内技法 (『図説世界文化史大系』より)



では、尖頭器 (Point) は「石槍」あるいは主としてそれに類するものを呼んでいる。
わが国のポイントは製作技術から、両面加工 (biface) と、片面加工 (Uniface)、その中間的なものがあり、木葉形尖頭器は多くの場合両面加工によつて全面を剥離し、上下共に尖端部をもつ。
また尖頭器の基部に舌状の突起をつけたものを有舌尖頭器あるいは有茎尖頭器と呼んで区別している。

2 縄文時代

縄文時代の概観と研究の現状

土器の出現 旧石器時代の伝統を残しつつ土器が出現した。最も古い土器と考えられるのは長崎県福井洞穴から細石刃と共に出土した粘土の紐をはりつけた隆線文土器である。その年代は放射性炭素一四による測定では約一万二〇〇〇年前であり、世界で最も古い土器である。さらに愛媛県上黒岩岩陰遺跡では有舌尖頭器と、長崎県泉福寺第三洞穴からは細石核、細石刃と伴出している。

現在隆線文土器が細石器、有舌尖頭器と伴出する遺跡は少いが、隆線文土器が出土する遺跡は日本全国に存在する。

縄文時代の時代区分 縄文土器は單一の時期のものではなく長期間にわたって続いた。その期間には土器の形

態や文様(菱形)にも変化があり、その形態や文様にも地方差や年代差があつてかなり複雑である。この地方差や年代差を知るには一時期の土器の特性を研究し「型式」を定める。その型式は地方差、年代差によりさらに多くなる。この増大する型式を野放しにはできないので型式を大別して縄文土器の体系を整えて編年の作業に着手する。

この縄文土器の編年は縄文土器研究が最も進んでいた関東地方から行われた。昭和の初期には前期・中期・後期の三分法が発表された⁽³⁾。この三分法は明治時代から呼ばれていた陸平風、大森風、厚手風、薄手風等を考慮しながら作製された。

昭和十年代になると前期の前に早期を、後期の後に晚期を加えた早期・前期・中期・後期・晚期の五期法が提唱された⁽⁴⁾。

この五期法によつて縄文時代の区分は終つたかに思われたが、資料の増加に伴い新しい事柄も多く発見され、新たに昭和三十六年に早期の前に草創期を加えて草創期・

早期・前期・中期・後期・晚期の六期法が誕生し、現在もこの六期法を使用している。

縄文土器の古さ 縄文土器の古さについては現在未だ定説がない。それは放射性炭素測定による年代と日本列島内にある縄文文化の資料と大陸の資料との対比を中心とした年代とに分けられている。

放射性炭素による測定値は表2の通りである。一方大

陸との資料対比による年代は土器の発見されない青森県長者久保遺跡から出土した局部磨製の円のみ等とシベリアのバイカル地方の新石器時代に属するイサコブオ期(B・C四〇〇〇~三〇〇〇)の円のみを対比し、日本で土器をもたない時期(無土器)の文化を推定し、新潟県本ノ木、小瀬ヶ沢遺跡の植刃をシベリア等の植刃と同様と考えてその古さをB・C三〇〇〇年前後としている。

また弥生時代は大陸系の文物を伴つて土器等が出土しておらず、これを紀元〇年前後とし、土器一型式を平均五〇~六〇年として一時期平均一〇型式の細別土器型式が

入り、六期法の古い時期の草創期をB・C三〇〇〇年前後におき、その間五〇〇年ごとに区分できるので早期B・C二〇〇〇年、中期B・C一五〇〇年、後期B・C一〇〇〇年、晚期五〇〇年に割り当つて⁽⁵⁾。

この年代決定法について未だ絶対的な反論がなく、また放射性炭素による測定法にも資料の取扱い、場所等でかなりの誤差が出る。

畿内の縄文土器 近畿地方における縄文土器の研究は京都大学の浜田耕作博士等によって実施された大阪府藤井寺市の国府遺跡⁽⁶⁾の発掘によつて始まつたといつても過言ではない。昭和に入ると京都大学考古学研究室による京都市左京区北白川遺跡⁽⁸⁾の発掘、奈良県における宮滝遺跡⁽⁹⁾の発掘調査、樞原遺跡の調査等は全国的にみてもレベルの高い研究である。

現在畿内で最も古いと考られている土器は隆線文土器で但馬で最近出土報告がある。奈良県の大川遺跡⁽¹¹⁾、兵庫県の別宮家野遺跡⁽¹²⁾、神鍋遺跡⁽¹³⁾等但馬の北部山岳地帯の早

表2 放射性炭素による年代測定(縄文時代)

年 代 (B P)	資料番号	資 料	遺 跡	伴 出 土 器
10085 ± 320	I - 943	木 炭 木	上黒岩 国 四 国	無文土器(6層) 細隆線文(9層)
12165 ± 600	I - 944	木 木	"	
9450 ± 400	M - 769	貝 殻 木	夏 島 島 式	
9240 ± 500	M - 770-771	貝 木	東 國 東 中 關	
8400 ± 350	M - 769	貝 殻 木	夏 島 島 城	
8150 ± 180	N - 168	貝 貝 木	黃 黃 輪 台	II 式
8240 ± 190	N - 170	貝 貝 木	花 輪 台	II 式
9190 ± 200	N - 174-1	貝 貝 木	底 土 器	
8740 ± 190	N - 174-2	貝 貝 木		
7680 ± 200	I - 550	木 木	無文尖底土器	
6630 ± 150	GaK - 454	珊瑚礁 木	一 期	土 器
6370 ± 110	GaK - 110	貝 貝 木	二 期	土 器
6110 ± 160	GaK - 278	貝 貝 木	三 期	土 器
4730 ± 90	GaK - 379a	貝 貝 木	四 期	土 器
4760 ± 90	GaK - 3796	貝 貝 木	五 期	土 器
5920 ± 140	N - 38	貝 貝 木	六 期	土 器
4520 ± 130	N - 176	貝 貝 木	七 期	土 器
6800 ± 255	I - 533	貝 貝 木	八 期	土 器
5090 ± 65	S I - 125	木 木 木 木 木 木 木 貝	勝 坂 阿 玉 台	
4570 ± 150	UCLA-279	木 木 木 木 木 木 木 貝	勝 坂 阿 玉 台	
5100 ± 400	M - 240	木 木 木 木 木 木 木 貝	勝 坂 阿 玉 台	
4546 ± 220	C - 548	木 木 木 木 木 木 木 貝	勝 坂 阿 玉 台	
3938 ± 500	"	木 木 木 木 木 木 木 貝	勝 坂 阿 玉 台	
4580 ± 60	S I - 93	木 木 木 木 木 木 木 貝	勝 坂 阿 玉 台	
4340 ± 130	N - 103	木 木 木 木 木 木 木 貝	勝 坂 阿 玉 台	
4280 ± 130	N - 183	木 木 木 木 木 木 木 貝	勝 坂 阿 玉 台	
3780 ± 150	N - 59	木 貝 木 貝	I 期	II 期
3060 ± 110	GaK - 170	木 貝 木 貝	内 生 行	式
3000 ± 120	N - 94	木 貝 木 貝	之 期	式
2870 ± 250	M - 174	木 貝 木 貝	湯 行	期
1960 ± 70	GaK - 246	木 貝 木 貝	II 大	a
3680 ± 130	N - 144	木 貝 木 貝	安 後	期
3130 ± 140	N - 179-1	木 貝 木 貝	大 安 後	B
3230 ± 160	W - 322	木 貝 木 貝	大 安 後	III
3370 ± 80	UCLA-141	木 貝 木 貝	?	C ₂
2800 ± 600	M - 165	木 貝 木 貝	洞 洞 行	B
2700 ± 170	N - 53	木 貝 木 貝	"	III
2820 ± 130	N - 110	木 貝 木 貝	"	A
2990 ± 130	N - 166	木 貝 木 貝	"	A'
3020 ± 130	N - 171-1	木 貝 木 貝	"	
2940 ± 130	N - 171-2	木 貝 木 貝	"	
2260 ± 130	N - 166-1	木 貝 木 貝	"	
2290 ± 120	N - 166-2	木 貝 木 貝	"	
2780 ± 110	N - 166-3	木 貝 木 貝	"	

期の古い時期の遺跡から必ず発見されるであろう。また畿内においては縄文中期の遺跡が少く全国的にみて研究が遅れており、滋賀県の醍醐遺跡出土の土器は北陸、西日本、東日本の接点の遺跡出土土器として注目されよう。

早期、前期、後期、晩期の研究は他の地域と比較しても遜色がない。

縄文文化の終末、縄文文化の終末については多くの論争が繰り返された。有名な喜田貞吉博士と山内清男博士の「ミネルヴァ論争」^[14]もその中の一つである。

現在日本各地で縄文時代終末の土器といわれているのは次の通りである。

北海道地方—緑ヶ岡式土器、東北地方—大洞A式土器、関東地方—荒海式土器、中部地方—水II式土器、東海地方—水神平式土器、北陸地方—下野式土器、近畿地方—船橋式土器、瀬戸内地方—黒土BII式土器、九州地方—夜白式土器等である。これらの終末期の土器のうち西日本は文様の少い凸帯文系の土器が、東日本は文様の多い

このことから東日本は弥生文化の遠賀川式土器が濃尾平野まで広がった頃にはまだ縄文文化が継続し、稻の耕作も知らなかつた。また近畿地方には東北地方の原産と考えられる大洞式土器(亀ヶ岡式土器)がかなりの遺跡から発見され、その土器型式が晩期中頃の大洞C₁式土器位まであり、後半の土器はほとんど発見されていない。このようなことから西日本は東日本に比べて縄文文化の終了が早く、東日本の縄文晩期後半位で西日本は弥生時代へと移行したのである。

龜ヶ岡系の土器が栄え、一つの文化圏を作つてゐる。その文化圏は弥生文化の波及とともに一致して九州地方と東海地方を比べても、その差は一型式位であろう。しかし東日本への弥生文化の伝播は東海地方の凸帯文土器の文化圏の東端で停滞する。これは弥生土器の遠賀川式土器の分布と一致する。

に重大な役割を果した。

またその頃縄文土器の終末についての論文も多く発表された。

昭和二十年以後現在にいたるまで、各地に多くの研究者が輩出した。彼等によつて発掘調査された遺物は増加し、地域別の研究が行われるようになつた。

その結果、現在最も古いと考られてゐる隆線文土器・爪形文土器の発見、その土器に細石器が伴出する事実等多くの事柄が判明し、また放射性炭素による年代測定も行われるようになった。

これらのことより、縄文文化起源論、縄文文化の古さ、各地の遺跡から出土する植物性遺物等からその当時の環境復原、縄文時代における農耕（稻作）の存否問題、土偶等の出土による縄文人の精神面の研究等が行われている。

註(1) 芹沢長介「層位的出土例と相対的編年」古代史発掘社

(1)『最古の狩人たち』昭和四十九年 講談社

(2) 梅原末治『京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告』京都帝大考古学研究報告第二 大正七年

(3) 大場磐雄『縄文式土器論の過去及び現在』『考古学雑誌』二三卷一号 昭和八年

(4) 山内清男『縄文土器の大別と細別』『先史考古学』第一卷一号 昭和十二年

(5) 山内清男・佐藤達夫『縄文土器の古さ』『科学読売』一四卷三号 昭和三十六年

(6) 計(5)に同じ

(7) 浜田耕作『河内国府石器時代遺跡調査報告』京都帝大考古学研究報告第一六

(8) 梅原末治『京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告第一六』『京都府史跡名勝天然紀念物調査報告第一六』昭和十年

(9) 末永雅雄『宮滝の遺跡』奈良県史跡名勝天然紀念物調査報告十五 昭和十九年

(10) 末永雅雄他『櫻原』奈良県史跡名勝天然紀念物調査報告一七 昭和三十六年

(11) 酒詰仲男・岡田茂弘『大川遺跡』奈良県文化財調査報告一昭和三十二年

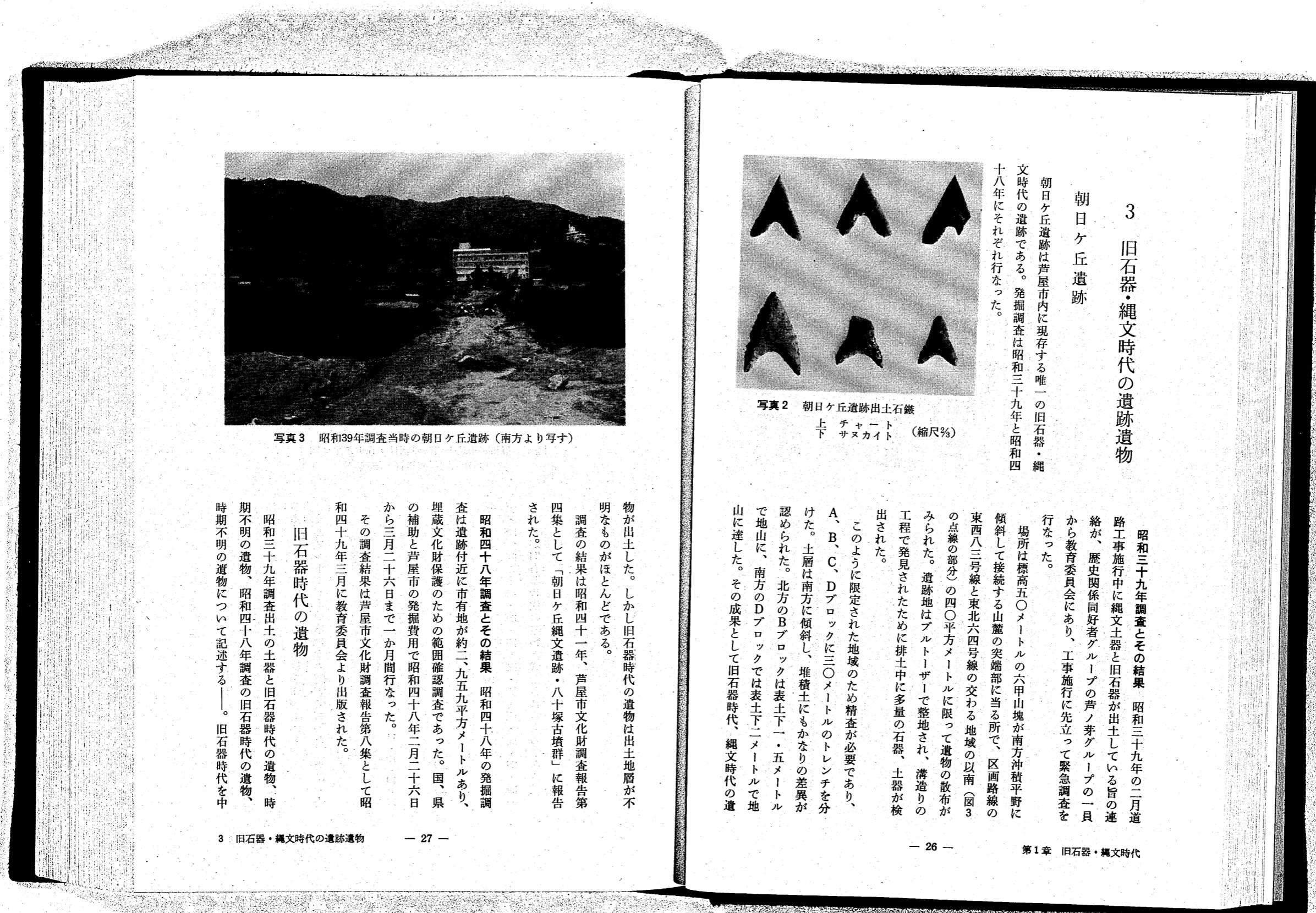
(12) 鎌木義昌『狩と漁の生活』『縄文時代』『兵庫県史』第一卷 昭和四十九年

(13) 藤井祐介・阿久津久『神鍋山』日高町教育委員会

- (14) 喜田貞吉『日本石器時代の終末に就いて』『ミネルヴァ』第一卷三〇号 一九三六年
山内清男『日本考古学の秩序』『ミネルヴァ』第一卷四号 一九三六年等あり

参考文献

- 世界考古学大系 第一卷 昭和三十四年 平凡社
日本考古学講座 三 昭和三十一年 河出書房
芹沢長介『先史時代』『考古学ノート』1無土器文化
新版 考古学講座 三 昭和四十四年 雄山閣
古代史発掘①・② 昭和四十八年 昭和四十九年
日本の考古学一・二 昭和四十年 河出書房
日本原始美術一 一九六四年 講談社
世界文化史大系二〇 昭和三十五年 角川書店
考古学辞典 昭和三十四年 創元社



3 旧石器・縄文時代の遺跡遺物

朝日ヶ丘遺跡は芦屋市内に現存する唯一の旧石器・縄文時代の遺跡である。発掘調査は昭和三十九年と昭和四十八年にそれぞれ行なった。

昭和三十九年調査とその結果 昭和三十九年の二月道路工事施行中に縄文土器と旧石器が出土している旨の連絡が、歴史関係同好者グループの芦ノ芽グループの一員から教育委員会にあり、工事施行に先立つて緊急調査を行なった。

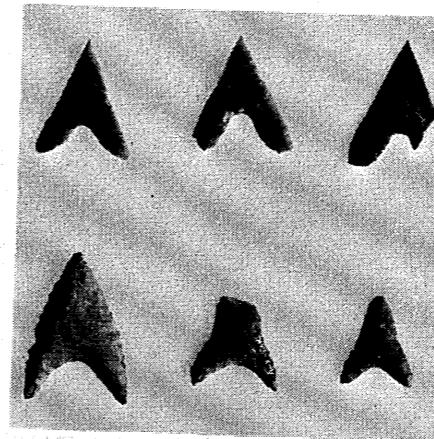


写真2 朝日ヶ丘遺跡出土石鏃
上 下 チヤカイト (縮尺%)

場所は標高五〇メートルの六甲山塊が南方沖積平野に傾斜して接続する山麓の突端部に当る所で、区画路線の東西八三号線と東北六四号線の交わる地域の以南(図3)の点線の部分)の四〇平方メートルに限って遺物の散布がみられた。遺跡地はブルトーラーで整地され、溝造りの工程で発見されたために堆土中に大量の石器、土器が検出された。

このように限定された地域のため精査が必要であり、

A、B、C、Dブロックに三〇メートルのトレンチを分けた。土層は南方に傾斜し、堆積土にもかなりの差異が認められた。北方のBブロックは表土下一・五メートルで地山に、南方のDブロックでは表土下二メートルで地山に達した。その成果として旧石器時代、縄文時代の遺

物が出土した。しかし旧石器時代の遺物は出土地層が不明なものがほとんどである。

調査の結果は昭和四十一年、芦屋市文化財調査報告第四集として「朝日ヶ丘縄文遺跡・八十塚古墳群」に報告された。

昭和四十八年調査とその結果 昭和四十八年の発掘調査は遺跡付近に市有地が約二、九五九平方メートルあり、埋蔵文化財保護のための範囲確認調査であった。国、県の補助と芦屋市の発掘費用で昭和四八年二月二十六日から三月二十六日まで一ヶ月間行なった。

その調査結果は芦屋市文化財調査報告第八集として昭和四九年三月に教育委員会より出版された。

旧石器時代の遺物

昭和三十九年調査出土の土器と旧石器時代の遺物、時期不明の遺物、昭和四八年調査の旧石器時代の遺物、時期不明の遺物について記述する——。旧石器時代を中心

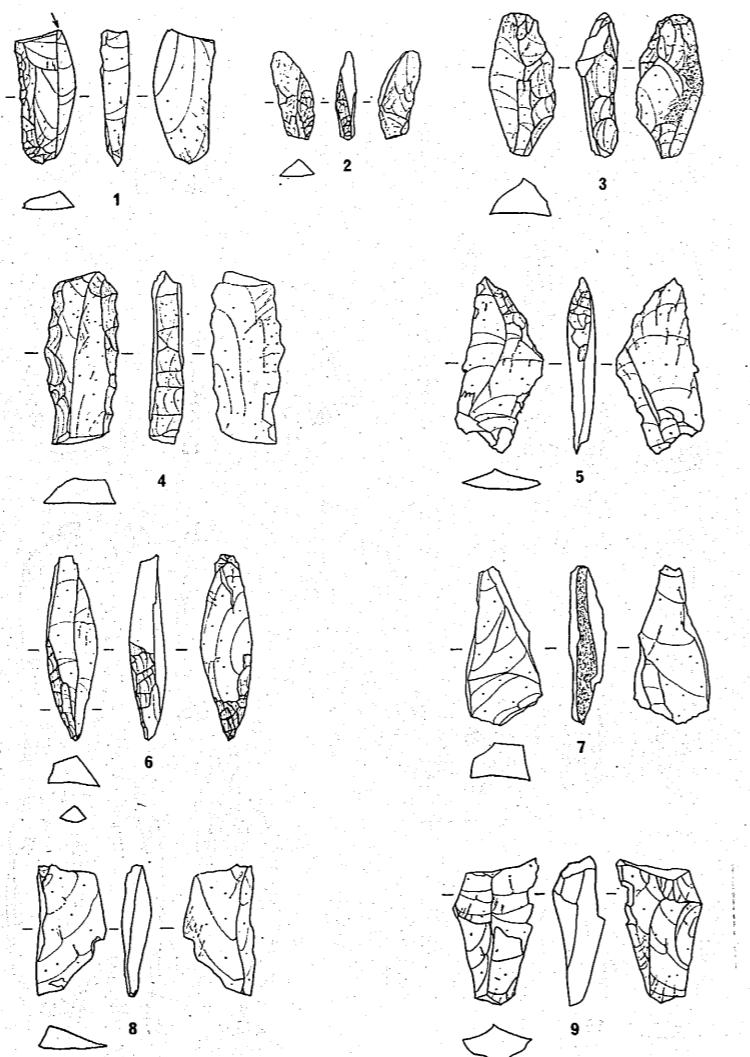


図6 朝日ヶ丘遺跡出土の旧石器時代の石器実測図（縮尺1%）

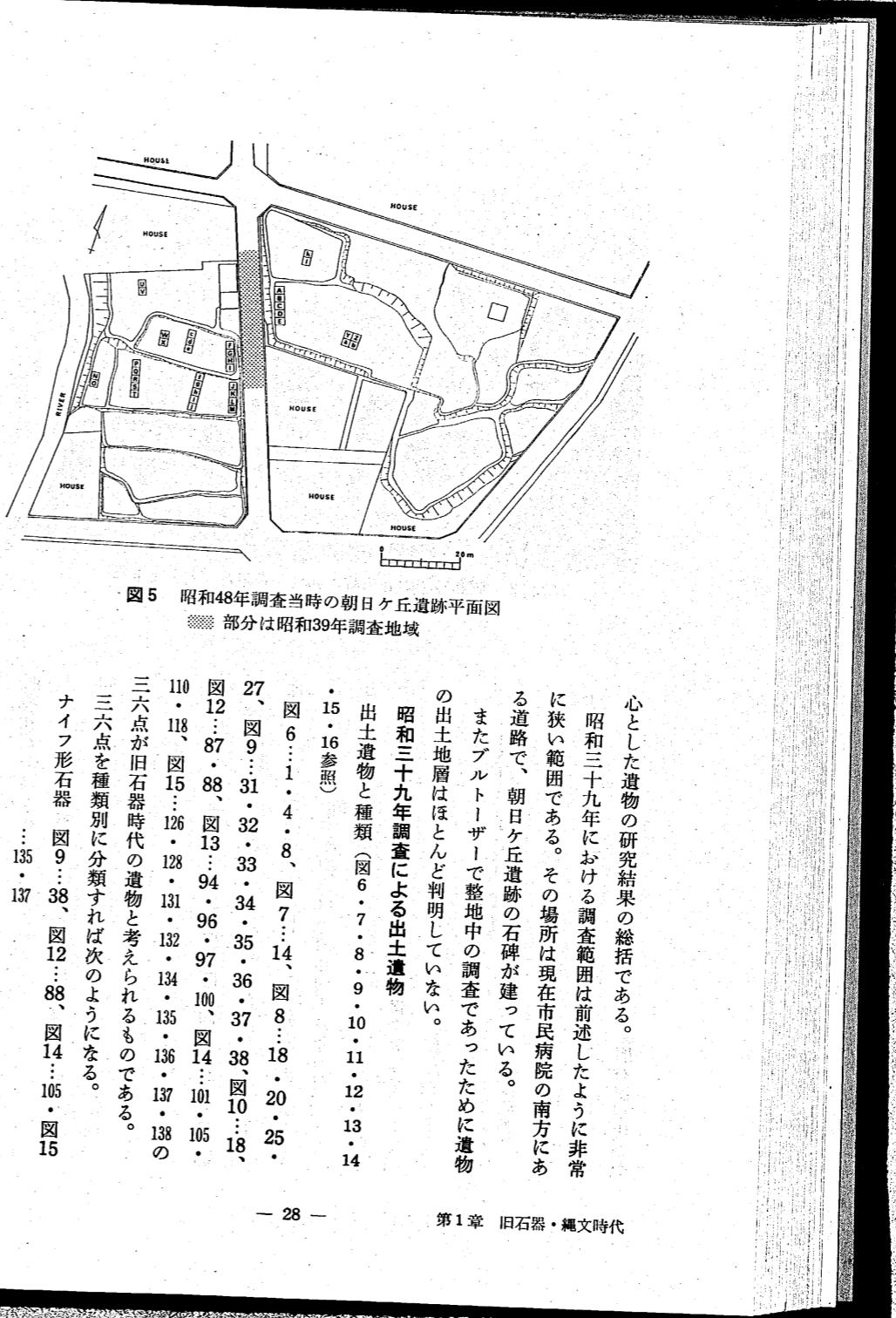


図5 昭和48年調査当時の朝日ヶ丘遺跡平面図
■部分は昭和39年調査地域

心とした遺物の研究結果の総括である。

昭和三十九年における調査範囲は前述したように非常に狭い範囲である。その場所は現在市民病院の南方にある道路で、朝日ヶ丘遺跡の石碑が建っている。

またブルトーラーで整地中の調査であつたために遺物の出土地層はほとんど判明していない。

昭和三十九年調査による出土遺物

出土遺物と種類（図6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16参照）

- | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| 図6 | 1 | 4 | 8 | 図7 | 14 | 図8 | 18 | 図9 | 1 | 20 | 図10 | 25 |
| 27 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 38 | 40 | |
| 図12 | 87 | 88 | 94 | 96 | 97 | 100 | 101 | 105 | 106 | 107 | 108 | |
| 110 | 118 | 126 | 128 | 131 | 132 | 134 | 135 | 136 | 137 | 138 | 139 | |
| 図15 | 125 | 128 | 131 | 132 | 134 | 135 | 136 | 137 | 138 | 139 | 140 | |
| 図14 | 110 | 135 | 137 | 138 | 139 | 140 | 141 | 142 | 143 | 144 | 145 | |
| 刃器 | 図6 | 4 | 図8 | 25 | 図14 | 105 | 図15 | 106 | 図16 | 107 | 図17 | |
| | 137 | | | | | | | | | | | |

三六点が旧石器時代の遺物と考えられるものである。

三六点を種類別に分類すれば次のようなになる。

ナイフ形石器 図9・38、図12・88、図14・105、図15

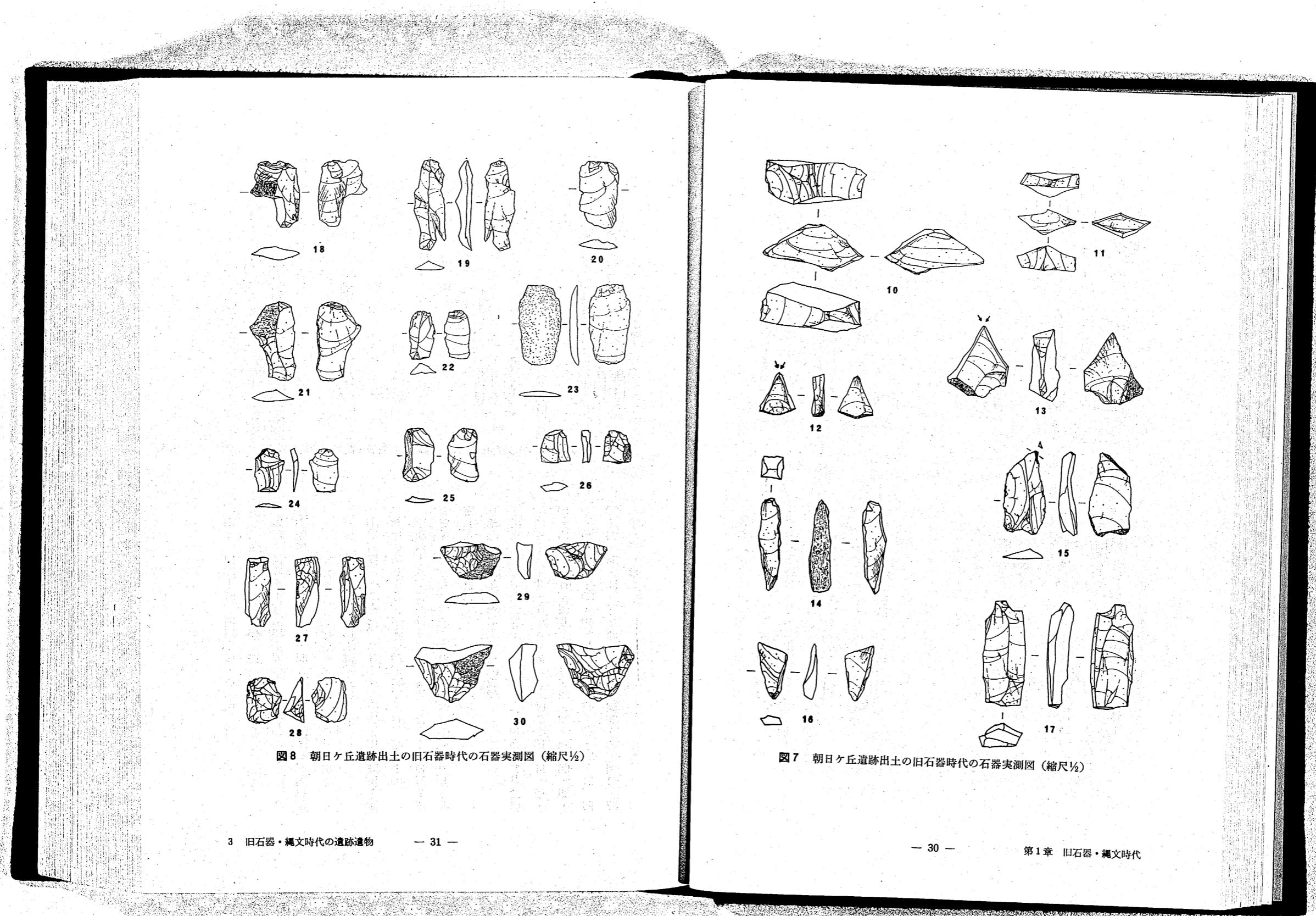


図8 朝日ヶ丘遺跡出土の旧石器時代の石器実測図（縮尺½）

図7 朝日ヶ丘遺跡出土の旧石器時代の石器実測図（縮尺½）

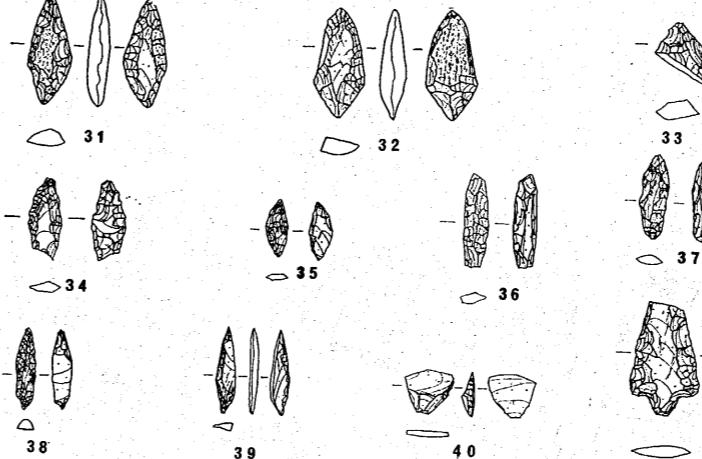


図9 朝日ヶ丘遺跡出土の旧石器時代の石器実測図(縮尺%)

石核	図8	134	削器	図12	87、図15
不明石器	図7	14、図8	100、図13	126、図15	128、図131
剥片	図6	8、図8	20、図13	18、図14	18、図15
搔器	図6	1、図13	94、図14	138、図14	136
彫器	図6	1、図13	97		
尖頭器	図9	31	32	33	34
		32	33	34	35
		33	34	35	36
		34	35	36	37
		35	36	37	図15
		36	37	38	
		37	38	39	
		38	39	40	
		39	40	41	

昭和四十八年調査による出土遺物

出土遺物と種類(図6・7・8・9・17・18・19・20・21参照)

図6	2	3	5	6	7	9	17	18	19	20	21
図7	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
図8	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
図9	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図10	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図11	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図12	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図13	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図14	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図15	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図16	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図17	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図18	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図19	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図20	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図21	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図22	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図23	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図24	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図25	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図26	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図27	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図28	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図29	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図30	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図31	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図32	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図33	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図34	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図35	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図36	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図37	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図38	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図39	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図40	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63
図41	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63

昭和四十八年調査による出土遺物
出土遺物と種類(図6・7・8・9・17・18・19・20・21参照)

不明石器 図7 14、図8 18、図10 18、図15 18、図14 101

剥片 図6 8、図8 20、図13 94、図14 118

石核 図8 27、図13 100、図14 101

搔器 図13 96、図15 138

彫器 図6 1、図13 138

尖頭器 図9 31、図13 97

削器 図12 87、図15 15

134

以上四点が旧石器時代の遺物と考えられる。
種類別に分類すれば次のようになる。

ナイフ形石器 図6 2・6、図7 16、図9 39、

刃器 図8 19、21、22、24、26、図18 48、図19 53、57

削器 図18 50、51、図19 54、58

搔器 図6 3、図8 28、29、図21 87

彫器 図7 12、13、図21 88

尖頭器 図8 30、図21 92

台形石器 図9 40

石核 国6 7、国7 17、国20 72

有舌尖頭器 国9 41

不明石器 国6 9、国7 10、11、15、国18 49、

剝片 国6 5、国8 23

以上の昭和三十九年調査と昭和四八年調査の出土遺物は合計七七点であり、その内訳はナイフ形石器一〇点、刃器一点、削器九点、搔器六点、彫器五点、尖頭器

一〇点、台形石器一点、石核六点、有舌尖頭器一点、不明石器一二点、剝片六点である。この中で剝片六点は当遺跡の代表的なものであり、実測図にして記載した。

また遺物の記述にあたり、昭和三十九年調査地域を朝日ヶ丘A地点、昭和四八年調査地域を朝日ヶ丘B地点に名称を変更し、さらにB地点においては出土地点・出土層位が判明しているのでこれも併せて記述していく。

ナイフ形石器

A、B両地点から発見されたナイフ形石器は一〇点あるが、ナイフ形石器として形状が整っているのは図6 2、

ナイフ形石器として形状が整っているのは図6 2、

(H—灰褐色粘質砂層)・6(I—灰褐色粘質砂層)・7(G—黄褐色粘質砂層)

図12 88、図15 135、図21 90(d—灰褐色粘質砂層)

である。

昭和

表3 旧石器時代石器一覧表
(39年・48年) 朝日ヶ丘遺跡

石器番号	石器名	石質	出土地	重量(g)	備考
1	彫器	サヌカイト	H-灰カ粘砂	4.6	完形(39)
2	ナイフ	"	J-黄カ砂	1.4	(48)
3	搔刀	"	M-黄カ砂	7.1	(48)
4	剥片	"	I-灰カ粘砂	11.6	(48)
5	核器	"	M-黄カ砂	6.7	(48)
6	ナイフ	"	I-灰カ粘砂	5.8	(48)
7	石剝	"	M-黄カ砂	8.3	(48)
8	明石	"	W-暗カ粘砂	4.1	(48)
9	器	"	I-黄カ砂	10.6	(48)
10	石剝	"	W-暗カ粘砂	19.4	(48)
11	明	"	d-灰カ粘砂	2.3	(48)
12	器	"	W-礫	2.1	(48)
13	石剝	"	X-暗カ粘砂	10.4	(48)
14	明	"	K-黄カ砂	7.0	(48)
15	器	"	L-黄カ砂	6.2	(48)
16	石剝	"	f-黄カ砂	1.8	(48)
17	不器	"	I-黄カ砂	14.1	(48)
18	明石	"	J-黄カ砂	4.5	(48)
19	器	"	X-灰カ粘砂	3.6	(48)
20	石剝	"	チヤカ	3.8	(48)
21	刃	"	"	4.4	(48)
22	剥片	"	J-黄カ砂	1.4	(48)
23	器	"	X-灰カ粘砂	4.3	(48)
24	石剝	"	チヤカ	0.8	(48)
25	刃	"	K-黄カ砂	1.9	(48)
26	石剝	"	e-暗灰カ粘砂	1.2	(48)
27	尖	"	d-灰カ粘砂	7.4	(48)
28	頭	"	W-灰カ粘砂	3.1	(48)
29	核器	"	チサヌカイト	4.5	基部のみ(48)
30	頭	"	"	11.5	完形(39)
31	核器	"	"	1.9	(48)
32	頭	"	"	2.6	欠損(48)
33	核器	"	"	1.1	基部欠損(48)
34	頭	"	"	0.8	完形(48)
35	フ	"	"	0.3	(48)
36	ナ	"	G-黄カ砂	0.9	(48)
37	イ	"	X-灰カ粘砂	0.7	(48)
38	台形	"	I-黄カ砂	0.4	(48)
39	石器	"	有舌尖頭器	0.3	(48)
40	頭	"	"	0.5	(48)
41	頭器	"	"	2.8	先端欠損(48)

図14: 105は様々な製作過程をもつ不整形の剝片の一部に調整加工を施したもので、形状も一定しない。

図6: 2は二・五センチの横剥ぎ剝片から作られた小形ナイフ形石器である。刃部は長側辺に作り、細かく調整剝離を行なっており、基部はやや巾が広く、主剝離面上に二次的に小さな縦位の剝離を行ない基部を作り出している。この種のナイフ形石器は香川県香川郡直島町井島鞍掛の井島遺跡出土のナイフ形石器を標準式とし、井島

I石器文化といわれている小形ナイフ形石器の範疇に入るものである。

図6: 6はサヌカイトの横剥ぎ剝片から作られたナイフ形石器で長さは五・四センチである。基部は主剝離面において細部加工が行なわれ、片側縁下半分にはブランディングが行なわれている。尖端は主剝離面からの打撃によりバルブを取り除いている。形態は杉久保型ナイフ形石器によく似ているが、杉久保型ナイフ形石器が縦長剝片から作られているのに対し、この石器は横剥ぎ剝片から作られている。このことは石器の素材に関係する

ものであろうか。

図7: 16は分割された剝片に細部加工をして切出型ナイフ形石器に仕上げたものである。特に基部を中心とした部分を入れて調整剝離を行なっている。

図9: 38は縦位の剝片から作られた小形ナイフ形石器で、主要剝離面は平坦剝離し、尖端部と基部には裏面も調整剝離を行なっている。佐賀県の平沢良遺跡からもこれと同形態の石器が出土している。

図9: 39は片側縁に自然面を残し、反対側には細かい調整剝離を行なっている横剥ぎ剝片を素材として作った小形ナイフ形石器である。

図12: 88は凹凸のある厚い剝片を利用して作ったナイフ形石器で背面右側は一回の剝離で稜を作り出し、左側は両面から細部加工を行なっている。裏面は凹凸の部分を入れて調整剝離を行なっている。また打面は細部加工により調整している。この種のナイフ形石器は山形県越中山A地点出土のナイフ形石器に類似する。

図15: 135は横剥ぎ剝片から作られており、背面右側に

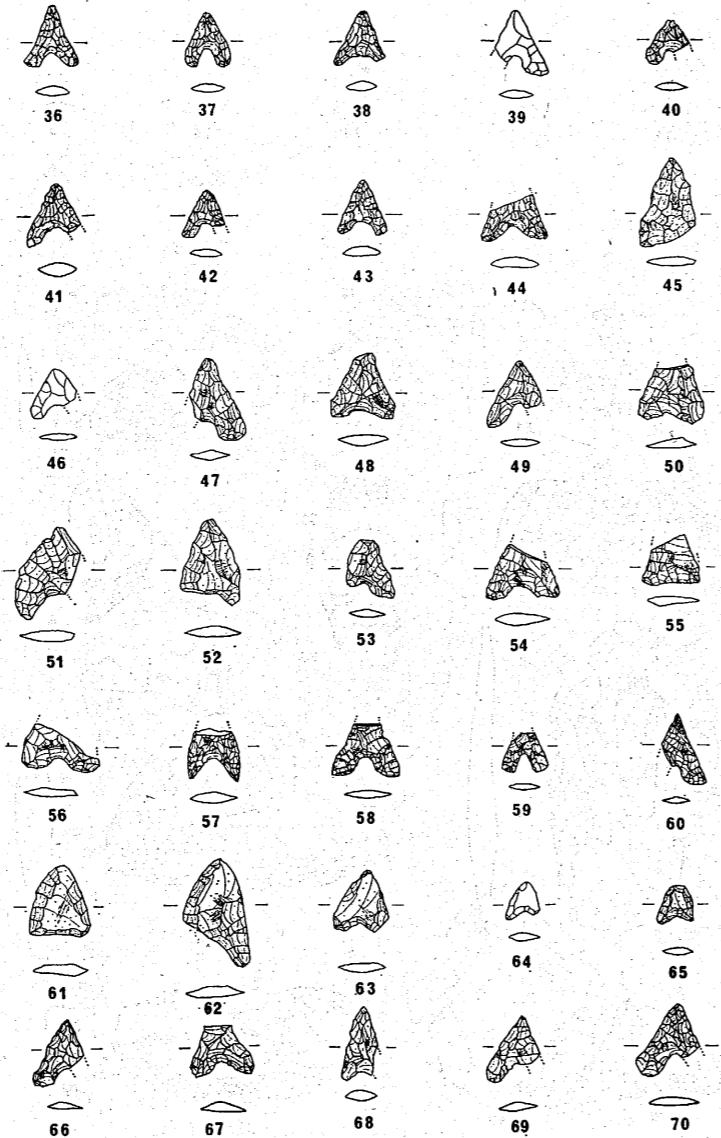


図11 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和39年調査)〈縮尺1/2〉

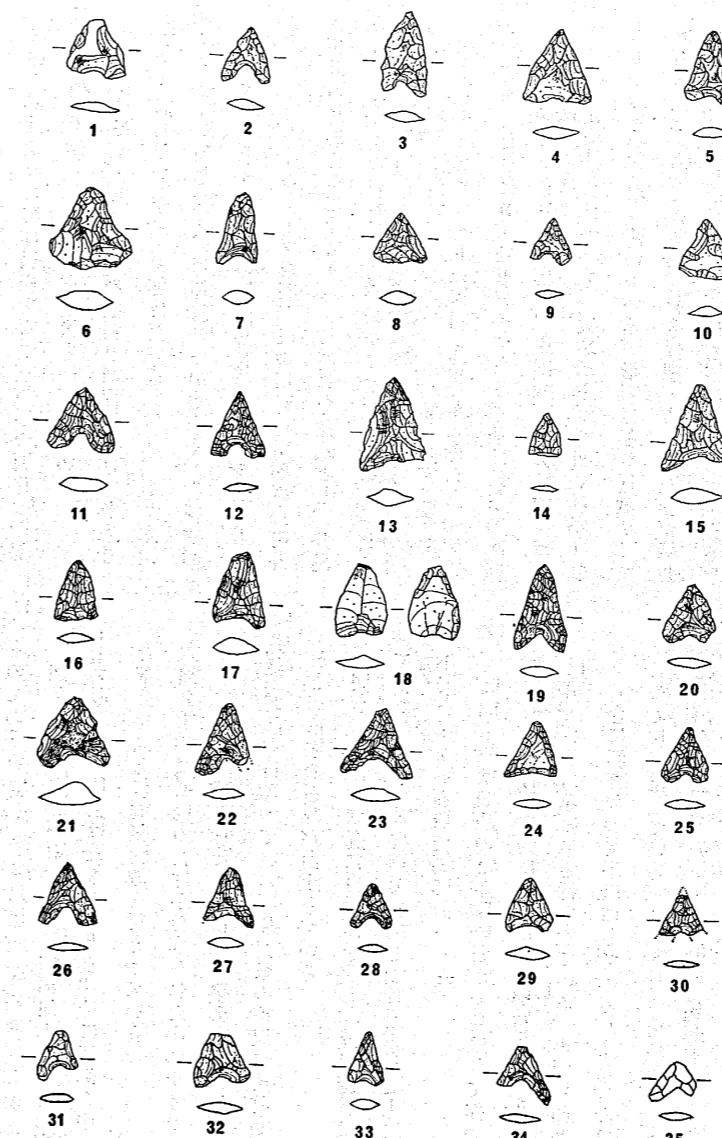


図10 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和39年調査)〈縮尺1/2〉

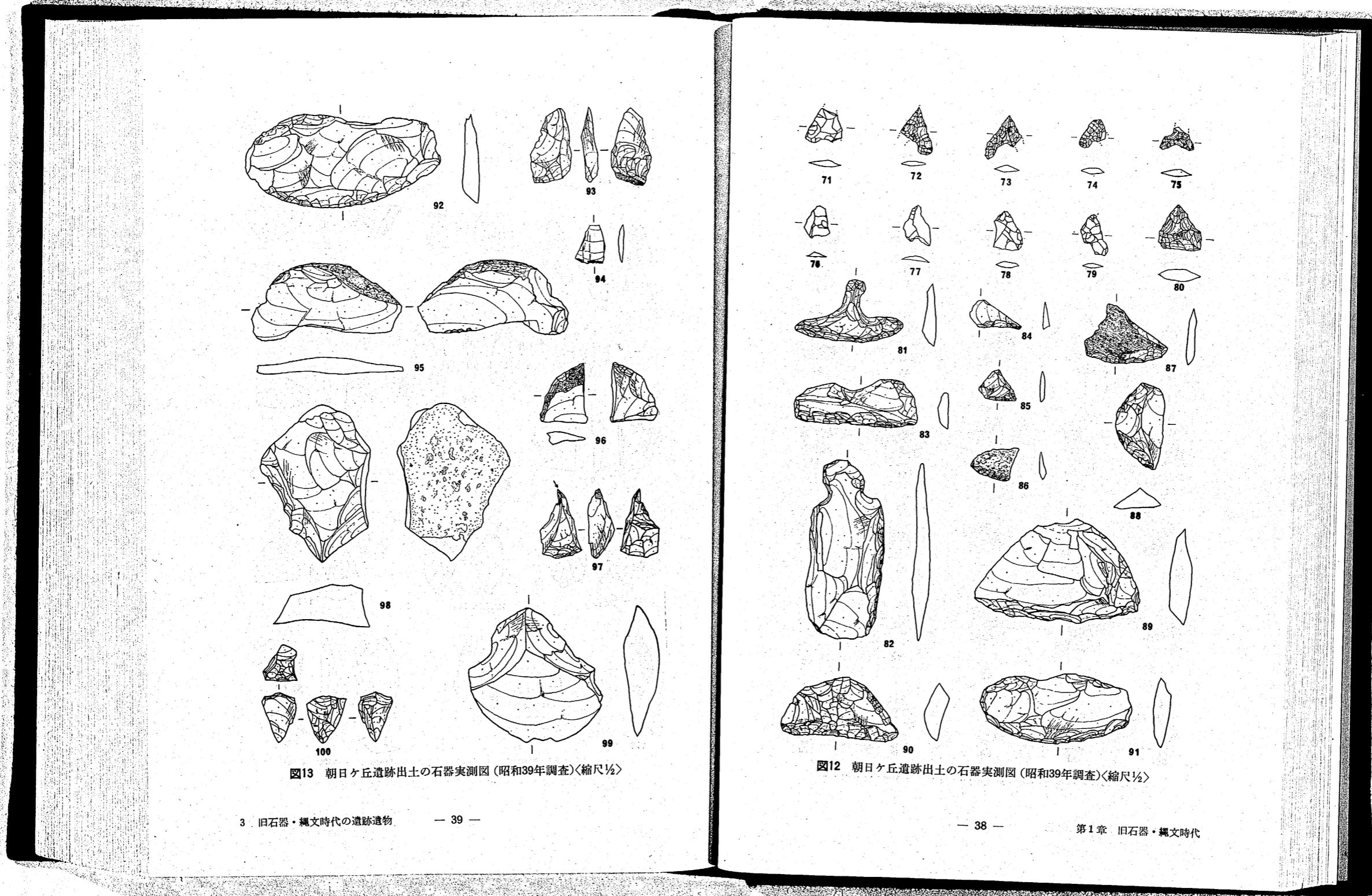


図13 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和39年調査)<縮尺1/2>

図12 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和39年調査)<縮尺1/2>

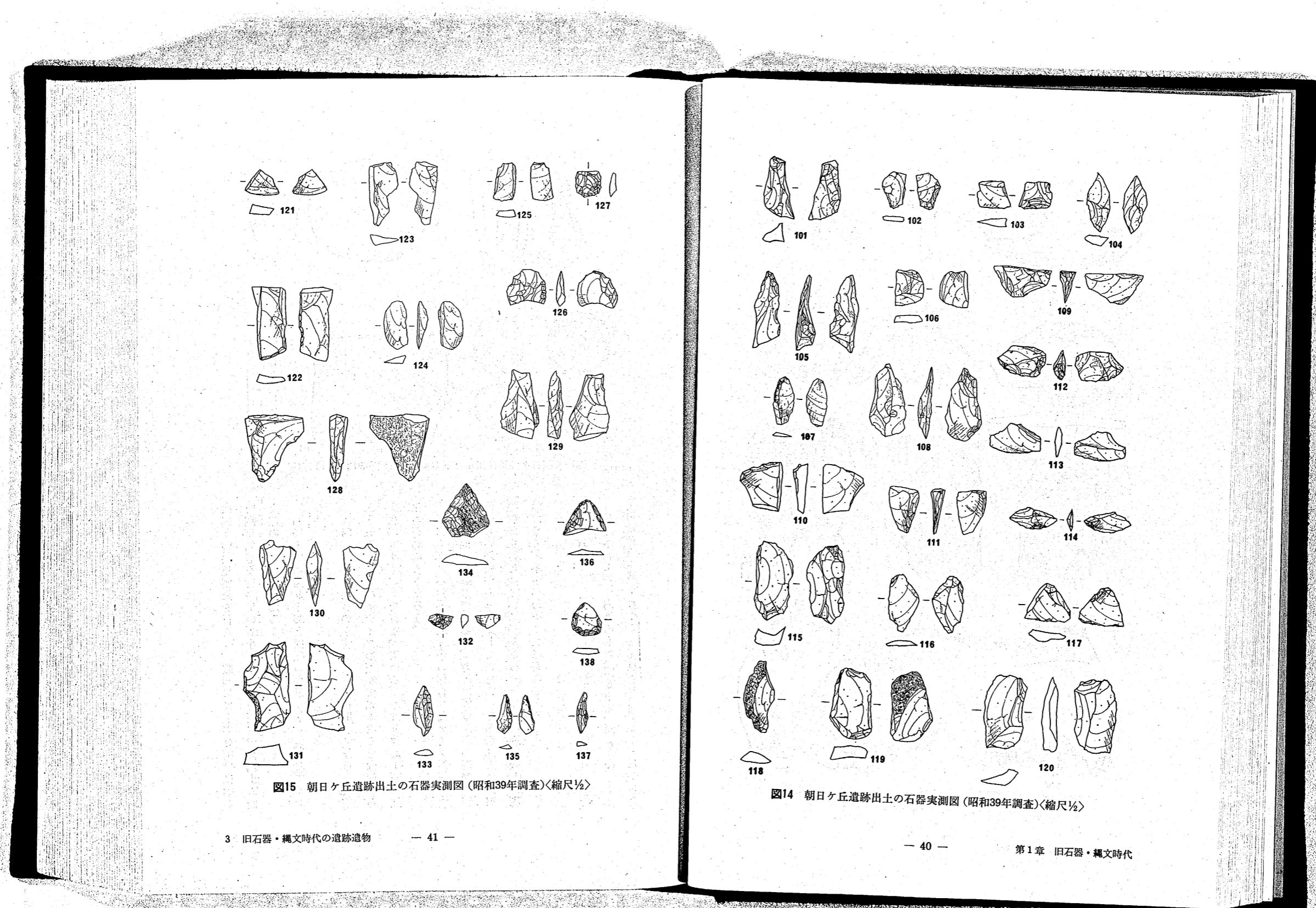


図15 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和39年調査)〈縮尺½〉

図14 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和39年調査)〈縮尺½〉

表4 出土石器一覧表 (昭和39年調査) No. 1

石器番号	石 器 名	石 質	重量(g)	備 考
1	石 鐵	サヌカイト	0.7	完 形
2	"	"	0.3	"
3	"	"	0.7	"
4	"	"	0.9	"
5	"	"	0.8	"
6	"	"	2.4	"
7	"	"	0.7	"
8	"	"	0.6	"
9	"	"	0.2	片 足 欠 損 形
10	"	"	0.5	片 完
11	"	"	0.6	"
12	チャート	サヌカイト	0.4	"
13	"	"	1.4	片 足 欠 の 損 形
14	"	"	0.2	先 端 部 欠 形
15	"	"	1.2	片 足 完
16	"	"	0.4	"
17	"	"	1.0	片 足 完
18	不 明 石 器	"	1.0	"
19	石 鐵	"	0.7	"
20	"	"	0.5	"
21	"	"	1.9	片 完 足 欠 損 形
22	"	"	0.6	"
23	"	"	0.6	"
24	"	"	0.5	"
25	"	"	0.3	"
26	"	"	0.4	"
27	"	"	0.3	"
28	"	"	0.2	"
29	"	"	0.6	"
30	"	"	0.3	両 片 先 欠 損 形
31	"	"	0.2	"
32	"	"	0.6	"
33	"	"	0.2	足 端 欠 損 形
34	"	"	0.4	"
35	"	"	0.2	両 片 完
36	"	"	0.4	"
37	"	"	0.2	"

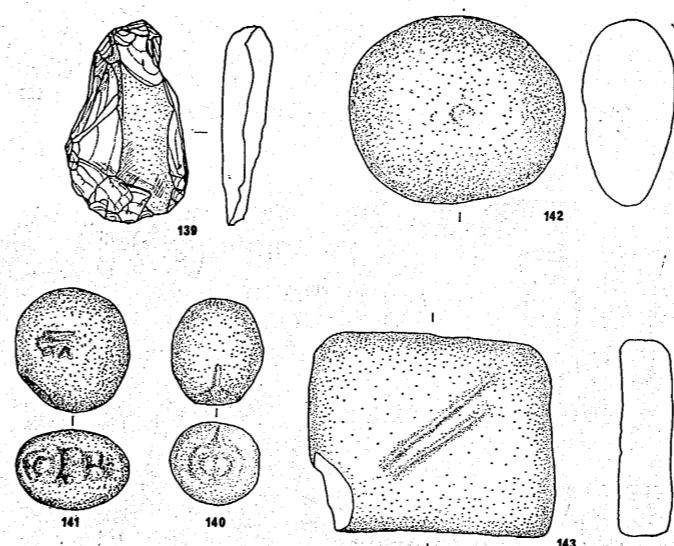


図16 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図 (昭和39年調査) (縮尺1/2)

は細かい調整剥離を行ない、腹面には上半分両側に細かい調整剥離を行っている小形ナイフ形石器で井島I石器文化の範疇に入るだろう。

図15: 137は図9: 39と同類の小形ナイフ形石器である。

図21: 90は横剥きのうすい剥片を利用して作られた、二・五センチの小形ナイフ形石器で先端部まで両面から入念にトリミングを行なっている。やはり井島I石器文化の範疇に入るだろう。

図14: 105は不定形の剥片から作られたナイフ形石器で主剥離面は横剥きであるが、背面は縦位からの剥離、横位からの剥離があり一定していない。先端部は入念に調整剥離を行なっている。基部はそのまま打面を残し、調整ではなく、不定形のナイフ形石器である。

刃 器

長さが五センチ内外のもの、図6: 4、図8: 19(f-1)
黄褐色砂質土層)・21(1 黄褐色砂質土層)と二・五センチ

No. 3

石器番号	石 器 名	石 質	重量(g)	備 考
75	石 鏃	チャート サヌカイト	0.5 0.4	先端欠損
76	"	"	"	"
77	"	"	0.5	片足欠損
78	"	"	0.8	"
79	"	"	0.5	"
80	"	"	2.7	完形
81	石 匙	"	5.6	"
82	"	"	29.2	"
83	" (?)	"	9.5	欠損
84	刃 器	"	1.0	"
85	"	"	0.5	"
86	"	"	1.4	"
87	削 器	"	6.2	完形
88	ナイフ	"	8.1	"
89	刃 器	"	53.8	"
90	"	"	15.0	完形
91	"	"	24.1	"
92	"	"	46.0	"
93	"	"	4.1	"
94	剥 片	チャート サヌカイト	0.8 24.7	"
95	"	"	4.8	"
96	搔 形 石	器 器 核	5.9 84.5	"
98	"	"	59.8	"
99	"	"	5.6	"
100	"	"	4.6	"
101	"	"	0.6	"
102	剥 片	"	1.0	"
103	"	"	1.1	"
104	"	"	4.1	"
105	ナイフ	"	1.4	"
106	剥 片	"	0.6	"
107	"	"	2.9	"
108	"	"	2.9	"
109	"	"	3.5	"
110	刃 器	"	2.1	"
111	"	"	"	"

No. 2

石器番号	石 器 名	石 質	重量(g)	備 考
38	石 鏃	サヌカイト	0.3	片足欠損
39	"	"	0.4	"
40	"	"	0.2	"
41	"	"	0.5	"
42	"	"	0.2	"
43	"	"	0.3	形損
44	"	"	0.6	先端欠損
45	"	"	1.0	片足欠損
46	"	"	0.3	"
47	"	"	0.9	"
48	"	"	1.0	先端欠損
49	"	"	0.4	片足欠損
50	"	"	0.8	先端欠損
51	"	"	1.4	片足欠損
52	"	"	1.3	両足欠損
53	"	"	0.5	先端・片足欠損
54	"	チャート	0.9	先端欠損
55	"	"	0.6	"
56	"	"	0.6	"
57	"	"	0.7	"
58	"	"	0.6	"
59	"	"	0.2	"
60	"	"	0.5	片足欠損
61	"	サヌカイト	1.6	完形損
62	"	"	1.6	片足欠損
63	"	"	0.5	"
64	"	"	0.3	"
65	"	"	0.3	先端欠損
66	"	"	0.4	片足欠損
67	"	"	0.5	先端欠損
68	"	"	0.6	片足欠損
69	"	"	0.4	"
70	"	"	0.6	"
71	"	"	0.8	先端・片足欠損
72	"	チャート	0.6	片足欠損
73	"	サヌカイト	0.6	"
74	"	チャート	0.4	先端・片足欠損

No. 4

石器番号	石 器 名	石 質	重量(g)	備 考
112	剥 片	サヌカイト	1.8	
113	" "	"	1.2	
114	" "	"	0.7	
115	" "	"	5.6	
116	" "	"	1.5	
117	" "	"	2.2	
118	" "	"	2.7	
119	" "	"	6.2	
120	" "	"	5.5	
121	" "	"	1.1	
122	" "	"	4.1	
123	" "	"	2.0	
124	" "	"	0.9	
125	削 器	チヤート	1.1	
126	削 削	サヌカイト	1.4	
127	剝 削	"	0.8	
128	剝 削	サヌカイト	7.8	
129	剝 削	"	5.7	
130	削 不 明	石	3.1	
131	削 不 明	器	12.3	
132	削 不 明	器	0.3	
133	削 不 明	器	1.0	
134	削 不 明	器	3.4	
135	尖 头	イ	0.4	
136	ナ 削	イ	0.8	
137	ナ 削	イ	0.4	
138	ナ 削	イ	1.0	
139	ナ 削	砂	94.5	
140	ナ 削	石	84.7	
141	ナ 削	石		
142	ナ 削	石		
143	磨 砥	石		

損 形 形 完 欠 損

第1章 旧石器・縄文時代

内外のもの図8:22(I—黄褐色砂質土層)・24(X—灰褐色粘質砂層)・25・26(K—黄褐色砂質土層)、図14:110、図18

・48(L—黄褐色砂質土層)、図19:53(e—灰褐色粘質砂層)

・57(X—灰褐色粘質砂層)に分類できる。また不定形のも

のが多く、図14:110は刃部が一回の打撃によって四五度

位に作られ、刃こぼれが著しい。右側面は上部からの一

回の打撃によつて裁断されている。図18:48も同様で、

石塊からの一打による剥片を利用して作られており、表

面は全体が自然面を残し、刃部のみが一回の打撃によつ

て四五度位に作られ、左側面は打撃によつて切断され

おり、打撃面は調整している横長の刃器である。

図8:22・26、図19:53はバルブを細部調整によつて

取り去つており、図19:57は右側縁に抉入付刃があり、

石器の長さが一・四センチしかなく、細石刃であろう。

削 器

形状は各々一定していないが、剥片を素材として刃縁を施したものと、石核状の素材に刃縁を施したもの、剝

片をかなり調整して刃縁を施したものがある。

剥片を素材として表面に自然面を残し二側面に表面から刃部を施したもの、剥片をかなり調整して刃縁を施したものがある。

剥片を素材として表面に自然面を残し二側面に表面から刃部を施したもの、剥片を素材として表面に自然面を残し二側面に表面から刃部を施したもの、自然面が残る石核状の素材に外彎する刃部を作り出したもの図18:50(X—灰褐色粘質砂層)・51(G—灰褐色粘質砂層)、短い直線の刃部を施したもの図15:131がある。

さらに内彎する刃部を作り出しているもの図15:128、両面に調整剝離を施し、下部と右側面に刃部を作つているもの図19:54(C—灰褐色粘質砂層)がある。

搔 器

不定形の搔器で腹面の凹凸は調整剝離を行ない平坦にしておる。図6:3(J—黄褐色砂質土層)は長さ四センチ、

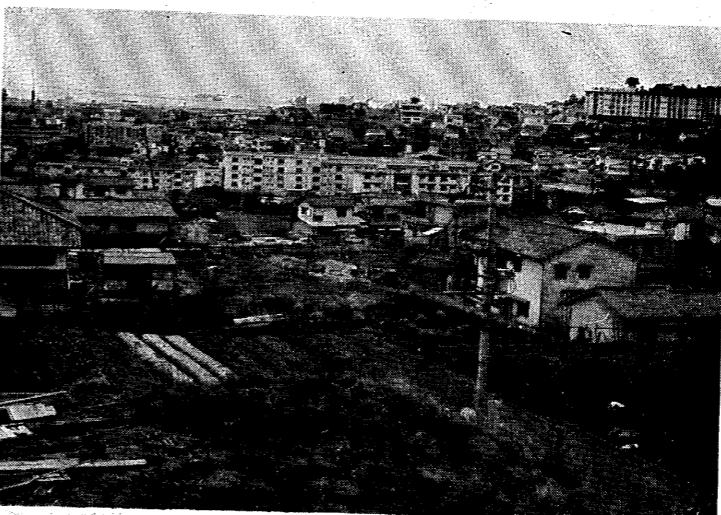


写真4 昭和48年調査当時の朝日ヶ丘遺跡(北方より写す)

厚さ一センチのかなり厚い搔器で、背面には稜を作り刃部との角度は四五度位である。図8・28(e—暗褐色粘質砂層)は小形の搔器で刃こぼれがある。図8・29(d—灰褐色粘質砂層)は小形の搔器で刃こぼれがある。図8・28(e—暗褐色粘質砂層)は背面に自然面を残し、その自然面に刃部を施し、腹面からも細部加工が行なわれており、裁断面を持つ。図15・138、図21・87(X—灰褐色粘質砂層)は小形の搔器で周辺のほとんどに細部加工をしている。

彫 器

図6・1は形の整った横剥ぎの石刀を利用し、背面左側は細部加工により刃部を作り、打面付近は切断し、そのフラットな面から下へ打撃を加えて彫器を作っている。図7・12(d—灰褐色粘質砂層)はうすい剥片を取り、上端に二回の槌状剥離を行なつて彫刻刀刻面を作り出している。図21・88(C—黄褐色粘質砂層)も大体同じように作られているが、素材となる剥片の表面に調整剝離を行なつている。図7・13(W—礫層)は一センチ程の厚い剥片に上部から二回の槌状剥離を行なつて彫刻刀刻面を作り出している。

出している。図13・97はかなり調整剝離された厚い剥片

を切断し、上部に細かい打撃を四回加えて剥面をくちばし状に作っている。しかしこれは彫器として利用するより、錐としての機能があるのでなかろうか。

三角形の彫面を持つ彫器は新潟県御淵上遺跡、二上山の田尻畔第一地点遺跡⁽⁴⁾等から出土しているが、この彫器は朝日ヶ丘遺跡B地点が最も多い。

尖 頭 器

図8・30(W—灰褐色粘質砂層)は木葉形の尖頭器片と思われる。両面加工でかなり調整剝離痕も大きく、一部自然面が残っている。調整が不十分であり半製品かとも思われる。

図9・31・32は片面に自然面を一部残し、刃部は押圧剝離によって、ていねいに仕上げられた小形のやや丸みをおびた尖頭器で、基部も細部加工をしている。有舌尖頭器の部類に入るものかもしれない。

図9・33は尖頭器片である。

図9・34はチャート製の尖頭器で、小形である。

図9・35は両面加工の小形尖頭器で、横剥ぎの小剥片を素材にして製作している。

図9・36は両面加工の細長い二センチ内外の小形尖頭器で、横剥ぎの小剥片を素材にして製作している。基部は折れている。

図9・37は両面加工された二センチ内外の小形尖頭器である。先端はやや丸みをおび、両面からていねいな細部調整加工をしている。

図15・134は自然面が残る剥片から作られた尖頭器で、表面は中央部に自然面を残し、周辺は調整剝離を行ない、裏面は先端部付近のみ調整剝離を行なつてある。小形尖頭器である。

図21・92(J—黄褐色粘質砂層)は両面加工のやや厚い小形尖頭器で、先端部はていねいな剝離を行なつている。

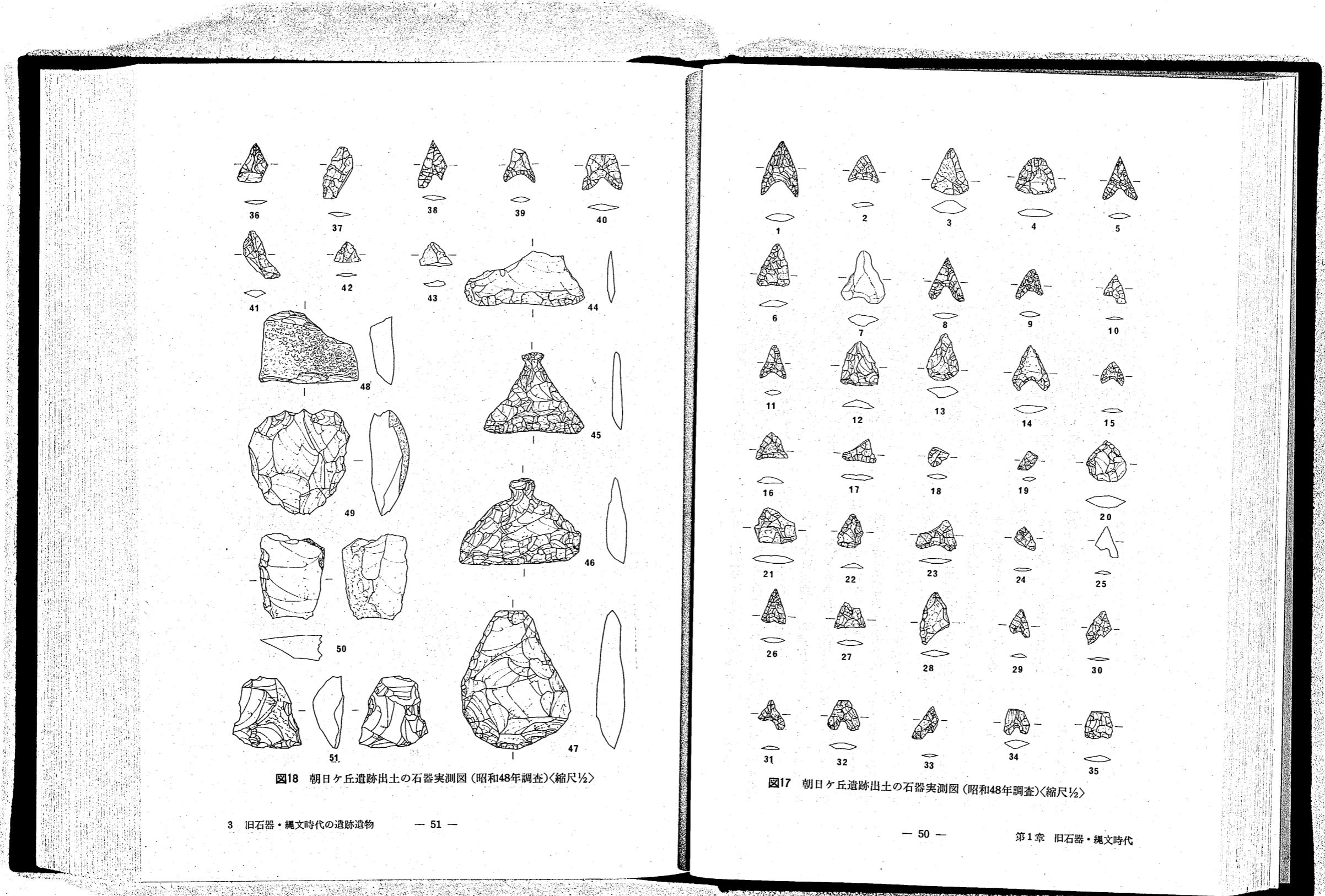


図18 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和48年調査)(縮尺1/2)

図17 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和48年調査)(縮尺1/2)

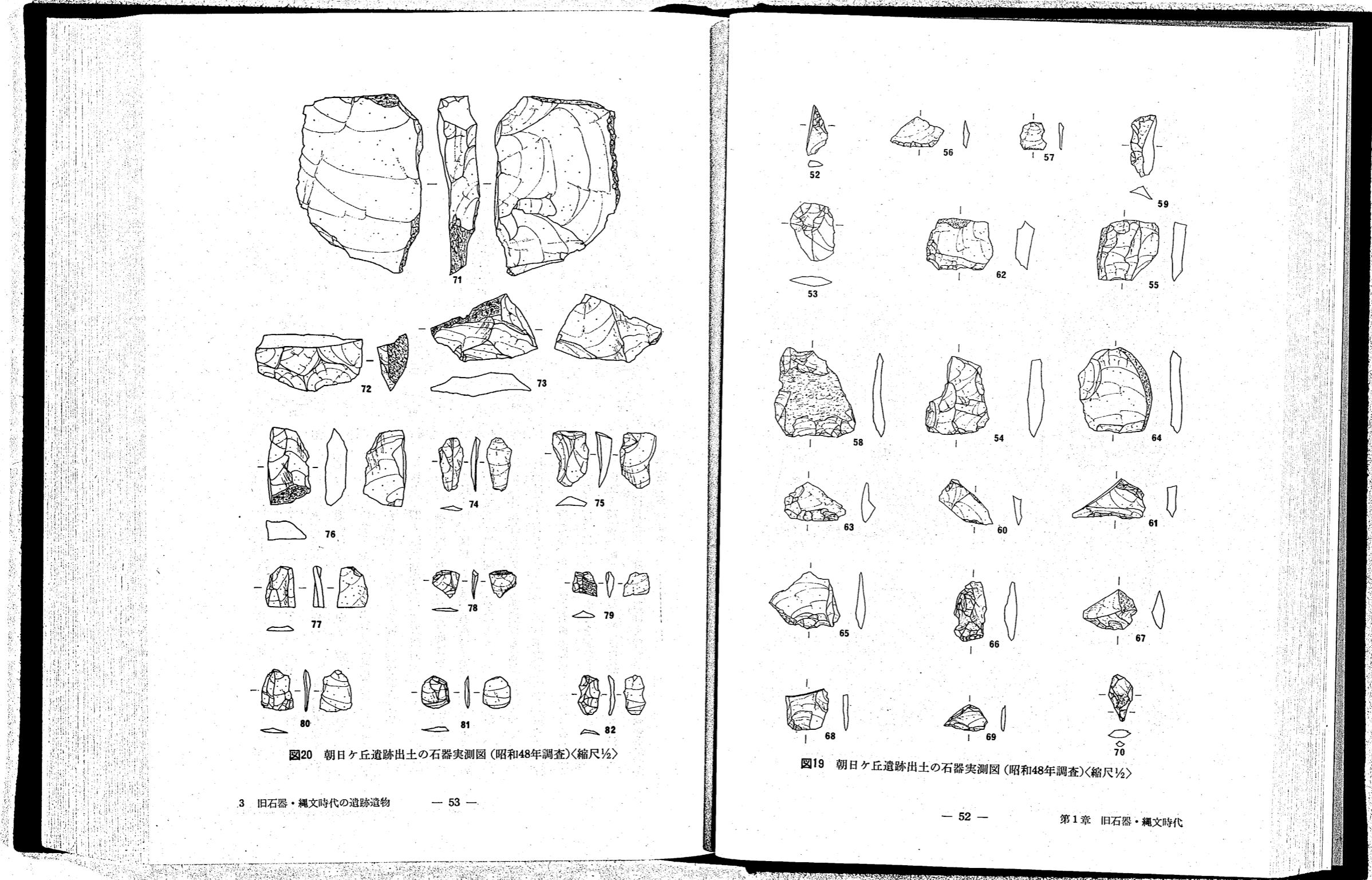


図20 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和48年調査)(縮尺1/2)

図19 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和48年調査)(縮尺1/2)

表5 出土石器一覧表 (昭和48年調査) No. 1

石器番号	石器名	石質	出土地点	重量(g)	備考
1	石 鋸	サヌカイト	W-灰カ粘砂	1.4	完形
2	"	"	J-黄カ砂	0.4	"
3	"	"	W-灰カ粘砂	1.8	"
4	"	チャート	不明	1.9	"
5	"	"	W-灰カ粘砂	0.5	"
6	"	サヌカイト	X-灰カ粘砂	1.2	"
7	"	"	f-黄カ砂	2.1	"
8	"	チャート	W-灰カ粘砂	0.6	"
9	"	サヌカイト	G-黒カ砂	0.5	片足欠損
10	"	"	W-灰カ粘砂	0.3	"
11	"	"	"	0.4	完形
12	"	"	X-灰カ粘砂	1.8	"
13	"	"	H-黄カ砂	1.6	"
14	"	"	c-暗灰カ粘砂	1.1	"
15	"	"	"	0.2	"
16	"	"	B-黄灰色砂	0.6	片足欠損
17	"	"	W-灰カ粘砂	0.4	足の
18	"	チャート	"	"	み
19	"	サヌカイト	d-暗灰カ粘砂	"	"
20	"	チャート	X-灰カ粘砂	2.4	形損
21	"	サヌカイト	P-黒土	1.7	先端欠損
22	"	"	I-灰カ粘砂	0.7	形損
23	"	"	W-灰カ粘砂	0.6	損
24	"	"	W-暗カ粘砂	0.4	損
25	"	"	c-灰カ粘砂	0.3	損
26	"	"	X-暗カ粘砂	0.4	損
27	"	"	c-灰カ粘砂	0.4	損
28	"	"	"	1.2	片足欠損
29	"	"	W-灰カ粘砂	0.3	"
30	"	チャート	X-灰カ粘砂	0.3	"
31	"	サヌカイト	H-黄カ砂	0.3	先端欠損
32	"	"	I-灰カ粘砂	0.6	損
33	"	"	c-灰カ粘砂	0.4	片足欠損
34	"	チャート	X-灰カ粘砂	0.6	先端欠損
35	"	"	W-暗カ粘砂	0.9	"
36	"	"	Y-黒	0.8	片足欠損
37	"	サヌカイト	d-暗カ粘砂	0.8	"

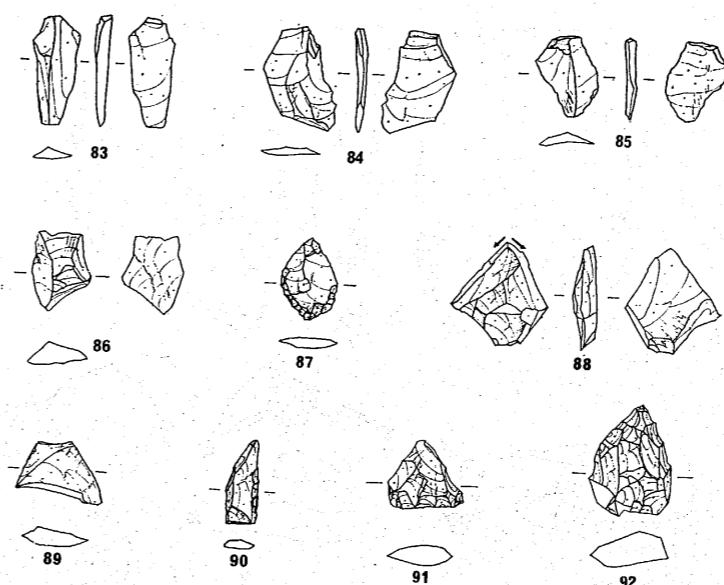


図21 朝日ヶ丘遺跡出土の石器実測図(昭和48年調査)(縮尺1/2)

石核

図6:7 (M-黄褐色砂質土層)は不定形の縦長剥片石核で、一面に縦長の剥離痕を残し、一面は自然面を残している。他の部分は剥離方向が一定していない。

図7:17 (L-黄褐色砂質土層)は縦長剥片石核で、上下に打撃面があり、一定した方向に剥離痕が認められる。

図8:27も縦長剥片石核で剥離面が四面あり三面は一定方向に剥離痕が認められ、打面は平坦に調整している。図13:100、図14:101は細石核である。100は三角錐形の細石核で二面は一回の打撃によって下まで剥離し、残り一面は小剝片を得るために幾度も剥離を行なっている。打面は荒く調整している。101は不定形の小形細石核で打面調整を行ない、二面は細石刃の剥離がみられるが他は上からの打撃によって細石刃を剥離している。

図20:72 (W-暗褐色粘質砂層)は自然面が残る石核で、一面に縦長剝片を剥離した面を持ち、他面は剥離方向が一定しない面をもつ。

No. 3

石器番号	石器名	石質	出土地點	重量(g)	備考
75	剝片	サヌカイト	H—黄力砂	2.6	
76	"	"	不 明	9.5	
77	"	"	K—黄力砂	0.8	
78	"	"	W—黄力砂	0.4	
79	"	"	W—灰力粘砂	0.4	
80	"	"	"	0.8	
81	"	"	"	0.5	
82	"	"	"	0.4	
83	"	"	"	1.2	
84	"	"	X—灰力粘砂	1.5	
85	"	"	c—灰力粘砂	1.0	
86	"	"	g—黄力砂	2.0	
87	搔彫	器	X—灰力粘砂	1.2	
88	剝	器	c—灰力粘砂	5.4	
89	ナ	片	I—灰力粘砂	1.8	
90	刃	フ	d—灰力粘砂	0.8	
91	イ	器	"	2.0	
92	尖	頭	J—黄力砂	6.3	完形

不明石器

図6・9 (W—暗褐色粘質砂層) は横位からの打撃によって上部から切断された不定形の石核様石器で、剝離方向は一定せず、石器の未製品であろう。図7・10 (I—黄褐色砂質土層)・11 (W—暗褐色粘質砂層) は図6・9より一步製作過程が進んだ段階の石

有舌尖頭器

図9・41 (I—黄褐色粘質砂層) は先端部が欠損した有舌尖頭器で、基部両端からそのまま舌部を作り出し、裾開きの形状を持つものである。

図9・41

(I—黄褐色粘質砂層) は先端部が欠損した有舌尖頭器で、基部両端からそのまま舌部を作り出し、裾開きの形状を持つものである。

No. 2

石器番号	石器名	石質	出土地點	重量(g)	備考
38	石鎌	チャート	X—灰力粘砂	0.6	片足欠損
39	"	サヌカイト	"	0.6	先端欠損
40	"	"	J—黄力砂	1.1	"
41	"	"	L—黄力砂	1.0	片足欠損
42	"	"	W—灰力粘砂	0.2	先端部のみ
43	"	"	f—黑色耕作土	0.5	"
44	石匙	"	H—黄力砂	8.3	一部欠損
45	"	"	I—黄力砂	7.8	完形
46	"	"	W—暗力粘砂	22.2	"
47	刃	"	J—黄力砂	58.7	"
48	器	"	L—黄力砂	22.2	"
49	不明石器	"	H—灰力粘砂	51.2	一部欠損
50	削	"	X—灰力粘砂	21.3	一部欠損
51	"	チャート	G—灰力粘砂	15.5	形
52	刃	サヌカイト	I—黄力砂	0.8	完形
53	"	チャート	e—灰力粘砂	3.0	"
54	不明石器	サヌカイト	c—灰力粘砂	8.4	"
55	刃	"	J—黄力砂	8.3	"
56	不明石器	"	c—灰力粘砂	1.2	"
57	"	チャート	X—灰力粘砂	0.5	細石刃?
58	不明石器	サヌカイト	I—黄力砂	10.3	
59	刃	"	K—黄力砂	2.5	
60	不明石器	"	N—黄力砂	2.2	
61	"	"	I—黄力砂	4.3	
62	不明石器	"	X—灰力粘砂	7.8	
63	"	"	d—灰力粘砂	2.8	
64	"	"	G—黄力砂	13.2	
65	"	"	H—黄力砂	3.8	
66	"	"	W—暗力粘砂	2.5	
67	"	"	W—灰力粘砂	2.5	
68	"	"	c—灰力粘砂	1.7	
69	"	"	e—暗灰力粘砂	0.6	
70	石锥	チャート	X—灰力粘砂	1.0	完形
71	石核	サヌカイト	"	93.7	
72	"	"	W—暗力粘砂	20.4	
73	剥片	"	f—黄力砂	15.2	
74	"	"	J—黄力砂	0.8	

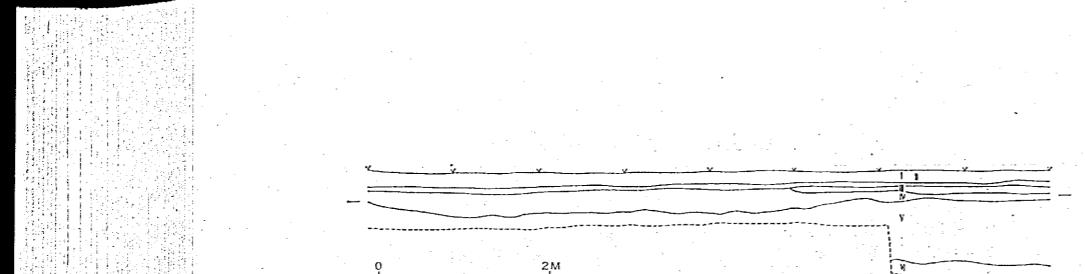


図22 F・G・H・I グリッド東側断面図（昭和48年調査）

I	黒色耕作土
II	灰褐色砂質土層
III	淡茶褐色砂質土層
IV	黄褐色砂質土層
V	灰褐色砂質土層
VI	黄灰色粘質土層

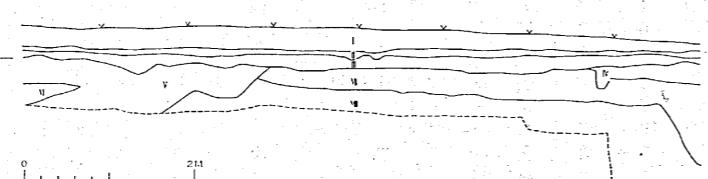


図23 J・K・L・M グリッド東側断面図（昭和48年調査）

I	黒色耕作土
II	灰褐色砂質土層
III	淡茶褐色砂質土層
IV	黄褐色砂質土層
V	灰褐色砂質土層
VI	黄灰色粘質土層

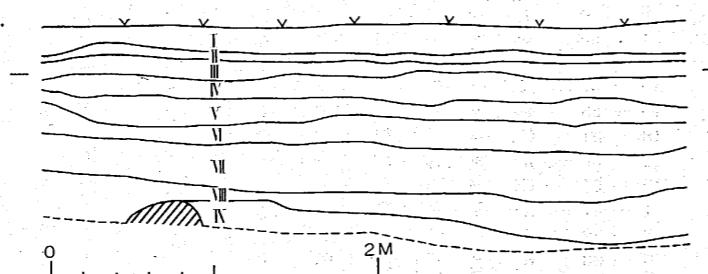


図24 W・X グリッド東側断面図（昭和48年調査）

I	黒色耕作土
II	灰褐色砂質土層
III	暗褐色砂礫混土層
IV	黄褐色粘質土層
V	暗褐色粘質砂層
VI	灰褐色粘質土層
VII	灰褐色粘質砂層
VIII	灰褐色砂層
IX	砾層

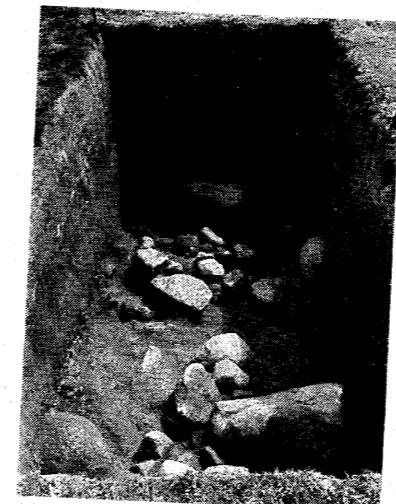


写真5 W-X グリッド(ボルダーの状態)

器で、断面が菱形になるようにコア状の石器を調整剝離し、その頂点（菱形状になった最も厚い部分）の両側から切断して製作している。切断され菱形になつた石器の右側の刃は鋭く、硬い物に傷をつけたり、切断したりするのに適している。10・11共に刃部は刃こぼれがある。10は四・六センチ、11は二・七センチである。

図7：14は厚さ一センチ程の平らな原石を素材とした「たがね状」の石器で、上部から打撃を加えて、七・八ミリ位に切断し、下部には片面から調整剝離を行ない刃

図7：15（X—暗褐色粘質砂層）は剥片を利用して先端部を両側から剝離して錐状に作り出している。その先端は三角形をなしたドリル状であるが、くちばしのごとく曲がり、ドリルとしての機能は考えられないでの使用方法があるのかもしれない。

図8：18は縦長の石刀状剥片を利用して作られた石器である。背面左側は自然面を残し、その部分にノッチ状の刃をつけ、背面右側は細かい調整剝離にて刃部を作り出している。さらに背面左側から右側へ逆L字状に剥片を切断し、一センチ程の刃部を作り出している。またノッチ状に刃をつけた部分は切断された面との角度が九〇度位になり、その先端を再加工し、断面が三角形の採錐器に仕上げている。

図10：18は中央部に一条の稜を持つ剥片鎌である。先端は欠損しており、表面から三ヶ所剝離してあらい抉りを作り、裏面は周辺に細かい調整剝離を行なっている。

図15：132は刃器の打面調整した部分であり、刃部は欠

表6 B地点出土石器の層位的分類表

図版番号	出土地点	石器名	備考
9 - 39 7 - 16 8 - 21 8 - 22 8 - 26 18 - 48 8 - 19 19 - 58 6 - 3 21 - 92 7 - 17 6 - 7 9 - 41 7 - 10 19 - 55 19 - 59 8 - 23 6 - 5	Gグリット K I I K L f I J J L M I I J K J M	ナイフ形石器 刃 頭 削 頭 尖石 有不 剝	切出型
20 - 72 6 - 9 7 - 11 7 - 15	W W W X	石 不 明 核 器	両側 切斷 片側 切斷 ツインケン風石器
8 - 28 6 - 2 6 - 6 21 - 90 8 - 24 19 - 57 19 - 53 18 - 51 18 - 50 19 - 54 21 - 87 8 - 29 8 - 30 9 - 40 7 - 12 18 - 49 19 - 62 21 - 88	e H I d X X e G X C X d W X d 	搔 ナイフ 形 刃 削 頭 石 台 彫 不 彫	井島 I
7 - 13	X	彫	上下から剝離 円盤状石核? 載断面ある石器
		器	先端三面形

損している。

図18:49 (H—灰褐色粘質砂層) は周辺から求心状の剝離によって、小形の剝片が得られた石核である。片面からのみ剝片が剥離され、他面は自然面をそのまま残して

いる円盤状石核で剝離痕は不規則である。

図19:55 (I—黄褐色砂質土層) は厚さ七ミリ程の剝片を利用して再び縦長剝片を剥離し、打面調整して刃を施し、下部は切断されている。左側面は自然面を残している。

図19:59 (K—黄褐色砂質土層) は片面は自然面を残し、他面は調整剝離面を持ち、周縁に刃部をつけた石器の片側を切断した用途不明の石器である。しかし切断した時に生じたバルブは調整剝離によって失われ、その周辺は基部状の作りをしている。いわゆる切出型ナイフ形石器の一種かもしれない。

図19:62 (X—黄褐色粘質砂層) は剝片を素材として器面調整をして、縁辺加工を施して切断された平面四辺形の石器で、刃部は左側と下側にある。

剝片

図示した剝片は主なもので、図6:5 (M—黄褐色砂質土層)・8、図8:20・23 (J—黄褐色砂質土層)、図13:94は縦形の剝片で、図14:118は翼状剝片で瀬戸内技法によつて剝離されたものである。

以上が朝日ヶ丘A地点遺跡、B地点遺物出土の石器についての説明である。B地点の遺跡については出土層位、グリッド名、石器名を記入した表を作製した(表6)。

各グリッドで出土した石器個体数はGグリッド二点、Hグリッド二点、Iグリッド七点、Jグリッド四点、Kグリッド五点、Xグリッド七点、Cグリッド一点、dグリッド三点、eグリッド二点、fグリッド一点で合計四一である。

また石器が出土した土層はF—Iグリッド、J—Mグリッド、C—I Fグリッドでは黄褐色砂質土層と灰褐色粘質砂層(図22・23参照)、W・Xグリッドでは暗褐色粘質

砂層、灰褐色粘質砂層、礫層(図24参照)である。しかし礫層を除く各層では縄文時代の遺物も出土している。特にW・Xグリッドの灰褐色粘質土層は石鎚の出土が多い。このように各時期の遺物が混じって出土することは、ある時期に土層の流入があつたと思われる。

小 結

最後に朝日ヶ丘A地点、B地点の発掘調査によつて、もたらされた若干の問題点について述べたい。

まず問題となるのは地層関係であるが、前述したように良好な結果が得られたとはいえない。しかし出土遺物はかなり多く、種々の石器の複雑な共存関係が認められ、これが問題であろう。

A地点においては、「ナイフ形石器+尖頭器+搔器+彫器+石核+削器+刃器+その他の石器」の石器組成が考えられる。

ナイフ形石器は山形県東田川郡朝日村の越中山A遺跡出土のナイフ形石器類似の断面三角形をもつもの(図12-88)佐賀県伊万里市二里町川東の平沢良遺跡からも出

土している細石器的様相の小形ナイフ形石器(図9-38)もある。

他に井島I石器文化の小形ナイフ形石器があり、前述の図9-38もこの範疇に入るものである。この小形ナイフ形石器は岡山県児島市田ノ口の堅場島遺跡、兵庫県飾磨郡家島町の太島遺跡からも出土している。

これらを編年的にみると尖頭器を主体とする越中山A遺跡のナイフ形石器は群馬県勢多郡新里村の武井遺跡⁽⁸⁾の武井II石器文化と同時期かやや新しいと思われる。またそのナイフ形石器は「ナイフ・ポイント」とよばれているもので、ナイフ形石器から尖頭器への過渡期のものである。

井島I石器文化は細石器的様相をもつ石器文化であり、図12-88は瀬戸内地方の石器編年におきかえると宮田山形ナイフ形石器文化⁽⁹⁾くらいであろう。

尖頭器は有舌尖頭器状の菱形を呈するものが2点あり、これは特異な存在である。形状が類似している石器として愛知県新城市萩平遺跡出土のものがある。しかし

萩平遺跡出土石器はうすい剥片からつくられたものである。この図9-31・32は有舌尖頭器であるのか単なる尖頭器か判断が困難である。

他の尖頭器は小形尖頭器で細石器状のものである。この小形尖頭器は長野県諏訪市の曾根遺跡⁽¹¹⁾からも出土しているらしい。

搔器は図15-138が注目されるもので、小形拇指状搔器である。この種の搔器は曾根遺跡からかなり出土している。

彫器は横剥々片からつくられた図6-1が存在するが、この種の彫器はあまり類型がなく編年的にどの時期に位置するか非常に困難である。

石核は細石核が2点あり、長崎県北松浦郡吉井町の福井岩陰遺跡第四層⁽¹²⁾から出土した半円錐形石核に類似し、細石核の中でも古く編年されるものである。細石核の編年として九州地方では半円錐形→円錐形→半舟底状→舟底状が考えられている。

また井島遺跡の遺物は半舟底状細石核の範囲に包括さ

れるという説⁽¹³⁾もあるが、A地点の細石核からはそのような説を提起することは不可能である。

特殊な遺物として剥片鎌が出土している。普通剥片鎌は九州地方の縄文時代後期の遺物であるが、佐賀県伊万里市二里町の鈴桶遺跡⁽¹⁴⁾、埼玉県北足立郡新座町市場坂遺跡⁽¹⁵⁾、長野県の曾根遺跡からも出土し、旧石器時代の終末頃にも存在したと思われる。

このような石器組成においてA地点は、尖頭器石器文化から細石器文化までの遺物が主体をなし、さらに縄文時代に続く剥片鎌の出土から、旧石器時代終末の遺跡といえよう。

B地点の石器組成は「ナイフ形石器+尖頭器+搔器+彫器+石核+削器+刃器+台形石器+有舌尖頭器+その他の石器」である。

ナイフ形石器としては、調整加工が中部地方のナイフ

形石器に類似した図6-6がある。このナイフ形石器は横剥々片を素材とし製作しており、宮田山遺跡等からも

出土例がなく時期的判断も困難である。図6-2は長崎

県南高米郡国見町の百花台遺跡⁽¹⁶⁾

に切出し状の刃をもつナイフ形石器があり、これは井島遺跡からも出土している。

このナイフ形石器を編年的にみると細石器的な様相が強いものが多く、瀬戸内地では井島I石器文化の範囲に包括されるものである。

尖頭器は萩平遺跡出土類似の図8—30があり、これは両面剥離の大形尖頭器片である。

B地点で注目される石器は図7—12・13の彫器である。現在まで、このような彫器の出土例が少なく、奈良県北葛城郡香芝町穴虫の田尻峠第一地点遺跡、新潟県南蒲原郡下田村長野の御淵上遺跡が知られている。形状について前述した通りである。

伴出遺物として田尻峠第一地点遺跡では、横剥々片からつくれられたナイフ形石器、翼状剥片、截断面ある石器であり、かなり古い時期(国府型ナイフ形石器)に編年されよう。

御淵上遺跡では、やや横割ぎに近い剥片からつくれられ

たナイフ形石器、橢円形握斧状石器等が伴出している。

また図19—62の截断面ある石器の出土から考へると、この彫器は国府型ナイフ形石器の時期のものであろう。

他に台形石器、有舌尖頭器の出土が注目されるが、台形石器は百花台型の台形石器である。

不明石器として述べた図7—10・11は両面剥離の石器で、機能的にも全く不明で、今後の研究によってその性格を明らかにしたい。

石核は上下からの打撃によってつくられた図7—17があり、この種の石核は鉈桶遺跡からも出土している。

以上朝日ヶ丘A地点・B地点遺跡を石器の組成からみたと考へられ、特に古い時期はW・Xグリッドを中心とした付近であろう。

しかし石器の種類では多様性に富み、九州地方から東北地方までのものがあり、遺跡としても単純ではない。

- 註(1) 鎌木義昌 「香川県井島遺跡—瀬戸内における細石器文化」『石器時代』4号 昭和三十二年
(2) 杉原莊介・戸沢充則 「佐賀県伊万里市平沢良の石器文化」『駿台学』12 昭和三十七年
(3) 加藤稔 「庄内・越中山A地点の石器群」『考古学手帖』7 昭和三十四年
(4) 中村孝三郎 「御淵上遺跡」長岡科学博物館考古物へ上) 昭和五十年 雄山閣
(5) 同志社大学旧石器文化談話会編 「ふたがみ」昭和四十九年 学生社
(6) 鎌木義昌・高橋護 「瀬戸内海地方の先土器時代」研究室調査報告書 昭和四十六年
(7) 鎌木義昌 「無土器文化・縄文文化」『家島群島』書房
(8) 杉原莊介 「武井石器時代遺跡の予備調査」『駿台史学』4 昭和三十九年
(9) 西川宏・杉野文一 「岡山県玉野市宮田山西地点の石器」『古代吉備』3号 昭和三十四年
(10) 安達厚三 「萩平遺跡」『日本の旧石器文化』2 遺跡と遺物へ上) 昭和五十年
- (11) 藤森栄一 「諏訪湖底曾根の調査」『信濃』第12巻7号 昭和三十五年
(12) 鎌木義昌・芹沢長介 「長崎県福井岩陰—第一次発掘調査の概要」『考古学集刊』第3巻1号 昭和四十年
(13) 麻生優 「細石器文化」「先土器時代」日本の考古学 I 昭和四十年
(14) 鎌木義昌・間壁忠彦 「九州地方の先土器時代」「先土器時代」日本の考古学 I 昭和四十年
(15) 滝沢浩 「埼玉県市場坂遺跡—関東地方におけるナイフ形石器文化の一様相」『埼玉考古』第2号 昭和三十九年
(16) 和島誠一・麻生優 「島原半島・百合花遺跡の調査」日本考古学協会昭和38年度大会要旨

縄文時代の遺物
繩文時代の遺物

縄文時代の遺物は芦屋市文化財調査報告の第四集・第八集に実測図と写真、その説明があり、ここでは不足分を補うこととした。

土器

無文と条痕文の土器が中心で、文様がある土器の出土は少なかった。図26-1は内外に条痕があり、その上に刺突状の文様を押し引きながら施文している。器壁の内外に指圧痕の凸凹がある彦崎Z-I式土器である。図26-2・8・10は同一個体の破片であろう。内外に一枚貝類の条痕がはしり、羽島下層II式土器の仲間であろう。図26-3は口縁部に刻み目があり、内外共に条痕がある羽島下層III式土器であろう。図26-5は口縁部に刻み目があり、器壁はうすい土器である。条痕は内外共になく磯ノ森式土器の一群である。図26-6は器壁がやや磨滅しているが、直線的な刺突文が施文されている。羽島下層II式土器である。図26-7は器壁はややすく、表はC字状の刺突文が施文され、裏は二枚貝類の腹縁による条痕がいちじるしい羽島下層II式土器である。図26-9は爪形状の刺突文を表面に施し、裏面は二枚貝の腹縁による横位の条痕を施している羽島下層III式土器である。

図25は平底の無文土器で、底部からみると前期中葉から後半にかけての土器であろう。以上がA地点出土の土器についての説明である。これらの土器の時期は縄文前期前葉から中葉にかけての土器である。図26-11は非常に不規則な条痕を器壁表面に施した赤褐色の土器である。条痕は横位を主にして、その間に斜傾の条痕を施している。時期ははつきりしないが、前期前半の土器であろう。図26-12は表に一枚貝類のアカガイかハイガイの側縁による押捺した文様をもち、裏面は二枚貝類の腹縁による横位の条痕を有する羽島下層II式土器である。図26-13は器壁がうすく、爪形状の押捺が規則的におこなわれている羽島下層III式土器である。

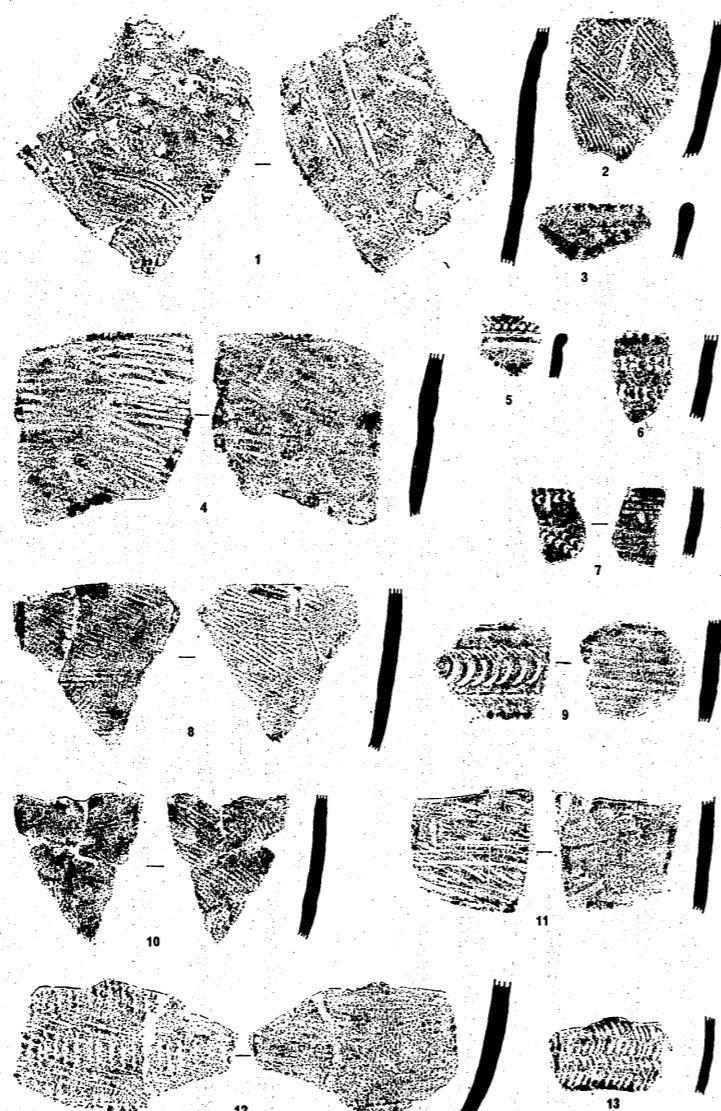


図26 縄文土器拓影 (昭和39年調査) <縮尺1/3>

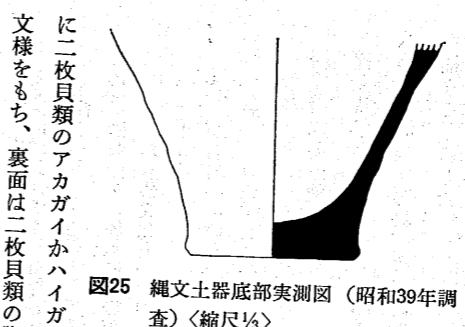


図25 縄文土器底部実測図 (昭和39年調査) <縮尺1/3>

で、後葉の土器はほとんど知られていない。

またA地点出土の縄文土器は瀬戸内地方の影響が強

く、畿内の縄文前期の土器である北白川下層式土器(I.

II・III・IV)、大歳山式土器の出土はなかった。むしろ

北白川下層式土器等の関西系の土器は東方へかなり進出

したらしく、岐阜県高山市村山遺跡では関西系の土器が

50パーセント以上出土している。

石器

石器はA地点、B地点と共に石鎌の出土が最も多い。

他には石ヒ、削器、不定形刃器、打製石斧、叩石、磨

石、砥石等が出土している。使用痕のある剥片も多数出

土した。

特に縄文前期人は石器製作からみても高度な石器製作技術を身につけていたと思われ、精巧な石鎌やその他の石器を製作している。その石鎌を製作する時に旧石器時代の石核のよう調整したりして剥片を剥離するのではなく適当な石塊から剥片を剥離し不定形の石核をつくりだしていたと思われる。図20-71・73はその石核ではな

かろうか。

註(1) 大野政雄他「村山遺跡」昭和三十五年

岡田茂弘「近畿」日本の考古学II 縄文時代 昭和四十年 河出書房

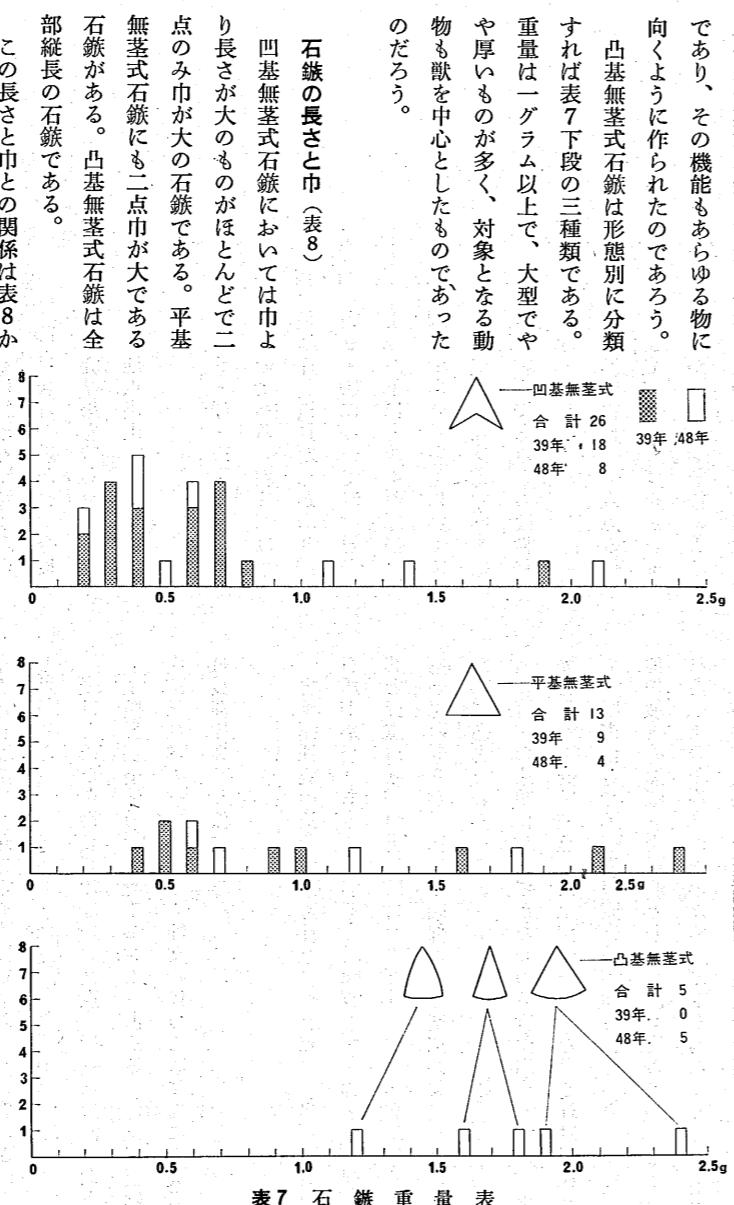
鎌木義昌他「瀬戸内」日本の考古学II 縄文時代 昭和四十年 河出書房

鎌木義昌他「中国」日本考古学講座3 縄文文化昭和三十一年 河出書房

石鎌の重量 (表7)

A地点・B地点から出土した完形の石鎌は合計四四点である。その形態は凹基無茎式、平基無茎式、凸基無茎式の石鎌で凸基有茎式(「なかご」がある)は一点も出土していない。東北地方では凸基有茎式石鎌も前期から出現している。

表7において凹基無茎式石鎌の重量は1グラムまでが約八五パーセントあり、狩猟対象としての動物もある程度限定されていたのではないかろうか。



3 旧石器・縄文時代の遺跡遺物 — 69 —

らすぐに結果を論及するの

は早過ぎると思われ、今後

の研究結果を待ちたい。

B 地点出土の剥片につい

て

表9・10・11・12は一連

のものである。剥片には縦

長剥片と横長剥片があり、

表9・10においては一对一

より左上にあるものは縦長

剥片であり、左上にいくに

従つてその比率は高くな

る。右下にあるものは横長

剥片である。

表11は総数一七六点の個

数表で、横長の剥片が二セ

ンチから三センチ位の大き

さに集中しており、石鎌を

作る時石塊から方向を定めずに剝離し、その剥片が多いと思われる。

表11と12から横長剥片は一〇九点、縦長剥片は六七点あり横長が全体の六二・八%を占める。また縦長剥片は三八・八%を占め、縄文時代の石鎌製作にも大形縦長剥片等は関係があろう。

吉岡昭採集の遺物で最も注意すべき点は、黒曜石製の石器がかなりあることである。表27・28・10・13・14・24

28と5点あり、出土地は岩ヶ平と笠ヶ塚で縄文時代の遺

物と思われるが、10は先端部のみで基部が欠損している

ためにあまりわからない。

朝日ヶ丘遺跡においてかなりの遺物が出土したが、黒曜石製の石器は一点も出土例がなかった。これは現在まで芦屋市付近で黒曜石の原産地が知られていないので、他地域との黒曜石を中心とした交流もその当時は考えられる。土器の出土がないために時期を判断することは出来ないが、黒曜石を分析して、原産地を調査することは

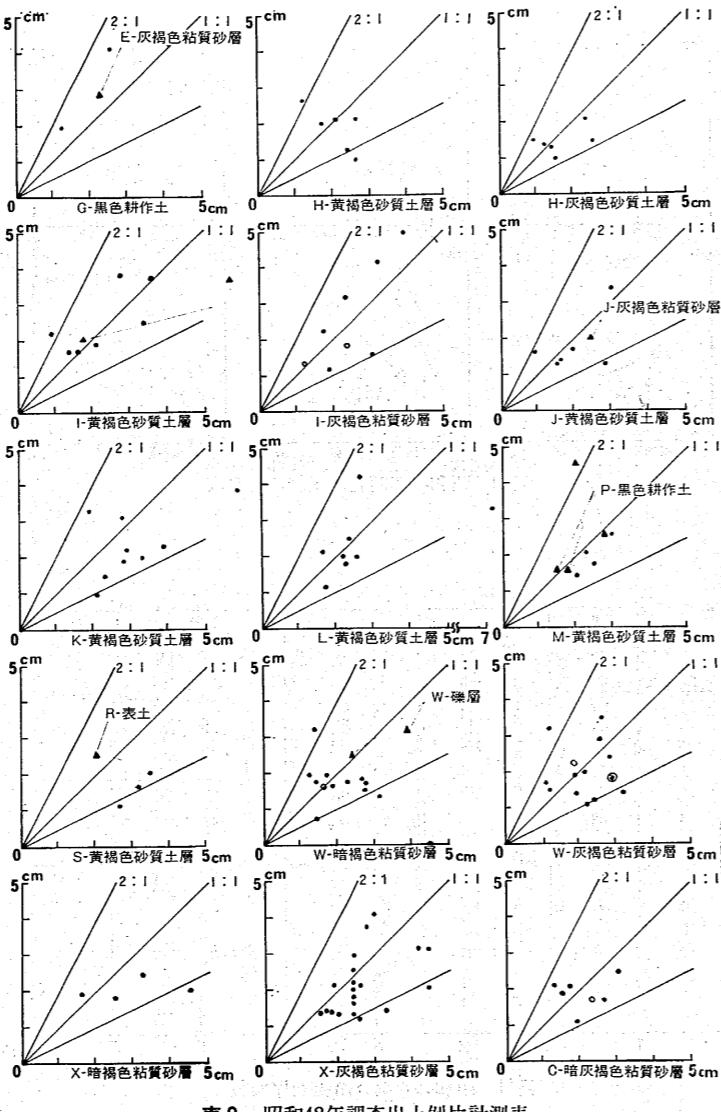


表9 昭和48年調査出土剥片計測表

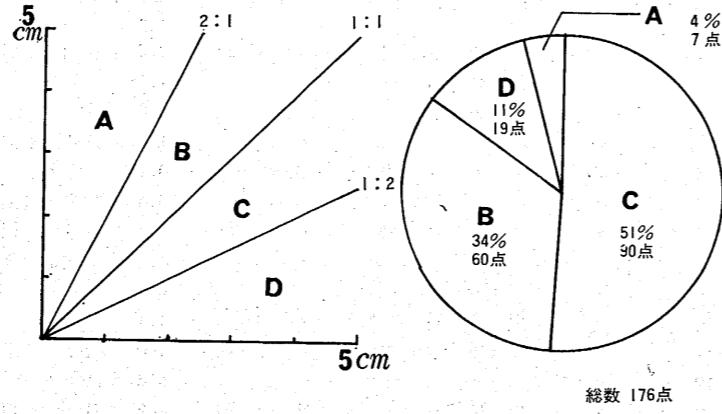


表12 昭和48年調査出土剥片形態グラフ

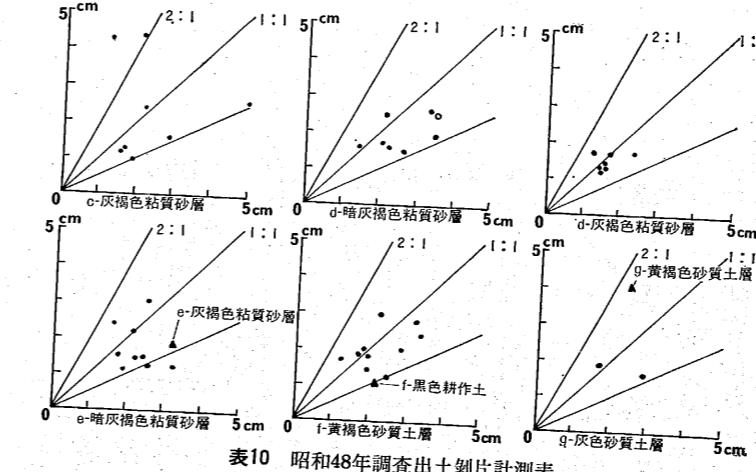


表10 昭和48年調査出土剥片計測表

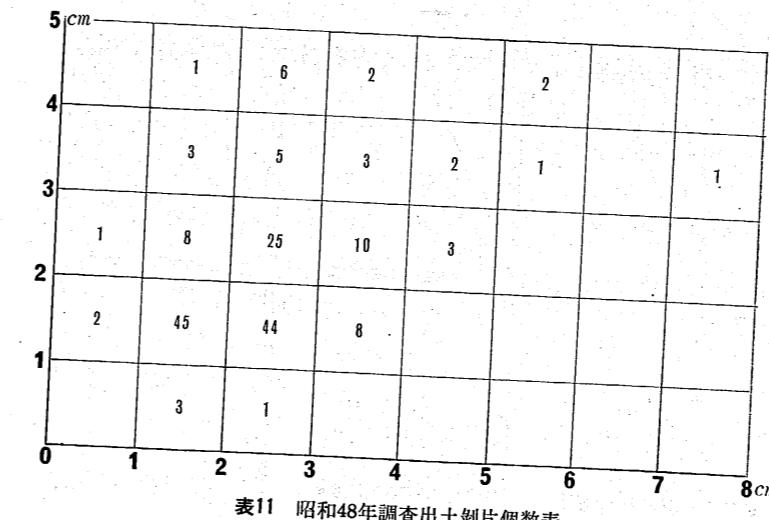


表11 昭和48年調査出土剥片個数表

可能である。

現在西宮市所有の芦屋市内出土遺物は6点知られる。そのうち昭和四年に岩ヶ平にて採集された石器は旧石器時代の遺物である(図29・写真6)。

図29は瀬戸内技法によって剝離された翼状剝片をあますところなく腹面部から整形加工し、基部は腹面においても調整加工がある。また整形加工された側面は鋸歯状になつており、断面は台形状を呈している。長さは八・三センチメートルある国府型ナイフ形石器である。

また先端部は上部から打撃を加えて縦形に細く剝離し、彫器状の彫刻刃面をつくっている。

国府型ナイフ形石器を出土した遺跡は、大阪府枚方市津田三ツ池遺跡、交野市神宮寺遺跡、藤井寺市国府遺跡、岡山県児島市鷺羽山遺跡、玉野市宮田山遺跡、京都府京都市広沢池遺跡等がある。

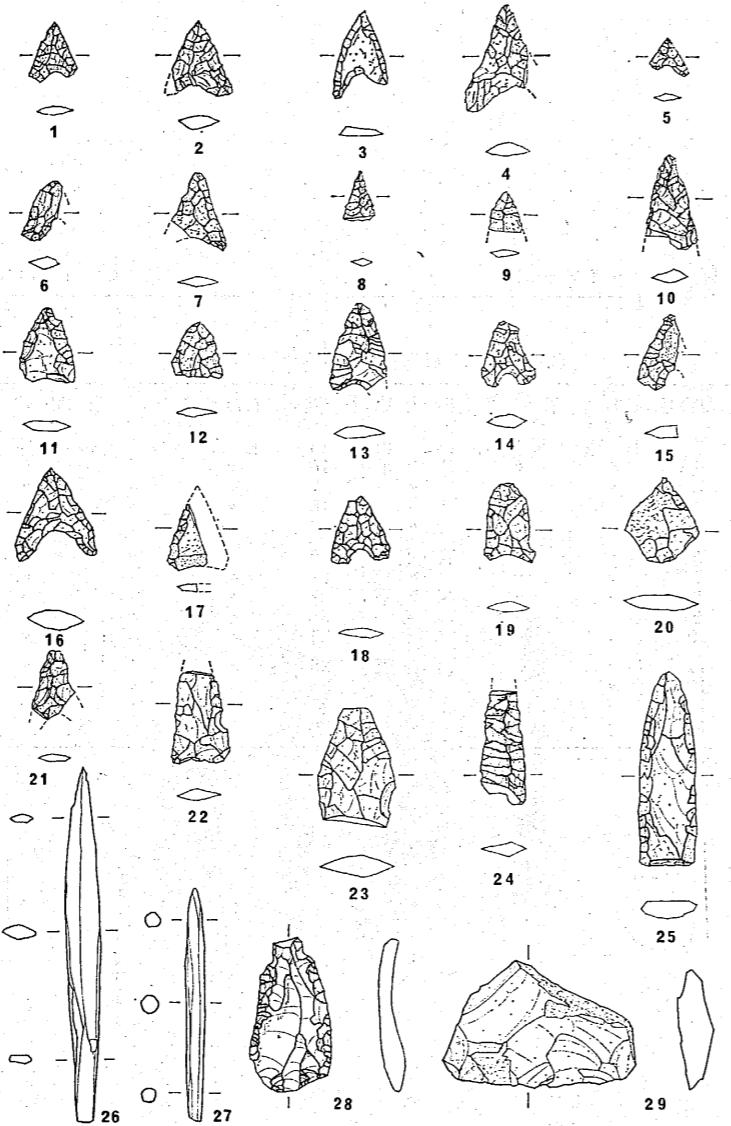


図27 吉岡昭採集の芦屋市内出土石器実測図(1)〈縮尺1/2〉

表13 吉岡昭採集の芦屋市内出土石器一覧表

石器番号	石器名	石質	出土地点	重量(g)	備考
1	石 鏽	サヌカイト	岩ヶ平小学校北	0.5	片足欠損
2	"	黒曜石	"	1.1	"
3	"	サヌカイト	"	1.0	完形
4	"	"	"	1.6	片足欠損
5	"	"	岩ヶ平小学校北朝日ヶ丘	0.1	"
6	"	"	"	0.4	片半分欠損
7	"	"	岩 平	0.7	片半分欠損
8	"	"	"	0.2	片足欠損
9	"	"	"	0.2	先端部のみ
10	"	黒曜石	"	1.1	"
11	"	サヌカイト	笠 ケ 塚	1.0	完形
12	"	"	"	0.6	"
13	"	黒曜石	笠ケ塚南側	1.2	片足欠損
14	"	サヌカイト	笠ケ塚南部松林	0.8	先端部欠損
15	"	"	"	0.7	片半分欠損
16	"	"	笠ケ塚東側の谷	1.8	完形
17	"	"	"	0.5	片半分欠損
18	"	"	"	0.9	先端部欠損
19	"	"	笠ケ塚東側の谷上流	0.8	完形
20	"	サヌカイト	城 山 山 蔗	1.9	"
21	"	"	阿保親王御墓西側の畠	0.6	両足欠損
22	"	"	天 神 山 裏	1.6	先端部欠損
23	尖頭状石器	"	笠ケ塚東側の谷上流	4.1	"
24	石 槍	黒曜石	笠ケ塚南側	1.4	"
25	"	緑泥変岩	"	7.2	完形
26	"	"	"	5.8	"
27	石 錐	黒曜石	笠 ケ 塚	3.5	"
28	石 斧	サヌカイト	"	6.0	"
29	"	"	"	17.0	"
30	石 剣	"	"		基部のみ
31	有孔石斧	"	阿保親王塚の西側		片半分欠損
32	磨製石斧	砂 岩	朝 日 ケ 丘		基部欠損

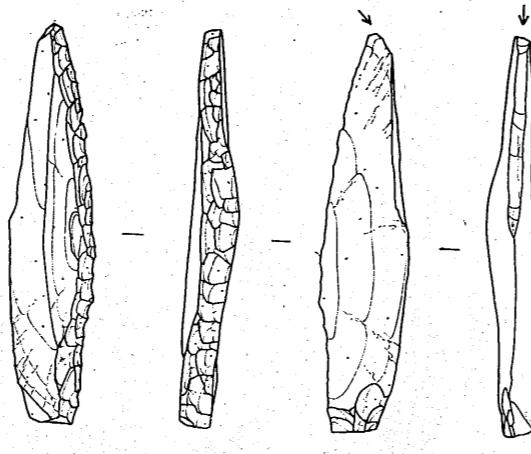


図29 岩ヶ平出土のナイフ形石器（昭和4年10月18日採集）〈縮尺%〉

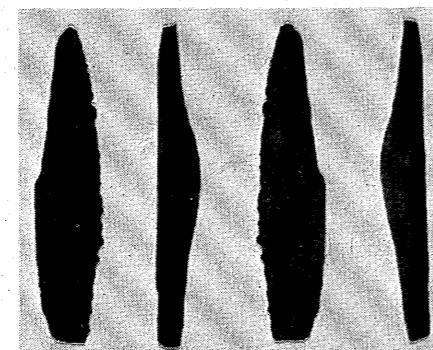


写真6 岩ヶ平出土のナイフ形石器〈縮尺½〉

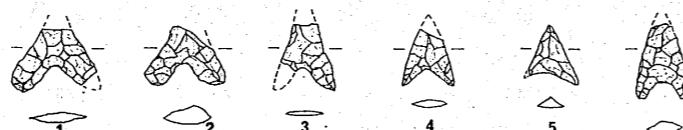


図30 西宮市内出土石器〈縮尺½〉

表14 西宮市所有の芦屋市内出土石器一覧表

石器番号	石器名	石質	出土地点	備考
1	石 鐵	サヌカイト	岩ヶ平	
2	"	"	"	
3	"	"	"	
4	"	"	"	
5	"	"	"	
6	"	"	阿保親王塚	
図 29	ナイフ形石器	"	岩ヶ平	国府型ナイフ形石器

表15 朝比奈貞雄所有の市内出土石器一覧表

石器番号	石器名	石質	出土地	石器番号	石器名	石質	出土地
1	石 鐵	サヌカイト	打岩ヶ平	15	石 鐵	サヌカイト	自宅付近
2	"	"	"	16	"	"	"
3	"	"	"	17	"	"	"
4	"	"	"	18	"	"	"
5	"	"	"	19	"	"	"
6	"	"	自宅付近	20	"	"	"
7	"	"	"	21	"	"	"
8	"	"	岩ヶ平	22	"	"	"
9	"	"	"	23	"	"	"
10	"	"	"	24	"	"	"
11	"	"	自宅付近	25	"	"	"
12	"	"	"	26	"	"	"
13	"	"	"	27	"	"	"
14	"	"	"	28	"	"	"

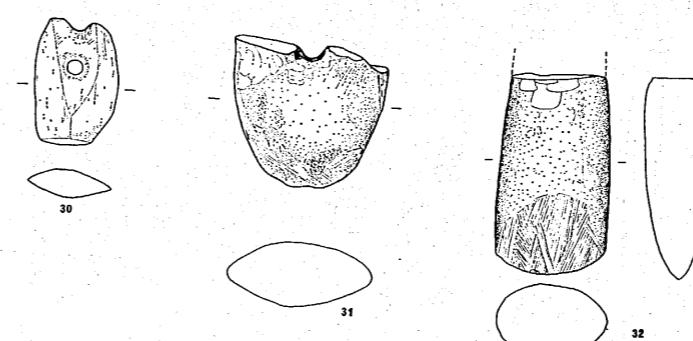


図28 吉岡昭採集の芦屋市内出土石器実測図(2)〈縮尺½〉

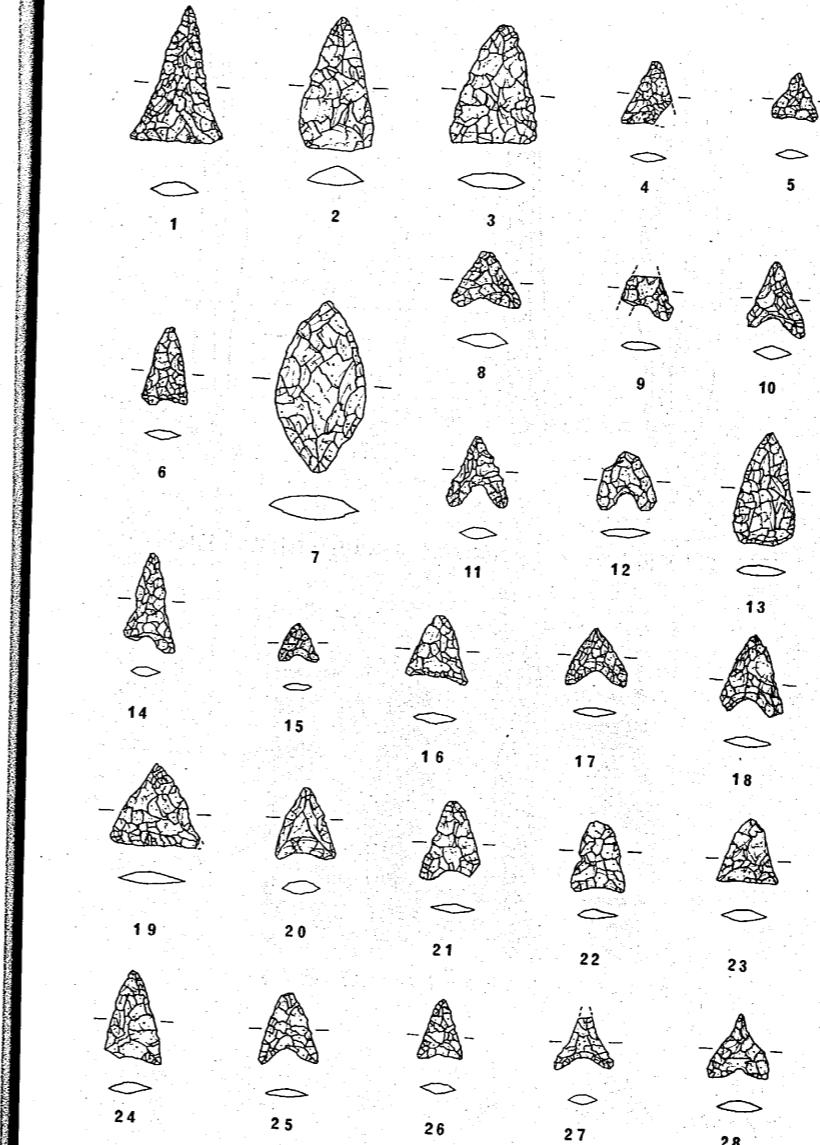


図31 朝比奈貞雄採集石器実測図

芦屋地方の旧石器・縄文時代の地域的特色

がない。

旧石器時代の遺物は朝日ヶ丘遺跡、岩ヶ平から出土しているが、いずれも後期・晚期旧石器時代の遺物で約二万年から一万二〇〇〇年前のものである。特にB地点出土の三角形の刻面をもつ彫器や、岩ヶ平で昭和四年に採集された国府型ナイフ形石器が最も古く約二万年から一万五〇〇〇年前くらいである。

このような各種類の石器を出土した旧石器時代の遺跡は摂津地方ではまだ知られていない。しかし播磨地方では国府型ナイフ形石器、井島I型石器、II型石器、有舌尖頭器等を出土した遺跡が知られている。

遺物のあり方からみると、芦屋地方の旧石器時代は古くは瀬戸内地方の文化圏と東日本の文化圏との境界線上にあったと思われ、特に大型尖頭器、三角形の刻面を持つ彫器等は兵庫県以東のものであろう。しかし新しくなると瀬戸内地方の石器文化圏の範囲をほとんど出ること

縄文時代の土器は朝日ヶ丘遺跡しか知られていない。土器は瀬戸内地方を中心として発見されるものとほとんど同じである。しかし石器類はサヌカイト以外の石質を使用して製作されたものも多く非常に精巧である。特に岩ヶ平付近で採集されたものには黒曜石製の石器もかなりあり、他地域との交易が考えられる。当市域出土の黒

曜石が、どこから搬入されたかは重大な問題点となる。遺跡は前期のみで忽然と消え、弥生時代に入るまで出現せず、縄文時代前期頃に花崗岩等の流出があり、消滅したことと考えられる。これは六甲山地域のみにいえることである。

第二章 弥生時代

1 研究史

ここでは芦屋市域及びその周辺の遺跡・遺物を中心として弥生時代の考古学研究の歩みを、明治以前・明治大正・昭和前半・昭和後半に大別して概観することにしよう。

弥生時代研究のあゆみ

わが国における最初の統一政権出現の胎動期は大阪湾沿岸にその舞台を求めることができる。この意味で、弥生時代の研究にあたっては、大阪湾北岸諸地域の各遺跡の占める位置は非常に大きい。

しかし、過去の研究成果を回顧するとき、多くの資料がつぎつぎに発見されることから、緊急調査に追われ、若干の総合的考察の試みを除いては、調査報告という形の資料発表のみに終っている傾向が強い。

明治以前 芦屋市域の考古学資料の初見は、江戸時代に始まる。

近世諸学の隆昌に伴い、考証学的史風・好古思潮が流行し、考古学的な研究の先駆がなされるようになつた。とくに十八世紀から十九世紀の前半にかけて、この方面的研究は活発さを増している。十九世紀中葉以降になると、対外関係も慌しくなり、幕府の威信の失墜や勤王思想の高まりなどによつて、陵墓への関心が強まるようになる。このような情勢のなかで、文政元年（一八一八）に毛利家（長州藩）による親王塚の陵墓調査が

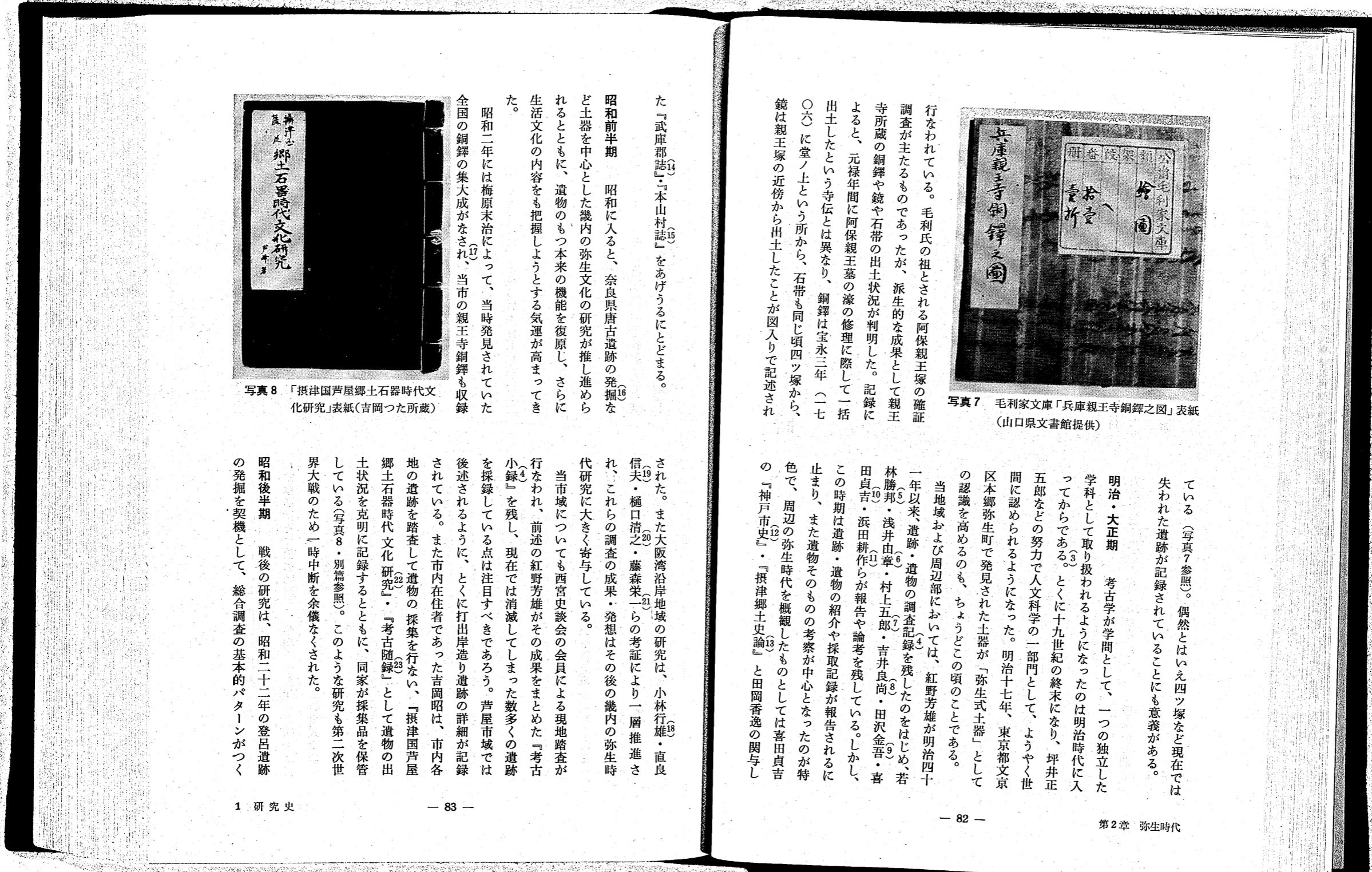


写真8 「摂津国芦屋郷土石器時代文化研究」表紙(吉岡つた所蔵)

た『武庫郡誌』・『本山村誌』をあげうるにとどまる。

昭和前半期 昭和に入ると、奈良県唐古遺跡の発掘⁽¹⁶⁾など土器を中心とした畿内の弥生文化の研究が推し進められるとともに、遺物のもつ本来の機能を復原し、さらに生活文化の内容をも把握しようとする気運が高まってきた。

昭和二年には梅原末治によって、当時発見されていた全国の銅鐸の集大成がなされ⁽¹⁷⁾、当市の親王寺銅鐸も収録

行なわれている。毛利氏の祖とされる阿保親王塚の確証調査が主たるものであったが、派生的な成果として親王寺所蔵の銅鐸や鏡や石帶の出土状況が判明した。記録によると、元禄年間に阿保親王墓の濠の修理に際して一括出土したという寺伝とは異なり、銅鐸は宝永三年（一七〇六）に堂ノ上という所から、石帶も同じ頃四ツ塚から、鏡は親王塚の近傍から出土したことが図入りで記述され

ている（写真7参照）。偶然とはいえ四ツ塚など現在では失われた遺跡が記録されることにも意義がある。

明治・大正期 考古学が学問として、一つの独立した学科として取り扱われるようになつたのは明治時代に入つてからである。⁽³⁾とくに十九世紀の終末になり、坪井正五郎などの努力で人文科学の一部門として、ようやく世間に認められるようになった。明治十七年、東京都文京区本郷弥生町で発見された土器が「弥生式土器」としての認識を高めるのも、ちょうどこの頃のことである。

当地域および周辺部においては、紅野芳雄が明治四十一年以来、遺跡・遺物の調査記録を残したのをはじめ、若林勝邦・浅井由章・村上五郎・吉井良尚・田沢金吾・喜田貞吉・浜田耕作らが報告や論考を残している。しかし、この時期は遺跡・遺物の紹介や採取記録が報告されるに止まり、また遺物そのものの考察が中心となつたのが特色で、周辺の弥生時代を概観したものとしては喜田貞吉の『神戸市史』・『摂津郷土史論』と田岡香逸の関与し

された。また大阪湾沿岸地域の研究は、小林行雄・直良信夫・樋口清之・藤森栄⁽²¹⁾らの考証により一層推進され、これらの調査の成果・発想はその後の畿内の弥生時代研究に大きく寄与している。

当市域についても西宮史談会の会員による現地踏査が行なわれ、前述の紅野芳雄がその成果をまとめた『考古小録』を残し、現在では消滅してしまった数多くの遺跡を採録している点は注目すべきであろう。芦屋市域では後述されるように、とくに打出岸造り遺跡の詳細が記録されている。また市内在住者であつた吉岡昭は、市内地の遺跡を踏査して遺物の採集を行ない、『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』・『考古隨録』として遺物の出土状況を克明に記録するとともに、同家が採集品を保管している（写真8・別篇参照）。このような研究も第二次世界大戦のため一時中断を余儀なくされた。

昭和後半期 戦後の研究は、昭和二十二年の登呂遺跡の発掘を契機として、総合調査の基本的パターンがつく

られ、瓜郷遺跡・安國寺遺跡・山木遺跡・千種遺跡など

が相次いで発掘調査され、弥生時代の新資料が出土する

とともに、弥生文化の本質や具体的な内容の実証がなされる

るようになつた。

昭和三十年代に入ると、今までの成果をまとめようといふ気運が高まり、遺跡のもつ機能や形態あるいは生産にも目が向けられるようになつた。

昭和三十一年から三十六年にかけて行なわれた本市会下山遺跡・城山遺跡の発掘とその報告は、畿内では初めての弥生時代の集落のほぼ完掘ということで注目を集めた。さらにこの調査は弥生系高地性遺跡の研究として大きな脚光を浴びるとともに、近在の低地性遺跡の再検討を促すことになった。西宮市五ヶ山遺跡、神戸市坂下山・金鳥山・荒神山・伯母山などの高地性遺跡の調査や尼崎市上ノ島・下坂部・庄下川・田能・若王寺遺跡、川西市加茂遺跡、豊中市勝部遺跡などの調査が、これら問題と関連してくる。また芦屋市内の遺物散布地の調査も芦の芽グループによる地道な文化財パトロールで十

年余継続されている。⁽²⁵⁾

新たな研究と今後の課題 昭和三十九年から四十年代

にかけて、小林行雄・杉原莊介による『弥生式土器集成』本編が刊行され、弥生式土器の編年に一基準が与えられ、その基礎が確立した。その中で、佐原真による畿

内叙述は、小林行雄の唐古編年をさらに補正・細分し、当地方における弥生式土器変遷の「ものさし」を完成させたものとした。

また集落の立地・形態・機能などの研究も進み、会下山をはじめ、紫雲出山⁽²⁷⁾・播磨大中⁽²⁸⁾・加茂⁽²⁹⁾・田能⁽³⁰⁾・勝部⁽³¹⁾・瓜生堂⁽³²⁾・池上⁽³³⁾・四ツ池⁽³⁴⁾・安満・宮ノ前など各遺跡の考察がまとめられている。

墓制についての調査・研究も顯著で、北九州における甕棺墓・支石墓・箱式棺の実態や各地域の木棺墓などの各形式の埋葬事例も発掘資料は増加している。新たに各地域から急激に発掘例が報ぜられている方形周溝墓は、弥生時代の社会的背景を考察することと、古墳時代の高

塚墳墓との関連を考える上でも大きな問題を投げかけて

いる。

神戸市桜ヶ丘や甲山をはじめとする青銅器の新たな発見や、尼崎市田能の銅劍の鋸型・茨木市東奈良の銅鐸・勾玉・銅戈の鋸型の発掘も、今後の大坂湾沿岸弥生文化の実態究明の上で重要な問題である。

弥生時代に関する調査・研究は年とともに進展しており、いくつかの総括は試みられているものの、残されている問題も少なくない。考古学という学問の基本を十分認識し、個人では限界のある研究を、各分野の研究者の衆知を集め、相互協力による総合研究をより一層進めいく必要があるう。

- 註(1) 『祖先のあしあと』Ⅱ 昭和三十三年 神戸新聞社
田辺昭三・佐原真「弥生文化の発展と地域性—近畿」『日本の考古学』Ⅲ 弥生時代 昭和四十一年
石野博信「桜ヶ丘周辺の弥生遺跡」「桜ヶ丘銅鐸」
銅戈(本編) 昭和四十四年 兵庫県教育委員会
村川行弘「桜ヶ丘周辺の青銅器遺物」(前掲書)
村川行弘「近畿」『新版考古学講座』4 原始文化(上)
六一八・九・一〇・一一・一二 大正十年

- (12) 『神戸市史』別録一 大正十一年 神戸市役所

(13) 喜田貞吉『摂津郷土史論』 大正七年

(14) 『武庫郡誌』 大正十年

(15) 『本山村誌』 昭和二十八年

(16) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙一郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第一六冊) 昭和十八年

(17) 梅原末治『銅鐸の研究』 昭和二年

(18) 小林行雄『摂津國神戸市篠原遺跡に就いて』『史前學雑誌』一一四・五 昭和四年、『畿内弥生式土器の一二相』『考古学』四一一 昭和八年、『神戸市布引丸山の弥生式土器』『考古学』六一四 昭和十年

(19) 直良信夫『二三弥生式土器の紋様について』『考古学雑誌』一九一四 昭和四年

(20) 樋口清之『摂津保久良神社遺跡の研究』 昭和十七年 国学院大學駒込会

(21) 藤森栄一『弥生式文化に於ける摂津加茂の石器群の意義について』『古文化』一四一七 昭和十八年

(22) 吉岡昭『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』昭和十九年

(23) 吉岡昭『考古隨録』 昭和十九年

(24) 村川行弘・石野博信『会下山遺跡』(芦屋市文化財調査報告第三集) 昭和三十九年 芦屋市教育委員会

(25) その成果の一端は過去にまとめられている。(芦屋市埋蔵文化財包咸地台帳)『芦屋市文化財調査報告』第五集 昭和四十二年 芦屋市教育委員会

(26) 小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編2 昭和四十三年

(27) 小林行雄・佐原真『紫雲出』 昭和三十九年 訳 間町教育委員会

(28) 上田哲也他『播磨大中』 昭和四十年 播磨町教育委員会

(29) 末永雅雄他『摂津加茂』 昭和四十三年 関西大学三年 尼崎市教育委員会

(30) 田能遺跡発掘調査会編『田能遺跡概報』 昭和四十年 尼崎市教育委員会

(31) 烏越憲三郎・藤井直正他『勝部遺跡』 昭和四十七年 尼崎市教育委員会

(32) 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』 昭和四十六年。II 昭和四十八年

(33) 第Ⅱ阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池』 昭和四十五年

(34) 『高槻市史』第六卷(考古編) 昭和四十八年 高槻市役所

(25) その成果の一端は過去にまとめられている。(芦屋市埋蔵文化財包咸地台帳)『芦屋市文化財調査報告』第五集 昭和四十二年 芦屋市教育委員会

(26) 小林行雄・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編2 昭和四十三年

(27) 小林行雄・佐原真『紫雲出』 昭和三十九年 訳 間町教育委員会

(28) 上田哲也他『播磨大中』 昭和四十年 播磨町教育委員会

(29) 末永雅雄他『摂津加茂』 昭和四十三年 関西大学三年 尼崎市教育委員会

(30) 田能遺跡発掘調査会編『田能遺跡概報』 昭和四十年 尼崎市教育委員会

(31) 烏越憲三郎・藤井直正他『勝部遺跡』 昭和四十七年 尼崎市教育委員会

(32) 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』 昭和四十六年。II 昭和四十八年

(33) 第Ⅱ阪和国道内遺跡調査会『池上・四ツ池』 昭和四十五年

(34) 『高槻市史』第六卷(考古編) 昭和四十八年 高槻市役所

(1) 芦屋市域において現在までに発掘調査が実施された弥生遺跡は会下山遺跡と城山遺跡を代表とする。会下山遺跡については『芦屋市文化財調査報告』第一集にその概要がいち早く紹介され、同・第三集には意欲的な報告書として注目された学術調査の成果が収められている。最近では、西斜面の一画が防災工事に伴つて緊急調査されており、斜面地域にはなお遺物包含層の遺存する事実が確かめられている。⁽³⁾ 城山遺跡については、国有林である関係上、試掘調査を行ない、前出文化財調査報告の第一集にその大要が報告されている。

本節では発掘調査の行なわれたこれら二遺跡を中心

(2) 文化財調査報告・第三集) 昭和三十九年 芦屋市教育委員会

(3) 森岡秀人『会下山弥生遺跡緊急調査報告』『芦屋市文化財調査報告』第八集 昭和四十九年 芦屋市教育委員会

(4) 村川行弘『芦屋城山遺跡調査概報』『芦屋市文化財調査報告』第一集 昭和三十四年 芦屋市教育委員会

11 昭和三十三年度

14 昭和三十六年度

村川行弘『兵庫県芦屋市会下山集落址』『日本考古学年報』11 昭和三十三年度

村川行弘『芦屋市会下山・城山遺跡調査概要』表六甲山系高地性弥生式遺跡の一例としてー』『魚澄先生古稀記念国史学論叢』 昭和二十四年

参考文献

2 市内の主要な弥生遺跡

芦屋市域において現在までに発掘調査が実施された弥生遺跡は会下山遺跡と城山遺跡を代表とする。会下山遺跡については『芦屋市文化財調査報告』第一集⁽¹⁾にその概要がいち早く紹介され、同・第三集⁽²⁾には意欲的な報告書として注目された学術調査の成果が収められている。最近では、西斜面の一画が防災工事に伴って緊急調査されており、斜面地域にはなお遺物包含層の遺存する事実が確かめられている⁽³⁾。城山遺跡については、国有林である関係上、試掘調査を行ない、前出文化財調査報告の第一集⁽⁴⁾にその大要が報告されている。

本節では発掘調査の行なわれたこれら二遺跡を中心に入文献や分布調査によつて知られた主要遺跡を収録し、芦屋市内における弥生時代遺跡について、位置・環境・調査経過・遺構・出土遺物などを網羅して紹介することにした。

2 市内の主要な弥生遺跡

(イ) 会下山遺跡 (芦屋市三条町)

位置と環境 会下山は六甲山系の南面する一支部で最高所は標高一九九・二メートルを測り、海岸線からは約二キロ北方に位置している。山頂からは眼下に芦屋市街が一望でき、南は大阪湾を経て紀伊半島を遠望し、東は武庫・西摺の平野を経て遠く奈良・京都の山々が望見でき、西は神戸市から六甲連山を、北は林立する表六甲の高峰を望めるというすぐれた眺望をもつ位置にある（写真9・巻頭図版16参照）。そして周辺には六甲山系の東西・南縁に展開する弥生中期以降の遺跡群と、東方の沖積平野に展開する弥生前期以来の大遺跡群が濃い密度で分布している。この会下山の南方と東方にのびる狭い尾根上に集落址が検出され、先掘遺跡として、また山頂式高地性遺跡として西日本の標式的遺跡となっている（図32・巻頭図版17参照）。

会下山遺跡は独立した高地性遺跡であるが、同時に周

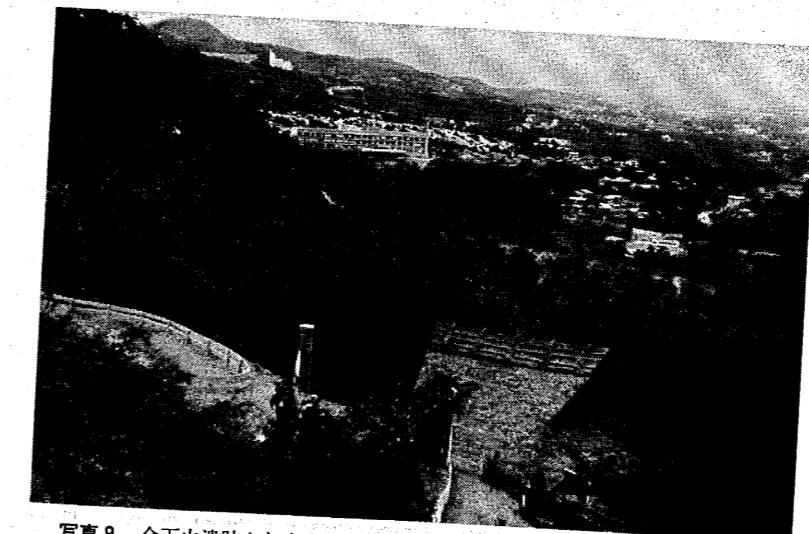


写真9 会下山遺跡より東方の平地を望む（左上にみえるのは西宮の甲山）

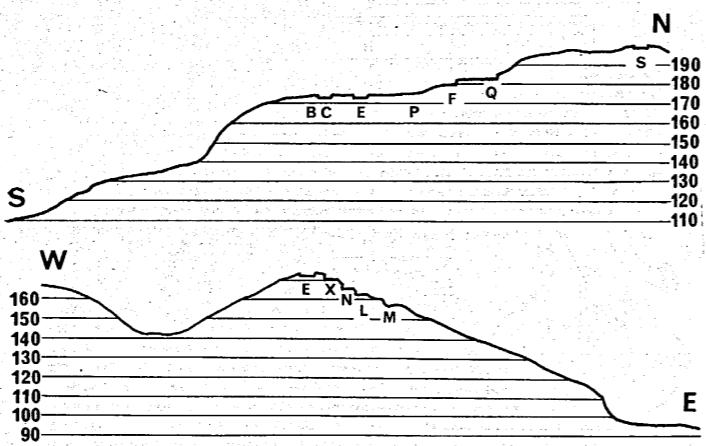
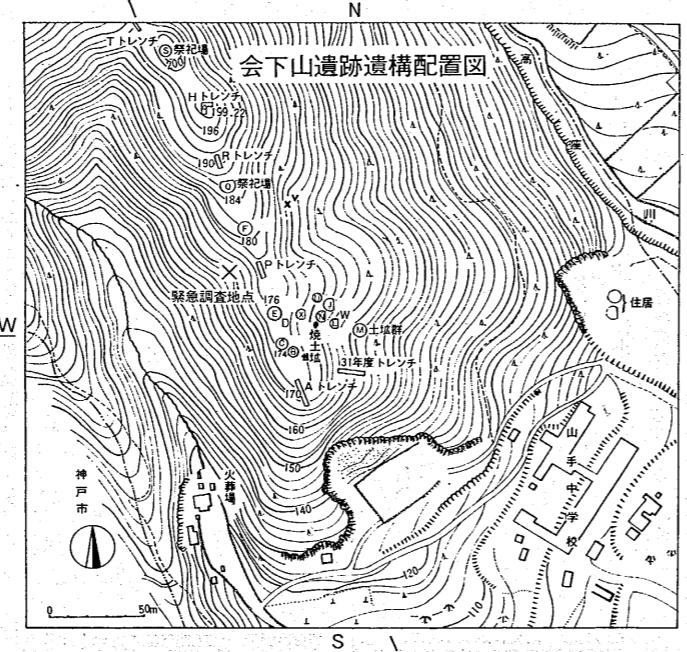
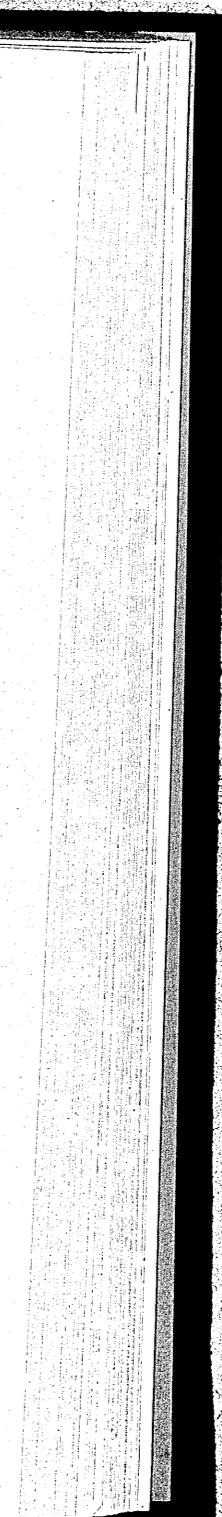


図32 会下山遺跡遺構配置図と同断面図（数字は標高を示す）



辺には旧石器・縄文・弥生・古墳・奈良時代寺院址など、各時代の遺跡を数多く控えた立地条件をもつてゐる。

調査の経過

(1)第一次予察調査 会下山遺跡の発見は、市立山手中学校が青山に植物実習用地としての道をつくろうとしたことをその発端とする。すなわち、会下山南面の急斜面における造成中、山腹から大量の土器片が出土・採取されることが知られ、通報を受けた教育委員会では、直ちにその付近の事前調査を実施することとなつた。昭和三十一年三月二十一日から武藤誠・村川行弘が標高一六四メートルの尾根南斜面、標高一五〇〜一六〇メートル、一四〇〜一五〇メートル、一三〇〜一四〇メートルの山麓にそれぞれ幅二メートル・長さ五メートルのトレンチを設定して、土層と遺物包含状況を調査した(図32参照)。その結果、斜面に遺物包含層が濃密度で遺存するが、上方からの流出堆積層であることが判明するとともに、畿内第Ⅲ様式(古)から第Ⅴ様式までの遺物に限定されることが理解できた(図33参照)。器形・文様

の明らかな土器を整理すると、第Ⅲ様式五点・第Ⅳ様式四七点・第Ⅴ様式五四点に分類することができる。

(2)第二次発掘調査 予察調査の結果、包含層の性格など精査が要請されたため、昭和三十三年七月二十九日から村川行弘を責任者とする会下山遺跡発掘調査団が芦屋市教育委員会の委嘱で発掘調査を開始した。

標高一七六メートルの山頂主尾根最南端で南北二〇メートル・幅五〇センチで設定されたトレンチがA地区で、Bトレンチ(東西一〇メートル・幅五〇センチ)とCトレンチ(南北五メートル・幅五〇センチ)を設けた。約一四センチの表土層の下は秩父古生層風化土層である。約一〇センチの表土層の下は秩父古生層風化土層で遺物の包含はなく、集落の南限がほぼ確認された。

標高一七四メートルの尾根上平担部がB地区で、Bトレンチ(東西一〇メートル・幅五〇センチ)とCトレンチ(南北五メートル・幅五〇センチ)を設けた。約一四センチの表土層の下は固い灰色粘土質土層となり、この面に土器片が散布し、赤く焼けた面や灰層がみられ、全面拡大の結果、径約六メートルと推定される楕円状に、径二〇センチ・深さ約一五〜二〇センチの小孔が一二か所検



写真10 E地区住居址溝の切合い状況

出され、何等かの構造物址でその四割が斜面に倒壊した痕跡が推定された。

標高一七六メートルの尾根上に東西一五メートル・幅一メートルで設定したのがDトレンチで、これがD地区である。約一〇センチの表土層の下に約二〇センチの灰黒色粘土質土層があり、これが包含層で、この下の地山面に焼けた灰層をもつ人工的なピットなどが検出された。

Dトレンチに直角に南北一〇メートル・幅一メートルのトレンチを設定したのがEトレンチである(E地区)。

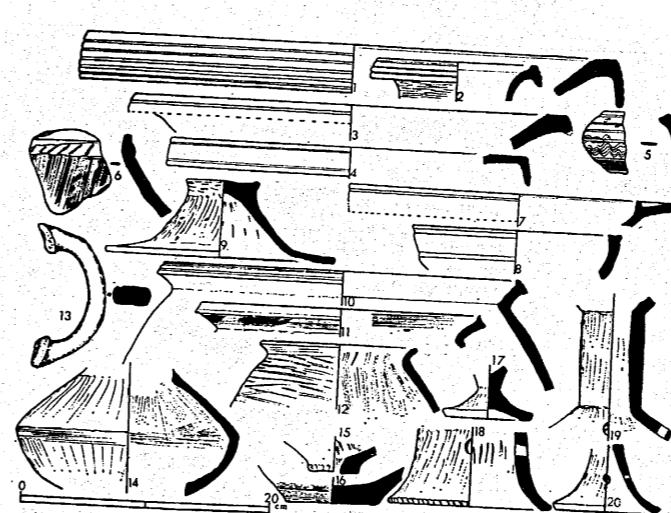


図33 予察調査出土の土器(昭和31年調査資料)

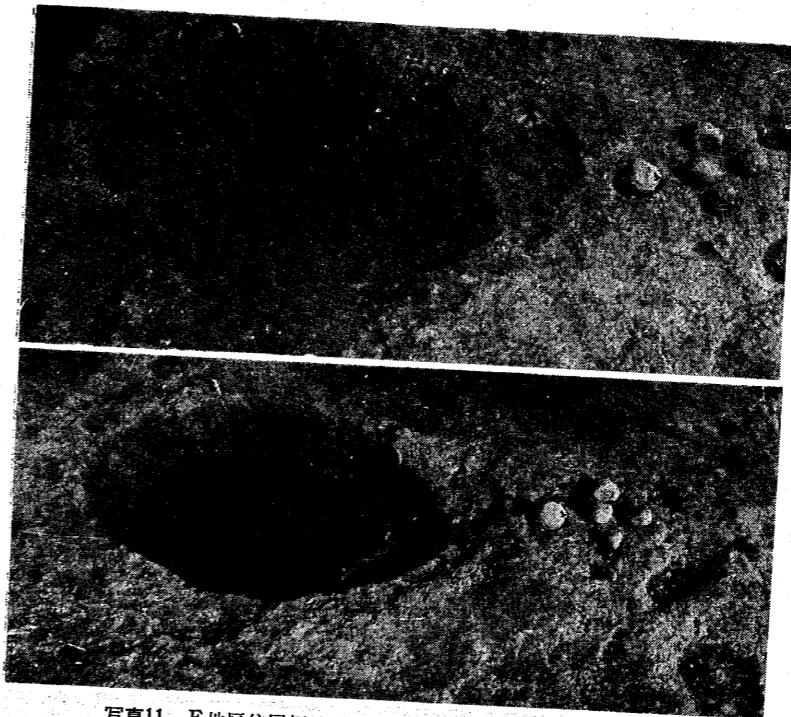


写真11 F地区住居炉址検出状況 (上) 検出前 (下) 検出後

表土層六センチ、黒褐色土層七センチ、黃褐色粘土質土層二五センチの土層で、地山面に住居址を検出した。堅穴は約三〇センチ、径七・五メートルの円形住居址で周囲に幅二〇センチ・深さ二〇センチの溝があり、溝内には完形土器がみられた(写真10参照)。床面には四本の柱穴と六ヶ所のビットが遺存する(巻頭図版18(1)参照)。床面からは完形土器・復原可能土器七、壺・甕・鉢形土器底部二四、高杯脚九、サヌカイト片二〇、石劍片一、打製石鎌一、石錐未製品一、スレート片一、石匙一、砥石四、燧石一六、鐵器片七などが検出されている。

標高一八五メートルの山頂中腹部平坦地のF地区には南北(Fトレンチ)・東西(Gトレンチ)にそれぞれ長さ五メートル・幅五〇センチのトレンチを設けた。表土層一二センチ・黄土層二〇センチ・黒土層三六セ



写真12 Q地区祭祀址溝内遺物出土状況

目的を予想以上に達成した。なお、市教育委員会では、この段階で調査の成果を概要報告し、遺跡の重要性を早くから公にした。

(3)第三次発掘調査 昭和三十四年八月四日から、会下山遺跡の全貌を究明すべくP・Q・J・L・M地区の調査がなされた。

E-F地区間の標高一七五メートルのP地区では四ヶ所のトレンチを設定し、F地区への門址・柵址的な工作

址が検出された。ピットは五メートル平方内だけに限られ、径二〇・四〇センチの小孔が一四個発見された。

標高一八一メートルのQ地区では南北の落差は約三メートルの急傾斜を示し、その北半は、円形に突出した地山



写真13 J地区住居址検出状況

に拳大の花崗岩を數きつめた状態で、この円形突出部の西側には焼土層があり、真赤に焼けた地山と木炭灰が残り、突出部の南端は、その裾を取巻くように弧状の溝が円形突出部縁を囲繞していた。

この溝は幅三〇・九〇センチ、深さ三五センチで、溝内には高杯・壺・甕の完形

数本の補助トレンチを設定した。結果として七層に分れる平面が検出され、度々住居の構築がなされたことが知られた（写真13参照）。樅木孔の一つには傾斜角42度を示すものもあった。また、径二メートルの小孔群囲繞地では清水の湧き出る泉址も検出され、谷間に通じる幅一メートルの人工的排水溝址や壺棺を内蔵する土塙墓も検出された。

包含層からはサヌカイト片多量、軽石、砥石、打製石鎌、石英加工品、石製投弾、鐵鎌、石ノミ

一、石劍片、床面からは石製投弾二、石匙二、石鎌未製品一、打製石鎌一、磨製石劍一、溝内からは石錐一、

土器や土錐がみられた（写真12参照）。また円形露頭部の溝の外の東側には径二メートルの方形の平地式張床住居

址、西側には径二メートル・幅五〇センチのJトレンチ、

組があり、石組近くからは男根状石製品が発見された。

標高一六三メートルのJ地区は尾根が東にのびる稜線

上で、東西一一メートル・幅五〇センチのJトレンチ、

数本の補助トレンチを設定した。結果として七層に分

れる平面が検出され、度々住居の構築がなされたことが知

られた（写真13参照）。樅木孔の一つには傾斜角42度を示

すものもあった。また、径二メートルの小孔群囲繞地で

は清水の湧き出る泉址も検出され、谷間に通じる幅一メ

ートルの人工的排水溝址や壺棺を内蔵する土塙墓も検出

された。

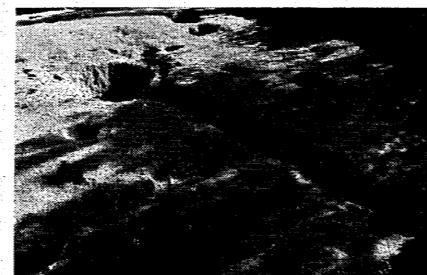


写真14 C地区住居址検出状況

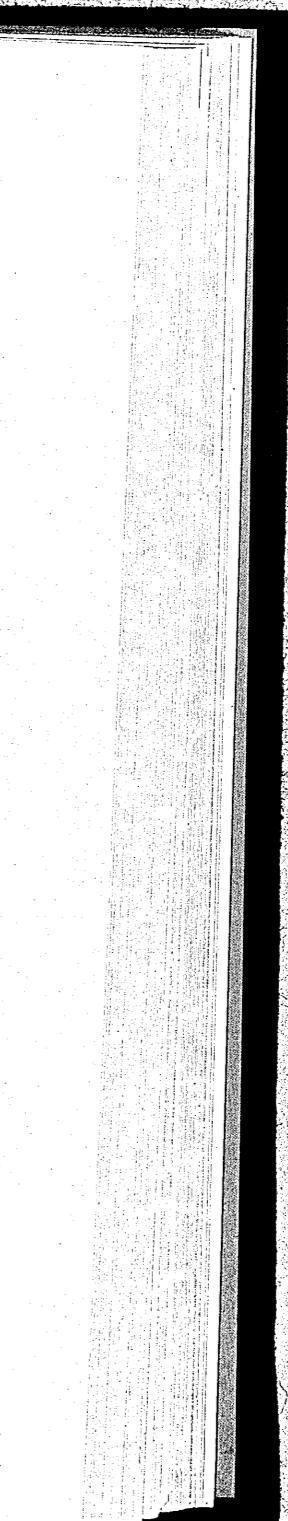
標高一七二メートルの山頂尾根部がC地区で、表土層一〇センチ・黄色土層一〇センチの下に住居址の遺存が確認された。

標高一五六メートルのM地区は尾根が急傾斜する稜線東端部で、表土層一〇センチ・黄褐色の秩父古生層風化土層を経て、黄黒色遺物包含層六〇センチ、その下にまた風化土層があり、人為的攪拌がみられた。

第三次の調査は遺跡の全容を明らかにすることを当初の目的としたが、Q・J地区における遺構検出が予想以上に困難をきわめたため、作業は計画通り進行せず、次期調査を待つこととなつた。

(4) 第四次発掘調査 このような状況下、第三次までの未調査地域を対象として、昭和三十四年十二月十七日からと昭和三十五年八月十五日からC・S・L・M地区が調査された。

最高所の標高一九九・二メートルの地点がS地区で、



一〇ヶ所のトレンチにより表土下七〇センチに住居址的遺構が残ることが判明した。C・S地区が昭和三十四年、L・M地区が昭和三十五年夏の調査である。

L地区は黒色包含層を除去すると、南北八メートル、東西六・五メートルの半月状の半堅穴・半平地式住居址が検出された。西側が尾根であり東側が斜面となつて、地形上の制約から生まれた形式で、西側は二メートル以上の一高い崖状の堅穴式構造、東側は平地式で直ちに斜面に連なつていて、堅穴部分にのみ幅二〇センチ・深さ



写真15 M地区土塙墓検出状況

一五センチの半月状の溝があり、両端で斜面に自然排水している。床面遺物には完形品が多く、長頸壺・椀・高杯・壺・甕・柱状片刃石斧・砥石・鐵鎌・コバルト色のガラス小玉のほか、F地区と同様の四〇×二五センチ、厚さ二〇センチの自然石もみられた。

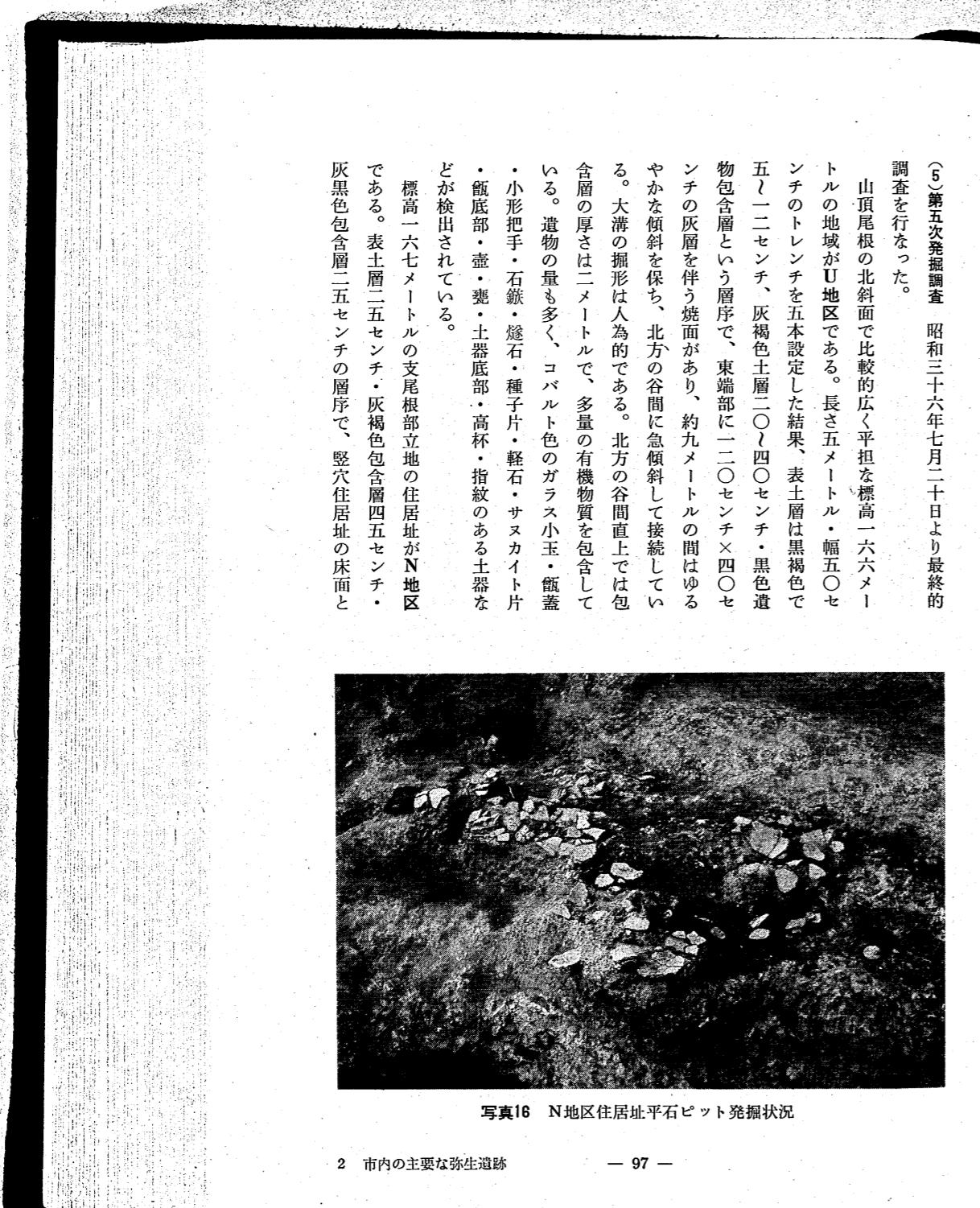
尾根東端部のM地区では四基の土塙墓が検出された。

一号土塙は南半を欠いているが、南北径三メートル・東西一メートル・深さ三〇センチの楕円状墓塙で、地山を掘込んでつくり、北辺には甕棺が遺存していた。(写真15参照)。

二号土塙は地山面に掘形を残すのみで、三号土塙は南北三・五メートル、東西一・二メートル、深さ五〇センチ、中央部東寄りに壺棺が遺存し、壺上に三〇×一五センチ、厚さ一五センチの石が載せられていた。一号土塙は甕とガラス小玉、二号土塙は中央の石と甕と高杯、三号土塙は甕・甕・高杯と壺上の石、四号土塙は鉢と器台をそれぞれ遺存していた。



写真16 N地区住居址平石ピット発掘状況



形住居で、西側は尾根の関係上、高い崖状の竪穴になり、東側は斜面に接する半竪穴半平地式構造である。溝は竪穴の部分にのみ存し、南側の斜面に人工的な排水溝があり、北側の溝は開通していない。溝幅は三〇センチ・深さは一五センチである。床面からは炭化果実・石鎌・サヌカイト片・燧石・飯・高杯・コバルト色ガラス小玉・土器片多量が検出された（巻頭図版19(2)参照）。

一トール・東西五メートルの床面で、西壁周辺にかたよつて六か所の柱孔があり、溝は幅三〇センチ・深さ一〇センチである。床面遺物はコバルト色ガラス小玉・燧石・石製投弾・木炭片・鉄ノミ・鉄鎌・鉄片・石鎌・鉢・高杯・壺・土器片多量である。表土層は一五センチ、灰黄色土層四〇センチ、灰褐色包含層五〇センチ、黒色包含層三〇センチの層序で、この西壁面にも土塙遺構が二か所発見された(卷頭図版19(1)参照)。



写真17 S地区祭祀址遺物出土状況

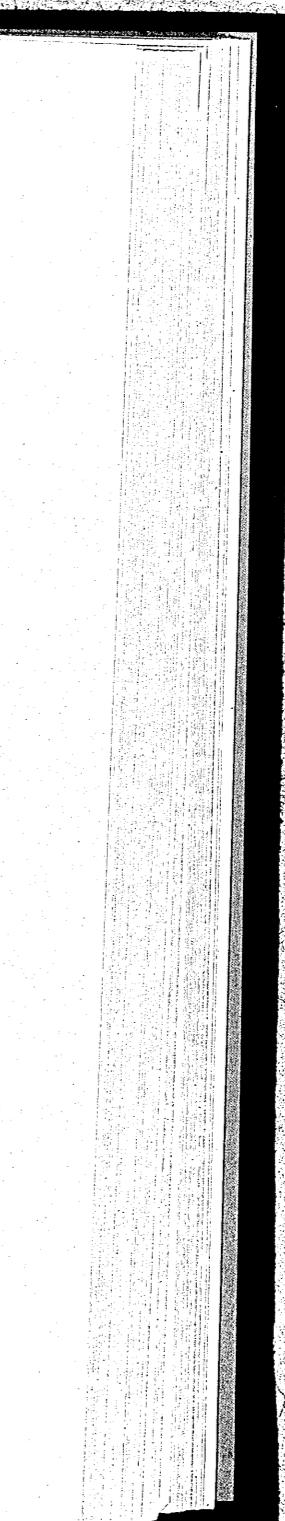
る。表土層三〇センチ、黃色土層四〇センチ、灰褐色包
含層四〇センチで地山の領家變成岩に達する層序であ
る。東西六・四メートル、南北六メートルの床面、堅穴
の深さ二〇センチ、堅穴周溝の幅は四〇センチ・深さ一
〇センチの遺構で、床面の汚れは少なく、柱孔址がない
露天の堅穴である。床面中央部には木炭層の凹みがあり、
その中に径六〇センチ・深さ四五センチの孔があり、

なつた（巻頭図版24参照）。

有機質土が充满している。他に四か所の孔があり、大形高杯を内蔵したものもある。付近には面取りをした径三八センチの石が北方ロックガーデンの最高所に直面して置かれている。遺構内出土の遺物は石製投弾・壺・飯・一二個分の高杯・石英質石器片・石鍛・木炭多量・サルボウ貝若干である（写真17参照）。

関連して最後のしめくくりとして、会下山全山の平坦地・斜面・谷間・尾根に数か所のトレンチを設定した。また、周辺の山々の山頂部・尾根部の随所に予察トレンチを設定し、六年余にわたる継続調査を終了し、歴史教材園として活用できるよう遺跡保存工事に着手することに

C 地区	住居址・二度以上・隅丸方形と円形
E 地区	住居址・五本柱の円形が二度以上・その東に一本柱の円形
F 地区	住居址・橙円形・二度以上
J 地区	住居址・半月形四度以上・倉庫址も一か所
L 地区	住居址・半月形
N 地区	住居址・半月形・二度以上・土坡状ホリカタ
X 地区	住居址・半月形・二度以上・土坡墓
Q 地区	祭祀址・住居址と石組
•	ソトクドと物置址



S 地区 祭祀址・二度以上の住居址

B 地区 ソトクド址と物置址

D 地区 ソトクド址と物置址

W 地区 ソトクド址

M 地区 土塙墓四基以上

P 地区 棚址

U 地区 廃棄場址

これらの遺構に関しては、既に公刊されている諸文献⁽¹⁾に詳細な説明がなされており、また『新修芦屋市史』本篇の叙述や前述した調査経過においても抄録されているので、ここでは諸遺構の所見を簡潔に表で示すにとどめ、実測図によつて遺構を網羅し、出土土器の概況を提示することとした（図34～58・表16～27参照）。

なお、石器・鉄器・青銅器など主要出土遺物の解説は次項に譲る（126～146ページ参照）。

註(1) 武藤・村川・石野・森岡 前掲書

出土遺物 (一) 土器

数か年の発掘によつて出土した弥生式土器は一万点以上にのぼり、完存・完形品一五点、器形や文様によって時期の判明する破片は約一〇〇〇点に達する。これらの資料については、既に報告書に克明に解説されており、

詳しく述べに譲ることとし、ここでは主要な遺構と照応させて、時期・形態の知り得るものを中心に再録しておきたい（図34～58・巻頭図版20・21参照）。

近畿地方の弥生式土器編年は、唐古遺跡の出土資料によつて大きくは畿内第一様式から第五様式に分けられ、これを前・中・後の三文化小期に対比させる場合は、前期—第一様式・中期—第二・第三・第四様式、後期—第五様式となる。畿内第一・第三様式は既に研究史に述べられているように、さらに細分され、前者は古・中・

新の三期に、後者は古・新の二期に分類されている。会下山遺跡で出土した土器の最古のものは畿内第三様式古段階に属するもので、量的には僅少であるが、会下山集落の開発時期を明らかにする。第三様式の土器には壺

・無頸壺・台付無頸壺・甕・鉢・台付鉢・高杯などがあり、細頸壺や水差形土器・大型甕は少ない。回転台の利用によつて口縁部の内外は丁寧にヨコナデされ、壺には櫛描文が盛用されている。器壁や底部は薄くつくられ、器面をヘラによつて磨くものも多い。高杯は円板充填法という特殊な杯底部製作の方法が採用され、台付鉢・台付無頸壺などにも広く用いられている。また、器面成形の手法としてヘラ削りが行なわれ、主として壺・甕などの中の胸部下半にみられ、同時期の山陽地方の土器が胸部下半の内面に行なつている事実と裏腹な点が注目される。

第三様式の新しい段階は、四線文手法の導入によつて特徴づけられるが、会下山では一括資料に乏しく、その分離は必ずしも明確でない。周辺では、尼崎市田能遺跡第四調査区で検出された鋳型ピット内に畿内第三様式の四線文をもたない一群の土器があり、古い段階の様相を知るに恰好の材料といえる。

会下山の第三様式土器は、畿内南部に盛行する櫛描廉状文が全く認められず、畿内北部地域圏の特色が濃厚で、長頸壺の流行、甕・手焙の登場、それに変わる水差

ある。が、いわゆる凸帯文土器によつて代表される地域でもなく、畿内北部西邊に位置する事情から同時期の山陽・北国地方に共通する要素を多分にもつてゐる。

中期末の第四様式土器は、回転台の普及とそれに伴う四線文の多様化・ヨコナデ調整の盛用によつて特徴づけられる。この段階では土器にみられる南北畿内の地域性は弛緩され、畿内全域は広く齊一性をもつようになるが、会下山の土器はやはり畿内北部のまとまりの中で理解される。また、四線文を有しない第四様式として注目される西ノ辻N式は、この近辺の遺跡では存在しないことがわかっている。器種の消長では新たに登場した器台をあげることができる。本様式では神戸市布引丸山遺跡で出土したような大型のものの断片が認められる。

会下山遺跡で最も多く出土している畿内第五様式土器は、技法的にはヨコナデ・四線文の衰退、櫛描文の激減、外面ヘラ削り手法の消滅、叩き目手法・高杯の組合せ成形法の出現によつて象徴され、器種の面では壺の分化、長頸壺の流行、甕・手焙の登場、それに変わる水差

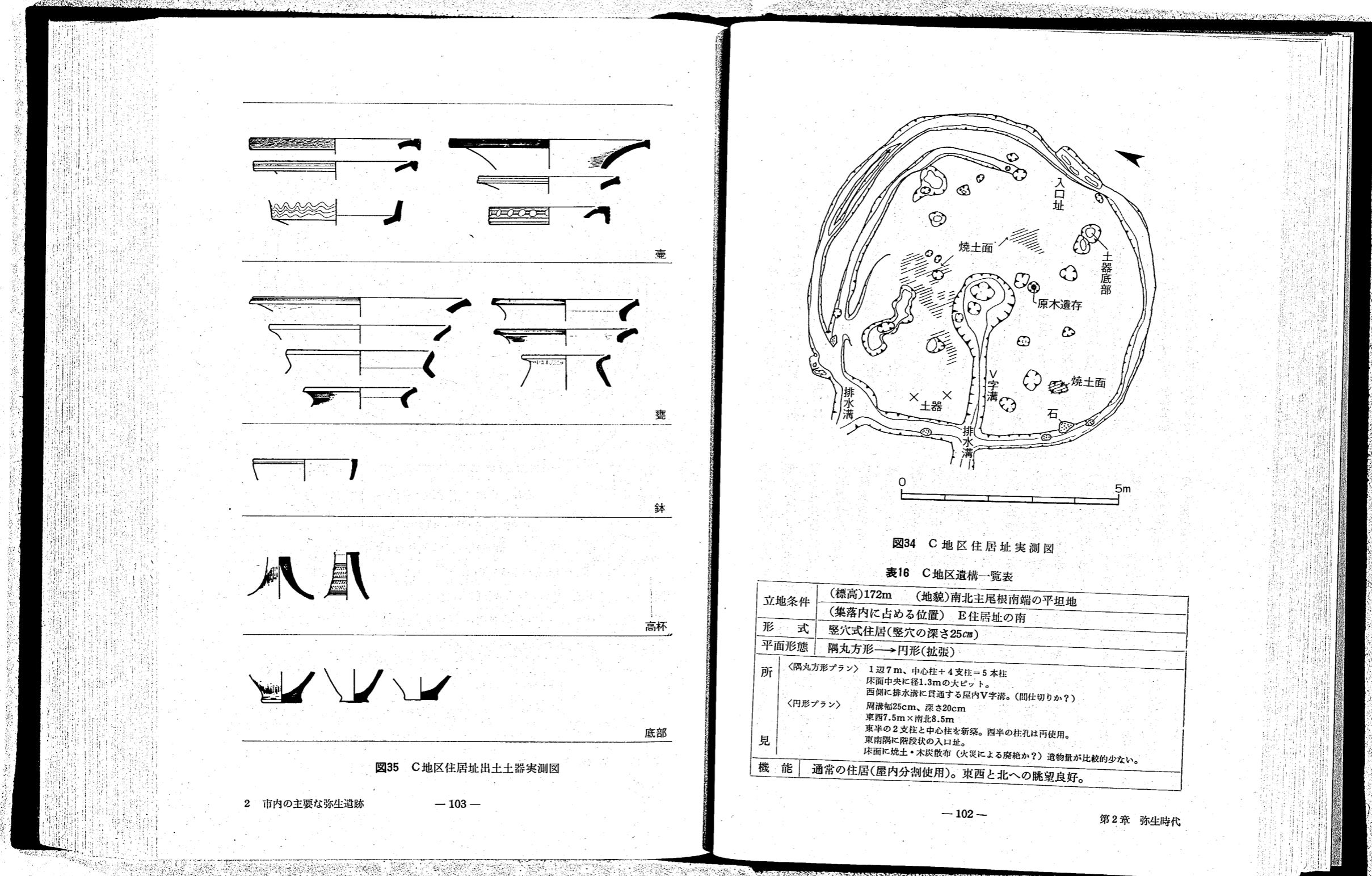


図35 C地区住居址出土土器実測図

2 市内の主要な弥生遺跡

- 103 -

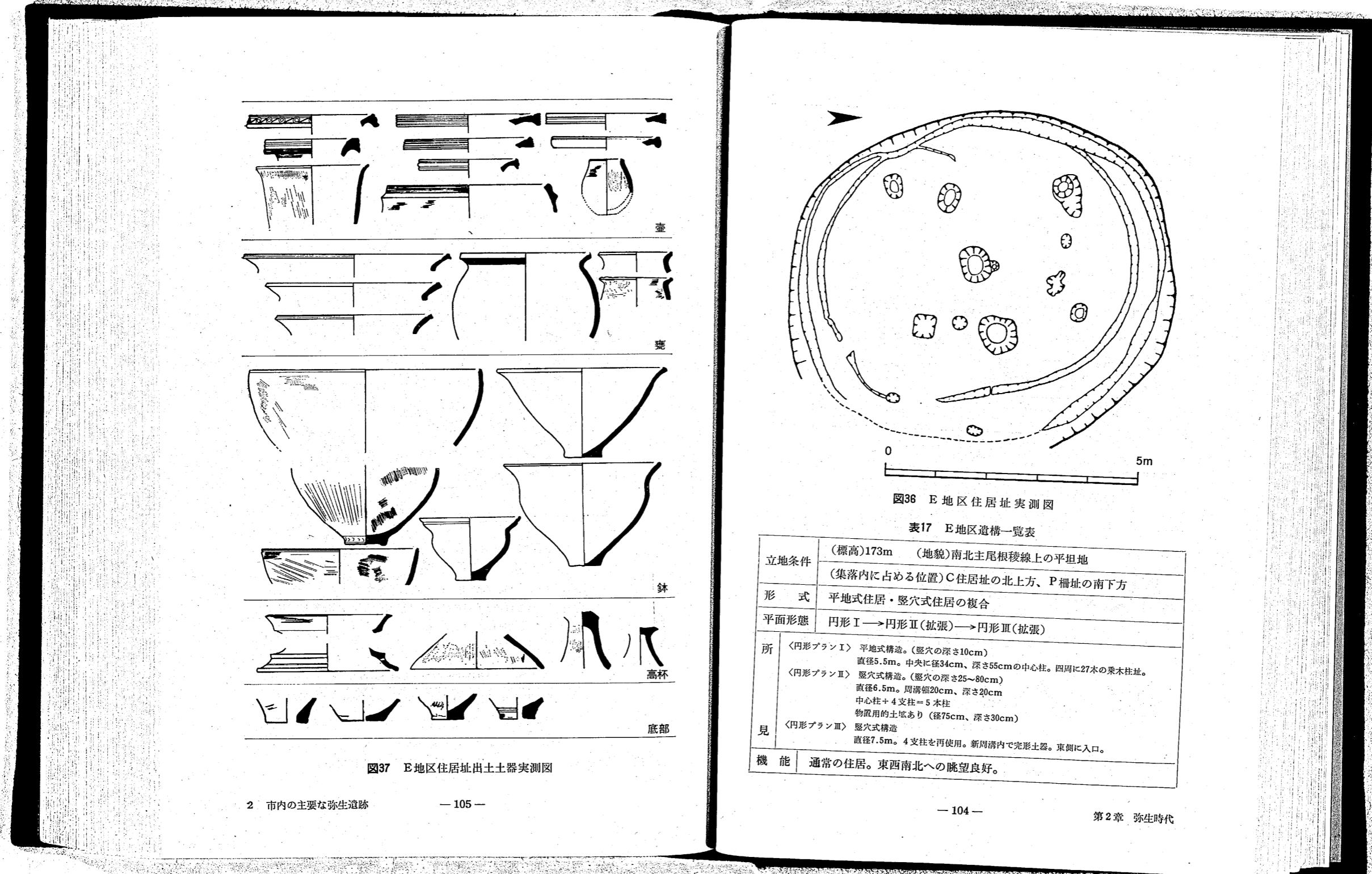
図34 C地区住居址実測図

表16 C地区遺構一覧表

立地条件	(標高)172m (地貌)南北主尾根南端の平坦地 (集落内に占める位置) E住居址の南
形 式	竪穴式住居(竪穴の深さ25cm)
平面形態	隅丸方形→円形(拡張)
所 見	〈隅丸方形プラン〉 1辺7m, 中心柱+4支柱=5本柱 床面中央に径1.3mの大ピット。 西側に排水溝に貫通する屋内V字溝。(間仕切りか?) 周溝幅25cm、深さ20cm 東西7.5m×南北8.5m 東半の2支柱と中心柱を新築。西半の柱孔は再使用。 東南隅に階段状の入口址。 床面に焼土・木炭散布(火災による廃絶か?) 遺物量が比較的少ない。
機 能	通常の住居(屋内分割使用)。東西と北への眺望良好。

- 102 -

第2章 弥生時代



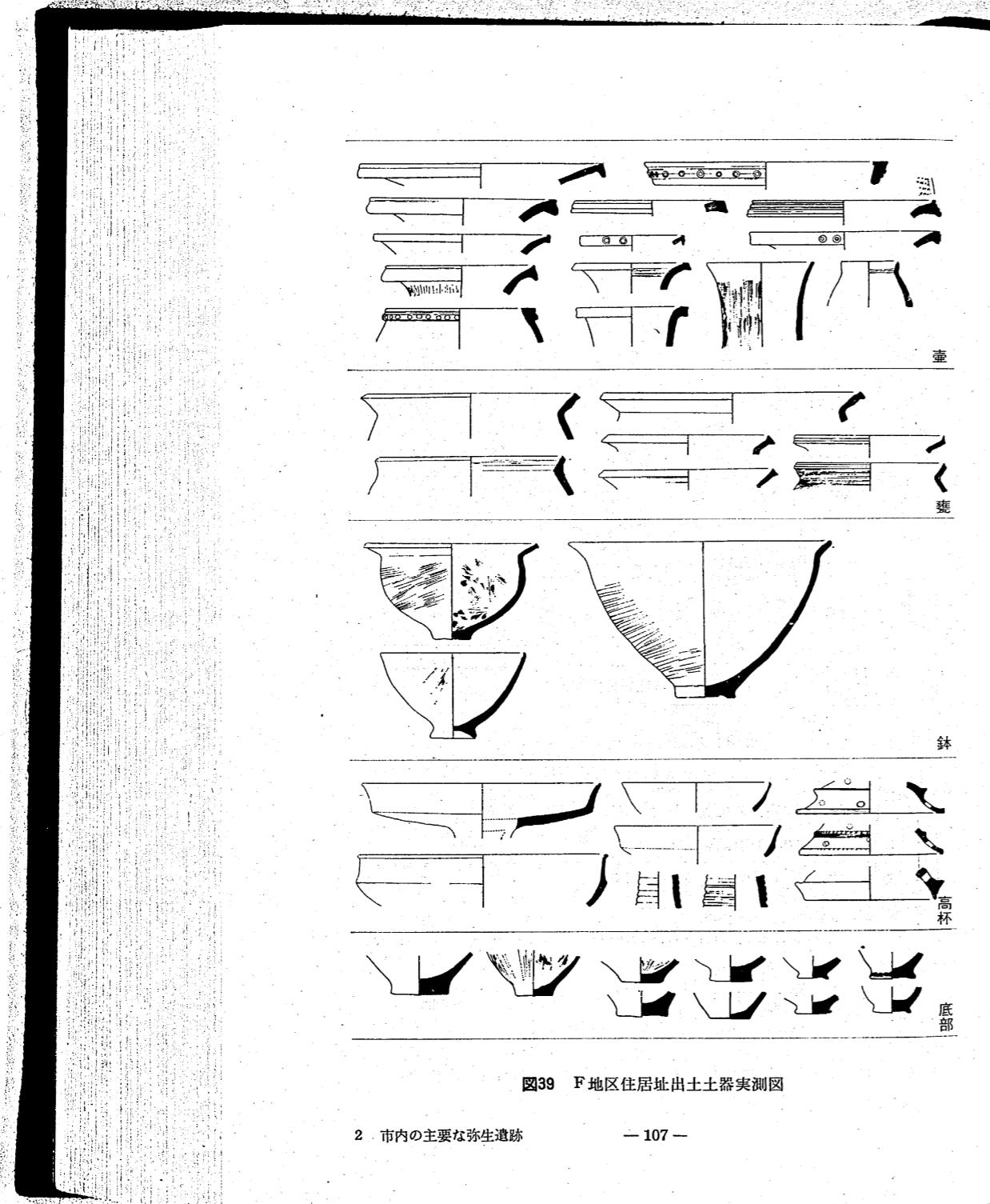
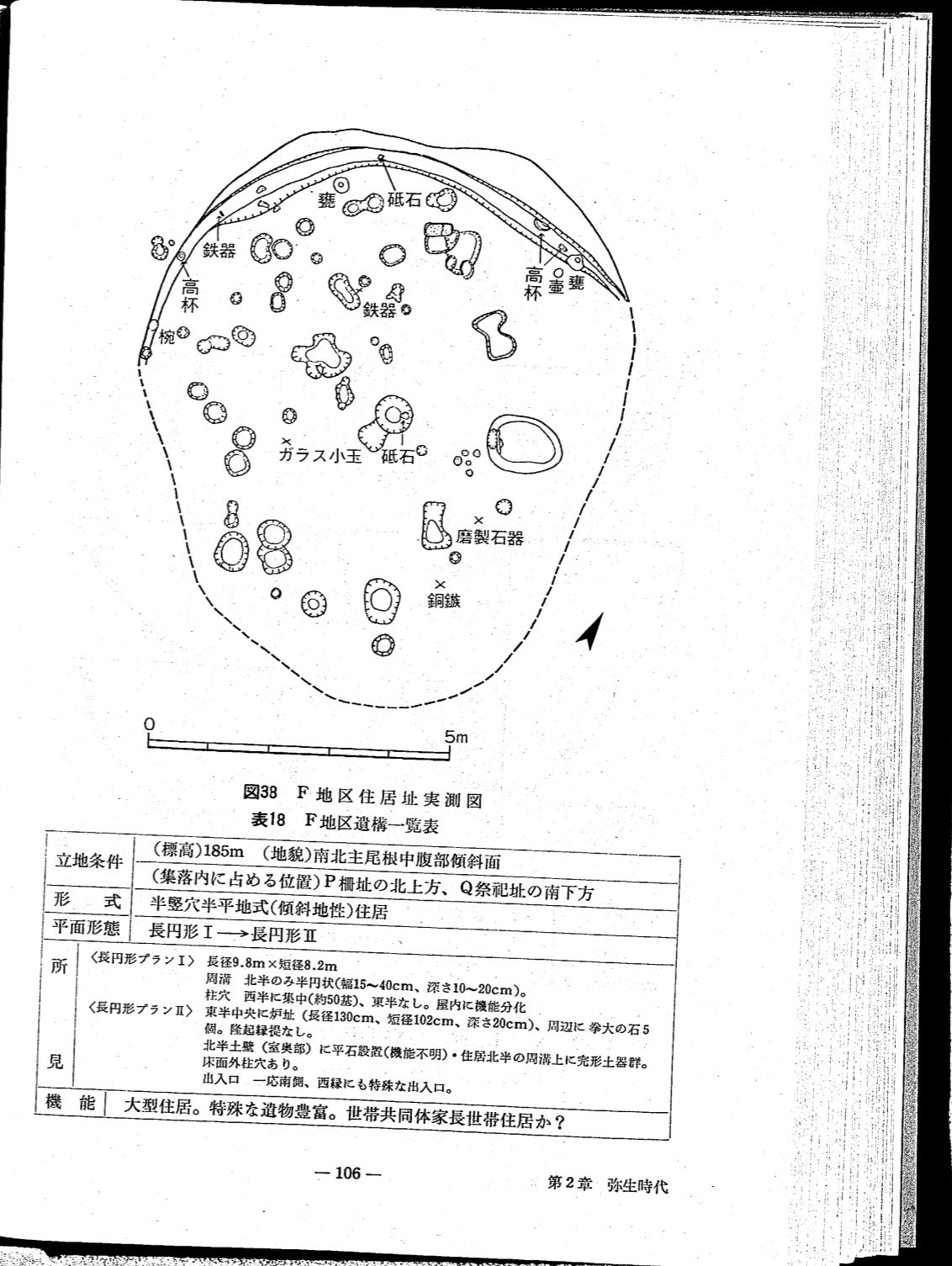


図39 F地区住居址出土土器実測図

2. 市内の主要な弥生遺跡

- 107 -



- 106 -

第2章 弥生時代

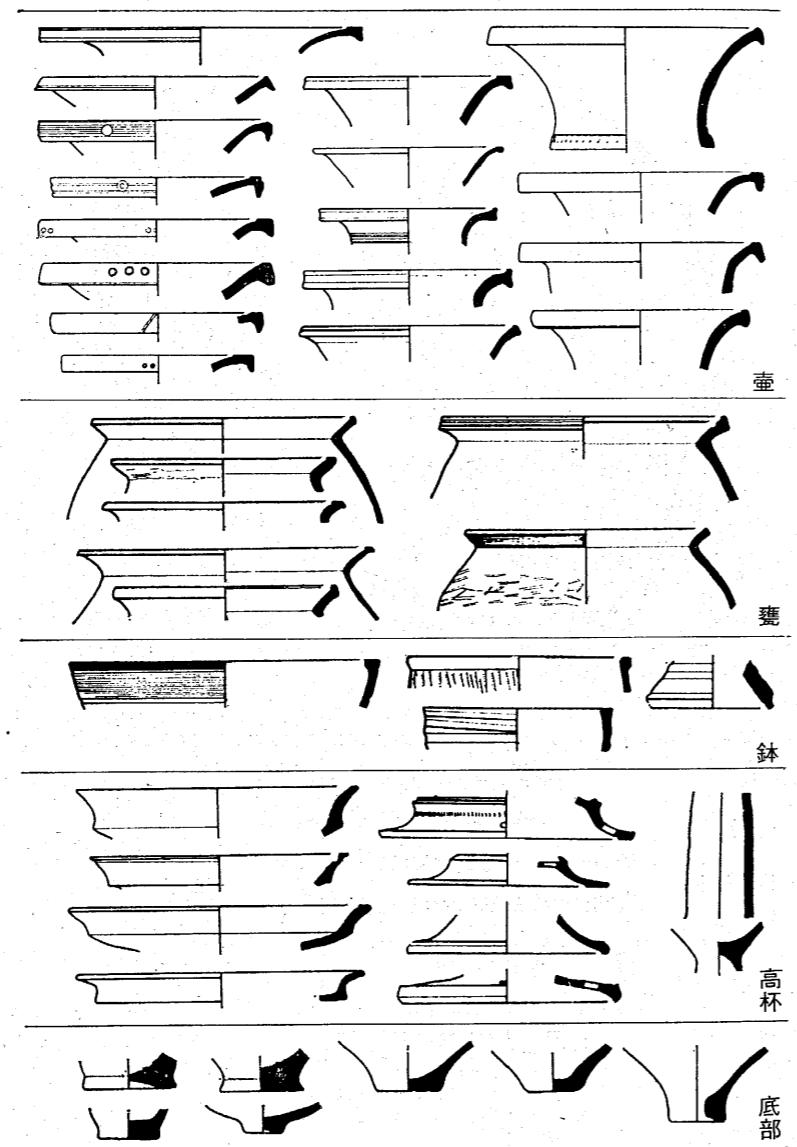


図41 J地区住居址出土土器実測図

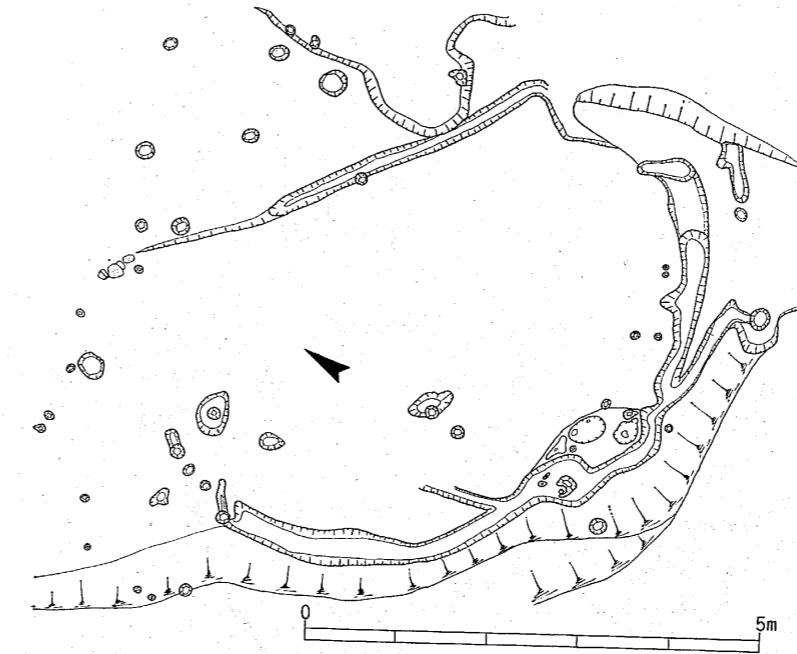
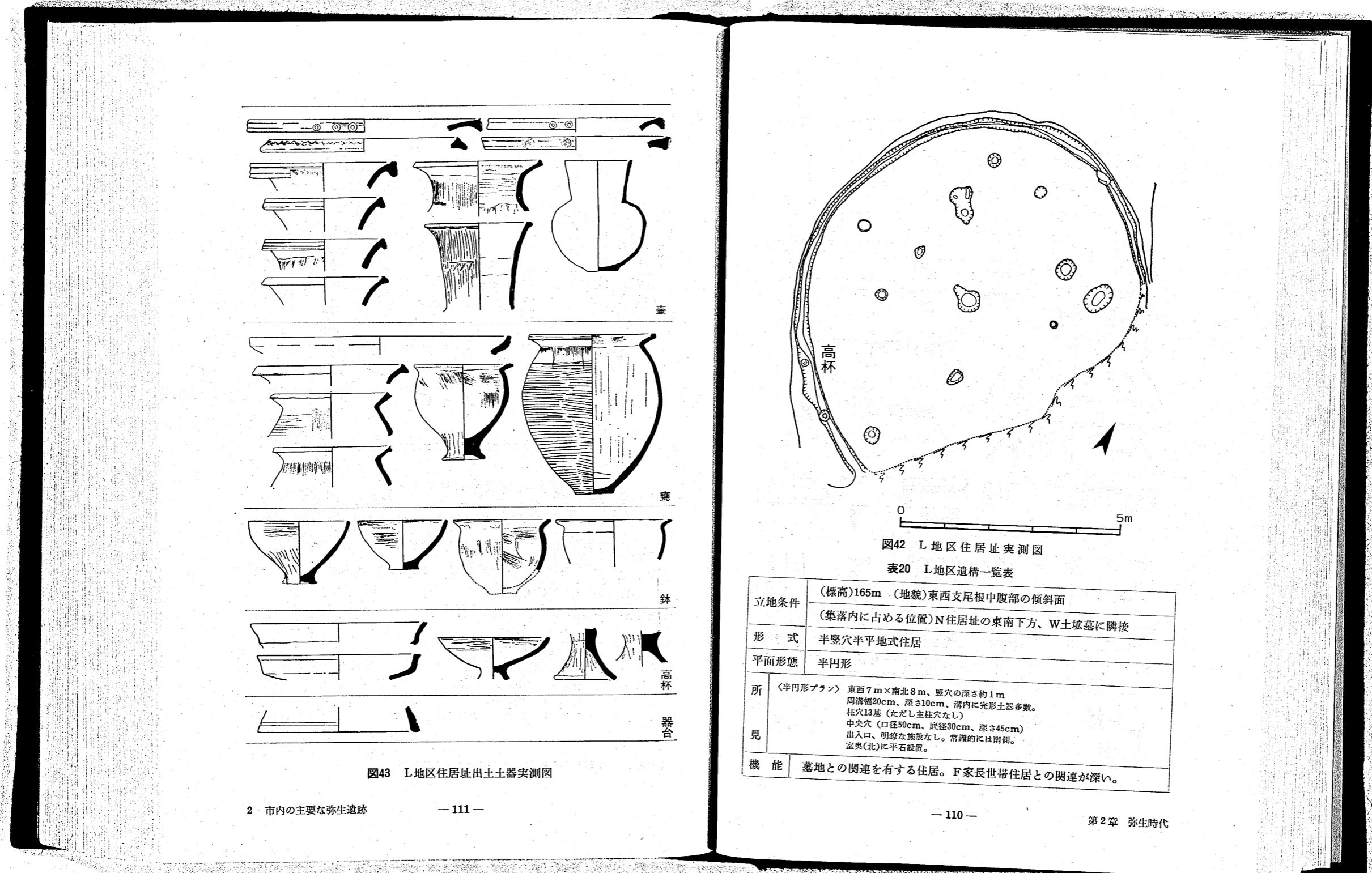
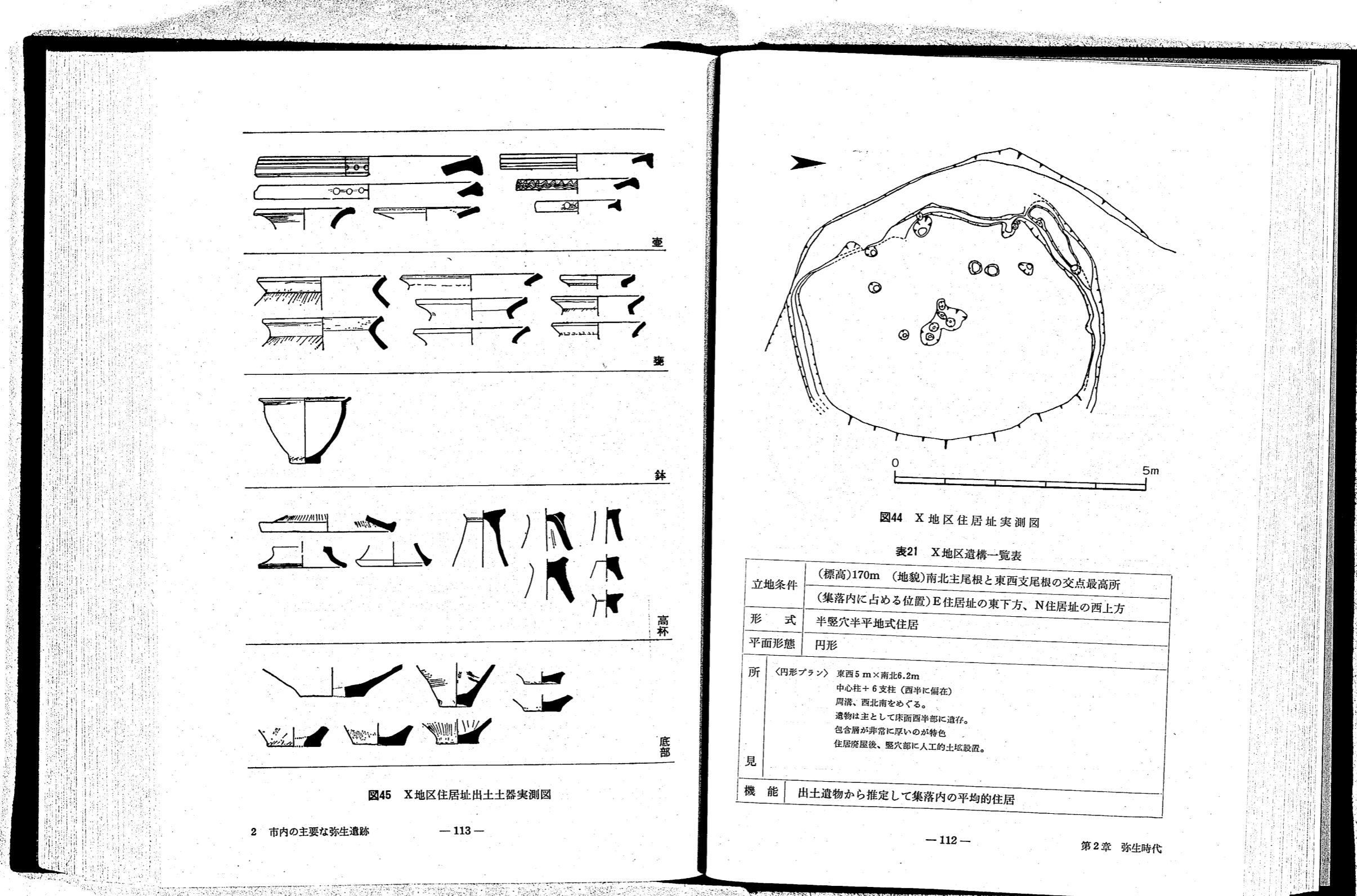


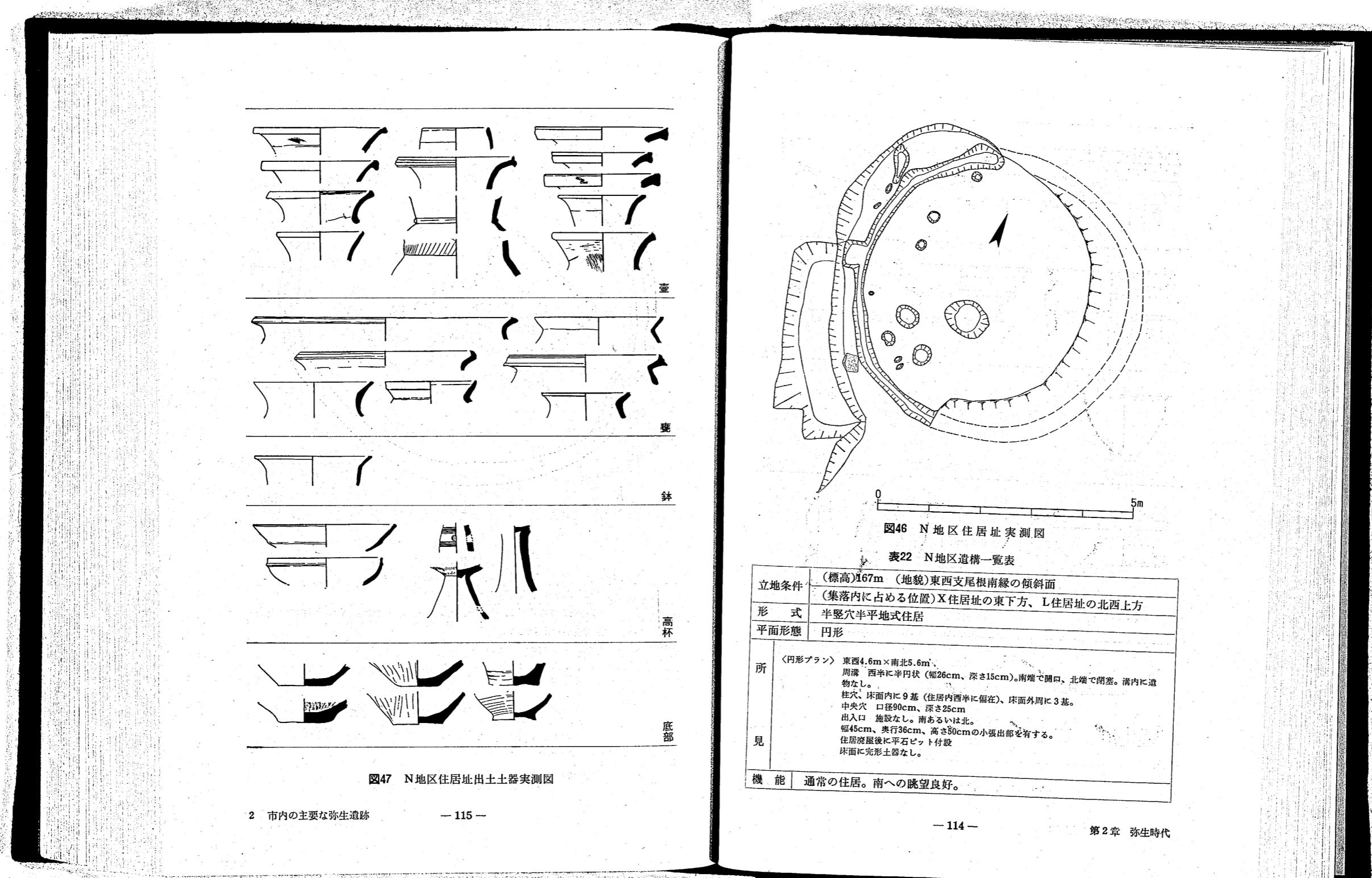
図40 J地区住居址実測図

表19 J地区遺構一覧表

立地条件	(標高)163m (地貌)東西支尾根中央部の平坦地 (集落内に占める位置) U廃棄場址の東下方、W土塚墓の西北上方
形 式	半堅穴半平地式住居
平面形態	半円形 I → 半円形 II → 半円形 III
所 見	〈半円形プラン I〉 長径 7m × 短径 4.6m 竪穴部に周溝 (幅20cm、深さ20cm) 〈半円形プラン II〉 長径 5.4m × 3.4m 〈半円形プラン III〉 長径 7m × 短径 4.5m 北東部に盛土して張床。 柱穴なく、四周围に種木柱址あり。
機 能	倉庫址を含む通常の住居。東側への眺望良好、西側への展望不良。







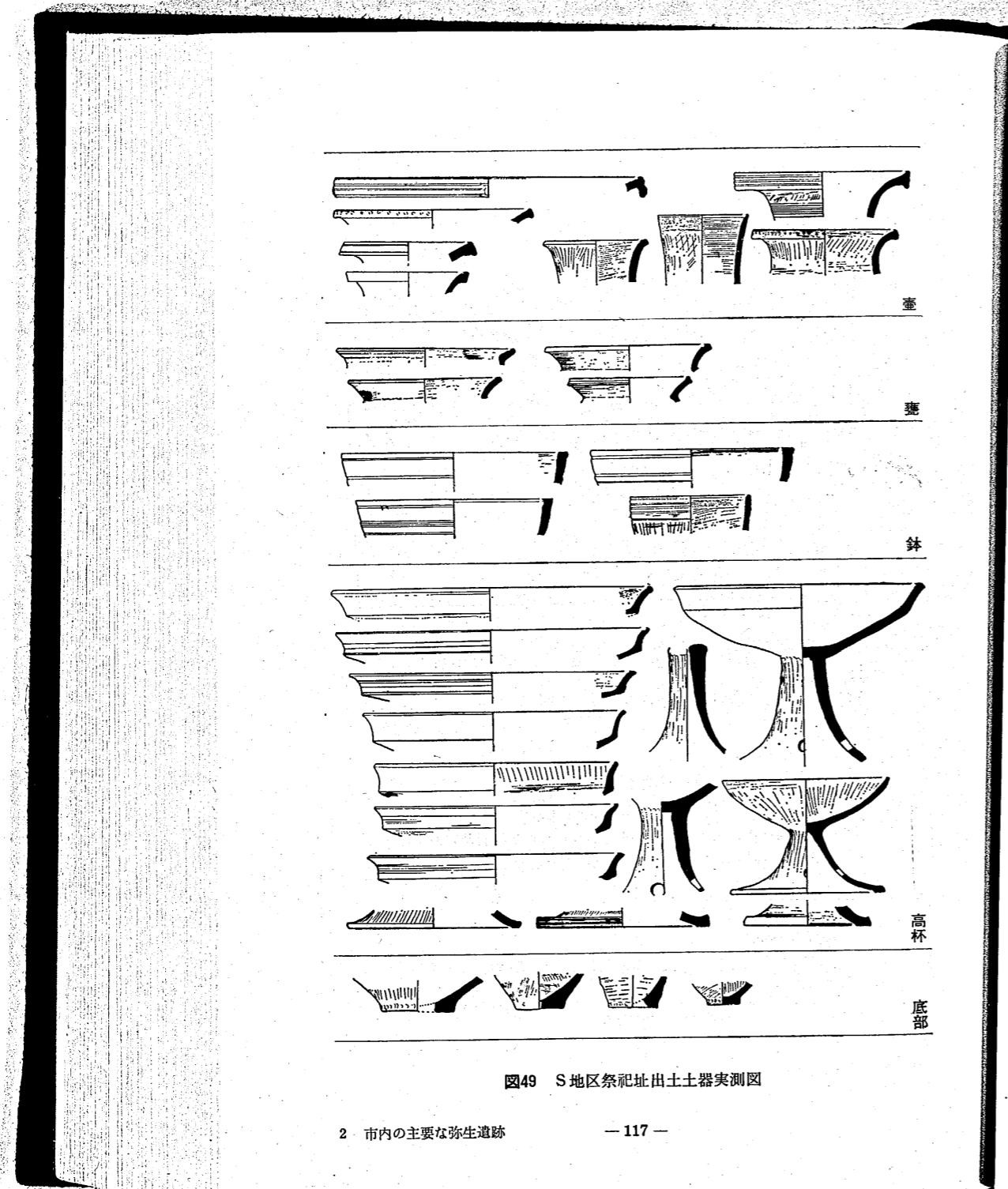
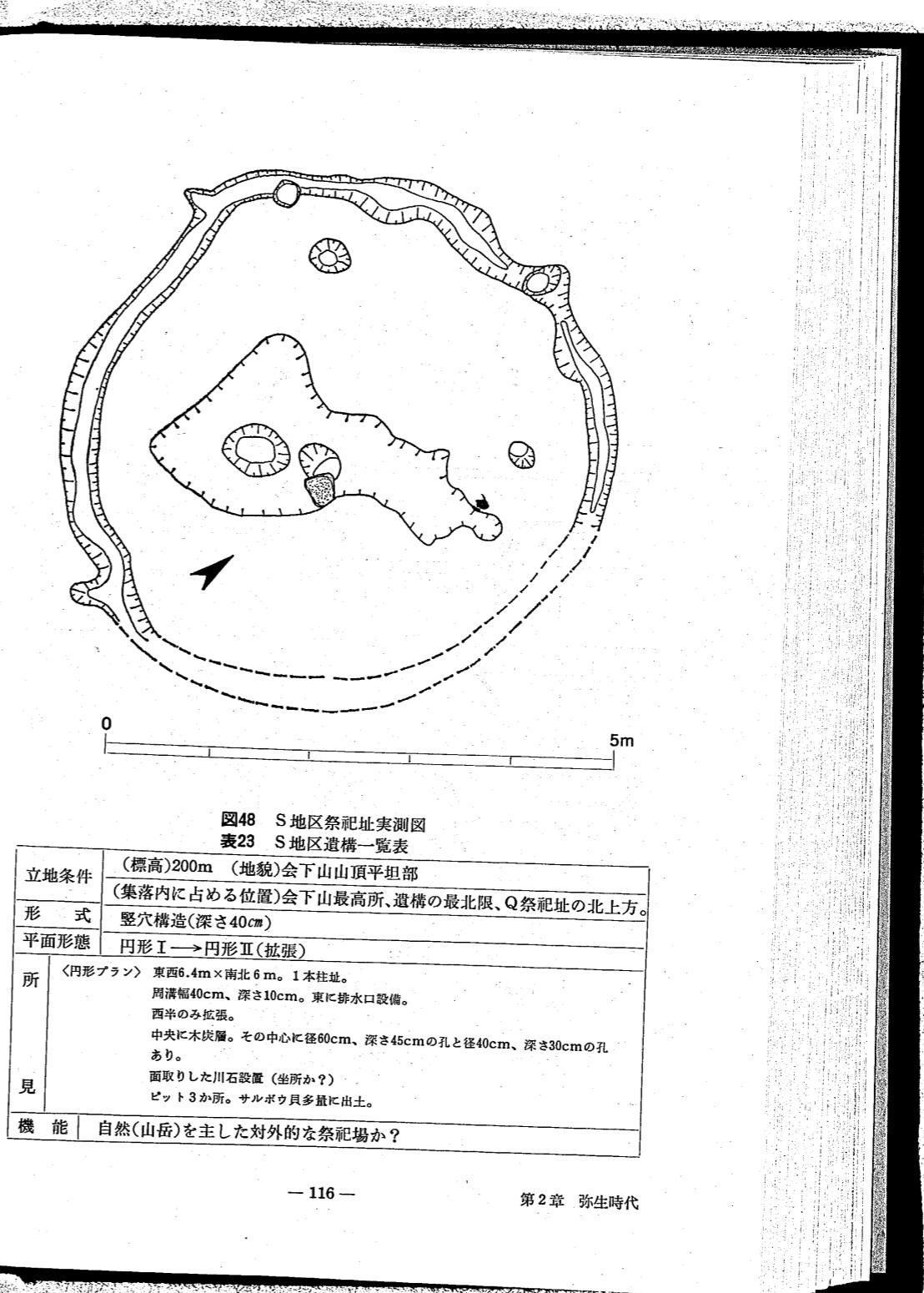


図49 S地区祭祀址出土土器実測図

2 市内の主要な弥生遺跡

— 117 —



— 116 —

第2章 弥生時代

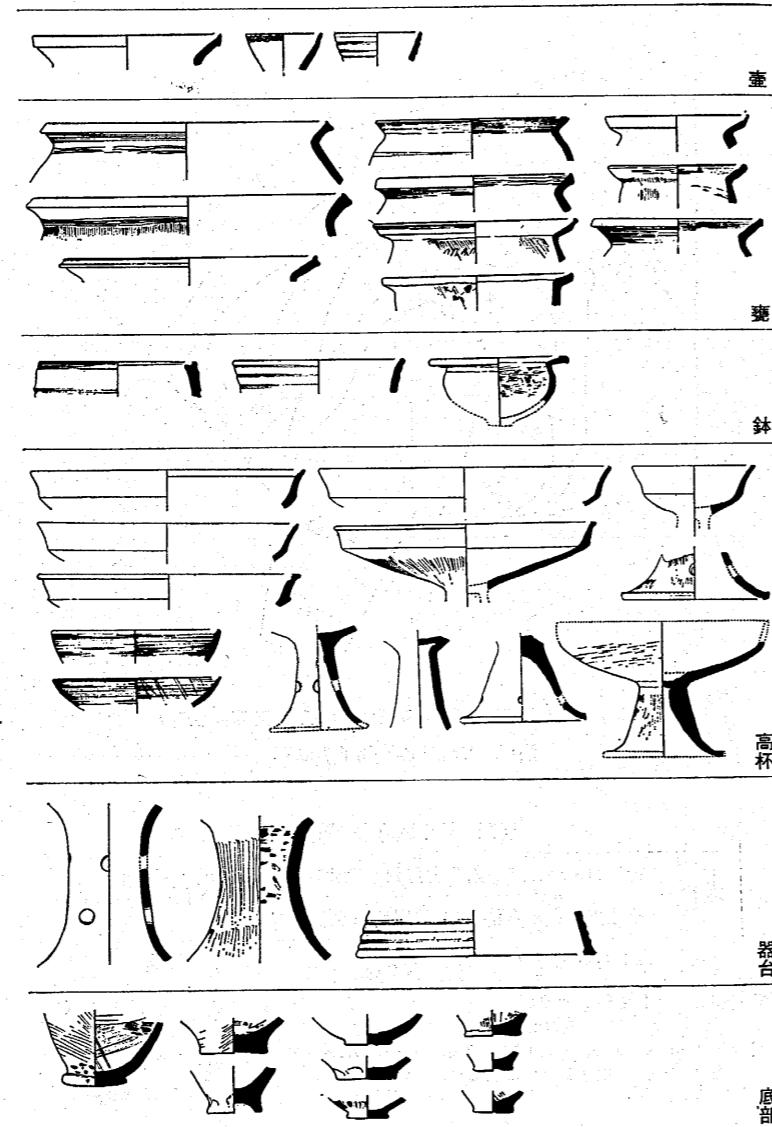


図51 Q地区祭祀址出土土器実測図

2 市内の主要な弥生遺跡

— 119 —

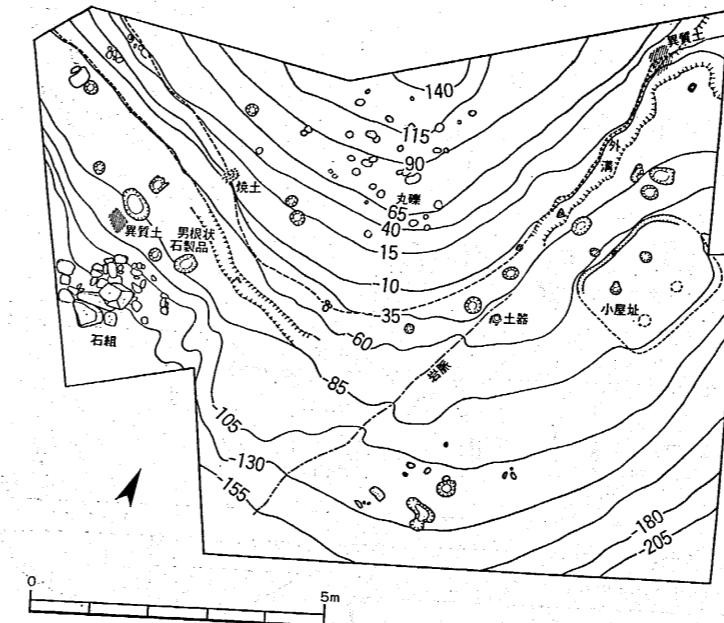


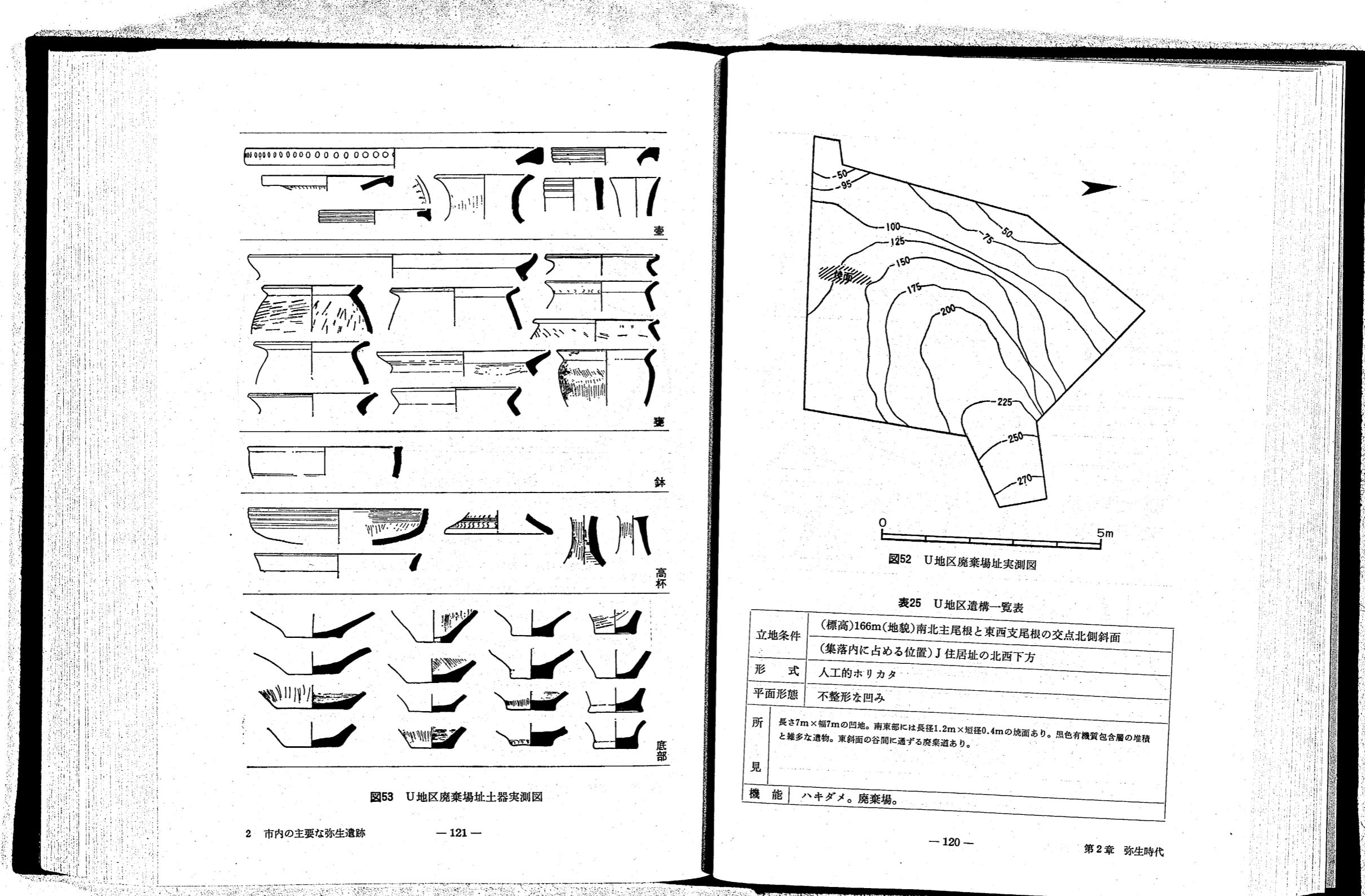
図50 Q地区祭祀址実測図

表24 Q地区遺構一覧表

立地条件	(標高)190m (地貌)中央主尾根山頂南端 (集落内に占める位置) S祭祀址の南下方、F住居址の北上方
形 式	小屋・外溝・石組・丸塚密集地の一連の施設
平面形態	巨大なU字形態
所 見	<p>〈小屋〉 尾根東斜面。1.5×2mの床面。壁体をもたない切上屋。 西辺に幅10cmの小溝。柱穴2か所。</p> <p>〈外溝〉 全長4m。幅20~50cm、溝内に土器群。 球型土製品出土。ピット13基。北端に異質土。</p> <p>〈石組〉 尾根西斜面。拳大から70cm大の自然石多数で構築。 基底部は長辺1.5m×短辺1.2mの方形。高さ52cm。男根状石製品出土。 〈丸塚密集地〉 地面上の東西3m×南北3.5mの範囲に密集。 2~3のピットを使う。</p>
機 能	対内的な祭祀場か?

— 118 —

第2章 弥生時代



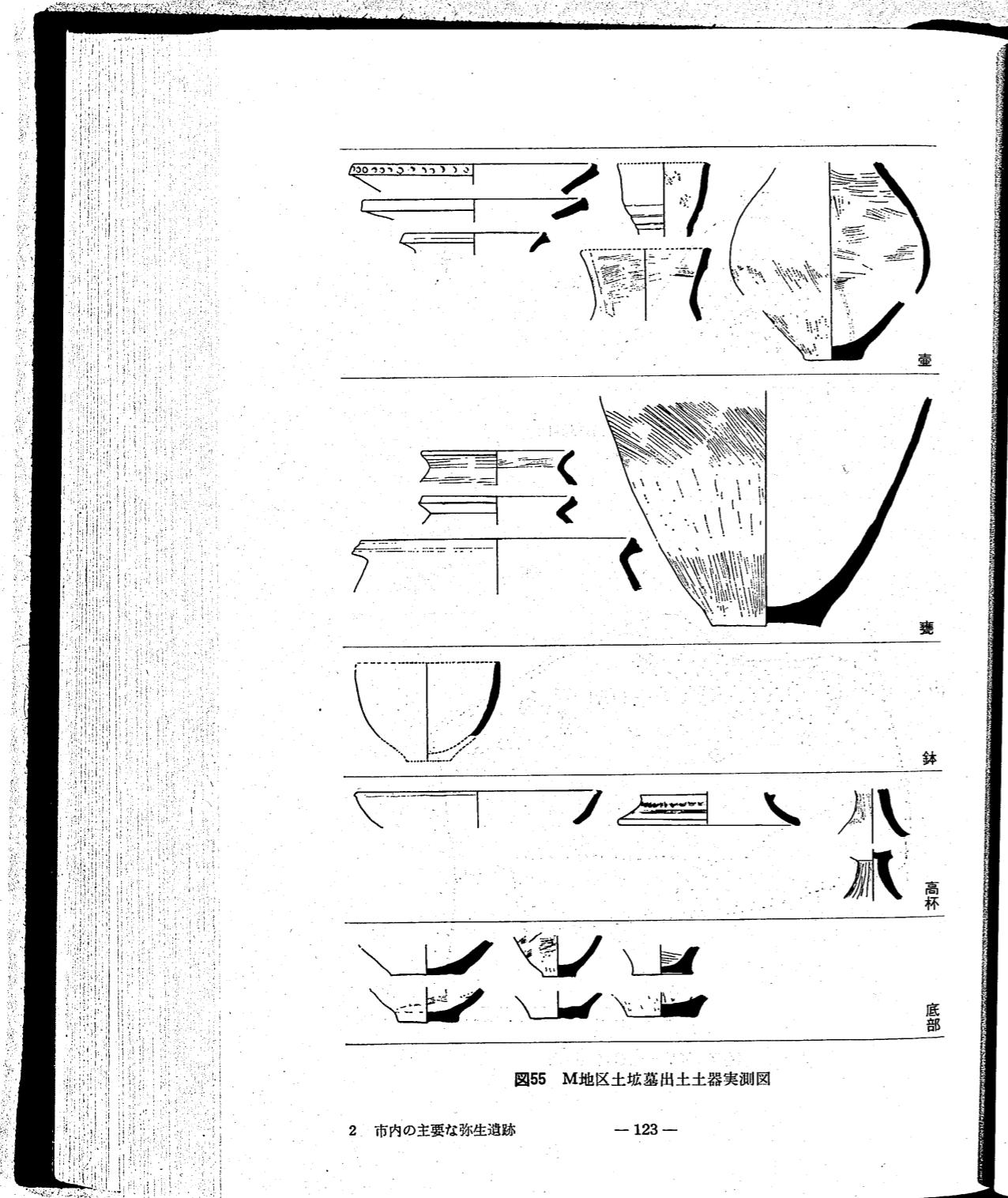


図55 M地区土塚墓出土土器実測図

2. 市内的主要な弥生遺跡

- 123 -

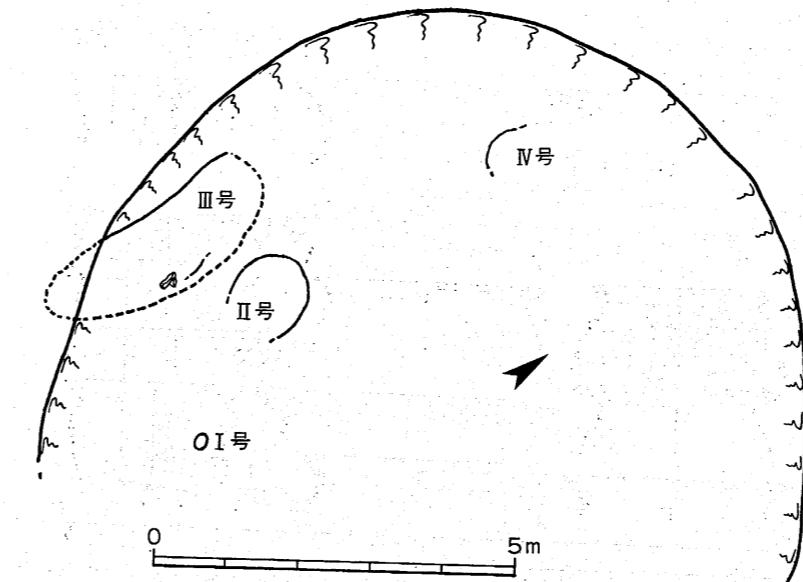


図54 M地区土塚墓実測図

表26 M地区遺構一覧表

立地条件	(標高)162m (地貌)東西支尾根最下端の山腹 (集落内に占める位置)L住居址の東下方
所見	南北8mの範囲内に4基検出
	〈1号土塚〉 北端の一部のみ残存。長円形?。甕が横位、その下よりガラス小玉1点出土。
	〈2号土塚〉 北半のみ残存。長円形。長径2.8m×短径1.0m 深さ35cm。西北—南東に主軸をおく。 直方体の石と甕・高杯など出土。
	〈3号土塚〉 不規長円形。長径3.0m×短径1.2m、深さ60cm 長方形の自然石。
機能	墓域(土塚墓群)

- 122 -

第2章 弥生時代

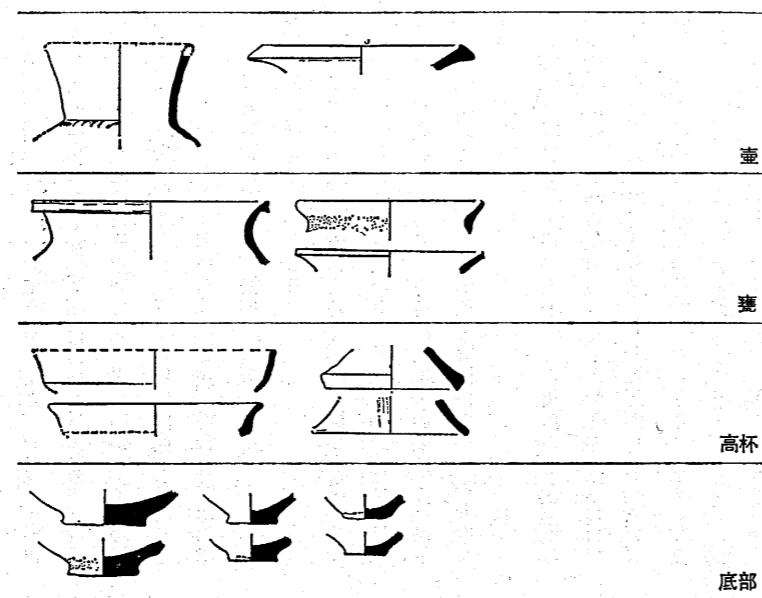


図58 焼土塚出土土器実測図

表27 焼土塚遺構一覧表

立地条件	
(標高) 166m (地貌) 東西支尾根南端 (集落内に占める位置) N住居址の南下方	
所	〈I号焼土塚〉 半壠。長軸東西。長径4.77m×短径2.4m、焼土面4~10cm。 〈II号焼土塚〉 平面形未確認(長円形か?) 焼土層2~4cm。 〈III号焼土塚〉 1.5mの小平頂面。焼土面は部分的。 ※ 塚内堆積の焼土及び土砂を化学分析した結果、多量のリン分が検出されている。 野外の火焚場での動物の調理を推測。
見	
機能	共同炊さんの場。集落の南限を画する。のろし台説あり。

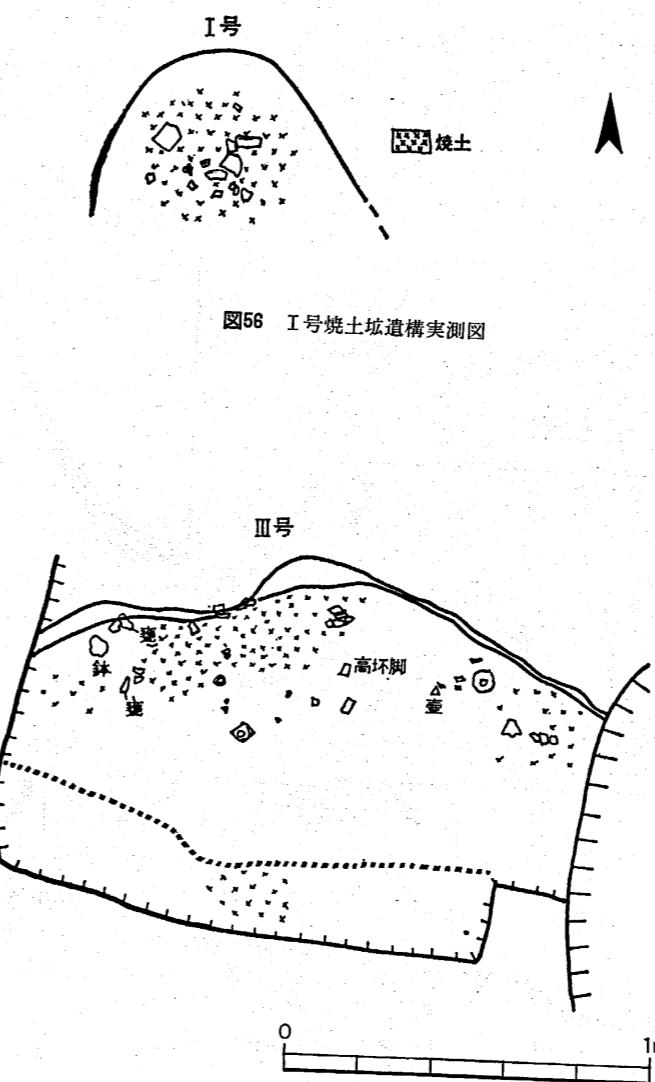


図56 I号焼土塚遺構実測図

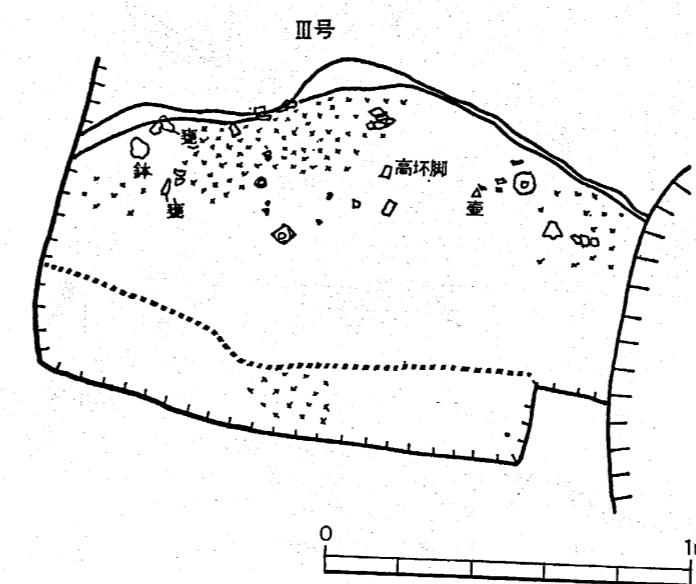


図57 II号焼土塚遺構実測図

無頸壺の消滅などが指摘できる。また、記号文や赤色

彩文の実例に富むのも本様式独自の傾向である。一方で、第V様式の地域性は中期に比べ乏しいが、本遺跡出土土器で一例をあげると、甕形土器には内面ヘラ削りを行なつたものがかなり認められ、これは併行期の西摂津・山陽地方の特性であり、播磨—大阪湾北岸ルートによる技法の伝播が考えられよう。

会下山出土土器は全般にもろく、地下深く埋没する低地性遺跡の保存条件とは異なり、各地の高地性遺跡にく認められる現象である。色調は褐色・赤褐色・黄褐色のものが圧倒的に多く、茶褐色・灰褐色を呈するものも若干含まれている。

土器は形成・定着・終熄など、その集落のもつ変遷の様相や生活様式を知る上で最も重要な普遍的な資料であり、また、会下山では多量に出土した後期の土器が周辺地域との関連で編年の基準となりうる。こうした点に関しては、さらに分析を深め、第4節(274ページ)で細論することにしたい。

(三) 石器

表28 石器器種別出土数一覧表				
細別 大別	器種名	出土数	小計	
打製石器	石錐	23		
	石器	5		
	不定形刃	13	41	
磨製石器	柱狀片刃石斧	1		
	石劍	3		
	石鎌	1	5	
その他の石器	石錐	22		
	彈石	3		
	石丸	8		
	叩頭	2		
	輕河燧	3		
	燧異形石英	6		
	石品加工	35	316	
	サヌカイト	34		
	剥片	1		
総計		199		
			362	

出土した石器は、打製石器として石鎌・石錐・不定形刃器が、磨製石器として柱状片刃石斧・石鎌・石劍などがあり、他に砥石・石錐・石彈・丸石・叩石・輕石・河原石・燧石・サヌカイト剥片・男根状石製品・女陰状石製品なども出土しており、多種にわたり、過去の調査では総数三六二点に及ぶ（表28参照）。

表28 石器器種別出土數一覽表

主体を占めるが、その他の石器のもつ比重もかなり高く、石庖丁が皆無であるという事実とあいまって高地性遺跡独特の構成要素を示している。

また、これらを出土地点別に分類・表示し、遺構ごとの多寡と器種組成をあらわしたのが290ペ

一ジに掲げた表48である。この表に示さ

質表
砂岩
砂
○
○

岩花崗片麻岩について、土器分析のデーターを踏

表29 石 花崗	
ナ カイ ト	ス
○	○
○	○
○	○

西斜面緊急調査に際
しても、石器二点

器種
石刃砥石石石
〔石鋸〕点・石鋸点
が新たに検出されて

表29 石 器 材 質

材質 器種	サ カイ ト	花崗岩 片麻岩	花崗岩 片麻岩	硬砂岩	砂岩	珪岩	綠岩 片	滑岩
石	鐵	○						
石	錐	○						
刀	器	○						
砥	石		○	○	○	○	○	○
石	鍤		○					
石	彈斧		○					○

石器の材質は、サヌカイトと花崗岩に大別され、

は主として利器的なものに、後者は利器以外の器種に多く用される。表29はこれら器種ごとにみられる材質の特性を一覧表にて示してある。

と傾向を明確に示してゐる
石鎚・石錐・刀器はサヌカイトでつくられ、刀器は良質のものを、石鎚・石錐は粗質のものをその素材とす

質のもので、石錐・石彈に特質のある花崗岩等が用いられる。石錐・石彈は花崗岩・花崗片麻岩に限られ、砥石はサヌカイト以外のあらゆる石材を用いている。使用目的

に応じた材質の選別がなされた結果であろう。

打製石鎌　打製石鎌は、緊急調査出土資料一点を加え
て、總計二四点ある（図59参照）。その他に私藏される未確

認の採集資料が数点存在すると伝え聞くので、遺跡 자체の保有量は三〇点をおそらく上回るであろう。住居数に

比してその量が多いことは、大阪湾沿岸諸地域の他の高

- 127 -

表30 石鎌の型式別出土量

形 式	出 土 数
凸基有茎式	7
凸基無茎式	6
円 基 式	0
平 基 式	1
凹基無茎式	4
型 式 不 明	5
総 計	23

四・平基式は遺構検出資料ではなく、うち四点は会下山麓山手中学校グランド採集品であり、残る一点も西斜面地域出土品である。前者は形態のみならず、石質の点においても相違がある。すなわち、尾根部形態的には多様であるが、形式分類すると比較的まとまる（表30参照）。すなわち、凸基有茎式・凸基無茎式などいわゆる凸基式群石鎌が全体量の過半数を占め、凹基無茎式が四点存在してそれに続く。円基式・平基式などの中間形態は皆無に近く、平基式一点を数えるにすぎない。基部や先端部が欠損しているため、形式不明とした資料の多くも、形態上凸基式群の範疇に属するとみられる。最近、説かれているところでは、これらは武器としての役割をも十分果すものである。

四・平基式は遺構検出資料ではなく、うち四点は会下山麓山手中学校グランド採集品であり、残る一点も西斜面地域出土品である。前者は形態のみならず、石質の点においても相違がある。すなわち、尾根部形態的には多様であるが、形式分類すると比較的まとまる（表30参照）。すなわち、凸基有茎式・凸基無茎式などいわゆる凸基式群石鎌が全体量の過半数を占め、凹基無茎式が四点存在してそれに続く。円基式・平基式などの中間形態は皆無に近く、平基式一点を数えるにすぎない。基部や先端部が欠損しているため、形式不明とした資料の多くも、形態上凸基式群の範疇に属するとみられる。最近、説かれているところでは、これらは武器としての役割をも十分果すものである。

四・平基式は遺構検出資料ではなく、うち四点は会下山

ず、石質の点においても相違がある。すなわち、尾根部

出土の石鎌に比べかなり良質であり、著しくパティナ

を帶びている。また、技法的にもステップ・フレイキン

グが全くみられないという特色をもつ。これらは全下山

集落と直接関連する遺品ではなく、鎌型鎌の存在などか

ら、むしろ縄文時代に属するものと考えた方がよい。

これに対し、後者の西斜面出土の平基無茎式石鎌は、両

側辺及び基辺の調整にフリー・フレイキングを多用しな

がらステップ・フレイキングを併用しており、明らかに

弥生式石鎌の様態を示す。多数の凸基式群の中にある唯

一の凹・平基式石鎌として会下山では稀少価値をもつ。

会下山遺跡に凸基式群石鎌が数多くみられるのは、防塞的集落としての高地性遺跡特有の性格と弥生中期後半以後前半に當まれたという時期的様相が大きく作用しているものと思われる。

これらの石鎌を別角度から分析してみよう。表31は完形の石鎌二点を対象に、その長さと幅との比を表わしたものである。グラフの斜向する直線は、石鎌の幅を一

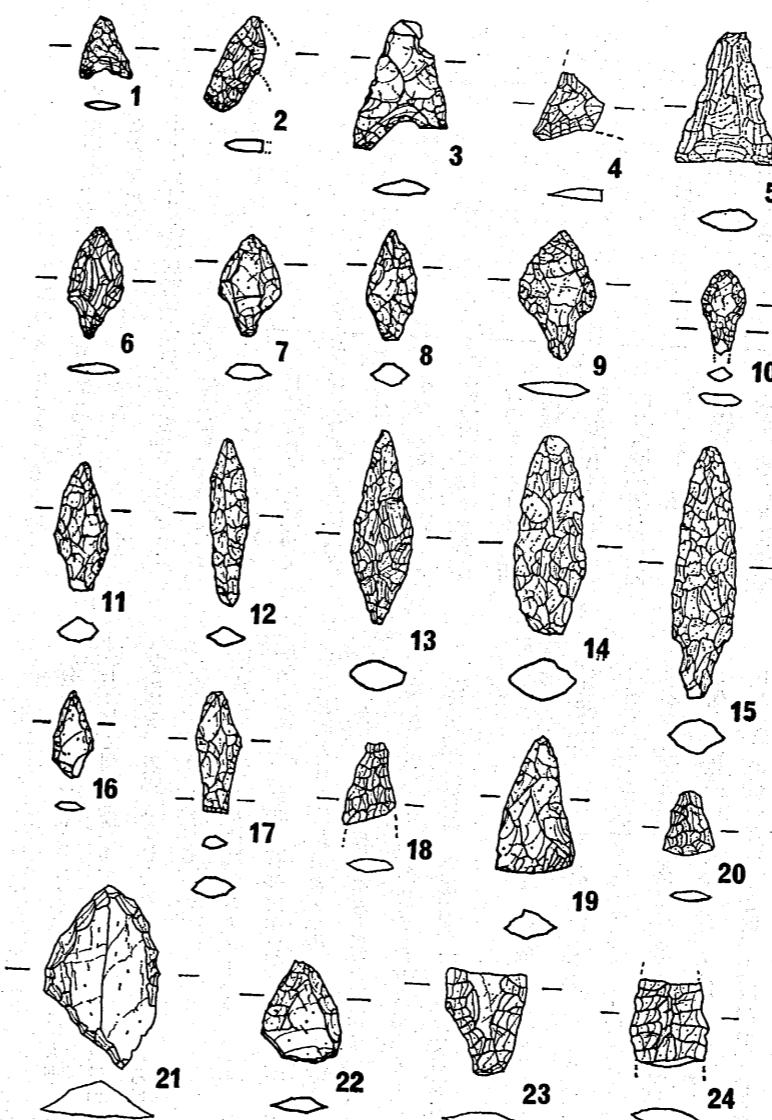
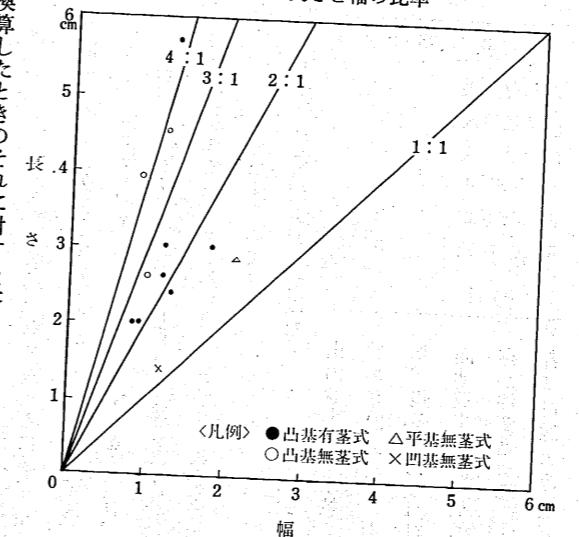


図59 打製石鎌実測図（縮尺2/3）
 1～4 会下山山麓部 5 西斜面 6・11・12・18 N住居址 7・8・14・17・23 J住居址
 9・21 F住居址 10・13 E住居址 15 C住居址 16 S祭祀址 19 平石ピット 20・22 X住居址

表31 石鎌の長さと幅の比率



に換算したときのそれに対する長さの比率を示し、本表では一対一・一対二・一対三・一対四の四本を記入している。完形品の個体数は、凸基有茎式七点・凸基無茎式三点・平基無茎式一点・凹基無茎式一点である。

この表をみて明らかのように、本遺跡で最も長い石鎌

性ともいすべき形態・機能をもつた石鎌といえよう。

石錐
E住居二点・X住居二点・西斜面地域一点の計

五点が出土している（図60参照）。いずれも粗質サヌカイト製で、頭部と細長い錐部とから成り、大半は錐部が欠損している。前二者は頭部のつくり出しが顕著であるが、西斜面出土資料はそれを峻別する程度である。全体的に薄手のつくりをなすものが多い。

不定形刃器 『報告書⁽¹⁾』では、単に「刃器」として扱

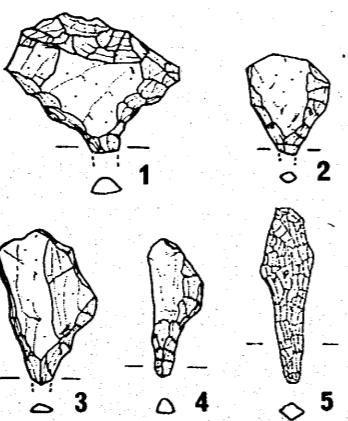


図60 石錐実測図（縮尺 $1/2$ ）
1・4 E住居址 2・3 X住居址
5 西斜面

つたが、ここでは最近の慣用にしたがって不定形刃器の名称を用い、主要なものを再実測し、分析・検討を加え、説明することにした（図61・巻頭図版22(2)参照）。加茂遺跡では「刃器」・「剥片石器」、田能遺跡・池上遺跡では「不定形刃器」、紫雲出山遺跡では「不定形打製石器」と各々異称されている類の石器と同種のものである。個々の石器の客観的データーは表32に示したとおりである。

(1)は不整橢円形のかなり分厚い石器で、重量もこの中では最大値を占める。A(左)・B(右)両面とも大剥離面を残し、B面中央の剥離面は凹む。刃部は剥片の頂部にステップ・フレイキングによってつくり出し、反対側の末端部には刃潰しを行ない、刃器として完成された形態をもつている。

(2)はA面を主として調整・加工し、B面には大剥離面を残す薄い剥片石器である。片面加工に近い。剥片の末端には突起部があり、主としてB面側からその両側にステップ・フレイキングを加えて整形・調整している。

一方、剥片の頂部側は同じくB面側から擊打するフリ

はC住居址出土の凸基有茎式石鎌で、全長五・七センチを計る。最も短いものは、山手中学校グラウンド採集の凹基無茎式石鎌で、全長わずか一・四センチである。そしては平基式が最大（二・一センチ）を測り、最小のもの（○）は九センチ）は凸基式が三点を占めている。幅はそのほど

とんどが一センチと一センチの間に入る。

一方、石鎌の長さと幅との関係をみると、大部分が一対二を前後する付近を指向する。とくに凸基有茎式に属するものにその傾向がみられる。ただし、一対四の比率を上回る長大なものや、一対一に近くなる短小のものもあり、後者は四・平基式群に限られ、他遺跡の様相に等しい。凸基無茎式に属する二点は比率一対四を前後し、川西市加茂や豊中市勝部・尼崎市田能など西摂平野低・台地部の諸遺跡の傾向とやや異なる。

このように、凸基式群石鎌は形式的には同じであつても、明らかに二つに大別でき、長大な形状のもの（比率一対四）は会下山遺跡独特の、あるいは高地性集落の特

表32 不定形刃器観察表

図面番号	出土地点	石質	大きさ(cm)	重量(g)	備考
1	C 住居址	サヌカイト	6.2×5.1	46.0	
2	"	"	3.9×3.4	6.0	石錐の可能性あり
3	J 住居址	"	4.3×2.6	5.5	
4	X 住居址	"	6.4×2.9	17.5	
5	J 住居址	"	4.0×2.8	5.2	石匙の可能性あり
6	"	"	6.5×3.0	29.8	
7	S 祭祀址	"	3.1×3.2	8.5	打製石庖丁の可能性あり
8	J 住居址	"	6.8×4.2	38.6	
9	不	"	6.9×3.4	16.7	

はB面に著しく、一侧辺はステップ・フレイキングを多用し、他の一侧辺はそれに先行してフリー・フレイキングの技法を用いている。刃部はかなり摩耗し、剥離面の稜がまるくすり減つて直線刃に近くなっている。

(5)は重量五・二グラムを測る軽量小型の石器で、短辺の一端につまみをつくり出した石匙状の刃器である。非常に薄い縦長剥片を加工調整したもので、両面に大剥離面を残し、B面では剥片の末端に明瞭なリングが認められる。二次加工による刃部のつくり出しは、B面から打撃を加えて長辺の左側辺と短辺の下端側をチッピングし、A面からの剥離はつまみのくびれ部など局部的で、刃部の調整剥離は非常に細かくして仕上げられる。つまみの上半部とA面の右側縁上方の一部が損傷している。

(6)は厚さ一・〇センチを測るかなり厚手の不定形刃器で、剥片の頂部にあたる側の一側辺を未加工のままにして自然面を残す。両面は大剥離面を形成し、相当厚い原石から剥ぎとられたことを示し、その打撃方向は剥片の左右上方より行なわれたことがわかる。刃部への加工

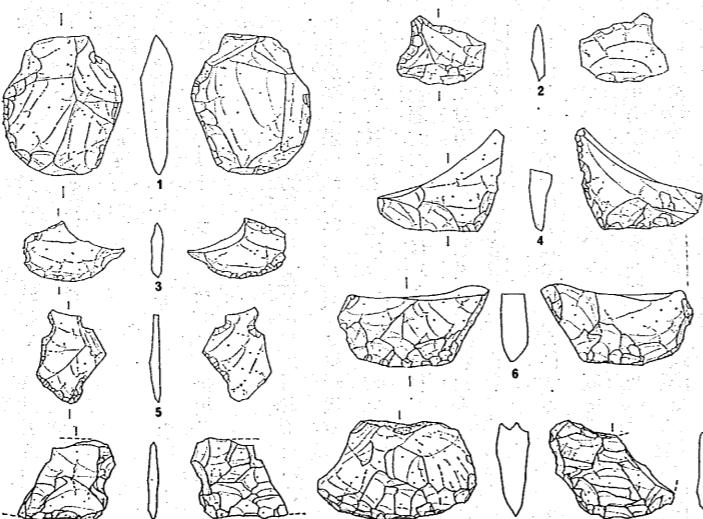


図61 不定形刃器実測図(縮尺1/3)

・フレイキングの痕跡を残している。突起部の先端は欠損しており、旧報告書(1)どおり刃器の部類に分類したが、頭部をつくり出した形式の石錐の可能性が強い。

(2)同様、重量が軽く、薄く横に剥ぎとられた剥片を利⽤して、ほぼ全周に適当な間隔で刃部をつくり出した石器である。調整加工はステップ・フレイキングを盛用しつつ、フリー・フレイキングを併用しており、両面加工している。強い打撃は主にB面から行なったようであり、とくにA面の突出部にそれが著しく認められる。

刃部の使用痕は比較的顯著で、部分的には突出した稜と稜の間の凹んだ部分にも摩耗の跡がみられ、対象物が木材のごときかなり軟質なものであり、それに対して擦るように使用されたことが考えられる。

横長剥片を利用した二等辺三角形状を呈する(4)は、その底辺に相当する部分に剥片の頂部があり、二辺に当たる部分、換言すれば剥片の末端に刃部がつくり出されている。頂部は厚く、末端部は極端に薄い。刃部の調整

は、B面から主としてフリー・フレイキングを用い、A面からはステップ・フレイキングが盛用されている。その結果、刃部は両面加工でつくり出されていながら、A面側が鋭利で、B面の側は階段状にかなり鈍いつくりとなっている。細部加工は徹底せず、とくにA面は一次加工の剥離面をそのまま利用して刃としている。

半分を欠く⁽⁷⁾は、薄く剥ぎ取られた横長の剥片を素材とした長方形を原型とする石器の一部とみられ、A面には大剥離面を残している。長辺にB面側からフリー・フレイキングによって刃部をつくり出し、若干調整剥離を加えて片面加工で仕上げられている。短辺には紐かけのくり込みとも考えられる切り込みが認められ、紫雲出山遺跡の報告⁽⁵⁾でⅢ型に分類されているような小型の打製石庖丁の可能性が高い。会下山遺跡では磨製・打製を問わず農耕関係の生産用具に乏しいが、もし打製石庖丁ならば、その分布の東限を示すこともなりへ重要である。

(8)は良質の重厚なサヌカイト剥片の末端部にステッ

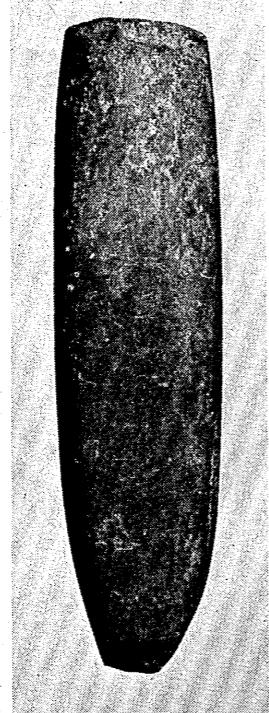


写真18 柱状片刃石斧
(縮尺1/2)

柱状片刃石斧 長さ二〇センチ・幅二・五センチ・厚さ四・五センチを測る長大な石斧で、綠泥片岩製である(写真18参照)。L住居址の北溝より出土したもので、一面を凸レンズ状に曲面をもたせ、他面をやや凹状に平坦につくり、断面はカマボコ型を呈する。抉りのない形式のもので、刃部を両面から研磨して両刃をつくり出しているが、彎曲に若干の相違がみられ、着柄に際しては、どちらか一方の面が意識されているものと思われる。頭部側邊に整形時の研磨痕が残り、その上さらには打痕が認められる。着装に関係する痕跡かもしれないが、詳細は不明である。刃腹部にも擦痕と使用時の損傷

があり、刃部先端は刃先を欠いている。刃部は全体に滑沢を帯びるが、最もふくらむ部分においては器面が荒れている。使用法を示唆する痕跡といえよう。

磨製石劍 全部で三点出土している。すべて破片で石劍片と考定し難いものもあるが、石材節理に沿う稜線を根拠に一応石劍の一部と推定した。C・E・Jの各住居址からそれぞれ出土している。

磨製石劍 一点は砂岩製で、側縁に沿つてわずかに稜が認められる。裏面は中央をやくばませる。縁辺部の断片と思われる。もう一点は粘板岩製で剥離しやすい。他は单なる石板の断片であるかも知れない。いずれも鉄剣型に比定できる。

磨製石劍 F住居址内黒土上層より一点出土している。凸基有茎式の打製石鎌の形態を大型

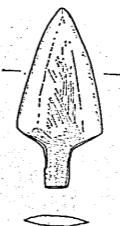


図62 磨製石鏃
(縮尺 $\frac{1}{2}$)

化していねい
に整形した優品
である(図62参
照)。鏃身は扁

平で中央部に稜をつくり、側縁及び先端部中央にかすかな稜線を残す。表面は平滑に仕上げられ、滑沢があり、とくに縁辺部の調整は鋭く行なわれている。茎部も薄くつくれられ、表裏両面とも横方向の纖細な擦痕が著しい。擦痕は身部の基端と一部中央平坦面にも認められ、このか所では斜方向となっている。使用痕というよりも研磨痕といふべき性格の痕跡であるが、あるいは柄の着装と関係して残されたものかもしれない。全長五・一センチ、最大幅二・四センチ、身部の長さ四・〇センチ、茎部の長さ一・一センチ、茎部の幅〇・六センチ、厚さ〇・三五センチ(最大)・重量四・七五グラムを計測する。良質サヌカイト製で、漆黒色を呈し、器面は硬く緻密である。

砥石

砥石は、石質と大きさ、すなわち使用目的によ

から出土しており、E・Jには二点存在する。E住居址出土の一点は表面に顕著な平行条線が残り、鉄器の製作を推測せしめる。B類は、F・C・J・Lの各遺構からそれぞれ一点出土し、F・L両住居では床面に密着して検出されている。材質はA類に等しく形態のみ、ひとまわり大きい。ただし、緑泥片岩製のものを一点含む点が特異である。

C類は硬砂岩や花崗岩を材質とする硬質の砥石で、大きさは一〇センチ前後のものが多い。物をあてて磨くのではなく、物にあてて磨く機能面を有している。X・J・Lの各遺構よりそれぞれ一点ずつ出土している。

D類は研磨作業の第一段階に必要であったと思われるが、その出土数は僅少で、F・J両住居址で各一点検出されているにすぎない。前者は床面中央穴内の塙壁に密着して、後者は北側周溝上より出土している。

E類は河原石や岩塊を利用したもので、M地区土塙墓出土品の一点を除くと、すべてJ住居址より出土している。機能的には臨時の使用と思われ、一面だけを表面と

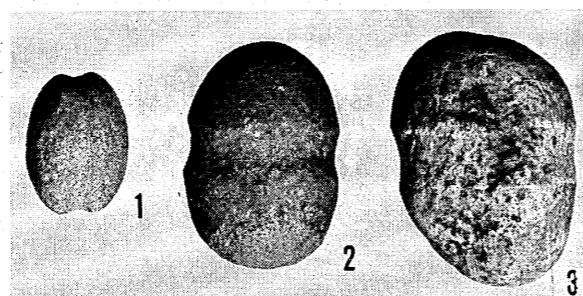


写真19 砥石(縮尺 $\frac{2}{5}$)

つて五類に分けられる(写真19参照)。A・小型の仕上げ砥、B・中型の仕上げ砥、C・中型の荒砥、D・大型の荒砥、E・自然石利用砥で、小型は仕上げ砥に、大型は荒砥に限られ、中型は両者に併用される。また、石質についてみると、砂岩系のやわらかい材質は仕上げ砥に、花崗岩系の硬い材質は荒砥に利用される。

A類七点で最も多く、E類六点、B類四点、C類三点、D類二点の順に続く。

A類は、Q・E・C・J・Uの各遺構

しているものが多い。中には敲石・四石のような使用痕を残すものもみられる。

写真20 石錘(1・3 J住居址、2 会下山山腹出土)

石錘 総数二点あり、うち二例はJ住居出土品、一例はL住居下方山腹での採集品である(写真20参照)。J住居1の石錘は、花崗片麻岩を扁平な球体に整形し、縦型の凹溝をめぐらせる。2は花崗岩の自然礫を利用したもので、中央に横型の凹溝をめぐらす。

L住居下方の採集品3は、硬質の花崗岩を橢円球体にづくり、中央部に横溝を施す。球体の長軸上の1端に敵

打痕が認められ、あ
るにはハンマーとし
ての役割を果してい
たものかもしれません

い。

石・叩打石
石弾
花崗岩を磨
いて橢円球体をつく
るもので、「投弾石」
と呼ぶこともある。

球面は平滑に仕上げ

られるものが多い
が、多面体を呈する
ものもあり、

「面」を生かした用法がとられたのではないだろうか。
S・X・J・L・Mの各地区で出土している（写真21）。

丸石・叩石

会下山には産出しない石材を使う丸礫と

軽石・河原石・燧石
軽石は大小六個余り検出されて
いる。Q・U・Xの各遺構で一点、J住居では三點出土
している。粗いままのものも多いが、Q祭祀場出土例は
全面を平滑に仕上げている。

河原石は、光沢のあるものが多く、全部で三五
個採集されている。燧石もかなり出土している。

打痕のある石類を一括する。全部で五個出土している。
球形や橢円球体など様々な形態のものがあり、部分的に
刻線をつける例も存在する（写真21参照）。

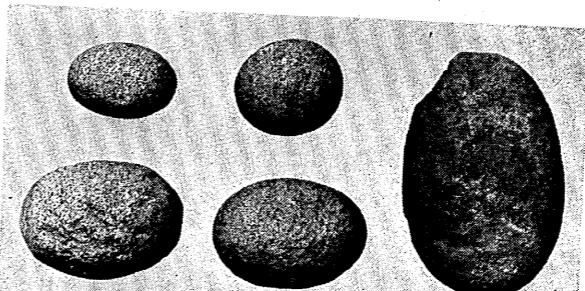


写真21

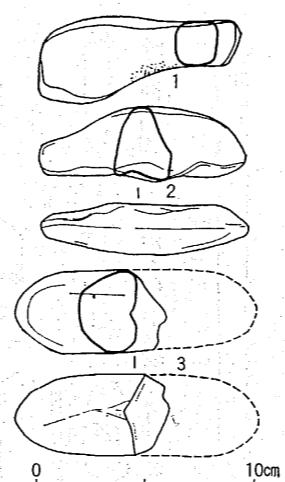


図63 異形石製品
1. Q祭祀場址
2. C住居址
3. J住居址

とく一定の遺構に偏在してゐる事実は興味深い。

- 註(1) 石野博信「石器」「会下山遺跡」昭和三十九年 芦屋市教育委員会
(2) 石野博信「刃器・石小刀」「撰津加茂」(関西大学文
学部考古学研究第三冊)昭和四十三年
(3) 横田義章「加茂遺跡—石器」「伊丹市史」第四卷
昭和四十三年
(4) 福井英治「田能遺跡発掘調査報告I」「尼崎市文化財調査報告第七集」昭和四十七年
佐原真「石器」「池上・四ツ池」昭和四十五年 第二阪和道路内遺跡調査会
(5) 佐原真「石器」「紫雲出」昭和三十九年 香川県
詫間町教育委員会

サヌカイト片 サヌカイトの小剣片は全部で約二〇〇点採集されている。これは、本遺跡でサヌカイトを原材料とする石器が製作されていることを示唆し、後論するご

サヌカイト片 サヌカイトの小剣片は全部で約二〇〇点採集されている。これは、本遺跡でサヌカイトを原材料とする石器が製作されていることを示唆し、後論するご

とく一定の遺構に偏在してゐる事実は興味深い。

数の多いことと石器・青銅器を同伴している事実は重要な(図64・巻頭図版23(1)参照)。

鐵器が出土した遺構は、中央尾根の全地域と東方尾根ではX・L・J住居址などである。種類は豊富で、鐵鎌

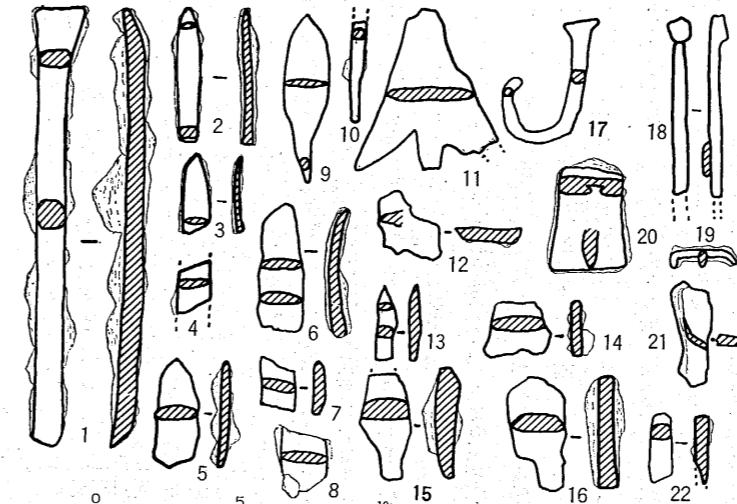


図64 鉄器 実測図

・ヤリガンナが圧倒的に多く、他に鉄ノミ・釣針・鉄斧・鉄釘・鉄金具・鉄片などが出土している。

・ヤリガンナが圧倒的に多く、他に鉄ノミ・釣針・鉄斧・鉄釘・鉄金具・鉄片などが出土している。

ヤリガンナ
ヤリガンナとみられるものは(2)～(8)
の六点が出土している。(2)・(3)・(6)は先端部の、
他は身部の断片と思われる。先端部の中には刃先が片刃
を呈し、その形状から「キサゲ」の類型品と考えた方が

片刃である。F 住居址出土。

(2)は残存長三・五センチ、幅〇・七センチを測る。細身の完好な資料で、若干鋸化している。先端部は反り返りをみせない。先端部が大きく外反する(3)・(6)は非常に薄いつくりで、断面はレンズ状を呈している。同じか所を片刃に整形している。

鉄人三
全長一五・八センチを測る長大刀(1)は、鋸
ノミと推定される資料で、身部幅一・二センチ、刃部幅
二・〇センチで、著しく鋭化している。厚さは最大〇・
九センチを計り、断面方柱状を呈し、刃部では〇・四セ
ンチと薄く銳利になつてゐる。X住居址出土。

表33 会下山遺跡出土鎌
斧の分析

元素名	含有率
TFe	95.50
Fe ₂ O ₃	1.20
SiO ₂	0.60
Ti	0.12
Mn	0.0154
Cu	0.0257
C	3.75
P	0.079
S	0.069

を思わせるが、原
会下山出土の鉄
つては、過去に長
谷川熊彦氏に依
頼し、川崎製鉄
株式会社神戸研
究部で実施した
データーがあ
る。分析の対象

化に銅金を思はせるようなもの(1)や不明鉄片(1・22)が二、三存在し、(19)は鉄金具を思わせるが、原形や機能は明らかでない。このように、会下山出土の鉄器は小工具類の卓越が一つの特色となつてへる。

表33 会下山遺跡出土鉄斧の分析	
元素名	含有率
TFe	95.50
Fe ₂ O ₃	1.20
SiO ₂	0.60
Ti	0.12
Mn	0.0154
Cu	0.0257
C	3.75
P	0.079
S	0.069

は(20)の鉄斧であり、分析成績は表33に掲げるとおりである。

これをみて明らかなどおり、C(炭素)の含有率が高いことは、この鉄器が鉄鉄であることを示しており、Ti(チタン)を少量含んでいることは、砂鉄を原料としていたことを推測させるので、観察の結果とは必ずしも符合しない。

註(1) 村川行弘「会下山遺跡出土の鉄器について」『たたら研究』第12号 昭和四十年

(2) 『新修芦屋市史』本篇 昭和四十六年 芦屋市役所

(四) 青銅器

全部で二点出土している(図65・巻頭図版23(2)参照)。

銅鏡 有茎式の通常の銅鏡で、鏡身の一部と茎部とを残す破損品である。F住居址床面から出土している。現存長二・一センチを計り、非常に薄いつくりで、厚さは〇・一五センチしかない。茎は逆刺の部分につけられて

現存長四・四センチ、最大幅一・一八センチを測る大きさで、長さ三・七五センチ、一边一センチ強の断面正三角形を呈する鏡身に、径〇・三センチ、長さ〇・六五センチの断面円形に近い茎部を付加させた形式のもので、身部にはさらに三角形の各頂点から三方に狭翼がありつけられ、いわゆる三翼鏡の形態をなしている。翼は基部から〇・五センチのところから始まり、約一センチまでは一定幅で稜をなし、先端部にいくにしたがいその幅を増して、同部付近では〇・二センチを計測する。頂端部は面取りが施されて非常に薄くつくられ、部分的に欠損し、基部にかけては磨耗が著しく、いわゆる刃こぼれのような状態となっている。三翼の結節点に相当する尖端部はわずかに欠損し、破面は三角形を呈して青銅の原色を保つ。翼と翼の間の平坦部は滑沢を帶び、ここもちふくらみ、両側の翼との境目には浅いが明瞭な溝が走っている。基部から先端部にかけて内彎しながら走っている。基部から先端部にかけて内彎しながら走っている。基部から先端部にかけて内彎しながら走っている。実測図左側の基部には〇・四センチ大の突發的にくぼ

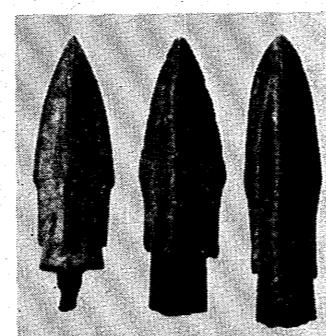


写真22 三翼鏡(内蒙古包頭出土
・島村孝三郎寄贈)
<京都大学考古学研究室提供>

むか所があり、その結果基端は反り返っている。また図右側の右面基部には必ずれのごとき斜めの押捺痕が看取される。これらの損傷は使用痕といいうよりも鋸造過程における痕跡と考えられる。

全体に保存良好で、錫化も進んでいないが、条線状の溝と鏡身基部と茎部とのつけ根に若干認められ、青白色を呈している。色調は全体に青味を帯びた黒色で、翼稜線部・茎部末端の一部では地色の光沢を放っている。

特徴的形態をもつ本銅鏡は、出土後十余年を経過した

今日に至っても、本邦からの確実な出土例は寡聞にして

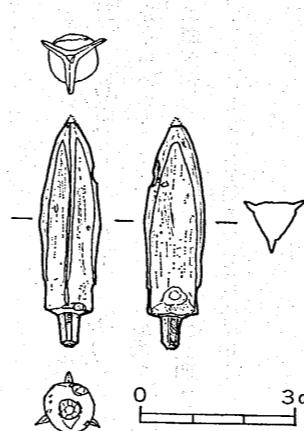


図65 漢式三翼銅鏡実測図

おり、末端部を欠く。幅〇・四センチ、残存長〇・二センチで、その延長上には軽く稜がついて鏡を形成している。緑青のため青緑色を呈し、とくに破損面は色鮮やかである(巻頭図版23(2)参照)。

三翼鏡 「会下山遺跡」において「漢式三角鏡」と報告された銅鏡で、非常に珍らしい形態を呈した優品である。出土場所は、会下山山腹の山手中学校敷地内で、土砂崩れによって発見されたものである。住居址などの遺構内より検出された資料ではないが、斜面の流出堆積層でもあり、当遺跡の伴出遺物と考えられる(図65参照)。

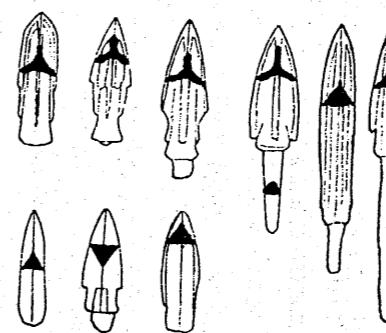


図66 三稜鐵実測図（秦都咸陽都城址出土）
『考古』第1期（总130期）より

り、図66は最近報告された秦都咸陽都城址出土の類品の実測図である。参考資料として掲げておく。他に韓国の慶北大学校所蔵品中に本例と同型品が存在すると聞く。

（1）『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第三部
昭和三十八年 京都大学文学部

（2）陝西省博物館文管会 勘査小組「秦都咸陽故城遺址
発現的窑址和銅器」『考古』第一期（总130期）
昭和四十九年 中国科学院考古学研究所

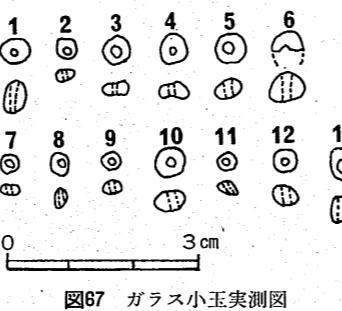


図67 ガラス小玉実測図

状を呈している。保

存度は比較的良好
で、破碎するもの

（6）は数少ない。

ただし、（11）のこと
く歪曲するものはあ
る。色調によって分

類すると、コバルト
・ブルー六点、スカ

イ・ブルー八点の割
合となり、後者に属

する（12）は半透明である。他の色調のものは出土して
いない。

球形土製品 O地区小屋施設外溝から一点出土してい
る（写真23左参照）。直径二・五センチを測る球形の素燒
土製品で、中央に径二ミリの小孔を穿つ。穿孔は一方向
から行なわれ、貫通しきっていない。二つの孔口にはと

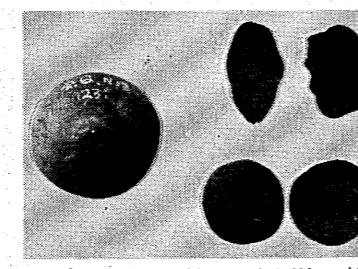


写真23 球形土製品と面子（縮尺1/2）

くに紐ずれの痕跡を認め

ない。近辺では尼崎市田
能遺跡・枚方市鷹塚山遺

跡などから類品が出土し

ている。

丸碟 総数三〇〇個以
上出土しており、O祭祀

場丸碟地区で夥しく見出
され、F住居址床面炉辺やC住居址堆積土中にも遺存す
る。二〇センチ余の大きさのものから直径二センチ程度
の小碟まであるが、拳大ぐらいのものが大多数を占める。
形状も完好的球体から扁平を橢円球体まで種々あり、打
欠いて整形したものも含まれている。

これらの丸碟はすべて会下山山腹には産出しない花崗
片麻岩で、近辺では高座ノ滝付近で多量に採集できると
いう。

（五）その他の遺物

ガラス小玉 装飾品としてのガラス小玉は全部で一四点検出されている。F住居では四点と最も多く、Q・J

・Xの各遺構で二点ずつ、N・L・U・Mの各地点では一点ずつ出土している（図67参照）。大きさは直径三ミリ程度の小さなもの（2・7・8・9・11・12）から、数ミリを測るやや大きなもの（1・3・4・5・6・10・13）まで、形態も球形（6・9・12）、楕円球体（1・8）、直方体（13）と多様であり、最も多いのは扁平な形

石英加工品 J住居址床面から検出された用途不明の石製品で、美しく磨かれた面に、さらに面取りをして加工した形跡を残す。

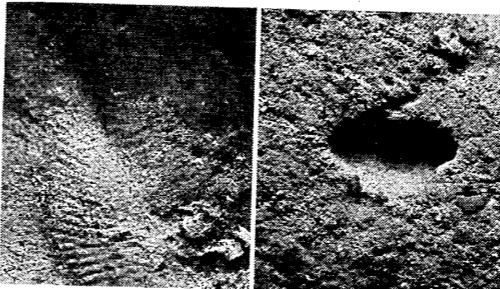


写真24 指紋・粗痕のみみられる土器 (拡大)

面子 F地区表土層より四点出土している(写真23右参考)。いずれも母型にはめて印形されたものを焼成しており、二センチ前後の大きさのものである。一つはエビス神の面を模しているが、他の三つの形態はよくわからない。あるいは陰・陽をあらわしたものかもしれない。いずれも弥生時代のものではない。

彩色・指紋・粗痕のある土器 彩色土器は内外面塗彩のものは少なく、内側のみ朱彩するものが多い。とくにE地区出土の大形鉢は特筆すべき存在である。

付着の朱は、化学分析の結果、酸化第二鉄によることが判明し、また、塗付したものではなく、土器胎土中の鉄分が露出したものと推定される。

指紋を残す土器も比較的多く、U地区出土例は印肉を押したように明瞭な痕跡を残す。弥生式土器製作者の性別・年齢鑑定などの研究が将来深められる際の格好な資料となる(写真24左参考)。

粗痕の認められる土器片も珍らしくない。付着状況によつて多様な形態をとどめるが、楕円形先円のものと楕円形先尖のものとに分れ、長径六・七ミリ・短径三・四ミリのものが多い(写真24右参考)。



写真25 会下山西斜面の緊急調査か所 (矢印)
(神戸市東灘区の東甲南台宅地造成地より撮影)

月、砂防指定区域となつている会下山西側の通称しおき谷に面する急斜面が豪雨などのため崩れ、夥しい量の土器片の散布が確認されたので、同年七月及び十月、芦屋市教育委員会は藤井祐介・森岡秀人を発掘担当者に、防災工事施行部分に限り緊急調査を実施した。調査には関西大学・近畿大学の学生、地元芦の芽ガループ員が参加している。

発掘現場は南北方向に延びる主尾根の西側傾斜面、E-F地区間西方の崖崩れ部で、標高一七〇メートル前後を測る地点であり、C

前述した会下山遺跡では、昭和三十六年七月と八月に実施された第五次発掘調査を最後に、継続してきた学術調査を一応完了した。その後、昭和四十八年に主尾根山西斜面地域が緊急調査されているが、それ以降までの十余年の期間は全く調査を行っていない。

しかし、この間にも会下山の各所から土器片などがたびたび採集されており、その一部については、遺跡地を訪れた見学者や地元の市立山手中学校歴史研究部生徒らによって、市教育委員会に報告されている。

ここでは、そうした採集土器を中心とする未発表の資料を逐一紹介することに努めるとともに、昭和四十八年に行なわれた緊急調査の概要を記し、出土土器の主要なものと併せて報告しておきたい。



写真26 昭和48年実施の発掘調査風景

で傾斜する会下山の斜面地域には、一つの共通性のあることがわかった。

遺構は深層の花崗岩質地山面に近いところで、柱穴状の浅いピットが一・二確認されたが、調査区域の制約もあり、その性格を明らかにしていない。

出土遺物には、多数の弥生式土器と若干の石器（石鎌一点・石錐一点）があり、土器は第V様式に中期のものが微量伴う程度で、南北尾根立地の諸遺構と傾向を同じくしている。主要なものについては採集資料とともに後に解説する。

調査した面積は約二〇平方メートルの限られた部分であつたが、その結果、斜面における包含層の流出規模と範囲の大よそを知ることができ、F地区付近から南北の方に向へ、濃密な黒色有機質土の流れ及び二次堆積が確認された。その状況は、先に概述した第一次の予察調査（昭和三十一年実施）の所見（とくに○地点）に酷似し、急角度E・Fの各住居址をのせる尾根稜線上からの比高は一五メートル、西の谷間との比高は約二〇メートルである（写真25・26・図32参照）。

発見・採集されたか所は大別すると次の二か所である。一つはU地区廃棄場址の一帯であり、いま一つは尾根東斜面の谷間にかけてのほぼ全域である。以下、この二か所の遺物の採集状況を記録しておく。

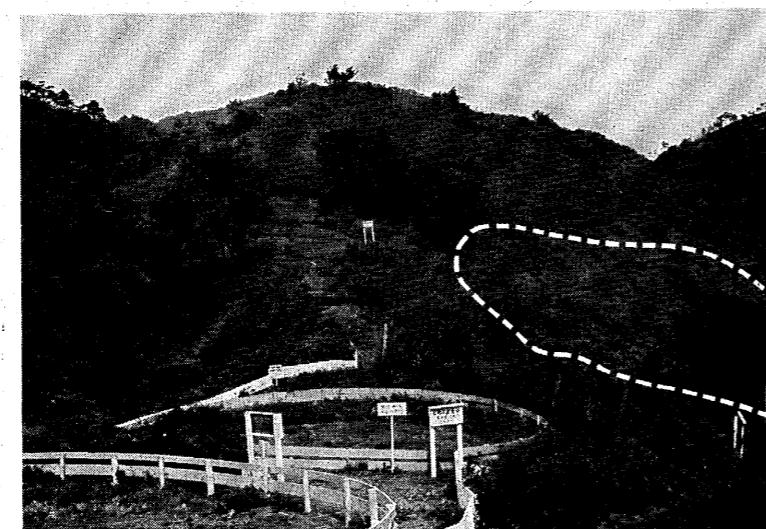
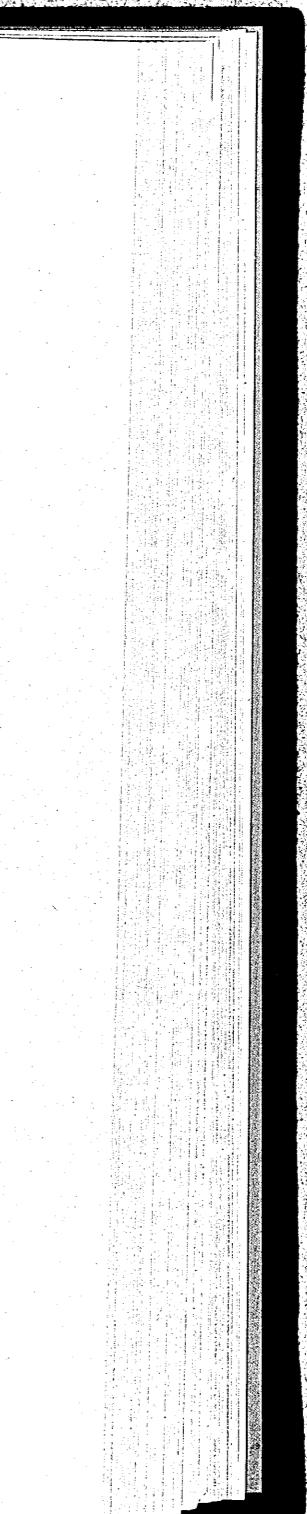


写真27 Q-F地区間東方斜面を望む (破線内が昭和42年7月の崖崩れ部)

遺物の採集状況 (1) U地区廃棄場址一帯の崩壊 このか所は、集中豪雨直後の昭和四十一年七月上旬、当時、山手中学校歴史研究部生徒の古川久雄・松田和義が、遺跡地巡視中に発見したところで、U地区の廃棄場址と呼ばれる遺構の南西隅に位置する。状況は濃密な遺物包含層が局部的に見出され、西壁面では幅一〇数センチの有機質土層中に土器が多く含まれていたといふ。

包含層のあり方は土器を含む土層がブロックとなつて上方より崩落した状態であり、U地区の処女的な包蔵物ではなく、むしろ中央尾根稜線上にあるE地区住居址付近の包含層が土塊となって流下・堆積したと考える方が妥当な見方といえよう。採集された土器は、後述するよう中期内のものが多い。



(2) Q—F 地区間東方斜面の流出

中央主尾根から東南方に一支尾根が派生するが、その分枝するところは広く浅い谷を形成して東斜面の微地形をなしている。集中豪雨によって東斜面で多くの遺物が採集されたのは、この谷を中心とした広範な地域である(写真27参照)。状況は、谷の最上部、Q—F 地区間の東方急斜面で比較的大規模な崖崩れが起こり、斜面下方から谷間沿いに遺物包含層が流出したもので、やや裾広がりで土器の散布範囲は広域である。遺物は下方にいくにしたがい小片が多くなり稀薄となるので、濃厚な包含層の当初の位置はおそらく斜面の上方にあったものと考えられる。なお同じ頃、南斜面の一帯でも流出遺物の採集が行なわれており、この中には、最近類似資料が急増しつつある「回転台形土製品」(写真33・図74)が一点含まれている。

調査後の採集遺物と緊急調査出土品 過去の発掘調査終了以降、今日に至るまでに遺跡地各所より採集され、市教育委員会に届出された遺物で、現在、市教育委員会

に保管されているものが若干数あるので、昭和四十二年

採集遺物・四八年緊急調査出土遺物とともに併せ紹介

しておく。緊急調査出土品は既に『芦屋市文化財調査報告』第八集にて詳細な報告がなされているので、その主たるもの再録するにとどめ、未発表資料を中心に実測

図を掲げることとする(巻頭図版20・21に一部掲載)。

なお、土器実測図はこれらすべての資料を混合し、主に器種別に配列したので、採集場所・出土地点・出土層位・採集出土年月などについては明確なものに限り、表34に譲りたい。

a 壺形土器(図68・69・写真28)

壺は通常の広口壺から長頸壺・短頸壺・細頸壺・水差などがみられるが、中には過去の発掘調査において全く出土していない珍らしい形態のものや量的に数少ないものが含まれている。

(1) は垂下させた端面を三本を単位とする棒状浮文

帶で加飾するもので、これに先行してなだらかな起伏の

凹線文が施されている。復原口径二三・四センチを測

表34 会下山遺跡出土土器新資料一覧表

図面番号	出土地点・層位 採集場所	出土年月	図面番号	出土地点・層位 採集場所	出土年月
1	西斜面	不明	45	西斜面表探	S.48.7
2	" 凹所表探	S.48.7	46	U地区西壁表探	S.42.7
3	U地区西壁表探	S.42.7	47	Q—F 東斜面表探	"
4	Q—F 東斜面表探	"	48	"	"
5	西斜面凹所表探	S.48.7	49	"	"
6	出土地不明表探	S.42.8	50	出土地不明表探	"
7	" 表探	"	51	西斜面凹所表探	S.48.7
8	Q—F 東斜面表探	S.42.7	52	Q—F 東斜面表探	S.42.7
9	西斜面表探	S.48.10	53	出土地不明表探	"
10	" IIIb層	S.48.7	54	Q—F 東斜面表探	"
11	Q—F 東斜面表探	S.42.7	55	"	"
12	U地区西壁表探	"	56	西斜面出土	S.48.7
13	西斜面凹所表探	S.48.7	57	"	"
14	Q—F 東斜面表探	S.42.7	58	Q—F 地区東斜面表探	S.42.7
15	U地区表探	"	59	Q—F 東斜面表探	"
16	Q—F 東斜面表探	"	60	U地区表探	"
17	西斜面凹所表探	S.48.7	61	Q—F 東斜面表探	"
18	出土地不明表探	S.42.8	62	出土地不明(朝日ヶ丘小学校提供)	S.50.5
19	" (和田秀後提供)	不明	63	"	"
20	西斜面凹所表探	S.48.7	64	出土地不明表探	S.42.8
21	Q—F 東斜面表探	S.42.7	65	"	"
22	西斜面東セクションII層	S.48.7	66	U地区西壁	S.42.7
23	U地区表探	S.42.7	67	出土地不明表探	S.42.8
24	U地区西壁表探	"	68	Q—F 東斜面表探	S.42.7
25	"	"	69	"	"
26	"	"	70	西斜面表探	S.48.10
27	西斜面表探	S.48.10	71	Q—F 東斜面表探	S.42.7
28	U地区表探	S.42.7	72	"	"
29	U地区西壁表探	"	73	出土地不明表探	"
30	"	"	74	Q—F 東斜面表探	"
31	出土地不明表探	"	75	出土地不明表探	S.42.8
32	Q—F 東斜面表探	"	76	東斜面J地区北側表探	S.42.7
33	南斜面表探(藤田和夫提供)	S.50.3	77	出土地不明表探	S.42.8
34	U地区表探	S.42.7	78	"	"
35	Q—F 東斜面表探	"	79	Q—F 東斜面表探	S.42.7
36	西斜面凹所	S.48.7	80	U地区西壁表探	"
37	Q—F 東斜面表探	S.42.7	81	出土地不明表探	S.42.8
38	"	"	82	西斜面凹所表探	S.48.7
39	"	"	83	出土地不明表探	S.42.7
40	"	"	84	U地区表探	"
41	"	"	85	西斜面凹所表探	S.48.7
42	出土地不明(朝日ヶ丘小学校提供)	S.50.5	86	"	"
43	西斜面表探	S.48.10	87	西斜面IIIb層	"
44	Q—F 東斜面表探	S.42.7	88	Q—F 東斜面表探	S.42.7

り、色調は外面とも暗褐色を呈し、胎土・焼成ともさわめて良い。棒状浮文でもって口縁部を飾る壺形土器は会下山遺跡では稀である。

(2) は頸部が短かく胴部との境にかすかに段をもつていて、口縁端部を上下にやや拡げ、そこに三条の凹線をみる。色調は淡い黄白色で全体に細砂を含み、雲母片を散見する。

(3) は茶褐色を呈し、胎土中に黒雲母・金雲母の剝片を多量含むいわゆる河内系の土器で、雲母粒子は径二ミリを測る大粒のもののみられる。口縁部を下方に拡張し、摩滅が著しいため判然としないが、端面には三条の凹線様の沈線が認められる。外面は比較的粗い刷毛によつて調整がなされている。口径は二五・三センチである。

(4) は口径七・三センチを測る短頸壺で、外面と

も赤褐色を呈し、焼き上りは非常に良い。胴部以下を欠失するので定かでないが、長胴を有するものと思われる。

(5) は『土器集成』にいうところの畿内第V様式壺

C類の典型的なものであり、口縁部をその基端から斜め

口縁部外面に柳先刺突文をめぐらす(8)は、鈍い複

上面に一挙に開き、外面にはヘラによる入念な磨研面が明瞭に残されている。口縁部はヨコナデ調整され、端面には擬凹線が認められる。明るい赤褐色を呈し、焼成もさわめて良い。口径は一五・〇センチを計測する。

(6) (7) (9) の三点は、やや拡張した口縁部端面に不規則な波長の櫛描き波状文を施し、(6) (9)については口縁部外面の周縁にも同一原体で波状文が描かれている。(6)は器表の剥落が著しく、器肉に若干の石粒を含む。(7)は(6)と同形態であるが、口径がやや大きくなり、口縁部端の裏側に粘土紐一本を貼付け、補強している。(9)は外面をヘラ磨きし、内面も平滑に仕上げられている。いずれも赤褐色を呈し、明るく焼き上げられているところに共通点がある。これらの土器は櫛描き文様を口縁部に盛用していることから、中期に比定されることが多いが、文様の描き方やプロポーションなどからみて、後期に位置づける方がむしろ適切であるかもしない。

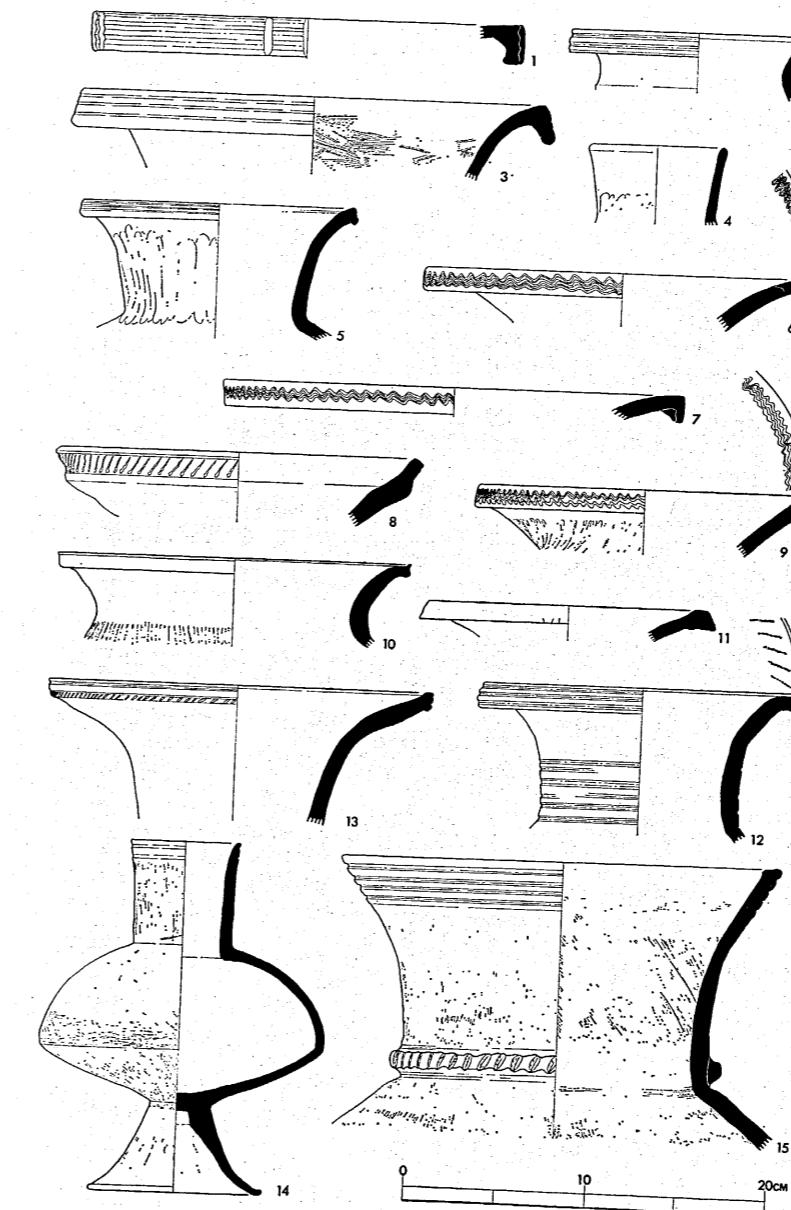


図68 会下山遺跡出土弥生式土器実測図 (1)



写真28 壺形土器（昭和42・48年会下山遺跡出土）

合口縁にするなどその形状が特異で全容を知るよしもないが、赤褐色を呈し、胎土中には長石を含む。

口唇部にやや立ち上りの傾向をみる（10）も一應壺の範疇に含めてみたが、その器形及び手法は弥生後期（畿内第V様式⁽²⁾）通有のものではない。同じタイプの土器は過去の調査出土品中にも一例（3号焼土坡・20）あり、甕形土器の一類型とも考えられる。口径一九・六センチ、色調黄白色、焼成は脆弱である。（11）は高杯の脚裾部かもしだれない。

（12）は直立する頸部に曲折して強く外反する口縁部をつけた壺で、口縁部を上下にわずかに拡張し、そこに三条の四線文が施されている。よく観察してみると、水平に近くおりまげた口縁部の内面円周は、ていねいにヨコナデ調整された後、櫛先列点文で加飾されている。頸部下半には数条のほりの深い四線文が施されているが、一部は中途で消失し、断続的である。外面は赤褐色、内面は茶褐色を呈し、胎土・焼成はともに良い。畿内第IV様式に比定できよう。

強く外彎して開く口頸部の壺（13）は、わずかに幅をもつ口縁部端面に二条の細い擬凹線が施され、その下端にはヘラ先原体の押圧による刻目文帯を連ねている。口縁部内面はヨコナデ調整がなされるが、頸部以下の整形は粗雑をきわめ、局所に指圧痕をみる。淡黄色と灰黄色を呈し、口径一一・三センチを計測する。

（14）はいわゆる台付細頸壺で、器高一九・八センチ、口径六・一センチ、腹径一五・九センチ、脚径九・五センチを測る復原完形の優品である。ラッパ状に開く低い脚台部に、下半に重心を置いた横太りの胴部をのせ、さらに短く直立する口頸部をとり付けた形態で、器壁は非常に薄くつくられている。口縁部外面には沈線に近い二条の浅い凹線が施され、端部は軽くつまみあげて仕上げられる。頸部全体は条痕状の粗い刷毛によって調整され、胴部上半にはナデに先行してわずかに叩き目の痕跡が認められ、下半に至っては研磨する。脚台部上端にはヘラ磨きの際の工具圧痕が爪形のごとく残り、内面には絞り目が残存し、全体は刷毛目調整されている。色

調は赤褐色、胎土には微砂を含む。

このようなタイプの細頸壺は、かなり実用性に欠けるものと思われるが、○地区祭祀址に比較的近い場所からの採集品であることも、その特徴的な形態と関連して興味深い。いずれにせよ、調査完了後発見の遺物としては特筆すべきもの一つと言えよう。

口縁部を大きく開く（15）は、口径二四・四センチを測り、口縁部外面に施されたほりの深い四線文は四条を数える。頸部及び体部の内外面は細かに刷毛目調整され、口縁端部の調整にはヨコナデを盛用し、端面は幅広く水平縁につくられる。頸胸部の境目には太い粘土紐を貼付け、その上下をヨコナデ調整し、凸带上にはヘラ状工具の先端で両側から切込みを入れ刻目を施す。内外面ともに灰白色で、胎土には細砂を含む。

（16）（17）はいわゆる長頸壺形土器の口頸部

で、（16）は外面をヘラ磨きする。器壁はともに薄

くつくなっている。口頸部と底部を欠き、胴部のみを残す（19）もおそらく長頸壺であろう。内面は荒い刷毛で調整がなされている。

胸部以下を失い、細頸壺の様相を示す（20）は、断片であるため判然としないが、肩に横位の半環状把手をそえた外観を呈する水差形土器の一部かもしれない。

（18）（21）の二点は、直立したのち外に開く口頸部をつけた壺で、（18）は口縁部を欠き、（21）の内面には粘土帶積み上げの残痕が二ヶ所認められ、口頸部の製作が少なくとも三段階に分けて行なわれたことが知れる。口縁部及び胸部以下を失する（22）は頸部下端に梯先原体で圧痕を加えた凸帶を有し、中期後半の資料である。

b 瓢形土器（図70・写真29） 瓢は口径三〇センチを越える大型のものもあるが、口径一五センチ内外の小型のものが多い。

口縁端部に明確な四線文をみる（23）（24）は、会下山では数少ないわゆる大型瓢の部類に属し、復原口径は

ともに三二センチ程を測る。口縁部は「く」の字状に短かく外反し、端部は上下にやや拡張されるので、口縁部内面にはわずかな立ち上りが稜をなしている。（24）は焼成堅緻で、胎土には砂粒を含む。器高もおそらく五〇センチを上回る大きさのものであろう。

（25）は口径二四・四センチを測る中型の甕で、口縁端部はヨコナデ調整され、二条の四線文が走向する。口縁部内面の下端には若干の起伏があり、浅い溝を形成して凹む。器体外面は刷毛目調整されているが、器表の剥離が著しく、部分的にしか認められない。全体的に黄白色を呈し、内面には荒い石粒を含む。

口径の小さい（26）は、口頸部をゆるやかに外反させ、器壁はきわめて薄手につくられている。腹径が口径をはるかに上回る形態のもので、外面はていねいな刷毛目調整が施されている。内外面赤色を帯びた灰黄色で、口縁端部は黒味がある。胎土には石粒を含み、焼き上りは良い。（27）は口径一三・四センチの小型の甕で、口縁端部には二条の四線文を有し、外面は淡く煤化する。

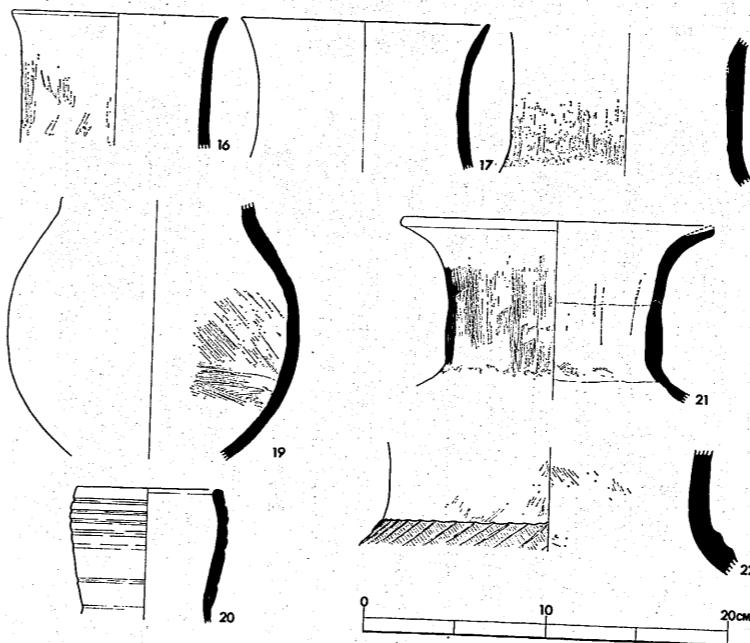


図69 会下山遺跡出土弥生式土器実測図 (2)

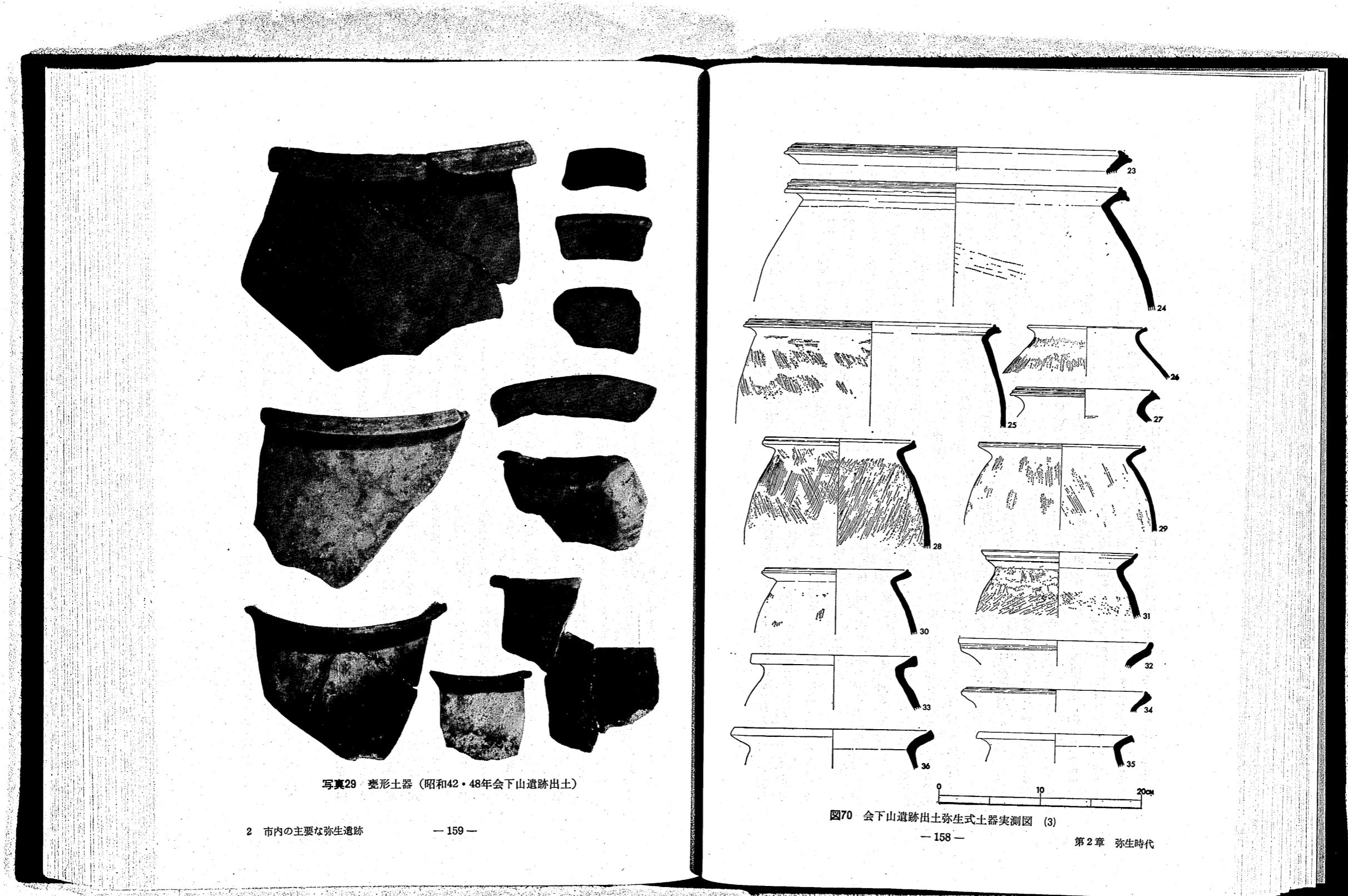


写真29 瓢形土器（昭和42・48年会下山遺跡出土）

図70 会下山遺跡出土弥生式土器実測図 (3)

(28)～(30)は、口頸部を内彎ぎみに外反させ、器体内外面を刷毛目調整し、口縁端部に一条の擬凹線を見る。点において共通する。(28)の胴部上半の外面に施された

刷毛目は粗く、器表は全体に焼化しており、(29)～(30)

の刷毛目は器面の摩滅が激しいため消失している。ともに灰黄色を呈し、後者は胎土中に多くの砂粒を混える。

(29)の口縁部と胴部の一部には黒色の有機物質が付着している。口縁部をつまみあげるように突出させ、段状につくり出す(31)は、胴部外面を叩いて成形した後、縦方向の刷毛によつて調整し、内面はナデ仕上げる。口径一五・四センチ、色調黄白色、胎土・焼成はともに良好である。

(32)～(34)は口縁部の残片で、前者にみられる端部下端の四線は段をつくりなす際に生じたものとみられる。

口縁端部をやや肥厚させる(33)は、器面の磨耗が著しく、文様や整形痕の一切をみない。茶褐色を呈し、胎土中に若干の石粒を包含する。

(35)～(36)の二点は、口縁部のつくりが厚手で、きわ

めて鈍い。胴部はあまり張らない手のものであろう。

c 高杯形土器(図71・写真30)
完形品はなく、脚部の残欠が多い。

杯部に明確な稜線を有する(37)～(41)は、外面に凹線文が施される特異なもの(40・41)と四線文のない通常のもの(37・38・39)に分れ、前者に関しては所属様式が明らかでない。後者については(37)が西ノ辻I式に形式近似し、(38)(39)は同・E式の範疇に入る。

(40)は口径二二・八センチを測り、ゆるやかに起伏する四線文は五条を数え、内外面ともにいねいにヨコナデされる。口縁端部もナデして平滑に仕上げられており、平坦な面を形成している。胎土には径二～三ミリの石英粒を数多く含み、全般にもろく、色調は黄褐色をしている。第IV様式に比定でき、西ノ辻I式(後期初頭)への連絡をみせる器形として編年上注意される。

(41)は杯部下端に沈線に近い四線が二条みられ、それに先立つて外面全体を粗い刷毛で調整している。焼き

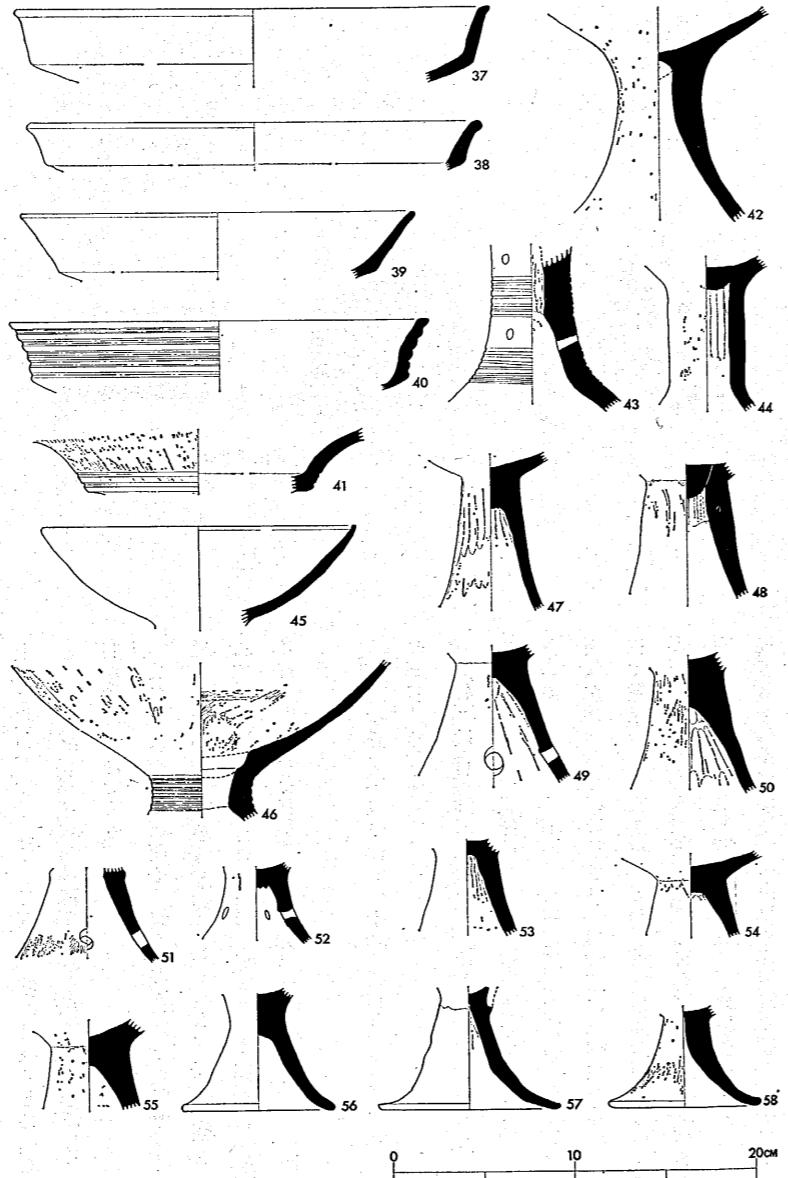


図71 会下山遺跡出土弥生式土器実測図 (4)

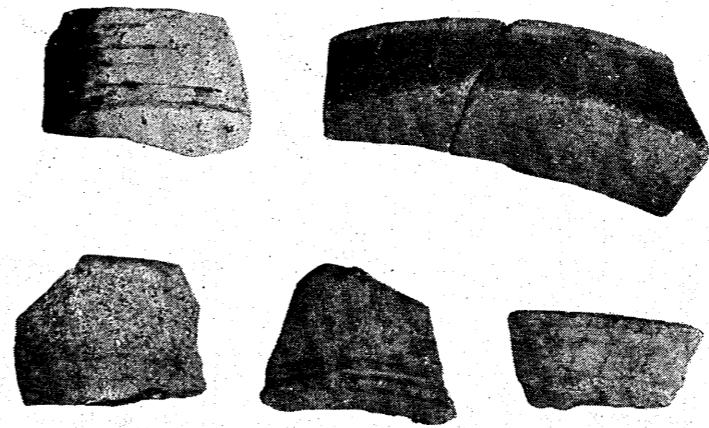


写真30 高杯形土器（昭和42・48年会下山遺跡出土）

上りは堅い。(42) (46)の二点は、杯の口縁部と脚裾部をともに欠落し、杯底部と脚柱部のみを連続して残した中期様式の高杯である。

(42) は赤褐色に明るく焼き上げられた土器で、外面上には弱いヘラ磨きの痕跡が認められる。杯部を欠くため、器形については明らかにし難いが、中期後半に盛行した水平口縁を有する木器模倣型高杯の残欠かもしだい。

朝日ヶ丘小学校生徒の採集品（昭和五十年）で、出土地点は不詳である。

(46) は台付鉢形土器の可能性も強く、粘土円板が既に剥落し、脚柱上端のつくりは階段状を呈している。杯部の底を形成する前の工程の連続した器面のネガティブな状況がつぶさに観察され、興味深い。脚柱の外面上半には数条の凹線文が重ねて施され、杯部外面にはヘラ磨きの光沢面とともに灰黒色の黒斑が認められる。杯部の内面は細かな刷毛とナデを併用して調整され、胎土・焼成はともに良好である。第IV様式頃に位置づけされる。

(45) は口径一七・〇センチを測る球面上の一一定した

器厚をもつ杯部で、口唇部はわずかにつまみあげられる。胎土には多くの砂粒を含有し、赤褐色を呈している。この形態の高杯（『土器集成』畿内第V様式の高杯形土器A₁）は、畿内地方の他遺跡では量的に少ないが、後論するように、会下山遺跡ではその占める比率がかなり高い（288ページ参照）。

(43) (44) (47) (58) は脚部の残欠であるが、(44)が中期的要素をもつていて他のすべて後期に属する。形態的にみて、細くて高いもの (47)、太くて裾広がりのもの (43・48・50)、比較的低いもの (51・55)、低脚のもの (56・58) などに分れる。前二者には皿形の中でも (43) は特異で、厚手のつくりの長い脚柱にそれぞれ七条を数える平行沈線文帯を上下に配し、その間隙と上部のさらに上に小孔を穿つ。脚柱上半は絞られ、内面下半はヘラで整形される。胎土は精良で焼きの具合もしつかりしている。

d 鉢形土器・器台形土器・その他脚台部など（図72）
・写真31

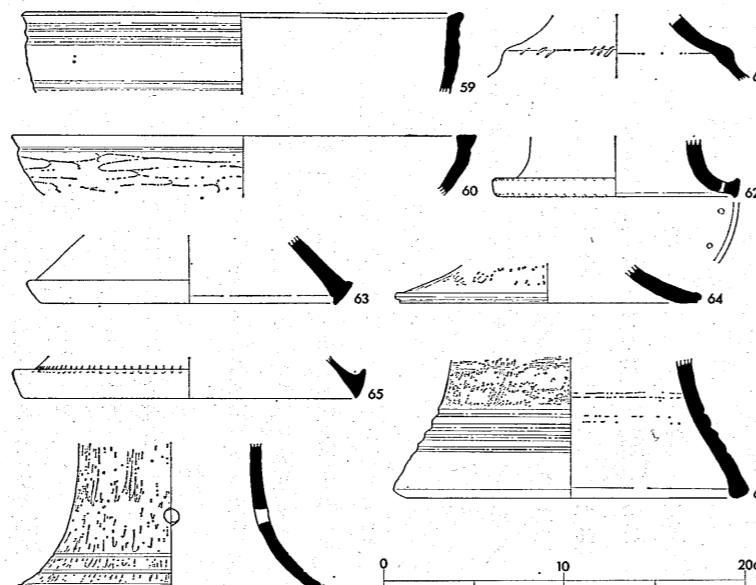


図72 会下山遺跡出土弥生式土器実測図 (5)



写真31 鉢形土器・器台形土器・その他脚台部など
(昭和42・48年会下山遺跡出土)

鉢・台付鉢・その他脚台部及び器台などを一括した。

口縁部のみの(59) (60)は、中期末(畿内第IV様式)頃に位置づけされる台付鉢形土器の断片で、(60)は高

杯になるかもしれない。(59)は直口型の口縁部外面に二带の四線文帯を配し、口縁直下の上帶には二条、下帶にも複数条施されたものと思われる。四線の感じはいずれも浅い。黄白色を呈し、胎土にはチャートとみられる茶褐色の石粒を数多く含む。復原口径は一四・〇センチである。

(60)は淡赤褐色に丹彩の施された土器で、外器表面には弱いヘラ磨き痕が認められる。口縁端部も同様にヘラ磨きされ、平滑に仕上げられており、外面の直下には一条の四線文が施されている。復原口径は二五・六センチを測る。

(61)～(65)は各々脚台部の残欠とみられるが、(61)は器種不明、末端に紐孔のみられる。(62)は壺の口縁部になるかもしれない。(61)には透し孔が確認され、軽くつくられた段の部分にはヘラで刻み目が入れられて

おり、(62)の端部両端にもわずかに刻み目が施されている。

(63)～(65)は裾部末端の形状から判断して、(63)は台付鉢、(64) (65)は高杯の脚台部に相当するものと思われる。時期は(63) (65)が中期に、(64)は後期に比定されよう。(63) (64)は外面をヘラ磨き調整し、前者は端部内面をやや凹ませ、後者の末端部には擬凹線を施している。

(65)は器壁がきわめて薄くつくれられ、裾部末端にはヘラ先原体による五ミリ等間隔の連続刺突文がめぐらされている。白味を強く帯び、器表の風化が著しい。

(66) (67)は器台形土器の器体下半部である。(66)は底径一九・六センチ、残存高七・五センチを測り、裾部末端はやや内彎みである。外面には四条の浅い四線文が施され、全体にヨコナデ調整がゆきとどき、四線文帯の上部は細かに刷毛目調整を行なった後、弱いヨコナデによって仕上げている。色調は外面灰褐色、内面黒褐色で器肉は外面の色合いに同調する。胎土には細石粒を

多く含み、焼成は堅緻である。畿内第IV様式に属するものとしてはやや小さめの器台といえよう。

(67) は円孔を四方に穿ち、器体裾端には三条のヘラ描沈線文が施され、その後磨かれる。焼成堅緻で暗茶褐色を呈している。

畿内弥生後期の器台は小型化・無文化の傾向が著しく、一般的に簡素であるが、このようなヘラ描沈線文による装飾は、回転台の消滅に伴う中期四線文手法のなごり・退化施文法と考えられ、後期でも初頭ないしは前半期には残つてゆくものと思われる。

e 底部(図73・写真32) 底部は小片まで含めると、かなりの量に達するが、主要なもののみ図化した。器種・時期を明確にし得るものは数少ないが、一応(68)(71)・(81)・(85)は壺形土器、(72)・(74)・(76)(80)・(86)は甕形土器、(75)・(87)・(88)は鉢形土器の底部と推定される。

時期は大半が畿内第V様式期に比定できるが、一部中

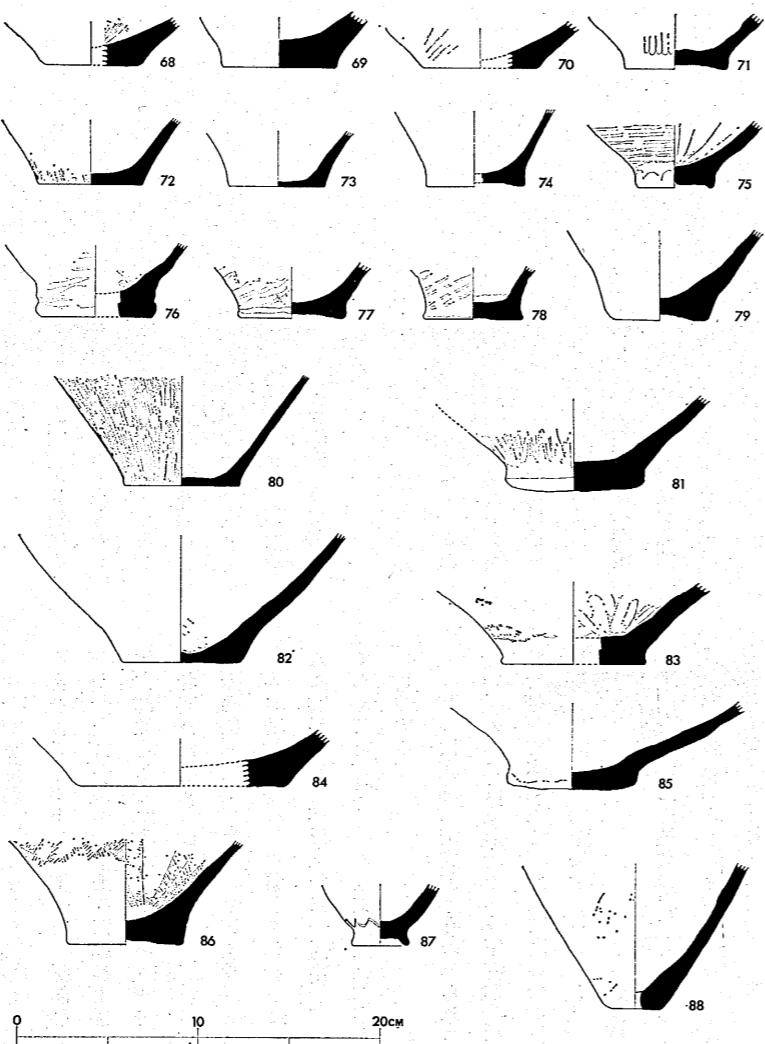


図73 会下山遺跡出土弥生式土器実測図 (6)

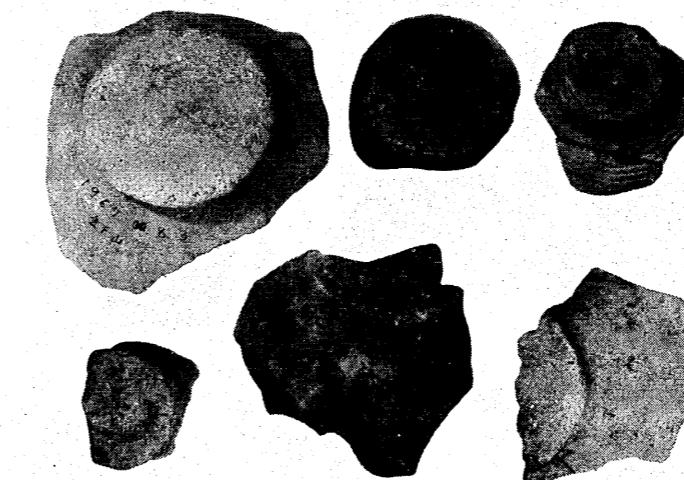


写真32 底部 (昭和42・48年会下山遺跡出土)

期にまで遡る資料(80・84)が抽出される。

墾の多くは外面を叩き目成形し(75・78)、部分的にナデですり消しているが、当初より叩き目をもたぬものもあり(71・74・79・80・86)、刷毛で器面調整され例

(72・80・86)も比較的多い。とくに(80)は外面を細かな刷毛でもつてていねいに調整し、内面はヘラ削りを行なって器壁を薄く仕上げている。内面黒褐色、外面暗茶褐色で全体に暗い色調である。製作技法からみて第IV様式に位置づけられる。

一方、壺には叩き目が少なく、あつても(70)のごとく大部分すり消されている。外面の調整はヘラ磨きが盛用され(71・81)、内面にはクモの巣状刷毛目が施されている(68)。クモの巣状の刷毛による回転調整痕は後期弥生式土器特有の調整技法で、(86)にも看取される。

水平叩き目の施された(75)の鉢は、底部周縁に指圧痕がみられ、底面はやや上げ底となり、中心部は突発的に凹む。内面にはヘラによる整形痕が残り、その上をナデでいる。胎土には微砂を混え、灰褐色を呈する。

(87)は高さ○・五センチ、底径三・〇センチを測る

高台を付設した小さな土器で、胴部最下端底部との境

目やや上寄りにヘラ状工具による沈線鋸歯文がみられ、施文部位としては非常に珍らしい。文様は一回りせず、時計回りに施文されていることがわかる。黄褐色ないし

赤褐色を呈し、胎土には若干の石粒を含む。鉢のミニチュア品とみられ、同様な施文手法は、伊丹市大阪空港

A遺跡出土の高杯形土器に一例存し⁽⁴⁾、ヘラ描きの波状文であること、及びその施文位置(杯部下半)はこれに等しく共通する。

(88)は底部に焼成前穿孔のみられる鉢で、底径は小さい。外面には成形時のヘラ圧痕が残存している。黄色味を帶びた赤褐色で、胎土には細砂を含み、長石の粒が目立つ。飴の役割を果すものである。

f 回転台形土器実測図
式土器に普遍的にみられる器種のいすれにも属さず「回転台形土器」と呼称されている土器が一点みられるのである。

掲げておく(図74・写真33)
33 参照。

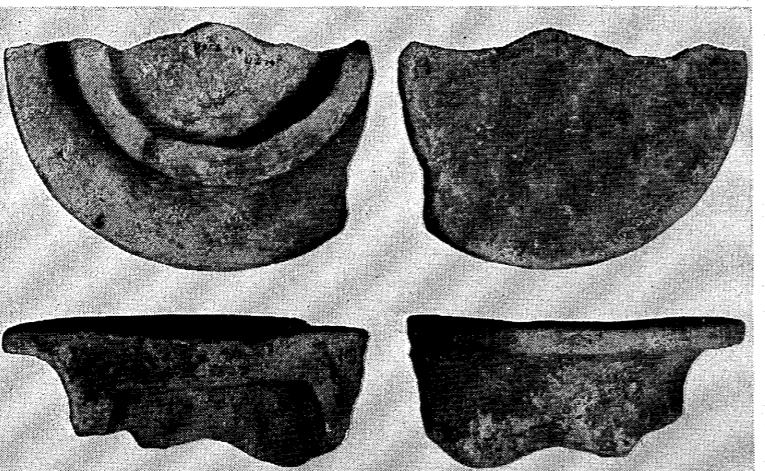


写真33 回転台形土器細部
(左上 内面下より 左下 内面断面
右上 外面上より 右下 外側面)

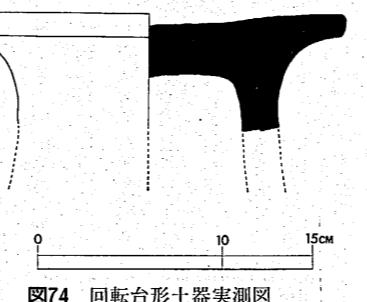


図74 回転台形土器実測図

完存していないので原形は全く不明であるが、現存部分より推測するに、円筒状の器体に厚手の台状部を付設して一方を密閉した形態で、台状部は明瞭な端部を有し、その平面形は復原径二二・〇センチの正円形を呈している。整形にはナデ調整に先行するヘラ圧痕が浅い凹部をなして残る。円板台状部の周縁及び端部は一部ヨコナデが施され、中央は縁辺部に比してかなり厚く、上面は〇・六センチばかりくぼむ。台状部の器表面を観察すると、このくぼみの主として周間に著しい擦痕が認められ、何らかの使用痕を物語る。おそらくこのくぼみ自体も当初から

存在したのではなく、こうした痕跡に伴つて生じたものであろう。黄白色を呈し、胎土には細砂を混える。昭和四十二年、会下山支尾根南斜面の遊歩道近くで採集されたものである。

註(1) 森岡秀人「会下山弥生遺跡緊急調査報告」『芦屋市文化財調査報告』第八集 昭和四十九年 芦屋市教育委員会

(2) 佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2 昭和四十三年

(3) 村川行弘・石野博信「会下山遺跡」『芦屋市文化財調査報告第三集』昭和三十九年 芦屋市教育委員会

(4) 『伊丹市史』第四卷 昭和四十三年 伊丹市役所

昭和三十三年八月の会下山遺跡の発掘調査に関連して、神戸営林署の現地立会いのもとに試掘調査を実施し、国有林の山頂平坦部にトレンチを設定した。⁽¹⁾

(口) 城山遺跡（芦屋市山芦屋町）

古くは紅野芳雄が弥生式土器の出土を報じている。昭和二十二年八月、村川行弘が山頂部で弥生中期（畿内第IV様式）の土器片を若干採集したことから認識が高まり、昭和三十二年十二月に村川・石野博信が予察的な調査を行なっている。



写真34 城山遺跡遠景（大正期の絵はがきから）



図75 (a)会下山遺跡、(b)城山遺跡、(c)城山南麓遺跡、(d)笠ヶ塚遺跡
位置図 (1 : 5000)<破線は遺跡推定範囲を示す>

近に見下すことができる位置にあり、会下山最高所との比高差は約五〇メートルである。西側は岩塊群のロックガーデンとなり、東側の斜面は南流する芦屋川に接している(図75参照)。

眺望の最もよい所は、遺構の検出された標高二三〇メートルの山頂をやや降った地域で、山頂部では東か西の一方しか展望がきかないのに対し、ここでは東西の展望が自由で、頂上よりも地の利を得ている。現在は全山が国有林であり、緊急に破壊されたり現状変更がなされることはないので試掘調査以上の発掘を行なっていない。将来には学術的調査の対象として注目すべき高地性遺跡の一つである。

遺構 昭和三十三年の試掘調査では城山の山頂尾根部五ヶ所にトレンチが入れられている。

城山の尾根部は細長く若干起伏しているが、その鞍部に設定した第一号トレンチ(東西一メートル・幅五〇センチ)では表土下五センチで地山が検出され、この地区に

出されている。山道の傾斜面上に設けられた第四号トレンチ(一メートル平方)では、表土層(厚さ五センチ)・黒褐色土層(一〇センチ)・茶褐色土層(一七センチ)の層序が確認され、その下は地山となっている。遺物は表土直下の黒褐色土層から含まれており、地山に達するまでの各層に包含されている。

山道からやや東にはずれた地域に設けられた第五号トレンチ(長さ二・二メートル・幅六〇センチ)では、表土層(厚さ一〇センチ)の下に灰褐色土層(一〇センチ)・黄褐色土層(一二センチ)・黒褐色土層(三三センチ)の三層があり、それぞれ遺物が包含されており、最下層の黒褐色土層からは彩色土器が何点か出土している。本トレンチでは、この土層の直下、表土下約六五センチの深さで地山面に到達するが、この地山面において柱穴状のピットが二か所検出された。一つは径一八センチ・深さ一〇センチ、いま一つは径一二センチ・深さ一〇センチばかりの小孔で、トレンチ内において四五センチの距離を保つている。検出面は堅くつきかためられた状態であり、住居

は遺物の散布・包含は認められていない。また城山山頂

部高压線鉄塔下で試掘されたトレンチ(二・三号トレンチ、共に東西二メートル・幅一メートル)でも、表土下一〇センチで褐色地山層が検出され、遺物包含層は遺存していない。ただし、この地域では遺物が若干表面採集されている。

これに対して、前述した鉄塔以北の標高二三〇メートルの尾根上凹部には土器片の散布が著しく、ここに設定された第四・五号トレンチからは遺物と若干の遺構が検出されている。

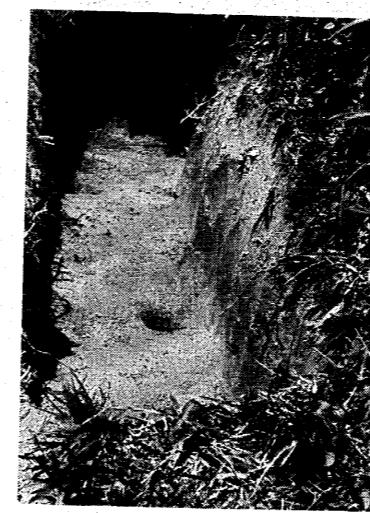


写真35 第5号トレンチの柱穴状ピット

址の床面とも考えられ、この二か所のピットは桿木柱の痕跡と推定される(写真35参照)。

このようなことから尾根上の凹地一帯にはかなりの規模をもつ集落址が遺存しているとみられ、表六甲山系に分布する高地性集落の中でも、やや特異な立地条件をもつ遺跡として注目されよう。

遺物 出土遺物については、すべてを整理していくないので、管見にふれた第三号トレンチの資料を若干紹介するにとどめたい(図76・写真36参照)。

三号トレンチ出土の弥生式土器は微量で、破片数にして約三〇点を数えるにすぎない。うち器種や時期の判明するものは数点で、壺・甕・器台・底部などがみられる。出土層位は第三層の黄褐色土層である。

(1) は壺形土器の口縁部断片で、端部を上下に拡張し、端面には三条の凹線文が施され、内外両面には顯著なヨコナデ調整痕を残す。口縁部内面は若干の平坦部を有して頸部へと移行する。色調淡赤褐色で、胎土には微

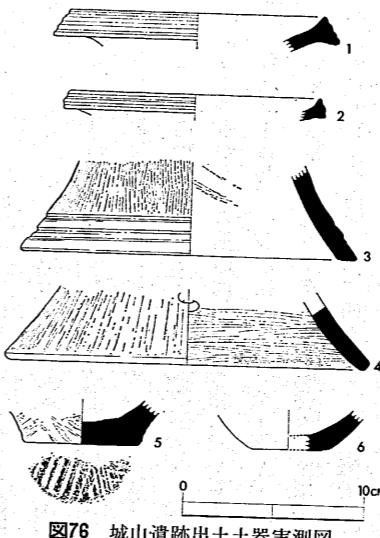


図76 城山遺跡出土土器実測図
(第3号トレンチ出土)

砂を含み、焼成は堅緻である。復原口径一四・〇センチを計測する。

(2) は甕形土器の口縁部片で、口縁端部を上下にいや扯張し、端面には二条の浅い凹線文をめぐらす。淡褐色を呈し、外面は一部煤化し、有機物質の付着を見る。胎土・焼成はともに良好である。

(3)・(4) は器台形土器の破片で、いずれも下半の裾部断片である。(3)は外面を荒い刷毛を縦方向に用い

る。焼上り良く、内外両面共淡い赤褐色を呈し、器面は堅緻である。胎土中には石英粒・長石粒が散見される。図を上下逆にして考えれば、同時期にみられる直口型の壺の口縁部になるかも知れない。透じ孔を残す(4)は、裾部でやや器厚を減じるが、ほぼ一定の厚みを有し、内面は横方向に荒い刷毛で調整した後ナデて、外面は弱いへラ磨きによつて仕上げられる。裾端部にはかなり丸味をもたせてゐる。全体的に黄色味を帯びるが、内面はやや暗い色調を呈している。胎土中には微砂を混える。

(5)・(6) は底部の残欠である。(6)は器表の摩滅が著しく、時期や器種について明らかにし難いが、(5)は底径約六・二センチの甕形土器の底部とみられる。外面上には斜方向の叩き目が施され、叩き目は底面全体にもおよんでいる。底部底面に叩き目が認められる弥生式土器は、六甲山系の諸遺跡において実例少なく、非常に珍らしい例といえよう。また、詳細に観察すると、少なくとも二種の原体(叩き板)が使用されていたことがわかつ

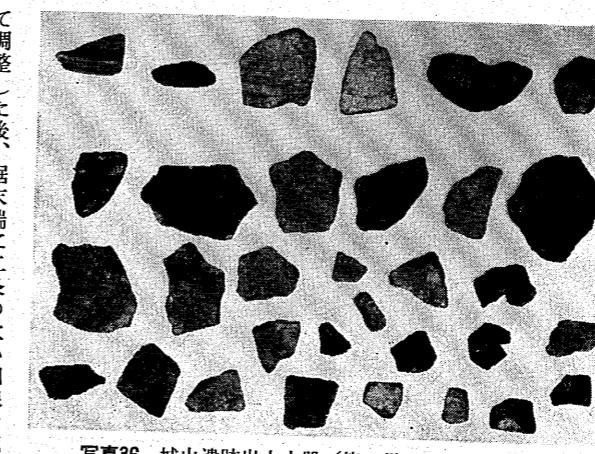


写真36 城山遺跡出土土器 (第3号トレンチ出土)

て調整した後、裾末端に二条の太い凹線を施し、その上下をヨコナデして仕上げる。下段の凹線は上段のそれに比べやや粗雑で、谷部にさらに二条の擬似凹線を見る。裾部末端は内傾し、内面とともにナデて平滑に仕上げられ

る。一つは四凸の間隔が広く太い手のもので、四部の実数は(二条/cm)を数え、いま一つは(四条/cm)の割合の細筋のものである。底部底面ではこれら二様の叩き目が交錯しており、製作工程に応じて使い分けがなされたとは考え難い。外面赤褐色、内面灰黒色を呈し、胎土には小石粒を含んで、焼き上りは脆弱である。

時期に関しては、(1)・(2)・(3)が畿内第IV様式に、(4)・(5)の二点が第V様式頃に位置づけられ、予察調査時には畿内第III様式に遡る資料も採集されているので、城山遺跡の存続年代についてはかなりの幅を認めざるを得ない。おそらく中期末(第IV様式期)に盛行の中心を置きつつも、会下山遺跡同様、長期間集落が営まれていたのであろう。

他に注目すべき資料として、黒雲母微細片を含んだ河内系の土器一点の存在を付言しておきたい。

註(1) 村川行弘「芦屋城山遺跡調査概報」芦屋市文化財調査報告書第一集 昭和三十四年 芦屋市教育委員会

(八) 城山南麓遺跡（芦屋市山芦屋町）

前述した城山遺跡の山麓部一帯には、古くから弥生式土器と石鎌・石匙・石斧などの石器類の散布が知られてゐる。『新修芦屋市史』本篇の記述では、「山芦屋遺跡」としてその概要を紹介したが、ここでは、本遺跡の発見者である吉岡昭が著書『郷土石器時代文化研究』の中で終始一貫「城山麓」と呼んでいることを尊重し、また先にあげた城山山頂の遺跡と区別する意味から「城山南麓遺跡」と改称する。なお、吉岡は昭和十七年頃、本遺跡を踏査している。

位置と環境 遺跡は、芦屋川に高座川が合流する三角点以北。兩川にはさまれた地形に位置し、標高約六〇・一六〇メートルの山麓の緩傾斜面上にあり、遺物の散布は城山古墳群と重複して鷹尾山中腹にまで及んでいる（図75参照）。

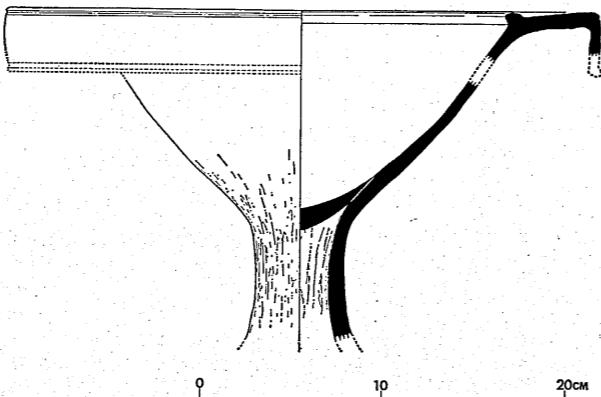


図77 城山南麓遺跡出土土器実測図
(吉岡つた所蔵)



写真38 城山南麓遺跡採集資料
(吉岡つた所蔵)

るものであり、ここでは割愛したい（第一章参照）。また、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校郷土史料室には、当地出身の福原潜次郎採集の資料が数多く所蔵されているが、その

中に城山麓採集とされる石鎌が一点存在する。

土器は図77のことく高杯形土器の破片で、口縁部と脚柱部の断片であるが、同一個体として復原可能である（写真38参照）。

水平線を有し、口縁部末端を折り曲げて下方へ垂下させ、内面には一条の隆起帯をめぐらせる形式の典型的な木器模倣型高杯である。拡張された口縁部外端面の最上端部に一条の凹線文を施し、凸帯を中心にして全体をヨコナデによって調整する。口縁末端部が欠損しているので明らかでないが、類品の文様構成からみて、凹線文は下端にも一条あつたものと思われる。

吉岡家所蔵の本遺跡採集遺物は土器一点と若干の石器類が知られるにすぎない（写真37参照）。石鎌などはその製作手法・形態からみてすべて縄文時代に属す



写真37 芦屋発見石斧の図〈吉岡昭著『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』P40~41より〉

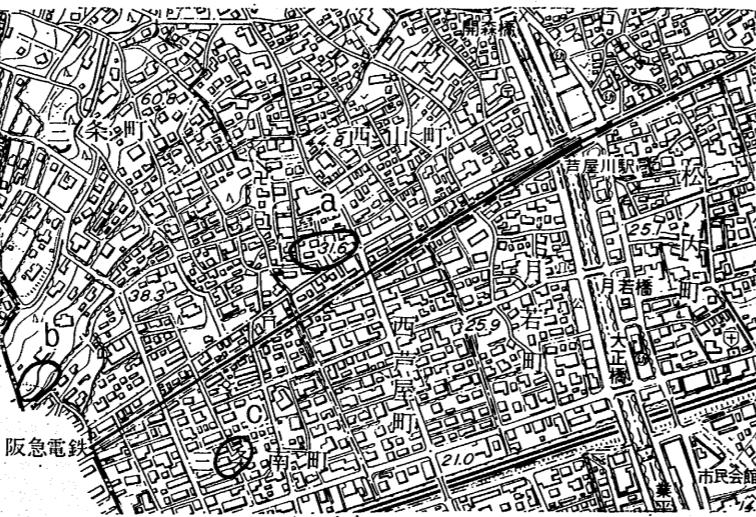


図79 (a)芦屋廃寺下層遺跡、(b)三条岡山遺跡、(c)西良手遺跡位置図 (1:10000)

遺物の出土状況 芦屋廃寺の調査は、第一次(A地区予察調査)・第二次(C地区緊急調査)・第三次(D地区緊急調査)と継続して実施されたが、弥生式土器は調査地区内の各トレンチで少量出土している。

発掘地域の北半であるA地区では弥生式土器の包含層



図78 城山南麓遺跡採集図 (縮尺山石器実測県立篠山風鳴高校土室所)

杯部は内面をへラによつて平滑に仕上げ、外側は全体をナゲ、下半をへラで磨く。脚柱部はよく絞られ、内面にその痕跡を顯著にとどめ、外側は縦方向にへラ磨きをかける。

内面の絞り目は脚裾部にかけて整形し、消している。色調は内面が暗黄赤色で褐色味を強く帶び、外側は暗赤褐色を呈し、口縁部付近が全体的に明るい。

『土器集成』では、高杯形土器B₃に分類される器種で、畿内第三(新様式)IV様式頃に比定できる。城山頂遺跡出土土器の指向する年代とほぼ合致し、両遺跡の関係が問題となろう。

篠山風鳴高校所蔵の石器(図78参照)は、サヌカイト製の四基式打製石鎌で、先端部と基部の両端を欠損している。灰黒色を呈し、石質は良質で、扁平なつくりをなしている。裏面の剥離は粗く、縁辺のエッジはかなり鋭い。

重量は〇・七五グラムを測り、この形式のサヌカイト製石鎌に共通して非常に軽い。所属時期については、一応

弥生時代のものと考えられたため、本章において扱つたが、土器の示す年代(弥生中期後半)に比定するにはやや

難しい形式といえよう。

註(1) 吉岡 昭『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』昭和十九年
(2) 佐原 真「畿内地方」『弥生式土器集成』本編2昭和四十三年

(二) 芦屋廃寺下層遺跡 (芦屋市西山村)

昭和四十二年十月より同四十三年八月まで、芦屋市教育委員会が三次にわたって行なった芦屋廃寺の発掘調査に付随して確認された弥生遺跡である。

位置と環境 遺跡は本市の西端、旧芦屋村と三条村の境のところに位置し、表六甲の南面する小山塊が急傾斜して沖積平野に接続する傾斜変換線上に立地している

(図79参照)。阪急電車神戸線芦屋川駅から線路北側沿いの市道を西へ進んだところである。標高三〇～三四メートルを測る地域で、遺跡地背後には標高二二〇メートルの城山遺跡があり、その下山遺跡と標高二五〇メートルの城山遺跡があり、その間を流下する高座川と城山の東方を南流する芦屋川が、遺跡地の北東方約四〇〇メートルの地点で合流している。合流の成った芦屋川の河畔から本遺跡までの直線距離は約三〇〇メートルであり、高座川・芦屋川両河川の氾濫原に立地していた可能性も強く、遺物の出土状況から察して遺跡の中枢部がさらに北方あるいは東方にあることも予想される。発掘調査の行なわれたか所は西山町一三四番地の旧板木邸内の僅少な面積である。

2 市内の主要な弥生遺跡

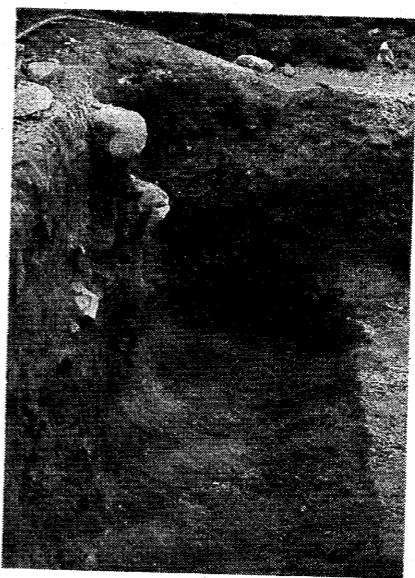


写真39 弥生式土器出土のトレンチ(D-I)

はなく弥生時代の単純包含層が検出された地域は南のC・D地区に限られ、かつ地区内においても局部的である。

C地区ではIIトレンチで、表土下一・七メートルの最下層に弥生式土器片・サヌカイト片などを含む黒色の薄い散布層があり、その南のVトレンチでは表土下一・九メートルの深さに弥生式土器を包含する硬質の黒色土層が遺存していた。この東に位置するVIトレンチでも、やはり最下部の黒色土層中で、若干の弥生式土器・サヌカイト

片を検出しており、当地区での状況は互によく似ている。

D地区では、Iトレンチで、瓦片が密集した状態で遺存していたが、この瓦の堆積層下に弥生式土器を包含する黒褐色土層が広がっていた(写真39・図80参照)。

IIIトレンチでは、弥生式土器・石器・須恵器・土師器などの遺物が混在する準地山質土層が検出され、他の試掘場とは若干様相を異にして残る。

図80 芦屋廃寺下層遺跡弥生式土器包含層(D Iトレンチ西セクション)

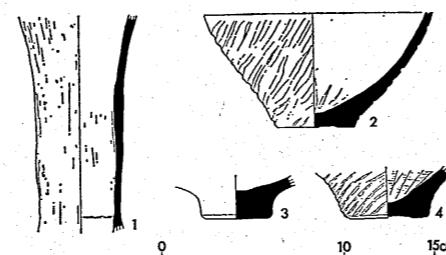
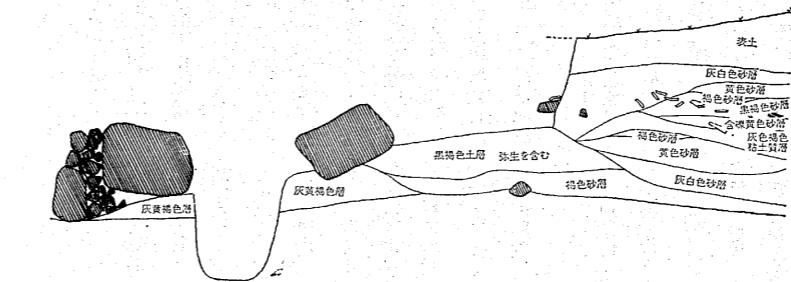


図81 芦屋廃寺下層遺跡出土土器実測図

いる。このように、弥生時代の明確な遺構は如何確認されていないが、芦屋廃寺址の下層深くに薄いながらも弥生遺物包含層の遺存する事実が判明しており、近辺に弥生時代の集落址のあった可能性がなお残る。

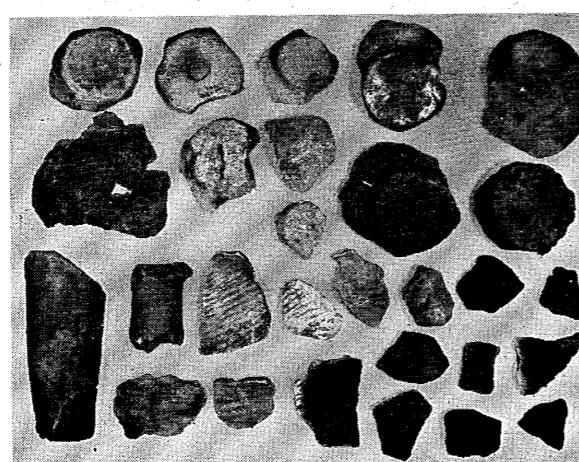


写真40 芦屋廃寺下層遺跡出土弥生式土器(1)

出土遺物 若干量ではあるが弥生式土器が検出されている。ほとんどが細片であり、器形の判明するものは少ない。完形品としては畿内第V様式の鉢形土器が一点あり、他に長頸壺の頸部破片や壺・甕の底部残欠が微量含まれている。いずれも後期の時期に属するものである(図81・写真40・41参照)。

らていねいにナデられる。器壁は非常に薄くつくられ、外面は入念にヘラ磨きを施して平滑に仕上げられる。内面は漆黒色を呈し、外面は淡褐色を帶びて一面に付煤を見る。胎土には細砂を含む。口縁部と胴部以下を欠くがタマネギ状の橢円球体になる胴部がつくものと思われる。後期後半でも新しい様相を帯びた土器である。D地区Iトレンチ出土。

(3)・(4)は底部の残欠で、前者は壺、後者は甕と思われる。(3)は平底で小さく突出し、(4)はドーナツ状の上げ底で、外面にはクツ状の巣状の刷毛回転調整痕が認められる。(3)はC地区I Aトレンチ、(4)はD地区IIIトレンチ拡大部でそれぞれ出土したものである。

完形の鉢(2)は、口径

一二・七センチ、底径四・二センチ、器高六・四センチを測る小型品で、底部は平底で中央の一部がわずかに凹む。器面全体を叩き目技法によって成形し、底部から口縁部までラセン状に一挙に仕上げた感じで器壁は非常に薄い。叩き板原体の溝幅は比較的粗い。内面の調整は不調で、底の方には放射状にヘラ圧痕を残している。口縁端部の整形も粗悪で、部分的にはヘラで扁平に削り取られ、また一部には浅い筋が走る。擬口縁(false rim)かもしれない。色調は淡い赤褐色で、器表全面に黒色の有機物が付着している。胎土には砂粒を含む。

註(1) 村川行弘『芦屋廃寺址』(芦屋市文化財調査報告第7集) 昭和四十五年 芦屋市教育委員会
註(2) 紅野芳雄の発見によつて、その遺著『考古小録』に初めて紹介された遺跡で、昭和九年三月十四日の記事を初見として、同九年六回、昭和十年には九回の記述がみられ、昭和九年から十年にかけて合計一五回(踏査回数は正確には一九回)盛んに遺物の採集活動が行なわれたことが知られる。

六甲山系低地部の実体の不明確な遺跡が多い中で、文献よりある程度の状況が復原できる遺跡として重要である。

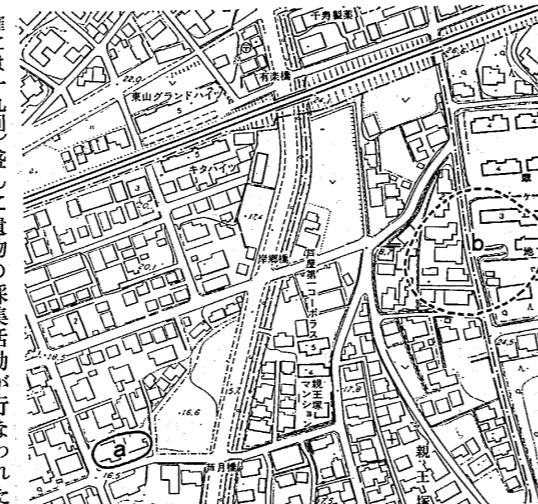


図82 (a) 打出岸造り遺跡、(b) 打出岸造り遺跡位置図
(1:5000) <破線は遺跡推定範囲を示す>

位置と環境 遺跡は、翠ヶ丘町に所在する阿保親王塚より西方二〇〇メートル余の地域一帯で、宮塚町で一部曲折しながらも海岸より上宮川町までほぼ直進する宮川が岩園町にかけて東へ大きく傾く川沿いのところにある(図82参照)。

遺物が数多く発見された場所は、この宮川に沿つて岩ヶ平に通ずる道路の西側といわれ、高さ二メートル程の台地の東端を切下げて道路を開設した際みつかったらしい。現在遺跡地一帯には人家が立ち並び、市街地と化して、遺物の採集された頃の面影を知るよしもないが、弥生遺跡として、かなり広範な規模のものであつたことが推測できる。

確には一九回(盛んに遺物の採集活動が行なわれたことが知られる)。

遺構 住居址・溝など明確な遺構の存在は確認されていないが、遺物包含層の状況は紅野によつて克明に記録されている。それによると、道路敷設の両側崖の北側で、地表下三五~一〇〇センチのところに弥生式土器の濃厚

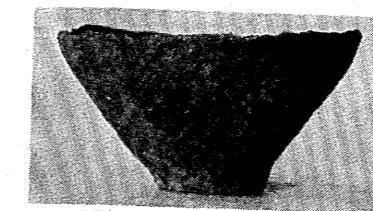


写真41 芦屋廃寺下層遺跡出土
弥生式土器(2)

ヶ平丘陵一帯にあり、標高六〇七一一メートルを測る
表六甲南斜面の洪積台地上に所在する。

『考古小録』には「岩ヶ平」という表記の他、「岩ヶ平」
平西方約三町の丘陵・同「西方約二町」・同「西南約
四町」・同「西北一町余小
谿の西丘陵の中腹」・同「南
方約四町の丘陵先端の畑地
上」(=旧字杭ヶ谷)とい
採集場所の記述がみえ、遺
物の散布が各所に散在して
いたことが知られ、遺跡
の範囲は旧岩ヶ平集落を中
心にかなり広域であつたも
のと思われる。吉岡昭作成
の『芦屋市遺跡地図』(昭
和十七年八月)をみると、

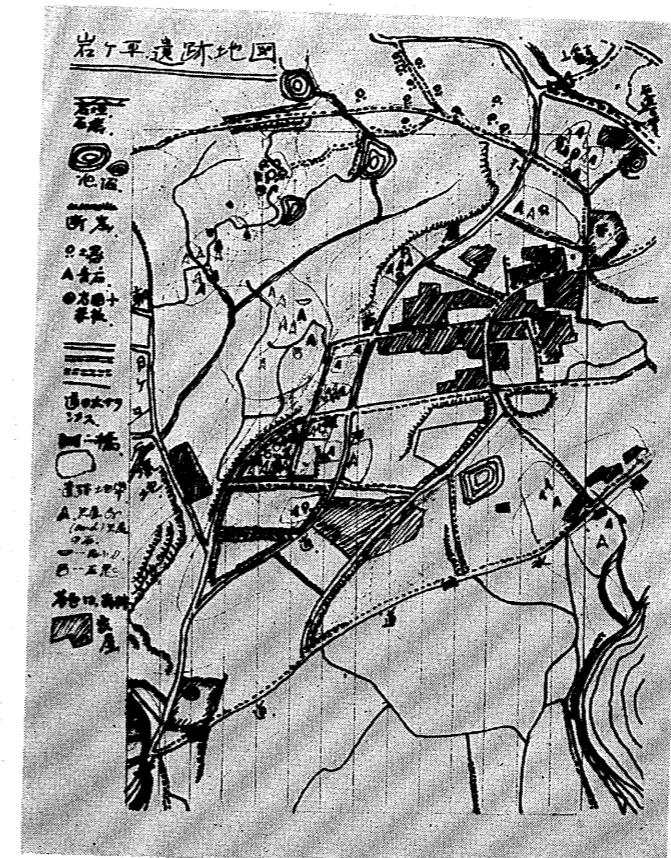


写真42 吉岡昭作成の『岩ヶ平遺跡地図』(昭和17年)

東南隅に岩園天神社を表示
して夙川の一支流(通称ど
んどん川沿いに細長くその
範囲が画されており、第三
章にて後述される八十塚古墳群(古墳時代後期)の分布と
ほぼ重複している。また、同氏による『岩ヶ平遺跡地図』
には遺物の散布状態が克明に記録されているが(写真42参
照)濃密な分布を示すか所(岩ヶ平・岩ヶ平東方・同東南方
・同南方・同西方・同西北方)は当時の集落の西方の丘陵
上の二か所を筆頭に『考古小録』の各記事と照合するこ
とが可能であり、とりわけ石器の分布は限られているよ
うである。

昭和六年頃より、付近一帯では耕地整理と新道敷設が
活発となり、昭和八年には遺跡地南端の杭ヶ谷周辺がそ
の西に隣接して建築の精道村立岩園尋常小学校(現市立
岩園小学校)の敷地地上げ用土砂の採取場と化し、消滅
している。現在でも、宅地化が徐々に進んでおり、遺跡
の古環境は失われつつあるが、なお畠地や山林のまま當
時の景観をとどめるところが随所にみられ、サヌカイト
剝片など、まだ少なからず遺物の散布が認められる。

出土遺物 石器・サヌカイト片が圧倒的多数を占めて

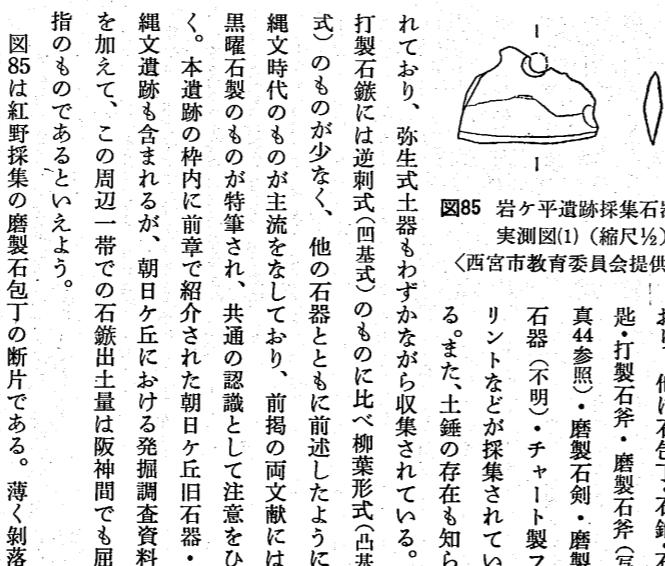


図85 岩ヶ平遺跡採集石器
実測図(1)(縮尺1/2)
(西宮市教育委員会提供)

おり、他に石包丁・石錐・石
匙・打製石斧・磨製石斧(写
真44参照)・磨製石劍・磨製
石器(不明)・チャート製フ
リントなどが採集されてい
る。また、土錐の存在も知ら
れており、弥生式土器もわずかながら収集されている。
打製石器には逆刺式(凹基式)のものに比べ柳葉形式(凸基
式)のものが少なく、他の石器とともに前述したよう
に繩文時代のものが主流をなしており、前掲の兩文献には
黒曜石製のものが特筆され、共通の認識として注意をひ
く。本遺跡の枠内に前章で紹介された朝日ヶ丘旧石器・
繩文遺跡も含まれるが、朝日ヶ丘における発掘調査資料
を加えて、この周辺一帯での石器出土量は阪神間でも屈
指のものであるといえよう。

図85は紅野採集の磨製石包丁の断片である。薄く剝落
したもので双孔の一つが欠けている。粘板岩製である。

図86・写真43は村川行弘提供の資料で、昭和三十四

年、本遺跡の北限付近(六麓荘町)で採集された磨製石剣片である。身部中央に鎬があつて断面菱形となる典型的な形状をなしてはいないが、鉄剣形石剣に分類できる形式のもので、基部末端の一部と先端部を大きく欠いている。現存する石剣の長さは一三・五センチ、最大幅三・五センチ、最大厚一・〇センチを計測し、基端から六・〇センチのところの両側縁に双孔がある。穿孔は両面から行なわれており、柄を着装するために機能を果した小孔と考えられる。やや外彎きみの刃部はともに直角に磨かれ、刃潰しがよくなされており、それは基部へいくに

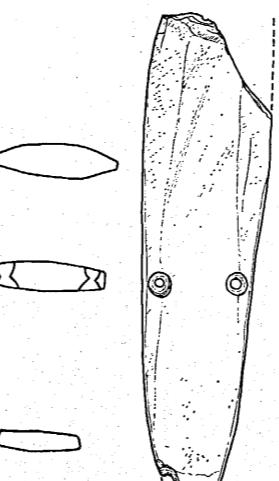


図86 岩ヶ平遺跡出土の石器
(岩ヶ平遺跡実測図(2)行弘提供)

したがい顯著である。剣身の両側縁はよく研磨され、最大部付近では断面六角形状を呈してレンズ状に近い。磨研は中央平坦面では左下から右上へ長軸方向に、両側縁ではより斜方向に行なわれ、それに応じて擦痕が残されている。柄の着装する部分と剣身との間には特別な加工を施していないが、基部末端と身部の欠損箇所には軽く研ぎだされた痕跡が認められ、損壊後に二次的な加工を行なっている。石質は軟質の粘板岩と思われる。



写真44 岩ヶ平遺跡出土の石斧(縮尺1/2)
(吉岡つた所蔵)

写真43 岩ヶ平遺跡出土の磨製石剣(縮尺1/2)

第2章 弥生時代



図87 藤ヶ谷遺跡位置図(1:10000)
(破線は遺跡推定範囲を示す)

え、青屋神社から二〇〇～三〇〇メートルあまり隔つた所に小さな池があつたらしいが、現在、消滅して正確な位置はわからぬ。当時、これに接して北側には赤土の山肌が露出し、ここから弥生式土器が出土している。遺跡としては、西に隣接する山手町笠ヶ塚遺跡と連なつていたのかもしれない(図87参照)。

位置と環境 『考古小録』には先のような記述がみ

出土遺物 弥生式土器・石鎌の他・少量の敲石・凹石

市内出土の磨製石剣では最も保存完好のもので、鎬を欠き、双孔を有する点など鉄剣形石剣としては類例の少ないものである。

註(1) 紅野芳雄『考古小録』昭和十五年 西宮史談会

(2) 吉岡 昭『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』昭和十九年

(ト) 藤ヶ谷遺跡(芦屋市東芦屋町)

紅野芳雄『考古小録』⁽¹⁾には「猿の宮(芦屋神社)北方」あるいは「猿の宮西北」の小池の西畔所在の石器時代遺跡として登場し、吉岡昭による『芦屋市遺跡地帯地図』には「藤ヶ谷遺跡地帯」としてあげられている。ここでは旧字名にのつとつて「藤ヶ谷遺跡」と呼称することにしたい。

・磨石(はずれも磨製品)・石錐の未成品などがある。サスカイト片は他の遺跡同様多い。弥生式土器片はすべて無文であり、帰属すべき様式は不明である。

(1) 紅野芳雄『考古小録』昭和十五年 西宮史談会
(2) 吉岡昭『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』昭和十九年

位置と環境 市域の最西端、神戸市東灘区との境界近くの丘陵傾斜面上に所在し、標高五〇メートルほどのところに立地している。南を東西に通る阪急沿線からは直線距離にして約一五〇メートル離たつていて(図79参照)。造園工事の行なわれた場所は、阪口邸の南端、南面する緩傾斜面で、現在は同氏の庭となつて一部は保護されているようである。

(チ) 三条岡山遺跡(芦屋市三条町)

昭和三十五年一月、市内三条町二四〇番地の阪口二郎邸内で造園工事が行なわれた際、発見された遺跡で、工事に並行して村川・石野・岩本・伊井孝雄らによつて若干の立合い調査がなされている。従来より「三条二四〇番地遺跡」と称され、この近辺では比較的古式の須恵器や埴輪・陶棺片の出土地として注目されていたが(第三章参照)、本章では当番地の一画を含む小字名にしたがい、「三条岡山遺跡」と改称しておくことにしたい。

遺構 工事によって土取りされたか所は阪口邸の現門柱から東へ約二〇メートル、南へ最大五メートルほどの範囲で、表土から地山まで約一メートル五〇センチあり、薄い黄土層を被覆した幅約一メートルの暗黒色土が遺物を多量に包含していた。

伊井の当時の記録によると、ある地点での土層は表土(三九センチ)、茶褐色土層(三五センチ)、白褐色土層(七〇センチ)、黒褐色土層(二五センチ)で黄褐色地山に到達したといい、最下層の黒褐色土層より遺物が出土したらしい。しかし、明確な遺構は確認されていない。

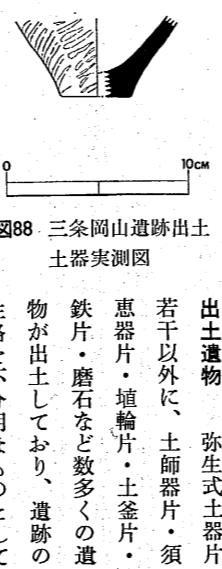


図88 三条岡山遺跡(芦屋市三条町)

い。

図88は中でも比較的大きな破片で、外面を叩目成形し、平底である。畿内第V様式に比定できる甕形土器の残欠とみられる。他の小片も後期の土器であり、前述した芦屋廃寺下層遺跡同様、後期單純の遺跡と考えられる。

(リ) 西良手遺跡(芦屋市三条南町)
にしながら
に記載部分

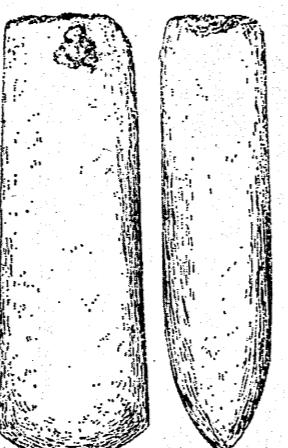


図89 西良手遺跡出土石器の図(『考古小録』より)

2 市内の主要な弥生遺跡

- 191 -

昭和四年初頭、西芦屋字西良手の島之夫宅にて井戸

構築中、遺物が出土してその存在が知られた遺跡である。紅野芳雄『考古小録』の同年六月二十九日の記事にその時の記録がある。

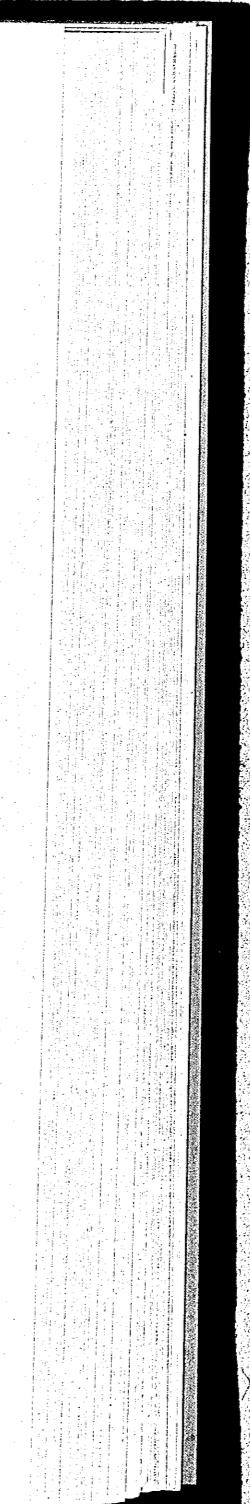
位置と環境 阪急電鉄と国鉄にはさまれた地域、芦屋川河岸から西へ五〇〇メートル余り隔つたところに位置するが(図79参照)、遺跡の規模や性格などは全く不明であり、遺物は現地表下約九〇センチのところで出土した磨製石斧一点にすぎない。

出土遺物 基部の幅約五センチ、刃部幅約六センチ、

性質を不分明なものとしている。

図88は中でも比較的大きな破片で、外面を叩目成形し、平底である。畿内第V様式に比定できる甕形土器の残欠とみられる。他の小片も後期の土器であり、前述した芦屋廃寺下層遺跡同様、後期單純の遺跡と考えられる。

(リ) 芦屋郷土史料室日誌 昭和三十五年の記載部分
に克明な記録がみられる。



長さ約一八センチ、厚さ約四センチ(平均)の大型完形の
大型蛤刃磨製石斧で、頭頂に摩滅痕が看取される(図89)
参照)。

註(1) 紅野芳雄『考古小録』五四ページ参照。

(ス) 打出地造り遺跡(芦屋市親王塚町・翠ヶ丘町)

位置と環境 後述される阿保親王塚古墳の北西、台地
北端にあり、打出岸造り遺跡とは二〇〇~三〇〇メート
ルの距離を隔てて近接している(図82参照)。現在、宅地
化して消滅しており、遺跡範囲など定かでない。

出土遺物 サヌカイト片が若干量採集されている。從
来より弥生遺跡としてあげられてきたが、土器の出土が
報ぜられていらない以上、集落址の存在した可能性は薄い。

註(1) 紅野芳雄『考古小録』昭和十五年 西宮史談会

(ル) 笠ヶ塚遺跡(芦屋市山手町)

戦前、吉岡昭がたびたび踏査し、石器類を中心とする
遺物を採集している。その実態
については不明な点が多いが、
『郷土石器時代文化研究』に若
千の記載がある。

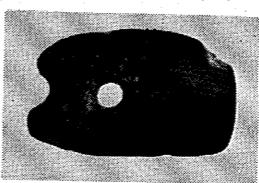


写真45 (吉岡)
位置と環境 芦屋川の上流、
市立山手小学校北方の洪積台地
上一帯に広がる遺跡で(図75参照)、現在部分的に景観を
とどめているか所もあるが、大半は宅地化して、當時遺
物の採集された場所など不詳である。

出土遺物 弥生式土器と石鎌・石匙・石槍・有孔石器
(写真45)などが採集されているが、石器の大部分は縄文
時代に属するものである(第一章参照)。

註(1) 吉岡 昭『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』昭
和十九年

(ヲ) 堂ノ上銅鐸出土地(芦屋市楠町)

芦屋市域における唯一の銅鐸出土地である。從来は、元
禄四年(一六九二)の阿保親王塚陵墓の周濠修築の際、
発見されたものとして伝えられており、打出親王寺の縁
起にもその記述を見る。こうした所伝には全く疑義がな
いわけではなく、何らかの事実的相違があることは、既
に『芦屋市史』の記述においても指摘されている。⁽¹⁾
ところが、昭和四十四年の市史編集委員による史料調
査の際、山口県文書館所蔵の毛利家文書の記載によつて、
正確な出土状況の記録が判明するに至つた。⁽²⁾その記録は、
文政元年(一八一八)五月二十二日に、長州藩主の毛利氏
の命を受けた村田清風が当市域の打出村を訪れ、阿保親
王塚の陵墓調査をし、『阿保親王御廟詮議』を復命して
いるものである。

この記録は、文政七年(一八二四)以降に記されたと推
定される和綴本で(写真7参照)、その中には「兵庫阿保
親王寺藏銅鐸の図」(毛利家文庫記録目録3公統・一〇一)
が載せられており、本銅鐸の両面の図が寸法入りでか
なり詳しく描かれている(写真46a参照)。また、「銅鐸・
堂ノ上ト云処ヨリ掘出ス宝永年間之事ナリ」という記述
もみえ、この銅鐸が実際に出土した場所と年代を明らか
にしてゐる。さらにその後の史料調査によつて打出阿保
山親王寺の宝物に関する文書類の中に「兵庫親王寺銅鐸
之図」(毛利家文庫記録目録五の中・絵図ヘニ)という原図が
発見され、それには先に引用した記載の後に補記で「宝
永三年戊辰月中旬ヨリ」と書き加えられて、より詳しい
発見年月が明らかになつた(写真46b参照)。ただし、原
図と和綴本の図とには若干の相違が認められる。

これらの諸記録によつて、親王塚出土といふ當銅鐸の
発見場所に関する伝承が改められ、六甲山系における低
地出土銅鐸の実態究明にひとつの手懸りを与えることと
なつた。

位置と環境

本銅鐸が実際に出土した「堂ノ上」という旧小字の地域は、市域の東部、現在の楠町に相当し、ながらく伝出土地として知られてきた阿保親王塚御陵の東南方五〇〇メートル隔たつたところに位置する（図90参照）。字名は『撰陽群談』や『撰津名所図会』などにみえる在原業平の父、阿保親王の別荘（堂）が建つてという伝承に由来したものであろう。国鉄東海道本線に沿つて南側一帯の地域で、南限は国道二号線が画している。現在この地には国鉄・住友化学寮などの建物が密集しており、正確な出土地点は不詳である。この付近の標高は一七メートルを測り、西を流れる宮川東岸からの直線距離は七〇〇メートルで、現状では河川や水や山などの信仰・祭祀との関連は考え難い。この近辺の銅鐸出土地

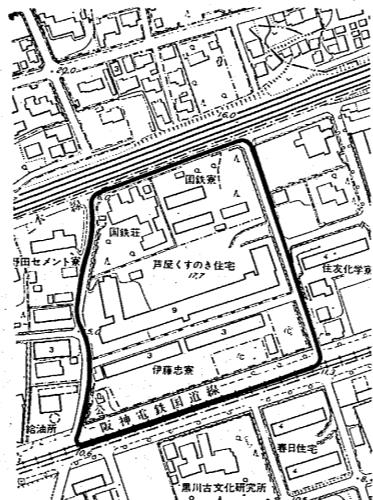


図90 堂ノ上銅鐸出土地位置図
(1 : 5000) <枠内が字堂ノ上の地域>

は六甲山地の南斜面に集中しており、本銅鐸のごとく低地より出土した例は、近隣では後述する西宮市津門のみである。⁽³⁾

銅鐸 佐原編⁽⁴⁾年の外縁付鉗II式に比定される銅鐸で、身はフ型の流水文で構成され、青緑色を呈し、全体的に磨滅が著しく、粗質である。つくりは厚手で鋳上りはあまりよくない。総高四五・三センチ、身の高さ三二・二センチ、底径二四・〇センチ（長径）×一六・六センチ

（短径）、鉗の高さ一一・三センチ、幅七・五センチを測り、舞は一五・四センチ×一一・〇センチの大きさである。

重量は四・七キログラムを計測する（図91・写真47参照）。

鉗は厚さ〇・八センチで両面共、最外縁部を内行鋸齒文で飾り、その内側を綾杉文で連ね、さらに内縁部は連続渦巻文を配している。鉗の文様帶の特異なことは、中央部には綾杉文帶をおかず、双様渦巻文でうめ、その下端には三日月状の区画が設けられて、内部には外行鋸齒文が五・五単位みられる点である。最内縁部については文様が明らかでなく、いわゆる素文帶を形成していたものと思われる。

鐸身を詳細にみると、部分的に青白色を呈し、〇・六センチのやや強い外反りがみられる。文様は五本の条線による流水文を描き、下段には二条の平行線を下に伴つた連続複線鋸齒文が配されている。

身の両側の鐘部は、幅二・二センチ、厚さ〇・三センチを測り、肩から下に太い四条の平行線を伴つた三対の双耳を飾り、その平行線で区切られた各区内に内行鋸

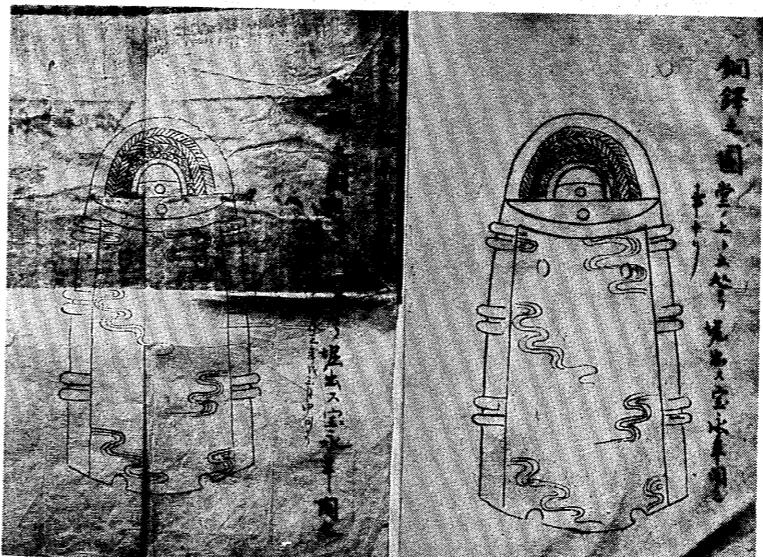


写真46(a) 「阿保親王御廟詮議」記載の堂ノ上出土銅鐸の図（右）
<山口県文書館所蔵>

(b) 「兵庫親王寺銅鐸之図」（原図）にみられる堂ノ上出土銅鐸（左）<山口県文書館所蔵>

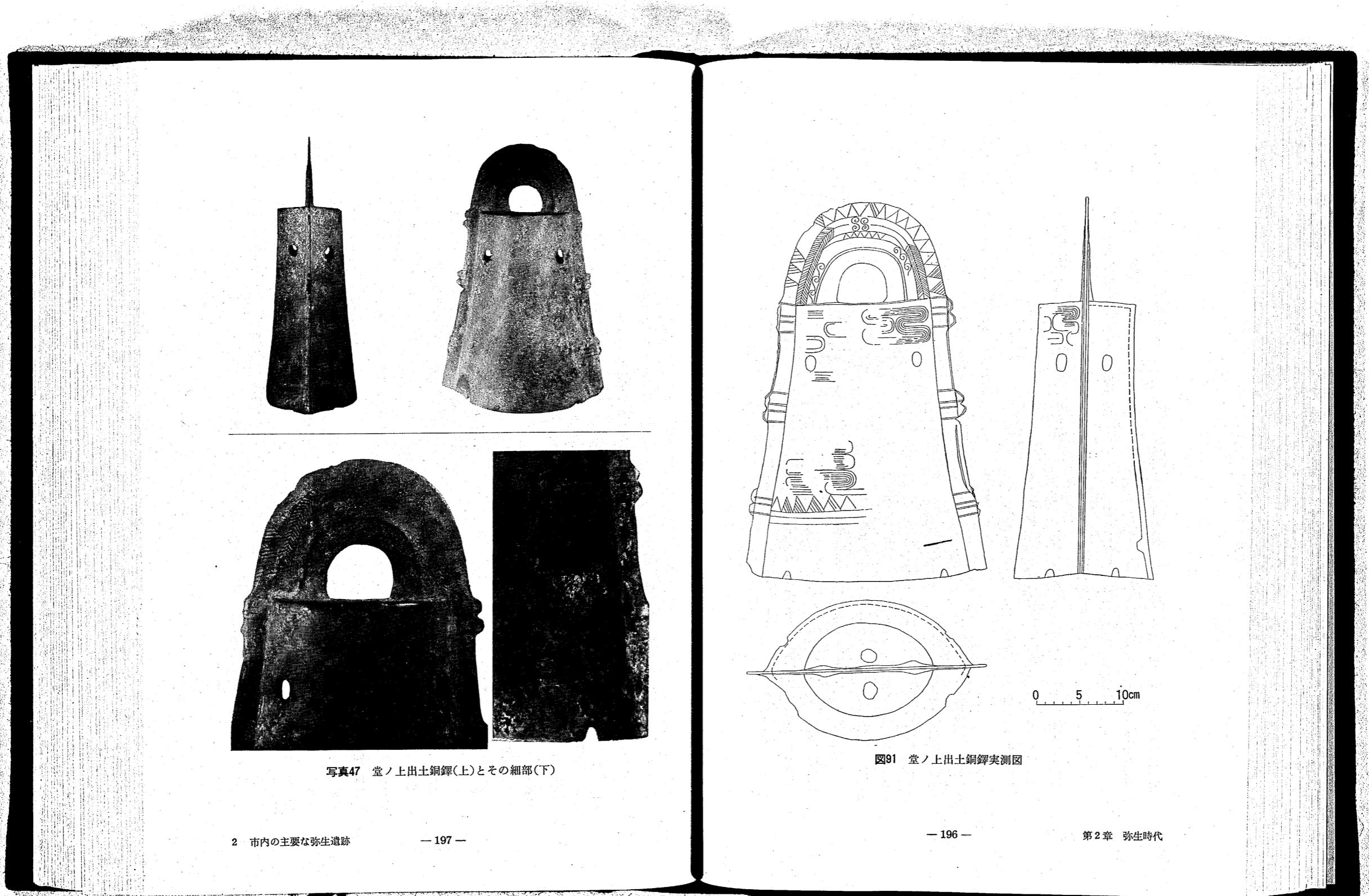


写真47 堂ノ上出土銅鐸(上)とその細部(下)

歯文をおいている。

鐸身上部の型持ちの孔は梢円形を呈し、両面にあり、下部縁端の型持ち孔は半楕円形できりこまれている。内面凸帯は下端より三・七センチのところにあり、頂端部は丸い形を呈し、幅一・五センチ、厚さ一・〇センチを測る。時期的には古の(新)に比定できる。

註(1) 魚澄惣五郎編『芦屋市史』本篇 昭和二十八年 芦屋市教育委員会

(2) 前掲書(『新修芦屋市史』本篇)

(3) 桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査委員会編『桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書(本編)』昭和四十四年 兵庫県教育委員会

(4) 佐原 真「銅鐸の铸造」『世界考古学大系』第2巻

(日本II 弥生時代) 昭和三十五年 平凡社

小 結

以上、芦屋市域でこれまでに確認できた主要な弥生時代遺跡を紹介し、今回の市史編集作業に際し、未公表資料の整理に努め、その結果を詳しく述べた。ここではその分布をあらためて確認し、遺跡の経営年代など本地域の特性についての概要を列挙してまとめにかえた。



図92 芦屋市域弥生遺跡分布図

1. 会下山遺跡
2. 城山遺跡
3. 城山南麓遺跡
4. 笠ヶ塚遺跡
5. 藤ヶ谷遺跡
6. 岩ヶ平遺跡
7. 三条岡山遺跡
8. 芦屋廃寺下層遺跡
9. 西良手遺跡
10. 打出岸造り遺跡
11. 打出地造り遺跡
12. 堂ノ上銅鐸出土地

(i) 本事域の弥生時代関係遺跡は全部で一二か所に

ある。それらの位置は各遺跡ごとに明示したが、全體の分布は図92のごとくなる。その南限は西良手遺

跡(9)と堂ノ上銅鐸出土地(12)とを結ぶ線であり、北限は城山遺跡(2)と岩ヶ平遺跡(6)を結ぶ線が画している。前二遺跡は、7・8・10・11の各

遺跡と並んで弥生時代当時の海岸線を推定する上で重要な位置を占めていく。旧四か村によって市域を二分すると、東部(打出村)には6・10・11・12の四

遺跡、西部(芦屋村・三条村・津知村)では1・2・3・4・5・7・8・9の八遺跡が確認されており、

後者の地域の密度がやや高く、これは後述する神戸市東部における遺跡分布の濃密性の延長上に理解できる。なお、西部地区の金下山遺跡西方の独立小丘(通称丸山)において、ごく最近弥生式土器の断片(畿内第Ⅲ様式)の採集が報じられており、現在のところ三条丸山遺跡と呼称している。このほか、山芦屋町・大原町・朝日ヶ丘町・西芦屋町・松ノ内町など市

内の各所から遺物の採取がなされているので、本市域においては広く弥生時代の生活の場が営まれていたことが推測されよう。

(ii) これらの遺跡を調査の方法や認識度によって分類すると、発掘調査されほぼ全面的に遺構の確認されたもの(1)、試掘され遺物・包含層の遺存する事実が確かめられたもの(2)、試掘され遺構の一部が確認されたもの(3)、試掘され遺物・包含層の遺存する事実が確かめられたもの(8)、信憑性をもつ過去の文献・記録などによつて遺物の出土が報じられているもの(3)

・4・5・6・7・9・10・11・12となり、実態

の不明確な遺跡が多い。

(iii) 立地条件についてみると、垂直的に最も高い場所に所在するものは城山遺跡で標高二五〇メートル、最も低地に立地するのは堂ノ上銅鐸出土土地で標高一七メートルを測る。北西部に集中する1・2は山頂尾根部立地、3は山麓傾斜面上にあり、いわゆる高地性遺跡の範疇として捉えられる。4・5・6・7は市街地の北半を占める洪積台地上にあり、8は旧芦

屋川河道の氾濫原に立地する。阪急沿線以南に点在する9・10・11・12は標高二〇メートル前後の平野部にあり、10・11の二遺跡は旧宮川の流路との関連が考えられる。

(iv) 出土土器からみた時期は、上限が畿内第Ⅲ古様式、下限が畿内第V様式で、弥生時代中期中葉から概ね後期前半に及ぶ。前期に比定できる遺物は今のところ発見されていない。存続年代の明確なものは五遺跡(1・2・3・7・8)を数えるにすぎず、個々の遺跡の上限もⅢ様式の段階に比定できるものが多いため(表36参照)。他の遺跡の経営時期に關しては不明と言わざるを得ないが、打出岸造り遺跡(10)は、古記録により中期にまで遡るものと思われる。また、8は後続する土師器・須恵器も併出しておらず、次の古墳時代を考える上で注意を要しよう。

(v) このように、本市域では從来より高地性遺跡として会下山遺跡・城山遺跡が著名であったが、低地部にも多くの遺跡が存在する事実が判明し、両者の関

連究明が今後の調査・研究によつてなされねばならない。現状では六甲山塊の峻険が北に迫り、南は大阪湾に接する、阪神間で最も狭い平野部をもつ本市域としては、遺跡の比率は高いといえる。

しかし、武庫川以東の大平野にみられる弥生前期

以来の大遺跡群とは比すべくもないのが特色である。また、高地性遺跡の分布・銅鐸の発見量などの面から眺めた場合、その稠密度は異色とも言うべきものをもつっている。

近い将来、西摂地域全体における弥生社会の解明を目指して、本市域の遺跡で析出された多くの学問的課題に対する意欲的な取組みを必要としよう。

註(1) 昭和三十六年十二月、藤川祐作の採集による。森岡実見。

(2) 村川行弘「古代における猪名川水系の開発」『地域史研究』第一卷第二号 昭和四十六年

表36 芦屋市内主要弥生遺跡存続年代表

遺跡名	位置番号	土器様式	弥生時代				古墳時代 庄内式
			前期 I	中期 II	III 古 新	後期 IV	
会下山遺跡	1						
城山遺跡	2						
城山麓遺跡	3						
三条岡山遺跡	7						
芦屋庵寺下層遺跡	8						

(凡例) — 盛行するもの ————— 存続するもの - - - 不明確なもの

3 周辺の主な弥生遺跡

(イ) 保久良神社遺跡

(神戸市東灘区本山町北畠・旧武庫郡本山村)

本格的な調査を行なったのは、昭和十六年、国学院大學の樋口清之であり、祭祀遺跡として学界に報告している。なお、『本山村誌』などにも記載をみる。

位置と環境

保久良神社遺跡は金鳥山の中腹、通称錐形の断層構造の上頂面にある(図93参照)。遺跡名の示すとおり、遺跡地中央部には物忌氏の遠祖といわれる椎根津彦命を祭神とする神社が鎮座し、その成立は古く『延喜式』神名帳にも記載がみえる。

遺跡は現在の保久良神社境内地を中心とし、その範囲

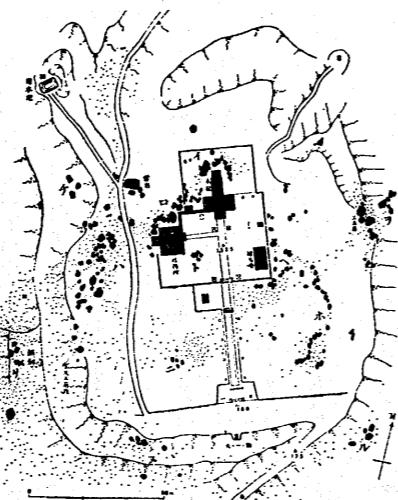


図94 巨石分布図(樋口清之
「摂津保久良神社遺跡の研究」より)

は濃厚な遺物散布のみられる山頂平坦面の東西一五〇メートル、南北一五〇メートルの方形で、後背にあたる北側は金鳥山南麓の急斜面となり、南方は標高一五〇メートル余の丘陵尾根部を最後に断崖となっている。西および東の両側の地勢は急峻な渓谷をなし、秩父古成層や石英粗面岩の岩塊・砂礫が露呈している。現在、遺跡主要部の外縁は民有地となつて削平をうけ、遺物包含層の大半は既に失われている。

遺構 当遺跡には住居址その他の日常生活に関わる遺構はみられない。しかし、特筆すべきものとして「磐境」の存在をあげることができる(写真48参照)。従来より磐境・磐座の様相は明らかでないが、当遺跡のそれは遺存状況良好であり、大阪府高尾山遺跡・奈良県三輪山遺跡などと共にその実態を究めうるものとして古くから重要視されている。

山頂部平坦面に点在する巨石は一見不規則に散在するようみえるが、実際はいくつかにグルーピングすることが可能であり、一定の場所に特定の配列をなしている(図94参照)。樋口はこれをイ・ロ・ハ……(ア)の十二群に分け、さらに各群の連絡関係を追求して「北端に於て内接する二重又は三重の圓状」の配列を想定し、現神社拝殿付近にその中心があつたことを明らかにしている。用いられている巨石の石質は、石英粗面岩と緑泥片岩の二種で、大きさは自然露出のもので長径五メートル・短径三メートル・地上二メートル、人為敷設と認められるものの多くは一・二メートルぐらいの規模である。そ



図93 保久良神社周辺遺跡位置図(1:25000)

の設置の方法は、巨石の安定を考慮に入れて、まず栗石や拳大の石で堅く敲かれ、さらに粘土塊を敷き、その基底には塊石を挿入して支えるように工夫が施されている。

遺物の散布は、遺跡の西南部に主としてみられ、(2)群・天王前坂・(3)群の三地点に集中している。(2)群は約一五センチの表土直下に五〇~七〇センチの厚さの包含層があり、その下部は砂利性の粘土質地山となつて

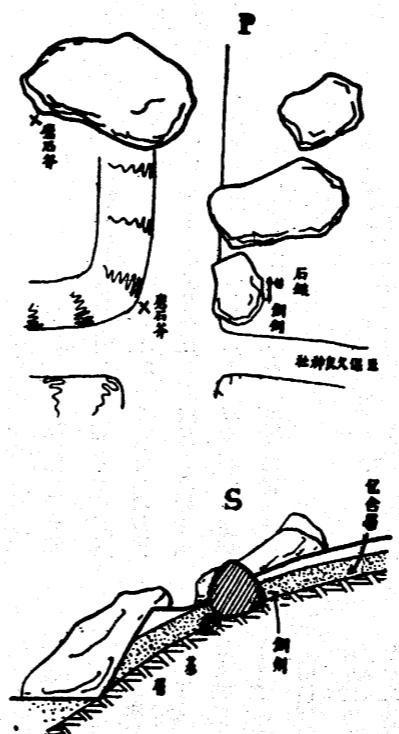


図95 銅戈出土状況（櫛口清之「摂津久良神社遺跡」より）
保久良神社の東端傾斜面の境界線地ならしに際して出土した⁽³⁾。櫛口や吉井もその出土状況を詳細に記しており⁽⁴⁾、青銅製武器類の単独出土例の実態を知る上で貴重な資料を提供している（昭和十六年九月三日発見・図95参照）。それによると、

銅戈は人工的に設置された高さ約六〇~九〇センチの石塊の東側、木炭を多

量混入する包含層中より鋒先を正北に

向けて水平位で検出され、これに平行

いる。包含層中にはきわめて多量の炭・灰の類が混入している。天王前坂付近では地表下二五センチ程で包含層が始まり、七〇~一〇〇センチもの厚みを有し、所によ

つては二〇〇センチにも及ぶらしい。石器の未製品・サヌカイト剝片などが多数出土しているほか、巨石付近よりクリス型銅劍（いわゆる銅戈）一点（図96参照）・磨製石斧二点・石鎚二点が発見されている。

銅戈は昭和十六年九月、社殿西側の芝本秀三郎所有地

- 204 -

第2章 弥生時代

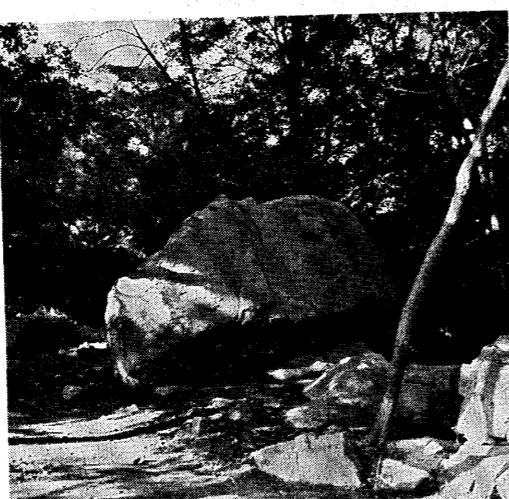


写真48 保久良神社境内の磐境
(昭和50年撮影)

3 周辺の主な弥生遺跡

- 205 -

して二個の打製石鎚が共伴していた。石は表土下四五センチに存する六〇センチ余の包含層のなお下位にあり、傾斜約三〇度の地山直上に置かれたもので、銅戈はこれと約三センチの距離を隔ててほぼ密着した状態で出土している。表土下約一メートル・包含層上面下五五センチ・地表面に約五センチの間層をおいている。前述の二個のサヌカイト製打製石鎚は、いずれも先端部を欠損し、銅戈と接触して二センチ位の間隔を保っている。以上の出土状況から推測する限り、銅戈格納のための特別な施設の存在は肯定し難いが、巨石下より出土したこと、同じ武器である石鎚二点を伴ったこと、処女的な検出位置であったこと、などの諸点を考慮に入れるに、青銅製武器類に祭祀的意義をもたせた意識的な埋納と考えることは許されよう。

(3)群に露出する包含層は、急斜面に位置する関係から一・〇~一・五メートルの厚い表土を被り、五〇~七〇センチで灰黒色を呈し、炭灰の類と共に少量の石鎚・土器片を含む。

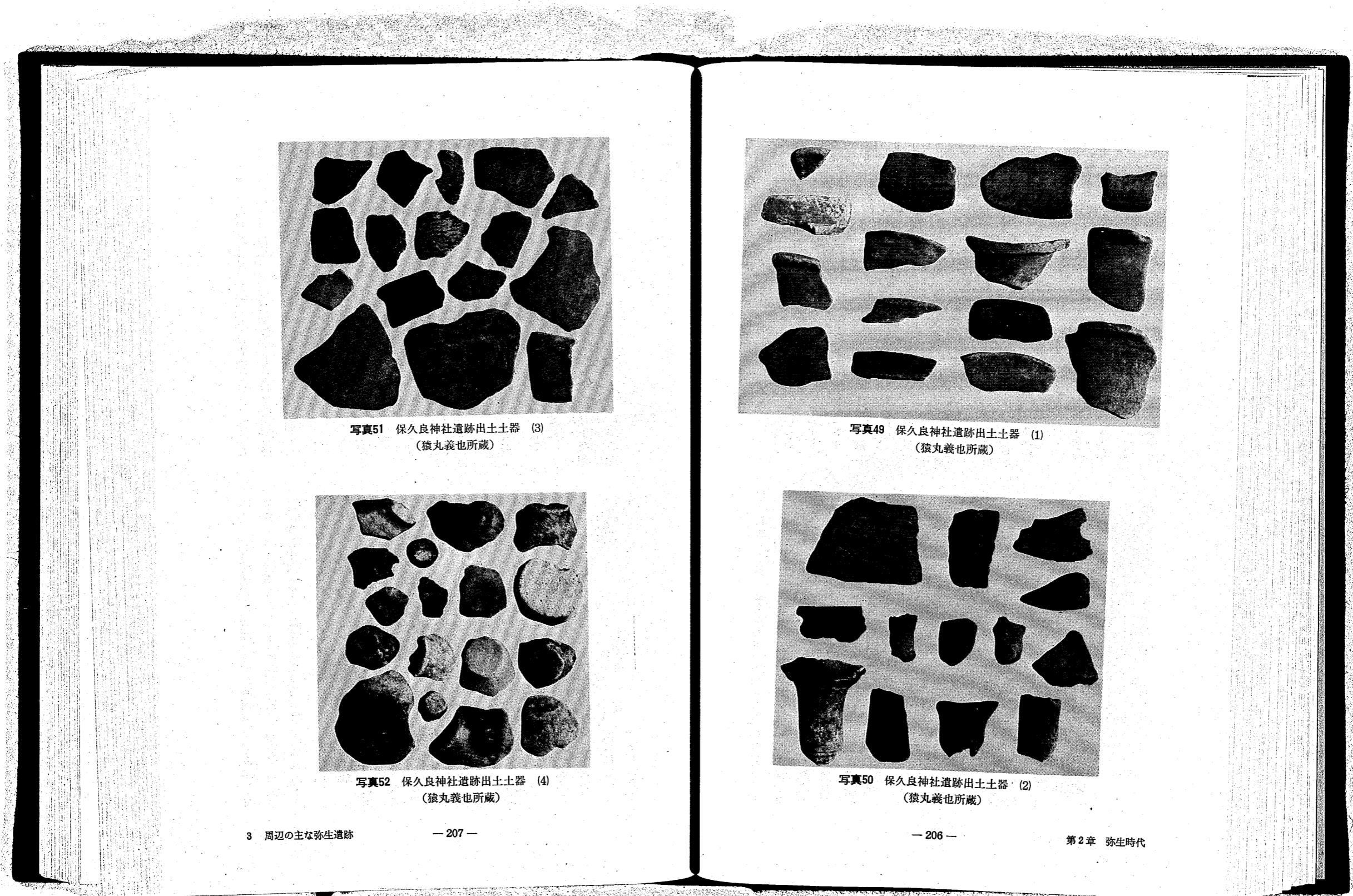


写真49 保久良神社遺跡出土土器 (1)
(猿丸義也所蔵)



写真50 保久良神社遺跡出土土器 (2)
(猿丸義也所蔵)

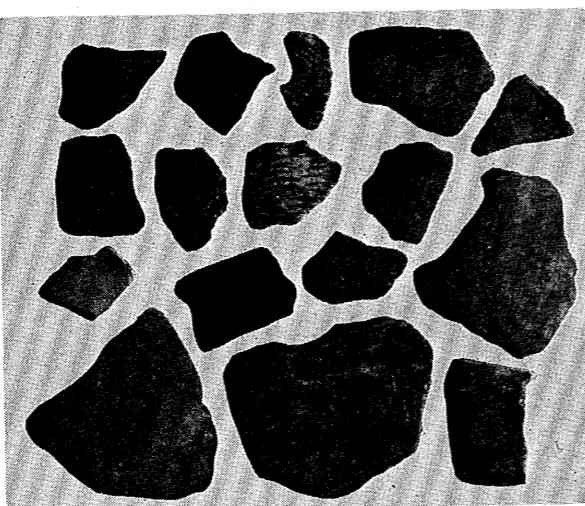


写真51 保久良神社遺跡出土土器 (3)
(猿丸義也所蔵)

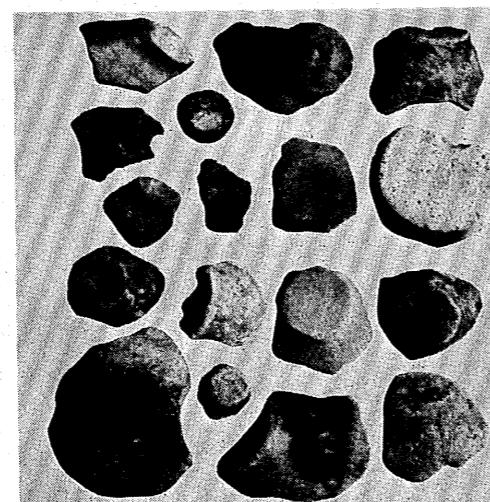


写真52 保久良神社遺跡出土土器 (4)
(猿丸義也所蔵)

古瓦片、鎌倉時代末～室町時代初期と推定される懸仏などで、当保久良神社遺跡が祭祀遺跡として弥生時代以降・古代・中世と連綿として持続していることを証明している。

出土遺物 弥生式土器・土師器・須恵器などの土器類、石鎌・石斧などの石器類ほか、銅戈・勾玉・古瓦・懸仏などがある。

当時、採集された弥生式土器や石器は、京都国立博物館と保久良神社々司猿丸家に分蔵されており、後者の主なものは最近建てられた北畠会館二階において展示・公開している。ここではその資料を中心紹介する(写真49～53参照)。

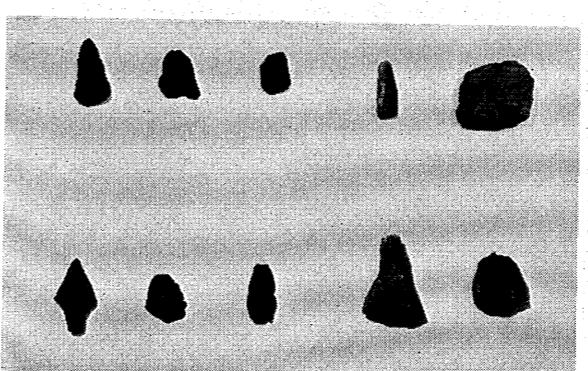
弥生式土器は、壺・甕・鉢・高杯など全器種がみられ、
図96
保久良神社出土銅戈実測図(縮尺約1/4)

れ、比較的小形の薄手のつくりである。全体的に身のしまりに乏しく、穂のふくらみは少ない。中央の背の両側に沿つて樋があり、闕の部分に不整形な孔が対になつて穿たれている。樋には条線を重ねて綾杉文を飾るが、鋳化著しく判然としない。全長二四・〇センチ・闕幅七・五センチ・重量七三グラムを測り、後述される神戸市桜ヶ丘出土銅戈群よりひとまわり小さい。

昭和二十三年四月、重要美術品に認定され、現在所有者の猿丸家より、京都国立博物館に寄託出品されている。

- 註(1) 樋口清之「摂津保久良神社遺跡の研究」『史前学雑誌』第一卷第二・三号 昭和十七年
- (2) 田岡香逸「保久良神社遺跡と遺物」『本山村誌』昭和二十八年 本山村誌編纂委員会
- (3) 当時、兵庫県史跡調査嘱託の武藤誠の記録による。
- (4) 吉井良尚「保久良神社発見のクリス形銅劍」『神戸史談会報』昭和十六年
- (5) 三木文雄「保久良神社蔵銅戈」『桜ヶ丘銅鐸・銅戈』 本編 桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査委員会 昭和四十七年

位置と環境 六甲山系の前山を形成する一支脈の張出し突端部に標高三五〇メートルの金鳥山がある。先に紹介した保久良神社の裏山にあたり、山域にはいくつかの平坦地がある。土器片は山頂部を除く全山に散布するが、比較的密な地点は数か所に限られ、山頂より保久良神社に下る中央の尾根傾斜面とその東西の山腹がとくに顕著である(図93参照)。昭和三十七年頃、金鳥山山腹がバンガロー設営のため開発され、再整地がなされた。次に記されている諸遺構は、崩落の危機にある整地崖



銅戈
クリス型銅劍
と呼ばれる本
遺跡出土の中
銅戈(図96
参照)は、青
銅製で表面は
灰緑色に銹化
腐蝕していて
鋒上りはあま
りよくない。
両刃にはかな
り著しい刃こ
ぼれが認めら
れる。

るが、高杯形土器が比較的多い。時期は大半が畿内第三様式のものであるが、IV・V様式に属する土器も散見され、弥生中期後半から後期に至る遺跡と考えられる。

面をその時緊急調査した際に見出されたものである。調査は石野博信が担当した。

遺構 発掘調査はA地点(東山腹)とB地点(中央尾根)

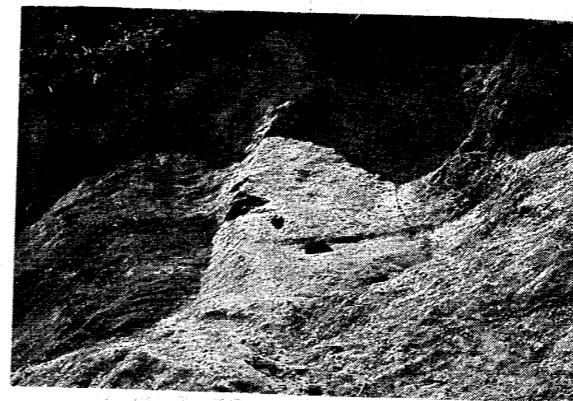


写真54 金鳥山遺跡A地点の半堅穴状平坦面遺構

A地点では、自然傾斜面で周溝のない東西五メートルの二か所で実施されている。いずれも標高二二五メートル前後の地点である。

A地点では、自然傾斜面で周溝のない東西五メートルの不整円形の堅穴状平坦面が検出され、平坦面上には径二〇～三〇センチ、深さ三〇～四〇センチほどのピットが三個遺存している。南北の方向は現存二・六メートルを測るのみで、崖によって既に失われているが、東西の長さと同じ規模で平坦面があつたものと思われ、数基のピットを掘つて上屋をもつていたと推定される。堅穴内覆土には土器片を含み、地山床面直上には薄く黒色土が密着しており、遺構中央部のこの上には壺の上半部が転倒していた(写真54参照)。

B地点はA地点を見下す位置にあり、かつての宅地造成によって崖面に半堅穴状遺構の北端をとどめるにすぎない。現状では東西八メートル余、南北五〇センチの計測値を得ているが、調査者は九×四?メートルの隅丸方形プランを考えている。A地点の遺構同様、半堅穴内には周溝がなく、断面でピットが散見される。ピット内に

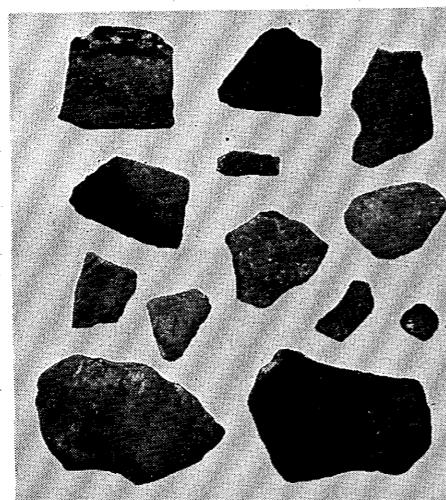


写真55 金鳥山遺跡出土土器

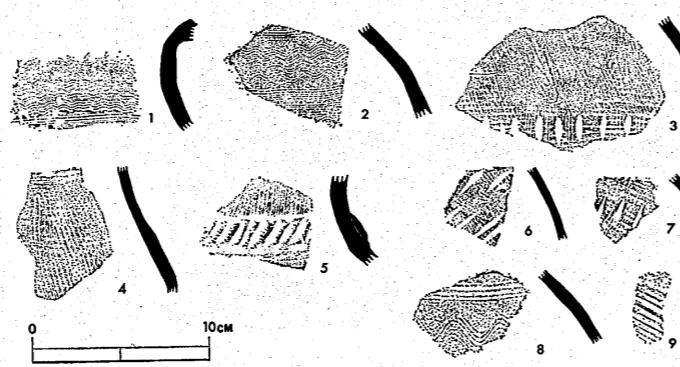


図97 金鳥山遺跡出土土器拓影

(1)～(3)・(5)～(8)は壺、(4)・(9)は甕のそれぞれ断片である。(1)は頸部で、櫛描き波状文・直線文がみられる。(2)・(8)は同じく波状文と直線文で構成される。(3)・(6)・(7)はヘラ先刺突文を胴部に加飾し、とくに(6)は二帯認められる。(5)は頸部下端に凸帯を貼付け、櫛先でその上面を押捺している。(4)は、外

面を粗い刷毛で整形し、内面を細かな刷毛でもつて調整している。中期の甕に盛用された手法であり、器壁は薄い。叩き目のみられる破片(9)も存在するので、叩き目技法の上限を考える上で参考となろう。遺物の一部は現在、芦屋市教育委員会郷土史料室に保管されている。

註(1) 石野博信「神戸市金鳥山遺跡——保久良神社銅戈出土地点の裏山」『古代学研究』四八号 昭和四十二年

(八) 坂下山遺跡 (神戸市東灘区森北町・旧神戸市東灘区本山町)

昭和三十九年八月、宅地造成に伴う土取作業によつて

ている。遺跡は消滅して現在存在しない。

位置と環境 遺跡は、神戸市東灘区の東部、森坂下町(旧地名)の甲南回生病院の裏山一帯にあって、標高七〇九〇メートルの山頂尾根部に位置し、いわゆる高地性集落の立地条件を備えている(図93・写真56参照)。なお北西約五〇メートルの地点からは古代と中世の小壺・蔵骨器が若干量発見されている。

遺構 標高約九〇メートルを測る山頂部から七〇メートルの尾根傾斜面に至る間に二ヶ所の自然平坦面が認められ、上方をA地点、下方をB地点と呼称している。

A・B両地点とも、土砂採取の時点で立合調査を実施したが、A地点では土器・木炭を伴った二か所の黒色焼土面が検出されており、同地点の西崖直下にも主要な遺物が集中して見出されている。B地点では特に包含層を確認することはできなかつたが、斜面下方へ流出している可能性が強い。

発見された遺跡で、発見当初、既に半壊しており、土器片を若干含む僅少な範囲が調査の対象になつたにすぎない。しかし、芦の芽グルーブの地道な採集活動⁽²⁾により、本遺跡の性格の一端を明らかにする資料は提供され



写真56 坂下山遺跡より神戸の市街地と大阪湾を望む

出土遺物 土器は完形品がなく、破片にして約一〇〇点ある。壺・甕・高杯などの器種があり、壺には櫛描きの波状文・平行線文を有するものが目立ち、珠文・斜格子文も散見する。時期は畿内第III(古)様式を中心とし、III(新)・IV(新)様式に下る土器も一部含まれている(図98・写真57参照)。(4)の甕を除いては他は壺の破片である。口縁部を垂下させる(1)は、内面に扇形文を施し、外面上には短かい波長の櫛描き波状文を連ね、その上に円形浮文を貼付けるなど加飾豊かである。(2)は壺形土器の頸胴部の破片で櫛描き波状文と直線文で構成される。斜格文のみられる断片(3)は壺の胴部とみられる。「く」の字状に折れた口縁部を有する(4)は、外面上には短かい波長の櫛描き波状文を連ね、その上に円形浮文を貼付けるなど加飾豊かである。(2)は壺形土器の頸胴部の破片で櫛描き波状文と直線文で構成される。粗い刷毛で調整している。(5)・(6)・(8)・(10)の五点は色調・胎土・焼成などからみて同一個体と考えられ、器種は定かでないが、一応無頸壺とみられる。最大胴部付近に断面三角形の凸帯を二条貼付け、さらに上下に細い粘土紐をとりつけて器面を区画している。文様構成は区画の上下に櫛描き直線文を施し、その間を斜格子文でう

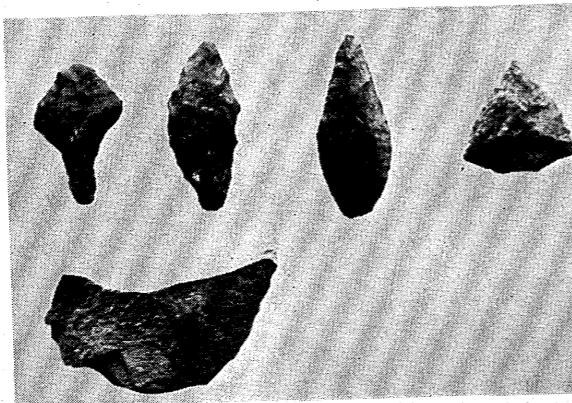


写真58 坂下山遺跡出土石器(1)
(藤川祐作所蔵)

上段一右より石鎌・石鎌未製品・石錐
下段一不定形刃器

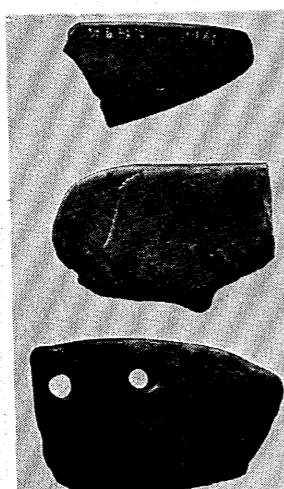


写真59 坂下山遺跡出土石器(2)
(藤川祐作所蔵)

すめ、直線文の上帯の上と下帯のすぐ上に円形浮文を貼付けている。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、非常にもろく、器表の剥落も著しい。

石器には石鎌二点・同未製品一点・石錐一点・不定形

刃器一点・磨製石庖丁三点のほか、若干量のサヌカイト片・ストレート片がある(写真58・59参照)。石鎌は凸基式のもので、一つは無茎、いま一つは正三角形状を呈し、茎を有するが、欠損している。石庖丁は二点が硬質頁岩製、他の一点はサヌカイト製と思われる。

これらの遺物は、鈴木富登が採集した分を含めて、市内松ノ内町在住の藤川祐作が保管している。

註(1) 村川行弘「神戸市東灘区本山町中野字生駒出土の銅鐸『考古学雑誌』第五一巻第二号 昭和四十年

(2) 『芦屋郷土史料室日誌』(ノート) 芦屋市郷土史料室

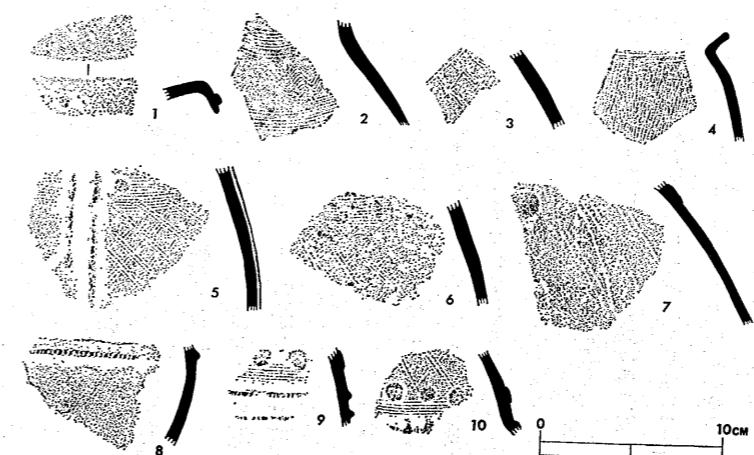


写真98 坂下山遺跡出土土器拓影(藤川祐作所蔵)

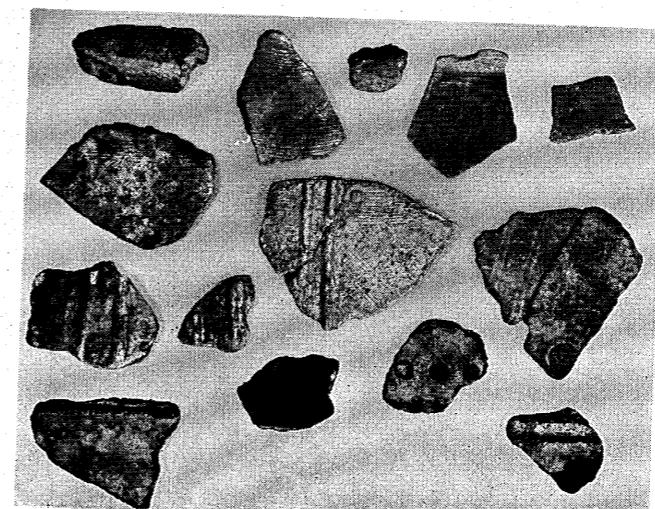


写真57 坂下山遺跡出土土器(藤川祐作所蔵)

(二) 森北町遺跡（神戸市東灘区森北町）

病院の南東に建つ松風荘の中で、標高二四メートルの六甲南山の傾斜変換線上に位置する。昭和三十四年、銅鐸の出土した旧庄岡邸とは約一五〇メートル隔たつた南側の緩傾斜面に立地している（図93参照）。

昭和三十九年五月、森北町二十三番地所在の松風荘内

に浄化槽のとりつけ工事を行なった際、当地在住の鈴木富登によつて多量の遺物を包含する土層が発見され、遺跡の存在が明らかにされた。

現場の北方一五〇メートルに位置する甲南回生病院北の松林では、かつて昭和二十年頃、芦屋市教育委員会の故熊田種次が石鎚數本を採集したと伝えられており、この付近一帯での遺物の散布や包含層の確認は昭和三十五年以降、藤川祐作・鈴木らによつて点々となされてい⁽¹⁾。なお、現場での立合い調査は発見者の鈴木が行ない、細かな記録を作成している。

位置と環境　浄化槽の構築によつて包含層の確認された地点は、阪急沿線の北方約五〇メートル、甲南回生

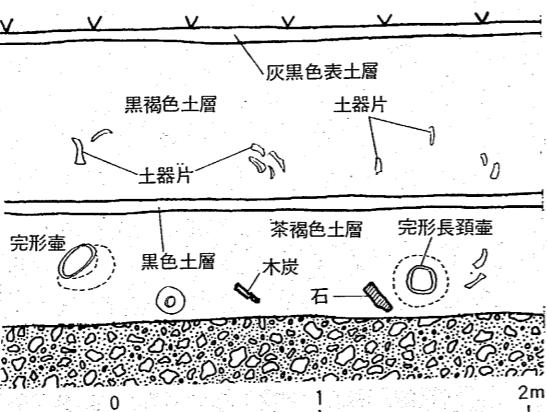


図99 森北町遺跡遺物包含層略測図
(鈴木富登の記録より作成)

横位の状態で出土したといふ。

現場周辺の遺物の包含層や表面散布の状態は、前述した藤川・鈴木らによつて克明に記録されているが、それによると、調査地点南約三〇メートルの下水道工事現場（昭和三十五年～三十六年）では弥生式土器の包含層が確認

されており、南約一〇〇メートル・南東約三〇〇メートルの都市計画道路山手線工事現場（昭和三十五年～三十六年）からは弥生式土器片・須恵器片・石鎚・石錐・面子などが採集されている。図100の完形の長頸壺形土器は、浄化槽内の東壁、地表下一二五センチのところから検出されたもので、他にくつかの完形土器があつたが、取り出しえたのはこの一点にすぎない。胴部を壁中に口頸部を壁面につき出した

このように、包含層は地下〇・五～一・八メートルの間に二層にまたがり、かなり濃厚であった。

図100の完形の長頸壺形土器は、浄化槽内の東壁、地表下一二五センチのところから検出されたもので、他にくつかの完形土器があつたが、取り出しえたのはこの一点にすぎない。胴部を壁中に口頸部を壁面につき出した

東は調査地点から一五〇メートル程離たつた森福荷神社前でサヌカイトの散布が認められ（昭和三十九年四月）、北はやや西寄り約三〇〇メートルの神戸女子薬科大学すぐ東の宅地造成現場で弥生式土器・サヌカイトなどが表面散布している（昭和三十八年～三十九年）。

西側へいくと、約一・二キロメートルの距離をおく神戸市立本山第一小学校東方のガス管敷設工事現場において、地下約二メートルのところから弥生式土器が出土している（昭和三十九年五月）。また、西約一〇〇メートルの畑の中でも弥生式土器の破片が何点か採集されたという（昭和三十九年六月）。

これらの記録を総合すると、調査地点の南側一帯は遺物散布のみがみられ、包含層は遺存しないこと、遺物は土師器・須恵器・瓦器が弥生式土器・石器と混在して採

集されることなどから、弥生式土器の多くをほぼ純粹に出土した本地点が遺跡の南限と考えられる。また、旧広岡邸と森稻荷神社とを結ぶ線が東限を画し、北と西の端についてはその広がりが判然としないため定かでない。

出土遺物 調査地点の出土遺物は、弥生時代後期の

完形の長頸壺一点と多数の弥生式土器片、および石錐一点、面子一点の他、自然木の断片と貝殻八個分がある。

また、本遺跡の範囲内で採集された遺物として、弥生式土器片多数、土師器片・須恵器片・瓦器片・石錐三点・石錐一点・サヌカイト剝片・フリント・チャート・スレート・貝殻残滓などがあげられる。

弥生式土器は、次に詳述する長頸壺を含めて大半が畿内第V様式の時期のものであり、ごく少量IV様式まで遡る遺物が含まれている。

長頸壺(図100・写真60参照)

口径一二・〇センチ、底径四・八センチ、最大腹径一五・〇センチ、器高二一・二センチを測る長頸壺で、横

す。底部はやや突出させた平底で、ナデて整形する。調

整に用いられる刷毛の原体は細粗二種が併用されており、細かな刷毛の方を盛用している。口頸部「△・△」・体部中央「△・△」の二部位三か所にへラ描きの痕跡があり、記号文ともみられるが、判然としない(写真

60下参照)。

色調は内外面とも灰色を混える淡褐色で、一部黄白色を呈する。器表の剥脱部分は赤褐色味を強く帯びる。胎土には石粒・砂粒を顕著に含み、石英・長石が目立つ。焼成良く、全般に明るく焼き上げられている。

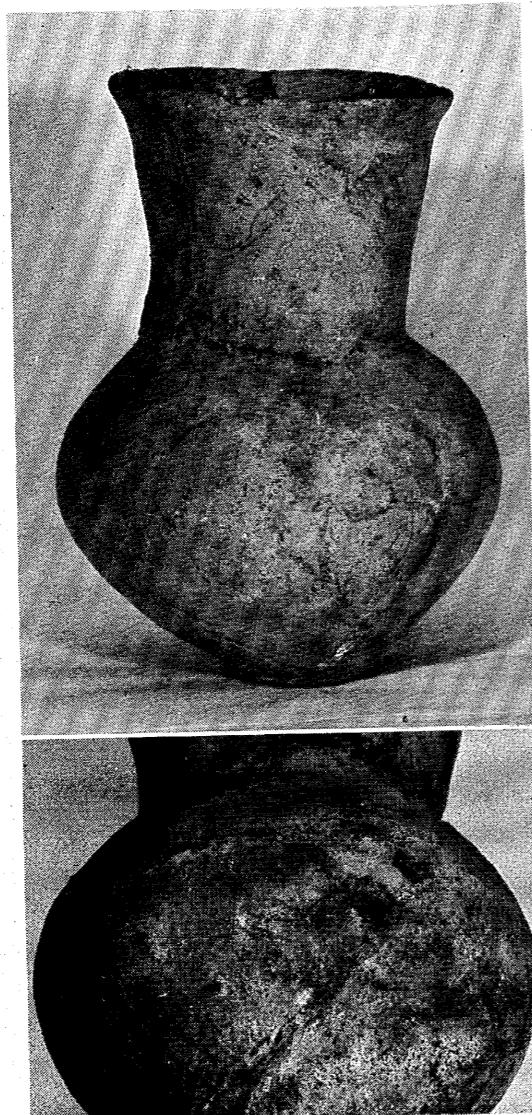


写真60 森北町遺跡出土土器(鈴木富登所蔵)
(下・胴部中央の記号文拡大)

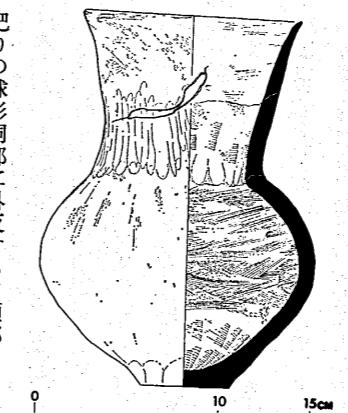
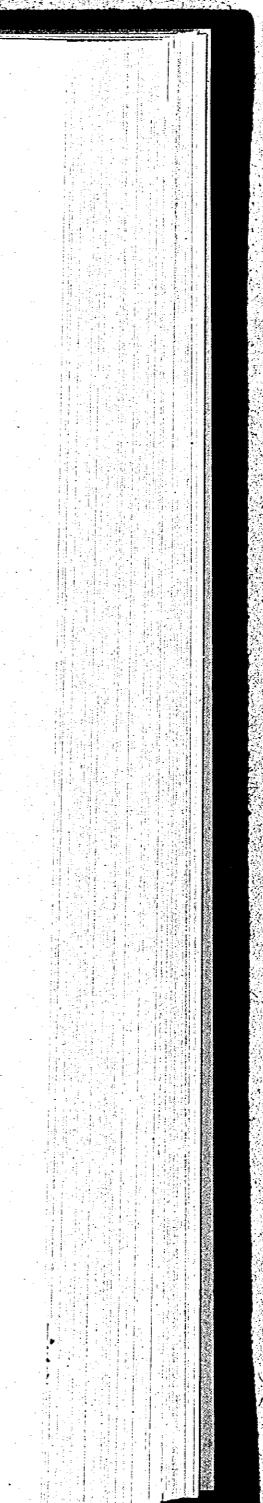


図100 森北町遺跡出土土器実測図
(鈴木富登所蔵)



時期は西ノ辻I地点式の類品より降り、形態的には唐古四五号（下層）・同一四号堅穴出土品に近似しており、第V様式でも中葉以降に位置づけられよう。なお、この土器は以前にも紹介されたことがある。⁽²⁾

註(1)『芦屋郷土史料室日誌』及び藤川祐作・鈴木富登の教示による。

(2) 石野博信「桜ヶ丘周辺の弥生遺跡」21ページ掲載の実測図『桜ヶ丘銅鐸・銅戈報告書』昭和四十四年

(ホ) 森銅鐸出土地

（神戸市東灘区森北町・

旧神戸市東灘区本山町森字坂下町）

昭和二十三年七月、ブルドーザーによる造成工事中、偶然発見された。⁽¹⁾

位置と環境

銅鐸の出土した所は、六甲山地南面の標高五〇メートルの山腹で、旧字坂下町の旧広岡邸の宅地造成工事現場である。大阪湾を眼下に望む眺望の良い

所で、前述した坂下山遺跡に近接しており、西側は小谷一つを隔てて中野生駒の銅鐸出土地に近い（図93参照）。

銅鐸の出土状況の詳細は不明であるが、表土下約一メートルの付近から出土したという。山麓部一帯の各所には弥生式土器・須恵器の包含地が点々とみられるが、一応単独の出土と推定される。

銅鐸 佐原編年の外縁付紐II式に属する四区画袈裟繩文鐸で、総高三三センチ、身の高さ二二・九センチ、紐の高さ九・四センチ、身の底径一六・七センチ×一〇・六センチを測る。年代的には古の新に比定される。

紐部は欠損し、隆起帶内外は斜格子文、一面には内向する鋸歯文がみられる。舞には著しい鋸くぼみがあり、対の孔も不整形である。

文様は両面とも斜格子文で四区画に分けられ、一面の上段二区は双頭渦巻文、下段右区は重孤文が施文されている。また、その右側上方には弓をもつ三人物像が描かれている。

他的一面には人物画がなく、三区に双頭渦巻文がみられる。下端は重孤文を横に連続させ、その下に三条の細刻線を配している。

鑓は縁が不揃いであり、肩以下には三対の小形双耳があり、欠損甚しい。裾には両面とも重孤文と四条のやや太めの平行線文を伴っている。内面には幅一・一センチの凸帯があり、身全体の厚さを加えても〇・五センチで薄い。現在、東京国立博物館に保管されている。

註(1) 村川行弘・三木文雄「神戸市東灘区本山町森字坂下町出土銅鐸『桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書（本編）』

昭和四十四年 兵庫県教育委員会

(ヘ) 生駒銅鐸出土地

（神戸市東灘区本山町中野字生駒）

昭和三十九年十二月、神戸市東灘区本山北町の神戸女子薬科大学構内から薬草園造成作業中に銅鐸一個が出土している。



写真61 生駒銅鐸出土地の遠景（調査当時撮影・矢印の箇所が出土地点）

位置と環境 銅鐸の出土した場所は、標高一一〇メートルを測る神戸女子薬科大学の薬草園で、標高二〇〇メートルの六甲前山尾根部が急傾斜する南斜面である。この尾根の谷を隔てて西側には銅戈一本を出土した保久良神社遺跡があり、また東側には同じく谷を隔てて銅鐸一口を出土した森遺跡が近接している（図93参照）。

出土状況

薬草園の造成は標高一〇〇メートルから一二五メートルにかけての斜面で階段状に行なわれ、銅鐸はその中腹よりやや下った地点で発見されている（写真61参照）。関係者の状況証言によると、銅鐸は表土下五〇センチのところから出土したらしく、付近の土層から判断すると、第二層の灰褐色粘土質土層（厚さ五六センチ）から取り出されている。なお、この層位の上部には表土（厚さ二四センチ）があり、下部には灰色礫混入粘土質土層（八〇センチ）があつて、さらに下の灰色礫混入の地山に続く。

銅鐸の出土地点周辺には、十数個の石組が見出され、



写真62 生駒出土の銅鐸
(文化庁保管)

いる。縦は斜格子文帯を中心・左・右に三帯配し、六区画に仕切っている。裾は幅広く素文部を残し、研磨痕が認められる。

鰐は三センチ幅でとりつけられ、二段の内向鋸歯文帶で飾られており、肩以下に三対の双耳が飾耳としてついている。内面凸帯は身の裾から三・五センチのところに幅〇・八センチを測る丸みを帯びた凸帯が二条存在する。型持孔は正円形に近いものが二孔遺存している。

鈕の外縁と鈕下端の一部を失っているが、保存状態は比較的良好である。現在、文化庁に保管されている。

位置と環境 遺跡は六甲山脈の南面、大阪湾にむかって伸びる一支脈の舌状丘陵上にあり、東側は住吉川によって谷が形成され、西側も同じく谷川によつてえぐら

ほほ東西一・四メートル、南北一・六メートルの範囲に集中しており、この石群に含まれる一メートル大の巨石の西側から銅鐸は出土したらしい。広範囲にわたる造成予定地内で他に石組や岩石の分布が見当らないので、これらの石塊群は出土した銅鐸の埋納と関連あるものに相違ないが、明確な関係はつかめていない。

銅鐸

鉢の形式分類に従うと、扁平鉢式に属し、両面の文様は六区画袈裟襷文で構成されている。総高五三・二センチを測り、身の高さ三八・三センチ・鉢の高さ一三・九センチ・身の底径二六・三センチ×一九・八センチである（写真62参照）。

身は漆黒色を呈し、斜格子文帯と連続渦巻文帯の二段

外を綾杉文と連続渦巻文帯で構成している。綾杉文帯は

四本の平行線の仕切り五条によって四区に区画されてい

る。

(ト) 荒神山遺跡 (こうじんやま)

荒神山遺跡は昭和十年頃に発見され、昭和四十二年、
丘陵上の土木工事に伴つて包含層がみつかり、四十三年
には住居址などの遺構が断片的に確認されて、翌四十四
年、県教委・神戸市教委による二度にわたる緊急調査に
よつて、その様相の一部が明らかにされている。⁽¹⁾

位置と環境 遺跡は六甲山脈の南面、大阪湾にむかって伸びる一支脈の舌状丘陵上にあり、東側は住吉川によつて谷が形成され、西側も同じく谷川によつてえぐら



図101 荒神山遺跡位置図(1:25000)

1. 荒神山遺跡 2. 赤塚山遺跡
a. 渕ヶ森銅鐸出土地

れ、深い絶壁となっている(図101参照)。東および西を流れる川は、傾斜変換線の付近で合流し、Y字状の地形をなしているが、荒神山遺跡は主としてその先端部に立地している(写真63参照)。遺構は標高一七〇メートルから二二六メートルの間に営まれており、付近一帯には花崗岩の採石場としての痕跡が認められる。

遺構 第一次の試掘調査では、第一層(表土)・第二層(黄色土)・第三層(黒褐色土)・第四層(花崗岩風化土)地

だし、住居址と推定されるような遺構の検出されている所や遺物包含層の遺存する場所は限定されており、東斜面と西斜面及び北方の張出し急斜面と南斜面の一部である。最後にあげた南斜面では、石組状の列石が見出されており、その機能が注目される。

第二次の調査は、第一次の予察を参考に進められ、遺跡の東端で円形・長円形・不定形の大小様々な土塹・ピット群が検出されている。しかし、いずれも遺構の性格は明らかでない。遺跡東側中央部の調査区域では、皿状遺構が検出され、焼土面がみられ、覆土内には木炭や花崗岩塊が含まれている。破損した高杯が西北寄りで出土しており、祭祀的様相を帯びた遺構であるかも知れないが、詳細はわからない。南東部の調査区ではかなりの土器が出土しているにもかかわらず、何ら遺構は確認されていない。遺跡地中央部では、地形に凹凸がみられ、やはり遺構の存在は不詳である。

以上のように、本遺跡は、尾根上の縁辺部ないしは東西の斜面に生活址があり、判明した住居址の推定数は一

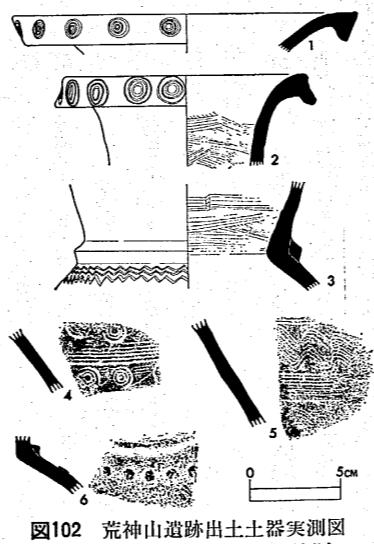


図102 荒神山遺跡出土土器実測図
(兵庫県教育委員会所蔵)

六軒、うち一軒は独立して遺跡地の南西縁の低位置を占め、他は標高二〇五と二一〇メートルの等高線に沿って上段部八軒、下段部七軒の合計一五軒が規則的に遺存している。その他の遺構としては、遺跡地西端の二段構成の石組と三メートル幅の大溝があり、東縁部には祭祀遺構の存在が予想されよう。

出土遺物 土器は概ね畿内第V様式に属するが、微量IV様式のものが随伴し、遺跡形成の上限が中期末まで

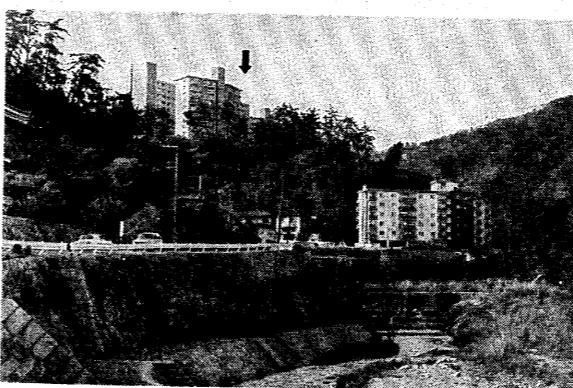


写真63 荒神山遺跡の現状(矢印は遺跡主要部を示す)

山)といふ遺跡地の基本層位が確かめられ、二層・三層に弥生式土器の包含が確認されている。

遺物の表面散布の範囲は、南北三五〇メートル・東西一五〇メートルで、尾根のほぼ全域に広がっている。た

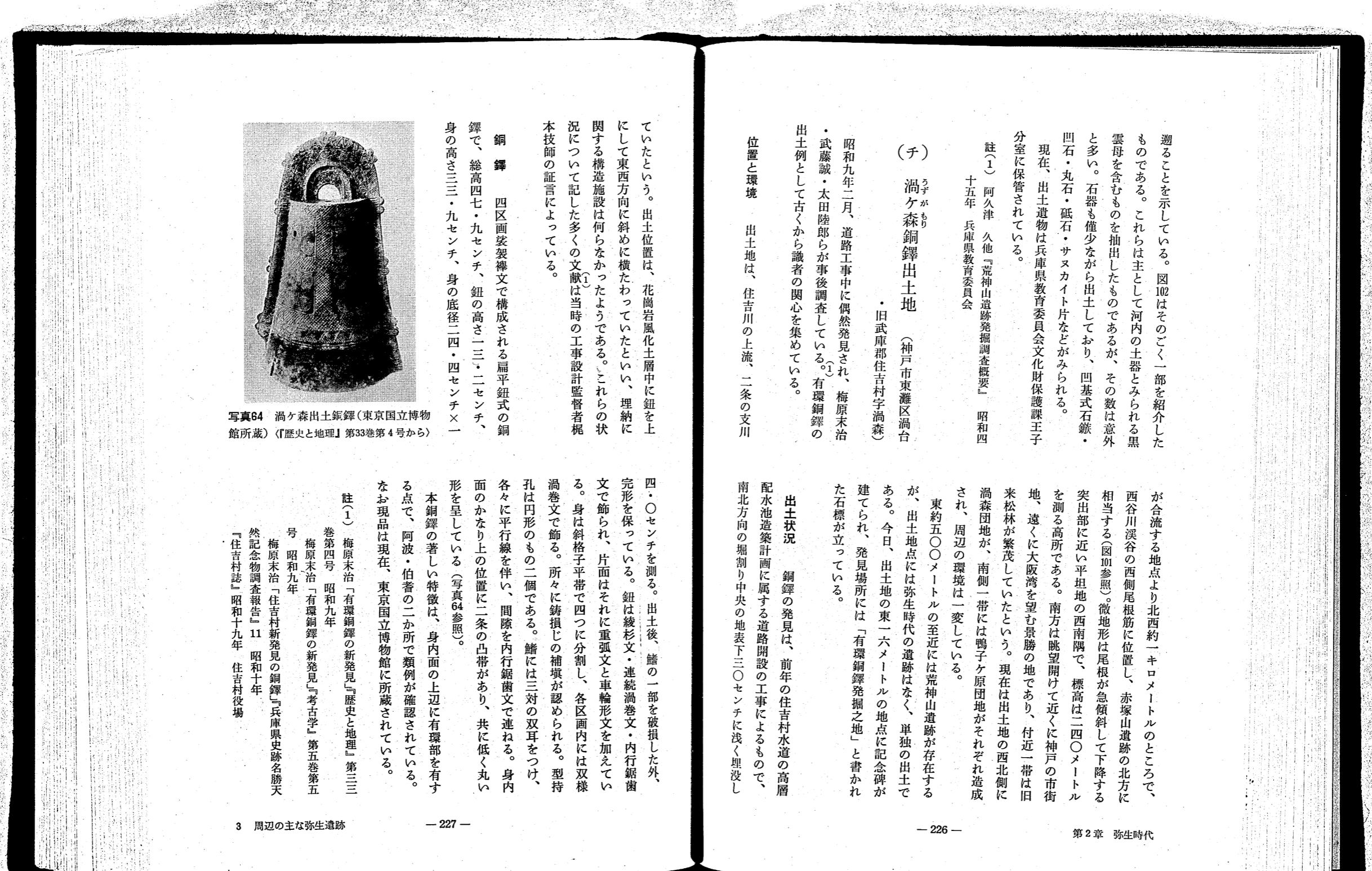


写真64 湊ヶ森出土銅鐸（東京国立博物館所蔵）『歴史と地理』第33巻第4号から

いたという。出土位置は、花崗岩風化土層中に鉢を上にして東西方向に斜めに横たわっていたといい、埋納に関する構造施設は何らなかつたようである。これらの状況について記した多くの文献⁽¹⁾は当時の工事設計監督者梶本技師の証言によっている。

銅鐸 四区画菱形縦文で構成される扁平鉢式の銅鐸で、総高四七・九センチ、鉢の高さ一三・二センチ、身の高さ三三・九センチ、身の底径二四・四センチ×一

位置と環境 出土地は、住吉川の上流、二条の支川昭和九年二月、道路工事中に偶然発見され、梅原末治・武藤誠・太田陸郎らが事後調査している。⁽²⁾ 有環銅鐸の出土例として古くから識者の関心を集めている。

(チ) 湊ヶ森銅鐸出土地 (神戸市東灘区渦台・旧武庫郡住吉村字渦森)

現在、出土遺物は兵庫県教育委員会文化財保護課王子分室に保管されている。

註(1) 阿久津 久他『荒神山遺跡発掘調査概要』昭和四十五年 兵庫県教育委員会

（2）『荒神山遺跡発掘調査概要』昭和四十五年 兵庫県教育委員会

が合流する地点より北西約一キロメートルのところで、西谷川渓谷の西側尾根筋に位置し、赤塚山遺跡の北方に相当する（図101参照）。微地形は尾根が急傾斜して下降する突出部に近い平坦地の西南隅で、標高は二四〇メートルを測る高所である。南方は眺望開けて近くに神戸の市街地、遠くに大阪湾を望む景勝の地であり、付近一帯は旧来松林が繁茂していたとい。現在は出土地の西北側に渦森団地が、南側一帯には鴨子ヶ原団地がそれぞれ造成され、周辺の環境は一変している。

東約五〇〇メートルの至近には荒神山遺跡が存在するが、出土地点には弥生時代の遺跡ではなく、単独の出土である。今日、出土地の東一六メートルの地点に記念碑が建てられ、発見場所には「有環銅鐸発掘之地」と書かれた石標が立っている。

出土状況 銅鐸の発見は、前年の住吉村水道の高層配水池造築計画に属する道路開設の工事によるもので、南北方向の堀割り中央の地表下三〇センチに浅く埋没し

四・〇センチを測る。出土後、鰐の一部を破損した外、完形を保っている。鉢は綾杉文・連続渦巻文・内行鋸齒文で飾られ、片面はそれに重弧文と車輪形文を加えている。身は斜格子平帶で四つに分割し、各区画内には双様渦巻文で飾る。所々に鋲痕の補填が認められる。型持孔は円形のもの二個である。鰐には三対の双耳をつけ、各々に平行線を伴い、間隙を内行鋸齒文で連ねる。身内面のかなり上の位置に二条の凸帯があり、共に低く丸い形を呈している（写真64参照）。

本銅鐸の著しい特徴は、身内面の上辺に有環部を有する点で、阿波・伯耆の二か所で類例が確認されている。なお現品は現在、東京国立博物館に所蔵されている。

註(1) 梅原末治「有環銅鐸の新発見」『歴史と地理』第三十三卷第四号 昭和九年
梅原末治「住吉村新発見の銅鐸」『考古学』第五卷第五号 昭和十年
『住吉村誌』昭和十九年 住吉村役場

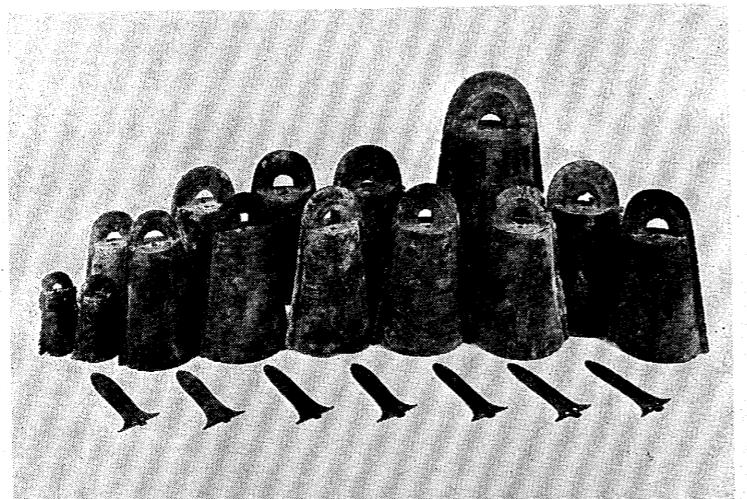


写真66 桜ヶ丘出土の銅鐸・銅戈(神戸市教育委員会提供・森 昭撮影)
中央最も大きいものが6号鐸、左端最小のものが14号鐸。

の小高い丘は花崗岩で構成され、銅鐸が出土したところの最表層部は薄く削り取られていたため不明であるが、下部の土質はその風化崩積物やマサ化した花崗岩が続いている。出土場所は丘状地形の東斜面に位置し、東および北の方角より高い場所からは望むことができるが、西南の低位の方角からは全くみることができない位置を占めている点、特異な地点が選ばれたものとみられよう。

出土状況　銅鐸群は壁土用の土砂採取の際、前述した小高い丘の尾根縫線から二~三メートル下ったところの表土下約一メートルよりみつかつた。工事関係者によつて発見されたため、その出土状況については分明でないが、まず最初一個の銅鐸が掘り出され、その後、それが単独でなく東の方向へいくつか隣接することがわかつたという。

連なつて存在した銅鐸は全部で一四個あり、それらがすべて採りあげられた後、七本の銅戈がひき続き発見されている。銅戈は重なつた状態で埋まつていたといふ。

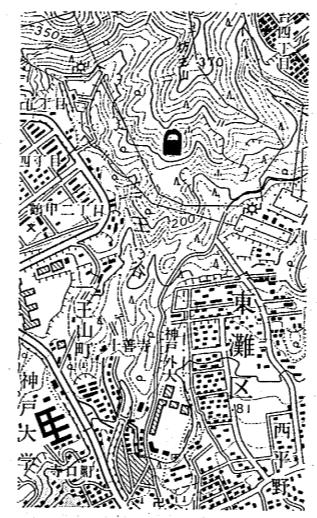


図103 桜ヶ丘銅鐸出土地位置図

昭和三十九年二月、採土作業中、銅鐸一四口、銅戈七本が伴つて出土したところであり、学界で著名である。

位置と環境

発見された場所は、神戸市東部、石屋川

の上流の一王谷の東方の尾根筋で、標高二四六メートルの山塊隆起部が急角度でもつて傾斜する斜面の縫線から少し下降した山林地である(図103・写真65参照)。出土地点

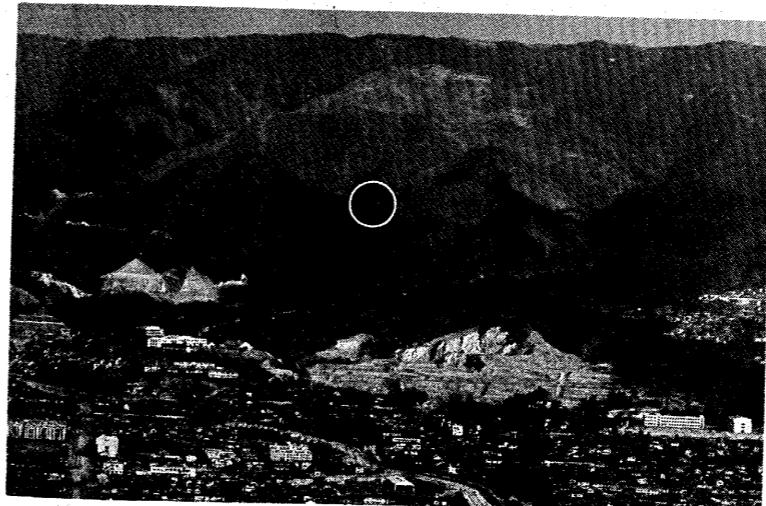
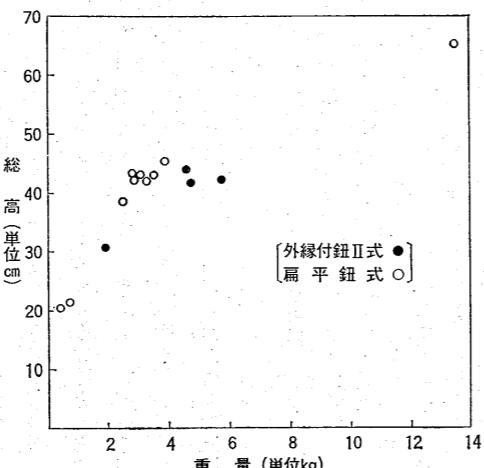


写真65 桜ヶ丘銅鐸出土地の遠景(○印の場所が出土地)

表38 桜ヶ丘出土銅鐸の高さ・重さと型式との関係
(神戸新聞社『銅鐸展出品目録』の法量表に
準拠して作成)



銅鐸 全部で一四口出土している(表37・写真66参照)。

型式的みると、外縁付鉢式鐸四口、扁平鉢式鐸一〇口であり、また、身の文様構成で分類すると、流水文鐸三口、袈裟襷文鐸一口となる。袈裟襷文鐸は六区画のもの五口、四区画のもの六口である。このように同一場所から出土した銅鐸でも形態や文様は種々様々であり、

したがって大きさも、総高六四・二センチを測るもの(6号鐸)から小さいものは二一・四センチ(14号鐸)に至る。また、重量も○・四七キログラム(14号鐸)と一三・四キログラム(6号鐸)の幅をもつ。これらの関係を簡潔に示したのが表38である。

これらの銅鐸で特記すべきことは、原始絵画と同范鐸の存在である。原始絵画は1・2・4・5号鐸などにみられ、同范関係を有する銅鐸は1・2・3号鐸の三口を数える。鳥取・滋賀など遠隔地と分有している。

銅鐸の絵画の表現方法は大別すると二通りあり、人物・動物を影絵風に表現したもの(1号鐸)と、人物や動物の輪郭と細部とを線で表わしたもの(2・4・5号鐸)がある。前者は一般に古い銅鐸に、後者は新しい様相をもつ銅鐸に多い。桜ヶ丘出土例も概ねその傾向を反映している。⁽²⁾

銅 戈 銅戈は銅鐸の半数に相当する七本が出土している。長さは二七・二センチ(最小)と二九・〇センチ(最大)

表37 桜ヶ丘出土銅鐸所見一覧表

銅鐸番号	総高(cm)	重量(kg)	鈕による型式分類	同范関係	備考
1号鐸	42.8	5.8	外縁付鉢II式	鳥取県泊鐸 ・滋賀県新庄鐸ほか2 鐸と同范	狩り・脱穀・トンボ・カニなどの 絵画横帯の上下2区に流水文。舞 の上にも絵画あり。
2号鐸	42.5	4.8	"	大阪府袖於 鐸と同范	シカ列の絵画横帯の上下2区に流 水文。鉢にも流水文があって珍ら しい。
3号鐸	44.7	4.6	"	鳥取県上屋 敷鐸と同范	鋸歯文帯の上下2区に流水文。A 面鋸歯文横帯中に重弧文様を加 え、下辺横帯上に鋸歯文帯をおく。 流水文に補刻あり。
4号鐸	42.2	3.3	扁平鉢式	なし	身にかすかな胴張り。補線による 4区袈裟襷文。横帯は斜格文と連 続渦文を重ねる。両面全区画内に 絵画。裾にシカ列。
5号鐸	39.4	2.6	"	"	身にかすかな胴張り。複線による 4区袈裟襷文。横帯は斜格文と綾 杉文を重ねる。両面全区画内に絵 画。鰭の下端に突線2条。
6号鐸	64.2	13.4	"	"	6区袈裟襷文。区画内に四頭渦文。 区画内と裾を磨研。B面鉢内縁に 車輪形の文様あり(類例渦森鐸)。 内面凸帯3条。
7号鐸	42.4	2.9	"	"	6区袈裟襷文。
8号鐸	42.4	2.9	"	"	"
9号鐸	43.3	3.7	"	"	"
10号鐸	43.1	3.2	"	"	6区袈裟襷文。区画内と裾とを磨 研。
11号鐸	45.5	4.0	"	"	そりが大きい。4区袈裟襷文。A 面第2横帯に鋳かけと補刻・鰭に 3対の飾耳。
12号鐸	31.5	2.0	外縁付鉢II式	"	4区袈裟襷文。
13号鐸	22.1	0.7	扁平鉢式	"	4区袈裟襷文。鰭に飾耳1対
14号鐸	21.4	0.5	"	"	4区袈裟襷文。鉢と耳に鋳かけ、 その準備の小円孔を穿つ。

(神戸新聞社『銅鐸展出品目録』昭和43年のデータに基づいて作成)

大の幅をもつが、ほぼ同大であり、穂の全域に斜線の入った鋸歯文を重ねたいわゆる組紐文で飾る点が共通する。穂の長いことと、穂にふくらみの少ないことなど古相を示す点、身の刃部の厚みが薄く平坦で、刃の研ぎ出しのみられないことも通じてみられる特色である。型式的にはいずれも中鋒銅戈に属し、前述した保久良神社遺跡出土例に類似している。

註(1)『桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書(本編)』昭和四十四年兵庫県教育委員会

(2)『銅鐸展出品目録』昭和四十三年神戸新聞社

四年

『銅鐸展出品目録』昭和四十三年神戸新聞社

昭和四十

位置と環境 伯母野山遺跡はその範囲内に含まれる一山丘「伯母野山」という呼称をもとに名づけられた。

ただし、広義に伯母野山遺跡と呼ぶ場合には、この伯母野山以外に前述した牛小屋山、後述する勝岡山という二つの山塊を含み、通常これら三地域の汎称として用いられている。遺跡の位置関係は「巌島神社の裏手の山が牛小屋山で、谷川を距てて東が勝岡山、伯母野山は勝岡山の道を距てて北にある」(図104・写真67参照)。

本遺跡はこのように広範にわたり、径五百メートルを越える大規模な集落跡とみられるが、前述したごとく微地形によって三分され、三遺跡の集合体として捉えるべ

き性格のものかもしれない。全体としての位置は表六甲の南麓、「灘区のほぼ中央を流れる大石川(都賀川)」が六林泰が巌島神社北隣で弥生式土器を採集することを契機として発見された。その後、遺跡の範囲は背後の牛小屋山に及ぶことが知られ、さらに北方の伯母野山にも遺物の散布する事実が確かめられた。⁽¹⁾

(又) 伯母野山遺跡 (神戸市灘区篠原)

伯母野山遺跡は昭和二十二年三月、遺跡近傍在住の若林泰が巌島神社北隣で弥生式土器を採集することを契機として発見された。その後、遺跡の範囲は背後の牛小屋山に及ぶことが知られ、さらに北方の伯母野山にも遺物の散布する事実が確かめられた。⁽¹⁾



写真67 伯母野山遺跡遠景 (昭和33年調査時)

甲川と袖谷川に分岐する地点から北方約一キロメートル⁽¹⁾に相当し、遺跡の西辺には六甲中学の運動場が横たわっている。最も広域かつ濃密な遺物の散布をみる牛小屋山地域は、「南および東斜面を主としてその周辺山頂附近および「標高一五〇メートルあたりの八〇メートルあたりの包含層がその中心」であり、住居址も何基か検出されている。「勝岡山地

域はその西南端近くに散布するごく狭い範囲」で、調査の経過 遺跡発見後数年を経た昭和二十八年頃より牛小屋山南斜面に土取場ができる、多くの遺物が出土し始め、三十年に入つてからはそれが活発化されたり、勝岡山も同様にその山容を失っている。現在、かろうじて旧状を残し、遺物の採集可能な場所といえれば伯母野山ただ一か所となり、必然的に「伯母野山遺跡」という総称が存命を保つこととなつた。



図104 伯母野山周辺遺跡位置図
(1 : 25000)
A. 牛小屋山地区
B. 勝岡山地区
C. 篠原遺跡
2. 篠原遺跡



写真69 伯母野山遺跡出土土器（若林 泰・斎藤英二所蔵）
1~3・6 壺形土器 4 錐形土器 5・7・11 鉢形土器 8~10 高杯形土器 12 飯蛸壺形土器

3 遺跡の主な弥生遺跡

- 235 -

め、発見者の若林らによつて若干の調査が行なわれた。

昭和三十二年頃には、赤松啓介・斎藤英一がこの地に着目し、三十三年二月には右記の三人によつてトレンチ調査が実施され、これに協力して三十四年二月には村川行弘・岩本昌三・石野博信らが調査に加わり、住居址を何基か検出している。⁽²⁾ 牛小屋山は昭和三十四年の末、完全に消滅した。

一方勝岡山は三十三年頃の土取作業中、石器類を出土したが、土器を含めてその量は少なく、伯母野山もこの頃、同様な土取り作業によつてその三分の二近くが崩壊している。

遺構

遺跡発見後の経過をみて明らかのように、遺跡地一帯の土取作業が急速に進んだため、それに並行しての組織だった調査が行なわれず、若林・斎藤らの徹底した採集活動を中心とした記録によるところが大きい。確認された遺構としては、いくつかの地点で見出された住居址がある。当遺跡の住居は山頂尾根部を選ばず、



写真68 伯母野山遺跡牛小屋山東麓
第1号住居址(溝状造構と柱穴列)

- 234 -

第2章 弥生時代

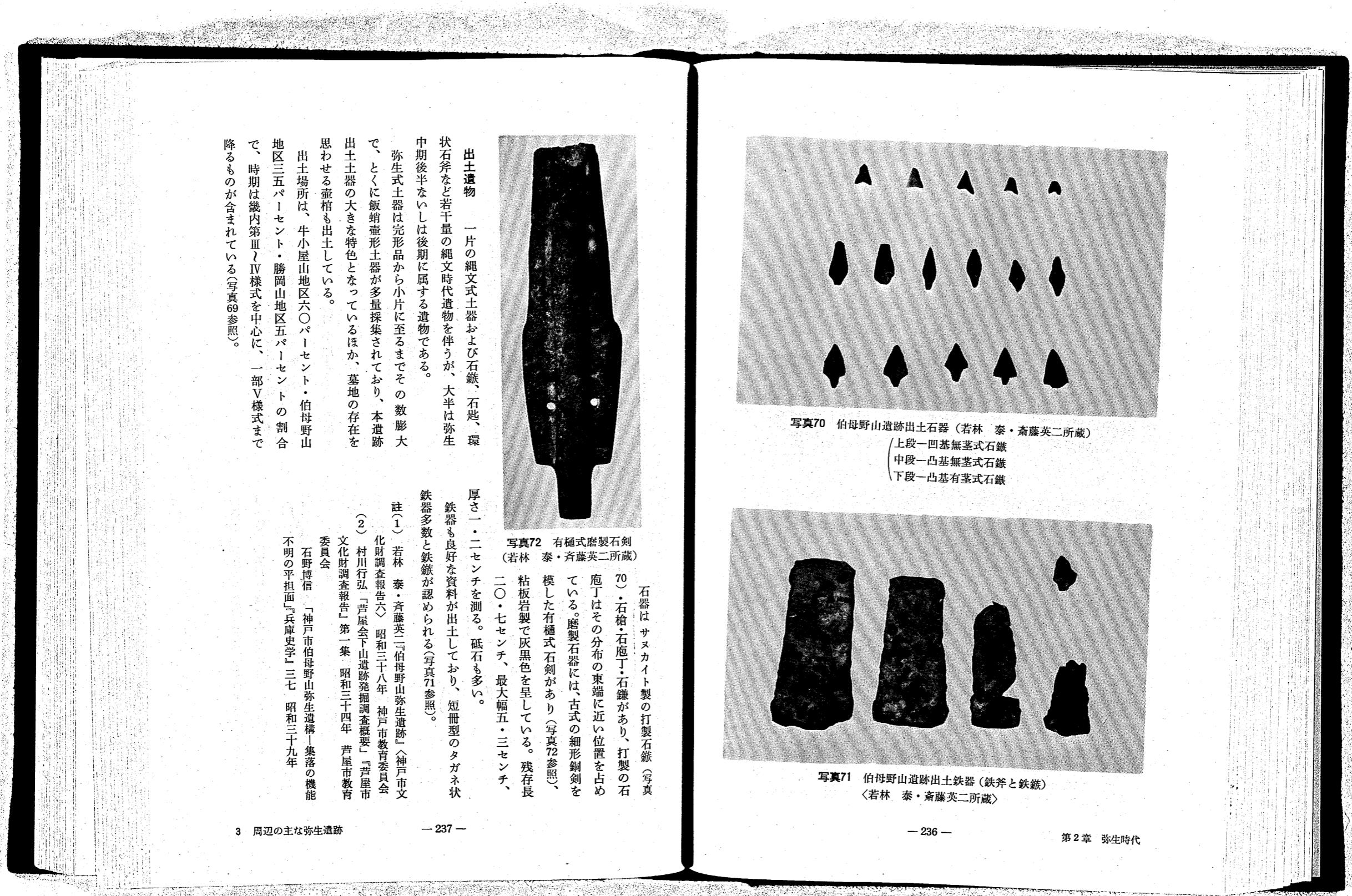


写真72 有柄式磨製石剣 (若林 泰・斎藤英二所蔵)
石器はサヌカイト製の打製石鎌 (写真70)・右槍・石庖丁・石鎌があり、打製の石庖丁はその分布の東端に近い位置を占めている。磨製石器には、古式の細形銅劍を模した有柄式石剣があり (写真72参照)、粘板岩製で灰黒色を呈している。残存長二〇・七センチ、最大幅五・三センチ、厚さ一・二センチを測る。砥石も多い。

出土遺物 一片の縄文式土器および石鎌、石匙、環

状石斧など若干量の縄文時代遺物を伴うが、大半は弥生中期後半ないしは後期に属する遺物である。

弥生式土器は完形品から小片に至るまでその数膨大で、とくに飯蛸壺形土器が多量採集されており、本遺跡出土土器の大きな特色となっているほか、墓地の存在を思わせる壺棺も出土している (写真69参照)。

出土場所は、牛小屋山地区六〇パーセント・伯母野山地区三五パーセント・勝岡山地区五パーセントの割合で、時期は畿内第三～IV様式を中心に、一部V様式まで降るもののが含まれている (写真69参照)。

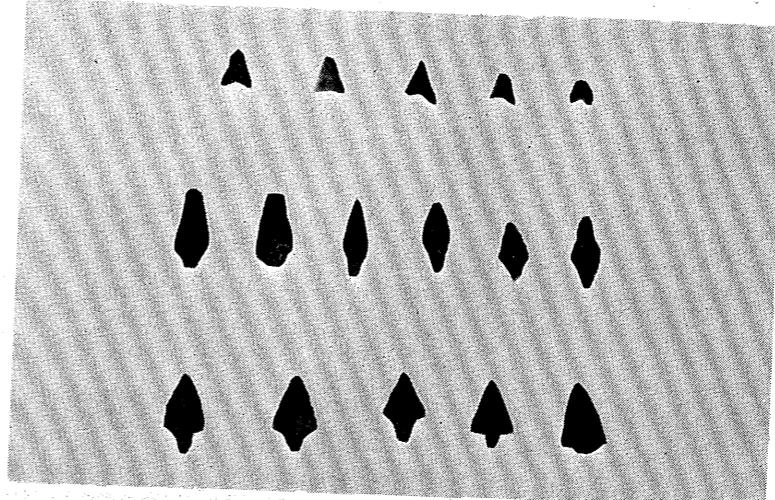


写真70 伯母野山遺跡出土石器 (若林 泰・斎藤英二所蔵)
上段一凹基無茎式石鎌
中段一凸基無茎式石鎌
下段一凸基有茎式石鎌

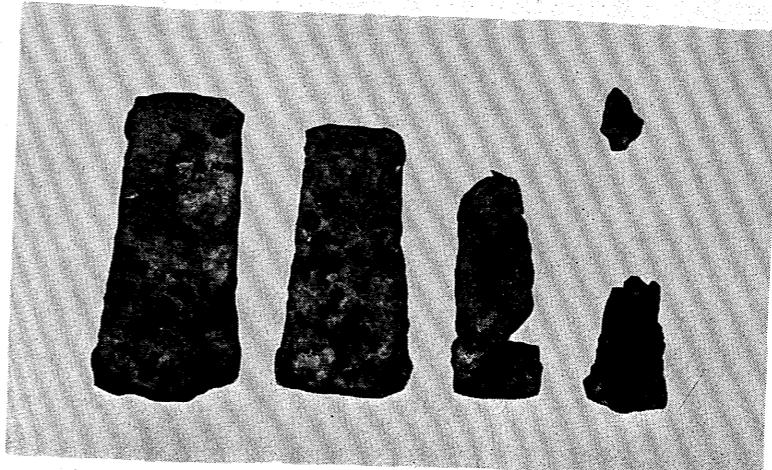


写真71 伯母野山遺跡出土鉄器 (鉄斧と鉄鎌)
(若林 泰・斎藤英二所蔵)

註(1) 若林 泰・斎藤英二「伯母野山弥生遺跡」(神戸市文化財調査報告六) 昭和三十八年 神戸市教育委員会
(2) 村川行弘「芦屋会下山遺跡発掘調査概要」(芦屋市文化財調査報告) 第一集 昭和三十四年 芦屋市教育委員会
石野博信 「神戸市伯母野山弥生遺構―集落の機能不明の平担面」(兵庫史学) 三七 昭和三十九年

(ル) 篠原遺跡 (しのはら いせき)
 (神戸市灘区中島・川中・手崎
 日柳)

古く明治四十年頃に土器の発見が注意され、昭和三年、旧六甲村篠原における新道工事中に弥生式土器の包含層の存在が報ぜられ、その実在が明確化して小林行雄によつて調査・研究のなされた遺跡である。⁽¹⁾

位置と環境 遺跡の立地するところは、六甲山地南面の山麓傾斜地で、六甲山に源を発する六甲川と柏谷川の合流部、両河川の間の複合扇状地を形成する三角地帯である。標高約六〇メートルを測るこれより以南、両川は合して都賀川となり、大阪湾へと注いでいる。

遺跡の範囲は、旧六甲村篠原字中島の大部分と、これに隣接する川中・手崎・日柳の一部に及び、六甲川の東岸や柏谷川のさらに西でも若干の土器片の存在が確認されており、東西にはかなり広範であったことが知られる。

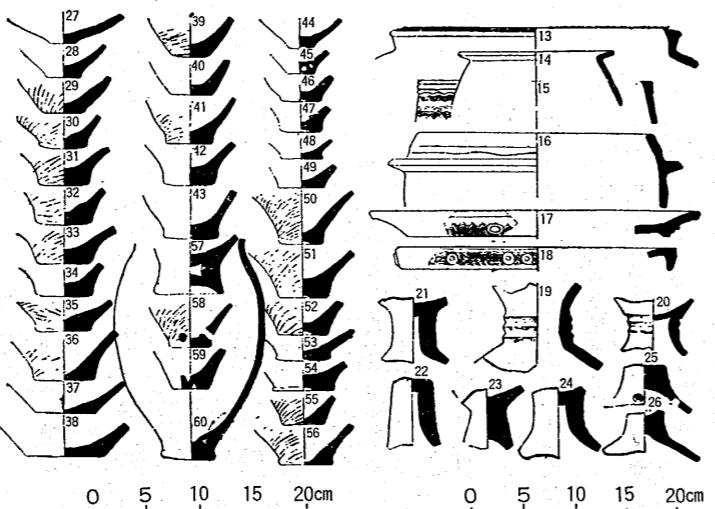


図106 篠原遺跡出土土器実測図(2) (小林行雄原図一部修正)

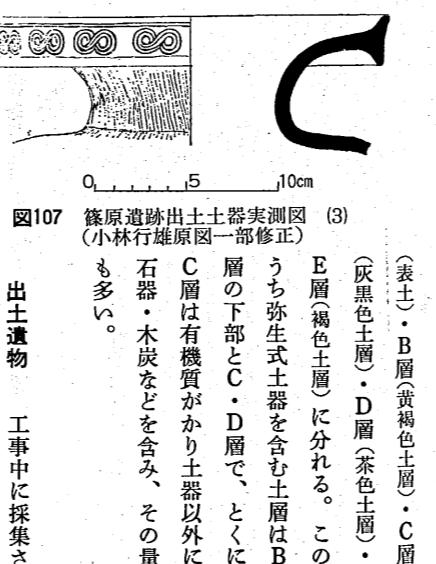


図107 篠原遺跡出土土器実測図(3) (小林行雄原図一部修正)
 (表土)・B層(黄褐色土層)・C層
 (灰黒色土層)・D層(茶色土層)・
 E層(褐色土層)に分れる。この
 うち弥生式土器を含む土層はB
 層の下部とC・D層で、とくに
 C層は有機質がかり土器以外に
 石器・木炭などを含み、その量
 も多い。

出土遺物 工事中に採集さ
 れた遺物には、多量の弥生式土
 器と若干の須恵器・石鎚・チップス・有孔の軽石小片・
 土錐・木炭などがある。
 弥生式土器は二、三の完形品の出土が告げられている
 が、大半は小片である(図105・106・107参照)。
 壺は少なく、口縁部の装飾は櫛引き波状文を盛用し、
 竹管文付の円形浮文を押捺する。文様をもたないものは
 後期様式の特徴をもつ。甕は底部が多く、やはり第V様

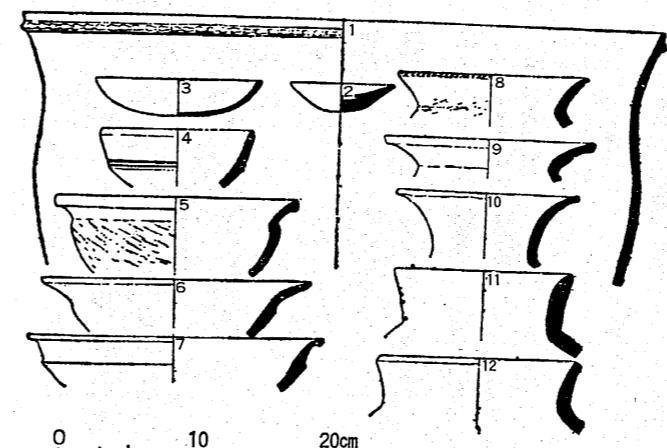


図105 篠原遺跡出土土器実測図(1) (小林行雄原図一部修正)

遺構 遺物包含層は道路の開設工事に伴つて掘り下
 げられて階段状の畑地断面に露出し、土層全体はA層

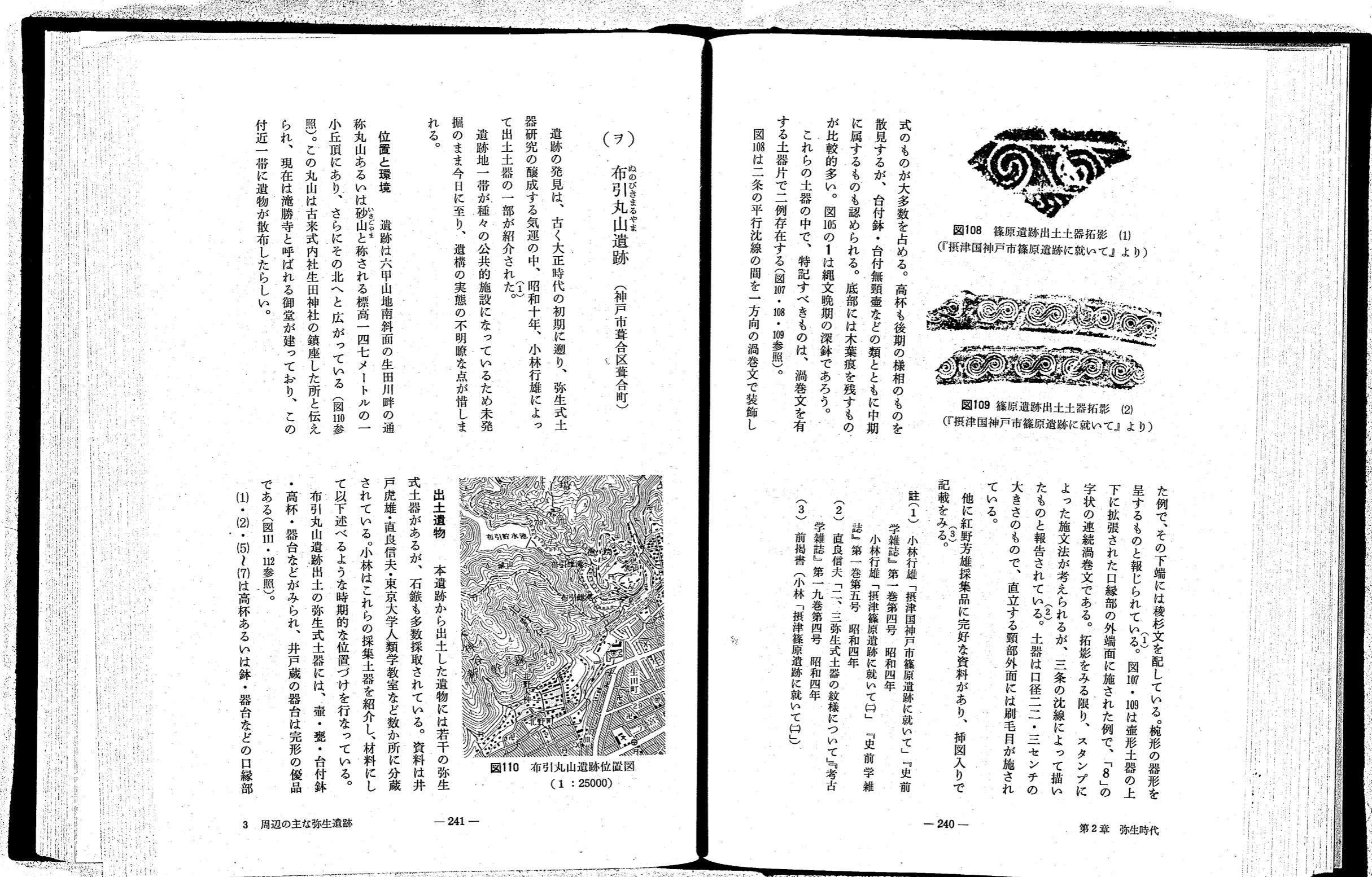


図108 篠原遺跡出土土器拓影 (1)
『摂津國神戸市篠原遺跡に就いて』より

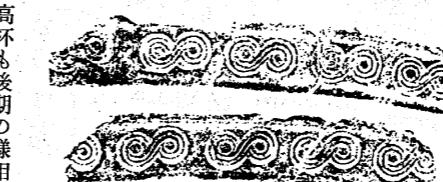


図109 篠原遺跡出土土器拓影 (2)
『摂津國神戸市篠原遺跡に就いて』より

式のものが大多数を占める。高杯も後期の様相のものを散見するが、台付鉢・台付無頸壺などの類とともに中期に属するものも認められる。底部には木葉痕を残すものが比較的多い。図105の1は縄文晚期の深鉢であろう。これらの土器の中で、特記すべきものは、渦巻文を有する土器片で二例存在する(図107・108・109参照)。

図108は一条の平行沈線の間を一方向の渦巻文で装飾し

た例で、その下端には稜杉文を配している。椀形の器形を呈するものと報じられている。⁽¹⁾ 図107・109は壺形土器の上に拡張された口縁部の外端面に施された例で、「8」の字状の連続渦巻文である。拓影をみると、スタンプによって描いたものと報告されている。⁽²⁾ 土器は口径二二・三センチの大きさのもので、直立する頸部外面には刷毛目が施されている。

他に紅野芳雄採集品に完好な資料があり、挿図入りで記載を見る。⁽³⁾

- (1) 小林行雄「摂津國神戸市篠原遺跡に就いて」『史前学雑誌』第一卷第四号 昭和四年
小林行雄「摂津篠原遺跡に就いて」『史前学雑誌』第一卷第五号 昭和四年
(2) 直良信夫「二、三弥生式土器の紋様について」『考古学雑誌』第一九卷第四号 昭和四年
(3) 前掲書(小林「摂津篠原遺跡に就いて」)



図110 布引丸山遺跡位置図
(1 : 25000)

(ヲ) 布引丸山遺跡 (神戸市葺合区葺合町)

遺跡の発見は、古く大正時代の初期に遡り、弥生式土器研究の醸成する気運の中、昭和十年、小林行雄によって出土土器の一部が紹介された。⁽¹⁾ 遺跡地一帯が種々の公共的施設になつてゐるため未発掘のまま今日に至り、遺構の実態の不明瞭な点が惜しまれる。

位置と環境 遺跡は六甲山地南斜面の生田川畔の通称丸山あるいは砂山と称される標高一四七メートルの一小丘頂にあり、さらにその北へと広がつてゐる(図110参照)。この丸山は古来式内社生田神社の鎮座した所と伝えられ、現在は滝勝寺と呼ばれる御堂が建つており、この付近一帯に遺物が散布したらしい。

出土遺物 本遺跡から出土した遺物には若干の弥生式土器があるが、石錐も多數採取されている。資料は井戸虎雄・直良信夫・東京大学人類学教室など数か所に分蔵されている。小林はこれらの採集土器を紹介し、材料にして以下述べるような時期的な位置づけを行なつてゐる。

布引丸山遺跡出土の弥生式土器には、壺・甕・台付鉢・高杯・器台などがみられ、井戸蔵の器台は完形の優品である(図111・112参照)。

(1)・(2)・(5)・(7)は高杯あるいは鉢・器台などの口縁部

式土器があるが、石錐も多數採取されている。資料は井

戸虎雄・直良信夫・東京大学人類学教室など数か所に分蔵されている。小林はこれらの採集土器を紹介し、材料にして以下述べるような時期的な位置づけを行なつてゐる。

布引丸山遺跡出土の弥生式土器には、壺・甕・台付鉢・高杯・器台などがみられ、井戸蔵の器台は完形の優品である(図111・112参照)。

(1)・(2)・(5)・

と考えられ、凹線文が二・三條走向し、(6)・(7)には櫛描文様が併用されている。(3)は完形の台付鉢形土器で、直口の鉢部に下方に縮まる脚台を付加し、一側面には縦位の半環状把手をそえており、体部に三条の、脚台部に二条の凹線文をめぐらす。口径一八・〇センチを測る。(4)も台付鉢の脚台部の破片で、下端に二条の凹線文が施さ

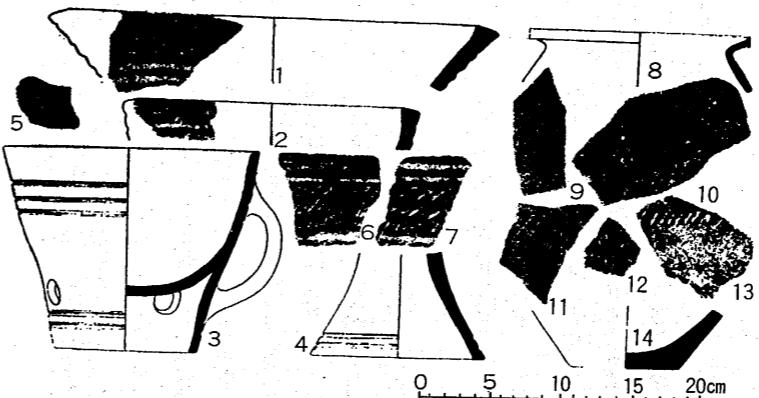


図111 布引丸山遺跡出土土器実測図(1)
(小林行雄原図一部修正)

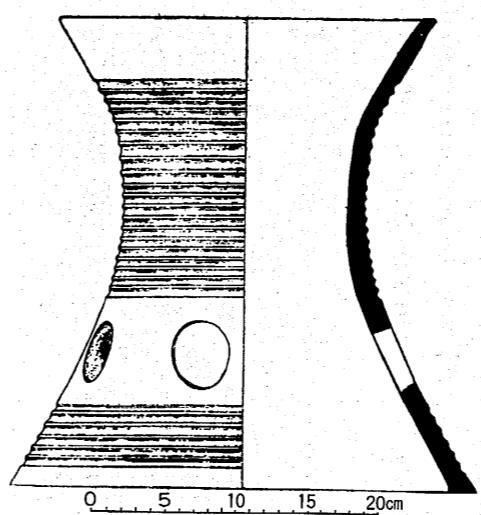


図112 布引丸山遺跡出土土器実測図(2)
(小林行雄原図一部修正)

れている。(9)～(13)は壺形土器の胴部断片とみられ、櫛描きの斜格文・簾状文などが施されている。

このように布引丸山遺跡出土土器の特徴は、太く浅くくぼませた「四線文を有する土器の出現によって示され」、その使用はとくに顯著であつて「四線文の強調に向つて進んで行く」傾向が看取でき、凹線文使用土器の中ではやや下る位置(畿内第IV様式指向)を占めている。

註(1) 小林行雄「神戸市布引丸山の弥生式土器」『考古学』

第六卷第四号 昭和十年

(ワ) 東山遺跡 (神戸市兵庫区京山町三丁目・会下山町)

神戸市兵庫区に所在する東山遺跡は、在地の人々の間で古くから知られ、大正四年頃には既に大野雲外らが踏査している。

明治三十年に「神戸市兵庫東山 石鎚 大野延太郎 イニシ」と記され⁽¹⁾昭和三年以降には小林行雄によつて

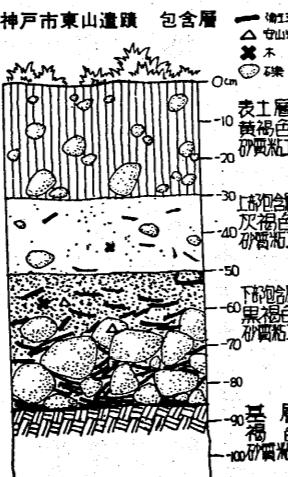


図114 東山遺跡包含層(「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」より)



図113 東山周辺遺跡位置図
(1:25000)

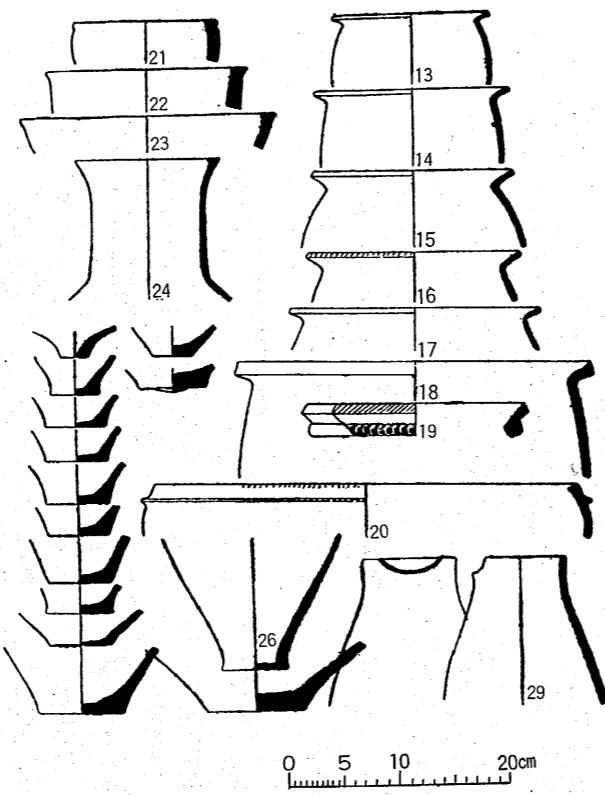


図116 東山遺跡出土土器実測図(2)
(小林行雄原図一部修正)

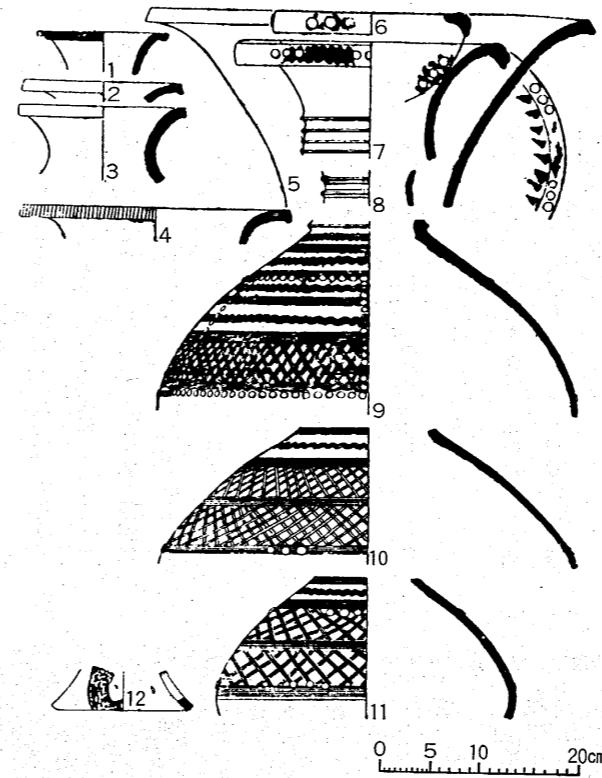


図115 東山遺跡出土土器実測図(1)(小林行雄原図一部修正)

位置と環境 遺跡は神戸の市街地に突出する洪積丘陵の東半が、標高八五・九メートルの会下山二本松の丘頂よりゆるやかに傾斜する所の丘尾にあり、標高三〇メートル前後を測る地点である。土器包含層の分布範囲はかなり広範にわたり、東は兵庫区東山町三丁目から西は同区会下山町に及び、各所に包含層の存在が確認されている。現在、遺跡地一帯は住宅が立ち並び、包含層の存在した当時の丘陵は削平されて明確な範囲を指摘することはできない。

調査の経過と結果 小林行雄によつて昭和三年から開始された試掘は、東山町三丁目(通称一本松)の北部に相当する地点で行なわれ、先に渡辺九一郎などによつて調査が行なわれた場所である(図113参照)。包含層は地表下三〇~五〇センチの上部と地表下五〇~八五センチの下部とに分れ、上部包含層からは弥生式土器小片・安山岩細片・木炭の上部と地表下五〇~八五センチの下部とに分れ、上部包含層からは弥生式土器小片・安山岩細片・木炭の類が、下部包含層からは石塊と混在した状態で弥生式土器及び石鎌・安山岩細片・木炭や釘状鉄器などが検出されている(図114参照)。このように包含層は上・下二層に分層されたが、上層出土の遺物が小量で細片が多かつた以外は、とくに遺物内容に変化は認められなかつたらしい。

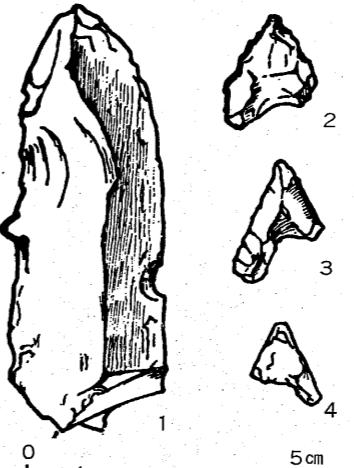


図117 東山遺跡出土石器実測図
(小林行雄原図一部修正)

相似形を成すもの」と考えられている。これに反し、安満B類土器及び粗製無文土器はみつかっておらず、「櫛目式文様土器を含む単相遺跡」として意義づけられる。石器は、ごく少量であるが、石鎌と安山岩の小片が発掘されている。同遺跡から採集された石器には、福原潛次郎所蔵の石槍断片や凹基式の打製石鎌、太田陸郎発見の凸基有茎式の打製石鎌がある⁽³⁾。前者の採集品には形態的にみて縄文時代のものも含まれている(図117参照)。

出土遺物 本遺跡からは、弥生式土器多数と石器類若干が出土している。土器には、壺・甕・鉢などの器種がみられ、高杯は少ない。

土器形式 はおよそ三つに大別でき、第一類(第115図1)、11・第116図18・19)、第二類(第116図13~17・21~23・24・25)、

第三類に分類される。第一類の土器は漏斗状の口縁をもつ細頸の壺形土器を主体とし、安満A類土器に該当する。

第二類の土器は、広口の壺形土器を中心とし、鉢形土器や片口の水差形土器などを含み、「安満C類土器のあるものと

この遺跡は、古く浜田耕作によって「貝輪を容れた素

(カ) 河原遺跡 (神戸市湊区熊野町二丁目)

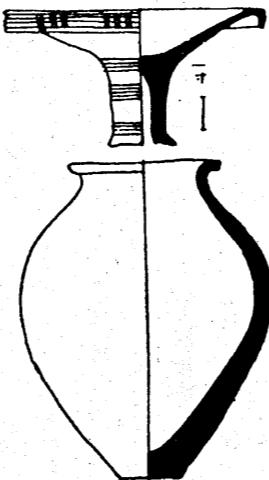


図118 河原遺跡出土土器実測図
(註2文献・浜田耕作原図より)

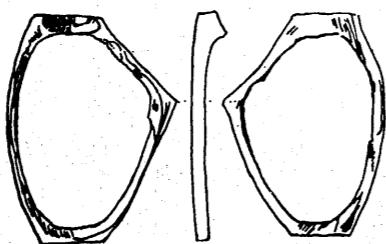


図119 河原遺跡出土貝輪実測図
(註2文献・浜田耕作原図より)

焼壺」の発見地として紹介され⁽¹⁾、前述した東山遺跡を概報した機に小林行雄があらためてとり上げている⁽²⁾。

位置と環境 遺跡は神戸市湊区熊野町一帯の洪積丘陵上にあり、先に記した東山遺跡の北西六〇〇メートル余の地点に位置する(図113参照)。その範囲は明確でなく、ただ貝輪の入った弥生式土器が発見された旧称河原という地域は「遺跡中の特殊地点として考察せらるべきものである事」が指摘されている⁽²⁾。

遺構 遺物は地下一メートルのところの「黒い土」の層から得られたといふ聞き取りがなされているのみで、遺構の有無については定かでない。

出土遺物 出土した遺物としては、完形の壺形土器一、高杯の残欠一と壺の中に包蔵されていた約四〇個のぼるテンギニシ・アカニシ製の貝輪がある(図118・119参照)。高杯は壺の蓋として用いられたものと思われる。

出土土器二点は、東山遺跡の第一類土器に属し、畿内

第III・IV様式に位置づけられる。

註(1) 浜田耕作「貝輪を容れた素燒壺」『人類学雑誌』第三六卷第八・九・一〇・一一・一二号 大正十年

(2) 小林前掲書(神戸市東山遺跡弥生式土器研究一)

(3) 現在では、ゴホウラ貝と推定されている。

(ヨ) 熊野遺跡

(神戸市兵庫区熊野町五丁目)

昭和六年に起工された都市計画路線工事によって包含層が発見された遺跡で、竪穴群が検出され、弥生式土器が僅少ながら採集されている。⁽¹⁾

位置と環境 前述した河原遺跡の西方三五〇メートル程の位置にあり、標高七〇メートル前後の山麓傾斜面上に存在する(図113参照)。黒褐色砂質粘土の土器包含層の広がりはかなり広範で、河原遺跡にまで続く可能性が高い。

になるとともに、新たに近傍に溝状遺構が検出される。このことから、本竪穴の平面形を知ることはできないにしろ、炉を有することと相まって、住居址様の遺構を想定することができる。

出土遺物 竪穴群より弥生式土器・鉄片などが出土している他、近接する熊野神社境内から石鎌・石匙なども採集されている。

註(1) 小林前掲書(神戸市東山遺跡弥生式土器研究一)



図121 五ヶ山周辺遺跡位置図(1:25000)

1. 五ヶ山遺跡
2. 上ヶ原新田墓地遺跡
3. 東山遺跡 a. 甲山山頂銅劍出土土地(△印)

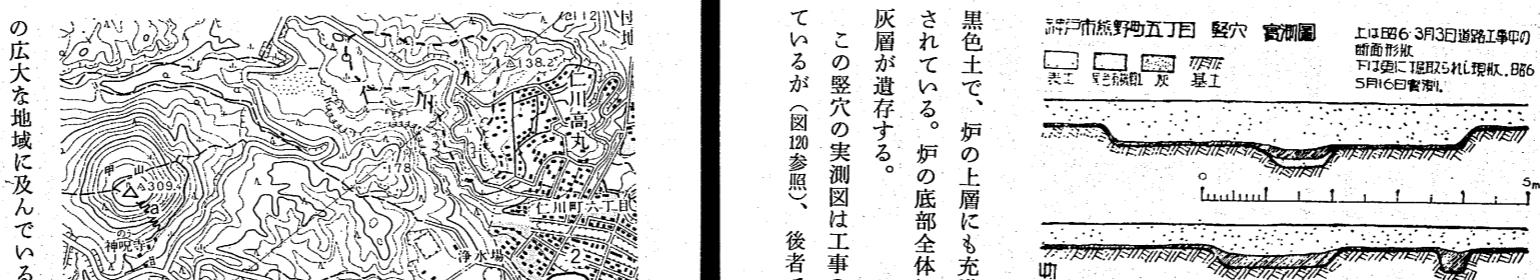


図120 熊野遺跡竪穴実測図(註1文献より)

遺構 道路工事 中の切り通し断面にいくつかの竪穴が観察され、実測がなされている。その一つは、切削面にて幅五・四メートル、深さ約三〇センチを測り、中央部には幅一・〇メートル、深さ約三〇センチの炉を有している。竪穴内覆土は炭化物を含む

黒色土で、炉の上層にも充満し、弥生式土器小片が含まれている。炉の底部全体には一五センチの厚みをもつ灰層が遺存する。

この竪穴の実測図は工事の進行に伴い、二枚つくられており、前者ではその形状が小範囲なもの

位置と環境 五ヶ山弥生遺跡は六甲山系東端に位置する甲山の東麓をえぐる仁川と逆瀬川にはさまれた南東方向に走る丘陵尾根部に立地する。一帯は標高一〇〇メートルを測る小丘陵が起伏し、各々の尾根筋に包含層が確認され、その規模は約三万五千平方メートル

の広大な地域に及んでいる(図121参照)。

調査の経過 遺跡が発見されたのは、昭和三十三年六月に同地域で行なわれていた採土作業によつて遺構の



写真73 五ヶ山遺跡第2号住居址

一部が露出していることが判明したことによる。同年夏、武藤誠・村川行弘の指導で関西学院大学考古学研究会の手による発掘が行なわれ、住居址二基と溝状遺構が検出された。(写真73・74参照)。

その後、昭和三

十六年八月、主尾根から西南方向に分れた支尾根上に當まれた五ヶ山古墳群第二号墳調査中に、古墳の床面下に東西約四・五メートルの竪穴式住居址が遺存することが確認された。

ついで昭和四十三年には、この地域の西側でテニスコート造成中に多量の土器が出土したが、工事が続行され



写真74 溝状遺構

たため遺構などについての詳細は不明である。採集された遺物からは、第三様式(古)の土器が確認されるので、この遺跡が弥生中期中頃から當されたものであることが推定される。

さらに昭和四十五年十月、阪急不動産株式会社による大規模な宅地造成に際して、西宮市教委・宝塚市教委・関西学院大学考古学研究会の手で二度の発掘調査と確認調査が行なわれた。⁽²⁾第一次の調査では対象面積一、二〇四平方メートル(西宮市域八一四平方メートル・宝塚市域三八〇平方メートル)で、第四様式の竪穴式住居址二棟、第

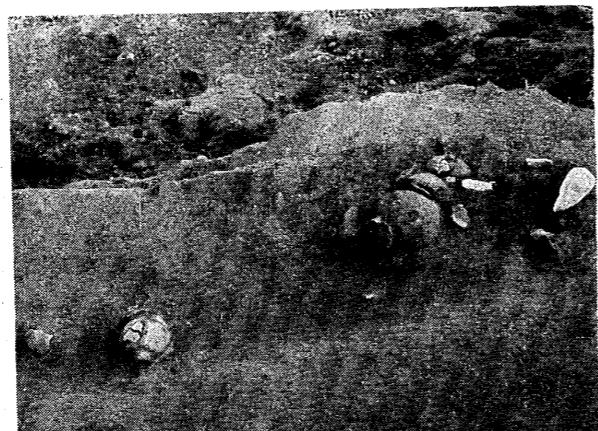


写真75 五ヶ山遺跡遺構(№4地点の土器出土状態)
<西宮市教育委員会提供>

部一〇・高杯形土器一・鉢形土器四・土器片三九一・不明石製品二などが検出された。

また昭和四十九年三月三日から仁川町六の一の地域の北東約五〇メートルのところで阪急不動産株式会社の駐車場建設に伴なう事前調査が行なわれた。この調査では地山直上の暗黄褐色土中より第四様式を中心とする弥生式土器片が確認され、住居址とは断定できないが、生活面のあることが推定された。

遺構 五ヶ山遺跡の遺構としては、現在までに住居址七軒以上・溝状遺構一本、その他土器群・落込みなどが確認されている。

第一号住居址

円形と隅丸方形の住居が重複する竪穴住居である。円形住居は径五・六メートルと考えられる。方形住居は尾根の頂部を切った方四メートルの床面をもつ住居址である。大半は削平されているため、周溝の一部と張り出し

V様式住居址一棟が確認された。また多量の土器と石鎌・石庖丁などの石器類も出土した(写真75参照)。

ついで昭和四十八年八月四日から仁川町六の一の地域で遺跡確認調査が行なわれ、住居址一棟と壺形土器口縁

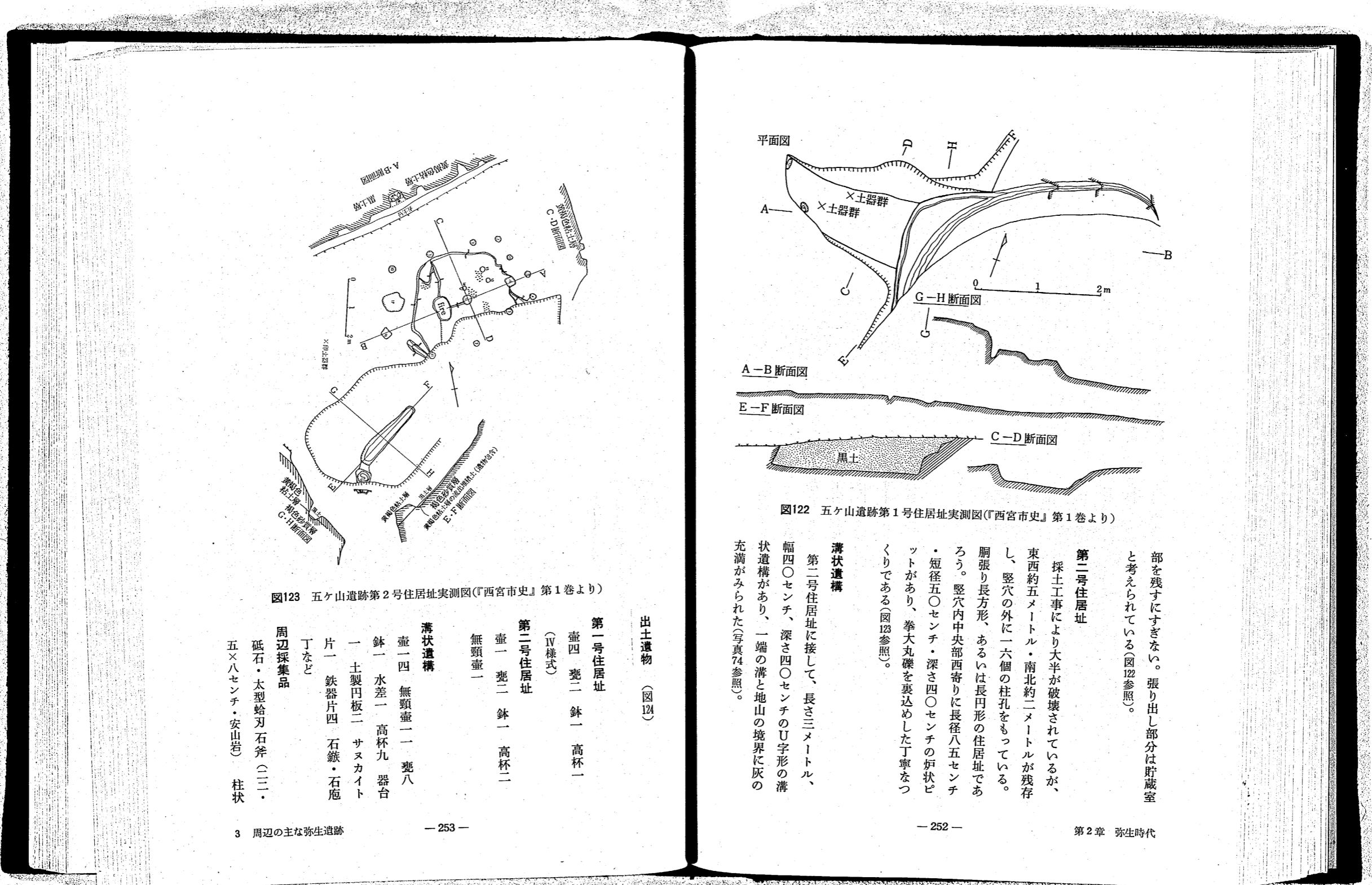


図122 五ヶ山遺跡第1号住居址実測図(『西宮市史』第1巻より)

第二号住居址
部を残すにすぎない。張り出し部分は貯蔵室
と考えられている(図122参照)。

探土工事により大半が破壊されているが、
東西約五メートル・南北約一メートルが残存
し、竪穴の外に一六個の柱孔をもつていてる。
胴張り長方形、あるいは長円形の住居址であ
ろう。竪穴内中央部西寄りに長径八五センチ
・短径五〇センチ・深さ四〇センチの炉状ビ
ットがあり、拳大丸礫を裏込めした丁寧なつ
くりである(図122参照)。

溝状遺構

第二号住居址に接して、長さ三メートル、
幅四〇センチ、深さ四〇センチのU字形の溝
状遺構があり、一端の溝と地山の境界に灰の
充満がみられた(写真74参照)。

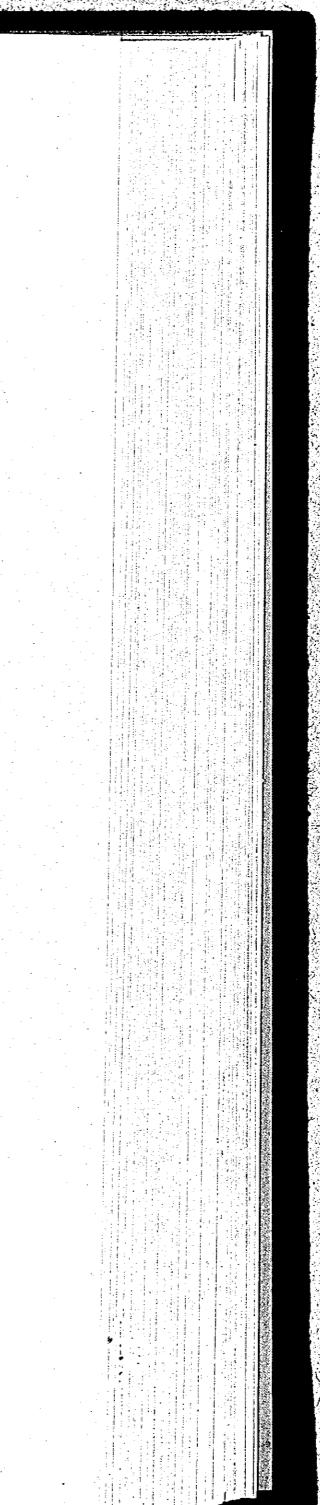
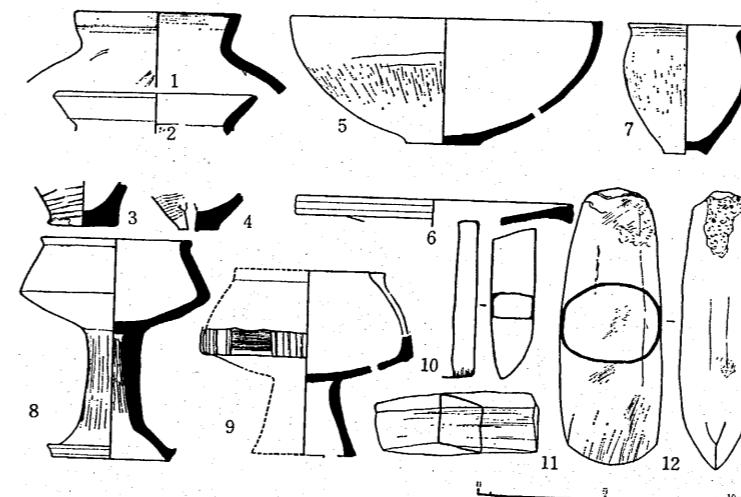


図124 五ヶ山遺跡出土遺物実測図(『西宮市史』第1巻より)



註(1) 村川行弘「西宮市五ヶ山遺跡」『芦屋市文化財調査報告』第一集 昭和二十四年 芦屋市教育委員会
武藤誠「考古学よりみた古代の西宮地方」西宮市史第一巻 昭和三十四年 西宮市役所
石野博信「兵庫県西宮市仁川五ヶ山弥生遺跡採集の男根状石製品『古代学研究』三七 昭和三十七年
市五ヶ山』『関西学院史学』一一 昭和四十二年
石野博信「小立壁と貯蔵室をもつ弥生住居址(西宮遺跡)』『4地点の調査報告』(西宮市文化財資料第14号) 昭和五十年 西宮市教育委員会

(2) 最近、その結果が報告されている『仁川五ヶ山弥生遺跡』(西宮市教育委員会)。

註(1) 大正初年、既に田沢金吾によって明らかにされている(田沢金吾「攝津広田神社附近における石器時代の遺跡と遺物」『考古学雑誌』第五卷第一〇号 大正四年)。

(2) 紅野芳雄「考古小鉄」昭和十五年 西宮史談会

(3) 前掲書(『西宮市史』第一巻)

(レ) 上ヶ原新田墓地遺跡
(西宮市仁川百合野町)

石鎚の発見が早くから伝えられ、昭和七年から十二年にかけて紅野芳雄が熱心に踏査し、多くの遺物を探集している。

下約二〇~三〇センチのところに厚さ約二〇センチの黒色有機質土層が遺存しており、多量の遺物を包含していることが記録されている。

昭和七年、遺跡上で次々と住宅の建設が行なわれ、現在もなお宅地造成が進みつつあって、遺構の性格に関するわからぬまま今日に至っている。

出土遺物 多量の弥生式土器・打製石鎚・サヌカイト片の他、磨製石鎚・石錐・石匙があり、わずかではあるが、紡錘車・砥石・敲石の類も採集されている。サヌカイト製打製石鎚は凹・平基形式のものが多いのが特徴的である。また、サヌカイト片の出土数は膨大な量にのぼり、九〇〇点はあるという。後述する岡田山遺跡同様、石器製作所址的な性格の遺跡かもしれない。

位置と環境 遺跡は甲山から東へ派生する上ヶ原台地の縁端にあり、仁川の南岸、関西学院大学の北西方、神戸市水道局上ヶ原浄水場の東方に位置する。他に付近には、県立西宮高等学校、市立甲陵中学校、同上ヶ原小学校が建っており、いわゆる文教地区に属している。標高は五〇~七〇メートルである。遺跡範囲は上ヶ原墓地より北西方約二〇〇メートルの間とみられ、当時、住宅地建設の工事に際し、相当包含層が擾乱されている。北は直ちに崖をなし、仁川の渓谷を望み、西から南にかけては甲山に連なる丘陵が続く。当時、本遺跡の付近には三基の破壊された古墳があつたといい、さらに墓地東方にも一〇数基を数える古墳が認められたらしい。もとは狭隘ながら耕地に利用されていたが、今日では住宅地と化して当時の景観は一変している(図121参照)。

遺跡のある台地は東および南へ緩傾斜し、武庫川流域の肥沃な平野とはるかに大阪湾を望む景勝の地である。

遺構 遺構の実態については不明であるが、現地表

(ソ) 東山遺跡（西宮市甲陽園東山町）

(ツ) 甲山山頂銅劍出土地

昭和四十五年～四十六年、西宮市教育委員会が年次計画にしたがって実施した埋蔵文化財分布調査の際発見された遺跡⁽¹⁾で、その実態については将来の精査を待たねばならない。

位置と環境 遺跡は上ヶ原台地の縁端、宅地化のおよぶ北限地にあり、標高は八五メートルを測る。遺跡の東方は崖状地形があり、眺望は東・南へ開けている（図121参照）。

出土遺物 壺・高杯などの弥生式土器が採集されている。

註(1) 『西宮市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地名表』
昭和四十九年 西宮市教育委員会

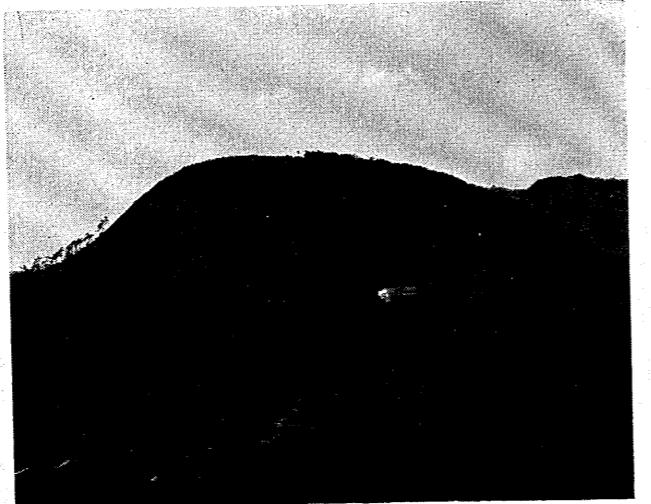


写真76 甲山銅劍出土地の遠景

部) を測り、全般的に錆びをおわれていて、関の部分はやや裾開きになつて五センチの幅を有し、身に対しても直角になつてゐる。「身は隆線状の鎬^(しのぎ)があるが、関か



写真77 甲山出土の銅劍
(西宮市教育委員会提供)

3 周辺の主な弥生遺跡

昭和四十五年十一月、甲山登山中の一高校生によつて発見された⁽¹⁾。

位置と環境 六甲の東麓、西宮市の北山山塊には標高三〇九・四メートルを測る甲山があり、兜の形を呈して特徴的である（図121・写真76参照）。銅劍はこの山の山頂部で発見され、端部が一・五センチほど地表に露出しているらしいので、当初よりかなり深い位置に埋納していたものとは考え難い。付近では山頂に所在する平和の塔の東南方で、弥生式土器片や石鎌・サヌカイトの剝片などを採集されており、遺構の存在する可能性も残るが、発見時の状況から推察して単独出土とみられる。

銅劍 全長二八・六センチ・幅三・〇センチ（中央

ら穂先まで幅も厚さも一様なきわめて薄く扁平なつくりで、穂も、狭状部も、棘状突起もない。茎は身と同じく扁平で幅二センチ許り、下端が欠損し、二センチあまりが残り、その中央下端に直径五ミリ針孔が半円形で残されている。⁽¹⁾劍身は大きく彎曲し、鋒上りが悪く、かなり荒れている。また、関部に欠損がみられ、身には刃こぼれが認められる（写真77参照）。

劍身の形態は、通有の銅劍とは異なり、どちらかと言えば銅戈の形に近似しており、实用性を離れた儀器・祭器化したものと思われる。身の長さ二二六・四センチ、茎の長さ二・二センチで、厚みは鎬部で約四ミリ、刀部で約二ミリを計測する。埋没時あるいは出土時に変形を被り、現状では劍身全体がひどく歪曲している。

なお、甲山山頂付近からは、この銅劍以外に弥生式土器の小片と石鎌が一点採集されており、未調査なだけに

今後に期待が寄せられる。

註(1) 武藤 誠「銅劍の新資料」『西宮文化』第一七号 昭和四十六年
(2) 『西宮の文化財』(埋蔵文化財編)〈文化財資料第七号〉 昭和四十九年 西宮市教育委員会

(ネ) 上大市遺跡 (西宮市上大市三丁目)

昭和四十四年十一月から同四十五年四月にかけて、山陽新幹線建設に伴つて予察発掘された遺跡で、上大市遺跡発掘調査委員会・兵庫県教育委員会が調査を担当し、実績報告が出されている。⁽¹⁾ 武庫川流域の平地部に遺跡がほとんど知られていない現段階では、同川右岸に立地する低地性遺跡として注目されよう。なお、同遺跡は、現在「大市A2遺跡」として呼び改められており、須恵器などの出土も報じられている。⁽²⁾

位置と環境 大阪湾より現武庫川を約六キロメートル

チの溝一本のみであり、溝からの出土遺物はない。

地層は花崗岩を主とする円礫・砂層・粘土層などに分類でき、表土下二・五メートルのところに大きな円礫の集積が認められ、これは旧武庫川の河床と考えられる。

この間には三回にわたる大規模な氾濫があった事実を層序が示し、十五世紀以降、幕末に至るまでに風水害による大災害がこの地域に前後八回ほど勃発している文献史料の記録と併せて、洪水の多発した武庫川の性格を反映している。

こうしたことより、当遺跡が武庫川の旧河川内、もしくは氾濫原に立地していたことが知られる。水稻耕作に生産の基盤をおく弥生集落にとって、必ずしも恵まれ

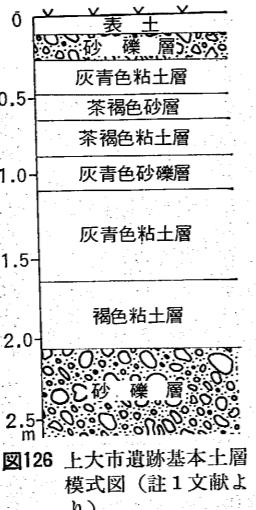


図126 上大市遺跡基本土壤模式図(註1文献より)

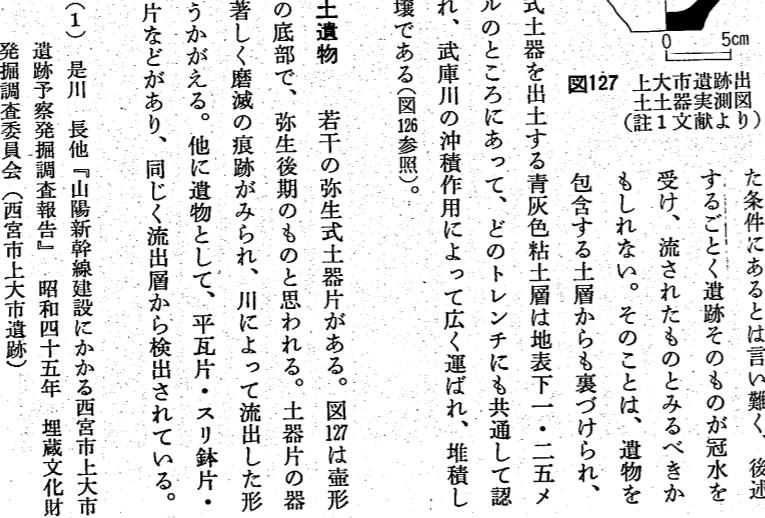


図127 包含する土層からも裏づけられ、
弥生式土器を出土する青灰色粘土層は地表下一・二五メートルのところにあって、どのトレンチにも共通して認められ、武庫川の沖積作用によって広く運ばれ、堆積した土壤である(図126参照)。

出土遺物 若干の弥生式土器片がある。図127は壺形土器の底部で、弥生後期のものと思われる。土器片の器表は著しく磨滅の痕跡がみられ、川によつて流出した形跡がうかがえる。他に遺物として、平瓦片・スリ鉢片・陶器片などがあり、同じく流出層から検出されている。

3 周辺の主な弥生遺跡

- 259 -



図125 上大市周辺遺跡位置図
(1:25000)
1.上大市遺跡 2.甲東園天神社遺跡

- 258 -

第2章 弥生時代

(2) 前掲書『西宮市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地名表』

(ナ) 岡田山遺跡 (西宮市門戸岡田町)

おかだやま

昭和初年の紅野芳雄らの踏査により、遺跡の所在が確認されている。

位置と環境 遺跡は上ヶ原台地の東南端にある標高

四〇メートルの岡田山の平坦な丘陵上に広く存在したが、昭和五・六年、同地が神戸女学院の移転敷地となり、その造成工事の進行とともに潰滅して今はない(写真78参照)。東側は武庫平野に隣接し、西側は愛宕山に対峙して、その間は急峻な谷地形となっている(図128参照)。

出土遺物 弥生式土器はなく、石鎌・石錐・石庖丁破片などとともに多量のサヌカイト片が採集されている。石器の製作が主として行なわれていたのかもしれない



図128 岡田山周辺遺跡位置図(1:25000)
1. 岡田山遺跡 2. 六軒山遺跡 3. 大池遺跡

い。
今日では台地の縁辺で
わずかな遺物の散布を認
めるにすぎない。

(ラ) 六軒山遺跡 (西宮市五月ヶ丘)

大正二年から同三年にかけて、紅野芳雄によつて発見され⁽¹⁾、大正四年には田沢金吾も遺跡の存在を見出している⁽²⁾。石器のみが数多く出土する遺跡として古くから識者の注目するところとなつていて⁽³⁾いる。

位置と環境 遺跡は上ヶ原台地の南端、標高五〇メートル余の丘陵上にあつたが、大正十五年、付近一帯が西宮土地株式会社の経営地となり、土取場と化して完全に消滅している。広田神社の北方約五〇〇メートルに位置しており、地理的環境は御手洗川の流路にのぞむ丘陵の縁辺で、当時茶畠となっていた。北方には甲山の秀峰を仰ぎみる場所である。遺跡範囲は一〇〇メートル四方の大きさという(図128参照)。

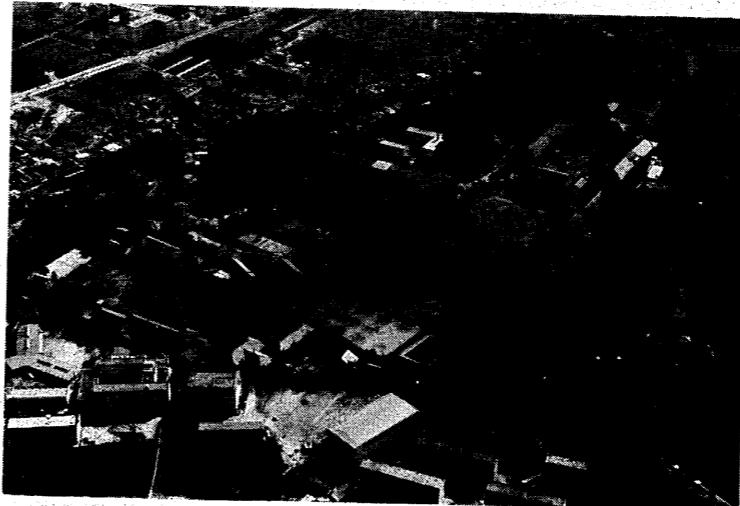


写真78 岡田山遺跡の現状(航空写真) (西宮市教育委員会 提供)

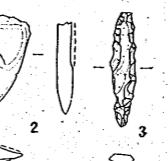


図129 六軒山遺跡出土石器実測図(縮尺1/2)

西宮市教育委員会提供

出土遺物 紅野の記録によると、打製石鎌・サヌカイト多
数と若干の磨製石鎌・磨製石斧
・石錐・石庖丁などが採集され
ているが、弥生式土器はない。

石器には未製品もかなり含まれ
ている。おそらく石器製作が行
なわれていたものとみられる。
また、田沢の報文では、「石
<紅野芳雄
(2) 鎌八十余個、石槍一個、石斧一
個、石匙二個、石小刀二個、石
錐一個、其他堅の如きもの数個等なり」と報ぜられてお
り、やはり土器の出土が皆無である点が注意されよう。

註(1) 紅野芳雄『考古小録』昭和十五年 西宮史談会

(2) 田沢金吾「摂津広田神社付近に於ける石器時代の遺
跡と遺物」『考古学雑誌』第五卷第一〇号 大正四年

(3) 前掲書(『西宮市史』第一巻)

(ム) 大池遺跡

(西宮市甲陽園本庄町)

位置と環境 阪急電車甲陽園駅の東方約二〇〇メー
トルのところに甲陽園小学校があるが、その東南に広が
っている大池の北岸から東岸にかけて遺跡は存在する
(図128参照)。遺跡の性格については詳細不明であり、い
わゆる遺物散布地の域を脱しない。

出土遺物 弥生式土器片が若干確認されている。
註(1) 前掲書(『西宮市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地
名表』)



図130 柏堂遺跡位置図(1:25000)

(ウ) 柏堂遺跡 (西宮市柏堂町)

位置と環境 遺跡は六甲の南面、夙川上流域の支流
分岐点に位置する標高一八九メートルの小丘陵上にあ
り、現在、遺跡地全体は果樹園に開墾されて旧地形をと
どめていない。柏堂の集落の南方にあたり、阪急甲陽園
駅からは西方へ一・二キロメートルの距離を隔てる。ま
た、西南方四〇〇メートルのところには、現在、県立西
宮北高等学校・苦楽園中学校が建っている(図130参照)。

出土遺物 弥生式土器・土師器の破片、石鎌・サヌ
カイト片などが小量採集されている。時期については明
確でないが、上限は一応後期のものとみられる。

註(1) 紅野芳雄『考古小録』昭和十五年 西宮史談会
(2) 武藤誠「考古学よりみた古代の西宮地方」『西宮
市史』第一巻 昭和三十四年 西宮市役所

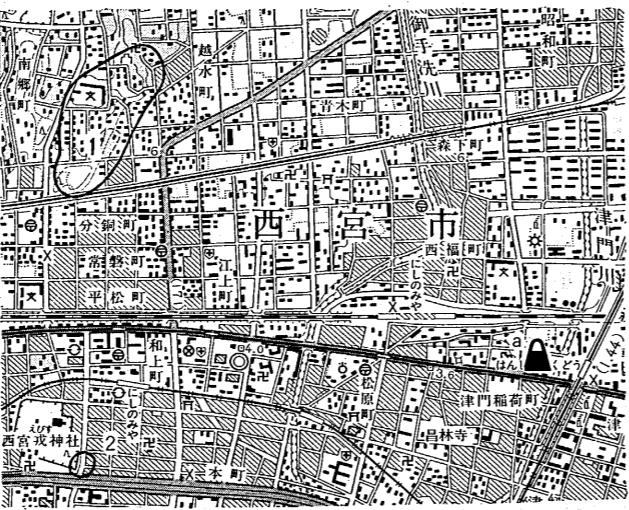


図131 越水山周辺遺跡位置図 (1:25000)

1. 越水山遺跡 2. 西宮神社社頭遺跡 a. 津門銅鐸出土土地

位置と環境

遺跡は西宮市の西端、夙川の西方五〇メートル、阪急沿線の北約六〇〇メートルの位置にあります。今日では宅地化してその痕跡すらない。同市飯岩町に鎮座する越木岩神社の南方約一・二キロに当り、神社付近の遺跡とは異なる。『考古小録』には「下新田西南約一町の丘陵上」という記述がみえ、夙川の西、南へ延びる丘陵の東麓に位置していたことがわかる。

当時、土器片を包含していた場所は、丘陵西部の断崖絶壁をなすか所で、地表下約一一と二四センチぐらいの所に純然たる黒色の遺物包含層が水平に広がっていたらしく、遺構の有無については詳らかでない。

(キ) 越木岩遺跡

(西宮市久出ヶ谷町)

大正の末年から昭和十二年にかけて紅野が踏査し、遺物を採集している。

- 註(1) 紅野芳雄『考古小録』昭和十五年 西宮史談会
(2) 前掲書『西宮市史』第一巻。
(3) 横山浩一・佐原 真『西宮市(越木岩)』京都大学文学部博物館考古学資料目録 1 昭和三十五年 京都大学文学部

(ノ) 越水山遺跡

(西宮市桜谷町・清水町)

昭和初年に遺物の散布が知られた遺跡で、当時の状況は『考古小録』に詳しい。ただし、その発見は大正二年以前に遡る。他に、田沢金吾・田岡香逸・山田博雄も踏査しており、昭和三十一年には高井悌三郎が窯跡とみられる遺構を発掘調査している。

たくとどめていない。しかし、『考古小録』の記載によると、当初、大社小学校正門の南約一〇〇メートルの地点に高さ約一〇メートルの崖があつて、弥生式土器などを含む黒色の遺物包含層が露出していたようである。遺物はこの付近に広がる畑地や小学校西南畔の畑地に散布しており、また小学校北側の畑地においても多数採集されたらしく、紅野芳雄によれば、右記したように、およそ三か所にしほられるという。また、田沢の報文によれば、遺跡範囲が東西三〇〇メートル、南北五〇〇メートルの広い範囲におよんでいることが知れる。本遺跡は、標高二〇と三〇メートルの低丘陵上にあり、その東には御手洗川、西には夙川が南流して、東南方には西宮の市街地を見おろす景勝の地を占める。なお、中世末期には、当地域の拠点として有名な越水城が丘陵の東側に存在した(図131参照)。

遺構 『考古小録』には「竪穴跡」の記述がみえるが⁽¹⁾、その実態は不明である。しかし、先述した黒色の厚

い包含層が住居址であった可能性は高い。

また丘陵の北東端には、東西六メートル・南北四メートルほどの範囲に灰層や炭化物を混える褐色土層があり、壺・甕・高杯などの弥生式土器、土錐の細片が出土している。付近には火熱を受けた花崗岩礫や粘土塊が認められたといい、弥生式土器焼成の窯跡のような性格の遺構であるかもしれない。

また、勇正広の最近の踏査によると、旧越水丘陵の最南端、阪急沿線の北側一帯（現西宮市西田町）には、なむ丘陵自然地形の一部を残すか所があり、黒色の厚い包含層が遺存しているという。図132は、そのとき採集された弥生式土器の断片である。現状では「西田遺跡」として独立させて扱う方が適切と思われるが、丘陵縁端部に立地する点を重視して、越水山遺跡の南限を示すものと理解し、当遺跡の範疇に含めて考へるべきであろう。

出土遺物 遺物には、文様の少ない弥生式土器片若干と石錐・磨製石器・土錐・燧石・サヌカイト剝片などが

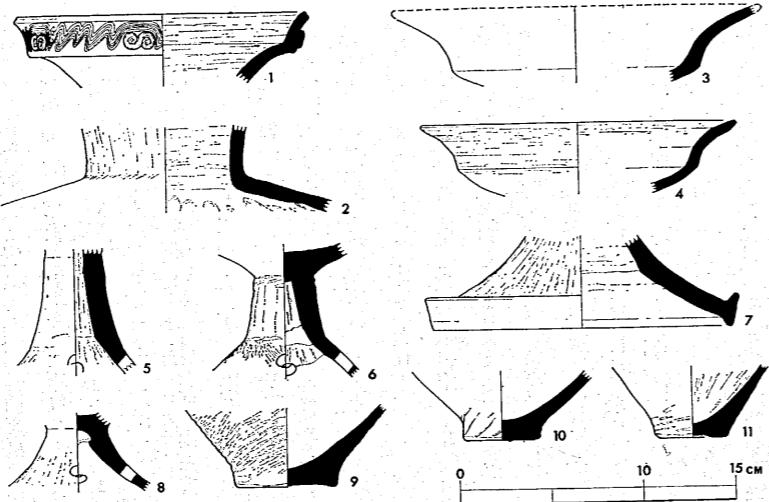


図132 越水山遺跡西田地区採集の土器実測図(勇正広所蔵)

あり、土錐や燧石の数はとくに多い。他に石包丁・磨製石斧・鉄器・貝輪? なども少量ながら採集されている。

石錐は凸基・凹基両形式のものがあるが、燧石製と報じられている種のものは、おそらく縄文時代に属するものであろう。

本遺跡で顕著な土錐は、その数二〇〇個以上あるとみられる、山田博雄の採集品には完形品が多い（写真79参照）。

石錐は凸基・凹基両形式のものがあるが、燧石製と報じられている種のものは、おそらく縄文時代に属するものであろう。

本遺跡で顕著な土錐は、その数二〇〇個以上あるとみられる、山田博雄の採集品には完形品が多い（写真79参照）。

石錐は凸基・凹基両形式のものがあるが、燧石製と報じられている種のものは、おそらく縄文時代に属するものであろう。

本遺跡の時期について確証はないが、紅野採集の弥生式土器に文様のみられないことより、後期に盛行の中心をもっていたものと推定され、勇採集の土器はその微証となる。採集された土器のうち、器形の判明するものは一二点ある（図132参照）。

(1) は復原口径一五・五センチを計る複合口縁の壺で、外反して立上る口縁部の外端面にS字状の連續渦巻浮文を貼付け、さらに波長の不均等な櫛描き波状文で加飾している。内面は丹念にヘラで磨いて仕上げる。(2)

3 周辺の主な弥生遺跡

- 267 -

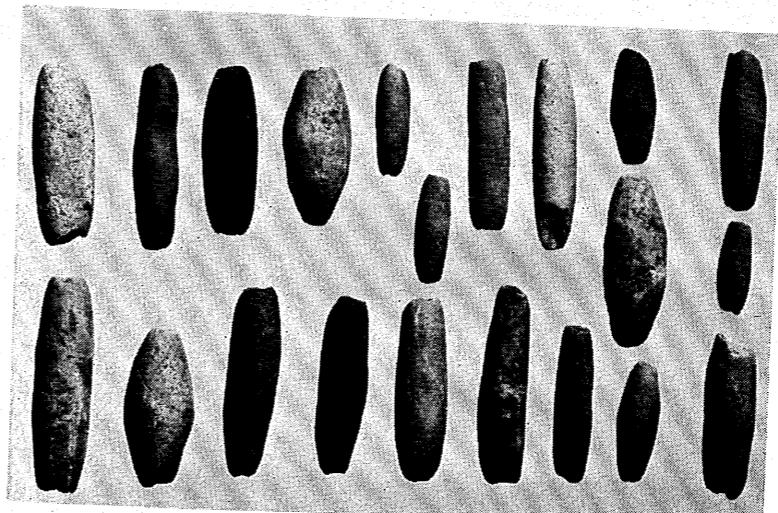


写真79 越水山遺跡採集の土錐（山田博雄所蔵・伊丹市立博物館提供）

- 266 -

第2章 弥生時代

も同じく壺の頸胸部の破片で、頸部外面を縦にヘラ磨きし、胴部内面には成形に際しての指圧痕が認められる。

(3)～(8)は高杯の断片である。(3)・(4)は杯部で、共によく外反し、(5)・(6)・(8)はこれらの脚部になるかもしれない。(6)は外面を刷毛で調整したのち、ヘラ磨きしている。(7)は脚部末端が上下に拡張され、幅一・八センチの端面を形づくっている。中期様式の形態である。

(9)～(11)の底部の残欠はすべて叩き目が認められ、(10)は壺、(9)・(11)は甕とみられる。

これらの土器は採集品とはいえ、地表下九〇センチの断面溝状の遺構内に堆積した単純包含層の崩落した土層より出土したものであり、すべて灰褐色を呈し、胎土に砂粒を混える点で共通するので、ほぼ同時期（畿内第V様式）のものと考えられる。ただし、(1)・(2)のことく、明らかに庄内式まで下降するものが含まれており、他の土器が、この時期まで残ったとみる方がより事実に即している。これらの類品は、近隣では尼崎市四ノ坪遺跡⁽⁴⁾で出土している。

地の南側一帯の畑地に広がっていた。遺跡地の標高は約三〇メートルを測る。

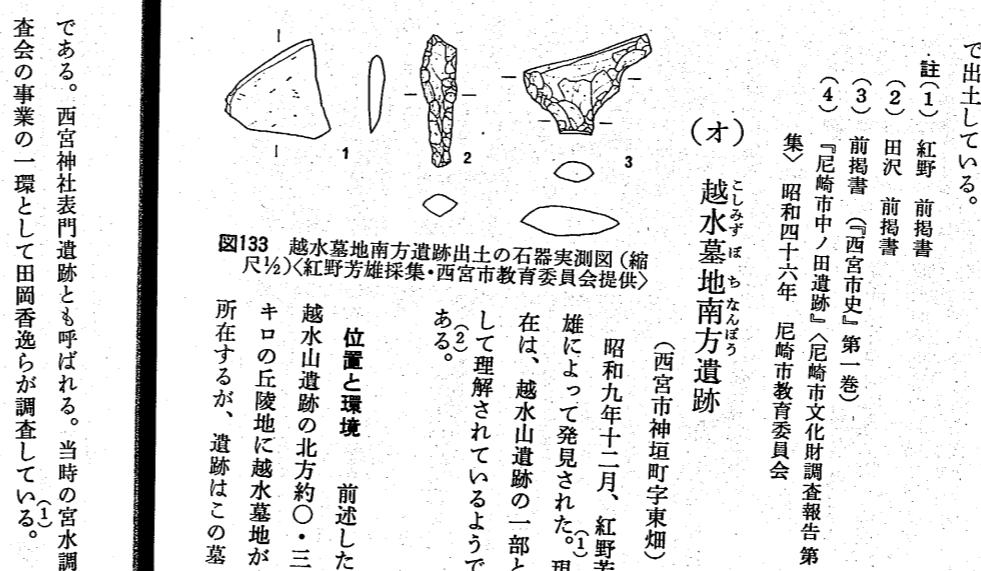
出土遺物　土錐とサヌカイト片が著しく多く、石鎌・石槍・石錐・石斧・石庖丁・石錐などが少量ある。また、磨製石器も若干あり、そのうち磨製石鎌が二点含まれているのが注目される。ただし、これらの石器に対応する弥生式土器の出土は知られていないので所属時期を明らかにすることはできない。

註(1) 紅野芳雄『考古小録』昭和十五年 西宮史談会
(2) 前掲書『西宮市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地名表』

(ク) 西宮神社社頭遺跡

（西宮市社家町）

昭和十年、県道産所港線に下水道敷設工事が行なわれた際、西宮神社表門前北寄りの地点で発見された遺跡



で出土している。

註(1) 紅野芳雄 前掲書

(2) 田沢 前掲書

(3) 前掲書『西宮市史』第一巻

(4) 『尼崎市中ノ田遺跡』（尼崎市文化財調査報告第六集）昭和四十六年 尼崎市教育委員会

（5）前掲書『西宮市史』第一巻

（6）前掲書『西宮市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地名表』

（7）前掲書『西宮市史』第一巻

（8）前掲書『西宮市埋蔵文化財 遺跡分布地図及び地名表』

（9）前掲書『西宮市史』第一巻

（10）前掲書『西宮市史』第一巻

（11）前掲書『西宮市史』第一巻

（12）前掲書『西宮市史』第一巻

（13）前掲書『西宮市史』第一巻

（14）前掲書『西宮市史』第一巻

（15）前掲書『西宮市史』第一巻

（16）前掲書『西宮市史』第一巻

（17）前掲書『西宮市史』第一巻

（18）前掲書『西宮市史』第一巻

（19）前掲書『西宮市史』第一巻

（20）前掲書『西宮市史』第一巻

（21）前掲書『西宮市史』第一巻

（22）前掲書『西宮市史』第一巻

（23）前掲書『西宮市史』第一巻

（24）前掲書『西宮市史』第一巻

（25）前掲書『西宮市史』第一巻

（26）前掲書『西宮市史』第一巻

（27）前掲書『西宮市史』第一巻

（28）前掲書『西宮市史』第一巻

（29）前掲書『西宮市史』第一巻

（30）前掲書『西宮市史』第一巻

（31）前掲書『西宮市史』第一巻

（32）前掲書『西宮市史』第一巻

（33）前掲書『西宮市史』第一巻

（34）前掲書『西宮市史』第一巻

（35）前掲書『西宮市史』第一巻

（36）前掲書『西宮市史』第一巻

（37）前掲書『西宮市史』第一巻

（38）前掲書『西宮市史』第一巻

（39）前掲書『西宮市史』第一巻

（40）前掲書『西宮市史』第一巻

（41）前掲書『西宮市史』第一巻

（42）前掲書『西宮市史』第一巻

（43）前掲書『西宮市史』第一巻

（44）前掲書『西宮市史』第一巻

（45）前掲書『西宮市史』第一巻

（46）前掲書『西宮市史』第一巻

（47）前掲書『西宮市史』第一巻

（48）前掲書『西宮市史』第一巻

（49）前掲書『西宮市史』第一巻

（50）前掲書『西宮市史』第一巻

（51）前掲書『西宮市史』第一巻

（52）前掲書『西宮市史』第一巻

（53）前掲書『西宮市史』第一巻

（54）前掲書『西宮市史』第一巻

（55）前掲書『西宮市史』第一巻

（56）前掲書『西宮市史』第一巻

（57）前掲書『西宮市史』第一巻

（58）前掲書『西宮市史』第一巻

（59）前掲書『西宮市史』第一巻

（60）前掲書『西宮市史』第一巻

（61）前掲書『西宮市史』第一巻

（62）前掲書『西宮市史』第一巻

（63）前掲書『西宮市史』第一巻

（64）前掲書『西宮市史』第一巻

（65）前掲書『西宮市史』第一巻

（66）前掲書『西宮市史』第一巻

（67）前掲書『西宮市史』第一巻

（68）前掲書『西宮市史』第一巻

（69）前掲書『西宮市史』第一巻

（70）前掲書『西宮市史』第一巻

（71）前掲書『西宮市史』第一巻

（72）前掲書『西宮市史』第一巻

（73）前掲書『西宮市史』第一巻

（74）前掲書『西宮市史』第一巻

（75）前掲書『西宮市史』第一巻

（76）前掲書『西宮市史』第一巻

（77）前掲書『西宮市史』第一巻

（78）前掲書『西宮市史』第一巻

（79）前掲書『西宮市史』第一巻

（80）前掲書『西宮市史』第一巻

（81）前掲書『西宮市史』第一巻

（82）前掲書『西宮市史』第一巻

（83）前掲書『西宮市史』第一巻

（84）前掲書『西宮市史』第一巻

（85）前掲書『西宮市史』第一巻

（86）前掲書『西宮市史』第一巻

（87）前掲書『西宮市史』第一巻

（88）前掲書『西宮市史』第一巻

（89）前掲書『西宮市史』第一巻

（90）前掲書『西宮市史』第一巻

（91）前掲書『西宮市史』第一巻

（92）前掲書『西宮市史』第一巻

（93）前掲書『西宮市史』第一巻

（94）前掲書『西宮市史』第一巻

（95）前掲書『西宮市史』第一巻

（96）前掲書『西宮市史』第一巻

（97）前掲書『西宮市史』第一巻

（98）前掲書『西宮市史』第一巻

（99）前掲書『西宮市史』第一巻

（100）前掲書『西宮市史』第一巻

（101）前掲書『西宮市史』第一巻

（102）前掲書『西宮市史』第一巻

（103）前掲書『西宮市史』第一巻

（104）前掲書『西宮市史』第一巻

（105）前掲書『西宮市史』第一巻

（106）前掲書『西宮市史』第一巻

（107）前掲書『西宮市史』第一巻

（108）前掲書『西宮市史』第一巻

（109）前掲書『西宮市史』第一巻

（110）前掲書『西宮市史』第一巻

（111）前掲書『西宮市史』第一巻

（112）前掲書『西宮市史』第一巻

（113）前掲書『西宮市史』第一巻

（114）前掲書『西宮市史』第一巻

（115）前掲書『西宮市史』第一巻

（116）前掲書『西宮市史』第一巻

（117）前掲書『西宮市史』第一巻

（118）前掲書『西宮市史』第一巻

（119）前掲書『西宮市史』第一巻

（120）前掲書『西宮市史』第一巻

（121）前掲書『西宮市史』第一巻

（122）前掲書『西宮市史』第一巻

（123）前掲書『西宮市史』第一巻

（124）前掲書『西宮市史』第一巻

（125）前掲書『西宮市史』第一巻

（126）前掲書『西宮市史』第一巻

（127）前掲書『西宮市史』第一巻

部から出土し、土師器は貝殻層下の砂層から出土して
いる。

このように、この付近では弥生式土器や土師器の包含層が貝殻層下にあり、近辺で実施されいくつかの宮水究明の試掘調査でも同様な結果が出ている。

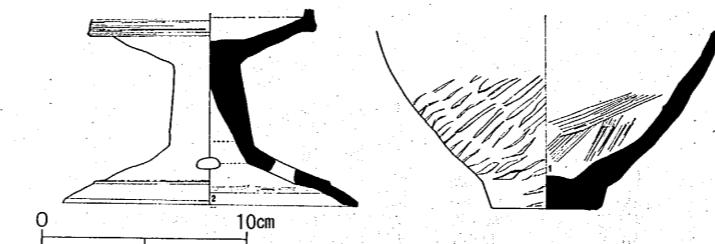


図134 西宮神社社頭遺跡出土土器実測図（『西宮の文化財』より）

出土遺物 遺物は、
西宮神社表門前北寄りの
地点出土の弥生式土器・
土師器、さらに北方の地
点出土の半折した磨製石
斧の刃部などがある。

弥生式土器・土師器には壺・甕・高杯・皿など

が、いわゆる庄内式に特有な高杯の変異形になるかもし
れない。

註（1）前掲書（『西宮市史』第一巻）
（2）『西宮の文化財』（埋蔵文化財編）〈文化財資料
第七号〉西宮市教育委員会

（ヤ）津門銅鐸出土地

（西宮市津門大塚町）

明治十三年八月、旧武庫郡今津町津門東芝の前田源兵
衛所有の畠地で灌漑用井戸掘削工事中、偶然発見された。
出土後一か年を経過して前田家所有に帰し、昭和九年九
月には重要美術品の指定を受け、現在に至っている。

ただし、昭和二十年八月、第二次世界大戦の戦禍を被
り、前田宅とともに惜しくも火災にあって、かなり損傷
している。

この銅鐸の紹介は、まず神戸史談会作成の絵はがきを

初見とし、古くは吉井良秀が『考古学雑誌』に報文を記
し、梅原末治の『銅鐸の研究』にも収録され、直良信夫

の器種がみられる。ここでは、次の二点を紹介する。
（1）

甕形土器（図134の1）

突出した平底を有する典型的な畿内第V様式の甕で、
底径五・六センチ・残存器高九・四センチを測る。口縁
部及び器体の上半を欠失し、底部および胴部下半のみ残
存する。外面は右上りの叩き目手法によつて成形され、
内面は刷毛目調整がなされている。明るく淡赤褐色に焼
き上げられており、胎土も良好である。

高杯形土器（図134の2）

杯部の立上りを全て失っているが、杯底部から脚部全
体は完存している。杯部と脚部は別個につくられた後、
組合せて接合されている。器面は杯・脚部ともヘラで磨
かれ、脚裾部内面には細かな刷毛が用いられる。脚部末
端はヨコナデされ、外面には凹線が施されて軽い段をな
している。脚部に直径一・二センチの円孔が四つ均等に
穿たれている。脚径一四・八センチ・残存高一〇・〇セ
ンチを測り、焼成堅緻で赤褐色を呈し、胎土も微細で
ある。杯部の大半を欠くので全体の器形は知り得ない

はその出土状態について克明に記述している。⁽³⁾また、時を
前後して喜田貞吉が『摂津郷土史論』などに収め、田沢金
吾作成の実測図を掲げて本銅鐸についてふれている。先
にあげた親王寺所蔵銅鐸と並んで、六甲山系平野部出土
の銅鐸として重要な存在といえる。⁽⁵⁾

位置と環境 銅鐸の出土した場所は、西摂平野の西
端、標高五メートル前後の冲積地で、東川の支流津門川
の西岸に位置し、国道二号線沿いの北に二メートルばかり
りの地点である。国鉄西宮駅の東南東四五〇メートル、
阪急電鉄阪神国道駅の西二〇〇メートルのところであ
り、かつて出土地点の南方には稻荷山、東方には大塚山
の前方後円墳が存在した（図131参照）。

出土場所の旧字名は北垣内といい、出土地点は畔道か
ら若干隔たつた畠地中であつたらしく。

出土状態 当時における銅鐸の出土状態は定かでな
く、それを紹介した各文献においても統一した見解は得

られていないが、各々次のとく記されている。

「地下三尺ヲ掘リシ際発見セシモノナリ」

(神戸史談会発行の絵はがき解説)

「灌漑用の小池を掘らんとして、偶然地下四、五尺の処にて得しなり。」(吉井良秀「摂津国武庫郡津戸村の古墳と銅鐸」『考古学雑誌』第三卷第一二号)

「明治十三年に所蔵者前田源兵衛氏が其の所有の畠地を耕作上水に乏しき為め数尺を掘下げ候節発見致し候、尚其の節素焼の土器一個(壺なりと申し居り候)を発見致せしが、鍬にて破壊致し候と所有者にて発見者たる前田氏は申述られ候」(田沢金吾の喜田貞吉博士宛の書簡)

「前田氏が、鐸の発掘された當時、その層位を自身で調べ、そして直接の発掘者である手伝人夫についてただが、約一尺からあり、それから下には、卵色をした美麗な全くの砂層があつて、これは約四尺から約八寸の厚味をもつてゐたといふ。そして銅鐸は、この四尺の卵色をした砂層の上から二尺程下にあつたものであつて、都合この地

の地表面からは三尺の下に存在してゐたのであるといふ。」(直良信夫「今津出土の銅鐸とその出土状態について」『考古学雑誌』第一八卷第三号)

これらの所見を総合して考へると、地表下約一メートルのところから出土したことは事実らしいが、詳細な検出過程に関してはいずれもまったく伝えていない。

銅 鐸 佐原編年の扁平鉗式に属する六区画製表櫛文鐸で、総高四一・五センチ、鉗の高さ一〇・八セン

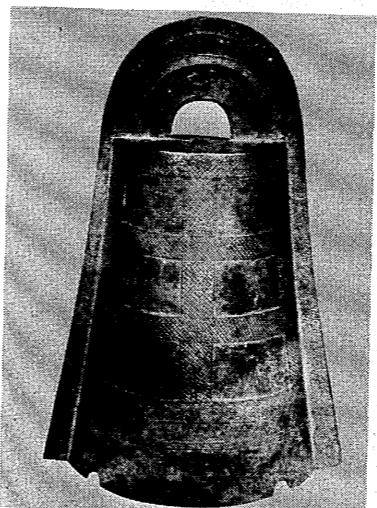


写真80 津門出土銅鐸
(『武庫地方郷土史料目録』より)

チ、身の高さ二〇・七センチ、身の底径二一・〇センチ
(長径)×一三・二センチ(短径)を測る。

全面光沢を放つた青緑錆でおおわれていたと伝えられるが、戦禍による損傷は著しい。鉗は外縁部から内向鋸歯文・綾杉文・突線文と順次内孔縁へと飾り、身は扁円の筒形を呈し、上端と下端中央には故意に施したとみられる小さな切れ込みがある。鋤上りは全体的に巧みであり、非常に薄手のつくりである。型持孔は丸いものが二個認められる。鉗は両面とも内向鋸歯文が配され、飾耳はない。内面凸帯は裾より一・三センチ上にあつて、やや幅広く頂端は丸い(写真80 参照)。

(5) 武藤 誠「津門出土の銅鐸—弥生時代の西宮地方」
『西宮市史』第一卷 昭和三十四年 西宮市役所

- 註(1) 吉井良秀「摂津国武庫郡津戸村の古墳と銅鐸」『考古学雑誌』第三卷第一二号 大正二年
(2) 梅原末治「津門銅鐸」『銅鐸の研究』昭和二年
(3) 直良信夫「今津出土の銅鐸とその出土状態」『考古学雑誌』第一八卷第三号 昭和三年
(4) 喜田貞吉「武庫地方と銅鐸・上代の武庫地方」『摂津郷土史論』大正七年
喜田貞吉「銅鐸の發見」『神戸市史』別録一 大正十一年

4. 会下山遺跡出土土器特論

(一) 出土土器よりみた会下山集落の生活様式

本市の会下山遺跡は、弥生時代の集落一つ分をほぼ全掘した遺跡として畿内では稀少例であり、膨大な出土資料とともに、今日では高地性集落の全国的標準となつてゐる。今回の市史編集事業に際しては、その特性を高地性集落の生活様式という側面から浮彫りにすべく、別の観点に立つて検討し直し、再分析を試みてみた。目的の一つは会下山遺跡の経営年代の究明にあり、いま一つは集落内の機能・様相の把握にある。主要素材は出土土器のうち、抽出された様式・器種の判別可能な破片一、〇〇〇余点で、それについて細かく統計処理を行なつた。作業成果の集約は表39(折り込み図)に示されたグラフのとおりである。

グラフの見方 統計の結果は、様式別の数値を表40で、器種別の数値を表43で示した。表の各項目は遺構別

・調査地点別のデーターであるが、各表の右端の欄はそれを各々集計したもので、いわば集落全体の傾向を示している。各表はさらに項目ごとの実数を比較し易いよう

に百分率で換算し、集計分も同様の操作を行なつている。そして表39は、これらの表のデーターに基づいて円グラフに示しなおしたもので、遺構・調査地点との対応を地形図に図示し、より視覚的に訴えたものである。

円グラフの大きさは、右下の凡例で表示したように、統計にかかった土器の破片数の多寡を示し、五〇点をその単位としている。すなわち、最小の円グラフは五〇点未満であり、C住居址・平石ピット・焼土塙・M土塙墓・昭和31年予察地點などがこれに相当する。最大は一九二〇点の統計処理数を数えるJ住居址で、U廃棄場址の一〇〇点がこれにつぐ。

集落全体の土器様式別出土量 さて、二つセツトになつた円グラフのうち、左側に示したものは各出土地點

出土土器よりみた会下山集落の生活様式

本市の会下山遺跡は、弥生時代の集落一つ分をほぼ全

掘した遺跡として畿内では稀少例であり、膨大な出土資
料とともに、今日では高地性集落の全国的標準となつて
いる。今回の市史編集事業に際しては、その特性を高地

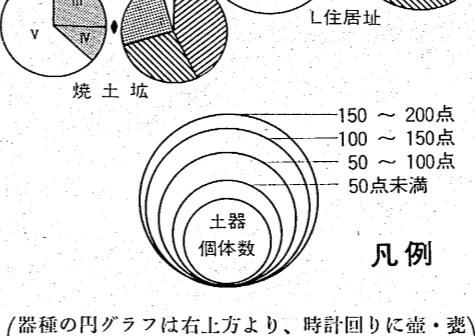
性集落の生活様式という側面から浮彫りにすべく、別の
観点に立って検討し直し、再分析を試みてみた。目的の
一つは会下山遺跡の経営年代の究明であり、いま一つは

集落内の機能・様相の把握にある。主要素材は出土土器
のうち、抽出された様式・器種の判別可能な破片一、〇〇
〇余点で、それについて細かな統計処理を行なった。作

業成約は表39(折り込み図)に示されたグラフのと
おりである。

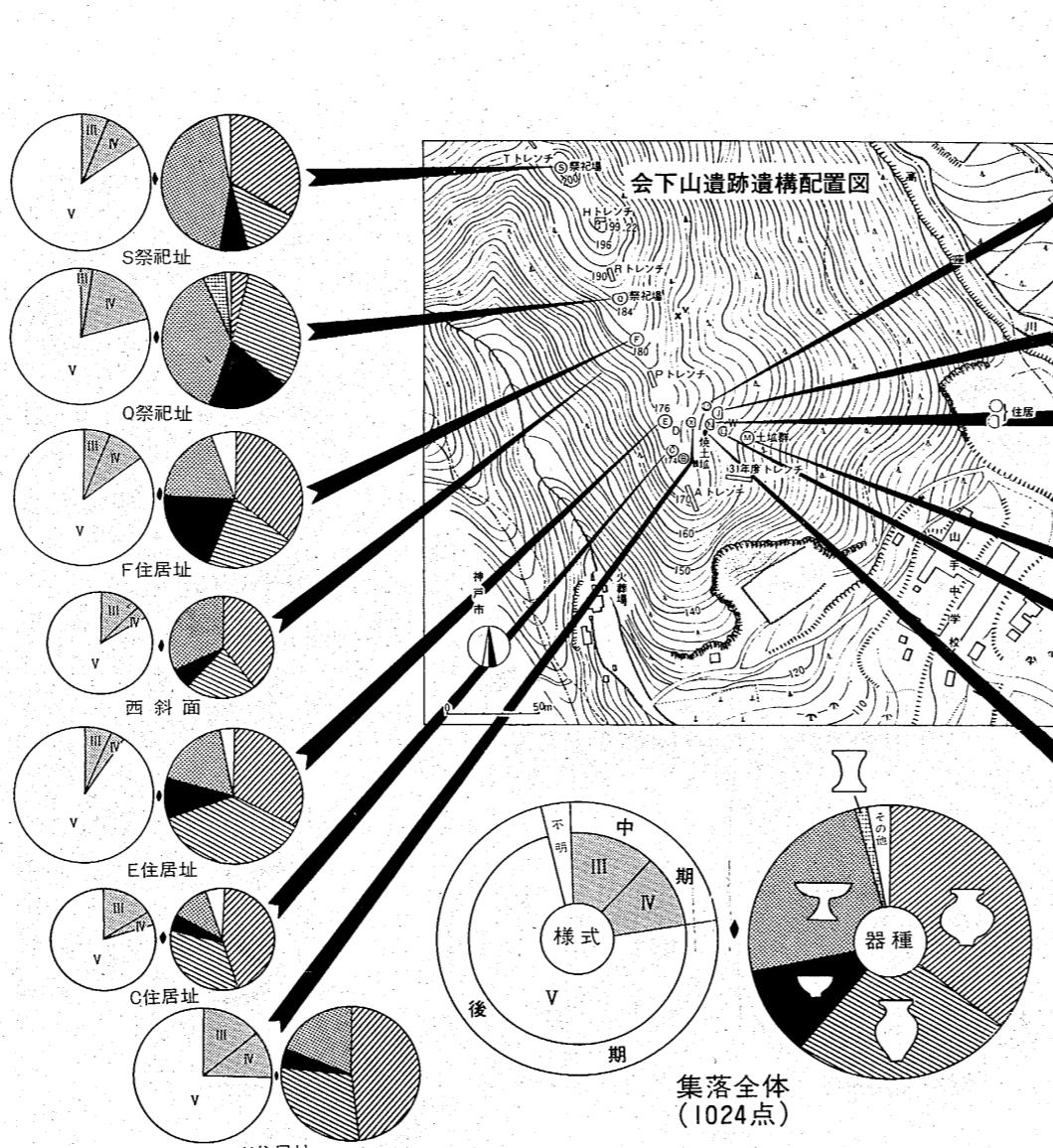
統計にかかった土器の破片数の多寡を示し、五〇点をそ
の単位としている。すなわち、最小の円グラフは五〇点
未満であり、C住居址・平石ピット・焼土塙・M土塙墓
二〇点がこれにつぐ。
二点の統計処理数を数えるJ住居址で、U廃棄場址の一
凡例

集落全体の土器様式別出土量
さて、二つセットになつた円グラフのうち、左側に示したものは各出土地点



(器種の円グラフは右上方より、時計回りに壺・甕
・鉢・高杯・器台の主要5器種の組成を示す。)

表39 会下山遺跡における地点別土器様式出土量・主要器種組成



この土器様式別出土量をあらわしていく。中央下に表示したのは各遺構・各調査地点別のデーターを集計して割出した集落全体の傾向である。これを見て明らかとなつて、会下山集落全体ではⅢ様式期13%、Ⅳ様式期12%、Ⅴ様式期75%となり、後期の土器がかなりのウエートを占めてくることが知られる。Ⅲ様式とⅣ様式の様式

分離に関しては、壺形土器の一部や甕形土器の大半についてなお不明な点が多く、必ずしも正確な割合を示して

いるとは言えながら、中期様式の土器が遺跡全体で出土

した土器の四分の一を占めてくる事実はその是否にかか

わらず動かし難い。

ここで問題となるのは、上記したような中期段階の

表40 各遺構・発掘地点別の土器様式別出土量

出土地点 土器様式	S	Q	F	P	E	C	X	N	U	J	L	平	石	燒土	M	昭和31年西斜面発掘 年子寮地點	昭和48年西斜面発掘 年子寮地點
	祭祀址	祭祀址	住居址	棚址	住居址	住居址	住居址	住居址	住居址	住居址	住居址	ピット	焼土	土坑墓地點	計	計	
Ⅲ 個体数	4	2	3	0	6	6	8	22	23	17	11	7	8	3	10	6	136
	百分率	6%	2%	5%	0%	6%	17%	13%	39%	20%	9%	16%	24%	6%	50%	12%	13%
Ⅳ 個体数	6	18	6	0	2	4	7	4	18	37	8	2	4	2	3	2	123
	百分率	9%	20%	9%	0%	2%	11%	12%	7%	16%	20%	12%	12%	5%	15%	4%	12%
Ⅴ 個体数	56	69	55	2	90	25	45	31	75	130	48	20	22	41	7	42	758
	百分率	85%	78%	86%	100%	92%	72%	75%	54%	64%	71%	72%	69%	64%	89%	35%	84%
計	66	89	64	2	98	35	60	57	116	184	67	29	34	46	20	50	1017
不明	0	1	4	1	0	2	0	3	4	8	1	0	1	2	0	0	27

土器比率の僅少性であるが、弥生後期の土器に中期の土器が微量伴出する現象は單に遺跡全体の時間的連続の問題にとどまらず、各遺構・調査地点別の詳細な分析を必要としよう。

各遺構・発掘地点ごとの土器様式別出土量 表39

40をみて明らかなように、中期様式の土器を最も多量に含んでいるのは46%の含有率を示すN住居址で、中・後期の土器組成率は相半ばしている。これにつぐものはU廃棄場所(36%)・焼土塙(36%)で同比率を示し、中期の土器を数多く出土する遺構がいずれも純然たる生活址でない点が注目される。この他、J住居址(29%)・L住居址(28%)など東西支尾根の低位置に占地する住居が集落の平均値を上回る中期の土器をもつてゐる事実も見逃せない。東西・南北両尾根の分岐点に位置するX住居址は25%の中期土器を有し、集落全体の傾向に合致しているが、III・IV様式の細かな比率も集落の統計と同じ数値を示して興味深く、その中心的位置を占める立地条件

・甕の蓋・手焙・ミニチュア品などは「その他」として別個に扱つた。

壺は一般的な形態である広口型の壺の他、長頸壺・細頸壺・無頸壺・台付無頸壺などいくつにも分れ、第一様式(前期)から生まれた鉢や高杯も第三様式期以降、「多く量に用いるようになり、壺・甕とならんて様式を構成する主な器種に昇格⁽³⁾」している。会下山の集落全体では、壺35%・甕26%・鉢10%・高杯26%・器台1%・その他2%の割合でもって構成されており、壺がトップの座を占め、甕と高杯が同等の比率で含まれている。鉢はこれら三器種に比べやや少なく、一〇個体の土器があれば一個の割合で存在する計算となる。これらに比べ、器台はきわめて僅少で、後述するごとく出土地点別にみた場合でも偏在しており、後期の時期を主体とする会下山遺跡においてさえ、とくに多くの数を必要としたような器種ではなかつたらしい。なお、畿内では前期段階で九割近くの割合を占めていた壺・甕のセットも会下山ぐらいの時期になると、約六割ぐらい

件も加担して、いわば会下山集落の平均的住居と呼ぶにふさわしい。

これに対して、南北方向に延びる中央主尾根上の諸住居出土の中期土器の割合は全般的にみて非常に低い。C住居址(28%)は例外的な存在といえるが、他是E住居址(8%)・F住居址(14%)・Q祭祀址(22%)・S祭祀址(15%)というのが実態で、CからSまでの南北尾根諸遺構の平均パーセンテージは19%と算出される。これは昭和四十八年の発掘地点である西斜面のデーター(16%)にほぼ近いが、西斜面地域の流出土器群が南北尾根立地の諸遺構に由来するものと考えた場合、むしろ当然の結果として理解されよう。

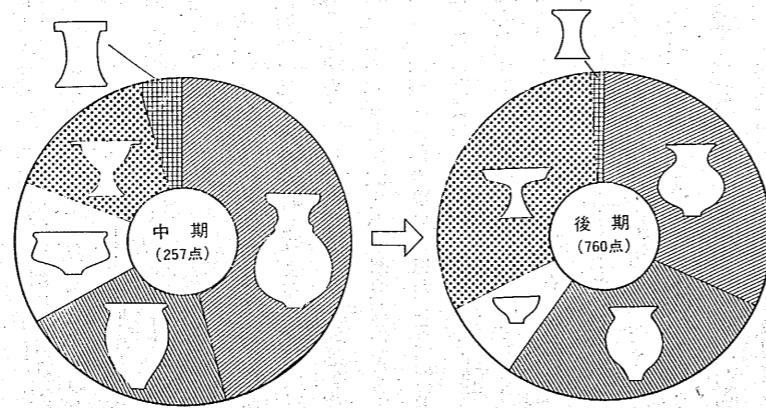
集落全体の主要器種組成 一方、表43及び表39の円

グラフの右側は、各出土地点ごとの主要器種の量的組合わせ関係||組成を表示している。壺・甕・鉢・高杯・器台の五器種を弥生時代中期後半以降にセットをなす主たる容器と考え、量的にはきわめて少ない水差形土器や壺に落ち着くようである。

日常容器と祭祀儀器 つぎに見方を変えて、貯蔵・煮炊・食膳など日常容器としての役割を果した壺・甕・鉢と高杯・器台など祭祀的色彩を濃厚に帯びた器種との比率を調べてみると、前者が71%、後者が27%、その他2%でほぼ七対二の整数比で捉えることができる。この傾向が会下山集落個有のものであるのか、畿内における高地性集落の一般的傾向といえるのか、あるいは弥生中後期集落の普遍的様相であるのかについては、非常に興味深い問題であるが、近畿地方における他の高地性遺跡、さらに低地遺跡の実態の分析を通して今後究明してゆく必要があろう。

中期から後期への器種組成変化 以上は、あくまで時間的経過を無視した遺跡出土土器全般にわたる評価であるが、会下山遺跡は周知のとおり、弥生中期の土器と後期の土器を両方出土しており、様式推移の観点に立脚

表42 中期から後期への器種組成変化



(註記) 1. 円グラフの細別は、右上方から時計回りに壺・甕・鉢・高杯・器台の主要5器種の相対比率を示す。
2. 中期様式における台付鉢形土器・台付無頸壺形土器は高杯形土器同様、供獻機能を有するので、高杯として分類している。

く、甕が16%で続くけれど占める割合はきわめて低い。高杯は10%で比較的含まれている。鉢は2%と極少であるが、これは口縁部の断片の多くが壺や高杯に、底部の大半も壺や甕・高杯の範疇として取扱われている資料の選別作業上の誤差が反映したものであろう。実際はもつと数多く存在したと考えてよく、とくに壺からは大部分割引かねばならない。器台はIV様式になつてはじめて出現する器種だから当然のこととしてこの段階では存在しない。

つきの第IV様式には器種組成に急激な変化が起っている。壺が17%と前代の四分の一ほどに減少する一方、甕・鉢・高杯の三器種がともに20%台に達し、壺を凌駕している。器台は7%と多い。IV様式では各器種の構成がかなり安定することに特色があり、これは鉢を除くと、V様式に入つても依然として受け継がれている傾向といえよう。

最後のV様式期には、あらゆる器種が数的に増加しているが、ひとり器台だけは数の上でも減少している(5)

するならば、当然のこととしてIV様式とV様式との間にひかれる界線の存在を無視するわけにはゆかない。多言を要するまでもなく、畿内第V様式は土器の小型化・粗製化という土器生産上の現象の他、器種の消長に大きな変化をきたしており、「第III—第IV様式土器に共通していた壺の一部・水差・無頸壺などは、ほとんど姿を消し」、「脚台使用の流行は衰退し」、「壺は多様化して」「底に一孔を開いた鉢」が出現している⁽³⁾。

また、土器の製作技法上の側面からみると、全般に通じてみられる器面調整の不十分さを筆頭に、回転台をほとんどの使わなくなったことによって生ずる施文技術の変化(ヨコナデ手法・凹線文の退化・櫛描文の衰退)、器体外面下半のヘラ削り手法の消滅(主として壺・甕)、高杯における円板充填手法の不採用(後期初頭の西ノ辻工式まで残るという意見もある)、叩き目技法の発展など中期様式との間に無数の相違がみられるのである。端的に言うならば、中期と後期の時期区分の背景として、土器の形態のみならず生活様式そのものにも何らかの画期があつたとい

うべきであり、それは後続する土師器と後期弥生式土器との間にみられる変革よりも、より一層大きなものであつたと言わざるを得ない。したがつて、集落全体における

各器種の保有数

に一定の評価を与えるとするとな

ら、厳密には中

・後期に分けて

考えることを余

儀なくされる。

このような観

点から様式別に

ある。これによ

れば、III様式の

段階では壺72%

で圧倒的に多

表41 土器様式別にみた器種組成変化

時期 土器様式	壺	甕	鉢	高杯	器台	その他	計	
							134	123
中 期	96	22	3	13	0	0	134	123
	72%	16%	2%	10%	0%	0%		
IV	21	33	34	26	9	0	760	760
	17%	27%	28%	21%	7%	0%		
後 期	243	215	63	232	5	2	760	760
	32%	28%	8%	31%	0.7%	0.3%		

個体)。壺は32%と前代の一倍近く割合にふくれ上り、高杯も全体の一割方増している。甕は比率の上の変化をみせていないが、数量は圧倒的に増加しており、時期を問わず日常生活において需要度の高い器種であったことが知られる。

ついで、III様式とIV様式とをまとめた中期全体の比率と後期のそれとを比較してみよう。中期に属する土器の全体量が少なく、IIIとIVの様式分離が完全でない現在、実のところこの大まかな組成変化を捉えることが、このような資料操作の限界と思われる。結果は表42で示した。これを要約して表現すると、会下山においてみられる弥生中期から後期への器種組成変化は、壺・鉢がやや減り、これに替って甕がわずかながら増加し、高杯は約二倍の割合に増大、器台は激減したといえる。また、壺・甕の主要二器種の占める割合は前述したこと、両者に比率の上での逆行が認められるが、総じて67%から60%に減じてゐる。そして、高杯・器台の非日常系器種の占有比率は、中期19%から後期32%へと増大し

ており、後期に入つて一段と祭祀色が強まり、その背景には政と祭事との急速な歩み寄りがうかがわれる。Q. S両地区に祭祀場が顕在化するのが後期であり、後述するように、とりわけ高杯の比重が高まるのはこうした状況が投影されたものであらう。

各遺構・発掘地點別的主要器種組成 遺構別に主

要器種の組成を分析してみると、次に述べるべくつかの興味深い事実を指摘することができる(表43参照)。

甕は最も高いペーセンテージを示すN住居址(50%)から微量しかもたないQ祭祀址(4%)まで、その保有数にかなりのバラツキが認められるが、大半の遺構は30%~45%の範囲におさまつてゐる(S祭祀址・F住居址・E住居址・C住居址・U廃棄場所・J住居址・L住居址・平石ピット・焼土塙・M土塙墓)。X住居址(48%)はN住居址と並んで壺保有率の高い例である。

甕も最高37%(E住居址)から最低12%(S祭祀址)まで

の幅をもつが、壺ほど極端な差ではなく、各々一定の数を

表43 各遺構・発掘地點別的主要器種組成

出土地点 器種	昭和31年西斜 面発掘												昭和48 年子孫 面発掘 地点 計				
	S 祭祀址	Q 祭祀址	F 住居址	P 住居址	E 住居址	C 住居址	X 住居址	N 廃棄場	U 住居址	J 住居址	L 住居址	平石 ピット					
壺 個体数	22	4	24	1	32	16	29	30	48	62	25	12	15	16	7	19	362
百分率	33%	4%	35%	33.3%	33%	44%	48%	50%	40%	32%	37%	41%	43%	34%	35%	38%	35%
甕 個体数	8	29	14	1	36	13	18	11	36	42	15	9	10	11	4	12	269
百分率	12%	32%	21%	33.3%	37%	35%	30%	18%	30%	22%	22%	31%	28%	23%	20%	24%	26%
鉢 個体数	4	17	13	0	10	2	2	5	10	18	9	4	0	3	0	3	100
百分率	6%	19%	19%	0%	10%	5%	3%	8%	8%	10%	13%	14%	0%	6%	0%	6%	10%
高 個体数	30	35	13	0	18	4	11	10	21	58	17	4	9	15	6	16	267
百分率	46%	39%	19%	0%	18%	11%	19%	17%	18%	30%	25%	14%	26%	31%	30%	32%	26%
杯 個体数	0	4	0	0	0	0	1	1	4	0	0	0	1	2	0	13	
百分率	0%	5%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	1%	2%	0%	0%	2%	10%	0%	1%	
その他 個体数	2	1	4	1	2	2	0	3	4	8	2	0	1	2	1	0	33
百分率	3%	1%	6%	33.3%	2%	5%	0%	5%	3%	4%	3%	0%	3%	4%	5%	0%	2%
計	66	90	68	3	98	37	60	60	120	192	68	29	35	48	20	50	1044

保有している。

Q祭祀址は壺の量に比べ、甕の占める比率が高く、同じ祭祀遺構でありながらS地区のそれとは全く逆な状況を呈しており、E住居址も甕が壺を凌いでいる。しかし、会下山集落の趨勢として、甕が壺ほどの数を必要としなかつたことは明らかであろう。S地区における甕形土器の僅少性は他地区に比べ堆積土中に有機質分が少なかつたという発掘所見と関連するかも知れない。

鉢はQ祭祀址・F住居址のごとく比較的多数出土している場所もあるが（共に19%）、壺・甕ほどの量は各遺構とも保有していない。半数の遺構は5%と10%の枠内におさまる（S祭祀址・E住居址・C住居址・N住居址・U廃棄場址・J住居址・M土塙墓）。そして、特筆すべきことは、鉢を全く含まない（0%）遺構の存する事実で、P地区柵址と焼土塙の二か所が指摘される。P地区での土器出土量が極少（数片）であるため、他地区との比較に耐え得ないけれど、共通して言えることは、いすれも一般生活址でないこと、焼土塙を野外での共用の煮炊の場（ソト

クト）とみる報告者の推測が正しいなら、鉢が皆無であることも全く偶然とは言えない。鉢形土器という器種のもつ機能からして各々の住居からあまり離れた場所で使われるようなことは少なかったのかもしれない。

高杯は機能的には、まず第一に食物供献があげられる。したがって、一般住居内においては食事時に各種の食物を盛りつける器としてその中心的位置を占めたであらることは想像に難くなく、利用の度も平均的に高かつたものと思われる。それゆえ、高杯を全く出土しない住居はなく、20%近く保有する（F住居19%・E住居18%・X住居19%・N住居17%）のを常態とし、J住居30%やL住居（25%）などはやや頻度が高い。

これらに対して、異常までに高杯を多量にもつ遺

構がある。円グラフをみて明らかのように、S地区（46%）

とO地区（39%）の二か所である。これら両地区は、既にくり返し述べていており、報告者が祭祀遺構と推定し

ている場所で、会下山における一般住居とはかなり様相を異にしている。その意味では、このデーターが強い傍

証材料を提示していくよう。

Q・S両地区から高杯が顕著に出土している事実は既に「調査報告書」⁽¹⁾に指摘をみるが、その頻度を具体的に明示すると、これら二遺構の特殊性がなお一層明瞭となる。高杯形土器が一次的には本来の供獻機能を祭祀儀器に転化し、そうした役割を担うようになつたとする過去の一般的解釈が、当を得たものであるか否かは論外におくとして、高杯が全出土量の過半数に近い割合を占める事実は、日常の居住を目的とした一般住居とはまた異なる機能を示唆する。高杯の出土量のみをもつて議論し、安易に「祭祀」を語ることは早計の誇りをまぬがれ得ないが、Q・S両遺構とともに他の出土遺物・立地条件を検討する限りにおいてその妥当性は高く、器種組成上のことなどがあつたらしいこと（N住居址・U廃棄場址・M土塙墓、E住居址・C住居址・X住居址・L住居址・平石ビット・焼土塙）、またもつていても微々たる量（おそらく一点ない二点）であつたらしいこと（N住居址・U廃棄場址・M土塙墓、E住居址・C住居址・X住居址・L住居址・平石ビット・焼土塙）、最初に開発の始まつた住居（J）であつたこと、さらにQ祭祀址が最も高い保有率（5%）を示していること等々が指摘できる。このうち最後にあげたQ祭祀址における高頻度の実態は、多量の高杯の存在と並んで当遺構の性格を暗示する要素となつていて、同じ祭祀遺構でありますからS地区においての器台形土器絶無の事実は、先に指摘した両地区的の壺・甕の保有率の相違とあいまって検討

すべき問題といえよう。

また、Q 祭祀址における器台と壺との実数はほぼ同等で、臆測をたくましくするならば、器台上にはすべてそれに見合うだけの壺形土器がのつていたと表現することも可能である。土器の組成分析のみでQ・S両祭祀遺構の性格の相違を速断することは非常に危険であるが、両者に報告者の説明するような機能上の違いは当然あつたであろうし、S 地区のごとく「自然特に山岳を主とした対外的な性格をもつた祭祀場」では器台を必要とするような祭は行なわれなかつたと想像することも、あるいは正しい見方なのかも知れない。

後期弥生式土器の型式分類 会下山遺跡において主流を占める後期の土器は、多様な形態を示す壺を除いて比較的単純に型式分類することができる。壺は器高二〇センチ内外の通常の大きさのものが大半であり、口頸部の形状は概ね「く」の字状になることで共通し、細部に至つて時期差を反映する若干の相違をみせながらも、他

遺跡同様、型式的な細分を行なう余地がない。また、器台は全体として僅少であり、こうした作業に耐えうる量をもたない。

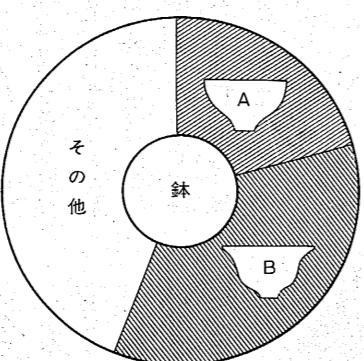
したがつて、ここで考察の対象とすべきは、鉢および高杯の二器種である。表44・46は『土器集成』畿内地方⁽³⁾の型式分類に応じて、それらの型式組成を表示したものであり、表45・47はさらにそれをわかり易く円グラフにおしたものである。分類作業上の不備はあるけれども一時期における趨勢は反映していよう。次項より、このデータに即して、畿内第V 様式に属する鉢形土器と高杯形土器とに少し詳しく分析を加えてみることにしよう。

後期鉢形土器の型式組成 畿内第V 様式の鉢形土器は口縁部の形態によって、(A)直口の鉢と(B)口縁の外反する鉢とに細別される。口縁部形状の判明する三五点の資料では、鉢A一三点、鉢B二二点を数え、口縁部の外反する鉢Bが鉢Aを凌駕していることが知れる。しかし、A・Bのタイプ判別のつかない断片が二八点(全体の44%)

表44 後期鉢形土器の型式別出土量

組成 型式	個体数	百分率
鉢 A	13	21%
鉢 B	22	35%
その他の	28	44%
計	63	100%

表45 後期鉢形土器の型式組成



存在し、ほぼ過半数に達しているため、鉢A・鉢Bといふ傾向が会下山集落での普遍的なあり方であるのかどうかの速断を許せないものにしている。「その他」とした中には、上げ底タイプの底部がかなりみられ、これがやや新しい時期(後期後半指向)に多くの鉢Aの特色の一つであるとするならば、鉢A・鉢Bの比率はほぼ同等にならぬかもしれない。なお鉢Aには二点の、鉢Bには三点の大形鉢が認められ、大型鉢の採用が口縁部の型式差によらないことと、機能的にも同列視できないことを教えて

いる。

後期高杯形土器の型式組成 高杯形土器は、主要な型式として(A₁)浅い椀形の杯部に低い脚台をとりつけるもの、(A₂)口頸部が立上つて稜を形成する皿形の杯部に裾広がありの高い脚台をとりつけるもの、(C)外面にA₂同様、稜を有し、斜めに大きく開く口縁部をつけた杯部に段あるいは凸帶によって、二段に分けた裾部を有する脚台をとりつけるものに分類され、さらにA₁・A₂両タイプの特色を兼ね備えたものとして、(D)西ノ辻遺跡D地点式を設定することができる。表46・47はこれらの型式組成を示したものである。

これをみて明らかのように、高杯A₂が一四七点(64%)を占め、後期高杯形土器の典型としての地位を保っており、他の三型式の追従を許さない。型式不明の破片中にもこの型式のものが同じ割合で含まれている可能性を考慮すると高杯A₂の占める比率は全体の約四分の三に達する。これは高杯A₂

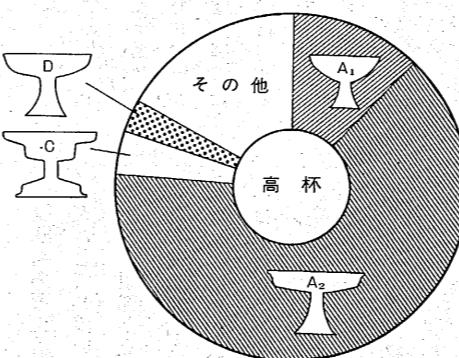
が形態上、後期初頭に位置づけられる西ノ辻I式から同E式(後期前半)、後期最末期の唐古四五号地点竪穴上層式及び北鳥池下層式に至るまでを広範に包括することに帰したものと考えられるが、会下山遺跡では唐古四五号上層式など新しい階級の型式をとるものは見当らず、西ノ辻E式が八割方の絶対多数を占めて優位に立ち、残りを西ノ辻I式が補完しているのが実情である。

一方、高杯A₁は12%と算出され、高杯A₂五個に対し一個の割合で含まれる

表46 後期高杯形土器の型式別出土量

型式	個体数	百分率
高杯 A ₁	28	12%
高杯 A ₂	147	64%
高杯 C	9	4%
高杯 D	7	3%
その他不明	39	17%
計	230	100%

表47 後期高杯形土器の型式組成



は、後期高杯全体の4%を占め、すべて脚部下半の二段に曲折する部位が出土しており、二段ないし三段の透し孔を穿つ例が多い。遺構・出土地点別に通観すると、Q祭祀址・E住居址・X住居址で各一点、F住居址・J住居址・M土塙墓では各二点見出され、ある地区に偏在することなく、僅少とはいえ、集落全域で出土している事実が注意されよう。

高杯Cは、前述したように古墳時代前期前半に盛行をみた器形で、河内(大阪府松原市上田町遺跡・同柏原市船橋遺跡)・和泉(和泉市上町遺跡)・摂津(兵庫県川西市加茂遺跡)・同富林市国府遺跡・同八尾市龟井遺跡・同東大阪市難手川島遺跡・同姫路市長越遺跡など限られた地域に分布するが、各遺跡での出土量も少なく、中心時期に位置する川島遺跡でさえ、同時期の高杯形土器の中に占める比率は6%に満たないという。⁽⁴⁾こうした点を踏まえて考えるなら、会下山遺跡における高杯Cの占める割合は高率といえ、本型式の高杯形土器の初源が、少なくとも会下山集

程度である。会下山出土の高杯A₁は口径一五センチ未満の小型品が多いが、これは高杯A₂に少量伴うほどの数の上での実態とともに、両種を出土する畿内地方全域における後期遺跡の傾向と一致し、むしろその中には、伴出度の高い遺跡であることを物語っている。遺構・出土地点別にみると、Q祭祀址・F住居址・J住居址・西斜面では各々四・五点検出されており、とくにF住居址・西斜面での含有率は高く、組成の上から西斜面一帯の遺物包含層がF住居址付近からの流出堆積層であることを傍証する。

高杯Cは、一般的にはいわゆる庄内式に属する土師器の高杯であつて、量的には一点存在することも問題の生ずる土器である。会下山では完形品こそ一点もないが、確実に該当型式とみられる断片

落の終戻時期(後期前半)にまで遡るか、あるいは遺跡存続年代の下限をもう少し下降させねばならない。ただし、複合口縁を有する壺や内面へラ削り技法・連続ラセ

ン叩き技法のみられる甕などの存在が確認されない事実から推して、高杯Cの上限が一部第V様式の中頃ぐらいまで遡ることを本遺跡の実態が教えているものと理解した方が妥当ではなかろうか。当該型式が各地区に稀薄に散在し、各々での共存状態を検討する限り、高杯Cの比率を下回る。従来より西ノ辻D地点式の指標としてメルクマールされてきた器形ではあるが、各遺跡での出土数は微量であり、本来時期差をあらわしているか否かの断定は、現在なお慎重を要するであろう。遺構別ではF住居址での検出数が最高で、同時期の高杯形土器の四割以上を占めている。

表48 石器・鉄器出土 地点別組成表

出土地点	種類	石器												ガラス玉
		石錐	石錐	不定形器	砥石	石蓮	石斧	船石	河原石	燧石	丸石	サヌカイト片	その他	
中央 央 尾 根	S	●							○	0	1	5	○男根	
	Q									●	1	2	2	●銅鑼
	F	●	●	●	●	●	●	●	○(未成品)	●	4	3	7	●石劍
	E	●	●	●	●	●	●	●	●	●	4	12	10	○左陰板
	C	●									1	4	6	
東方 尾 根	X	●	●	●	●	●	●	●	●	●	3	4	18	
	N	●	●	●	●	●	●	●	●	●	3	3	42	
	U								○(未成品)		1	0	13	●石劍
	J	●	●	●	●	●	●	●	●	●	3	●	91	○女陰加工品
	L	●	●	●	●	●	●	●	●	●	2	0	0	○柱狀石斧
	M	●	●	●	●	●	●	●	●	●	2	0	1	
西斜面	O	○	○	○	○	○	○	○	○	○	5	0	0	
計		20	5	13	24	2	8	6	35	34	2	199	1	3
													5	1
													2	7
													14	

※村川・石野(1964)の表に森岡(1974)のデーターを加えて作成

第2章 弥生代時

石器・金属器との組成の比較　会下山集落における土器組成の詳細な分析結果は右記のとおりである。これをさらに集落の生活様式・共同体内分業の問題・各建築物の機能とからみ合わせて考えていくには、石器の器種組成、加えて青銅器・鉄器など金属器の組成の検討を通して改めて考察しなければならない。

石器・鉄器の器種組成表とその分析は既に詳しくまとめられており(表48参照)、これにもとづいて、まず大きな傾向を、つづいて各遺構・器種別の動向をみておきたい。

会下山遺跡における諸遺構が立地的に分割されるのは、大勢として鉄器は前者に、石器は後者に多く見出され、とりわけ鉄器は中央尾根に偏在している。これは、中期様式土器の頻度が中央尾根諸遺構に比べ東方尾根のそれに高い事実のネガティブな傾向を反映したものと思われ、弥生後期における石製利器の鉄器化といふ全国的趨勢を端的に物語るものといえよう。

細かな比較を進めると、石鎌・石錐・刃器などの主要利器、砥石・河原石・燧石などその他の石器、石器製作作業にかかるサヌカイト剥片は、両地区に共通して存在し、磨製石剣・女陰状石製品・鐵鎌・玉類など少數しか検出されない遺物も共有する。一方、石錐・投弾石・輕石など、集落の外部で使用される機能をもつ石器は、東方尾根に偏在しており、丸石や柱状片刃石斧など生産用具類も東方の尾根に片寄っている。これに対して、鐵斧・鉗・鐵ノミ・鐵釘・鐵輪・釣針など鐵製の諸利器や工具が中央尾根に集中することは先に指摘したとおりである。男根状石製品・銅鏡など稀少な特殊遺物もまた中央尾根から出土している。このように、会下山における中央尾根と東西支尾根との間には、中期土器の含有率のみならず、石器・金属器の組成にも大きな違いが認められ、この格差の背景には、遺構立地の時期差だけでなく、それぞれの住居群の機能の相違、すなわち生業や生産部門のあり方など、より本質的なものが横たわっているものと考えられる。

次に出土地点別に細説する。石器の中であらゆる器種

をとり揃え、豊富な量を誇るのはJ住居址である。石鎚（五点）・不定形刃器（五点）・砥石（一二点）・投弾石（三点）・軽石（二点）・河原石（九点）・丸石（一点）などは集落最高の値を示し、とりわけ砥石の出土数は多く、他を凌駕している。また、サヌカイト剝片もそれに見合うだけの数量（九一点）検出されており、集落全体の半分に近い割合を占めている。石錐と柱状片刃石斧の欠落を除けば、会下山の石器がJ住居に集中化されているのは確かである。

そして、砥石についてさらに詳しく述べると、荒砥から仕上げ砥まで大小各種がセットをなし、J住居における主要な磨製遺物の生産活動の全工程の存在が想定される。他方、L住居は柱状片刃石斧以外には何ら利器をもたず、これと対象的である。サヌカイト片も皆無であり、サヌカイト製品の遺存しない事実を裏づける。互いに近接し、土器の様式・器種組成に大した違いをみせない両住居にこれだけの相違がみられるのは、日常の生活様式を同じくしながら、ある一定時間集落内部での生業を異

カイトの剝片がみられないことなどが注意される。

中央主尾根に立地する各遺構では、やはりQ・S両祭祀の相違が顕著に認められる。共通して保有するのは、燧石とサヌカイト片微量にすぎず、他の遺物構成はすべて異なる。武器・生産用具は主としてS地区に偏在し、Q地区には男根状石製品・鉄輪・ガラス小玉など、祭祀性を帯びた遺物を散見する。これはS地区で器台のみられなかつたこととあるいは関連がある現象かもしれない。

C・E二住居址は、遺物構成の面で大差なく、E住居にやや鉄器が多いことのみ摘出される。

会下山集落民の集団関係 F住居址は、会下山遺跡で貴重視される遺物を最も豊富に出土している。打製石鎚・不定形刃器・砥石・河原石・燧石・サヌカイト片などは他の遺構にもみられるものであるが、磨製石鎚・銅鎚・鉄斧・鉈・釣針などは、当住居に固有もしくは特徴的なものであり、武器・生産用具でも特殊なものを集中

にしていたのであろう。

L住居と似て石器をあまり出土しなかつたものにN住居がある。ただし、ここでは表48をみて明らかのようにサヌカイトの剝片が四二点も検出されており、石器製作に消極的であったとは言えず、L住居と同列視することは不可能である。不定形刃器も未成品が一点含まれており、むしろ石器の製作は盛んだったとみるべきであり、裏返せば住居廃屋時に製品を持ち去つたことを示すよい例かもしれない。

東方尾根最高所に所在するX住居は、先述したように会下山において中心的位置を占める立地条件をもつてゐるが、石器組成はほぼ全器種を平均的に有しており、土器組成の傾向に同じくする。

U・M両地区と焼土塙は東方尾根において特別な機能を付与された遺構であり、石器・金属器の出土数は共通して少なく、とくに石鎚・石錐・不定形刃器など主要利器は皆無である。M地区は会下山集落の墓域とみられ、遺構面よりガラス小玉が一点出土していることと、サヌ

的に保有する。F住居址にはこの外にも、他の住居址にはみられない特性があり、①住居址の中では最高所に所する②住居床面積は五六平方メートルを測り、最大である③住居内の床面利用法が他の住居址と異なる④後期段階に室内炉を設け、固有化する⑤祭祀遺構に最も近接して立地する⑥他の住居群とはP地区柵列を介して隔絶する。等々が指摘される。

会下山遺跡は山頂のやせ尾根に数棟から成る住居群によつて構成された高地性集落であり、その規模は例えば岡山県沼⁽⁵⁾跡によつて代表される単位集団（世帯共同体）ごとに占拠されるような小集落である。その観点からみるとならば、先に列挙されたようなF住居のもつ特性は、共同体共有の集会所的な役割を果した施設か、共同体の管理・運営を掌握した統轄者居住の場かが想定される。

ここではF住居のもつ機能を報告者の説くように、特定階級居住の場と考え、世帯共同体の家長を傑出した有力世帯が生活を営んだ住居とみておきたい。

このように、会下山集落は集団構造的には、F住居の

住人である家長と有力世帯員、それに統率された一般成員(C・E・X・J・N・Lなどの諸居住の住人)から成る非農耕生産的な一世帯共同体によって展開をみた高地性集落と考えられる。

地域間の交流と河内地方の土器 弥生時代の集落は、隣接する村同士、あるいはもっと広範な共同体間に煩雑な交わりのあとがみられ、さらにはそれを越える地域間にも交易などを通して活発な交流があつたことが窺える。そのことを知る普遍的な方法の一つとして土器の移動を手懸りにすることができる。

土器は日常必需品として生活上不可欠なものであるため、当然集落単位に生産がなされたものと思われるが、それだけに地域性を鋭敏に反映する。形態・製作手法・施文技法など地域によって相違のみられる事象は多いが、中でも胎土は粘土のもつ可変性が帰因して、土器が製作された場所を限定する最も有効な視点といえる。とりわけ畿内では、中河内地方の土器が肉眼でも観察可能な条

後者を人間の移動まで考える説があり⁽⁹⁾、また当時における夫方居住婚を前提とした通婚圈との対比で理解しようとする試みもみられる。⁽¹⁰⁾さらには、河内勢力の摂津への侵攻を推測する大胆な仮説も提唱されており、未解決の問題が多く、今後は他の遺物の伝播との比較考証が必要である。

そして最近の高地性遺跡研究の進展に伴つて、同様な河内系土器が微量ながらこうした性格の遺跡においても多見されるようになり、当会下山遺跡でも昭和四十八年に実施された調査によつて、その事実が確かめられた。⁽²⁾

河内系土器は従来より、チョコレート色を呈し、胎土中に黒雲母小片を含むことを大きな特色とするが、最近ではなくとも二種類に細別することが可能となつてゐる。その一つは概ね茶褐色～黒褐色でかなり大粒の黒雲母を含有し、いま一つは淡茶褐色を呈して、黒雲母の微細片を含んでいるものである。これらに対しても、前者を生駒山地西麓部の土器、後者を河内平野沖積地の土器として地域差を想定する見解もあるが、未だ決定的なも

表49 会下山遺跡における河内系土器出土数 (C・E・L・S地区)

調査地区名	黒雲母の大きさ		総 計	器 種	時 期
	粗粒子	細粒子			
C 地区	0	2	2	不 明	不 明
E 地区	2	19	21	壺(2点)、甕(5点)、高杯(5点)、その他不明	後期に多い
L 地区	1	29	30	すべて不明	不 明
S 地区	2	2	4	壺(1点)、その他不明	後 期

(註記) (1) 数値は抽出された破片数(個体数ではない)

(2) 表中の「粗粒子」・「細粒子」としたものは、本文中に指摘した河内系土器の細別2種に対応するものであり、黒雲母断片の径が概ね2mmを境に基準分類している。

(3) 器種・時期は明確なものに限った。

(4) 他地区に関しては、選別作業を実施していないが、将来果した折には公表する機会を得たいと考えている。

件によつて数年来注意され、現在多くの知見をもたらしつつある。例えば、和泉市池上遺跡M地区R64地点の井戸内では、第III様式土器中10%近くを占め、堺市四ツ池遺跡でも、中期の第III様式の段階にF地区E溝上層で約3%、同・G溝上層では5%の割合で見出されている。⁽⁸⁾

これらは、中河内の地域に近接する和泉地方での実態であるが、こうした河内系の土器は和泉のみならず、摂津をはじめとして遠く山城・播磨にまでもたらされている。明確なデーターを出すまでには至っていないが、西摂地域の尼崎市田能・上ノ島・川西市加茂・豊中市勝部・北摂地域の高槻市安満・慈願寺山・郡家川西・山城西部の向日市森本・播磨の姫路市小山・市之郷の各遺跡で、あいついで検証されつつある。

こうした河内系土器の搬出・搬入現象は、最近多くの研究者の分析によつて様々な解釈がなされている。搬入土器が摂津においては壺・鉢など飾られた土器が選ばれているのに対し、和泉では幾種類もの壺や甕・鉢・高杯など全器種が揃つてゐる点については、前者を交易品、

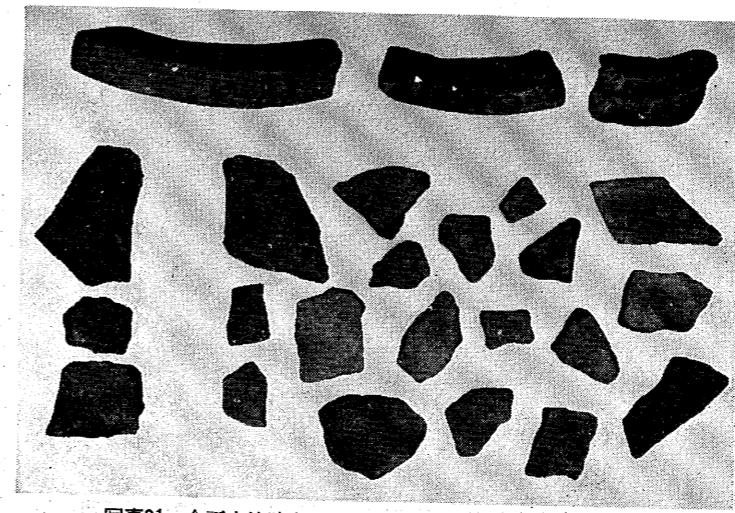


写真81 会下山遺跡出土土器から抽出された河内地方の土器

(上段) 壺形土器口縁部、中央のものは西ノ辻工地点式に酷似。下段左一粗粒(子黒雲母片含有の河内系土器)右一細粒子黒雲母片含有の河内系土器。

のではない。

会下山遺跡では、昭和四十八年調査出土土器約三〇〇片を調べた結果、一二五片の河内系土器が抽出され、その含有率は〇・八%強である。過去の調査出土品の再調査は大量の資料のため、すべての地区について果していないが、一部実施した地区においての結果は、表49の通りである。

これをみて明らかのように、抽出作業を終えた四地区では、微量ながらすべてに認められ、E・L両地区にはさわだつて多い。器種や時期に関しては、小片であるがため、確定できるものが少ないが、E地区では後期の壺・甕・高杯が、S地区でも同じく後期に属する壺が判明している。とくに、E地区では甕・高杯にも認められ、あらゆる器種のものがセットで搬入されている可能性を示唆する。各地区出土土器の全破片数を割出す作業を経ていないので、これら河内系土器の占める比率を算出することはできないが、集落の全域で微量ずつ含まれているのではないか。

写真81はそれらのごく一部を紹介したものである。粗

粒子の黒雲母を含む土器片は、その粒径五ミリに達するものもあり、内外面に顯著に認められる。中には角セン⁽¹⁰⁾石との指摘がなされるものも含まれている。色調は後述する細粒子のものに比べ濃く、黒褐色を呈している。

一方、細粒のものは色淡く、茶褐色を基調とし、やや赤味がかるものと暗味を帯びるものとに分れる。これは焼成の状況に帰因するものであろう。いすれにせよ、生駒西麓の領家変成岩に由来した土質の特徴を呈している。

これらの河内地方特有の胎土・色調をもつ土器が、六甲山系に属する他の遺跡から、点々と確認されている事実は、第二・三節の各説で既にふれられているとおりであり、今後各地の高地性遺跡においても追認されるものと思われる。現在のところ、こうした現象に関しては、河内地方との直接交渉を想定するのではなく、隣接地の低地性集落を媒介にした間接的なものと推定している。このことから高地性集落の広大な耕地を控えた母集団に対する全面的に近い生産活動の依存も一考されるのでは

あるまい。

(二) 会下山遺跡出土土器の胎土 の化学分析

会下山遺跡は弥生時代後期の高地性集落遺跡として、きわめて特徴ある性格を示しているが、出土土器の鑑定から、その交易圈を考えることは、当時の生活を復元し想像する上で大切である。会下山遺跡は、後の畿内という横津に位置しているわけであるが、すでに河内方面との交渉がひらけていたと思われ、出土土器にも外観上からそれらの地域性を示しているものが得られている。

最近、「自然科学による遺跡・遺物の研究」が盛んになつて、その一つとして、出土土器の化学分析で土器の产地の特徴を検出する試みが重ねられ、外観的特徴と化学分析値との間に相関が認められるといふ成果が得られている。そこで、近年の会下山遺跡の調査で得られた土器数点について胎土の化学分析を実施し、出土土器の地域

性を裏付ける結果を得たので紹介する。

分析操作の概要 筆者が「化学分析による土器生産地同定の試み」(『古代学研究』54号)に発表した方法にしたがって分析した。その概要を記すと、土器の粉末化試料一定量(1グラム)をとり、濃塩酸を加えて加熱したものの、可溶性成分の溶けている溶液と不溶性成分とを分離し、不溶性成分(ケイ酸塩類)は乾燥して秤量する。溶液

のほうは蒸留水で一定量に希釈してから二分し、その一方の一定量を用いて、アンモニアアルカリ性にして析出する沈殿をわけとり、これをルツボに移して強熱した後、ルツボ内に残る物質を秤量すれば酸化鉄(Fe_2O_3)と酸化アルミニウム(Al_2O_3)の合計量を得る。二分した液のもう一方の液の一定量をとつて、ヨウ素滴定を利用して鉄成分(Fe^{2+})の定量を行ない酸化鉄の量に換算する。

さきの酸化鉄と酸化アルミニウムの総量から酸化鉄量をさし引けば酸化アルミニウムの量を求めうる。

このようにして得られる酸不溶性成分・酸化鉄・酸化

アルミニウムの各成分量を採取試料量と比較することにより、試料土器の胎土中の各成分の含量%が算出される。胎土の特徴を調べる一助として、ほかに、カルシウム・マグネシウム・チタンについて原子吸光分析法で定量分析を行ない、それぞれ、酸化カルシウム(CaO)・酸化マグネシウム(MgO)・酸化チタン(TiO_2)の含量%として算出する。

分析結果 前述した操作で分析した会下山遺跡出土の河内系土器試料2点、摂津系土器試料5点についての各成分含量%を、一括表示すれば表50・51のとおりである。表50には各試料の出土位置ならびに外観上の特徴を記載している。表51は分析値一覧で、各試料の一連の分析値間にみられる近似は胎土の親縁を示唆する。

考察 表51の結果から明らかのように、この会下山遺跡から出土した土器片で、河内系と判定される土器と、摂津系と判定される土器との間には、分析値でも胎

表50 分析試料土器に関する資料

試料土器番号	試料土器の出土時期 および出土場所	試料土器の外観色調 および胎土の特徴
河内系土器 No. 1	昭和48年西斜面緊急調査 第II層(山麓の土器?)	茶褐色 黒雲母粗粒子剝片を含む
" No. 2	昭和48年西斜面緊急調査 表面採取(平野の土器?)	茶褐色 黒雲母細粒子剝片を含む
摂津系土器 No. 1	昭和48年西斜面緊急調査 第II層	白色 長石の微砂粒若干を含む
" No. 2	昭和48年西斜面緊急調査 北側セクション	赤褐色 石英粒をかなり含む
" No. 3	昭和48年西斜面緊急調査 第III A層	明褐色~黄褐色 石英・長石をかなり多量含む
" No. 4	昭和48年西斜面緊急調査 第II層	赤褐色~暗褐色 赤色チャート?若干を含む
" No. 5	昭和42年 Q-S 地区間 東斜面流出層	暗褐色~黒褐色 長石など微砂を含む

※森岡秀人「会下山弥生遺跡緊急調査報告」『芦屋市文化財調査報告』第8集
芦屋市教育委員会(1974年)による。

表51 分析試料土器の分析値

試料土器番号	酸不溶性成分%	Fe_2O_3 %	Al_2O_3 %	CaO %	MgO %	TiO_2 %
河内系土器 No. 1	71.83	5.99	14.48	0.20	0.48	3.00
" No. 2	75.36	4.03	12.68	0.27	1.40	3.20
摂津系土器 No. 1	85.09	2.18	8.80	0.01	0.07	0.14
" No. 2	81.77	4.05	9.22	0.03	0.18	1.40
" No. 3	81.65	4.12	9.80	0.01	0.13	0.42
" No. 4	81.76	4.76	8.14	0.03	0.13	0.18
" No. 5	65.63	9.25	17.98	0.08	0.96	0.24

表52 他遺跡出土の土器の分析値*

出土遺跡名(土器系統)	分 值		
	酸不溶性成分%	Fe ₂ O ₃ %	Al ₂ O ₃ %
吹田市垂水遺跡(摂津系)	79.97	4.58	8.63
" (河内系)	74.25	5.33	13.72
河内長野市(南河内系) 大師山遺跡	74.31	3.94	13.03

*『垂水遺跡第1次発掘調査概報——大阪府吹田市垂水町——』吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室(1975年)

の感じが似ているといわれるものである。ところが、分析値はこの両者の間には同じ摂津ながらも若干の差のあることを示している。この点でも参考になるのが前記表52の垂水遺跡出土の摂津系土器の分析値である。同遺跡の所在位置を考えあわせると、やはり¹2が西摂の一般的土器らしいことが注目されよう。事実、摂津系土器の³4および含鉄石粒らしいものをふくむ同⁴5は、¹2とはそれぞれ色調上の差がありながらも¹2に似た値におさまっている。これに対し、摂津系土器⁶5は摂津系ながら色調が河内系土器に似ているため、胎土の質が注意されたが、分析値も胎土の異質を明示した。この分析値がいずれの地域のものに近似であるかは、分析例のきわめて少ない現在のところでは明らかになし得ない。

今後、畿内の多くの遺跡の多種類の土器について、胎土の化学分析の結果が蓄積されるようになれば、これらの問題点は解決されるものと期待できる。

この分析実験は、武庫川女子大学薬学部 青園泰子・

則近薫両君の協力を得て行なつたものである。

(この項、安田博幸執筆)

- 註(1) 村川行弘・石野博信『会下山遺跡』(芦屋市文化財調査報告 第三集) 昭和三十九年 芦屋市教育委員会
 (2) 森岡秀人「会下山弥生遺跡緊急調査報告」『芦屋市文化財調査報告』 第八集 昭和四十九年 芦屋市教育委員会
 (3) 佐原真「畿内地方」「弥生式土器集成」本編 2 昭和四十三年 東京堂出版
 (4) 石野博信「高杯形土器」『関西大学考古学資料図鑑』昭和四十八年 関西大学
 (5) 近藤義郎・渋谷泰彦『津山弥生住居址群の研究』昭和三十三年 東京大学出版会
 (6) 都出比呂志「農業共・同体と首長權—階級形成の日本の特質」『講座日本史』1(古代国家) 昭和四十五年
 十三年 河内考古学研究会
 (7) 藤井直正「河内の土器」『河内考古学』2 昭和四十五年
 (8) 「池上・四ツ池」 昭和四十五年 第二阪和国道内遺跡調査会

土の土質に判然とした差異があることがわかる。

さて、今回分析した試料と分析値についてもう少し論説を加えるならば、7種の試料は、外觀上からもそれぞれ差異・特色のあるもので、一応本遺跡出土土器の種々相を代表し、それらの各特徴は表50に示されている。

まず、河内系土器¹と²は黒雲母を含んでいることから、ともに河内系とみられ、表50に記されているよう、黒雲母粒子の粗細の違いから生産地も異なるものと考えられるものであるが、分析値にもそれに相当する差が現われている。しかし、両方ともに河内系土器に共通の分析値の範囲に入ることは、表52に引用する吹田市垂水遺跡出土の河内系土器の分析値と対照すれば首肯されるところで、分析値はこの二片の土器が河内系であることを支持する。

次に、摂津系土器⁵点のうち¹1は、会下山遺跡からはかなり遠い地域である北摂の三島地方のものに、色の感じが似ているといわれるもので、これに対して¹2は、西摂すなわち地元の猪名川・武庫川流域のものに色

(9) 佐原 真「大和川と淀川」『古代の日本』5 近畿

角川書店

(10) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係——淀川水系

を中心に『考古学研究』八〇号 昭和四十九年
藤井直正「摂津と河内——その支配をめぐつて——」

(11) 「勝部遺跡」 昭和四十七年 豊中市教育委員会

などでも完好な資料を出土しているので、以下に実測図

を掲載し、観察されたことを列記する。

a. 会下山遺跡出土の一括資料

（10）都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係——淀川水系

を中心に『考古学研究』八〇号 昭和四十九年
藤井直正「摂津と河内——その支配をめぐつて——」

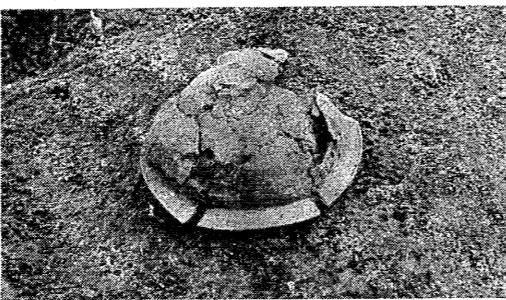
（11）「勝部遺跡」 昭和四十七年 豊中市教育委員会

などでも完好な資料を出土しているので、以下に実測図

（三）住居址一括出土資料と編年

上に占める位置

会下山遺跡出土土器の中には、少数ながら後期に属する完形の資料があり、その出土状態から本地域の弥生式土器編年に格好の材料を提供している。本節では、それらの土器について再実測を行ない、克明に記述解説して紹介するとともに、編年上の位置を検討し、併せ西摂地域における後期弥生式土器の編年試案を提示してみた（表53参照）。



F地区住居址床面土器出土状態

土器の出土状態

F住居は北側のみ周溝をめぐらす半堀穴半平地式の構造をとるが、完形土器を中心とする一括遺物はこの周溝上を中心にして居址北半部に限つて見出されたものである。床は地山直上の厚さ二~三センチの黒色土層で、一括遺物として認められたもののすべては、一端をこの床面にのせ、もう一端を溝上にのせた状態で検出されている（写真82参照）。

（写真82 参照）
住居址床面出土土器
長頸壺一、鉢三、高杯三の計七点からなる土器セット

である（図135参照）。

長頸壺形土器（図135の1） 口径一二・〇センチ、残存高八・〇センチを測る長頸壺の口頸部で、ゆるやかに外反している。器表は内外面刷毛で調整され、内面は横方向に断続的に、外面は縦方向にていねいに連続して施されている。両面ともこの後ナデて微調整されており、口縁部外面の三センチばかりは刷毛目が消去されている。色調は内面黄褐色、外面灰黄色で一部に灰黒色を呈する黒斑が認められる。胎土には若干の石粒を混え、とくに内面は顕著で、焼成は普通である。胴部以下を欠失するが、無花果形に近い器体に突出する底部をつけるものと思われる。

鉢形土器（図135の1・2・3） 通常の鉢（1・2）

と大型鉢（3）とがある。
直口の鉢（1）は、口径一六・六センチ、器高九・四センチを測り、底部の形状は上げ底となっている。全体に

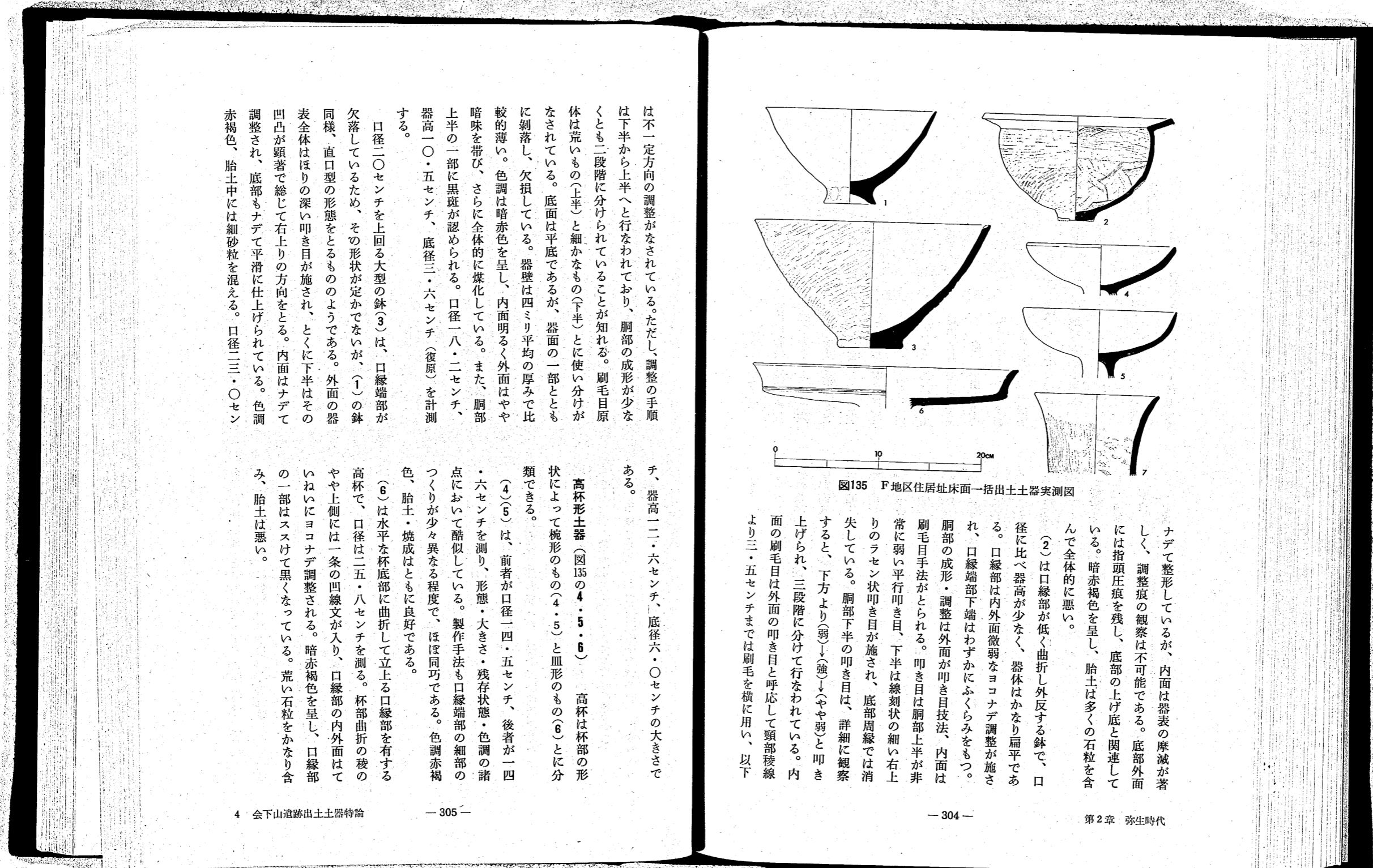


図135 F地区住居址床面一括出土土器実測図

ナデて整形しているが、内面は器表の摩滅が著しく、調整痕の観察は不可能である。底部外面には指頭圧痕を残し、底部の上げ底と関連している。暗赤褐色を呈し、胎土は多くの石粒を含んで全体的に悪い。

(2)は口縁部が低く曲折し外反する鉢で、口径に比べ器高が少なく、器体はかなり扁平である。口縁端部下端はわずかにふくらみをもつ。刷毛目手法がとられる。叩き目は胴部上半が非常に弱い平行叩き目、下半は線刻状の細い右上がりのラセン状叩き目が施され、底部周縁では消失している。胴部下半の叩き目は、詳細に観察すると、下方より(弱)→(強)→(やや弱)と叩き上げられ、三段階に分けて行なわれている。内面の刷毛目は外面の叩き目と呼応して頸部稜線より三・五センチまでは刷毛を横に用い、以下

は不定方向の調整がなされている。ただし、調整の手順は下半から上半へと行なわれており、胴部の成形が少な

くとも二段階に分けられていることが知れる。刷毛目原

体は荒いもの(上半)と細かなもの(下半)とに分けが

なされている。底面は平底であるが、器面の一部とともに剥落し、欠損している。器壁は四ミリ平均の厚みで比

較的薄い。色調は暗赤色を呈し、内面明るく外面はやや暗味を帶び、さらに全体的に煤化している。また、胴部上半の一部に黒斑が認められる。口径一八・二センチ、

器高一〇・五センチ、底径三・六センチ(復原)を計測する。

口径二〇センチを上回る大型の鉢(3)は、口縁端部が欠落しているため、その形状が定かでないが、(1)の鉢同様、直口型の形態をとるものようである。外面の器表全体はほりの深い叩き目が施され、とくに下半はその凹凸が顕著で総じて右上りの方向をとる。内面はナデて調整され、底部もナデて平滑に仕上げられている。色調赤褐色、胎土中に細砂粒を混える。口径二三・〇セン

チ、器高一二・六センチ、底径六・〇センチの大きさである。

高杯形土器(図135の4・5・6) 高杯は杯部の形

状によって椀形のもの(4・5)と皿形のもの(6)とに分類できる。

(4)(5)は、前者が口径一四・五センチ、後者が一四・六センチを測り、形態・大きさ・残存状態・色調の諸点において酷似している。製作手法も口縁端部の細部のつくりが少々異なる程度で、ほぼ同巧である。色調赤褐色、胎土・焼成はともに良好である。

(6)は水平な杯底部に曲折して立上る口縁部を有する高杯で、口径は二五・八センチを測る。杯部曲折の稜のやや上側には一条の四線文が入り、口縁部の内外面はていねいにヨコナデ調整される。暗赤褐色を呈し、口縁部の一部はスッケテ黒くなっている。荒い石粒をかなり含み、胎土は悪い。

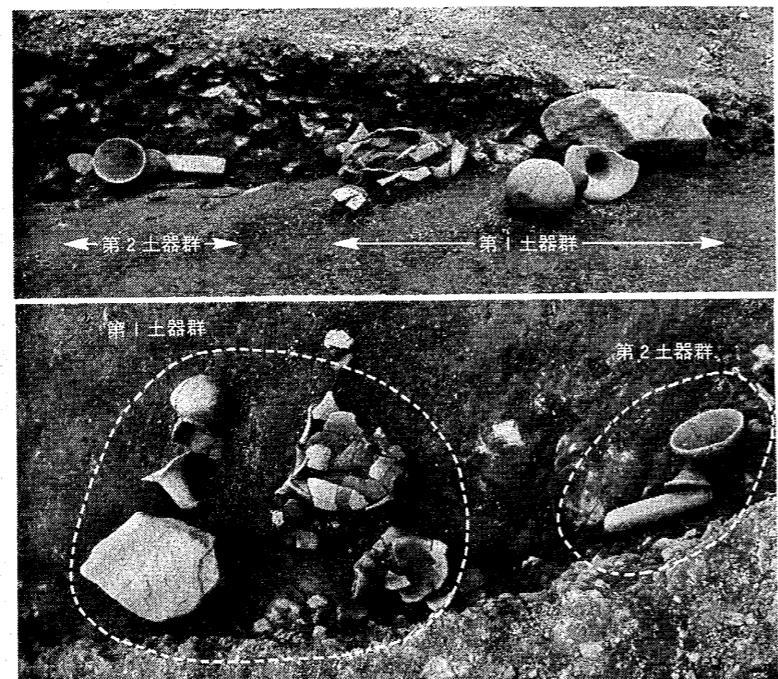


写真83 会下山遺跡L地区住居址一括遺物出土状況
(上)斜め上方より (下)真上より

第一群の土器 (図137の1~3)
第一群の土器群は、壺(1)・甕(2)・高杯
(3)の三点で構成される。
(1)は口径九・〇センチ、器高一六・
三センチ、最大腹径一三・一センチ、底
径四・〇センチを測る小型の長頸壺で、
器体の大きさに比べ口頸部は未発達であ
る。底部は少しつくり出した平底であ
る。外面は全体的にナデによる調整を行
ない、とくに口頸部では微弱な刷毛目によ
る。端部の一か所を欠損し、器表全面の剥脱
が著しい。黄褐色と赤褐色に明るく焼き
上げられており、胎土には長石の細粒を

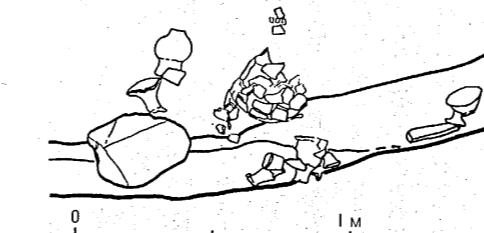


図136 L地区住居址一括土器群出土状況実測図

L地区住居址床面出土の一括資料
会下山L地区住居址床面出土土器には二つのグループから成る一括資料がある(図136・写真83参照)。
土器の出土状態 土器群は住居の北端、周溝上に遺存した平石の周辺で検出され、推定室奥に相当する部分にかたまつた状態で出土した。「土器は平石に接してそれより西一メートルの範囲で周溝に沿う。平石に近い床上の小壺・甕の完形品・高杯脚部各一点と周溝内の碗(完形品)・甕(半完形品)・高杯脚部・柱状片刃石斧一点である。これを二セットと考えると、床上の壺・

甕・高杯(脚部)と溝内の碗・甕・高杯(脚部)に分れる。⁽²⁾

これら二組の一括資料の出土状態と構成要素とを比較し、共通点と相違点を整理してみると、

① 器種の上では、前者に壺、後者に碗(鉢)が含まれるので異なるが、共通器種として甕と高杯が含まれてお

り、概ね組成は等しい。

② ただし、甕・高杯とも前者は後者に比べ大型品である。

③ 両者とも高杯が杯部を欠き、脚部のみ遺存する点で共通する。
④ 両者とも住居内の平石に隣接し、これとの関連において使用されたものと思われる。
⑤ 前者は石器を伴わないが、後者には柱状片刃石斧一点を併出する。
⑥ 出土状態からみる限り、両セットの同時性を強調できる。(型式学的な土器様式の分析・検討は後論する)などが指摘される。前者のセットを第一群、後者のセットを第二群と呼称しておく。

多く含む。

(2)は口径一六・四センチ、器高二三・〇センチ、最大腹径一八・八センチ、底径五・四センチを測る完形の畿内第V様式典型的の變形土器で、会下山出土の甕の中にあつては完好な資料の一つといえよう。口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は中ほどよりやや上寄りに最大径があり、口径を凌駕して張り出している。成形は叩き手法を駆使するもので、凹凸の明瞭な叩き目が外面全面に施されており、器厚はほぼ〇・六～〇・八センチで均質に叩き上げられている。叩き目を詳細に観察すると、製作工程の段階に照應して三つの段階に分けていることが知れる。第一段階は底面より八センチぐらいまで右上りの斜方向叩き目、第二段階は右下りの斜方向叩き目で、下部では第一段階叩き目と交錯し合っている。第三段階は胴部中央より以上でほぼ水平、上半ではやや右上がりとなっているが、細かな微弱な刷毛目で覆われ消失している。同じ刷毛目は胴中腹部にも散見され、部分的に先行する叩き目を消し去っている。叩き目の凹凸は胴部

であるが、施文具の単位を適確にとらえることはできない。内面は外面同様、細かな刷毛で概ね縦方向に調整さ

れ、口縁部の内外面は強いヨコナデでもつてていねいに仕上げられている。刷毛は口縁部内面の下方でも部分的に認められる。口縁端部には櫛状工具を原体とするもので擬凹線が施されており、条線は三条を数える。強いヨコナデの際生じたものかもしれない。底部は全体に指頭調整がなされ、周縁部には圧痕が残存する。色調淡赤褐色、胴下半はとくに赤く胴部中央付近は淡く煤化し、帶状に有機物質が癒着している。胎土には石粒を散見し、微砂を含む。明るく堅く焼きしめられている。

高杯の脚部(3)は、やや裾開きの形態をとり、裾末端の外面には二本の擬凹線がみられる。脚柱部は中空で、杯部の器壁とほぼ連続している。外面の器面調整には刷毛を盛用し、末端に至るまでいねいに行なわれている。内面は絞り目をよく消しているが、局所にヘラ圧痕が残されている。裾末端部はヨコナデ調整がなされ、とくに内面に顯著である。底径一四・二センチ、器高一

の中央付近が最も顯著であり、凸部が幅広い箇所と凹部が幅広い箇所の両様が認められる点は、原体の構造を考え上で注意される。また、重複部を指摘することは可能

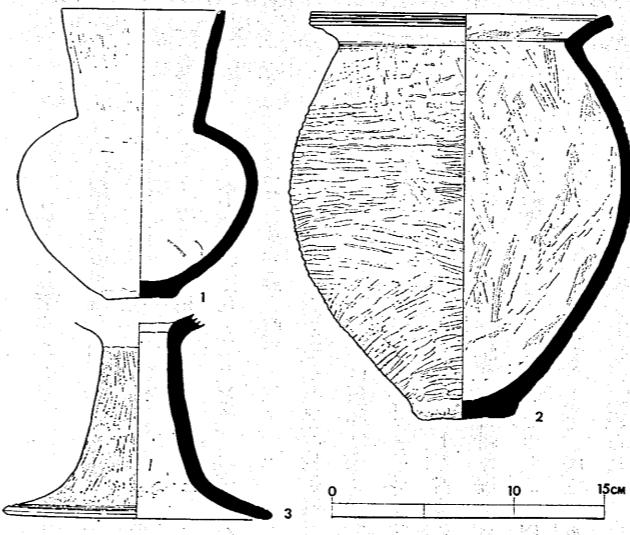


図137 L地区住居址一括出土土器実測図 (1)

第2章 弥生時代

- 308 -

第二群の土器 (図138の1) 第二群の土器は、鉢・甕・高杯(脚部)の三器種から成る。

(1)の小型の鉢形土器は、直口・平底の完存品で、口に認められる。口縁端部には櫛状工具を原体とするもので擬凹線が施されており、条線は三条を数える。強いヨコナデの際生じたものかもしれない。底部は全体に指頭調整がなされ、周縁部には圧痕が残存する。色調淡赤褐色、胴下半はとくに赤く胴部中央付近は淡く煤化し、帶状に有機物質が癒着している。胎土には石粒を散見し、子が散見されるが、煤化痕とみられる。

これら第一・二群の一括出土資料以外に、当住居址からは良好な完形品が何点か出土している(図138の2～4参考照)。

(2)は口径一四・二センチ、器高八・五センチを測る薄手のつくりの鉢形土器で、底部は外方へ突出し、やや

4 会下山遺跡出土土器特論

- 309 -

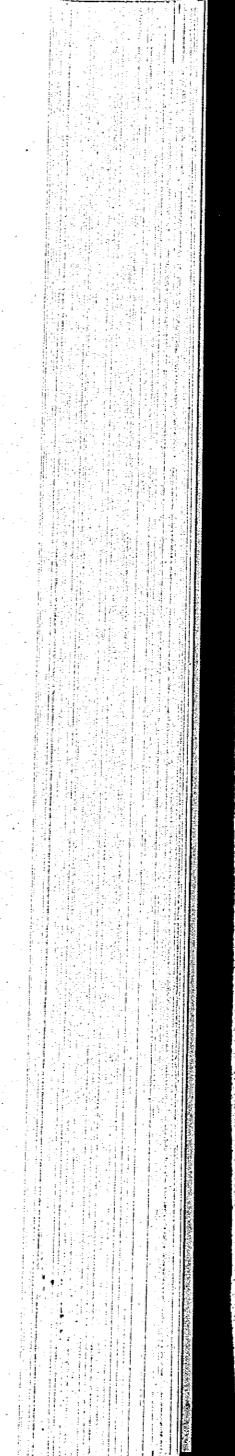


図139 会下山遺跡出土土器実測図

4 会下山遺跡出土土器特論

- 311 -

上げ底となつてくびれ部には指頭圧痕を顯著に残している。外面は下半にかすかに叩き目の痕跡をとどめ、のちに上すり消していくことが知れるが、当初は全面に施されていたかもしれない。会下山には甕や鉢のみならず、仔細に観察すると、壺や高杯にも叩き目手法を用いているものがあり、ほぼ全器種にわたつていることが推測される。灰褐色を呈し、内面に若干の石粒が認められる。また、外面の一部と底部には丹彩の痕跡がある。

(3)は鉢の形態をとつてゐるが、器面に煤が付着しているので、小型の甕とみる方がよい。口縁部は短く「く」の字状に外反し、底部は脚台を附加接続して絞られ、高く上げ底を呈している。内外面は細かな刷毛によつて調整され、内面下半は荒い刷毛を用いている。口縁裏側と底部周縁には指圧痕が認められ、とくに後者は縱に長い。また、口縁部にヘラの痕跡が認められる。黄色味を帯びた赤褐色で、胎土・焼成は良好である。口径一三・七センチ、器高一三・二センチを計測する。

胴部を欠く(4)は長頸壺の口頸部で、内面には粘土紐

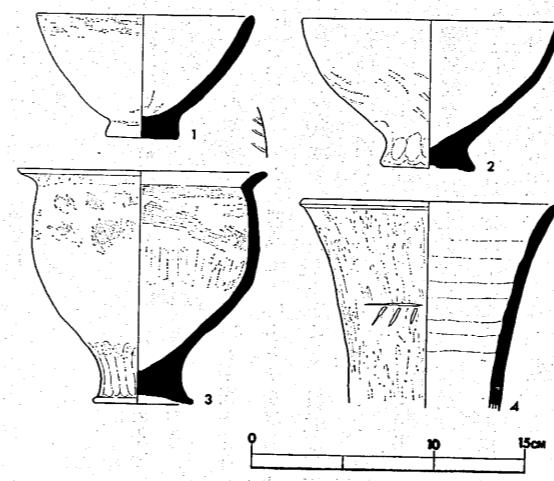


図138 L地区住居址一括出土土器実測図 (2)

第2章 弥生時代

- 310 -

巻上げの痕跡を顯著に残し、断面にゆるやかな起伏を残している。外面は縦にヘラ磨きし、頸部中央には「ノ」字形で刻印された記号文がみられる。色調は黄褐色で緻密に焼かれ、胎土もよい。口径一四・〇センチ、残存

高一・五センチである。

その他の出土資料

会下山遺跡からは前述した他一括資料ではないが、当地域の後期弥生式土器の様式となりうる良好な出土品があり、E・X地区からは鉢が、S地区からは高杯が、Q地区からは甕・高杯・器台などが、ほぼ完形品に近い状態で出土している。以下、これらの資料について器種別に少し詳しく解説しておきたい(図139参照)。

甕形土器(図139の1・4)

(1)は口径一五・四センチ、器高二・九センチを測る大きさの甕で、口径と最大腹径はほぼ等しい。比較的厚手のつくりで、一センチの厚みをもつ箇所もある。外面の胴部上半は叩き目成形されたのち、細かな刷毛で調整されるが、胴部下半については器表の磨滅が著しく、明らかではない。内面は若干のヘラ圧痕が認められるが、ほぼ未調整である。

「く」の字状にやや鈍重に外反する口縁部の内面は軽くヨ

ないが、叩き目成形を行なった可能性は否定できない。

口径二三・五センチ、器高一一・八センチを測り、赤褐色を呈している。

高杯形土器(図139の3・5)

脚裾部を欠く他、ほぼ完存な形態を保つ(3)は、杯部内外面をいねいにへ

ラ磨きし、脚部を絞って外面を刷毛目調整し、のちヘラ

磨きを施している。口縁端部はヘラで面取りがなされている。透し孔は三方にあり、調整に先立つて穿たれている。色調は暗褐色で、胎土・焼成は良好である。口径一

五・六センチ、残存高一七・七センチを計測する。杯底部以下を欠如する(5)は、口径一二・〇センチと小型ながら杯部に稜をもち、皿形高杯としては稀有な大きさである。立上りの部分をヨコナデして仕上げる。淡赤褐色を呈し、石英・長石を若干含む。

器台形土器(図139の8) 両端を欠き、筒胴部のみ残す個体であるが、透し孔は四方ないし五方に穿つもの

コナデがなされ、とくに内面は荒い刷毛で横方向に再調整されている。色調は全体的に黒味を帯びた灰黄色で、胎土には石粒を散見し、荒く粗雑である。

(4)は「く」の字状に短かく屈曲する口縁部を有する小型の甕で、薄くていねいにつくっている。外面にはヘラの調整痕を認める他、ほぼナデを盛用している。胎土は良好で、灰色・灰黒色を呈している。口径一六・二センチ、残存高一五・五センチを計測する。

鉢形土器(図139の2・6・7)

小型のもの(6)と大型のもの(2)がみられるが、平底を有する点と口縁部が外反する点で共通する。小型の鉢はともに内面に粘土紐接合の痕跡を顕著に残し、(7)は外面に叩き目が看取される。また(6)の口縁部は強いヨコナデをみ、中途で屈曲して段状口縁をつくるテクニックが認められる。黄赤色を呈し、胎土には微砂を含む。大型の鉢(2)は口縁部が短かく鈍く外反し、底部がきわめて薄い。ナデによる調整を主体とするもので、他の手法は認められ

L地区出土土器は一・二群の年代差は明瞭でないが、図137の(2)の甕が西ノ辻E式の好例であり、この時期に比定してよい。ただ、西ノ辻の示準資料の甕には口縁端



写真84 田能遺跡6Y調査区第2溝一括土器出土状態
(尼崎市立田能遺跡資料館提供)

部に擬凹線がなく、会下山出土品の方がやや古い要素をもつている。また、上段の叩き目を刷毛で消している点も西ノ辻I式の名残りを強くとどめしており、若干時期を遡らせて考えねばならない。

(1)の長頸壺は西ノ辻E式に対比すべき資料がないが、神戸市荒神山遺跡・吹田市垂水遺跡・東大阪市岩滝山遺跡・枚方市田ノ口遺跡など後期前半に属する大阪湾沿岸地域の諸遺跡に類例があり、また同伴関係からみて西ノ辻E式の古相の位置を占めるかもしれない。その場合、西ノ辻I式の一群の長頸壺の口頸部の著しい退化が指摘できる。透し孔をもたない(3)の高杯脚部も西ノ辻E式期の所産であろう。

図138の資料については、(1)を除いて一括資料でないため、同時性を認めるることは避けねばならないが、(2)は図135の(1)の鉢に形式近似しており、(4)の長頸壺も図137の(1)のものより形式的に先行する。

このように、会下山遺跡より出土した一括土器はほぼ

後期の前半に比定でき、一部初頭の遺制を残しているも

のとみられる。図139の完形資料の多くもこの範疇で把握され、西摂地域における畿内第V様式前半は当遺跡出土品を基準資料とすることができる。

b. 西摂地域における畿内第V様式編年試案

西摂地域には、会下山以外に良好な後期一括資料を出土した遺跡がある。一つは昭和四十・四十一年に発掘調査された尼崎市田能遺跡であり、いま一つは同じく尼崎市中ノ田遺跡があげられる。本節ではこれらの資料を概観し、併せて西摂地域における畿内第V様式土器の編年細分を検討してみたい(表53参照)。

田能遺跡6Y調査区第2溝一括資料

田能遺跡では、6Y調査区の北端で検出された幅三・〇メートル・深さ一・一メートルの東西に延びる溝(第2溝)から弥生時代後期に属する多数の完形土器・木製品が出土している。

器種の組成は、壺・長頸壺・甕・鉢・高杯で、器台

や手焙形土器はみられない(写真84・表53中欄参照)。

壺には複合口縁をもつものが存在するが、その形態は唐古遺跡第四五号地点竪穴出土例に近く、かつ河内からの搬入品であることが判明していく。他の壺の多くも唐古四五号の資料に酷似している。長頸壺は数少ないが、算盤玉形の器体に内巻きみの細長い口頸部をつけたもので、会下山出土例とはやや態様を異にする。

完形品の多い鎌形土器は、いずれも復径が口径をややしのぐもので、刷毛目と叩き目を併用するものが大半を占める。形態は、大型のもの(腹径×口径)が小型なもの(腹径×口径)へ移行する過渡期的様相を示している。

鉢はA・B両タイプ(土器集成)を見るが、共通する点はすべて無文であり、叩き目が認められないところにある。また、唐古四五号竪穴上層式に多い指圧痕もなく、上げ底の傾向もまったくみられない。

高杯は、椀・皿両系統の杯部を残しているが、前者は西ノ辻E式地點式そのものであり、後者も同じくE式に最も近く、口縁部の立ち上りの形状と外反度からみて、そ

れをやや発展させた形式として捉えることができる。

これらの一括資料の指向する時期について整理してみると、西ノ辻I地点式に遅れて成立したと考えられる壺C(土器集成)を含み、総じて壺形土器は唐古四五号式の土器群に対応する。長頸壺は細頸のものを含むなど後期後半の形態を有し、甕もやや新しい様相を帶びている。鉢は明らかに唐古四五号上層式に先行し、高杯は型式学的に西ノ辻E式よりも若干新しい相に属している。

以上の諸事実を総合するならば、田能6Y調査区第2溝出土土器は、河内・西ノ辻E式から大和・唐古四五号式に至る併行時期を与えることが可能であり、唐古四五号式をより強く指向することを重視して、弥生後期でも中葉以降後半期初頭の相対年代が考定される資料とみなされよう。

中ノ田遺跡第1・2溝一括資料 中ノ田遺跡では、

弥生時代後期の土器を出土する二本の溝状遺構が検出されている。⁽⁵⁾その一つは、幅一〇メートル・深さ〇・六



写真85 中ノ田遺跡第1・2溝一括土器出土状態 (尼崎市教育委員会提供)

複合口縁をもつとみられる壺は、器形の全容を知ることはできないが、頸部に刻み目凸帯の造作されるものとともに田能の一括品ではない傾向である。直立する頸部をもち、口縁部が屈曲して開く壺は唐古四五号上層式に存在し、小型品や口縁先端がかすかに立ち上るのはいずれも田能6Y調査区第2溝出土品には認められず、新しい態様を示すものと思われる。長頸壺は田能同様細頸のタイプのものをみ、台付長頸壺は唐古四五号上層式にきわめて類似している。

甕は田能遺跡のものより小型品が目立ち、同時に口径と腹径がほぼ等しいものが増大している。また、詳細にみると、底部底面もドーナツ状底を呈する個体が存在し、口縁部には際立った特色、すなわち上方にかなり明瞭に立ち上る形状のものが登場してきており、新しいテクニックが認められる。

鉢も唐古四五号上層式において顯著にみられる上げ底で、指圧痕を残すものが大勢を占めている。また、口縁部にはやはり立ち上がりが看取される。

メートルの比較的大きなもの(第1溝)で、いま一つは幅〇・六メートル・深さ〇・三メートル(第2溝)でやや小さく、共に発掘区域内でゆるやかな弧状を描いている。

出土資料は壺・長頸壺・甕・鉢・高杯・器台など器種に富むが、前述した田能6Y調査区2溝の第V様式土器とはやや様相が異なっている。両遺跡が近接している以上、その差違は明らかに地域の差ではなく、各々のセツトの遺棄・廃絶の時間差として捉えるのが妥当である。

壺形土器は、田能同様バラエティーに富む。いわゆる

高杯も唐古四五号上層式に同型品が存在し、鉢同様その併行期の所産とみられる。器台は透し孔がなく、粘土紐輪積みの痕跡をよくとどめており、その形態は弥生後期通有のものではない。田能6Y調査区第2溝・唐古四五号整穴上層式にはそれぞれ器台が欠落しているので、両者との比較・考定を示すことは困難であるが、製作技法と器形から推断して新しい傾向のものと言えよう。このように中ノ田遺跡第1・2溝出土品は、弥生後期後半でも大半の資料は田能出土資料より新しい時期に主体を置くものとみられる(表53下欄参照)。

西摂地域における弥生後期の時期細別のマルクマールとなる資料は以上の三資料であるが、これらの前後関係を明白に示すと、会下山住居址床面(後期前半)→田能6Y調査第2溝(後期後半Ⅰ期)→中ノ田第1・2溝(後期後半Ⅱ期)となる。

各々の資料には機械的に分断できぬ面、換言すれば時

間的な重なり合いも十分認めなければならない。その内実がどこまで正しいか確信はもてぬが、会下山資料と田能資料との関係に比べ、田能資料と中ノ田資料との関係の方がより緊密らしいことは各遺跡間の距離・立地条件なども勘案して、ほぼ間違いないものと思われる。田能と中ノ田の新古關係は全く別の地域の大和唐古遺跡の第四五号地点堅穴の上下層出土土器をもつて層位学的に検証でき、河内西ノ辻遺跡の諸形式がさらにそれを傍証している。

以上の諸点を踏まえた上で、畿内第V様式の編年細別試案を提示し、器種別にその流れをみたのが表53である。最近、なお尼崎市四ノ坪遺跡や東園田遺跡ではこの編年表に後続する庄内式の古相の良好な土器が多量に発掘されている。

註(1) 一括資料(Fund)に基づいた畿内全域における第V様式の編年細分と併行関係については別稿にて論じられている(森岡秀人「畿内第V様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」『河内長野大師山』(関西

- (1) 大学文学部考古学研究紀要第五冊 昭和五十一年。
(2) 村川行弘・石野博信『会下山遺跡』(芦屋市文化財調査報告第三集) 昭和三十九年 芦屋市教育委員会
(3) 『田能遺跡概報』(尼崎市文化財調査報告第五集) 昭和四十二年 尼崎市教育委員会
(4) 尼崎市立田能資料館・福井英治学芸員の教示による。
(5) 『尼崎市中ノ田遺跡』(尼崎市文化財調査報告第六集) 昭和四十六年 山陽新幹線大阪工事局・兵庫県教育委員会・尼崎市教育委員会
(6) 報告書(注5文献)記載の実測図は第1層出土資料(図版六)と第2層出土資料(図版七)に分離できるので、両遺構には若干の時期差があるものと思われる。

証でき、河内西ノ辻遺跡の諸形式がさらにそれを傍証している。

以上の諸点を踏まえた上で、畿内第V様式の編年細別試案を提示し、器種別にその流れをみたのが表53である。

最近、なお尼崎市四ノ坪遺跡や東園田遺跡ではこの編年表に後続する庄内式の古相の良好な土器が大量に発掘されている。

註(1) 一括資料(Figure)に基づいた畿内全域における第V様式の編年細分と併行関係については別稿にて論じられている(森岡秀人「畿内第V様式の編年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」『河内長野大師山』(関西

(6) 報告書(注5文献)記載の実測図は第1溝出土資料(図版六)と第2溝出土資料(図版七)に分離できるので、両遺構には若干の時期差があるものと思われる。尼崎市教育委員会・橋爪康至技師の御教示による。

表53 西摂地域における畿内第V様式土器編年試案表

壺	甕	鉢	高杯	器台

表53 西摂地域における畿内第V様式土器編年試案表

器種		壺			甕			鉢	
一括資料									
後期前半	金下山 住居址床面								
後期中葉		田能 6Y 調査区第2溝							
後期後半		中ノ田 1・2溝							

第三章 古 墳 時 代

1 研 究 史

古墳時代研究のあゆみ

明治以前 わが国における考古学の発達は、動機や方法論、考証において現段階からみるとなお多くの問題があるとしても、江戸時代にその芽生えがあると言つてよいだろう。ことに古墳時代の研究では、徳川光圀による栃木県那須郡の上・下侍塚の発掘があり、陵墓の探索などはその後の古墳時代研究の発展につながるものである。

幕末になると遺物の扱い方・整理の仕方に進歩がみられ、図譜的なものも刊行されるようになるが、全体とし

ては、物に対する好奇心と収集にあつたと言つてよいだらう。

明治時代 この時代は、西欧の新しい学問体系の攝取によつて、わが国の學問全体が著しく飛躍した時であるが、これは古墳時代の研究においても例外でなく、古墳の研究も近代的な學問として第一歩を踏みだした時期といえよう。

明治の中葉になると東京や大阪周辺での精緻な方法による発掘調査や個々の遺物に関する論文の発表となつてあらわれた。しかし、一方においては、墳墓の発掘に対する精神的なためらいや、古墳の研究が國家の成立に直接するものであることから法による古墳発掘の規制等の研究に対する障害がはやくもその萌芽を見る。だから、

一応学問としての一分野をなすまでに成長したとはいえた、内容は遺物の解釈にとどまっていたといえよう。

大正時代 各都道府県における史跡調査事業や大正十二年にはじまる宮崎県の西都原古墳群の発掘、高橋健

自・梅原末治等の考古学者の邪馬台國論への発言がみられるが、これは、古墳時代の研究がようやく学問として

その方法論を樹立したことによるものと考えられる。

昭和前期 昭和時代は、敗戦までと、それ以後現在までの二時期に分けて見ることができる。

前期は、時代の反映として古墳時代の研究がさらにきびしい条件下におかれたことは言うまでもない。そのような中で、とくに注目すべきことは、各地においての研究会や機関誌の刊行という活動がある。また、内容の面においては、古墳の築造法・前方後円墳の外形の変遷や石室の構築法等の具体的な事実の追求と深まりがみられる。新しい視点としては、古墳を群として取りあげるというような、現在の研究に直結する動きもみられる。

昭和後半期 戦後、日本歴史は大きな転換をなした

が、考古学も古代学の一分野として重要な地位をしめるようになった。

昭和二十五年五月三十日には、文化財保護法の制定があり、不十分ながら埋蔵文化財の保存の施策がとり入れられるようになった。

昭和三十年前後からの開発事業の激増と歩調を合わせたように古墳の発掘や研究報告が量的に増大する。内容的には、生産遺跡の研究、古墳の形態・築造技術・同範鏡の問題等研究も多彩になるが、とくに社会構成面からの古墳の研究、しかも後期の群集墳の研究の重視と、それによって群全体を総合的に調査するということが定着し多くの成果を得た。しかし、経済の高度成長とともに建設工事の大規模化とともに量的に増加した発掘調査は、同時に遺跡・遺物の量的な破壊をすすめただけで、考古学が遺跡・遺物を対象とする学問であるかぎり、遺跡の保存対策は、学問上の課題ともいえる時点に立っていると言えよう。

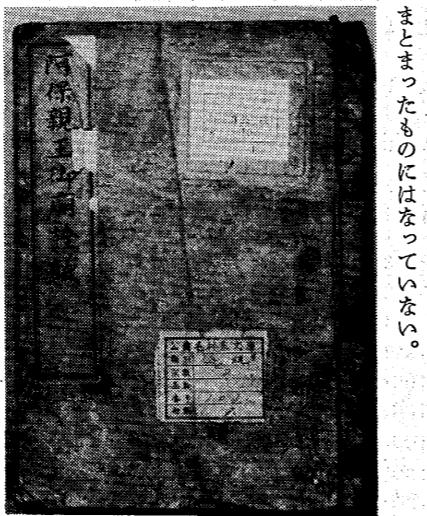


写真86 「阿保親王御廟詮議」毛利家文庫
(山口県文書館提供)

としては、福原潜次郎・村上欣三による『打出村の古墳』(表54の7・8)の報告があるにすぎない。なお、篠学者による土器や石器の採集等に関する成果も、この時期にはまとまったものにはなっていない。

前項においてわが国の古墳時代研究史を概観したが、ここでは、芦屋市域に限つての研究史を概観しておきたい。市内の遺跡・遺物に関する記録・報告・論説は、表54にみるとおり、研究・調査の実績が年を追つて進展したことがわかる。

古墳の調査・研究は、元禄年間の阿保親王塚古墳改修工事とそれに伴う遺物の出土ということをもつてスタートする。もとよりこの時期においては市域の古墳時代全般に関する研究といえるものではなく、元禄十四年(一七〇二)刊の『摂陽群談』にはじまる一連の地誌に個々の古墳の現状を記述している程度で、まだ学問という域に達していない。

明治に入つて、西欧の学問の攝取による古墳時代研究の躍進といふ時代の動きも、必ずしも市域の研究の中に反映されていないようで、この時期における研究成果

大正時代は、前述のように考古学的方法論が確立した時期であるが、市域においても城山南麓出土の竈形土器や阿保親王塚古墳周辺より出土の鏡等の学界と直結する出土遺物についての報告が、清家植直・島田貞彦・梅原末治等(表54の11・13・17)によつてなされた。

26 1956年(昭和31) 「遺跡・遺物から見た古代の芦屋地方」 武藤誠『芦屋市史』
本篇

27 1956年(昭和31) 『神戸地方古墳地名表』 落合重信他

28 1957年(昭和32) 『芦屋市史』 史料篇第二

29 1958年(昭和33) 「陶棺の新資料・芦屋市岩ヶ平出土の陶棺について」 武藤誠
『人文論究』 9-2

30 1959年(昭和34) 「芦屋八十塚古墳調査概報」 村川行弘『芦屋市文化財調査報
告』 第一集

31 1963年(昭和38) 『芦屋郷土誌』 細川道草

32 1965年(昭和40) 「朝日ヶ丘古墳群と八十塚古墳群」 佐々木幸雄『芦笛』 18号

33 1966年(昭和41) 「朝日ヶ丘古墳・八十塚古墳群・剣谷一号墳」 村川行弘『芦
屋市文化財調査報告』 第4集

34 1966年(昭和41) 『苦楽園五番町古墳』 村川行弘 西宮市教育委員会

35 1967年(昭和42) 「八十塚E号墳発掘調査報告」 藤岡弘他『芦屋市文化財調査報
告』 第5集

36 1969年(昭和44) 「桜ヶ丘周辺の古式古墳」 赤松啓介『桜ヶ丘銅鐸銅戈』 本文
編

37 1970年(昭和45) 『郷土史説苑』 吉井良尚

38 1971年(昭和46) 「八十塚古墳群予察調査報告と今後の問題」 天野正史『芦
芽』 23号

39 1971年(昭和46) 「考古学上からみた芦屋」 村川行弘『新修芦屋市史』 本篇

40 1972年(昭和47) 『八十塚14号墳の測量調査』 六甲南麓群集墳測量調査団第一
報

41 1973年(昭和48) 「向こうの山に群がる黄泉国」 森岡秀人『芦の芽』 第24号

42 1973年(昭和48) 『八十塚13号墳の測量調査』 六甲南麓群集墳測量調査団第二
報

43 1973年(昭和48) 『八十塚15号墳発掘調査略報』 六甲南麓群集墳測量調査団

44 1974年(昭和49) 『苦楽園五号古墳発掘調査終了報告』 西宮市教育委員会

45 1974年(昭和49) 『兵庫県史』 第一卷

明治の末頃から続けられた地元の研究者による六甲南麓から甲山周辺に至る地域の踏査活動は、大正四年（一九一五）に吉井良尚・田沢金吾・紅野芳雄等による西宮史談会の結成となり、いよいよもって採集活動が熱をおびるようになつた。これより先、明治三十一年（一九〇五）に発足してゐる神戸史談会も、明治四十年（一九〇八）の法恩寺跡の石棺の蓋の発掘調査をおこない、その後も芦屋市域から西宮市の甲山周辺にかけて、遺物採集を中心とした踏査活動をおこなつて

表54 芦屋市における古墳時代研究の文献一覧

江戸時代

- | | | |
|---|-------------|--------------------------|
| 1 | 1691年(元禄4) | 『麿祖阿保親王竹園伝記』 |
| 2 | 1701年(元禄14) | 『摂陽群談』岡田篠志撰 |
| 3 | 1710年(宝永7) | 『兵庫名所記』菊屋新右衛門著 |
| 4 | 1734年(享保19) | 『日本輿地通志』『摂津志』関祖衡纂緝、並川永等校 |
| 5 | 1796年(寛政8) | 『摂津名所図会』秋里籬島著、竹原春朝斎画 |
| 6 | 1804年(文化元) | 『播磨名所巡覧図絵』村上石田著、中井藍江画。 |

明治時代

- 7 1907年(明治40) 「揖津国武庫郡打出村の古墳」 福原潜次郎『考古界』5-1
 8 1910年(明治43) 「揖津国打出村の古墳」 村上欣三『考古学』8-2
 9 1911年(明治44) 『西摶大觀』仲彦三郎

大正時代

- | | | |
|----|-------------|--|
| 10 | 1919年(大正8) | 「上代の武庫地方」喜田貞吉『摂津郷土史論』 |
| 11 | 1919年(大正8) | 「釜及竈形土器の新発見」清家植直『考古学雑誌』9—8 |
| 12 | 1921年(大正10) | 『武庫郡誌』武庫郡教育会編 |
| 13 | 1922年(大正11) | 「摂津武庫郡に於ける二、三の古墳墓(?)」梅原末治『考古学雑誌』13—2 |
| 14 | 1925年(大正14) | 「武庫郡精道村打出発見の古鏡」梅原末治『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第二輯 |
| 15 | 1926年(大正15) | 『武庫地方郷土史料目録』吉井太郎 |

昭和時代

- 16 1928年(昭和3) 「摂津山芦屋古墳調査報告」長町彰『考古学雑誌』18—11
17 1928年(昭和3) 「本邦発見の竈形土器」島田貞彦『歴史と地理』22—5
18 1929年(昭和4) 『芦屋の里』島之夫
19 1933年(昭和8) 『六甲』竹中靖一
20 1939年(昭和14) 『武庫の探勝』山本六郎
21 1940年(昭和15) 『考古小録』紅野芳雄
22 1940年(昭和15) 『打出史話』天王寺谷勘太夫
23 1944年(昭和19) 『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』吉岡昭
24 1953年(昭和28) 『本山村誌』本山村誌編纂委員会編
25 1954年(昭和31) 『西宮史料集』田嶋香逸編

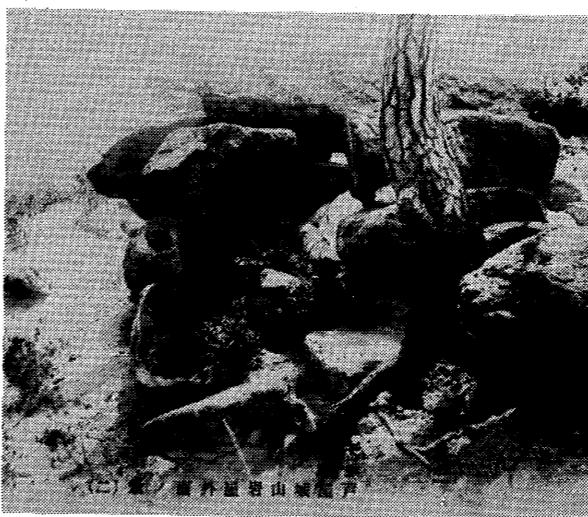


写真87 大正時代の絵はがきにみられる城山南麓の古墳

この時期から昭和の初期にかけては、高燥な六甲南麓地域が宅地や別荘地として開発され、多くの古墳が破壊された。煙滅した時期である。

この時期から昭和の初期にかけては、高燥な六甲南麓地域が宅地や別荘地として開発され、多くの古墳が破壊された。煙滅した時期である。

個人による遺物の採集活動は熱心につづけられた。これらの活動の成果には、昭和十五年に紅野芳雄の『考古小録』(表54の21)、昭和十九年には、吉岡昭の『摂津国芦屋郷土石器時代文化研究』(表54の23)がある。これらに記載された遺跡の中には、その後の開発によって現在ほとんど現地での確認ができない状態にある遺跡が多いことを考えれば、これらの調査結果の意義は大きいものがある。

敗戦後のわが国の古墳時代研究は、質・量ともに著しいものがある。このような学界の動きに対し、直接本研究からそれに応えるような問題の提起はない。しかし、昭和二十五年の文化財保護法の制定等によつて、市の古文化財に対する関心が高まり、昭和二十六年頃から文化財保護の啓蒙活動が、教育委員会や打出春日

町に設立された財團法人黒川古文化研究所を中心に行なわれたようになつた。ついで、昭和三十一年から武藤誠

・村川行弘を中心に関西学院大学考古学研究会などによる八塚群集墳の学術調査がはじまり、昭和三十四年『芦屋市文化財調査報告』第一集(表54の30)を皮切りに報告書が刊行されはじめた。そして、昭和三十一年には『芦屋市史』本篇の刊行をみた。

また、戦後の古墳時代研究において地域住民の調査への参加という新しい動きが生まれたことが注目される。

が本市においてもこのよくな動きに応えるかのように、昭和三十二年に芦屋史談会が、昭和三十九年には芦ノ芽グループが発足している。とくに後者は、地元の若い人達によつて、今日まで地域史研究と文化財保護の立場から、発展的な活動が続けられている。さらに、昭和四十七年に芦ノ芽グループ考古学研究会員と兵庫県立芦屋高等学校の史学研究部員を中心として六甲南麓群集墳調査団が結成され、精力的な調査活動がつづけられていることは特筆すべきであろう。これら研究団体の活動の成果

は、昭和四十六年の『新修芦屋市史』本篇に集約収録されている。

さて、今日にいたるまでの市域の古墳時代の研究を顧みると、必ずしも学界の動向と軌を一にしていないことがわかるが、これは、当時の学界の関心に応ずるような遺跡の発掘調査、遺物の検出がなかつたことに最大の原因があるといえよう。したがつて、研究史に直結するような研究の成果は古墳時代の研究の視点が後期古墳に移るまで待たねばならなかつた。

戦後の古墳時代研究の最も大きな成果の一つに、後期の群集墳について群全体を総合的に把握し、群集墳の史的位置づけを明らかにする研究がある。このような学問的視点から、本市域の個々の古墳の位置づけ、群集墳の復原作業、集落跡、生産遺跡の追求等の個別研究、さらにつそれを体系的に把握する研究を、新しい視点に立つて試みることが今後の課題として残されている。

参考文献

- 斎藤 忠『日本の発掘』一九六三年
藤沢長治『古墳時代研究のあゆみ』『日本の考古学』IV 昭和四十年
斎藤 忠『日本考古学史』昭和四十九年
大場繁雄『日本』『新版考古学講座』10 昭和四十六年
前嶋雅光『地方史研究の現状 近畿(2) 兵庫県』『日本歴史』二二八号
芦屋市『社会教育3 文化財保護』『二十周年記念誌』昭和四十五年

2 古墳分布の概観

武庫川以西、住吉川以東の地域は、六甲山地の急峻な谷から流下する河川が形成した扇状地が、海岸線にそつて帶状に続いている。

この地域の古墳分布の状況は、地形的にみると、六甲山地と汀線との間のせまい平地部に前期・中期に属する古墳が、山麓から台地にかけての傾斜変換線上に後期古墳が、そして山麓斜面には後期古墳が群集墳の形態で分布している。

つぎに、これら地形別に分布する古墳を概観してみた
い。

平地部 武庫川の西から神戸市の東部にかけて帶状に続く平地には、前方後円墳を中心とするいくつかの古墳が分布している。

西宮市には、津門の大塚山古墳、稻荷山古墳の二基の

前方後円墳があり、芦屋市には、金津山古墳・阿保親王塚古墳の二基の大型円墳と、文献にみられる鞍塚・うの塚・笄塚等がある。そして神戸市には、岡本のヘボソ塚古墳、東灘区の東求女塚・処女塚・灘区の西求女塚の四基の前方後円墳が分布している。

これらの古墳のうち、主体部の確認されていない本市の金津山古墳と阿保親王塚古墳の二基、および記録によって主体部が横穴式石室であろうと考えられる西宮市津門の大塚山古墳を除くと、すべて古墳時代前期に比定されるものである。また、親王塚古墳・ヘボソ塚古墳以外は、海浜に近い低地に占地し、主軸方位は不統一であり、相互に二キロメートル前後の間隔をおいている。

傾斜変換線 北山山塊・六甲山地の斜面と帶状の平地の間の傾斜変換線や台地には、後述する山麓斜面に分布する古墳群とは形態や時期を若干異なる古墳群がある。本古墳群は、『摂津志』・『考古小録』等の

記録によると、前方後円墳（車塚古墳）を含む数十基の、

横穴式石室を主体部とする古墳で構成されていたことがわかる。また大正二年（一九一四）に神呪池から発見された遺物に関する公文書類も、この地を「百塚」と称したとしている。現在、関西学院大学構内古墳など確認できたところでは、仁川丘陵に仁川五ヶ山群集墳がある。

芦屋市には、阪急神戸線と山麓

斜面との間の南に突出した台地周縁部に翠ヶ丘古墳群があり、高座川から市域の西端に至る芦屋台地周縁部に三条古墳群がある。

これらの古墳群と後述する山麓斜面に立地し、群集の

形態をとる古墳群とをくらべると、つぎのような特色が指摘できる。

① 古墳の密集度が薄い。

② 石室の規模が大きく、副葬遺物が相対的に多い。

③ 時期的に古墳時代後期でもやや古い時期に位置づけられる。

山麓斜面 西宮市・芦屋市・神戸市の後背山地、標

高八〇メートルから一五〇メートル前後の斜面には、種

々の規模・構成をもつ古墳が群集墳の形態で分布している。

西宮市の甲山東方、仁川丘陵に仁川五ヶ山群集墳がある。本群集墳は、現在九基の古墳が遺存しているが、昭和二十四年には十四基が確認されている。そして、現状では、仁川と同じ南北にのびる稜線上に等間隔に築造されている一群と、五ヶ山弥生遺跡の域内に遺存する古墳を最高地点のものとして、東にのびる稜線上に築造されている一群、さらにそれより一段低い稜線上（宝塚市旭ヶ丘）に位置する一群と、立地の地形により三支群に分けることができる。⁽³⁾

芦屋市には、西宮市苦楽園を東端とし、岩ヶ平台地を

中心とし宮川右岸に至る地区に分布する八十塚群集墳

を中心とする笠ヶ塚群集墳、そして、芦屋川と高座川に

画された地域で、城山南麓を中心とする城山南麓群集墳

がある。神戸市に入ると、「本山村誌」に「岡本の旧梅

林の群集墳は有名である。」と記録されている横津本山

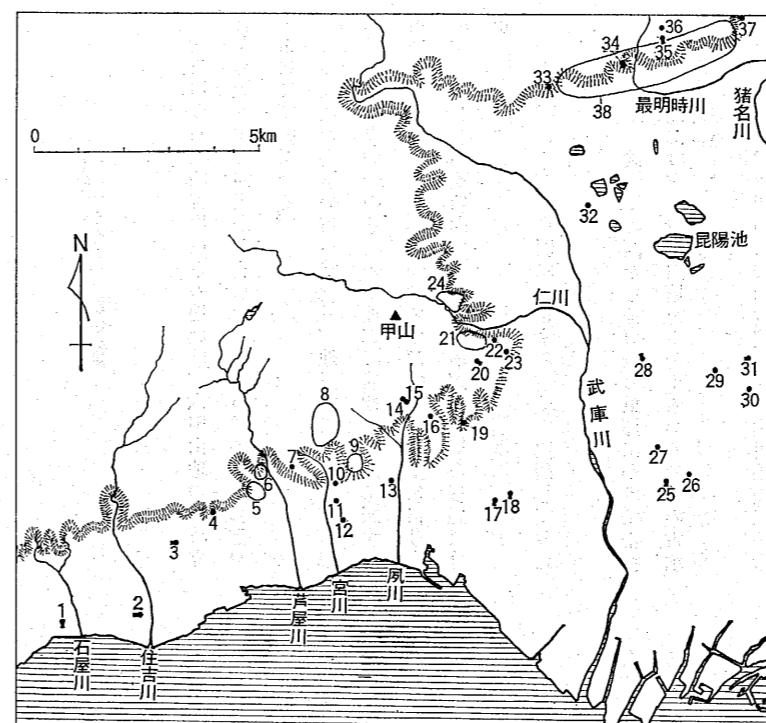


図140 芦屋市周辺古墳分布図

- | | | |
|-------------|--------------|---------------|
| 1. 東明乙女塚古墳 | 14. 神園古墳 | 27. 大井戸古墳 |
| 2. 吳田求女塚古墳 | 15. 凪川学院構内古墳 | 28. 友行古墳 |
| 3. ヘボソ塚古墳 | 16. 满池谷古墳 | 29. 平塚古墳 |
| 4. 神戸塚大構内古墳 | 17. 津門稻荷山古墳 | 30. 柏木古墳 |
| 5. 三条古墳群 | 18. 津門大塚古墳 | 31. 御願塚古墳 |
| 6. 城山南麓古墳群 | 19. 具足塚古墳 | 32. 安倉高塚古墳 |
| 7. 芦屋神社境内古墳 | 20. 上ケ原車塚古墳 | 33. 中山寺白鳥塚古墳 |
| 8. 八十塚古墳群 | 21. 上ケ原古墳群 | 34. 長尾山古墳 |
| 9. 高塚山古墳群 | 22. 上ケ原入組野古墳 | 35. 万籟山古墳 |
| 10. 打出駒塚古墳 | 23. 門戸天神古墳 | 36. 八州嶺古墳 |
| 11. 阿保親王塚古墳 | 24. 五ヶ山古墳群 | 37. 火打勝福寺古墳 |
| 12. 金津山古墳 | 25. 水堂古墳 | 38. 長尾山丘陵の古墳群 |
| 13. 王子ヶ丘古墳 | 26. 一本松古墳 | |

(岡本) 群集墳がある。本群集墳の実態は不明であるが、

現状では、『本山村誌』の記載の如く、中野の神戸女子薬科大学構内に残る古墳一基が確認できるにすぎない。

註(1) 小林行雄 「技術から見た古墳の様式」『考古学』第

五卷第六号 昭和九年

(2) 武藤誠 「埋蔵文化財調査記録」『西宮市史』第七卷

(3) 『西宮市埋蔵文化財遺跡分布図及び地名表』 昭和

四十九年 西宮市教育委員会

— 332 —

第3章 古墳時代

3 古墳各説

(イ) 金津山古墳 (黄金塚 かなづか)

所在地 芦屋市打出春日町一五三番地 (民有地)

現状 古墳は、阪神電鉄打出駅の北東一〇〇メートルの住宅街にある。墳丘の基底線まで宅地となり住宅がたち、松の大木や雑草が繁茂している墳丘部のみが、

かろうじて遺存している。

位置と外形 六甲山地の山麓部に展開する台地のうち、もつとも南に突き出た翠ヶ丘台地の南端、標高一〇メートルに立地している。墳丘実測図の等高線一一メートル・ラインを基底線と解釈すると、底径南北四一メートル、東西三九メートル、高さ四・一三メートルの円墳となる。後出の本古墳に関する文献・記録の中には、本古墳が東面する前方後円墳の可能性を説くものもあるが、周辺の地形が改変され宅地となつてゐる現在では、

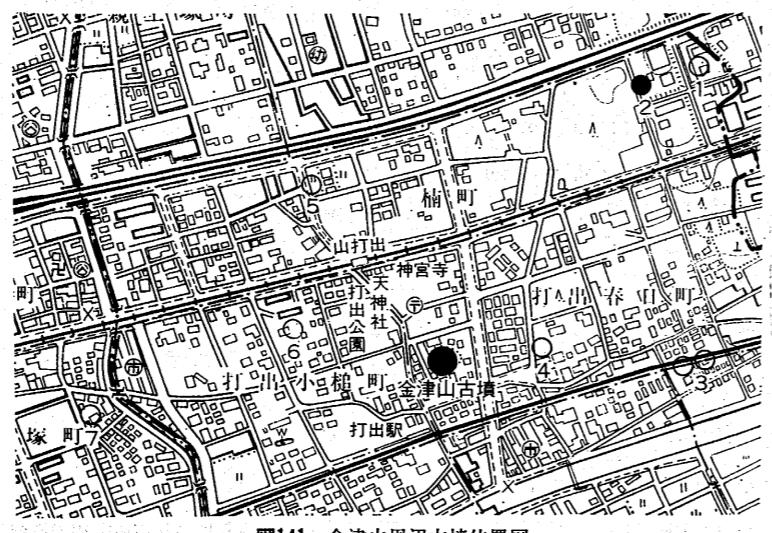


図141 金津山周辺古墳位置図

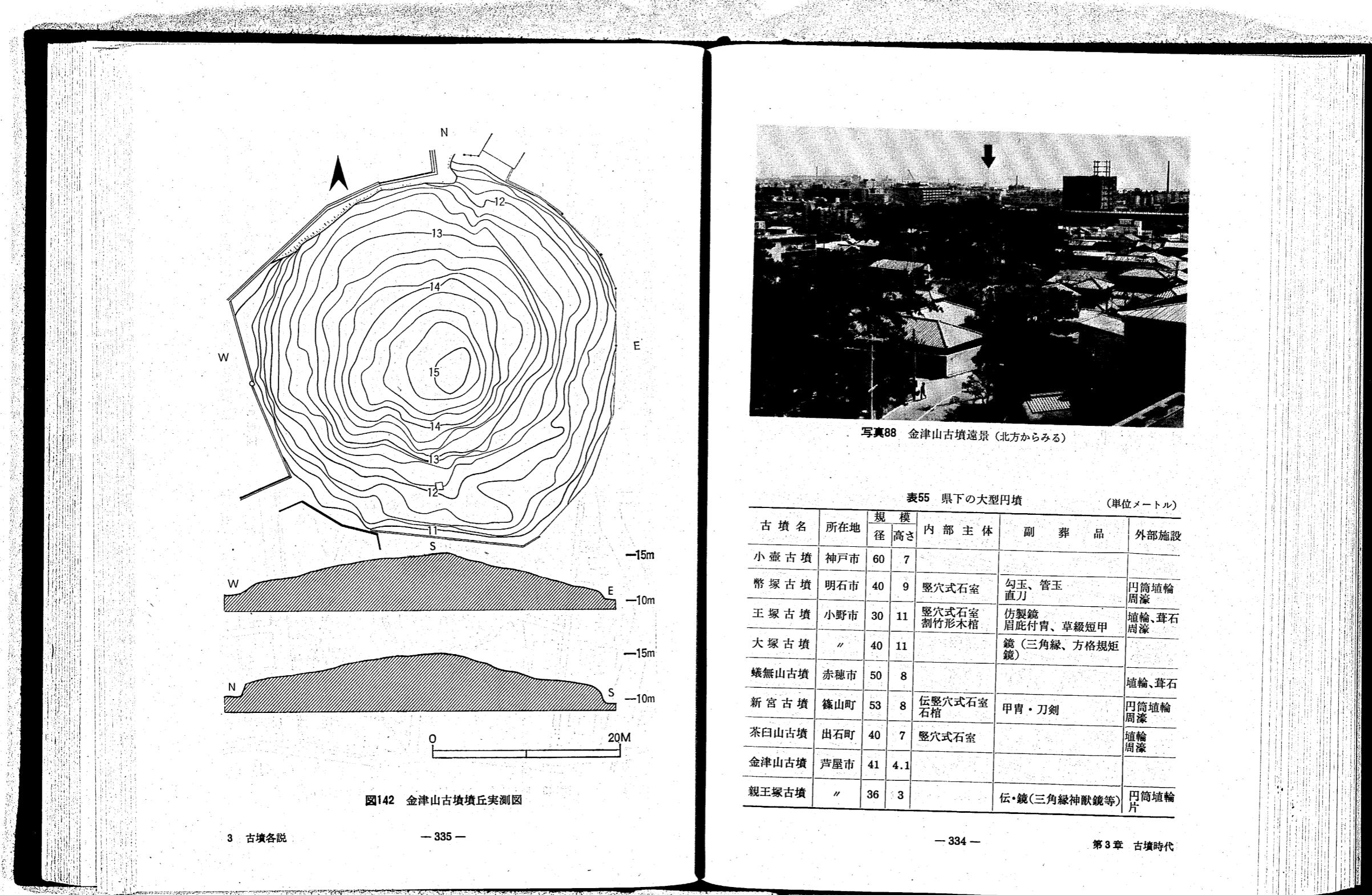


図142 金津山古墳墳丘実測図

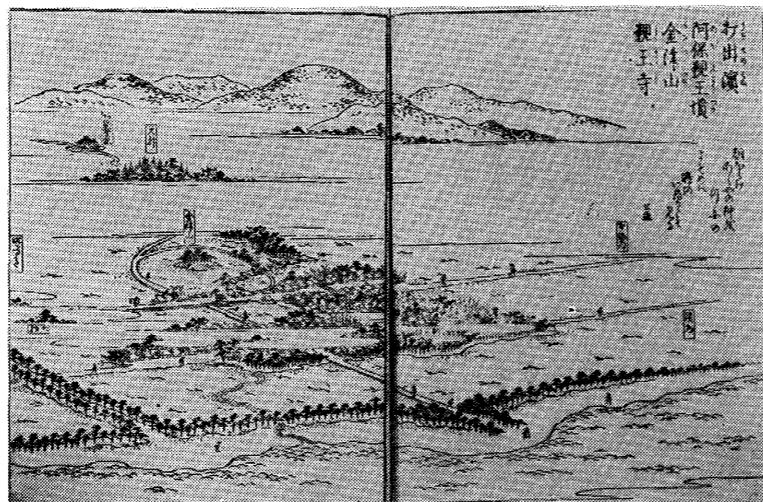


写真89 摂津名所図会に見る金津口

また「津市名所図鑑」に周濠かと思われる畦道が本古墳の周りをめぐっている図があるが、この畦道畔が周濠を描いたものとするには疑問がある。周濠について考える手がかりとしては、現状で墳丘の西南から南の一部に基底線と考える一一メートルの等高線が約一・二メートル落ちこむ溝地があるが、この等高線では、墳丘を周縁では注目に値する。墳丘全体は、非常に偏平な形をなし、これを兵庫県下の大型円墳と比較すると、⁽⁵⁾県下の底径四〇メートル以上の円墳が、底径と高さの比が五対一から六対一の割合の範囲の数値であるのに對し、本古墳は一〇対一という割合を示し、他の古墳の高さの約半分の比である。このことから、本古墳の墳丘が削平されていないものとした場合、内部構造や時期設定において、他の大型円墳とは異った内部構造を有する可能性を考えることも必要であろう。なお、本古墳より、葺石・埴輪等の遺物が検出・採集されたということは聞いて

考 察 墳丘実測の結果と現地での確認、旧地形図および周辺遺跡との関係などから、本古墳について若干の考察を加えてみたい。

本古墳の周辺には、北西約〇・六キロメートルの地に親王塚古墳がある。さらに本古墳の立地する六甲山地南麓の海岸平野には、西部に住吉の東求女塚古墳・岡本のヘボソ塚古墳⁽²⁾、東部に津門の稻荷山古墳、尼崎の水堂古墳⁽³⁾と、ほぼ等間隔に築造された前期・中期の前方後円墳が分布し、これらを一群のものとすれば、本古墳はその構成墳中の一つとして考えることができる。

本古墳の規模は、前記した数値や実測図からみても明らかなるように、兵庫県下でも大型円墳の範疇に入る規模をもつものである。⁽⁴⁾ (表55) 墳形は、明治四十四年(一九一)の陸地測量部作成の地図や昭和四十八年作成の都市基本図では、北東方向にのびる等高線があり、墳丘実測図にも僅に北東に出張る等高線が認められるが、この等高線を、前方部と考えるには、現状では無理である。

考 察 墳丘実測の結果と現地での確認、旧地形図および周辺遺跡との関係などから、本古墳について若干の考察を加えてみたい。

本古墳の周辺には、北西約〇・六キロメートルの地に親王塚古墳がある。さらに本古墳の立地する六甲山地南麓の海岸平野には、西部に住吉の東求女塚古墳・岡本のヘボソ塚古墳⁽²⁾、東部に津門の稻荷山古墳、尼崎の水堂古墳⁽³⁾と、ほぼ等間隔に築造された前期・中期の前方後円墳が分布し、これらを一群のものとすれば、本古墳はその構成墳中の一つとして考えることができる。

本古墳の規模は、前記した数値や実測図からみても明らかなるように、兵庫県下でも大型円墳の範疇に入る規模をもつものである。⁽⁴⁾ (表55) 墳形は、明治四十四年(一九一)の陸地測量部作成の地図や昭和四十八年作成の都市基本図では、北東方向にのびる等高線があり、墳丘実測図にも僅に北東に出張る等高線が認められるが、この等高線を、前方部と考えるには、現状では無理である。

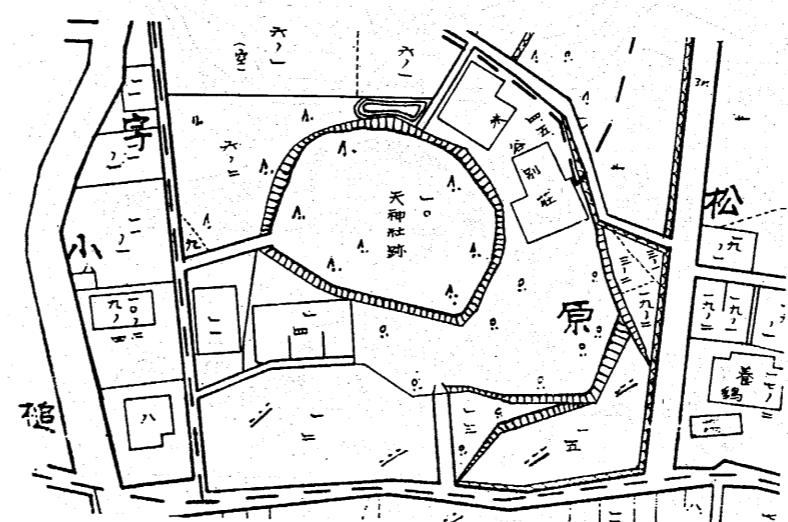


図143 昭和7年、精道村明細図に記された金津

いなし。

墳丘実測調査により、以上のような知見を得たが、これら的事柄はすでに先学諸氏が指摘している域をこえるものではない。今後内部構造の検出、封土や周辺の土層の確認による検討をおこなうとき、上述の問題を解くことができるであろう。なお、現在本古墳は、市教育委員会が所有者より委託され管理している。

- 註(1) 西谷真治「古墳と豪族」『兵庫県史』第一巻 昭和四十九年
(2) 梅原末治「兵庫県下の古式古墳」『兵庫県史跡名勝天然記念物調査報告』第二輯 大正十三年
村川行弘「古墳時代の尼崎」『尼崎市史』第一巻 昭和四十一年
(3) 村川行弘「兵庫県尼崎市水古墳」『日本考古学年報』15 昭和四十二年
(4) 兵庫県「遺跡分布地図及び地名表」昭和四十八年
(5) 註(4)に同じ

金津山古墳に関する文献・記録抄

- 『兵庫名所記』 菊屋新右衛門著 宝永七年(一七一〇)刊
卷之上
金津山 打出村に向北の岡山也。阿保親王、此岡山に於て、金瓦一万、黄金一千枚を埋せ、此里人飢渴におよぶ時はをほり取てやしなふべしと也。よつて金津の号ありと、俗伝に云、三十一字を以て是を伝ふ。
朝日サス入日輝クコノ下ニ金千枚瓦万枚ト云々。

- 『摂津名所図会』 秋里籬鳥著、竹原春朝斎画 寛政八年(一七九六)刊
菟原郡
金津丘 打出村の西端に、一堆の家丘あり。これをいふ。土人

口称に云く、むかし阿保親王此地に殿舎ありし時、黄金千枚、金瓦万枚を此家の中に藏め置きて、此里人飢渴に及ぶ時、これを掘り出して、五穀に交易て飢を凌ぐべしとなり。此所の牧童今に歌謡ふ。其言に云く。
朝日さす入日かゞやく此下にこがね千枚・瓦万枚
按するに親王の御領にして別荘も此地にありしが、此辺の字に御所内・堂の上といふ所あり。此親王は在原の行平・業平の御父なり。

- 『播磨名所巡覧図絵』 村上石田著、中井藍江画 文化元年(一八〇四)刊
卷第一
金津山 打出村に向ふ所の岡山也。阿保親王此岡山において金の瓦一万、黄金一千枚を埋ませ、此里飢渴に及ばん時、是を掘取てやしなふべしと也。よつて金津の号あり。俗伝に三十一字を以て是を伝ふ。
朝日サス入日輝コノ下ニ金千枚瓦万枚云々。

- 『西摂大觀』 仲彦三郎 明治四十四年(一九一二)刊
打出村電車停留場より北へ行くこと数十歩にして右手に一円丘あり、土人之を黄金塚といふ。親王御陵に参拝する通路の側

なり、御陵を距ること數町に過ぎず。是れ亦上古の墳墓なるべし。土人いふ昔阿保親王の御殿ありし處にて、黄金千枚金瓦一枚を此墳の中に藏め置き、一たび里人飢餓に遇はゞこれを掘出して五穀に交換し飢を凌ぐべしと論されたまへりと此里的童謡に朝日さす入日かゞやく此下にこがね千枚瓦万枚此地方は親王の御領内なるを以て別荘を建てられしことも事実ならん。此地の字に御所内堂ノ上といふ所今に残れり。

- 『武庫郡誌』 武庫郡教育会編纂 大正十年(一九二一)刊
精道村 名所旧跡
金津丘 俗に黄金塚と称す。打出電車停留場より北へ行くことを數十步にして、右方に一円丘あるもの即ち之なり。
阿保親王御陵道の附近にて、御陵を距ること數町に過ぎず。是亦上古の墳塋なるべし。伝へ云う。昔阿保親王の御殿の在りし所にて、黄金千枚・瓦万枚を此墳の中に納め置かれ、里人飢餓に遭はば、之を掘出して五穀に代へ飢を凌ぐ可しと論させ給へりと。此里的童謡に、
朝日さす入日かゞやく此下にこがね千枚瓦万枚。
此地元親王の御料内なるを以て、別荘を構へられたるも事実なるべし。其字に御所内・堂の上の名存せり。

(口) 阿保親王塚古墳

所在地 芦屋市翠ヶ丘町三三番地

現状 古墳は、国鉄東海道線と阪急神戸線の間の住宅地にあり、周囲の開発によって、墳丘部とその周辺にのみ僅かに旧地形をとどめている。なお、古墳は「阿保親王墓」として宮内庁書陵部によつて管理されている。

位置と外形 古墳の地形的な位置は、宮川と並行して南へのびる翠ヶ丘台地の標高二八メートルにある。^① 本古墳からは、六甲南麓の保久良・会下山・城山等の弥生時代の高地性遺跡はもとより、西は住吉から東は武庫川下流域までの平野部全体を望むことができる。前述の金津山古墳は、南東約〇・六キロメートルにある。その彼方には茅渟海が広がっている。

本古墳の外形は、宮内庁書陵部の実測図によると、周囲三五六メートルの「丁」型を呈する区画内に、径約三六メートル・高さ約三・〇メートルの円墳で、墳丘を囲繞す



写真90 阿保親王塚古墳遠景 (南方からみる)

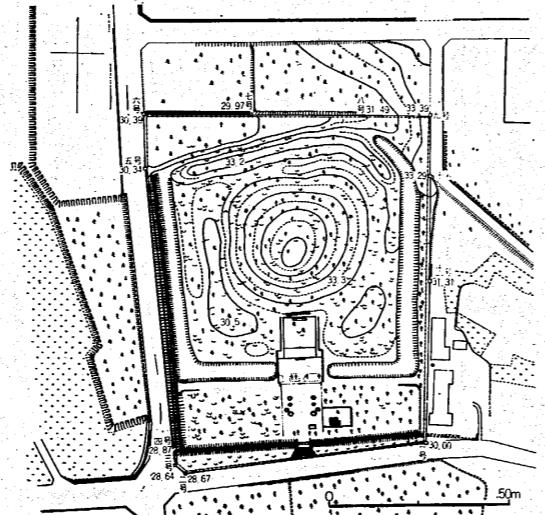


図145 阿保親王塚古墳実測図
(宮内庁書陵部提供)

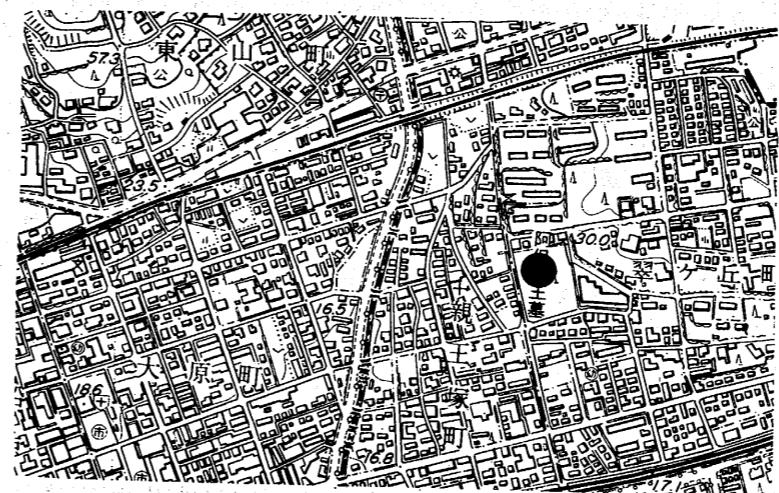


図144 阿保親王塚古墳位置図

る周濠を認める事ができる。しかし、本古墳は、「毛利家文書」等によつてもわかるように江戸時代に大修築が行なわれているため、墳丘及び陵墓域がどれだけ旧状をとどめているかは疑問であつて、このような事情のもとに現在の墳形・周濠等についての断定をさけるべきであるが、現地の観察で得た所見を記しておきたい。

古墳の封土の南半分は崩壊しており、全体として偏平な墳丘をもつ円墳である。周濠は、実測図に示される外側の「L」型濠は論外としても、かすかな窪地となつて墳丘を囲繞しているように見える内側の周濠も、必ずしもドーナツ状をしていない。むしろ、四隅が出張つて外側の「L」型濠を掘つた際の除土によつて方形状の土手ができ、一見方形の周濠が墳丘をめぐつてゐるかの状態となつたと考えられ、外形表面観察では本古墳の周濠について、それを示す具体的なものは認められなかつた。

なお、山口県文書館所蔵の毛利家文書「阿保親王御廟詮議」に元禄十年（一六九七）当時の親王塚の状況を示す「有来りの図」と「御修理の図」が収載されており、墳

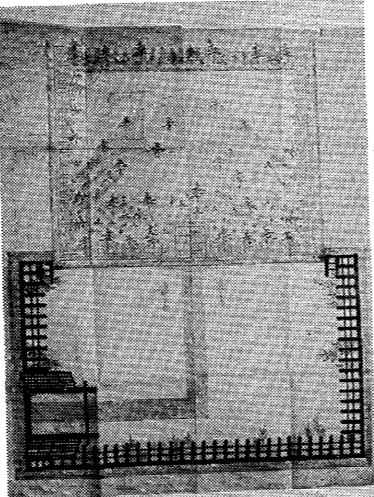


写真92 「阿保親王御廟詮議」修理後の図
(山口県文書館提供)

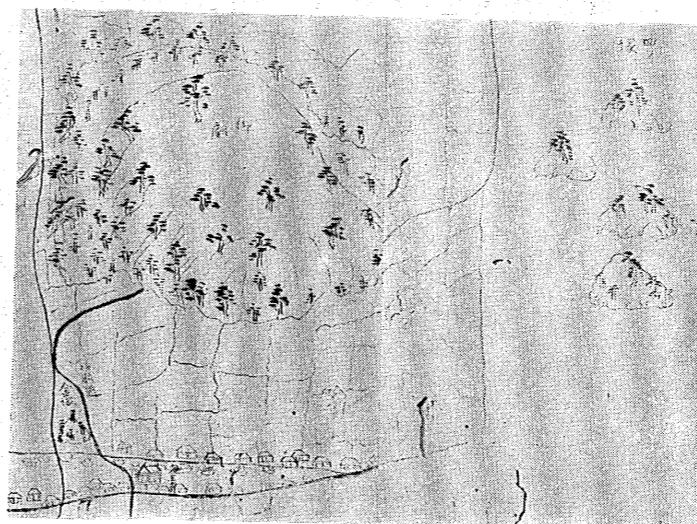


写真91 「阿保親王御廟詮議」有来之図
(山口県文書館提供)

出土遺物 阿保親王塚古墳が古墳であるかどうかの決定的な裏付け資料は、出土遺物と棺槨の構造である。しかし、この点についての明瞭な記録は残されていない。とくに棺槨についての記事は皆無の状況である。

出土遺物についても親王寺の『寺伝』に「約二百年前、古墳の環溝修理に際して石帶・古鏡・銅鐸が発見された」という伝承から考察がすすめられており、遺物発見時期の推定についての異論も『寺伝』をよりどころとしている。⁽¹⁾

出土したという遺物の調査に関しても、遺物の点数に若干の相異がある。⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾とくに鏡について、十面・七面・四面・三面などまちまちの記述であり、親王寺所蔵鏡についての疑問も出されている。⁽⁵⁾

そこで山口県文書館所蔵の毛利家文書「阿保親王御廟

註(1) 周辺には、享保頃に六基・幕末には四基の古墳が存在していたことが『撰津志』・『毛利家文書』等から知ることができる。

紅野芳雄の『考古小録』・吉岡昭の『撰津国芦屋郷土石器時代文化研究』にも数基の古墳の遺存が記録されている。

(2) 村川行弘・石野博信『会下山遺跡』芦屋市文化財調

「詮議」によって從來の諸説に關して整理をしておきた
い。

まづ銅鐸は親王寺に所蔵されているものが図示され
て、「堂ノ上ト云処ヨリ掘出ス宝永年間之事ナリ」と説明され、
親王塚出土ではなく、現在の楠町出土とすることがわ
かる。(原図では宝永三年出土と記されている。)

石帶については、「風色ニシテモクメ有之國ノ如キ玉ツイ
ハ水浅黄ナリ 其數五ツ 御廟ノ傍ニ小家四ツ有之其中ヨリ掘
出之宝永年間ノ事ナリ」とあって、親王塚の東方の「四ツ
塚」より出土したことが絵入りで記されている。これも
親王塚出土ではないわけである。

鏡については、「古鏡七面、但シ三面者形存シ残リハ碎ケ

候 博古圖ヲ以相考候ニ二面ハ漢ノ世ノ古鏡一似寄一面ハ唐胡
ノ古鏡ニ都合同シ様ニ相見候」とし、宝永年中の出土とのみ
記している。したがつて、文政年間の長州藩の調査の際
には七面の古鏡だけが親王塚近傍から出土したとされて
いた可能性がある。

現存するものは、つぎのようになろう。

- (1) 陳孝然作魚帶文四神二獸博山爐鏡(毛利家文書に図あり)
- (2) 三角縁波文帶三神三獸博山爐鏡
- (3) 内行花文鏡(毛利家文書に図あり)
- (4) 三角縁神獸鏡破片一面分
- (5) 三角縁神獸鏡破片一面分

『胎濤閣帖』の陳孝然作竟の拓影の傍書に「摂津菟原

郡打出村墾土所得鏡十枚之内」とあるのに注目すると、出
土時には十枚の鏡が存在したことと考えられる。行方不明は、
破片二面分と他に三面ということにならうか。一応、調査された五面の鏡からは、前期古墳と認定するこ
とができるよう。阿保親王とは無関係であることは「うま
でもない。むしろ、阿保親王は、四ツ塚出土の石帶と近
い関係にあると推定される。」

- なあ、昭和五十年八月、本市の金石文の調査中、阿保
親王塚古墳敷地内から、円筒埴輪の破片を採集した。

註(1) 梅原末治「銅鐸の研究」(昭和二年)六九頁に

親王寺銅鐸の発見の年時は寺伝上述の如く約二百年
と云ふが、吉井氏は其の「摂津國武庫郡津門村の古墳
と銅鐸」に今より八十年前とし、喜田博士はまた元
禄年間の出土と報せられた。この喜田博士の説は上記
の寺伝を逆算せられたものかとも思うが、吉井氏のそ
れは相違が著しく、更に年時のみならず出土地及び其
の埋没状態に就いても上記寺伝の外何等の徵証がない
から、今それを確かむることが出来ない

とある。

(2) 『武庫郡誌』には、親王寺の宝物を記し、その中で、
「古鏡二面・銅鐸一箇・石帶五枚」と記し、
右三点は二三百年前、阿保親王廟より掘出でたるもの
なり。但し古鏡は、先年田中光頭伯持ち帰り今に返還
せずとぞ

と載せてくる。
(3) 『神戸市史』別録一 神戸市役所 大正十一年の四八
頁に、「阿保親王墓」として
當て此の塚より古鏡十面を出したる事あり。其の中
に「陳孝然作竟」の銘文ある三角縁の神獸鏡あり。附
近の親王寺亦四面を藏す。共に所謂漢式鏡にして蓋し
支那魏晉時代のものと推定せらる
と記述している。

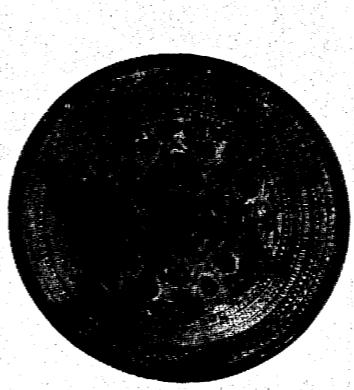


写真94 陳孝然作三角縁神獸鏡



写真93 「阿保親王御廟詮議」鏡鑑図
(山口県文書館提供)

(4)

梅原末治『銅鐸の研究』(昭和二年) 六九頁に
阿保親王墓発見の古鏡と伝ふるもの現在親王寺に三
面分あり、住吉村の吉田履一郎氏また一面を蔵し、石
帶は寺に保存している。就いて見る前者は孰れも魏
晋代と認むべき神獸鏡の類で該古墳の副葬品たり得る
も、銅鐸とは到底同時のものとなし難く、上記吉田履一
郎氏所藏の「深澤閣帖」に依るに菟原阿保親王墓出土
の鏡は十面であつて、石帶また同時の發見品として其
の図を載せているが、一言の銅鐸に及ぶものがない。
されば両者は寧ろ年時を異にし別々の發見と解するの
が穩當であらうか

と述べてゐる。

(5) 梅原末治『摂津武庫郡に於ける二三の古式墳墓』
『考古学雑誌』十三の二 大正十一年に打出村阿保
親王の墓をとりあげ、その遺物について次のように

記してゐる。

以上三面分の外親王寺には同じ親王塚の出土鏡とし
て径五寸四分の内行花紋鏡一面も藏せり。此のもの大
正七年辰馬君の吾人に寄せられし拓本に既に存せるを
以て、何等疑を挿む処なく、三月六日調査の際も手拓
精査せしが、當時同行の吉井君は氏が最初親王寺の遺
物を実見せし際は此の鏡なく、別に(一)・(二)と同一型式
の神獸鏡をば一面存せしを確に記憶せり。然るに今まで
の神獸鏡をば一面存せしを確に記憶せり。然るに今まで

彼の見ゆるなく新に此の内行花紋鏡の存するは其の間
何等かの事情あるにあらざるかと注意せられたり。依
りて再考するに内行花紋鏡は鉛黒色にして稍々前と
色沢及び出土状態を異にせるやにも見ゆ。従つて今ま
本古墳の出土品として之を取らず。数年前まで今ま一
面三角縁神獸鏡のありしを推定し置く可し

第3章 古墳時代

阿保親王塚古墳に関する文献・記録抄

『摂陽群談』岡田溪志撰 元禄十四年(一七〇一)刊

卷第九
陵の部

阿保親王廟 矢田部郡打出村親王寺にあり。仁和三年、在原行
平朝臣須磨に配流の時、此廟を遷たるの所伝たり。寺記其部に
然り。

『日本輿地通志』『摂津志』関祖衡纂緝、並河永等
校 享保十九年(一七三四)刊

菟原郡 陵墓

阿保親王墓 在打出村、四畔有冢六、傍有寺、号曰阿保山親王
寺……

内省諸陵寮にて管理し弁部を置かれたり。

八年(一七九六)刊

卷七 菴原郡

阿保親王古墳 打出村上方二町許にあり。側に小冢六つあり。

抑此親王は、平城天皇第三の皇子、御母は葛井氏なり。……

卷第一

阿保親王御廟 尹右打出の上手にあり。……

『西摂大觀』仲彦三郎 明治四十四年(一九一)刊

墳墓

阿保親王御陵 打出村の電車停留場より下車し正北に向ひ少し
く歩すれば、田圃の間に樹木鬱蒼たる森あり、是れ間はずして
阿保親王の御陵たるを知るなり。……御陵の一方に小溝を割せ
る痕跡あり、往昔此處を発掘せしに古鏡・銅鐸・刀劍出べしと
て今尚同村の親王寺に保管す。……所伝に依れば、昔時承和十
一年の頃より阿保山親王寺に於て保管せられたりと、現今は宮

(八) 打出周辺の古墳

金津山古墳の立地する打出周辺には、うの塚・笄塚・

鞍塚・牛廻し塚・大藪小藪塚・元塚・宮塚の名称で古墳として伝承されているものがある。これらはすでに旧状を失っているものが多いので墳形・規模・内部構造・出土遺物等の確認は困難となっている。また記録や伝承にも問題があり、古墳でないものを含んでいる疑いもある。そこでここでは、これらの古墳と伝えられたものの現状を記すにとどめ、参考として各古墳について地元の識者の記録である『打出史話』から該当記述を引用しておきたい。

『打出史話』は、打出の人、天王寺谷勘太夫が、自らの郷土の歴史を、多くの史料を拠り所として詳細に記録されたもので、前編総説・後編各説に分け、総説には打出の起源・地名の由来・地形の変遷・軍事上よりみたる打出、住民の変遷・交通の変遷・産業の変遷・所管並に



写真95 鞍塚の跡



写真96 笄塚石碑

行政上の沿革・教育の変遷・宗教の変遷・人情風俗をのべ、各説としては、陵墓・神社・仏閣・人物・名所旧蹟・戦史・史的要項・郷土資料・講社・特殊産業・俚謡を記している。昭和十五年印刷に付し頒布された。

a うの塚（図141—1）

所在地 茅屋市楠町一六の五 民有地

現状 三田谷治療教育院内のグランドになつており、

古墳の痕跡をとどめるものは何もない。教育院は、西側の市道より三・四メートルの高所にあり、地形的には、翠ヶ丘台地の東斜面に位置する。

『打出史話』によると、「字笄塚町三番地、三田谷治療教育院内にある丘墳で、由緒詳らかでない。元は円墳で頂上には数株の松樹があつたが、院舎増築のため一部を切取られ、今は院児の運動場となつてゐる」とある。

b 笄 塚（図141—2）

所在地 茅屋市楠町一六の一八 民有地

現状 国鉄茅屋駅から東へ約四〇〇メートルの小林董治郎邸の庭園西隅にある。東西一二メートル・南北約二〇メートル・高さ二メートルの不整形な盛り土で、封土

の北よりに、高さ五〇センチメートルの花崗岩自然石に「笄塚」と刻した石碑がある。(写真96) 封土上には直径三〇×四〇センチメートルの松が植えられている。小林氏の話によると、塚であるということで邸宅建築後今まで封土には手を加えていないとのことである。小林邸は、東側の市道より三・四メートル高くなっている所にある、うの塚の西側にあたる。地形的には、翠ヶ丘台地の東斜面に位置する。

『打出史話』によると、「字笄塚二五番地にある。阿保親王御調度の笄を埋めたといふ伝説がある。元、うの塚とともに親王寺の所有であったが、耕地整理の結果、私人の所有となつた。東西七・八間、南北十四・五間の精円形の塚で、今は小林董治郎庭園の一部となつて居る」とある。

e 鞍 塚 (図141—6)

所在地 芦屋市打出小槌町三九 民有地
現状 円形の塚で、今は小林董治郎庭園の一部となつて居る

d 牛廻し塚 (図141—5)

所在地 芦屋市楠町四七 民有地
現状 国鉄東海道線打出踏切の南東の角地で、駐車場。阿保親王塚古墳と金津山古墳の中間にあり、地形的には、翠ヶ丘台地の西斜面に位置する。

『打出史話』によると、「字山ノ神八番地にある。墳上數株の松樹を生じ、中に一小石祠がある」とある。

e 大藪小藪塚 (図141—3)

所在地 芦屋市南宮町一 民有地
現状 阪神電車の軌道敷となり、周囲も旧地形をとどめておらず、古墳の所在していた地点すら現状では確認できない。地形的には、宮塚とともに海岸低地部に位置している。

『打出史話』によると、「明治時代迄、字東口十五番地と同六十八番地との間に、大藪小藪と称する女竹の密生した、由緒不明の小さな塚が在つた。古来打出の名所と伝へられていたが、阪神電車の軌道敷にかかつて取毀された」とある。

f 元 塚 (図141—4)

所在地 芦屋市打出春日町九九 民有地
現状 金津山古墳の西約二〇〇メートル、神戸製鋼所芦屋研修所の敷地となつてゐる。敷地内に石塔が一基あり、元塚の跡とされているが古墳の痕跡は何一つ残していない。(写真97) 地形的には、六甲山地からのびる翠



写真97 元塚 石塔

トルの三角形の土地で、不動尊を祀った小祠が建ち、一部は畠地となつてゐる。土地は削平されて、古墳の痕跡をとどめるものはない。地形的には、翠ヶ丘台地の西端部に位置する。

『打出史話』によると、「字小槌二十番地にある三十坪の平地で、古墳らしい痕跡を止めていない。古来阿保親王の馬の鞍を埋めたといふ伝説がある。域内に宝形造りの小堂があつて不動尊を祀り、其の傍に多数の石仏五輪等が並んでゐる」とある。

ケ丘台地が、国道一号線付近で二つに分れる東側の台地の突端部、標高一〇メートルに位置する。

なお、元塚については、『打出史話』に何等記述はない。

g 宮 塚(図2-7)

所在地 芦屋市宮塚町五六 民有地

現状 宮川が西国街道と交叉するところに架っている西国橋の西南角地にあるが、宅地となって旧態をとどめている。地形的には、宮川西岸の海岸低地部に位置する。

『打出史話』によると、「先年迄、宮川西畔旧西国街道の南、字宮塚十四番地の田圃の中に、宮塚と称する由緒不明の塚があった。塚上に一本の梅の樹がえた了一堆の円墳であったが、耕地整理のために取壊され、今は只、字名となつて遺つてある」とある。

会が発掘したのと同種類の竈形土器が出土している。⁽²⁾

三条涼塚には、昭和四十二年の「芦屋市埋蔵文化財包装地台帳」⁽³⁾によると、23・24と記載されている古墳がある。これは、いずれも玄室がほぼ完存する横穴式石室であるが、今日ではその所在を確認することはできなくなつてゐる。

註(1) 村川行弘『芦屋廃寺址』芦屋市文化財調査報告第七集 昭和四十五年

(2) 第3章4参照

(3) 芦屋市文化財調査報告第五集 昭和四十二年

(ホ) 翠ヶ丘古墳群

六甲山地山麓台地のうち、六麓荘台地・岩ヶ平台地の前面にあり、阪急電車線から阪神電車線にいたる間に広がるもつとも南に突出した台地上に分布する古墳群である。

標高三〇メートルの台地上に位置する阿保親王塚古墳を中心とし、明治の末頃発掘調査された駒塚古墳(馬塚)や古くは『阿保親王御廟詮議』収載の絵図や『打出史



図146 1.駒塚 2.四ツ塚位置図

話」などに、四ツ塚と称する四基の古墳が記録されており、『摂津志』には、「阿保親王墓付近に荒墳六」という記載がある。また、先に紹介した打出周辺の古墳のうちのいくつかも、本古墳群の構成墳であったと考えられる。

つぎに、四ツ塚・駒塚の現状について記し、参考として『打出史話』の記述を引用しておきたい。

註(1) 村上欣三『摂津國打出村の古墳』『考古界』五一
— 明治四十三年

(二) 三条古墳群

所在地 六甲山地山麓台地のうち、宮川より西、芦屋川の両岸に扇状に広がる芦屋台地のもつとも幅のせまい三条・山芦屋町部分に分布する古墳群である。

現状 本古墳群では、現在古墳として遺存しているものはないが、『武庫郡誌』にはシヅメ塚(涼塚)・窟塚とよばれた古墳や三条村山本伊右エ門所有の竹林に一基の古墳があつたと記されている。また、『西摂大観』によると、明治四十一年(一九〇八)、法恩寺址(芦屋庵寺址・山芦屋西ノ坊)において、整地の際に石棺の蓋が出土したとある。なお、法恩寺址は、昭和四十三年に発掘調査が行なわれ、弥生時代・古墳時代から鎌倉・室町時代に至る遺物が発掘され、建物が焼失倒壊した痕跡の一部が検出されている⁽¹⁾。

さらに、三条寺ノ内において、昭和三年十一月、二基の古墳が長町彰によって報告され、城山南麓より西宮史談

a 四ツ塚(図146-2)
所在地 芦屋市翠ヶ丘町一三七一八 民有地
現状 阿保親王塚古墳の北東約一〇〇メートル付近で
あるが、一帯は住宅地となつており、旧態をとどめてい
ない。地形的には、親王塚古墳が台地の西斜面に立地し
ているのに対し、稜線上に位置する。

『打出史話』によると、明治の中頃まで、字広野一番
地(寺田邸内)・字花園十四番地(寺田邸前自動車庫の南側)
・字花園無番地(元金原持地で寺田自動車庫前の十字路を東
へ約二十間位道路敷の中央)・字花園三番地(藤沢邸北側)の
四箇所に、それぞれ大なる自然石で葺んだ石室を有する
一堆の古墳があつた。元親王寺の所属であったが、故あ
つて個人の有に帰し、漸次取毀されて道路又は宅地とな
つた」とある。

b 駒塚(馬塚)(図146-1)
所在地 芦屋市翠ヶ丘町二〇 公有地

現状 明治四十年代に遺物を検出した駒塚⁽¹⁾の位置して
いた坊主山は、翠ヶ丘台地の北端にあたる。坊主山付近
は、北側を阪急神戸線によつて切断され、南側は翠ヶ丘
北住宅地となつて削平されている。わずかに、阪急神戸
線と住宅との間に一〇メートル程の幅で帶状に旧地形が
残つてゐるが、古墳の痕跡はない。

註(1) 村上欣三「摂津国打出村の古墳」「考古界」八一二
明治四十三年 第3章4項参照



図147 吉岡昭「摂津国芦屋郷土石器時代
文化研究」収載城山南麓古墳分布図

(ヘ) 城山南麓古墳群
六甲山地山麓台地にある芦屋台地の芦屋川と高座川に
画された部分で、城山(鷹尾山)南斜面に分布する古墳群
である。

『武庫郡誌』に鳥塚・コンコン塚・涼塚とよばれる古
墳の所在を記録し、竈形土器を出土して広く学界に紹介
されている古墳や、昭和三十六年に京都大学によつて発
掘調査された旭塚古墳がある。吉岡昭の踏査によれば、

高座橋の周辺を中心グループ、これより高い城山南麓と現
旭化成寮を中心とするグループの三グループに、それぞ
れ一七基・一一基・三三基の合せて六一基が記録されて
おり、紅野芳雄は五基を記録している。

鳥塚・コンコン塚・涼塚については、その所在地すら
今は判然としないが、旭塚古墳については、発掘調査の
概要が『新修芦屋市史』本篇に収載されている。

註(1) 清家植直「釜及竈形土器の新発見」「考古学雑誌」九

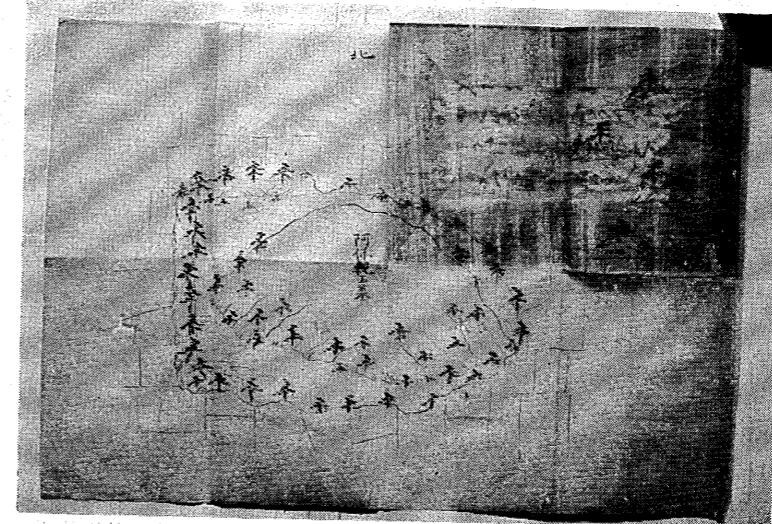


写真98 四ツ塚「兵庫阿保親王御廟所図」
(山口県文書館提供)

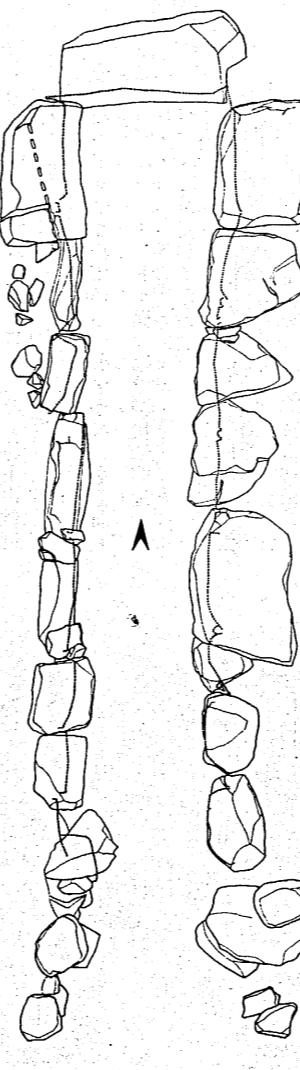


図148 旭塚古墳位置図

(1) 一八 一九一九年 第3章 4項参照
 (2) 別篇 参考文献参照
 (3) 紅野芳雄『考古小録』 昭和十五年

所在地 旭塚古墳

現状 発掘調査によつて明らかにされた本墳の現状は以下のとおりである。石室はゆるやかな傾斜地に直接石を据えて構築されたもので、奥壁だけが地山を少し掘りくぼめて据えられている。石室の平面は、ほぼ南北向きの



(凡例)……線は、石室基底線を示す。
図149 旭塚古墳石室実測図
(京都大学原図)

第3章 古墳時代

註(1) 『新修芦屋市史』 本篇第二章一七八頁

入口をもつ両袖式で、全長一一メートル、玄室の長さ四メートル、巾一・八メートル、羨道の巾が一・六メートルで、袖がわずかに認められる程度である。ほぼ同じ巾で羨道の入口まで続いており、床面は入口に向つてわずかに下降している。現存の高さは、奥壁が一・六メートル、東西両壁が二・二メートルある。石はこの地方に多い花崗岩であり、大部分が大きな石で、なかには長さ二メートル、巾一・五メートルに及ぶものも使われている。このような巨石を用いて構築された石室は、この付近ではめずらしい。玄室には、粘土まじりの土でつくられた固い床面が認められる。

石室入口の両側で葺石がある。裾の部分には、普通にみられるよりは大きな石が使用されている。裾の線が直線であることから判断して、この古墳はもともと方墳であつたかも知れない。

出土遺物 残存していた遺物は、須恵器の高杯三個・蓋二個・破片若干と鉄鎌一本であった。

写真99. (上)旭塚古墳石室発掘前 (下)発掘後

(ト) 笠ヶ塚群集墳

六甲山地山麓台地で宮川と芦屋川にはさまれた部分の芦屋台地に分布する群集墳である。

現在、芦屋神社境内に遺存する古墳を唯一のものとするが、吉岡昭によると⁽¹⁾二〇余基の古墳の分布が、また紀野芳雄は七基を記録している。

註(1) 別篇 参考文献参照

(2) 紅野芳雄『考古小録』 昭和十五年 西宮史談会

芦屋神社境内古墳

所在地 芦屋市東芦屋町二六 民有地

現状 古墳は、芦屋台地の標高八二メートル、阪急電車芦屋川駅の東北五〇〇メートルの芦屋天神社（昭和二十一年、芦屋神社と改称）の境内西隅にある。

芦屋神社は、祭神「天穗日命」以下一六神を合祀している。本古墳は、一七神のうち弥都波能売神（もと弁天

岩に祭祀）を祀る水神社となつてている。

古墳の遺存状態は良好である。墳丘は南部分が参道のために削られている以外は完全で、高さ約三・五メートル、径約一八メートルを測る。

石室は、右片袖の横穴式石室で、天井石四枚が遺存し、羨道部が開口している。玄室内は、弥都波能売神を祀る祭壇となつていてる。

左右の側壁は完存しているが、右側壁のみ羨門近くで内側にせり出している。これは築造後土圧によって生じた変形か、水神社として石室を用いるようになつたときの変形かは不明である。現在玄室内は祭壇となつていてるため入ることができない。

『芦屋市史』本篇収載の実測図によると、全長七・五メートル、玄室の長さ三・七メートル、高さ二メートル・羨道巾一・五メートル、高さ一・四メートルを測る。

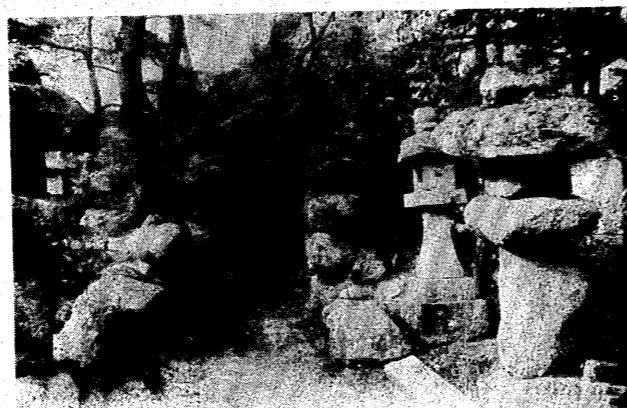


写真100 芦屋神社境内古墳

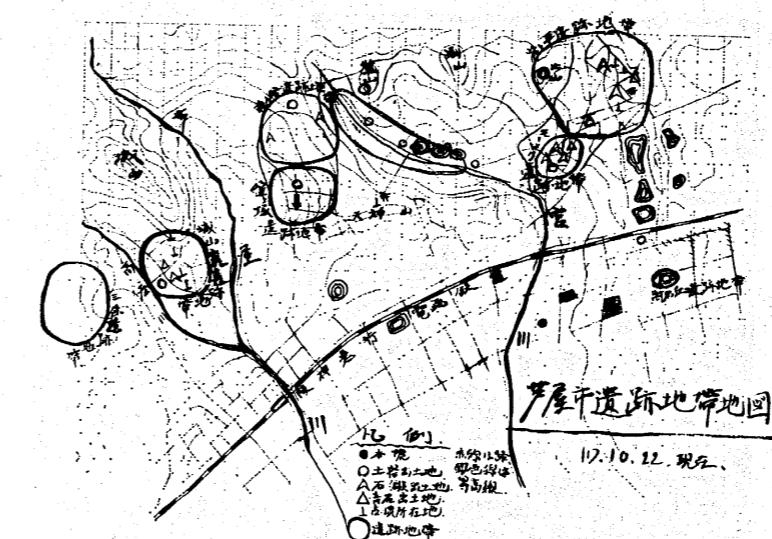
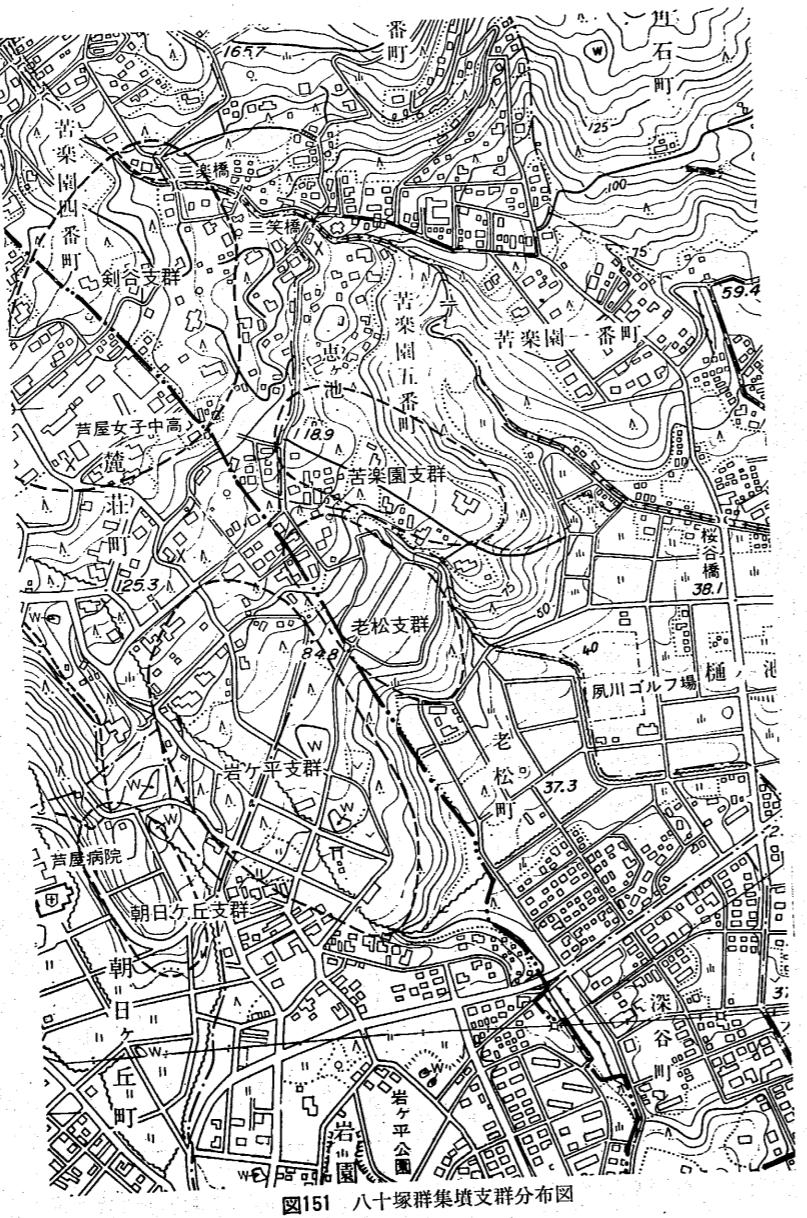


図150 吉岡昭「摂津国芦屋郷土石器時代文化研究」収載笠ヶ塚古墳分布図



3 古墳各説

- 361 -

(チ) 八十塚群集墳

本群集墳は、行政的には芦屋市六麓荘町・岩園町・朝日ヶ丘町、西宮市老松町・苦楽園五番町の一部を含む地域にまたがり、地形的には、六甲山地山麓台地の苦楽園台地・六麓荘台地・岩ヶ平台地の標高八〇メートルから一五〇メートルの高度範囲内に位置する。

従来、八十塚群集墳といふ呼称は、「摂津志」の記録をうけて「岩平(岩ヶ平)山中」にある古墳といふ意味に理解せられ、岩ヶ平天神社を中心に分布する古墳を呼ぶ名稱として用いられてきたが、本稿では、前記した地域に分布する古墳を包括したものと指す呼称として、広義に考えていいきたい。このことは、すでに「六甲南麓群集墳測量調査団」によつて提唱されてゐる。

古墳時代の研究、特に後期群集墳に対する研究の動向は、個々の古墳はもとより、群全体としての考察が要求され、文化財保存運動においても、それを指向してい

る。西摂地域において有数の群集墳をもつ本市では、前記の動向に応える研究は、まだその緒についたばかりである。このような状況のなかで、昭和四十七年、芦ノ芽成された「六甲南麓群集墳測量調査団」による広義の八十塚群集墳に対する総合調査は、大きな意義をもつものである。

昭和三十四年の八十塚A・B・C号墳の発掘調査以来、市の西北部・山麓台地の古墳調査によつて、本古墳群を構成する古墳の数・分布の実態が解明されつつある。岩ヶ平・朝日ヶ丘・苦楽園・六麓荘の各地域に遺存する古墳の一部については、発掘調査が実施され、調査記録(報告書)が刊行されている。

これら調査の成果を参考にしつつ、本群集墳の構成についてみておきたい。

る。そして、各古墳はその分布の状態や立地によつて朝日ヶ丘支群・岩ヶ平支群⁽²⁾・劍谷支群・老松町支群・苦楽

104

第3章 古墳時代

園五番町支群の五つの支群にグルーピングすることができる。これら各支群に遺存する古墳は、朝日ヶ丘支群二基・岩ヶ平支群一四基・劍谷支群二基・老松町支群二基

・苦楽園五番町支群七基である。これらのうちには調査後破壊され消滅したものもある。また、諸記録や聞き取りによると、これらの地域にはかつてかなりの古墳があったことがわかる。

つぎに、各支群ごとに調査された古墳についてその記録を抄述し、次項でこれらの成果を参照しつつ、本群集墳の特色についてまとめておきたい。

調査記録の抄述に使用した報告書を表にまとめて掲示する(表56)。なお抄述にあたって、使用されている語句(用語)や表現は原文のままとした。

- 註(1) 「八十塚14号墳の測量調査」六甲南麓群集墳測量調査団 一九七二
 (2) 狹義の八十塚群集墳
 (3) 八十塚12、13、14、15号の各古墳については六甲南麓群集墳測量調査団より原図資料の提供をうけた。

表56 調査記録及び報告書一覧

古 墳 名	調査 担 当 者	調査年月日	報 告 書	報 告 者	発行年
1 朝日ヶ丘1、2号墳	村川行弘	1964. 7. 21	芦屋市文化財調査報告第4集	村川行弘	1966
2 八十塚A・B・C号墳	"	1959. 4. 11	"	"	"
3 " E号墳	"	1965. 11. 3	" 第5集	藤岡弘	1967
4 12号墳	六甲南麓群集墳測量調査団	1974. 5. 4	未報告	六甲南麓群集墳調査団	1973
5 " 13号墳	"	1972. 10. 28	八十塚13号墳の測量調査概要	八甲南麓群集墳調査団	1973
6 " 14号墳	"	1972. 8. 5	" 14 "	"	1972
7 " 15号墳	"	1973. 7. 13	八十塚15号墳発掘調査報告	"	1973
8 劍谷 1号墳	村川行弘	1959. 6. 24	芦屋市文化財調査報告第4集	村川行弘	1966
9 苦楽園 1、2号墳	武藤誠・村川行弘	1965. 7. 27	西宮市文化財資料第3号	"	"
10 苦楽園 5、7、8号墳	武藤誠	1974. 3. 21	苦楽園5号墳発掘調査終了報告	西宮市教育委員会	1974
11 旭塚 古墳	京都大学考古学教室	1961	概要報告	京都大学考古学教室	1968



図152 朝日ヶ丘支群位置図

- 363 -

内部構造

調査によって明らかにされた主体部構造は左のとおりである。

1号墳 古墳の主体構造は、主軸をN $12^{\circ}W$ の方向に向

た。古墳は、いづれも封土は流失し天井石が失なわれ、側壁の石列(第一段目)が露出していた。1号墳は、左右の側壁がほぼ遺存し、奥壁は失なわれており、2号墳は左

群・西には城山古墳群・三条古墳群が遺存している。八十塚古墳群とは谷を隔てて隣接している。

古墳は、いづれも封土は流失し天井石が失なわれ、側壁の石列(第一段目)が露出していた。1号墳は、左右の側壁がほぼ遺存し、奥壁は失なわれており、2号墳は左

群・西には城山古墳群・三条古墳群が遺存している。八十塚古墳群とは谷を隔てて隣接している。

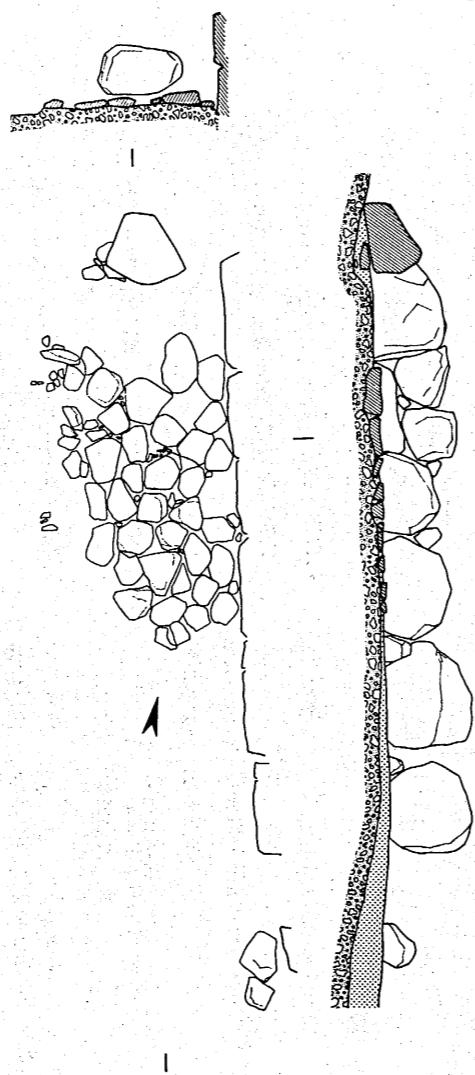


図154 朝日ヶ丘2号墳石室実測図

3 古墳各説

— 365 —

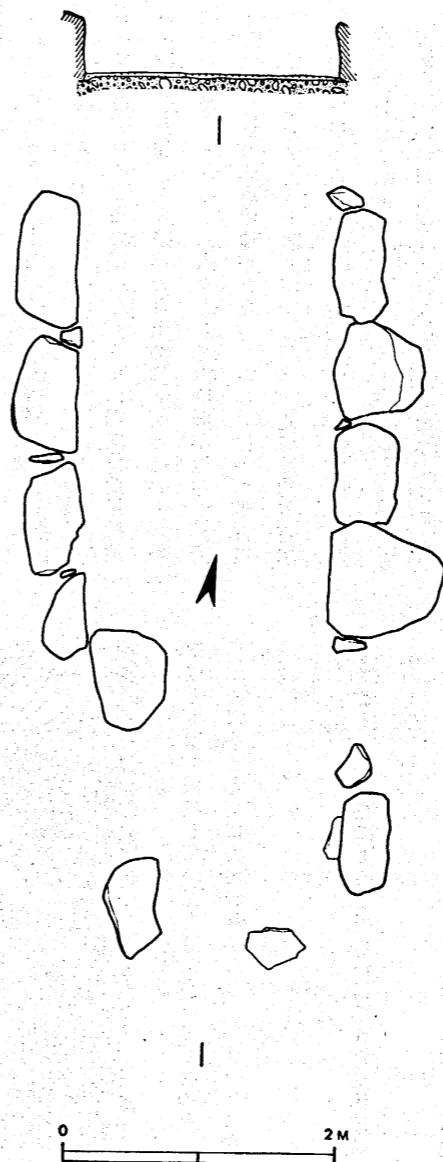


図153 朝日ヶ丘1号墳石室実測図

第3章 古墳時代

— 364 —

なわれ、左右側壁の第一段目のみが遺存し、羨道部の側壁も一部が欠けている。石室の規模は、現存長六・一メートル、玄室長三・四メートル、巾一・九メートル、羨道長二・七メートル、巾一・三メートル、羨

床は、地山上に約二センチメートルの粘土を貼り床面としている。

左右の側壁は、割石を横位置に用い、袖部では割石を縦位置に用いている。

2号墳 古墳の主体構造は、主軸をN $14^{\circ}W$ に向けた右片袖式の横穴式石室である。石室は、左側壁の第一段目と奥壁に使用されたと考えられる石材が一個遺存しているのみで、他は失われていたが、墓括の調査によつて右片袖であることが判明した。石室の規模は、現存長七・〇メートル、玄室長三・六メートル、巾一・七メートル、羨道長三・四メートル、巾約一・〇メートルを計る。床は、地山上に径約一〇から三〇センチメートルの扁平な割石を敷いて床面としており、相接して二基の同形

式の古墳が造られながら、一方は粘土床、一方は石敷床と異つた床面構造であることは興味深い。

出土遺物 出土遺物はつきの通りである。

1号墳

棺具 鉄釘残欠 34
装身具 ガラス小玉 1

2号墳

土器 須恵器高杯片 3、同壺片 1、土師器片若干
鉄器 刀子残欠 1

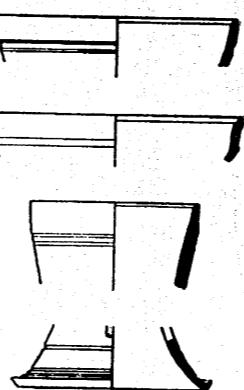


図155 朝日ヶ丘1号墳出土遺物実測図(1/4)

- 366 -

第3章 古墳時代

棺具 鉄釘残欠 3
装身具 純金環 1、銅製品残欠 3、銀製品残欠

2 土器 須恵器高杯片 3、台付長頸壺片 4、杯身 9、器台片 1、蓋杯 1

遺物は、両墳とも相当の荒廃墳であるにもかかわらず全て玄室床面から検出されている。

金環は、純金製で六角形の面取りのあるもので、径一・七四センチメートル、断面○・三センチメートルを計る。銀製品のうち、一つは細い棒状のもので長さ三・九センチメートル、断面径○・三センチメートル、他の一つは、西瓜の種子状のものである。銅製品は腐蝕がはげしく形状は不明である。

両墳は、出土した須恵器の型式がⅢ型式後半に比定されることがから、六世紀後半頃に相当する。

付載 芦屋市朝日ヶ丘古墳群の第2号墳から発見された人骨と推定される物質の化学的調査。

武庫川女子大学考古学部

考古学教室教授

医学博士 安田博幸

第2号墳玄室石敷下の土中から発見された数片の人骨と推定される物質は、いずれも、容易に粉末状に圧碎される白色石灰質様の小塊である。筆者は、この圧碎さ

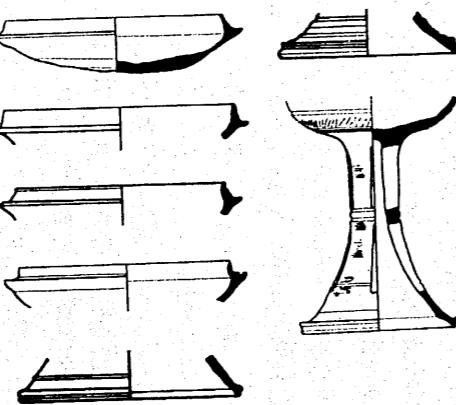


図156 朝日ヶ丘2号墳出土遺物実測図(1/4)

- 367 -

3 古墳各説

れた約1立方ミリメートル (1mm^3) の小塊について、つぎのような微量化学的検出試験を実施して、その結果、該物質は、骨から由来した「リン酸カルシウム」であることが明らかになった。

〔実験の部〕

(1) カルシウムイオン (Ca^{2+}) の確認……約一滴の試料片をとり、○・五ccの蒸溜水を加えて振とうするに溶解せず。これに、六規定塩酸一滴を加えるときは、発泡することなく溶解し、わずかの不溶分を残すのみ。この上澄液を分取して蒸溜水一ccを加え、酸性を弱め、シユウ酸アンモニウム試液二滴を加えると、白色結晶性沈でんを生じる。これはシユウ酸カルシウムの結晶であろう。この結晶は、遠心分離して上澄液を除いてから、これに稀酢酸五滴を加えても溶けないが、希塩酸五滴を加えると溶消し、シユウ酸カルシウムの性質と一致する。この塩酸溶液を白金線につけて炎色反応を調べるとカルシウムイオンに特有の赤橙色の反応を示

した。以上の結果からカルシウムイオンの存在は確実である。

(2) リン酸イオン (PO_4^{3-}) の確認……新たに、約一滴の試料片を尖形試験管にとり希塩酸○・五ccを加えて溶かし、蒸溜水○・五ccを加えてからその上澄液をとり、これに一規定モリブデン酸アンモニウム溶液六滴を滴加すると、黄色の微細な結晶が徐々に析出する。しばらく放置後遠心分離すると、顯著な量の黄色沈でんが器底に沈積する。上澄液を除き、この黄色沈でんに六規定のアンモニア水二～三滴を加えると沈でんは溶消失する。

以上の結果から、黄色沈でんはリンモリブデン酸アンモニウムであつて、リン酸イオンの存在は確実である。

(3) 対照試験……朝日ヶ丘台地の土を同量とつて、同様にカルシウムイオン・リン酸イオンの反応を検した

が、両イオンは検出されなかつた。

以上の結果から標記の物質は、骨から由来したリン

酸カルシウムであると認められた。

B 岩ヶ平支群

④ 八十塚A・B・C号墳(図15-3-5)

所在地 芦屋市六麓荘町一七六

位置と外形 八十塚古墳群六麓荘地区南プロック、八十塚橋の東側、松を中心とした山林にあり、標高八六メートルを計る。この遺跡は、昭和三十一年、土取り作業中に露出し、陶棺片が発見されたために、同年五月十八日から二十日の間に緊急調査が行なわれている。したがつて今回の調査では、この陶棺片がA号墳に埋葬されたものかどうかの確認も調査の目的である。

A・B・C号墳は、封土はすでに流失し、天井石も失なわれていた。B号墳は、奥壁部を残すのみで、側壁の大部分が破壊されている。地形実測図によると、A・C号墳は現地形の最高所の両側にあり、地山の最高所に封土を築いたものでないようである。C号墳のみ封土の原

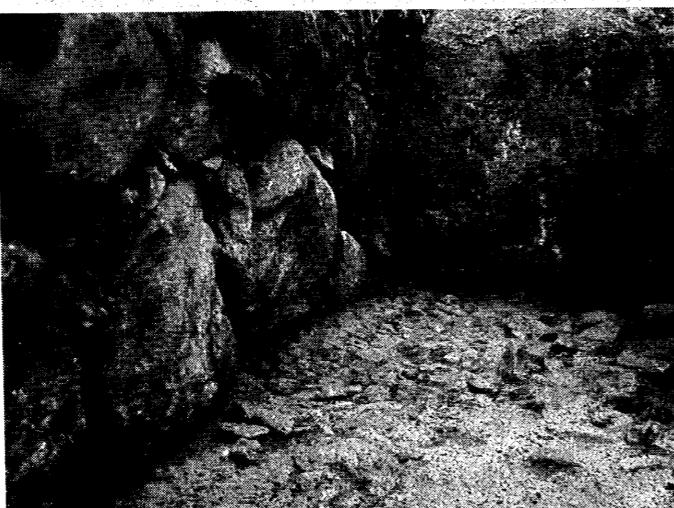


写真101 八十塚A号墳石室

形を幾分残しており、地山上三・五メートルの盛土をしていたようである。A・B・C号墳の相対的位置は、A

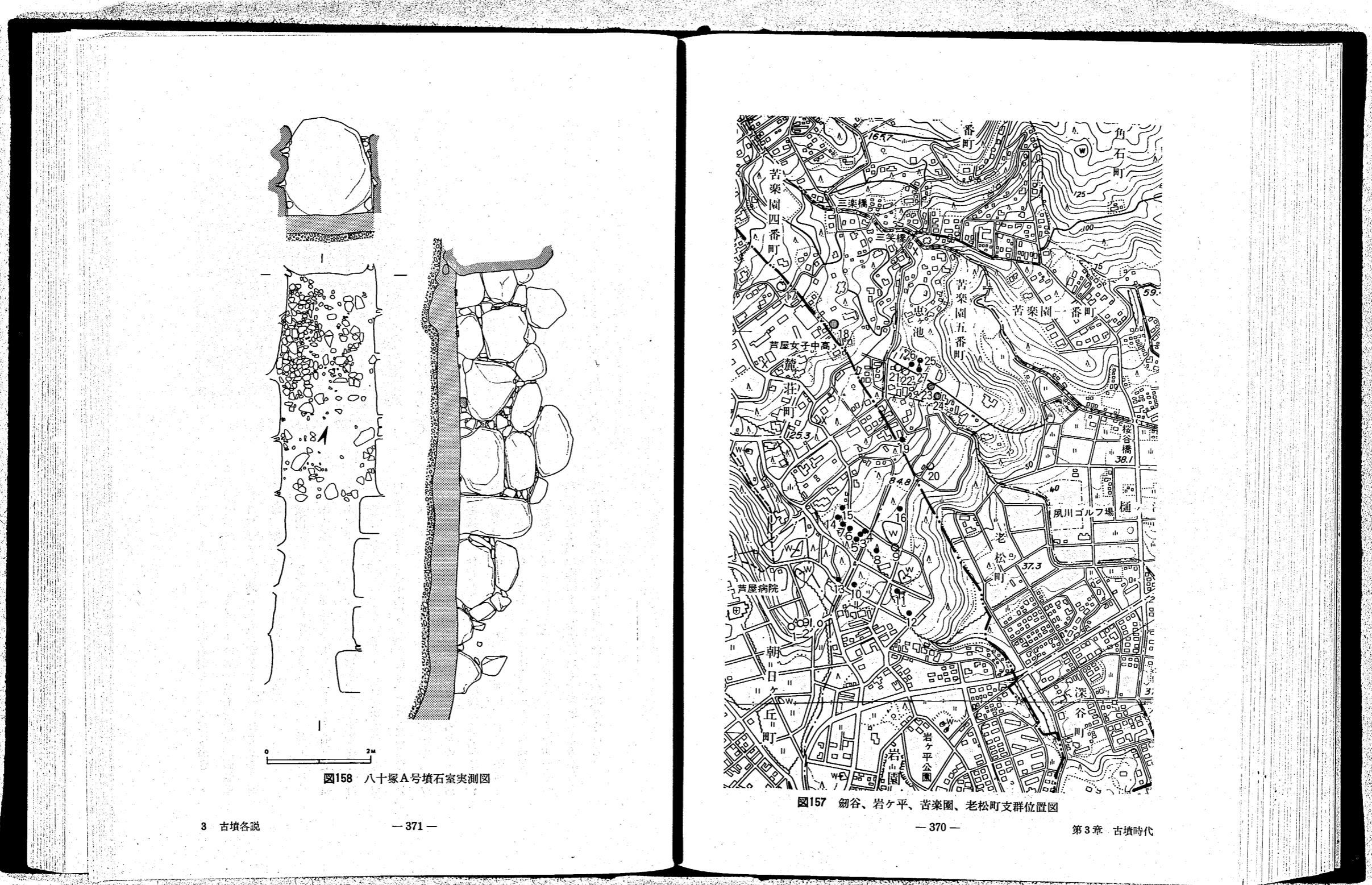


図158 八十塚A号墳石室実測図

3 古墳各説

- 371 -

図157 劍谷、岩ヶ平、苦楽園、老松町支群位置図

- 370 -

第3章 古墳時代

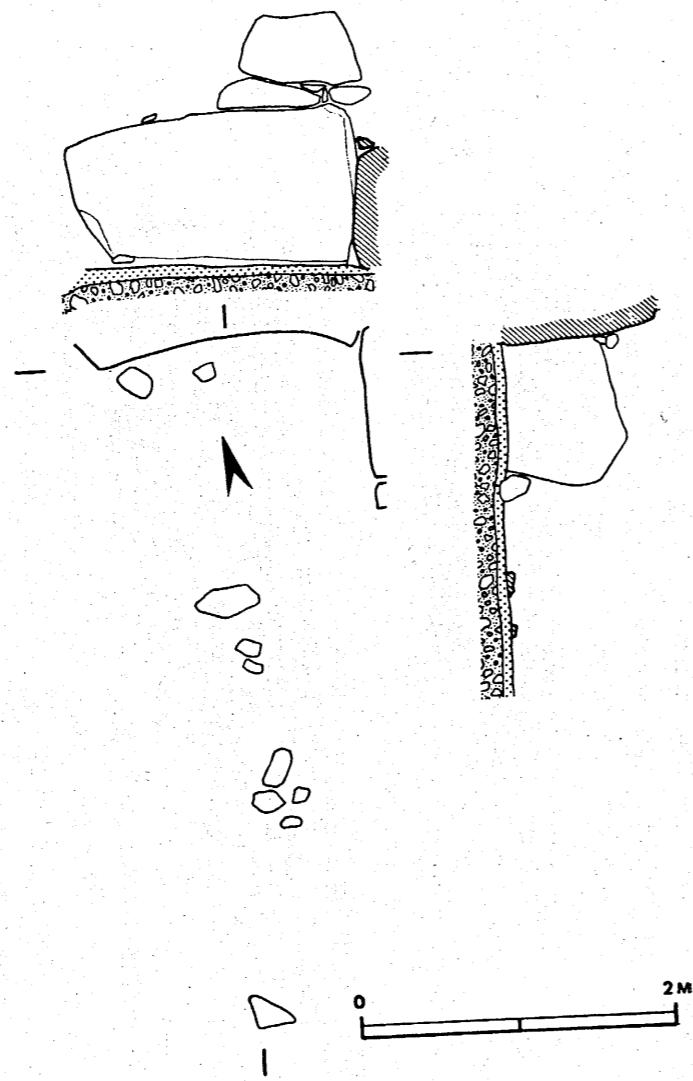


図159 八十塚B号墳石室実測図

号墳の東九メートルにB号墳が、西七・五メートルにC号墳が位置し、各々の墳丘はA号墳の封土を切つて築かれている。

内部構造

イ、A号墳 古墳の内部構造は、主軸をN 20° Eに向かた両袖式の横穴式石室である。

石室の規模は、全長八・二メートル、玄室長四・五メートル、巾一・八メートル、羨道長三・七メートル、巾



写真102 八十塚C号墳石室

一・五メートルを測る。石室石積みは、奥壁に高さ二・〇メートル、巾一・七メートルの一枚石を用い、両側壁もこれに準じた自然石の大石が多く用いられている。両側壁は、床面に対し持ち送られている。

玄室内には、奥壁から赤土を敷きつめ一応平にならし、赤土の足らない部分は、灰黄褐色土と黄褐色土を順次積んで平坦とし、この面に陶棺を主体とする埋葬を行なったようである。これが恐らくB号墳建築の頃に陶棺墓を片付け、玄室内に敷石を行なつてさらに棺台部分には薄く粘土を敷いた木棺葬が行なわれ、それも一體以上が追葬された可能性が強い。すなわち、石敷の上の粘土層と鉄釘の分布からみると、奥壁に接して東西に一か所、玄室中央部に一か所、羨道中央部に南北に一か所を推定することができる。とくに羨道中央部から袖部にかけての遺物は最も新らしく、また骨片も多く散布していた。また下層の陶棺も一基ではなく、陶棺の窓蓋からみて二基の陶棺が納められていたことが推測される。

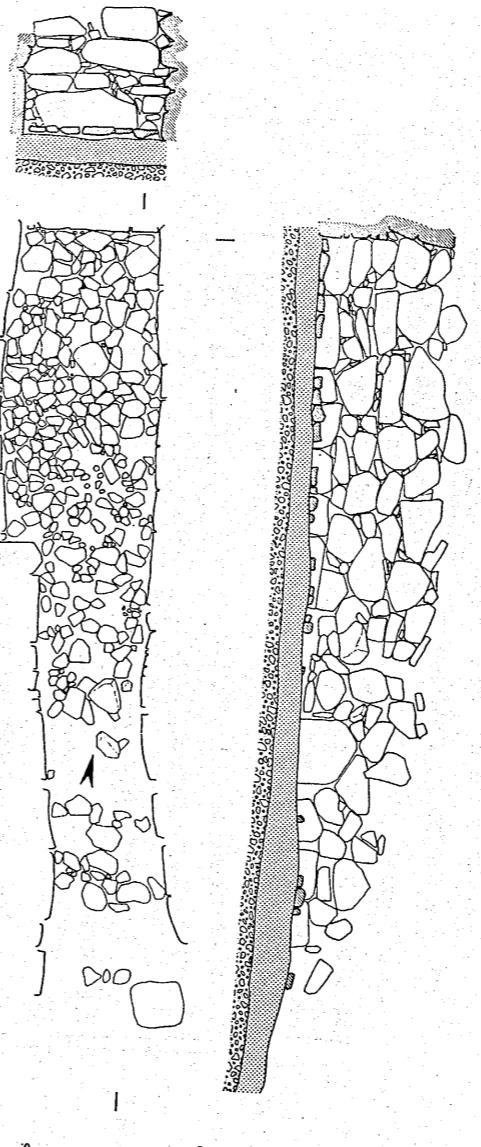


図160 八十塚C号墳石室実測図

第3章 古墳時代

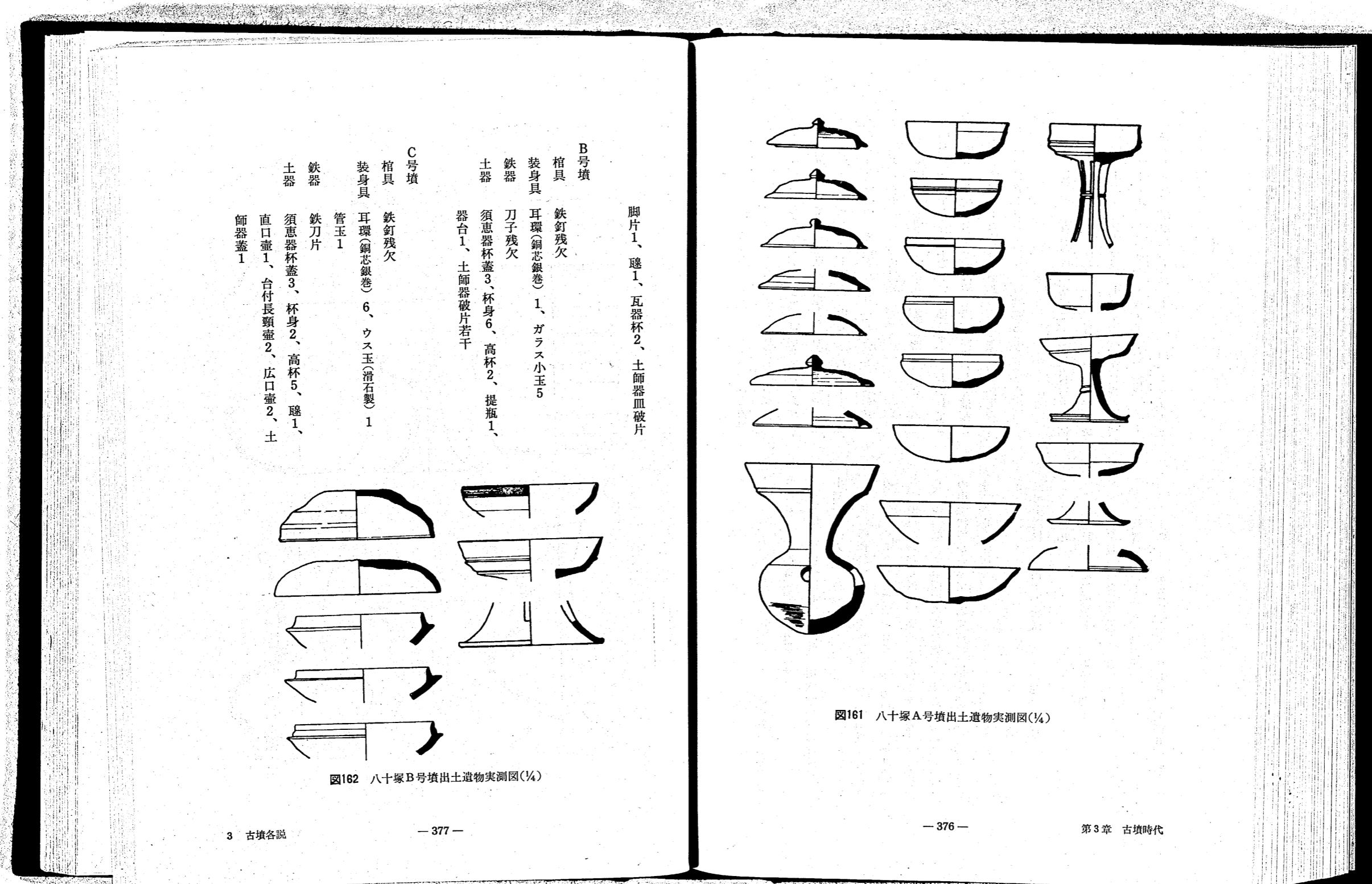
口、B号墳 古墳の内部構造は、奥壁の一部と東側壁の一石が遺存するのみであるが、主軸をN $14^{\circ}W$ に向かた横穴式石室であることがわかる。袖の有無については不明、抜去されている側壁の掘型から石室の現状での規模は、石室長約五・一メートル、巾約一・八メートルを測る。奥壁は、小口の割石を積み重ねており、A号墳のように大石を用いたものではない。

玄室床面は二応遺存しており、羨道部に近いところで約四五センチ平方の粘土を敷いた面に平石がおかれており、地山の上に粘土を敷いた粘土床が原形らしく推測される。部分的に中央部に、南北に石敷様に残石が遺存するが、排水溝の蓋石かどうかは判然としなかった。

出土遺物 出土遺物は、つぎの通りである。

ハ、C号墳 古墳の内部構造は、主軸をN $11^{\circ}E$ に向けた右片袖式の横穴式石室である。石室の規模は、全長九・〇メートル、玄室長三・七メートル、巾は奥壁部で一・六メートル、中央部で一・八メートル、袖部で一・六五メートル、羨道長五・三メートル、巾一・二メートル

出土遺物	出土遺物
A号墳	
棺具	鉄釘残欠若干、陶棺片若干
装身具	耳環(銅芯銀張) 3
鐵器	刀子残欠、鐵刀残欠
土器	須恵器杯蓋8、杯身6、高杯6、台付壺



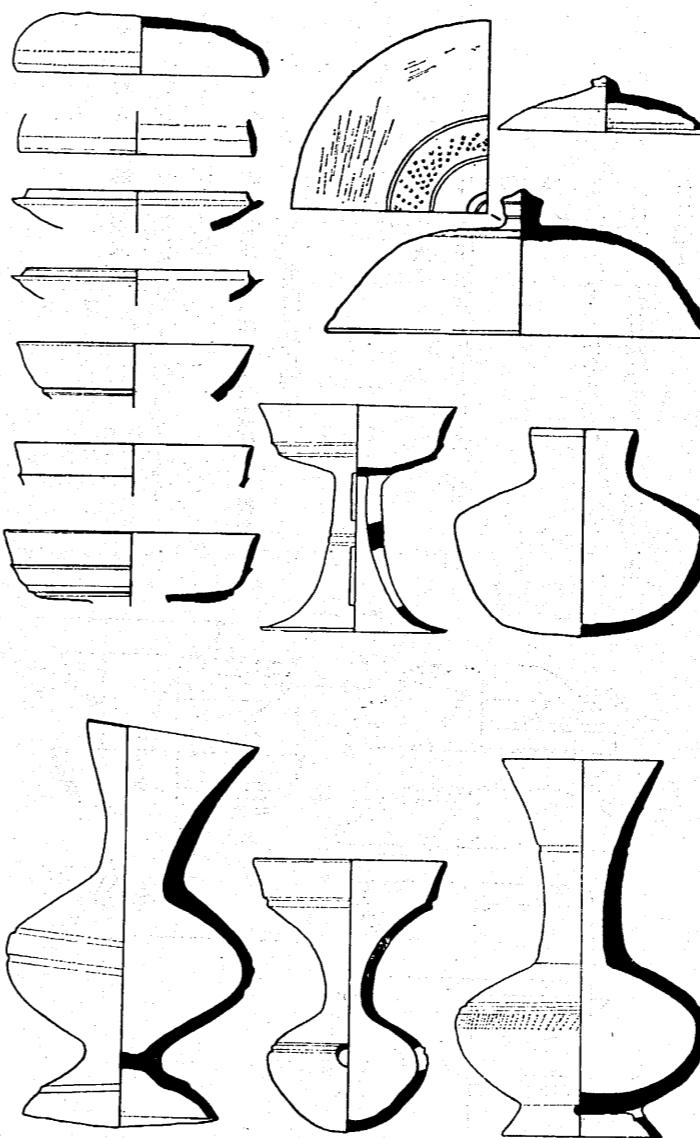
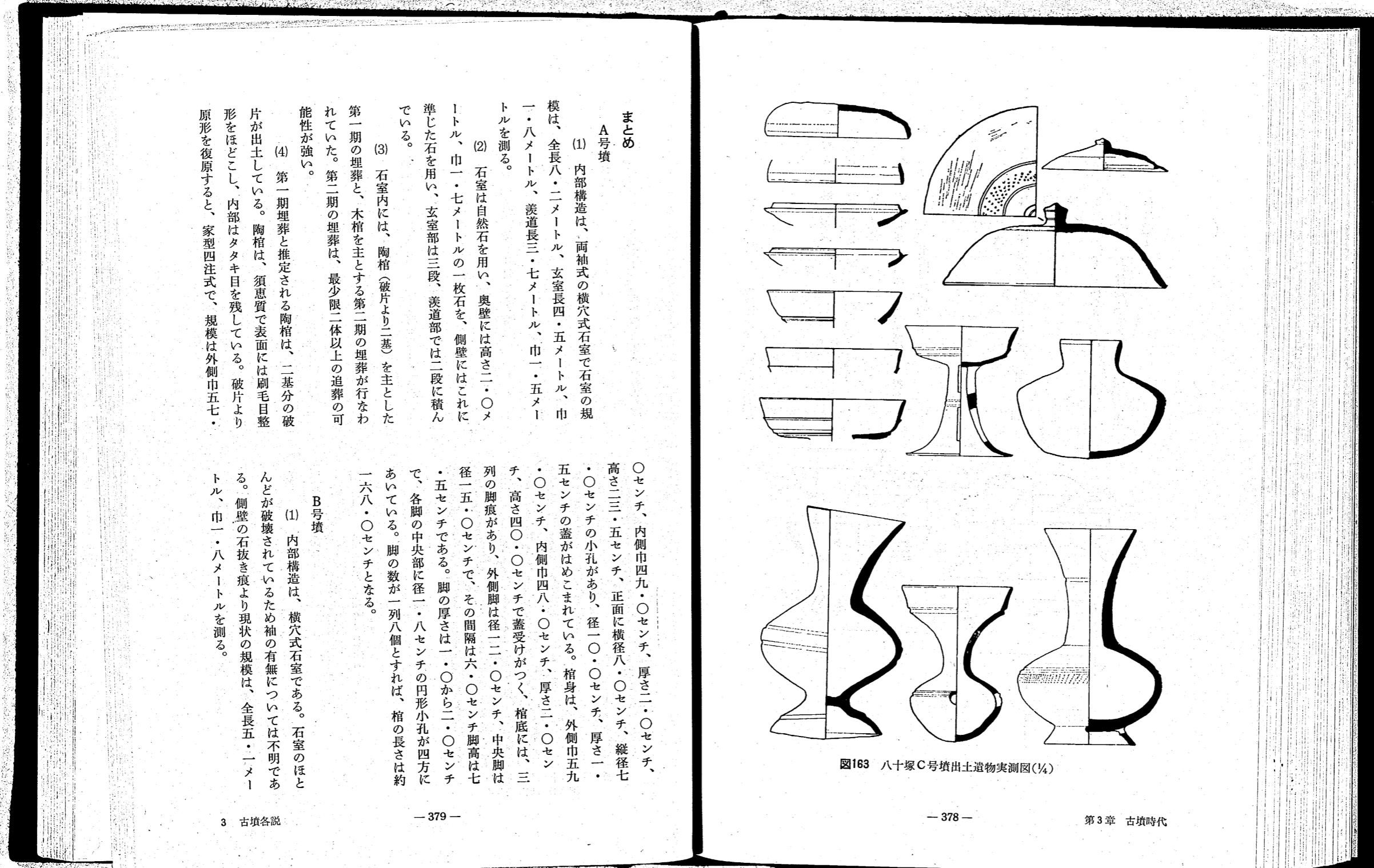


図163 八十塚C号墳出土遺物実測図(4)

第3章 古墳時代

- 378 -

- まとめ**
- A号墳**
- (1) 内部構造は、両袖式の横穴式石室で石室の規模は、全長八・二メートル、玄室長四・五メートル、巾一・八メートル、羨道長三・七メートル、巾一・五メートルを測る。
- (2) 石室は自然石を用い、奥壁には高さ二・〇メートル、巾一・七メートルの一枚石を、側壁にはこれに準じた石を用い、玄室部は三段、羨道部では二段に積んでいる。
- (3) 石室内には、陶棺（破片より二基）を主とした第一期の埋葬と、木棺を主とする第二期の埋葬が行なわれていた。第二期の埋葬は、最少限二体以上の追葬の可能性が強い。
- (4) 第一期埋葬と推定される陶棺は、二基分の破片が出土している。陶棺は、須恵質で表面には刷毛目整形をほどこし、内部はタタキ目を残している。破片より原形を復原すると、家型四注式で、規模は外側巾五七・
- B号墳**
- (1) 内部構造は、横穴式石室である。石室のほとんどが破壊されているため袖の有無については不明である。側壁の石抜き痕より現状の規模は、全長五・一メー

(2) 玄室床面の中央部に部分的であるが南北方向に石敷様の石材が遺存するが、排水溝の蓋石かどうか不明である。

C号墳

(1) 内部構造は、右片袖式の横穴式石室である。

石室の規模は、全長九・〇メートル、玄室長三・七メートル、巾は奥壁部で一・六メートル、中央部で一・八メートル、袖部で一・六五メートル、羨道長五・三メートル、巾、一・二メートル、羨門部分巾一・七メートルを測る。

(2) 石室は、玄室がわずかに胴張りし、玄室に比べて羨道が長く、羨門部は外開きする。

(3) 石室は小口の割石で築かれ、床面に対しても持ち送られている。

(4) 床は、羨門部まで厚さ一〇から一五センチの石で敷石されている。

(5) 遺物の出土状態から、最少限三体の埋葬が行

なわれていたと考えられる。

各古墳の年代は、出土した須恵器により、A号墳は六世紀後半、B・C号墳は七世紀前半にそれぞれ相当する。

⑥ 八十塚E号墳（図157-7）

所在地 芦屋市六麓荘町一七四の三

位置と外形 古墳は、昭和四十年十月十四日、オランダ人W・クノーク邸の庭園工事の際発見されたもので、



写真103 八十塚E号墳石室
(西側から奥壁を見る)

- 380 -

第3章 古墳時代

部が外開きする形状を示すことが判る。

床は、玄室内では地山を、羨道部では黄褐色土を地山上に置いて平坦としている。なお排水等の施設は認められなかつた。

出土遺物 出土遺物は、つきの通りである。

棺具 鉄釘残欠若干
装身具 耳環(銅環)2

鉄器 鉄刀残欠若干
土器 須恵器蓋杯9、杯身6、高杯3、平瓶1
器台脚 破片1

その他 滑石製紡錘車1

遺物は、石室がすでに盗掘をうけていたため、全面に散在し、原位置を保つものは少なかつた。

まとめ

(1) 古墳は、標高九〇メートルの南東に緩傾斜する丘陵斜面を削平して構築され、その位置からみて、八十

- 381 -

3 古墳各説

内部構造 内部構造は、主軸をN18°Eに向けた左片袖式の横穴式石室である。天井石は失われ、奥壁は中段より上が、側壁も中央部において相当石抜きが行なわれていた。

石室の規模は、全長六・九メートル、玄室長三・五メートル、奥壁巾一・五メートル、中央部巾一・七メートル、袖部巾一・〇メートル、羨道長三・四メートル、羨道部一・四メートル、高さは玄室で二・〇メートル、羨道部で一・五メートルを計る。羨門部は石抜きが甚しく明確でない。計測値より玄室中央部で僅かに胴張りし、羨道

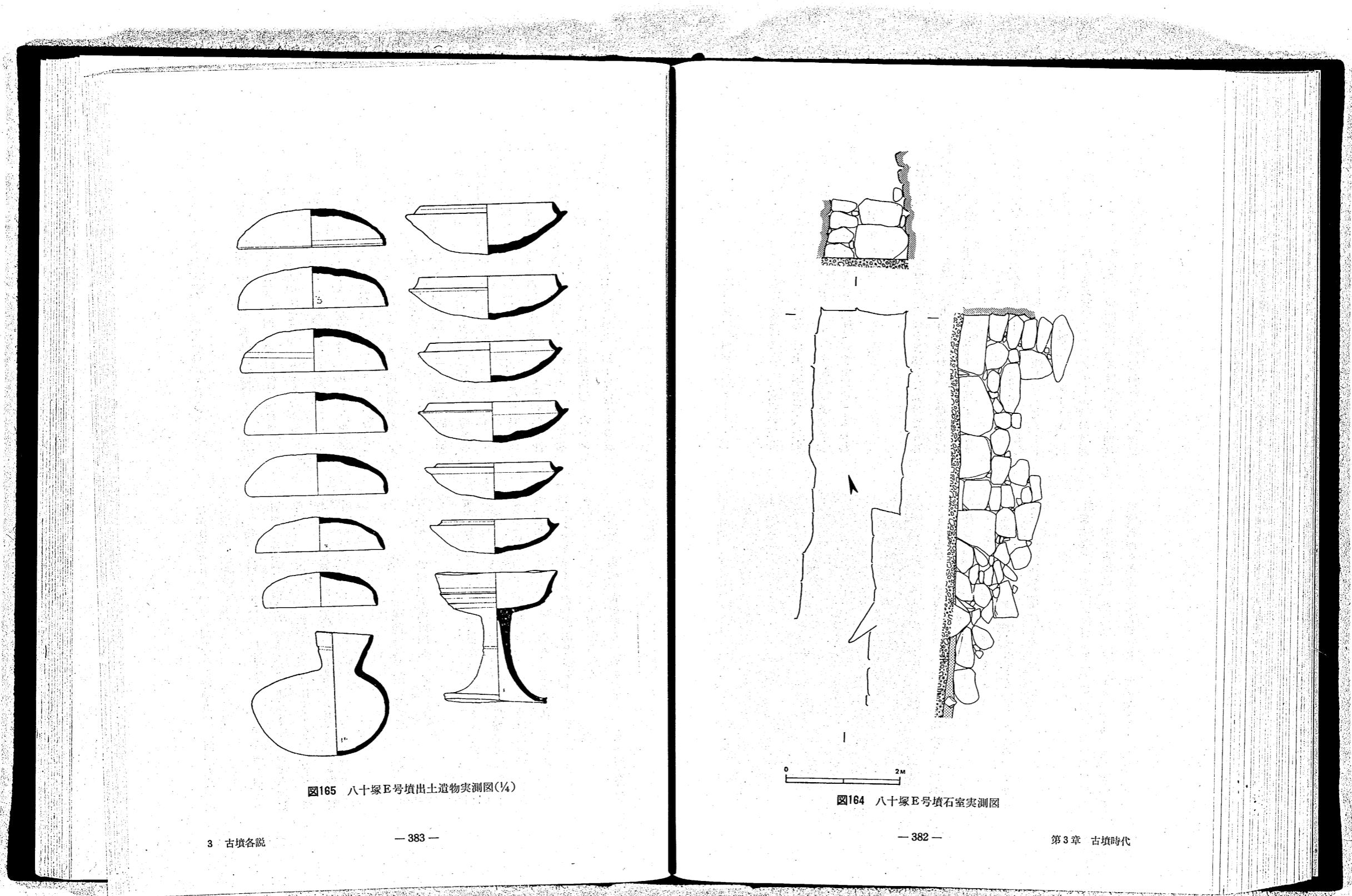
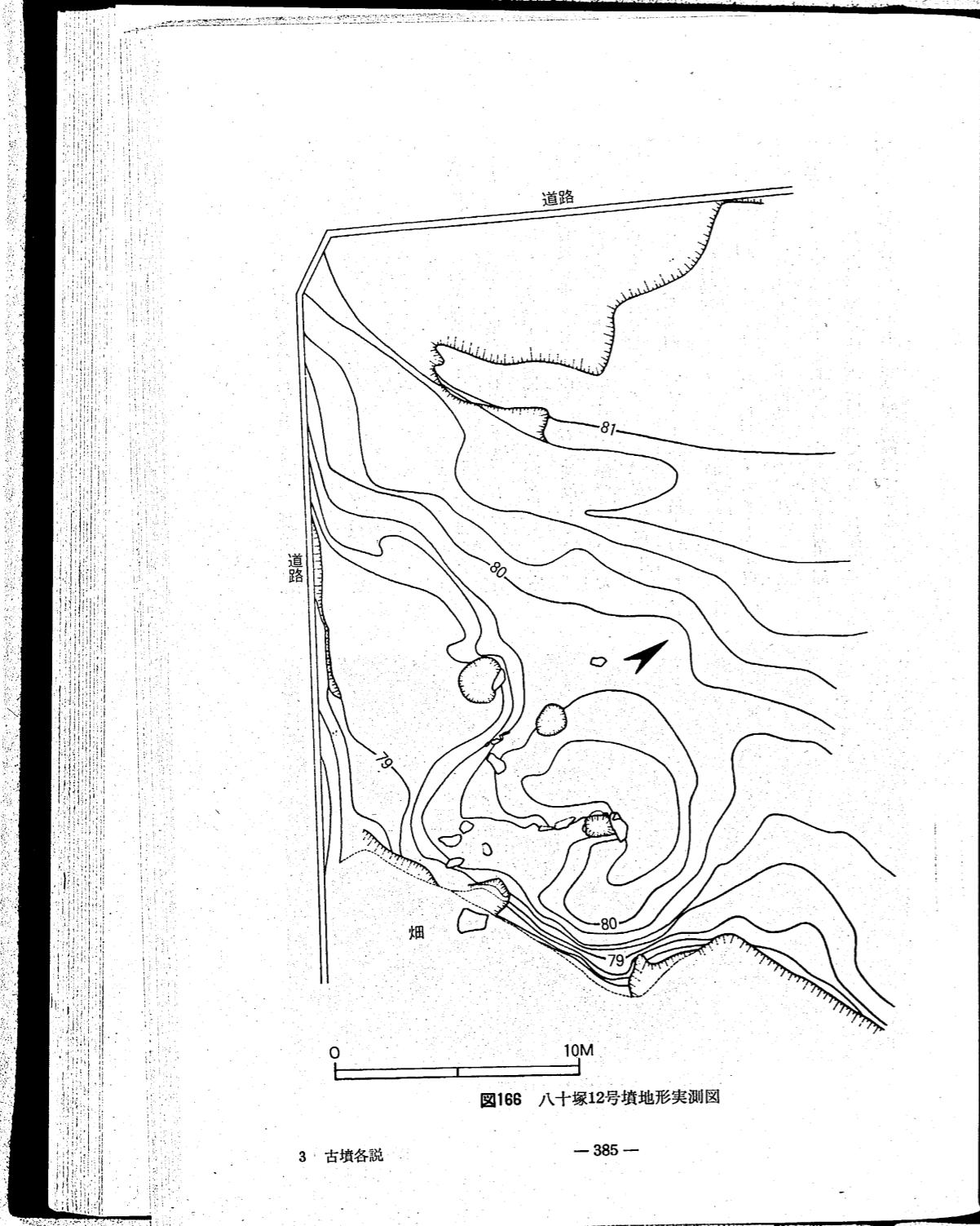


图165 八十塚E号墳出土遺物実測図(1/4)

图164 八十塚E号墳石室実測図



3 古墳各説

— 385 —

- 塚A・B・C・D号墳と同一群中に包含されるものである。
- (2) 封土はすでに失われ、天井石、側壁・奥壁の石積みが抜去されているため、旧状の復原は困難であるが、径約一五メートルの円墳であったと考えられる。
- (3) 内部構造は、左片袖式の横穴式石室である。規模は、全長六・九メートル、玄室長三・五メートル、玄室巾一・七メートル、羨道長三・四メートル、玄室巾一・七メートル、羨道長三・四メートル、羨道巾一・〇メートル、羨門巾一・四メートルを計る。
- (4) 出土遺物は、須恵器杯蓋・杯身・高杯・脚部破片・平瓶・鉄刀・耳環・滑石製紡錘車である。紡錘車は、截頭円錐形で側面および底部には、二本の沈線と一本の沈線に画された区画に鋸歯文の線刻が施されている。底部周縁部に線刻の際に基準線としたと思われる沈線が部分的にみられる。頂部径一・九センチ、底部径四・二センチ・厚さ一・九四センチ、貫通孔径〇・六センチを計る。八十塚B号墳封土中より、扁平な紡錘車の破

片が採集されている。同形式の紡錘車は、河内大藪古墳に求めることができる。

(5) 古墳の年代は、出土した須恵器が森浩一編年のIII型式に全て包括されるもので、III型式の上限を六世紀前半、下限を六世紀後半から末に比定すると、本古墳に副葬された須恵器は六世紀中葉から後半に求めるのが妥当である。

(c) 八十塚12号墳（測量調査）
所在地 芦屋市岩園町四九（図157-10）

位置と外形 古墳は、標高八〇メートル、岩ヶ平尾根の緩斜面にある。封土は、東側が畑地に転用のため削平されている以外は旧状を保っている。地形実測図によると、北側七九・五〇メートル、南側七九・二五メートルのコンターラインが基底部と推定され、径は一二メートルから一三メートルと考えられる。

石室は、奥壁・右側壁の一部が露出し、玄室内奥壁部

に盗掘坑があり、石材も抜き取られ、その一部は周辺に散在している。

外形の表面観察では、外部に何らかの施設を想定させるものは、みとめられなかつた。

内部構造 内部構造は、主軸をN 22° Eに向けた有袖

式(右片袖式か両袖式)の横穴式石室である。石室は天井石がすでに失われ、奥壁と右側壁の一部が露出し、石室内及び左側壁は、堆積した土砂と落石で埋没している。石室の実際の規模を計測することは不可能であるが、実測図及び現状から、長さ七・〇メートル、玄室奥壁巾一・三メートル、玄室長約四・六メートル、羨道巾約一・〇メートル、羨道長約三・〇メートルを測ることができる。奥壁は、巾一・三メートル、奥行〇・六メートル以上の一枚石で、露出している上面は平坦で、直接この上に天井石を架したものと考えられる。また側壁も露出部分の観察では、比較的大きな石を用いている。石材は、六甲南麓の群集墳にみられる黒雲母花崗岩である。

④ 八十塚13号墳 (測量調査) (図157-11)

所在地 芦屋市六麓荘町五三

内部構造 内部構造は、主軸をN 45° Eに向けた横穴

るものは、みられなかつた。



写真105 八十塚13号墳石室 (東側からみる)



写真104 八十塚12号墳所在地

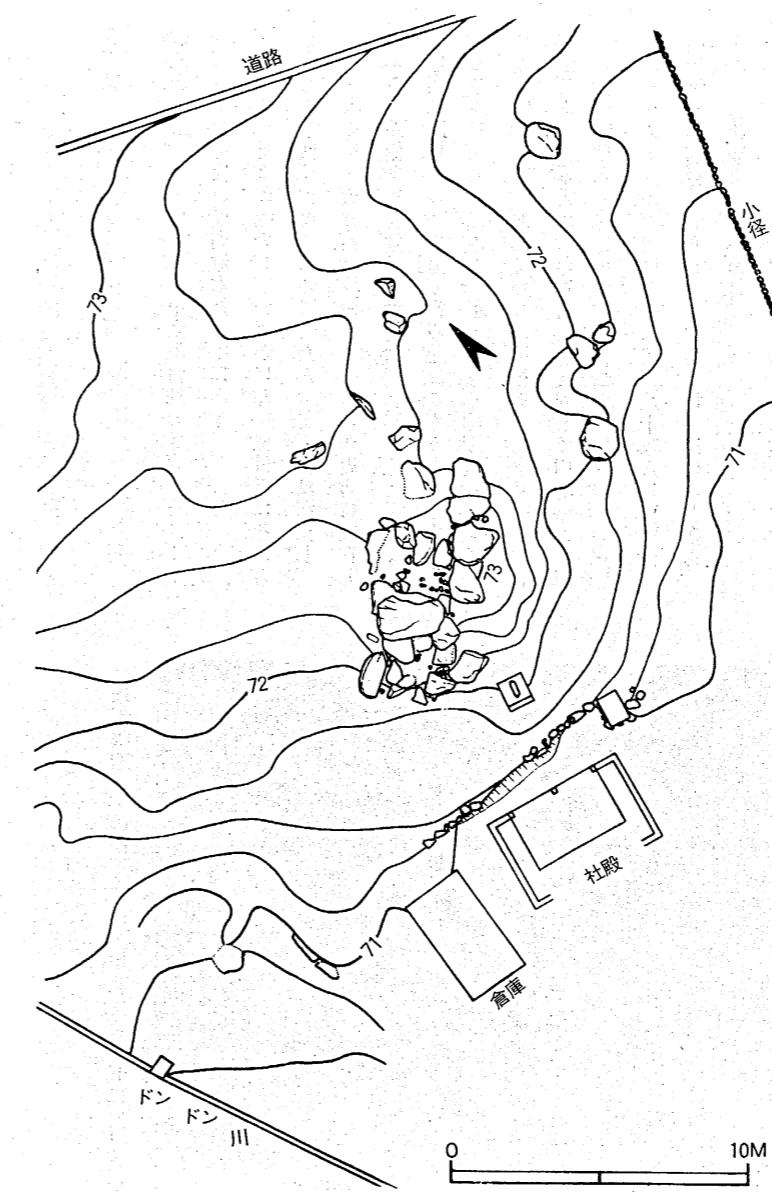


図167 八十塚13号墳地形実測図

式石室である。右側壁・奥壁・天井石の大部分が破壊され、土砂の堆積も多く、石室の実際の規模を計測することは不可能である。左側壁の玄室部基底石(根石)と考えられるものが露出しており、右側壁の基底石の露出状態を考えあわせると、当初の予想であった左片袖式よりも

両袖式の可能性が強い。

現状での計測値は、全長八・〇メートル、玄室長四・

四メートル、羨道部長三・六メートルと推定される。石

室の高さは、玄室部側壁上段から羨道部基底石露出部ま

で二・〇メートルを計る。

(1) 古墳は、六甲南麓の台地の標高七三・〇メート

ル、岩園天神社の境内、雑木林にある。

(2) 封土はすでに流失し、石室が露出し、石室にと

もなう石材が周辺に散在している。

(3) 作成された地形実測図より、径一七から一八メ

まとめ

(1) 古墳は、八十一号墳（測量調査）（図157-12）

所在地 芦屋市岩園町五三

位置と外形 古墳は、六甲南面の山麓台地の標高六六

・二五メートルから六九・〇メートル、岩園天神社境内に位置する。

古墳は、封土がすでに流失し、天井石は抜去されてい

るが、両側壁は比較的よく遺存している。外見的に墳頂

部とみなされる標高六九メートルの地点には、江戸時代



写真106 八十塚14号墳石室（西側道路上からみる）

末期、安政五年（一八五八）に建てられた『役行者の碑』とその石組があり、六八・七五メートルのコンターラインで平坦面を形成している。石碑の北方には、遊歩道に

つづく狭長な平坦部と階段がある。石室には、南側は、

地崩れ、凹地を伴う複雑な地形を示し、石室近くでは急

傾斜し、側壁基部を露出するほどえぐられている。以上

の外観観察及び地形実測図により、現在の外見上の墳丘

は、『役行者の碑』を建てる際に改変された地形と推定さ

れ、築造当初のそれは、大部分その形状を失っている。

したがって、旧墳丘の中心は、推定玄室部付近にあり、

石室の規模から推して、高さ三・〇メートル以上、一五

メートルを前後する径をもつ円墳であつたと推定され

る。

外形観察では、特記すべき外部施設に属する遺構は、何ら検出されなかつた。

内部構造　内部構造は、主軸をS $47^{\circ}W$ に向けた横穴式石室である。石室は天井石を全く失い両側壁が二列の列石として露出している。石室内は堆積土が充満しているため、石室石組み等の観察は不可能であった。露出している石組から観察すると、実測図でも明らかかなよう

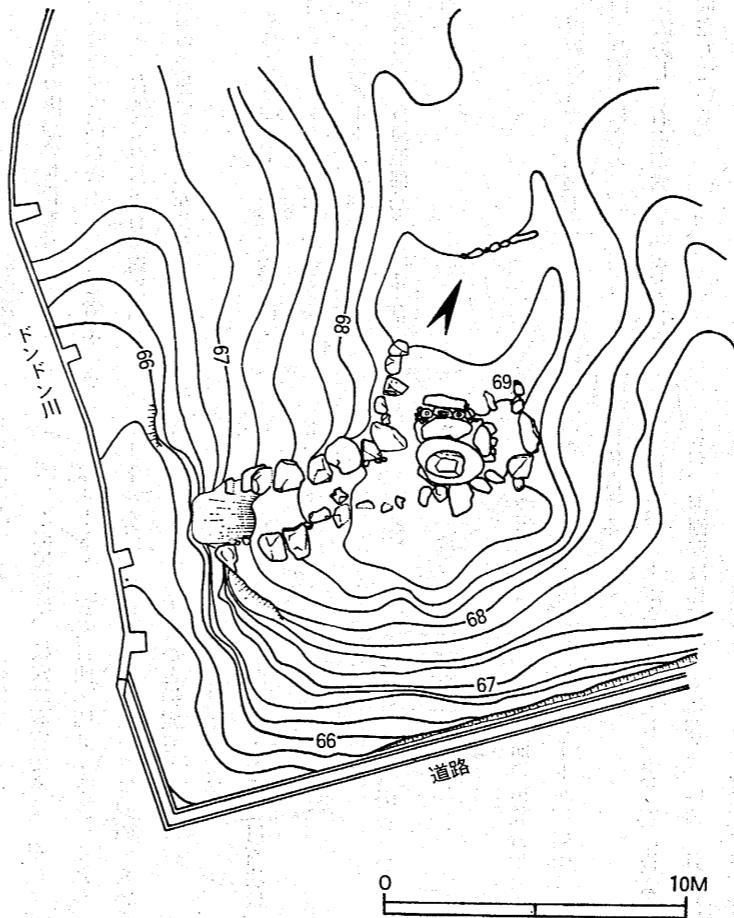


図168 八十塚14号墳地形実測図

に、比較的良好な遺存状況を示している右側壁によつて、右片袖式であることが推定され、玄室・羨道とも半壊状態を示している。現状での規模を計測すると、全長

六・七メートル、玄室長三・三メートル、羨道長三・四メートル、玄室巾一・三メートル、羨道巾一・二メートルを測る。高さは推定二・〇メートルである。

石室南側の崩壊・露出断面の観察によると、側壁は基底石に高さ一・〇メートルを計る自然石を用い、四段に積み上げられていた可能性が考えられる。また、この断面でみると、栗石・粘土床・石敷などの床面施設は認められなかつた。

まとめ

(1) 古墳は、六甲南面の山麓台地の標高六六・二五メートルから六九・〇メートル、岩園天神社境内に位置する。

(2) 封土はすでに流失し、天井石もすでに抜去されており、側壁が二列の列石として露出している。

(3) 作成された実測図及び石室の規模から、高さ三・〇メートル、径一五メートル前後の円墳であったと推定される。

(4) 内部構造は、右片袖式の横穴式石室で、主軸をS $47^{\circ}W$ に向け、現状での規模は、全長六・七メートル、玄室長三・三メートル、羨道長三・四メートルを測る。

(5) 外部施設・床面施設については不明である。

f 八十塚15号墳（図15-13）

所在地 芦屋市六麓荘町四

位置と外形 古墳は、六甲裾の六麓荘台地より南へ派生する岩ヶ平丘陵の西端、小谷を隔てて朝日ヶ丘尾根を望む標高八二メートルの傾斜面に立地する。道路をはさんで南東には12号墳が近接している。

古墳は、道路工事のため破壊されており、墳丘の東北部分と考えられる東西四メートル、南北七メートルの楕円状隆起がみられる。石室は、西側の道路に面する部分

内部構造 内部構造は、主軸をN $41^{\circ}E$ に向け南西に開口する横穴式石室である。石室は、奥壁と両側壁の一部が遺存している。

石室の規模は、全長〇・八メートル、奥壁巾一・〇メートルを測る。石室は、地山を約四〇センチ掘りこみ、黒雲母系の六甲花崗岩の比較的大きな石を根石とし、その上にやや小さな石を積んでいる。現状からみて、三段積み以上にしたことは理解される。持ち送りはみられない。

床面は、削平した地山上に乳白色細砂質土を約五センチ置土し、その上に拳大の石で敷石を施している。

出土遺物 出土遺物は、現存長五・五センチの鉄釘残欠一点のみである。

まとめ

(1) 古墳は、六麓荘台地より南へ派生する岩ヶ平丘陵の西端、小谷をへだてて朝日ヶ丘尾根を望む標高八二

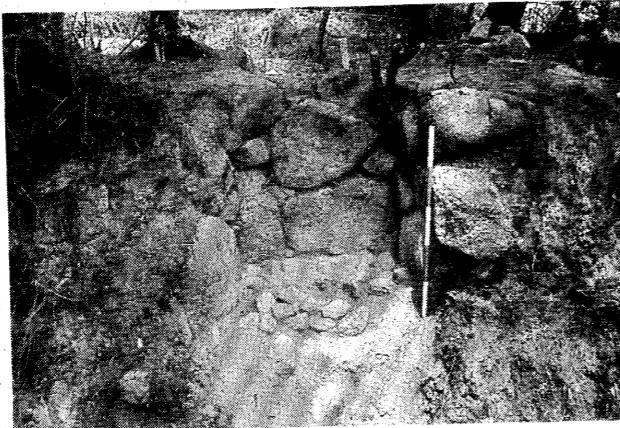


写真107 八十塚15号墳石室

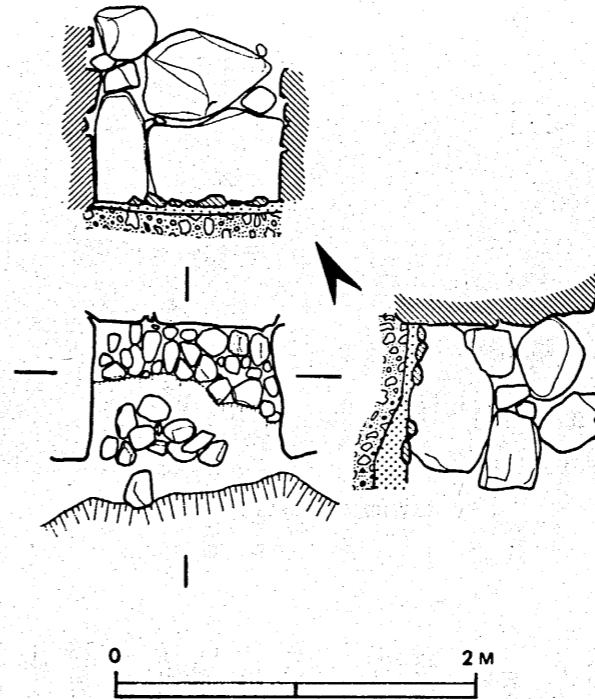


図169 八十塚15号墳石室実測図

- (3) 内部構造は、主軸をN 41° Eに向けた横穴式石室である。遺存している奥壁・側壁の一部から、玄室巾一・〇メートルを測る。
- (4) 出土遺物は、断面方形の鉄釘一点のみである。
- (5) 古墳の年代を決定づける資料はない。
- (6) 石室の形態に関して、その崩壊が著しいために判然としないが、計測巾から勘案すると、玄室・羨道の区別があつたと考え難く、苦楽園五番町古墳などから類推すると、長さ五メートル前後の無袖式の横穴式石室と推定される。

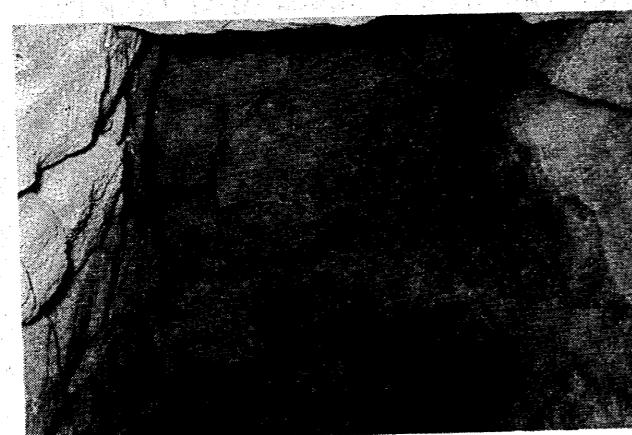


写真108 劍谷1号墳石室

1メートル、高さ一・五六メートルを計る。

床は、東から西へ傾斜する地山に盛土を行い、さらに割石と粗い不揃いの自然石を敷いて床面としている。奥

C. 劍谷支群
(a) 劍谷1号墳 (図157-18)

所在地 芦屋市六麓荘町五五

位置と外形 古墳は、六甲山系の南面して傾斜する山塊が分岐して三丘陵を形成している上方部、芦屋市の高級住宅地六麓荘地域の中に入り、標高一五三メートルを測る高地に位置する。封土はすでに失われ、天井石が露出し、玄室部の約半分が遺存しているのみで羨道部は、昭和十一年以来の六麓荘地区開発工事すでに破壊され、道路及び側溝がつくられていた。

内部構造 内部構造は、主軸をN $9^{\circ}W$ に向けた横穴式石室で、玄室部の約半分しか遺存していないため、袖の有無については不明である。天井石は一枚原位置に遺存していた。

石室の規模は、現存長二・四メートル、巾一・四九メ

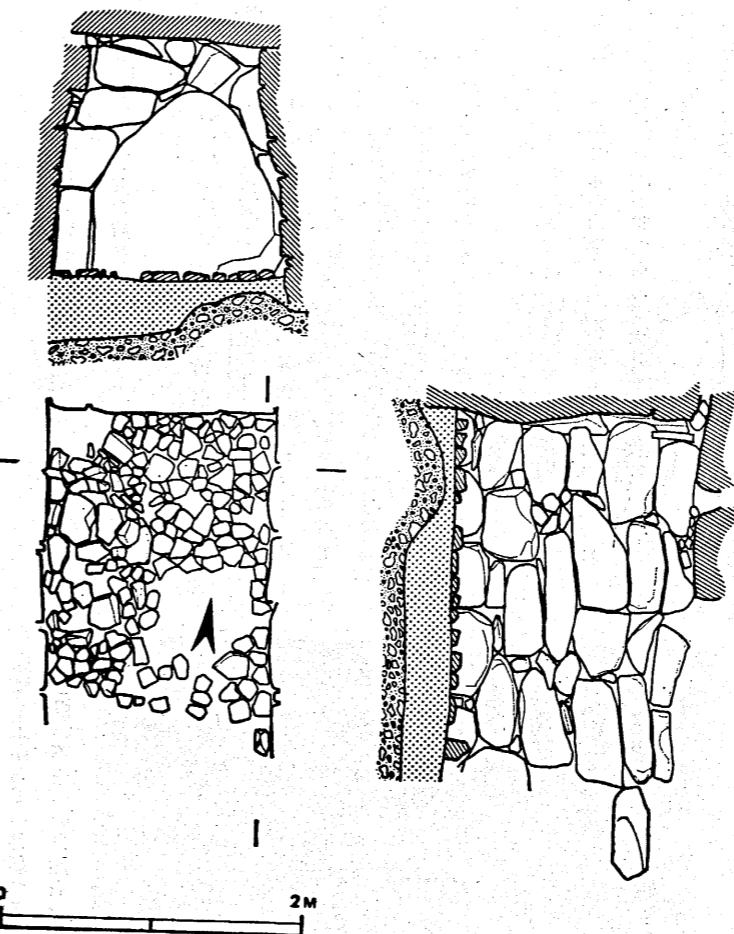


図170 剣谷1号墳石室実測図

第3章 古墳時代

- 396 -

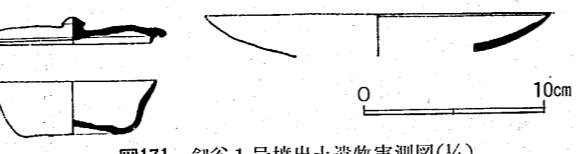


図171 剣谷1号墳出土遺物実測図(1/4)

壁は一枚石ではなく、たて、よこ一
まとめ

・ ○メートル強の大石と割石の積み
こみで、両側壁は、均質の割石を横

位置に用い、六段に持ち送り積みさ
れている。

出土遺物　出土遺物はつぎのと
おりである。

棺具　鐵釘残欠9

土器　須恵器杯蓋1、杯身

1、破片若干、土師

器皿1、破片若干

須恵器杯類は一次的な状態を推定された。中央部より南
辺に主として鐵釘があり、木棺被葬であることと棺の位
置が推定される。

3 古墳各説

- 397 -

D

苦楽園五番町支群

(a) 苦楽園五番町1・2号墳(図15-21-22)

所在地 西宮市苦楽園五番町八七の三

古墳の立地する地域は、表六甲の南斜面が沖積平野に向って緩傾斜する尾根上の見晴らしのよい斜面で、標高一・六から一・八メートルの地域である。この付近は、西北方の標高一五〇メートルの苦楽園四番町付近から尾根が数条分岐しているが、そのうち苦楽園五番町尾根・老松町尾根(以上西宮市域)・岩ヶ平尾根・朝日ヶ丘尾根(以上芦屋市域)上には、それぞれまとまつた一群の後期古墳群が遺存している。古墳の周辺は、六甲山系の南面する丘陵突端部に築かれた群集墳の遺存する地域として注目されている古代の墓地地帯である。阪神間では、豊中市・宝塚市・芦屋市にそれぞれ群集墳が遺存するが、一応これらの古墳群と肩をならべる地域である。

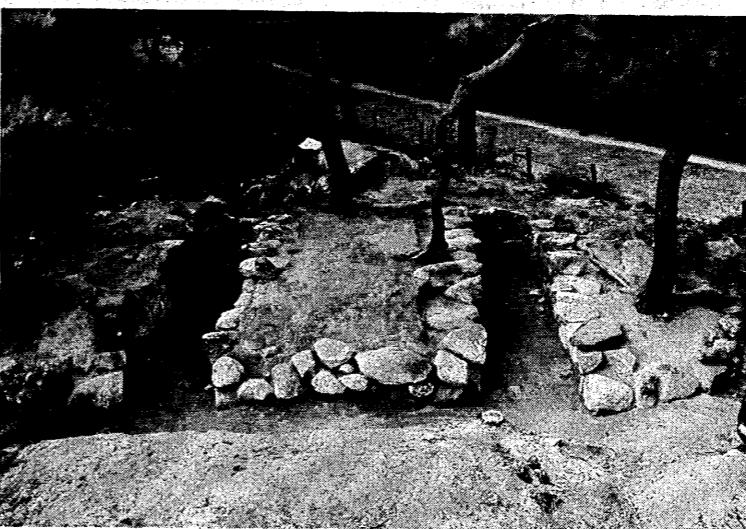


写真109 苦楽園1号墳2号墳石室

墳丘

調査時において古墳は、封土がかなり流出し変形していた。径約一三メートルをもつ円墳で、封土の高さは一・五メートル、石室天井石の部分が露出しており、同一封土内に並行して石室がつくられているのではないかと推測された。封土裾部は比較的明瞭であり、西に接して一古墳があつたらしいことも、地形的に推測できたが、すでにその地点は住宅となつており、破壊によつて掘り出されたとみられる大きな石が散在している状況であった。

墳丘の裾部の調査により、1号墳(西側)石室と2号墳(東側)石室を結び、さらに両側から奥壁部にかけて貼石状に化粧石垣が围绕していることが判明した。この附近では、旭塚古墳で、石室の両側に石組みがみられた例はあるが、この形式の石垣をめぐらせた例はない。

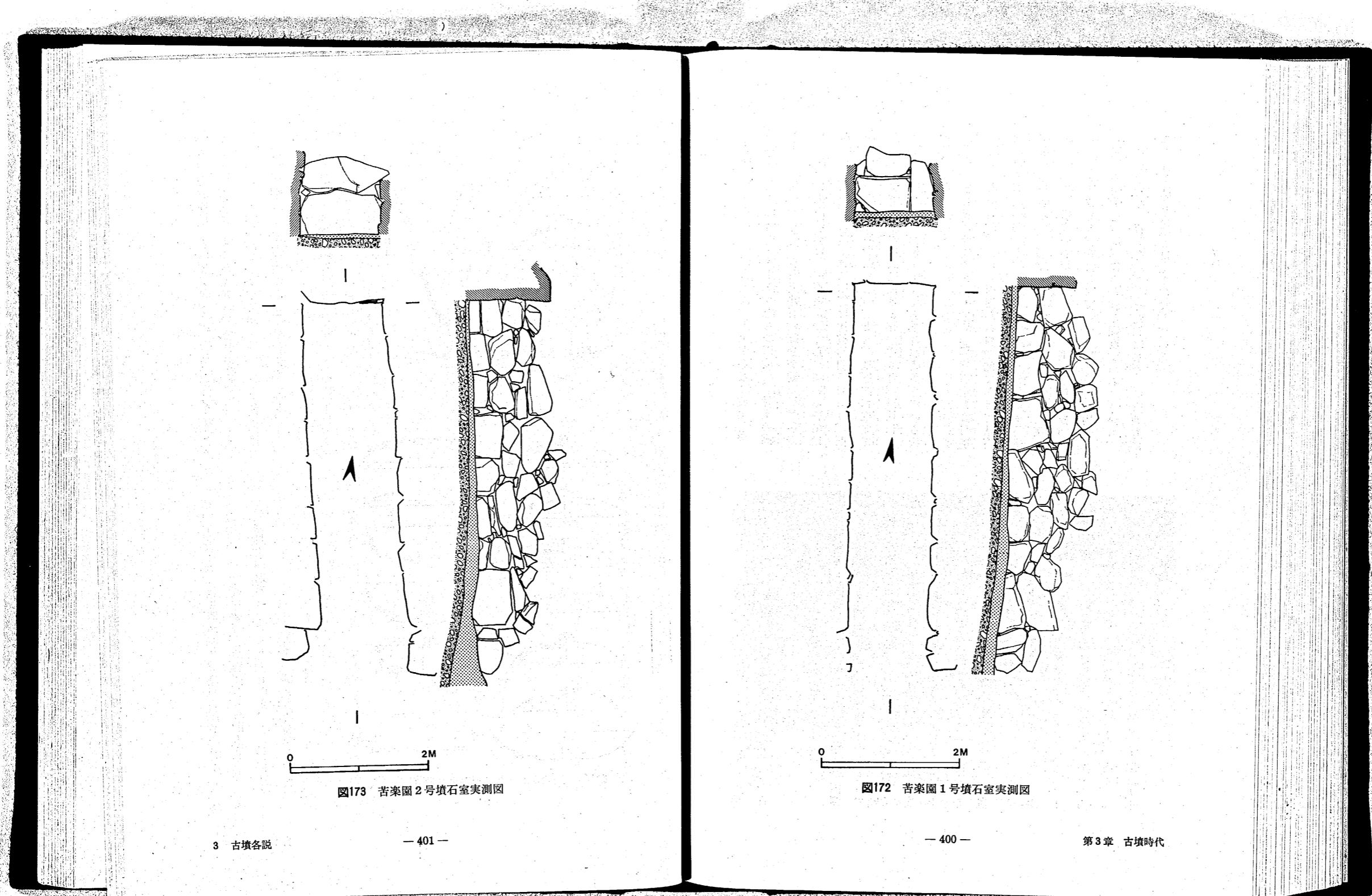
摂津国の地域でも、繩張り式に列石をめぐらせた例は、高槻市の大蔵司古墳群にみられる程度である。しかも、二石室を結んで石垣をめぐらせた例はなく、播磨地方にみられる貼石古墳とは趣を異にしている。

内部構造

古墳の内部構造は、1・2号墳とも主軸をN⁸Eに向けた無袖式の横穴式石室で、天井石の一部が遺存していた。

a、1号墳 石室の規模は、全長五・九五メートル、巾一・二メートル、高さ一・二五メートルを測る。両側壁は、切石と割石で積みあげ、石の大きさはまちまちである。奥壁部では、ゆるやかな持ち送り積みの形式をみせていて、中央部ではむしろ外開き的な積み方で、裏積み石はなく一列の積み石であった。南面して開口する石室は、奥壁部から約4°の角度で傾斜しており、恐らく排水の溝などもないことから考えて、床面傾斜といふ構造をもつて排水面を考慮したかも知れない。

b、2号墳 石室の規模は、全長五・五メートル、巾一・二五メートルを測り、石積みは床面より一・二メートルまで遺存している。両側壁は、整然とした積み方で、ゆるやかな持ち送り積みとなつていて、とくに西侧壁の壁面は形の整った切り石積みであり、東壁は大小の石が混在している。



石室の床面は、入口部に向って傾斜して築造されており、自然排水を考慮に入れてあったようである。

出土遺物 出土遺物は、つぎのとおりである。

1号墳 棺具 鉄釘残欠 83

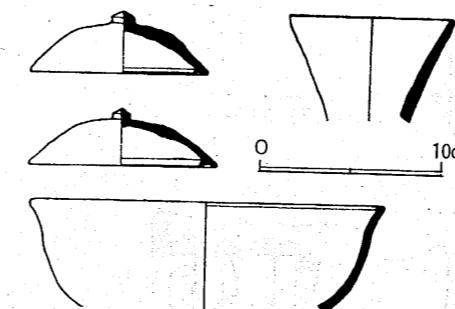


図174 苦楽園1号墳出土遺物実測図(1/4)

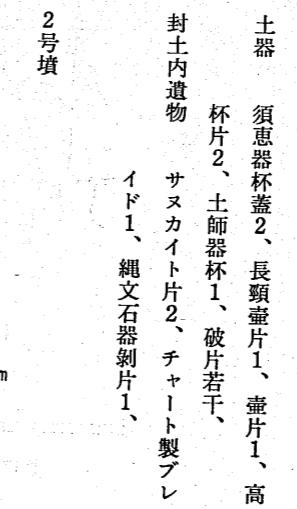


図175 苦楽園2号墳出土遺物実測図(1/4)

土器 須恵器杯蓋2、長頸壺片1、壺片1、高
封土内遺物 杯片2、土師器杯1、破片若干、
サヌカイト片2、チャート製ブレ
イド1、縄文石器剥片1、

2号墳

棺具 鉄釘残欠 90
装身具 耳環(銅芯金張り) 2
土器 須恵器杯蓋4、杯身3、高杯2、壺片1
土師器杯1

封土内遺物 石鉢1、水晶片1、

1・2号墳の封土内出土石器は、当地域が朝日ヶ丘遺跡に近いので封土に用いた土中に遺物が混入したものと考えられる。

る。両墳とも床面は二層に分けられ、追葬が行なわれたことを示している。

古墳の年代は、両墳とも須恵器が、森浩一編年のⅢ型式末およびⅣ型式前半にあたるもののが出土しており、床面が二層に分けられ追葬の痕跡を残すことから、六世紀末に相ついで築かれ、七世紀前半に追葬がなされたと考えられる。

(b) 苦楽園五番町5号墳(図157-25)

所在地 西宮市苦楽園五番町七二の一

古墳は、一封土二石室という特異な形態をもつとともに、墳丘裾部に石列をめぐらしたものである。1・2号墳の築造順序は化粧石垣及び土層追求の結果、1号墳がわざかに早く築かれたことがわかる。化粧石垣は、はじめ1号墳石室の入口部から封土外縁にそつてめぐらされていたが、1号墳石室の東側石垣を切つて2号墳石室が築かれた段階で、1・2号墳石室を直線に連結し、2号墳石室の東側封土外縁にそつてめぐらされたものである。

古墳は、すでに封土が失われ、天井石及び左右の側壁の一部が露出していた。現地保存を前提とするため、封

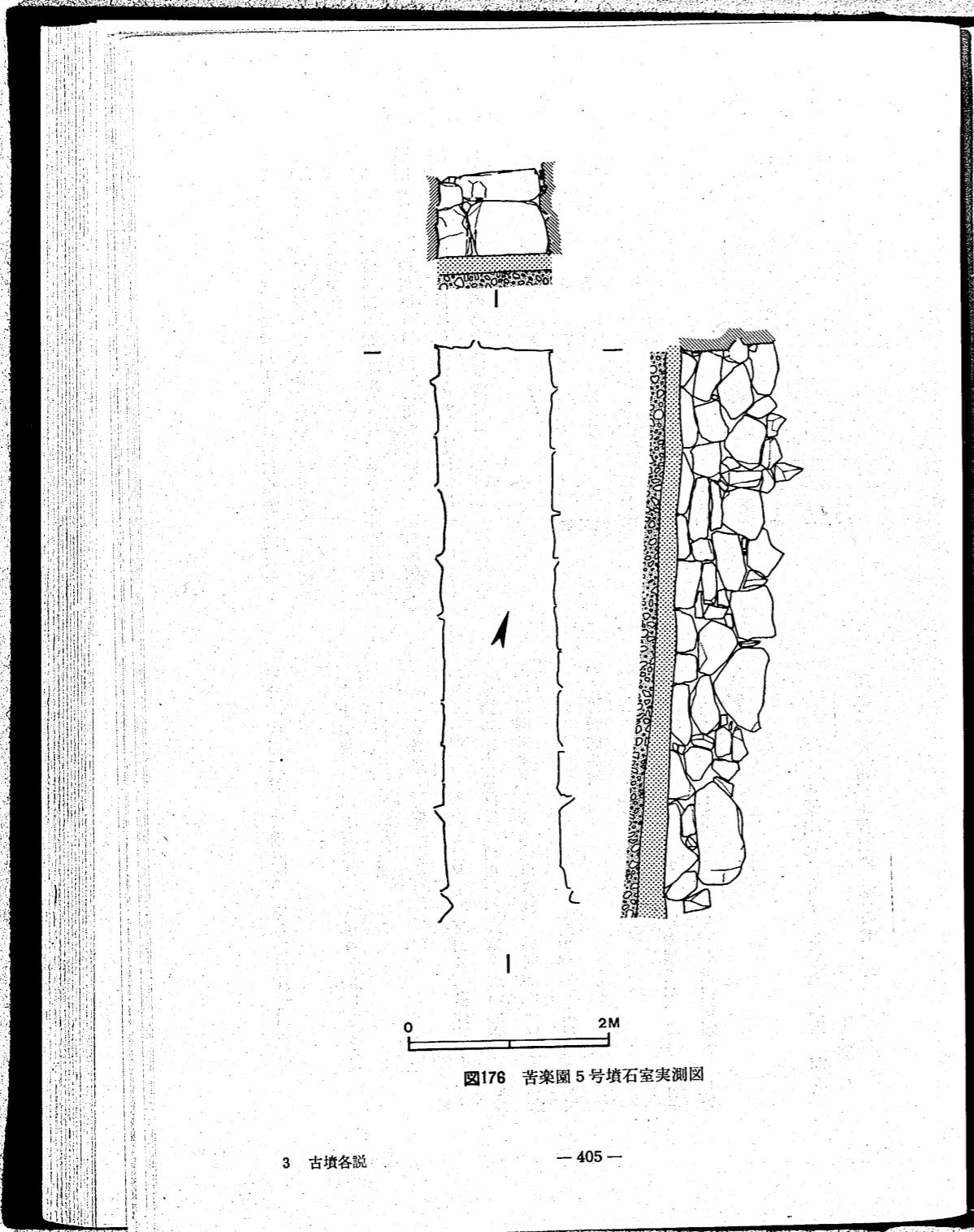


図176 苦楽園5号墳石室実測図

3 古墳各説

- 405 -



写真110 苦楽園5号墳石室

土の調査は全面を掘り下げる方法をさけ、主体部を中心
に四方にトレンチを設定し、土層を追求した結果、径約
一五メートルの円墳であることが判明した。

外部施設としては、石室羨道部端に左右側壁の第一段
目につづけて、封土盛土上に東西方向に約一・〇メートル
ずつ数個の石を配列していることが判明した。これ
は、苦楽園五番町1・2号墳にみられた「化粧石垣」と
呼称されたものに類した施設と考えられる。

内部構造 内部構造は、主軸をN22Wに向けた無袖
式の横穴式石室である。天井石は、左右の側壁上に架さ
れた状態で一個遺存していたのみで、他は失われ、墳丘
周辺に天井石に使用されたと思われる石材が散乱してい
る。

石室の規模は、全長五・六メートル、奥壁巾一・〇八
メートル、羨道巾一・一〇メートル、床面よりの高さ一
・一〇メートルを計る。床は、北から南へ5度の傾斜を
もつ地山を奥壁部で一〇センチ、羨道部で約三〇センチ

- 404 -

第3章 古墳時代

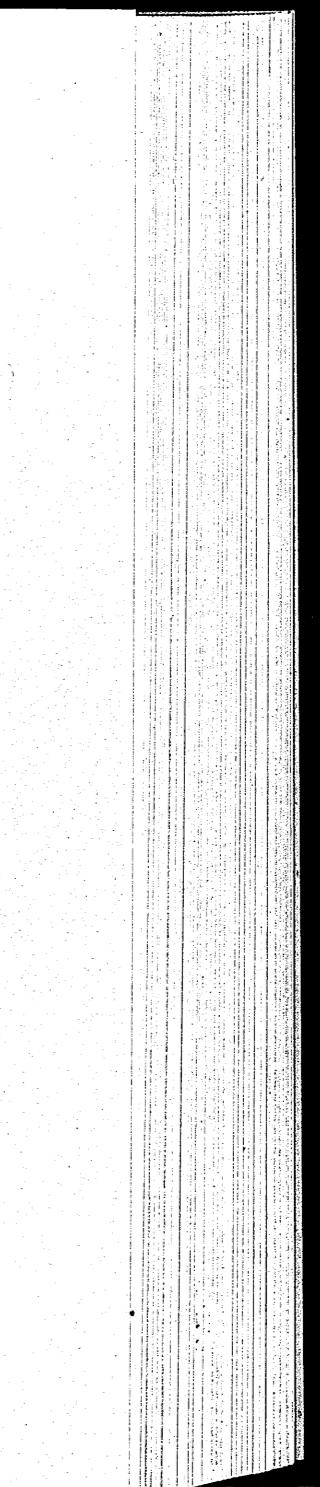


図178 苦楽園7、8号墳地形実測図

3 古墳各説

- 407 -

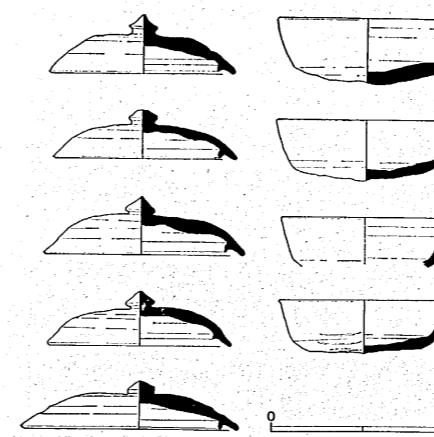


図177 苦楽園5号墳出土遺物実測図

の厚さで置土してほぼ平坦とし、さらに全面に約五センチの土を貼つて整形している。なお、排水のための施設は認められなかった。

奥壁は、二段四個の石で築成され、第一段目は石材を縦位置に、二段目は横位置に使用している。左右の側壁は、四段で第一段目に花崗岩の割石を横位置に、第二段目から大小不揃いの石を横位置に用いている。左右の側

壁は、床面に対して垂直で、持ち送られていない。

出土遺物は、つぎのとおりである。

出土遺物
棺具 鉄釘残欠 38
装身具 耳環銅芯金張り 1

土器 須恵器蓋杯5、杯身4、破片若干
遺物の出土状況は、須恵器が奥壁に近い部分と羨道端部の二群にまとまって検出され、奥壁部の一群は原位置を保っていたと考えられるが、羨道部の一群は移動している可能性が高い。

古墳の年代は、出土した須恵器の型式が、森浩一編年の第IV型式前半に属することから、七世紀初頭から中葉の時期になる。

(c) 苦楽園5番町7・8号墳(図157-26-27)
(確認調査)
所在地 西宮市苦楽園五番町七二の一

- 406 -

第3章 古墳時代

分布調査によつて、調査地区内で古墳時代後期の横穴式石室(5号墳)一基と同型式の古墳と思われるもの三基の遺存が判明した。このうち、6号墳と呼称したもののは、調査の結果、古墳であるとの確証を得ることができなかつた。他の二基(7・8号墳)は、数個の石列が南北にのびていることが、分布調査における観察で判明してゐたので、古墳か否かの確認を目的とする調査を行なつた。

位置と外形

7号墳は、苦楽園五番町5号墳より南西へ一メートル、8号墳は、同じく南へ一四メートルにあり、兩墳は、一〇メートルの間隔でほぼ並行している。封土は流失し、道路・側溝によつて石室の半分は破壊・埋没し、側壁の石列が露出していた。

構造の概要

a 7号墳

(1) 遺構は、横穴式石室で、道路によつて羨道部

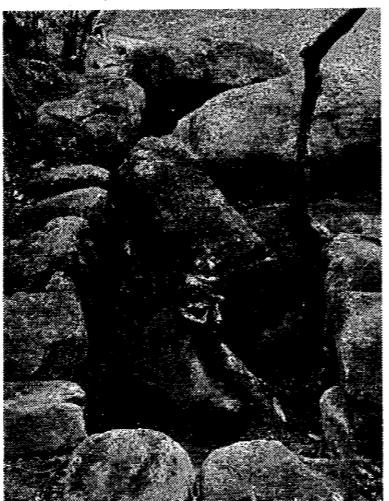


写真112 苦楽園8号墳石室



写真111 苦楽園7号墳石室

が破壊されている。

(2) 袖の有無については不明であるが、現状で

- (1) 遺構は、横穴式石室で、道路によつて羨道部が破壊されている。
- (2) 袖の有無については不明であるが、現状では無袖式と考えられる。
- (3) 封土・天井石はすでに失われている。天井石の一部は、石室内に崩落している。
- (4) 石室の規模は、現状で奥壁巾一・一四メートル、左側壁長三・三五メートル、右側壁長五・四〇メートルを測る。
- (5) 側壁石組みは、四段目まで遺存する。
- (6) 石室主軸は、5号墳とほぼ同方位を示す。

b 8号墳

リ 八十塚群集墳の総括

a 特 色

八十塚群集墳は、前項で記したように、分布状態や土地から五支群にグルーピングすることができるものの、現在、岩ヶ平支群を除いては、遺存する古墳が一から五基以内であるため、群集墳全体、あるいは各支群について検討を加えるとき、おのずから僅少の資料でもって判断するという問題点が残るが、いくつかの特色を指摘することは可能であろうと考える。表57～59を参照しつつ、外形（外部構造）・内部構造・出土遺物についてみると、つぎのようになる。

外形 古墳は、朝日ヶ丘支群が丘陵の頂部に立地する以外は、台地の傾斜面に立地するため、封土は低かったと考えられる。現状では封土が失われ、天井石が露出していたり、半壊状態にあるものが多く、墳丘の規模を把握することができないが、地形実測図などから径一〇メートルから一五メートル内外と考えられる。苦楽園五番町支群にのみ墳丘の裾部あるいは封土内に配石施設を認めることができる。この配石施設は、「列石」・「外区列石」などと呼称されているもので、周辺地域においては表57に示したような類例がある。



写真113 苦楽園 1.2号墳

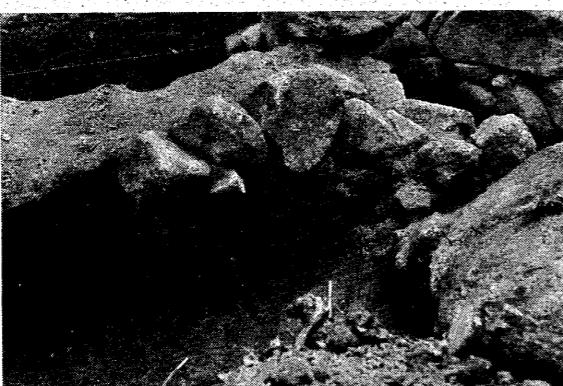


写真114 苦楽園 5号墳

内部構造 八十塚群集墳の内部構造は全て横穴式石室である。石室のプランは、朝日ヶ丘・岩ヶ平・老松町の各支群は有袖式である。老松町支群は現在まで一基も発掘調査されていないが、熊田種次の『探史日誌』に、大谷哲平邸（西宮市老松町・現在、芦屋市六麓荘町二五一に居住）内の庭園工事の際、石室を庭師数名が発掘し、完形の須恵器四点を検出したことを記し、石室の略測図が添えられている。これによると、他の支群にはない有袖式の胴張りした

表57 周辺地域における外区列石を付設する古墳

古 墓 名	所在地	墳形	内部構造	時 期	文 献
苦楽園五番町古墳	西宮市	円墳	横穴式石室	6 C.末	『苦楽園五番町古墳』
" 5号墳	"	"	"	7 C.初	『苦楽園 5号墳発掘調査終了報告』 昭和36年、京大考古学教室の調査
旭塚古墳	芦屋市	"	"	7 C.初～中	『兵庫県宝塚市長尾山古墳群』
雲雀山東支群	宝塚市	"	横穴式石室	7 C.初～中	昭和47年、関学考古学研究会調査
"	"	"	箱式石棺	7 C.初～中	『青石古墳発掘調査報告』
" 西支群	"	"	"	7 C.中～8 C.初	『大蔵司古墳群発掘調査概報』 『嵯峨野の古墳時代』
青石古墳	西宮市	"	横穴式石室	7 C.中～8 C.初	
大蔵司古墳群	高槻市	"	"		
御堂ヶ池群集墳 13号墳	京都市	"	"		

表58 西摂地域周辺における陶棺出土表

所在地	遺跡名	陶棺の形式	備考	文献
芦屋市 六麓莊	八十塚A号墳	須恵質 家形の四柱式	横穴式石室	
" 三条町	不明	破片探集		
" 山手中学校前	"	"		
豊中市 桜井谷	太鼓塚古墳	須恵質 家形四柱式		"日本陶棺地名表" 斎藤和夫・森浩一『古代学研究』第1号 1949 『豊中市史』(資料編) 1960
	新池付近	"		"紙津国有馬郡東山出土の陶棺" 武藤誠 『芦屋市文化財調査報告』第1集 1959
野 旭	蛇池付近	"		
岸本塚古墳	"	横穴式石室(合葬)		
防潮塚古墳	"	"		※隣接する吹田市・似禪寺山遺跡・山田下・竜ヶ池駅跡・同出口町片山公園遺跡からも陶棺片の出土報告がある。『かわにし』第1巻 1974
金塚古墳	"	"		
新 緋塚古墳	"	亀甲式	無袖式横穴式石室	
免宮山北塚古墳	"	小型亀甲式	横穴式石室	
不 明	"	家形四柱式	(大英博物館蔵)	
川西市 山 本	"	不 明		
池田市 五月丘	五月山古墳	須恵質 家形四柱式	横穴式石室	
宝塚市切畑字長尾山	平井古墳群	破片探集		『平井古墳群』1971

プランをもつことが判る。現在、老松町大江邸に残る一基も同型の石室である。劍谷支群は、調査された1号墳が半壊のため、袖の有無は不明であるが、最近発見された3号墳とともに石材の用法からみて岩ヶ平支群に近い



写真115 宝塚長尾山古墳群

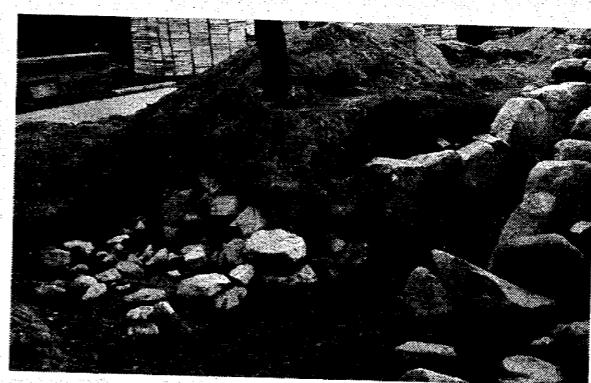


写真116 岩ヶ平支群A号墳

形式のものである。

有袖式のほとんどは片袖式であるが、岩ヶ平支群A号墳(八十塚A号墳)と13号墳は両袖式と報告されている。

しかし、13号墳は、外形観察によるものであるため、その当否はおくとし

て、A号墳は、実測図あるいは現地遺構(保存)での検討では、両袖式とするよりはむしろ片袖式とすべきである。

石室内施設としては、岩ヶ平・朝日ヶ丘・劍谷の各支群の玄室部に敷石が認められる。

埋葬施設は、岩ヶ平支群A号墳で陶棺が使用されている以外は、原則として組合せ式木棺である。

出土遺物 岩ヶ平支群A号墳より須恵質家形四柱式陶棺二棺が出土している。この陶棺は、表58に示したよう

に西摂地域において出土しているものと同形式で、本古墳群ではこの一例のみである。

耳環は、各支群より検出されているが、支群によつてつぎのようないきを指摘することができる。

銅芯銀張環(銀環)は岩ヶ平支群、純金環は朝日ヶ丘支群、銅芯金張環(金環)が苦楽園五番町・老松町各支群より出土している。なお、周辺地域では表58に示した古墳より耳環が出土している。

玉類は、岩ヶ平支群と朝日ヶ丘支群から出土している。

b 年代

八十塚群集墳を構成する古墳は、規模・構造・出土遺物から古墳時代後期に属するものである。

古墳時代後期は、副葬される須恵器の型式によつていくつかの時期に細分されている。ここでは森浩一須恵器編年(1)にしたがいその年代を考えてみたい。

八十塚古墳群すでに発掘調査されたものについて

表59 西摂地域周辺における耳環出土の古墳

古墳名	所在	内部構造	耳環	数	伴出遺物
			金 銀 銅		
孤塚古墳	池田市	横穴式石室	○	2	須恵器
中尾塚古墳	箕面市	"	○	2	"
野畑岸本塚古墳	豊中市	"	○	7	紡錘車・駒・高杯
太鼓塚古墳	"	"	○	4	管玉・ガラス小玉・丸玉
貝足塚古墳	西宮市	横穴式石室	○	4	・馬具・須恵器
王子ヶ丘古墳	"	小形竪穴石室	○	4	勾玉・ウス玉
五ヶ山一号墳	"	横穴式石室	○	1	馬具・刀子
関学構内古墳	"	"	○	5	切子玉・滑石製勾玉・馬
夙川学院構内古墳	"	"	○	3	須恵器・馬具
老松古墳	"	"	○	1	勾玉・切子玉・管玉・小玉
駒塚古墳	芦屋市	"	○	1	直刀・鉄斧
宮山北塚古墳	豊中市	横穴式石室	○	4	銅製鉢付釧・須恵器・
宮山南塚古墳	"	"	○	1	提瓶
上野青池古墳	"	"	○	2	管玉・土玉・六鈴鏡・斧・
勝福寺古墳	川西市	"	○	2	馬具・縦模様帶神獸鏡
"	南	粘土	○	2	大刀・玉

は、表57に示したように、それぞれ年代の設定がなされている。したがって、本稿をすすめるにあたって当然この年代にしたがうべきであるが、最近の須恵器編年の成果の上に立つてみた場合、若干再考すべきものがあると考えられるため、一部修正をおこない表8に示した。このため、表57の年代と若干の補正を生ずる結果となつたことをあらかじめ明らかにしておきたい。

さて、八十塚群集墳で調査されたものは十基である。これらの古墳から副葬された須恵器が検出されている。しかし、表57に示したようにその出土量に多少があり、追葬にともなうものと考えられるものがあるため、ますます型的に古いものと新しいものを古墳別に抽出し、編年にてはめたのが表60となる。この表より本古墳群の年代はつきのようと考えられる。

c まとめ

八十塚群集墳について、つぎのことが指摘できる。

(a) 等質的内容をもつ群集墳である。群集墳内に時期的に先行する古墳や盟主的な規模あるいは、前方後円墳・方墳など特異な墳形をもつ古墳を含まず、封土の低い底径が一〇メートルから一五メートルの規模の円墳によって構成されている。

(b) 外部施設として、苦楽園五番町支群にのみ墳丘の周縁部に列石をもつ。

(c) 内部構造は横穴式石室である。石室のプランは、朝日ヶ丘・岩ヶ平・老松町の各支群は有袖式で、苦楽園五番町支群は無袖式である。老松町支群の石室は胴張りする。

III型式後半（六世紀後半）に朝日ヶ丘支群・岩ヶ平支群・劍谷支群において造墓が始り、これらの支群が造墓を停止し、IV型式前半（七世紀前半）の須恵器をともなう追葬の時期に苦楽園五番町支群において造墓がはじまり、この支群はIV型式前半の須恵器のみを副葬してその活動を停止する。このことから、本群集墳は、六世紀後半から七世紀前半にかけて形成されたものであると考えられる。

(d) 埋葬施設は組合せ式木棺を原則としている。

(e) 出土遺物は各支群とも内容的に差は認められない。

(f) 本古墳群の年代は、各古墳に副葬された須恵器の型式がⅢ型式後半からⅣ型式前半に属することから、六世紀後半から七世紀前半に相当する。

(g) 群集墳の形成は、まず六世紀後半苦楽園五番町支群を除く各支群で群の形成(造墓活動)が行なわれ、これらの支群が形成を停止し、すでに造られた古墳に追葬

を行う七世紀前半に、苦楽園五番町支群において造墓が開始される。この支群は、Ⅳ型式前半以後の須恵器を副葬しないことから、この時期でもって群の形成を停止したと考えられる。これを森浩一のいう造墓期と追葬期という考え方⁽³⁾にあてはめた場合、苦楽園五番町支群は、他の支群が近畿地方の代表的な群集墳の造墓期及び追葬期に一致するのに對し、宝塚市長尾山古墳群⁽⁴⁾と同じく、七世紀前半の古墳時代終末期に位置づけられるものである。

d 地誌にみられる八十塚

芦屋市の西北部、岩ヶ平の地に多くの古墳が遺存していることは、早くから知られていてと考えられる。寛文年間(一六六一~七二)に打出村の分村として岩ヶ平周辺が新田開発されて人々が立ち入るようになると、当然遺存する古墳に注目したことであろう。岩ヶ平の古墳がはじめて記録されるのは、享保十八年(一七三三)に完成した並河誠所の『日本輿地通志』畿内部⁽⁵⁾のうち「摂津志・菟原郡」の墳墓の項においてである。本書は、案内記的なあるいは文学的な著作のことなる。本書は、案内記的なあるいは文学的な著作のことなる。

り、厳正な考証(史料採訪と史蹟の踏査)を徹底的に行なつた地誌で、塚の多いことから「八十塚」と記録している。古墳が多数群集する地に対して、「百塚」・「千塚」・「塚原」などの名称をつけることは、全国的に類例がある。

ついで、寛政八年(一七七六)秋里籬鳥の絵入り名所案

内記『摂津名所図会』に阿保親王墓とならんで八十塚が紹介されている。八十塚の説明は、前記『摂津志』の文章によっている。この後、八十塚に関する記録はなく、おそらく村人の間でのみ伝承されていたものと考えられる。そして、明治末期に刊行された『西摂大觀』において再び岩ヶ平の古墳がとりあげられる。これによると、

旧菟原郡・名所旧蹟の部に「岩ヶ平窟塚」、墳墓の部に

「岩ヶ平の古墳」として記録されている。

前者は、「土蜘蛛遺跡と称するもの」との副題で、岩ヶ平から三条村にかけて塚穴数百と記し、後者は福原潜次郎が『考古界』五篇一号(明治四十年)に「摂津国武庫郡打出村の古墳」と題して発表した論文を転載してい

る。

また、大正十年刊行の『武庫郡志』にも記録されているが、その内容は、前記福原論文によつたものである。以下に、各地誌の「八十塚」・「岩ヶ平の古墳」に関する部分を抄出しておきたい。

『摂津志』 菊原郡 陵墓

八十塚 打出村西岩平山中有數冢呼日八十冢。

打出村西岩平山中有數冢呼日八十冢。

『西摂大觀』 武庫郡東部第五 名所旧蹟

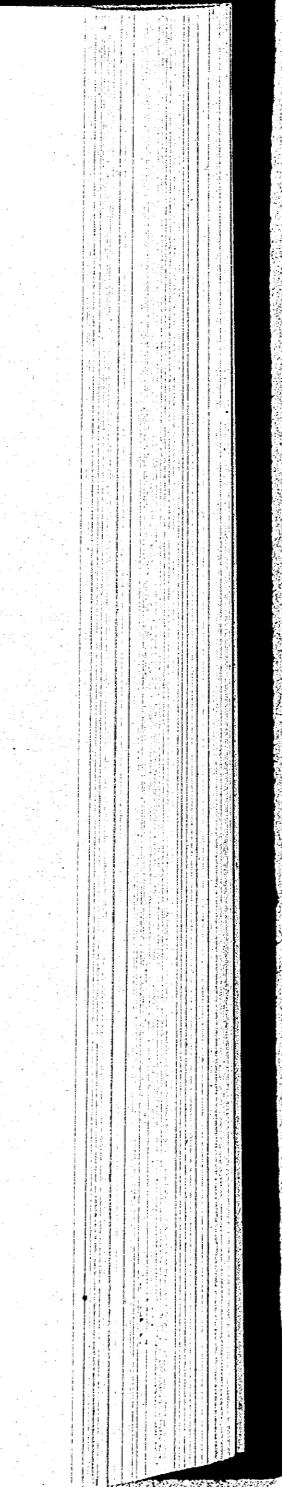
岩ヶ平窟塚(土蜘蛛遺跡と称するもの)旧菟原郡芦屋より打出の山中に向つて踏査するに、先づ打出の字岩ヶ平を

註(1) 森浩一・石部正志「後期古墳の討論を回顧して」『古代学研究』30 昭和三十七年

(2) 橋本澄夫「能登邑知地溝帶における終末期横穴石室の姿相と古墳時代の終焉」『古代学研究』58 一九七〇

(3) 森浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地—古墳終末への遷移的討論として—」『古代学研究』57 一九七〇

(4) 石野博信「宝塚市長尾山古墳群」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第一集 一九七一



中心とし、東は越木村西は三条村に亘る間現存する塚穴
数百に上れり、土人はいふ此土窟は往古火の雨火の風の
時に住まひしものと。

『同』 武庫郡東部第七墳墓

岩ヶ平の古墳 打出なる親王陵の前細道を、左に折れ小
河に沿ひ上ること十四五町にして、字岩ヶ平と称する戸
數十余戸の部落に達す、土人に聞くに此村は打出村の出
戸にして、往古より小村なりと言ひ伝ふるも年代詳か
らず、村の鎮守は天満宮なれど維新前は觀音堂なりしと
いふ。……さて鎮守の森の後より南は七八町北は十四五
町の間に於ける石柳の墨々たるもの無数あり、而して北
西に亘る分は一帯の小松林にて、道路なく搜索に便なら
ず、然れども大抵の凸起部は皆石柳の存する所なりとし
て不可なきが如し、されば摂津名所図会に八十家の名称
を附せしこと実に其数の多きことを言へるは正当なりと
いふべし……。

岩ヶ平の古墳 打出なる親王陵前の細道を左に折れ、小
川に沿いて上ること十四五町にして、打出の一部なる字
岩ヶ平と称する一部落に達す……鎮守の森の後より南は
七八町、北は十四五町の間に石柳の墨々たるもの無数あ
り、而して北西に亘る部分は小松林にして搜索に便なら
ず、然れども大抵の凸起部は皆石柳の存する所と見て不可
なきが如し、されば摂津名所図会は之に八十塚の名称を
附せり……

岩ヶ平の古墳 打出なる親王陵前の細道を左に折れ、小
川に沿いて上ること十四五町にして、打出の一部なる字
岩ヶ平と称する一部落に達す……鎮守の森の後より南は
七八町、北は十四五町の間に石柳の墨々たるもの無数あ
り、而して北西に亘る部分は小松林にして搜索に便なら
ず、然れども大抵の凸起部は皆石柳の存する所と見て不可
なきが如し、されば摂津名所図会は之に八十塚の名称を
附せり……

えよう。

本稿では、これらの資料の紹介を行ない、あわせて知
り得る限りその出土地点と出土状況について記しておき
たい。なお、各所蔵資料に付した一連番号は、実測図・
写真・観察一覧表の番号に一致する。

イ、辰馬悦蔵所蔵資料

〈駒塚古墳出土遺物〉(図179-1-24)

明治四十二年(一九〇九)八月、福原会下山人・村上五
郎・西村義則の三氏が、親王塚古墳の北方、坊主山と呼
べられる小丘陵頂部の古墳(駒塚)を踏査した際に西村義則
が採集した金環一・水晶製切子玉一・碧玉製管玉一・勾玉
一・ガラス製粟玉十五・滑石製粟玉五の計二十四点を辰
馬悦蔵が譲り受けたものである。現在、これらは一枚の
台紙に整理されている。一枚の台紙につきのような註記
(西村義則記)がある。

武庫郡打出村駒塚発見金環

明治四十二年八月十五日、福原会下山人・村上五郎

氏ト同行、余ノ小サキ鉄ノ刃先、金環ヲ傷ク、鉄ヲ
金カンクワト名付ク、

右、西村義則氏手記

口、城山南麓出土竈形土器（京都大学蔵）

（図180—1・2）

大正八年（一九一九）城山南麓で開墾工事の際に発見されたものである。この資料が発見された時の状況については、『考古学雑誌』第九巻第八号に清家植直が「釜及竈形土器の新発見」と題して報告されている。

ハ、三条寺内出土竈形土器

（京都大学蔵）（図180—3～5）

昭和三年五月、三条寺内地ならし中に一基の古墳が発見され、それより出土したものである。この一基の古墳に隣接してもう一基の古墳が発見され、これら二基の古墳の発掘調査記録が『考古学雑誌』第一八巻第一号に長町彰が「摂津山芦屋古墳調査報告」と題して報

告している。また、『歴史と地理』第二二巻第五号に、島田貞彦が「本邦古墳発見の竈形土器」と題し、小川五郎の口述として、

（七、摂津国武庫郡精道村三条古墳発見は、竈の形式として最も具備するものであつて、総高約八寸を有している。発見地は前記（城山）のものとほぼ同方面である。この土器を出土した古墳と約十間をへだてて並存する同様の石室墳あり、この後者の古墳は比較的に精密に調査せられているものであつて、其内容遺物を知ることができる。この古墳をA墳とし土製竈を出土したものとB墳として記してみるとA墳は羨道入口を東南にし其の幅約一間、奥壁まで約三間半を数え、遺物として台付壺二・高杯三・吹壺一・杯十八の祝部土器と若干の小玉類、馬具として雲珠五を数へ、此外鉄鎌十數を発見せられている。B墳は前記とほぼ同様の大きさを有し、遺物として上記の竈の外、大形脚付盤一・

高杯七・吹壺一・提瓶一・壺二・杯四等の祝部土器類

と、鉄鎌數個を出土している。このB墳は過去の発掘にかかり此外多少の遺物の散逸をまぬがれないが其等にしてもA墳と比較して両者大別のないことが判然せられる。而して両墳とも封土の形状は判別し難いが、恐らく円墳であったであろうと推察せられる

とある。

ニ、朝比奈貞雄所蔵資料（図181—6～16）

岩園町岩ヶ平在住の朝比奈貞雄は八十塚A・B・C号墳、同10号墳などの土地所有者であるが、同氏はまたその近辺で採集した多くの石器と共に須恵器計一二点（杯蓋三・杯身三・高杯二・碗一・壺二）を所蔵している。

それぞれに墨書きがついているが、ごく簡単なものなので正確な出土地点は明らかにしがたい。しかし、同氏の所有地に属し、A・B・C号墳などの密集する「八十塚群集墳岩ヶ平支群」中心部の出土にかかることはほぼ確かであろう。

ヘ、若林泰所蔵資料（図182—28～39）

昭和二十年代の初め頃、若林が朝比奈貞雄（岩園町在住）とともに「八十塚群集墳」より採集したものや、朝比奈氏から譲り受けた杯蓋二・杯身一・高杯四・提瓶一・壺一・器台一・長頸壺蓋二の計二一点の須恵器である。

これらの資料は、いづれも「八十塚」に由来するもので



写真117 朝日ヶ丘町257番地 須恵器出土当時の
状況(昭和29年写)

〔昭和二十九年六月十六日(水)、朝日ヶ丘町二五七番地県営テラスハウス二十八戸建設現場地下約四尺よ

り古墳の天井石らしき石組の下から、提瓶一・杯蓋三（径約五寸）・杯二・蓋付杯四組発見、天井石らしきものは爆破してしまった由、遺物は月若町神井建設KK保管、同十七日、県教委島田氏・市浜氏と現地へ、二五七番地ほぼ中央西寄り、東西に（入り口は西）石室が

(昭和二十六年四月十二日、山手町二一一番地から須磨発掘の報(建築課)あり、市営住宅工事現場(鶴田)現場)、ほとんど完形一個、他の一個は発見に際して壊し、建築課須磨氏が保存す。ほかに蓋らしきものも片二組を発見、これも須磨氏が保管す。同年七月二十四日県教委島田氏鑑定「古墳時代末期のもの」ととなつたが、後年同氏より市教育委員会に寄贈された。

あることに、確かであるか、個々の資料が「八十塚」のどこから採集されたものであるかは不明である。

あることに、確かであるか、個々の資料が「八十塚」のどこから採集されたものであるかは不明である。

チ、六麓荘町一八一番地出土資料
〔芦屋市教育委員会蔵〕(図181—42・43)

チ、六麓荘町一八一番地出土資料
〈芦屋市教育委員会蔵〉(図181—42・43)

〔昭和三十年九月二十八日、水道課近藤氏から須恵器
発見の知らせあり。出土地六薺荘町一八一、現在市有
地の配水調整池工事中地下約三メートルの箇所から太
川組作業員により発見、ほかにも破片があつた由。〕
とあり、縮尺二分の一の略測図をのせてある。

昭和二十九年六月、朝日ヶ丘町二五七番地の県営住宅建設工事現場から出土した杯蓋四・杯身二・提瓶一の計七点の須恵器である。市教育委員会熊田種次の『探史日誌』によると、

あつたと思われるが崩壊し、原形大破す。島田氏談
「古墳時代後期横穴石室である」石室内幅二・三メー
トル、長さ五メートル位「崩積層」方位、東北から西
南へ」
とあり、当時の現場写真により、四棟並列するテラスハ
ウスのうち、北から二棟目の北西に沿った部分の基礎工
事の際に出土したことがわかる。

第三章 三四〇畠地出土資料

昭和三十五年一月、市の西端、神戸市との境界に接する三条町二四〇番地の阪口二郎邸で土取り作業中に、孙生式土器・土師器・須恵器・埴輪・陶器が出土した。このうち、古墳時代に属する土師器・須恵器（杯蓋二・杯身三・高杯二・同蓋一・甕一）・埴輪である。芦屋市教育委員会の『郷土史料室日誌』によると、
（昭和三十五年一月十四日（土）、三条町二四〇番地
(阪口二郎氏邸内) 土取り作業中、須恵器出土、神戸市



写真118 三条町 240番地遺物出土当時の状況
(昭和35年1月写)

片・鉄器片を採集、現位置は中世寺院址であつたともいわれている。」

とあり、同二十三日の項に、幅一・四メートル、厚さ二十五センチメートルの舟底型の暗黒色土がブロック状に入っている土層断面の略測図が記されている。

鈴木が、六箇荘町の宅地造成現場において、ブルトーラーによってかきあげられた土中より採集された須恵器台付長頸壺一点である。

ル、鈴木富登所蔵資料(図185-62)

と接する丘陵斜面に立地。表土から地山まで約一・五メートルの地点で、黄土層をかぶった暗黒色土幅一・メートルの中から遺物出土、同二十五日、遺物として、土師器・須恵器片・陶棺片・土金片・弥生式土器

ヲ、旭化成寮内出土資料 (芦屋市教育委員会蔵)(図185-63)

昭和四十五年、山芦屋町二十九番地において旭化成寮増築工事にともない採集された須恵器壺一点である。この地は、昭和三十六年二月、京都大学が発掘調査を実施した「旭塚古墳」が位置する地であり、吉岡昭の作成した遺跡分布図には、数十基の横穴式石室の分布が記され

ている。

ワ、室崎政次郎寄贈資料

(芦屋市教育委員会蔵)(図185-64)

岩園町在住の室崎政次郎から市教育委員会に寄贈した須恵器短頸壺一点である。「八十塚」で採集されたものであるが、採集地点は不明。

カ、篠山鳳鳴高校所蔵資料(図185-65)

郷土史家として著名な福原会下山人の母校である篠山鳳鳴高校には、同氏の採集した多数の遺物が所蔵されているが、その中に「芦屋市城山南麓採集」(年月日も記入されているようだが、既に消えてはっきり読めない)と註記された台紙が一枚あり、石鏡一点と共に須恵器片二点が結びつけられている。そのうち一点のみ図示し得たのをここに掲げた。

表61 西宮市・辰馬悦藏所蔵資料〈駒塚古墳出土遺物〉(図179-1-24)

番号	遺物名	法量(センチ)	色調・材質	所見	備考
5~24	栗玉 二〇点	4 勾 玉	3 切 子 玉	2 管 玉	1 金 環
	厚径 さ ○・四 ～○・三 二	厚全長 孔径 ○・四 ○・三 二・六 一・〇	最大径 さ 一・四 一・〇	長直徑 さ 三・八 一・五 碧玉製	長径 短径 環径 幅 三・〇 二・七 ○・五 金色・光沢あり 銅芯金張り?
滑石製 灰黒色	黄 一 三点	ガラス製 青群青	淡黃綠色	濃綠色 (縦方向に縞が入る)	一部剥落、表面のところどころにヒビとキズを認める。わずかに胸張りの傾向をもつ。 直に走り、切目の反対側に強者である。
五点				六角錐形。両端部をわずかに欠損している。形態はやや不整形である。孔は片側のみから穿孔されている。	一部欠損、青緑色のロクショウを出し、わずかに銹化している。環の内側にはヒゼレのような浅い溝が環に対し垂直に走り、切目の反対側に強者である。
台紙 二				台紙 二	台紙 一

戈山南竈出土彫土器 (圖版 80-1-2-27-1-2)

番号	出土地	器種	法量 (センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考	
2	城山南麓	甕	口径 腹径 器高	一二三・八 一八・五 二〇・六	胎土には細砂を含むが全体に良好。黄白色から灰白色を呈す。焼成は良好。	「く」の字形に屈曲する口縁部と丈高丸足の筒状の胴部の前面をへらで切り取って焚口をつくり、その上部を外側へ反転突出させることによって、底を形成する。外面はほぼタテ方向の粗いハケで調整し、内面は同じハケをヨコ方向に使用して調整した後、中・下半はそれをナデ消している。把手の内側には空洞があり、これは焼成時の損壊を防ぐものと思われる。内外面共に煤化痕は見られない。	1と2がセットになる。
1	城山南麓	甕	口径 底径 焚口 器高	一二一・二 三五・二 二〇・五 二七・一	全体に黄白色を呈し、胎土には荒い砂粒を含む。ややもろい。	かなり大きな甕である。上方のすぼまつた円筒状の胴部の前面をへらで切り取って焚口をつくり、その上部を外側へ反転突出させることによって、底を形成する。外面はほぼタテ方向の粗いハケで調整し、内面は同じハケをヨコ方向に使用して調整した後、中・下半はそれをナデ消している。把手の内側には空洞があり、これは焼成時の損壊を防ぐものと思われる。内外面共に煤化痕は見られない。	1と2がセットになる。

表63 三条字寺之内出土竈形土器（図180—3—5・巻頭図版27—3—6）

番号	出土地	器種	法量 (センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
3	内三条寺之	飯(土師器)	口径 器高 孔径 一〇・八センチ 八・八センチ 三・一センチ	内外面共やや黄色味をおびた明茶褐色を呈し、胎土には金雲母など小石粒を若干含む。焼成良好。	丸底の底部に大きく円凹をあげた瓶で上方に反る一对の把手とほぼ直口とする口縁をもつ。ハケは二種が使い分けられ、内部と外面上端部は粗く、外面の大半は細かいハケで仕上げられる。内面の下半には指圧痕も残る。外面部全面逐点状に焼化。	1と2がセツトになる。調整の段階で用いられた二種のハケは三点とも共通している。

4 市内出土の古墳時代遺物

4	三条寺之 (土師器)	内 甕 (土師器)	口径 腹径 器高
5	内 甕 (土師器)	口径 底径 焚口高 焚口底部内法 器高	九・五 一六・二 九・六 一二・八 一六・三
6	岩 ケ 平 杯 蓋	口径 器高 四・〇 四・一	九・九 一六・二 九・六 一二・八 一六・三
7	岩 ケ 平 杯 身	口径 器高 一三・六 四・〇 一四・一	一三・六 四・〇 一四・一
8	岩 ケ 平 杯 身	口径 器高 三・八 四・三	一三・三
9	岩 ケ 平 杯 身	口径 器高 二・一 一・四・六	胎土には細砂を多く含む。内外両面共暗灰色を呈し、焼成良好。
10	岩 ケ 平 杯 身	口径 器高 二・八 一・四・三	胎土には細砂を多く含む。内外両面共暗灰色を呈し、焼成良好。
11	岩 ケ 平 杯 身	口径 器高 二・〇 一・四・四	胎土には細砂を多く含む。暗灰色から青灰色を呈し、焼成良好。
12	岩 ケ 平 高 杯 部	口径 器高 一・一・〇 一・一・九	胎土には細砂をかなり含む。暗灰色から青灰色を呈し、焼成良好。
13	岩 ケ 平 高 杯	口径 器高 九・五 六・七・〇	胎土には細砂をかなり含む。暗灰色から青灰色を呈し、焼成良好。

表64 朝比奈貞雄所蔵資料(図181-6-16・巻頭図版28-16-16)

番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
7	岩 ケ 平 杯 蓋	口径 器高 一四・〇 四・一	胎土には細砂を比較的多く含む。内外両面共暗灰色を呈し、焼成良好。	胎土には細砂を比較的多く含む。内外両面共暗灰色を呈し、焼成良好。	天井部の周縁にかなり明瞭な鉢部をつくる。 胎土には細砂を比較的多く含む。内外両面共暗灰色を呈し、焼成良好。	上方のややすばまつた筒状の胴部の一方にへらを添えて手づねで底を成形している。胴部内面は細かいケ目で調整するが、明瞭な曲線の粘土帯接合部を残す。外側は下方に屈曲する把手をとづけ、粗いケ目全面を調整する。内外両面共十二端は人けがつか消されたり、特に外側上端は人け目状条痕が残る。
6	岩 ケ 平 杯 蓋	口径 器高 一三・六 四・〇 一四・一	胎土には細砂を比較的多く含む。内外両面共暗灰色を呈し、焼成良好。	胎土には細砂を比較的多く含む。内外両面共暗灰色を呈し、焼成良好。	胎土には細砂を比較的多く含む。内外両面共暗灰色を呈し、焼成良好。	・の総高は一二・三セント。三
5	内 甕 (土師器)	口径 底径 焚口高 焚口底部内法 器高	九・五 一六・二 九・六 一二・八 一六・三	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には金雲母などを砂粒を若干含む。焼成良好。	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒を若干含む。焼成良好。	底径より口径の方が大きいタイプの甕で、丸底をなす。調整の技法は二種類のハケが主体をなし、胴部下半から底部にかけては細かいハケ、胴部上半と内面は粗いハケを用いる。
4	三条寺之 (土師器)	口径 腹径 器高	八・六 九・九 一六・三	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には金雲母などを砂粒を若干含む。焼成良好。	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒を若干含む。焼成良好。	部分的に指圧痕も残る。底部を中心化粧
3	内 甕 (土師器)	口径 底径 焚口高 焚口底部内法 器高	九・五 一六・二 九・六 一二・八 一六・三	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には金雲母などを砂粒を若干含む。焼成良好。	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒を若干含む。焼成良好。	あり。
2	内 甕 (土師器)	口径 底径 焚口高 焚口底部内法 器高	九・五 一六・二 九・六 一二・八 一六・三	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には金雲母などを砂粒を若干含む。焼成良好。	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒を若干含む。焼成良好。	上方のややすばまつた筒状の胴部の一方にへらを添えて手づねで底を成形している。胴部内面は細かいケ目で調整するが、明瞭な曲線の粘土帯接合部を残す。外側は下方に屈曲する把手をとづけ、粗いケ目全面を調整する。内外両面共十二端は人けがつか消されたり、特に外側上端は人け目状条痕が残る。
1	内 甕 (土師器)	口径 底径 焚口高 焚口底部内法 器高	九・五 一六・二 九・六 一二・八 一六・三	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には金雲母などを砂粒を若干含む。焼成良好。	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒を若干含む。焼成良好。	上方のややすばまつた筒状の胴部の一方にへらを添えて手づねで底を成形している。胴部内面は細かいケ目で調整するが、明瞭な曲線の粘土帯接合部を残す。外側は下方に屈曲する把手をとづけ、粗いケ目全面を調整する。内外両面共十二端は人けがつか消されたり、特に外側上端は人け目状条痕が残る。
0	内 甕 (土師器)	口径 底径 焚口高 焚口底部内法 器高	九・五 一六・二 九・六 一二・八 一六・三	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には金雲母などを砂粒を若干含む。焼成良好。	内・外面共明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒を若干含む。焼成良好。	上方のややすばまつた筒状の胴部の一方にへらを添えて手づねで底を成形している。胴部内面は細かいケ目で調整するが、明瞭な曲線の粘土帯接合部を残す。外側は下方に屈曲する把手をとづけ、粗いケ目全面を調整する。内外両面共十二端は人けがつか消されたり、特に外側上端は人け目状条痕が残る。

23	22	21	20	19	
笠ヶ塚西	城山麓	坊主山	城山麓	城山麓	
高杯蓋	甕頸部 破片	有蓋壺	杯蓋	台付壺	
器高 つまみ径	口径 一 二 三	口径 一 一 一 五 七	口径 九 ・ 三 受部径 一 一 ・ 七 残存高 五 ・ 一	口径 一 一 ・ 四 器高 四 ・ 二	口径 八 ・ 五 腹径 一 〇 ・ 三 脚径 八 ・ 七 器高 一二 ・ 七
良好、灰黒色を呈する。	胎土、焼成共良好で器表は灰黒色、器内は灰白色を呈する。	細砂はかなり含むが全体に良好な胎土青灰白色を呈し、焼成は良好。	砂粒を多く含み、胎土はやや悪い、黄色味をおびた灰白色を呈し、焼成は良好。	胎土を用いる。灰白色を呈し、焼成は良好。	全体にかなり精練された胎土を用いる。灰白色を呈し、焼成は良好。
胎土、焼成共にきわめて良好、灰黒色を呈する。	胎土、焼成共良好で器表は灰黒色、器内は灰白色を呈する。	胎土、焼成共良好で器表は灰黒色、器内は灰白色を呈する。	胎土、焼成共良好で器表は灰黒色、器内は灰白色を呈する。	胎土を用いる。灰白色を呈し、焼成は良好。	全体にかなり精練された胎土を用いる。灰白色を呈し、焼成は良好。
扁平なつまみ部がつく。	器底がきわめて薄く、内外両共でいねいなヨコナデで仕上げられる。口縁端部には深い沈線があり、天井部は鉛垂文と逆続半円文を組み合わせた花弁文様とも言えるよう文様を。後先とコンバース状の施文具を用いてある。つまみは、細い柱状部に中央のくぼんだ	器底がきわめて薄く、内外両共でいねいなヨコナデで仕上げられる。口縁端部には深い沈線があり、天井部は鉛垂文と逆続半円文を組み合わせた花弁文様とも言えるよう文様を。後先とコンバース状の施文具を用いてある。つまみは、細い柱状部に中央のくぼんだ	器底がきわめて薄く、内外両共でいねいなヨコナデで仕上げられる。口縁端部には深い沈線があり、天井部は鉛垂文と逆続半円文を組み合わせた花弁文様とも言えるよう文様を。後先とコンバース状の施文具を用いてある。つまみは、細い柱状部に中央のくぼんだ	器底がきわめて薄く、内外両共でいねいなヨコナデで仕上げられる。口縁端部には深い沈線があり、天井部は鉛垂文と逆続半円文を組み合わせた花弁文様とも言えるよう文様を。後先とコンバース状の施文具を用いてある。つまみは、細い柱状部に中央のくぼんだ	器底がきわめて薄く、内外両共でいねいなヨコナデで仕上げられる。口縁端部には深い沈線があり、天井部は鉛垂文と逆続半円文を組み合わせた花弁文様とも言えるよう文様を。後先とコンバース状の施文具を用いてある。つまみは、細い柱状部に中央のくぼんだ
前山A に類例あり、 前山A 市 前山A 市	昭和十八年 十月十五日	昭和十七年 九月二十四日	昭和十七年 八月二十四日	昭和十七年 八月二十四日	昭和十七年 八月二十四日
前山A 市 前山A 市	十一月二十六日	十一月二十六日	十一月二十六日	十一月二十六日	十一月二十六日

表6 吉岡昭採集資料(図183-27・卷頭図版28-24)

18 城 山	17 岩ヶ平西 松林	番号 出土地 (部位種)	表65 吉岡昭採集資料(図182~17~27・巻頭図版28~17~25~29~23~24)	胎土・色調 焃成	所 見	備考	4(脣部に墨書き)
壺	口瓶 復径 器高	口径 口徑 残存高	法量(センチ)	胎土には細砂をかなりまじえる。やや白っぽい灰 色を呈し、焼成良好。	口径 腹径 器高	五・一 七・六 七・一	胎土には細砂をかなりまじえる。やや白っぽい灰 色を呈し、焼成良好。
一〇・六 一二・九 一六・三	良好。	九・三 六・一	細かな砂粒を含むが全体 に胎土は良好、青灰黒色 を呈し、焼成も良好。	一五・〇 一一・六 二三・一	胎土には細砂を相当量含 み、径一ミリ程度の小石 粒も散見する。灰褐色か ら灰黒色を呈し、焼成良 好。	一五・一 一六・一 一六・一	胎土には細砂をかなりまじ え、やや黄褐色をおびた灰色 を呈し、焼成良好。
丸底の胴部と の頭部からなる。 胴部下半部は「ラケズリ」 後、タタキ目で整形する。 胴部中位には二本 の凹線の間に横排列点文をめぐらし、頭部に	昭和十七年 八月二十一日	16 岩ヶ平	15 岩ヶ平	14 岩ヶ平	腺	腹径 残存高 一〇・三 一四・三 やや黄褐色をおびた灰色 を呈し、焼成良好。	口縁部を欠損する處で底部に粗いラケズリ 筋が残るほか、全面ヨコナデで調整する。胴 部に若干の稜がみられ、凹線・列点文等の 装飾は一切ない。

新羅からの舶載
和歌山市における古墳文化
関西大学
一九七二年

昭和十九年
七月八日

昭和十九年
七月八日

昭和十九年
七月八日

表66 若林泰所蔵資料(図182-28~39・巻頭図版29~30~37・30~38~39)

番号	出土地	器種	部位	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
27	不明	器台破片	杯蓋	口徑 器高	胎土はやや荒く、暗灰白色を呈する。焼成は良好。		
26	岩ヶ平西方	杯蓋	脚部	口徑 器高	胎土はやや荒く、暗灰白色を呈する。焼成は良好。		
25	岩ヶ平西方	有蓋高杯	脚部	口徑 器高	胎土はやや荒く、暗灰白色を呈する。焼成は良好。		
24	笠ヶ塚西	高杯	脚部	口徑 器高	胎土はやや荒く、暗灰白色を呈する。焼成は良好。		
29	岩ヶ平	岩ヶ平	杯蓋	口徑 器高	胎土はやや荒く、暗灰白色を呈する。焼成は良好。		
28	岩ヶ平	杯蓋	脚部	口徑 器高	胎土はやや荒く、暗灰白色を呈する。焼成は良好。		
				一〇・七 一・九 二・〇	青味をおびた灰黒色、胎土に細砂を多く含み、焼成は良好。		
				一〇・八 一・九 二・〇	胎土には小石粒を散見するが全体に良好。青灰色を呈し、焼成も良好。		
				一一・六 一・五・〇 四・六	胎土には細砂をかなり含む。外面は細砂を若干含む。内外面共灰黒色を呈し、焼成は良好。		
				一一・八 一・七・九 九・四	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。		
				一〇・三 八・二 八・八	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。		
				九・三 五・七 二・二	胎土・焼成共良好、やや焼成良好。		

器底の小形化が目立ち、立ち上がりは低く内傾する。全体にいわいなヨコナデで調整され、底部はヘラケズリを加える。

35	34	33	32	31	30
岩ヶ平	岩ヶ平	岩ヶ平	岩ヶ平	岩ヶ平	岩ヶ平
壺蓋	高杯	脚部	杯高部	杯高部	杯身
つまみ径	器径 口徑 器高	口徑 脚徑 残存高	口徑 器徑 残存高	口徑 器徑 残存高	口徑 器徑 九・八
二・二	三・〇	五・三	九・七	一・〇・三	一一・六
内・外	胎土・焼成共良好、やや焼成良好。	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。
胎土・燒成良好。	胎土・燒成共良好、やや焼成良好。	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。	胎土には細砂をかなり含む。内外面共灰黒色を呈す。
也今昭和二十年山五年奈出勘兵受	昭和二十年山五年奈出勘兵受	天井外推定二千年前	墨書「比奈郡岩ヶ平朝之物也」	墨書「比奈郡岩ヶ平朝之物也」	墨書「比奈郡岩ヶ平朝之物也」

表68 六麓莊町一八一番地出土資料(図183-42-43・巻頭図版30-42-43)						
番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
43	42	山手町二一番地	口徑 器高 八・九 三・五	口徑 腹徑 脚徑 器高 七・七 一・六・八 一・八・八 二・三・一	胎土には砂粒をほとんど含まず、きわめて良好。胎土には砂粒をほとんど含む。全体に暗灰白色を呈し、焼成はやや悪い。	胎土には細砂をかなり含む。胎土には砂粒をほとんど含む。全体に暗灰白色を呈し、焼成はやや悪い。
一六麓莊町 一八一番地	一六麓莊町 一八一番地	杯身	長頸壺	口徑 腹徑 脚徑 器高 一一・七 一・六・八 一・〇・九 二・三・一	胎土には砂粒をほとんど含む。胎土には砂粒をほとんど含み、粗悪。自然釉が多量にかかり、青灰色から灰黒色を呈す。	胎土には砂粒をほとんど含む。胎土には砂粒をほとんど含み、粗悪。自然釉が多量にかかり、青灰色から灰黒色を呈す。

表67 山手町二一番地出土資料(図183-40-41・巻頭図版30-40-41)						
番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
41	40	山手町二一番地	台付 長頸壺	口徑 腹徑 脚徑 器高 一一・七 一・六・八 一・〇・九 二・三・一	胎土には径二ミリまでの石粒を相当量含み、粗悪。自然釉が多量にかかり、青灰色から灰黒色を呈す。	胎土には砂粒をほとんど含む。胎土には砂粒をほとんど含み、粗悪。自然釉が多量にかかり、青灰色から灰黒色を呈す。
一六麓莊町 一八一番地	一六麓莊町 一八一番地	杯身	台付 長頸壺	口徑 腹徑 脚徑 器高 一一・七 一・六・八 一・〇・九 二・三・一	胎土には砂粒をほとんど含む。胎土には砂粒をほとんど含み、粗悪。自然釉が多量にかかり、青灰色から灰黒色を呈す。	胎土には砂粒をほとんど含む。胎土には砂粒をほとんど含み、粗悪。自然釉が多量にかかり、青灰色から灰黒色を呈す。

39	40	38	37	36
岩ヶ平	提瓶	岩ヶ平	岩ヶ平	岩ヶ平
器種 法量 体厚 器高 一一・七 一・四・一 一・四・〇	器種 法量 腹徑 口徑 一一・九 一・五・四 一・九・〇	器種 法量 腹徑 口徑 二・九・八 一・五・六 二・二	器種 法量 腹徑 口徑 二・九・八 一・五・六 二・二	器種 法量 腹徑 口徑 八・六 一一・九 二・二

胎土には細砂をかなりまじえる暗灰色から灰黒色を呈し、焼成は良好。	胎土には細砂を若干含む。焼成がやや悪く、内外面共灰黒色を呈す。	胎土には細砂を相当量含む。青灰色から灰黒色を呈し、焼成良好。	胎土には細砂を若干含む。焼成がやや悪く、内外面共灰黒色を呈す。	胎土には細砂をかなりまじえる暗灰色から灰黒色を呈し、焼成は良好。
前後左右とも大きく、またつくりもつぱである。天井部外面はラケズリで成形され、背面は背の高いつまみがつく。天井部はなだらかに下向して受部を形成し、かえりは高、わざかな屈折をみせる。	やや扁平なソロパン玉状の腹部と細くびれで直口する口頭部をもつ丸底の壺である。外には全周にわたってカキ目調整がほどこされ、底部にはカキ目に先行するヘラケズリの痕跡もみとめられる。腹部内面の上端近くには明確な段焼造が観察でき、その成形技法が平瓶に近いものであることがわかる。	やや扁平なソロパン玉状の腹部と細くびれで直口する口頭部をもつ丸底の壺である。外には全周にわたってカキ目調整がほどこされ、底部にはカキ目に先行するヘラケズリの痕跡もみとめられる。腹部内面の上端近くには明確な段焼造が観察でき、その成形技法が平瓶に近いものであることがわかる。	やや扁平なソロパン玉状の腹部と細くびれで直口する口頭部をもつ丸底の壺である。外には全周にわたってカキ目調整がほどこされ、底部にはカキ目に先行するヘラケズリの痕跡もみとめられる。腹部内面の上端近くには明確な段焼造が観察でき、その成形技法が平瓶に近いものであることがわかる。	前後左右とも大きく、またつくりもつぱである。天井部外面はラケズリで成形され、背面は背の高いつまみがつく。天井部はなだらかに下向して受部を形成し、かえりは高、わざかな屈折をみせる。
「岩ヶ平……」 「朝十一日和六月廿一日午後三時 墨書 岩ヶ平見ス」	「岩ヶ平……」 「朝比奈勘兵エ之 墨書 岩ヶ平見ス」	以下摩滅のため よめず	以下摩滅のため よめず	以下摩滅のため よめず

番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
49	朝日ヶ丘 二五七番地町	杯身	口徑 器高 四・三	二朝五七番地町	胎土は良好。暗灰色を呈し、焼成は良好。	やや小型化の傾向をみせる。
48	朝日ヶ丘 二五七番地町	杯身	口徑 器高 一・四	二朝五七番地町	胎土はやや荒い。内面は暗灰色、外面は青灰色を呈する。焼成は良好。	すこしひずんでいる。
47	朝日ヶ丘 二五七番地町	杯蓋	口徑 器高 一〇・一	二朝五七番地町	胎土はやや荒い。内面は暗灰色、外面は青灰色を呈する。焼成は良好。	
46	朝日ヶ丘 二五七番地町	杯蓋	口徑 器高 一二・五	二朝五七番地町	胎土はやや荒い。内面は暗灰色、外面は青灰色を呈する。焼成は良好。	
45	朝日ヶ丘 二五七番地町	杯蓋	口徑 器高 一五・一	二朝五七番地町	胎土はやや荒い。内面は暗灰色、外面は青灰色を呈する。焼成は良好。	
44	朝日ヶ丘 二五七番地町	杯蓋	口徑 器高 三・六	二朝五七番地町	細砂をかなり含む胎土、青灰色を呈す、焼成は良好。	

70 三条町二四〇番地出土資料(図184—51)60・巻頭図版30—51)55・31—57)61

表70 三条町二四〇番地出土資料(図184-51~60・巻頭図版30-51~55・31~57~61)

番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
54	53	52	51			
三条町 二四〇番地	三条町 二四〇番地	三条町 二四〇番地	三条町 二四〇番地			
有蓋 高杯	高杯 蓋	杯 身	杯 蓋	口径 一三・八 残存高 三・七	胎土、焼成とも良好。全 体に暗灰白色を呈す。	きわめて明確な稜によって体側部と天井部を区別する。天井部のへラケズリは稜までおよんでおり、口縁端部はやや内傾する平坦面をなす。内面に赤色顔料の痕跡あり。
口径 器径 脚径 九・七センチ	一〇・一 一二・一 す。	口径 器高 つまみ径 つまみ高	一・七 五・〇 二・九 一・〇	胎土・焼成とも良好。内 面は暗灰色、外面は自然 釉がかかり黄灰色をな す。	胎土・焼成とも良好。全体 に暗灰白色を呈す。	きわめて高いたちあがりを持つ。内面に赤色顔料の痕跡あり。
54	53	52	51			
三条町 二四〇番地	三条町 二四〇番地	三条町 二四〇番地	三条町 二四〇番地			
有蓋 高杯	高杯 蓋	杯 身	杯 蓋	口径 一三・八 残存高 三・七	胎土、焼成とも良好。全 体に暗灰白色を呈す。	51となると思われ る。
口径 器径 脚径 九・七センチ	一〇・一 一二・一 す。	口径 器高 つまみ径 つまみ高	一・七 五・〇 二・九 一・〇	胎土・焼成とも良好。内 面は暗灰色、外面は自然 釉がかかり黄灰色をな す。	ほぼ直立する体側部と天井部の境に凹線と凸 帶をめぐらし、口縁端部は51同様小さく平坦 面をなす。内面に赤色顔料の痕跡あり。	51と54がセツト る。
54	53	52	51			
三条町 二四〇番地	三条町 二四〇番地	三条町 二四〇番地	三条町 二四〇番地			
有蓋 高杯	高杯 蓋	杯 身	杯 蓋	口径 一三・八 残存高 三・七	胎土、焼成とも良好。全 体に暗灰白色を呈す。	51となると思われ る。
口径 器径 脚径 九・七センチ	一〇・一 一二・一 す。	口径 器高 つまみ径 つまみ高	一・七 五・〇 二・九 一・〇	胎土・焼成とも良好。内 面は暗灰色、外面は自然 釉がかかり黄灰色をな す。	ほぼ直立する体側部と天井部の境に凹線と凸 帶をめぐらし、口縁端部は51同様小さく平坦 面をなす。内面に赤色顔料の痕跡あり。	51と54がセツト る。

をもぐら。スカシは円形で三方に開く。脚部のハラケズリについては不明。

54の高さに難がある。やや内傾するたまがりは、端部をやや横面をつくる。円形スカラケスリを開いた脚は、これを脚部に回転をめぐらす。杯部・脚部内面に赤色顔料の痕跡あり。

					復原器高 九・四

表71 鈴木富登所蔵資料(図185-62・巻頭図版31-62)

番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見
62	六麓荘町 台付 長頸壺	口径 腹径 残存高	一〇・〇 一七・一 二二・二	胎土には細砂を多數含む。灰黒色から暗灰色を呈し焼成良好。	胎土には細砂を散見するが全体にかなり良好。内外共に暗灰色を呈し焼成は良好。
61	三条町 二四〇番地 (須恵輪)	口径 腹径 残存高 たが部径 五・四	一一・三 一二・四 一三・六 一九・四	胎土には砂粒をあまり含まず良好。胎土には細砂をかなり含む。内外共暗褐色。埴輪としてはきわめて焼成良好で、須恵質埴輪に属するものと思われる。	胎土には細砂をやや多く含む。色調は全体に灰白色を呈し、焼成は良好。
60	三条町 二四〇番地 (口縁部 土師器)	口径 腹径 残存高 五・三	一一・四 一二・四 一三・六	胎土には砂粒をあまり含まず良好。胎土には細砂をかなり含む。内外共暗茶褐色。	胎土には細砂をやや多く含む。内外共暗茶褐色。

表72 旭化成寮内出土資料(図185-63・卷頭図版31-63)

番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
63	山吉屋町 二九番地	長頸壺	口径 七・一 腹径 一二・〇 残存高 一七・四	灰黒色から暗灰色を呈し、胎土には微砂を含むが全体に良好。焼成良好。	この種の壺としては比較的小型に属する。ラバ状に開く口縁の外面には三条の弱い凹線をめぐらし、胸部にも、三条の凹線とクシ描	波状文を配する。脚は端部を欠くためその形状は不明であるが、二条の凹線と円形四方スカシをもつ。胸部下半にラケズリ痕を残す。
64	岩ヶ平	短頸壺	口径 七・一 腹径 一一・〇 残存高 一七・四	胎土には径一七・二ミリの小石粒を相当量含む。全体に灰白色を呈し、焼成不良。器表全体の摩滅がいちぢるしい。	天井部のみの破片で口縁部を欠く。器径に比してつまりが小さい感をうける。天井部はラケズリのちヨコナデが加えられ、その後を失いかける。	他はすべてヨコナデで仕上げる。

表73 室崎政治郎寄贈資料(図185-64・卷頭図版31-64)

番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
65	城山南麓	杯蓋	口径 八・九 器高 一一・〇 腹径 一四・一 残存高 一六・六	胎土には細砂をかなり含む。内外面とも灰黒色を呈し。焼成良好。	全体に後が目だたず、肩の張りもない。摩減のため調整技法は明確でないが、底部はラケズリのちヨコナデが加えられ、その後を失いかける。	
66	伝岩ヶ平	杯蓋	口径 二・五 体径 一四・四 器高 一〇・七 腹径 一六・一 残存高 一六・六	胎土には微砂を含むが、全体に良好。内外面とも灰黑色を呈し。焼成良好。	天井部のみの破片で口縁部を欠く。器径に比してつまりが大きい感をうける。天井部はラケズリのちヨコナデが加えられ、その後を失いかける。	

表74 篠山鳳鳴高校所蔵資料(図185-65)

番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
67	伝岩ヶ平	提瓶	口径 一一・六 体径 一四・四 器高 一〇・七 腹径 一六・一 残存高 一六・六	胎土には細砂を含むが、全体に良好。内外面とも灰黑色を呈し。焼成良好。	全体に後が目だたず、肩の張りもない。摩減のため調整技法は明確でないが、底部はラケズリのちヨコナデが加えられ、その後を失いかける。	
68	不詳	平瓶	口径 一一・二 体径 一四・一 器高 一六・七 腹径 二一・七	胎土には微砂を含むが、全体に良好。内外面とも灰黑色を呈し。焼成良好。	天井部のみの破片で口縁部を欠く。器径に比してつまりが大きい感をうける。天井部はラケズリのちヨコナデが加えられ、その後を失いかける。	
69	伝岩ヶ平	長頸壺	口径 一一・九 体径 一四・四 器高 一六・一 腹径 二一・七	胎土には細砂を含むが、全体に良好。内外面とも灰黑色を呈し。焼成良好。	天井部のみの破片で口縁部を欠く。器径に比してつまりが大きい感をうける。天井部はラケズリのちヨコナデが加えられ、その後を失いかける。	

表75 県立芦屋高等学校所蔵資料(図185-66-69・卷頭図版31-66-69)

番号	出土地	器種	法量(センチ)	胎土・色調・焼成	所見	備考
69	伝岩ヶ平	長頸壺	口径 一一・九 体径 一四・四 器高 一六・一 腹径 二一・七	胎土には細砂を含むが、全体に良好。内外面とも灰黑色を呈し。焼成良好。	天井部のみの破片で口縁部を欠く。器径に比してつまりが大きい感をうける。天井部はラケズリのちヨコナデが加えられ、その後を失いかける。	

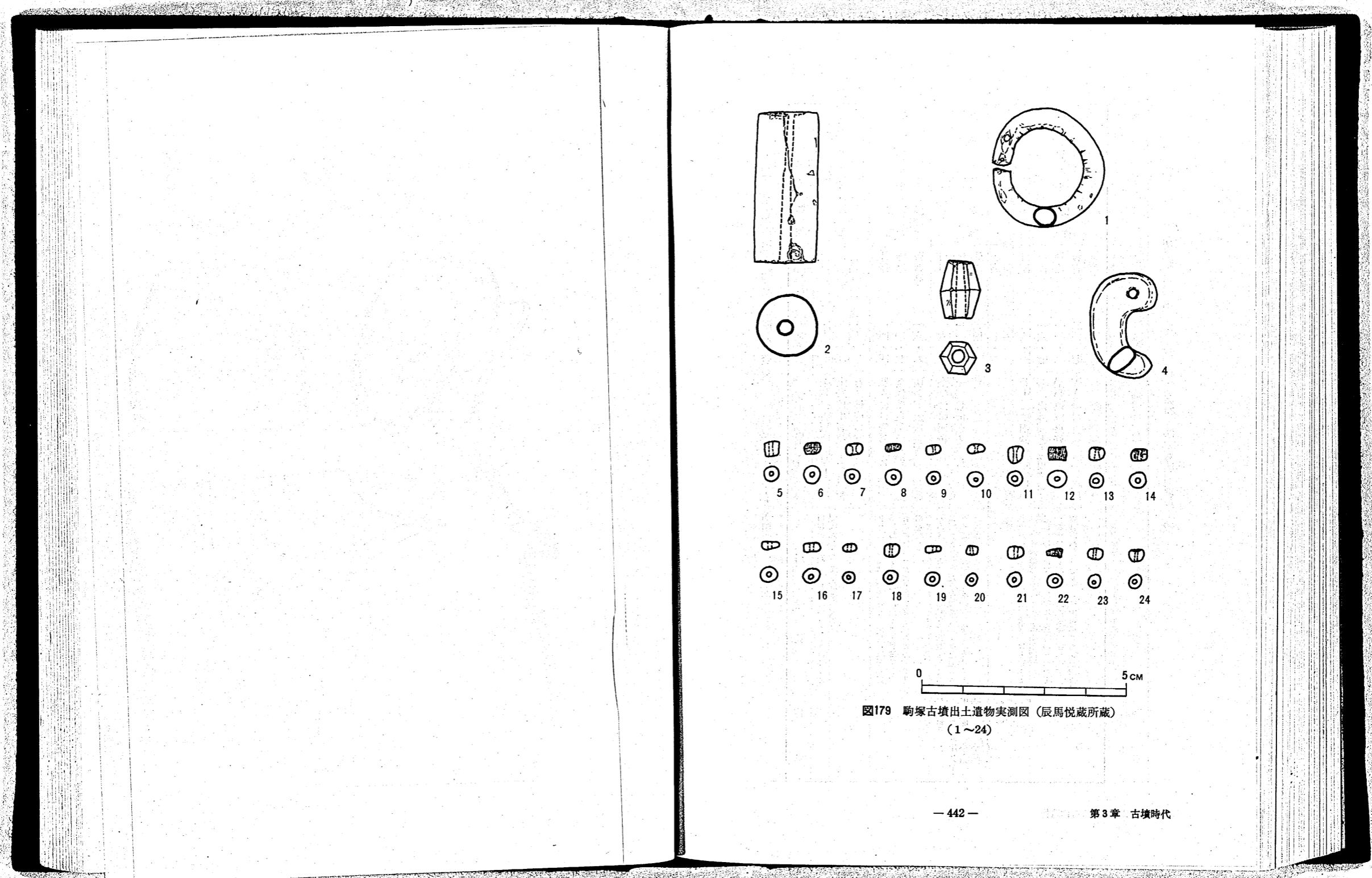


図180 城山南麓出土竈形土器実測図（1～2）
三条寺之内出土竈形土器実測図（3～5）
(京都大学考古学研究室所蔵)

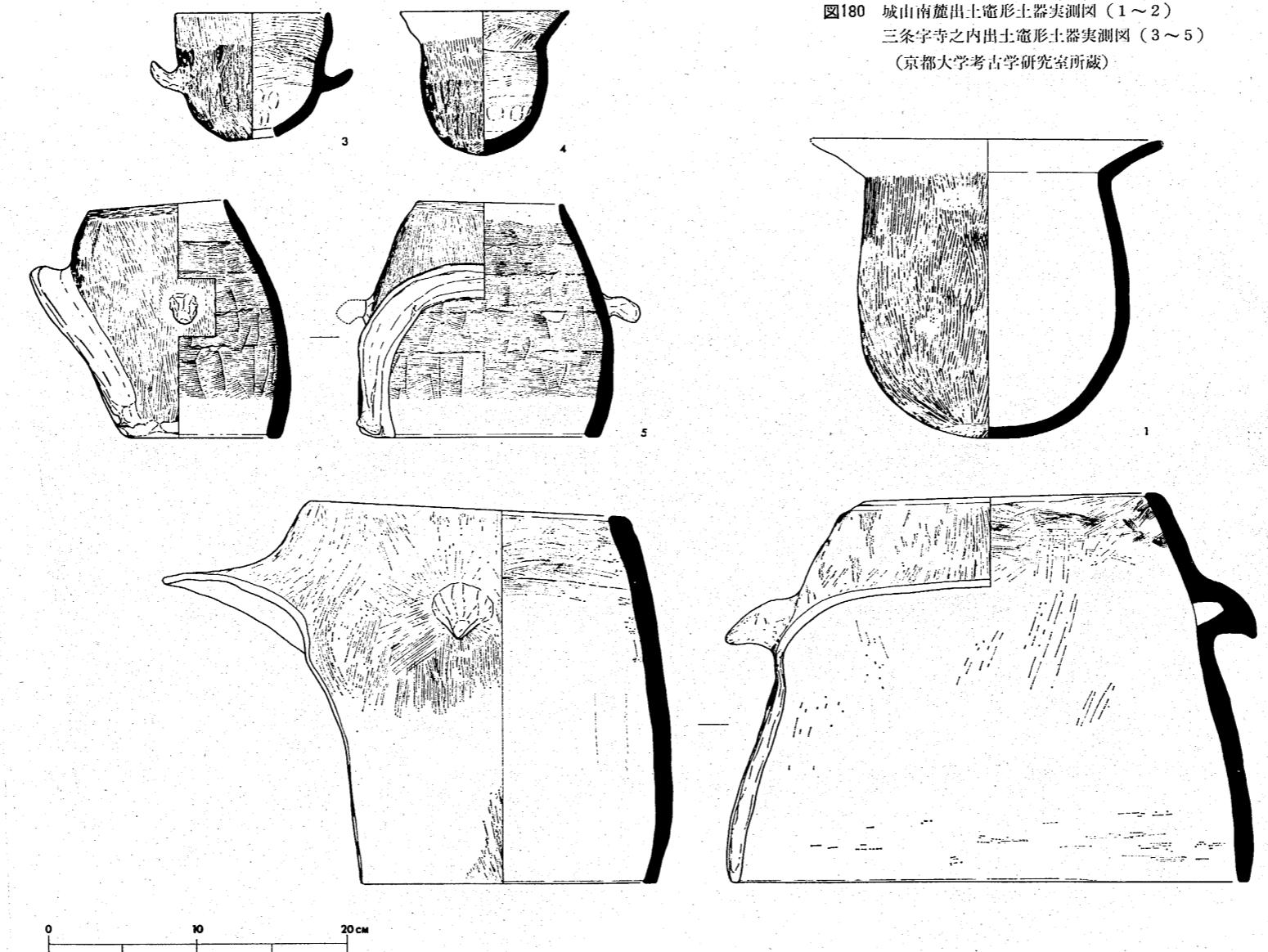
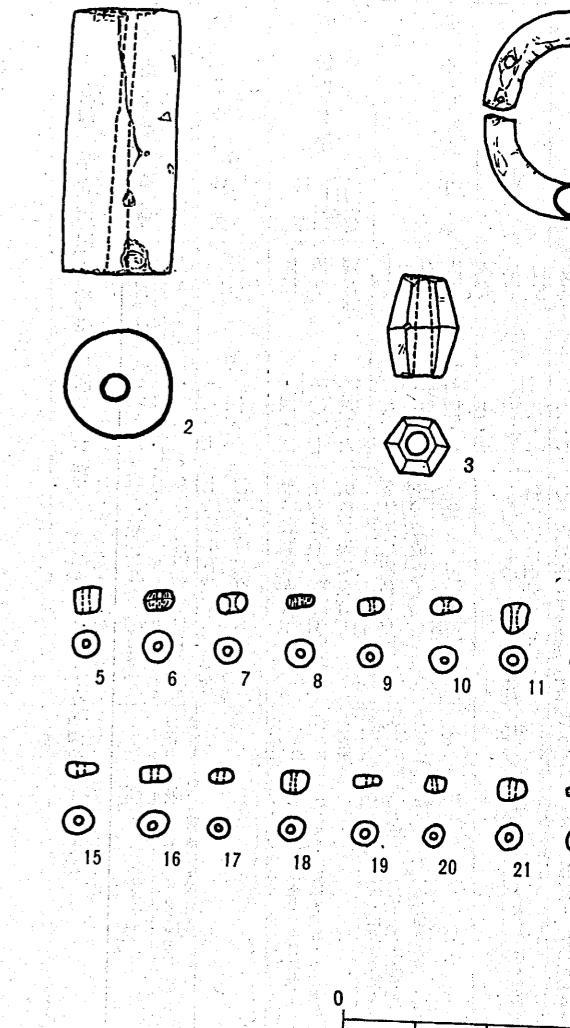


図179 駒塚古墳出土遺物実測図（辰
(1～24)



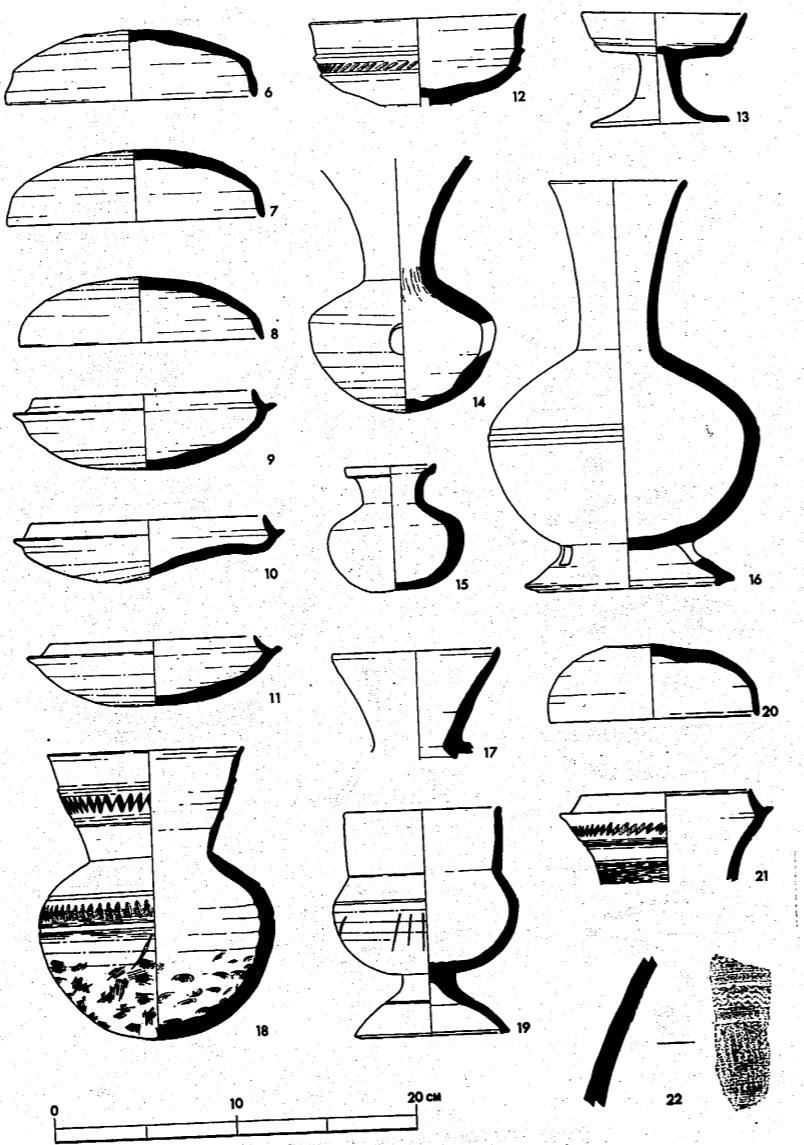


図181 朝比奈貞雄所蔵資料実測図（6～16）
吉岡 昭採集資料（17～22）

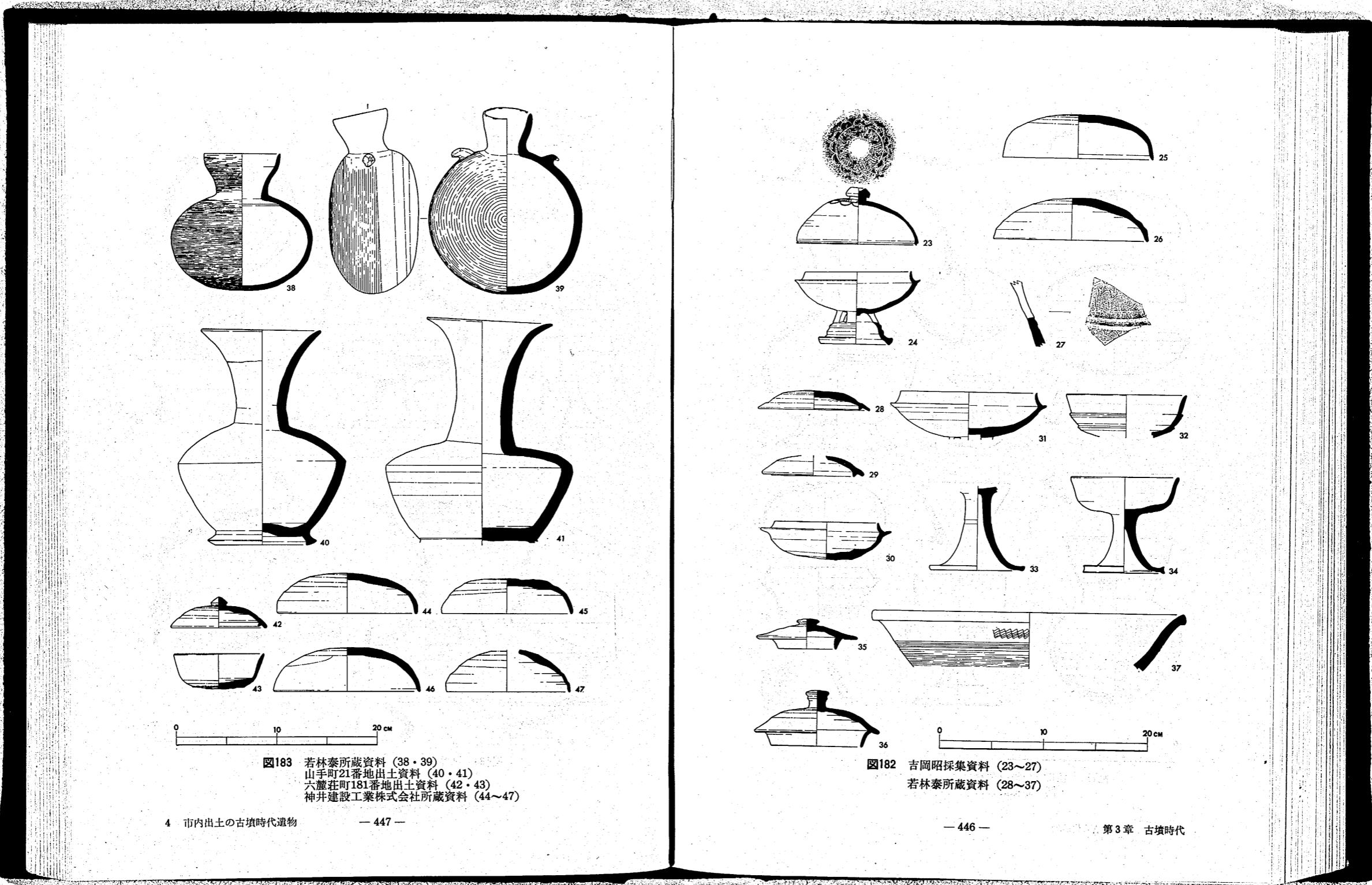


図183 若林泰所蔵資料 (38・39)
山手町21番地出土資料 (40・41)
六郷庄町181番地出土資料 (42・43)
神井建設工業株式会社所蔵資料 (44~47)

図182 吉岡昭採集資料 (23~27)
若林泰所蔵資料 (28~37)

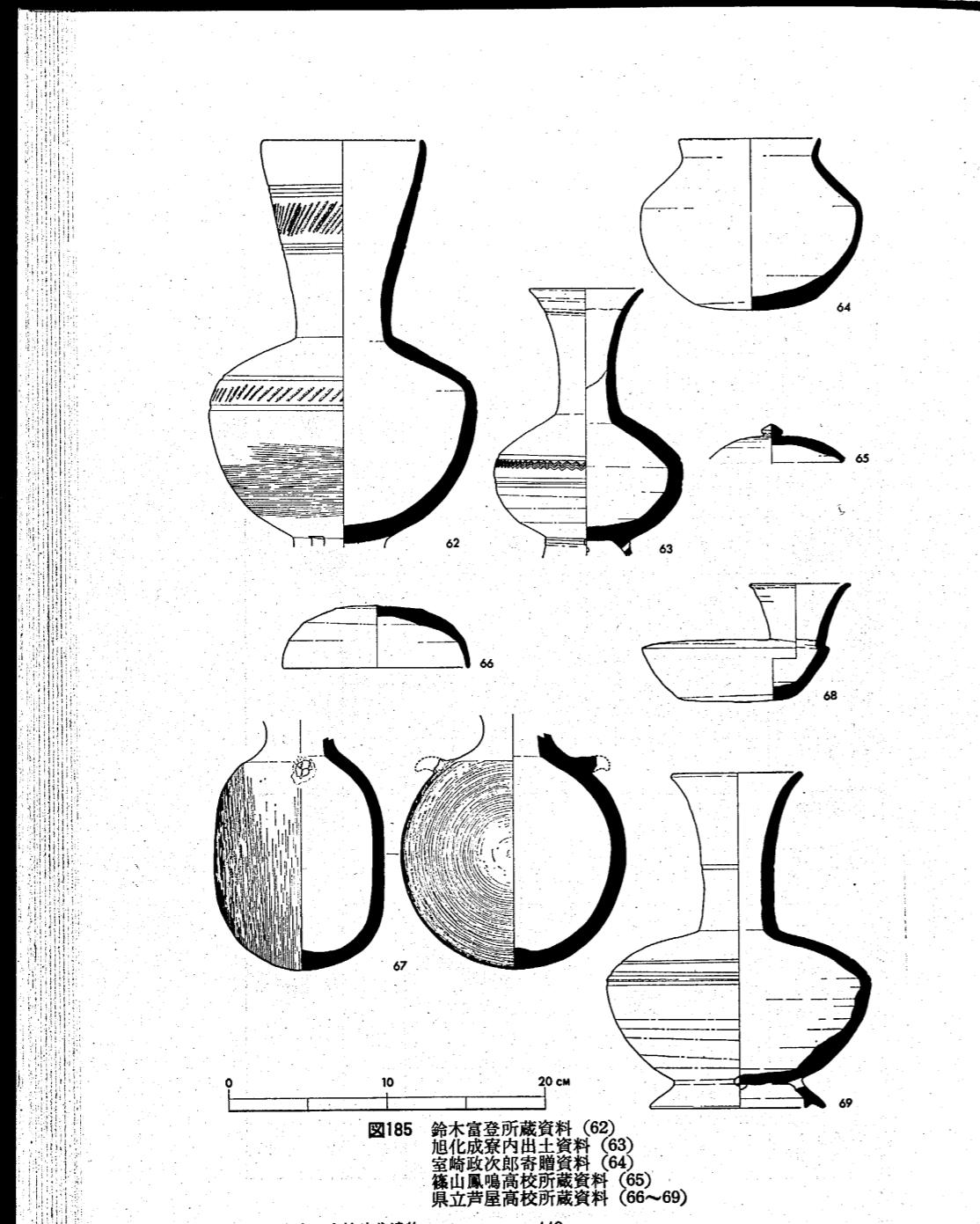


図185 鈴木富登所蔵資料(62)
旭化成寮内出土資料(63)
室崎政次郎寄贈資料(64)
猿山鳳鳴高校所蔵資料(65)
県立芦屋高校所蔵資料(66~69)

4 市内出土の古墳時代遺物

— 449 —

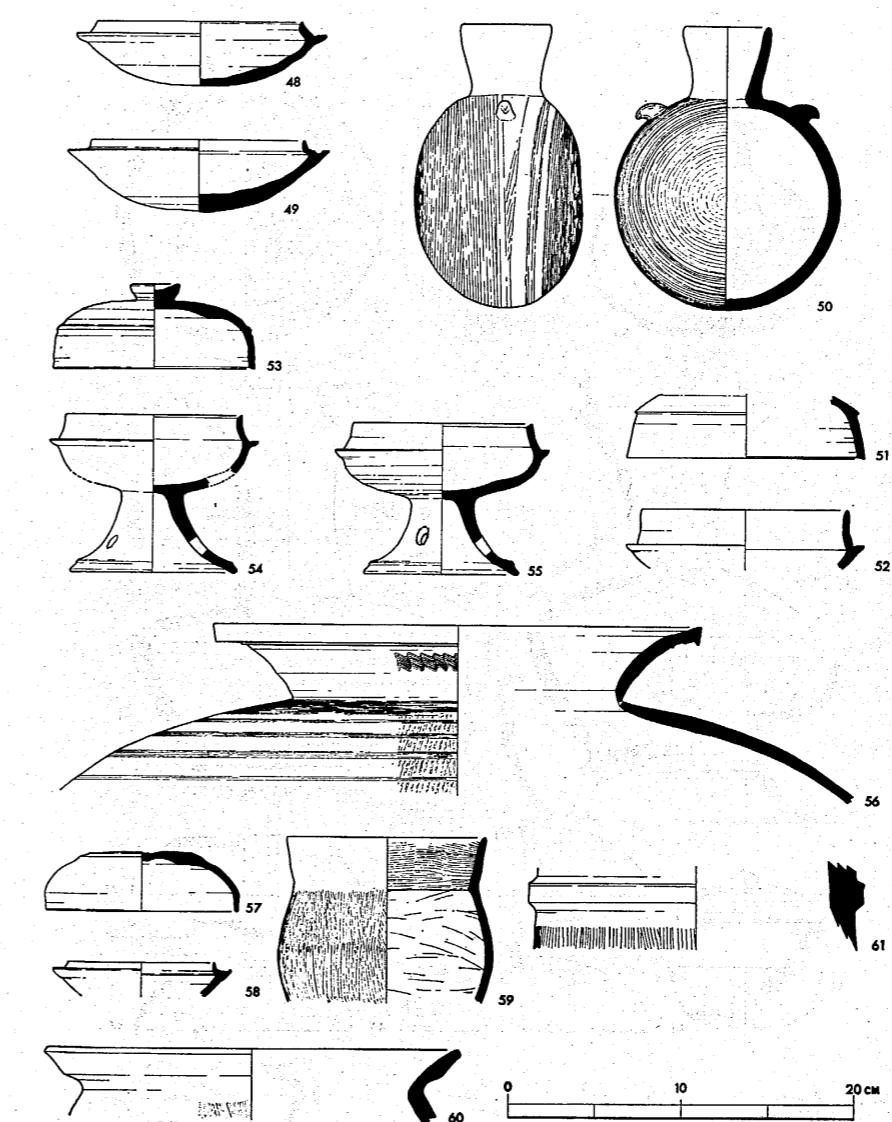


図184 神井建設工業株式会社所蔵資料(48~50)
三条町240番地出土資料(51~61)

— 448 —

第3章 古墳時代

支群名	古墳名	石室 形態模式	床面	規 模		告書 種
				玄室	羨道	
朝日ヶ丘	1号		粘土床	3.4×1.9	2.7×1.3	文化財調査 第4集
	2号		石敷	7.0×1.9		夕
岩ヶ平	A号		夕	4.5×1.5	3.7×1.5	才夕
	B号		夕	5.1×1.8		才夕
	C号		夕	3.7×1.8	5.3×1.2	夕
	E号		粘土床	3.5×1.6	3.9×1.0	文化財調査 第5集
	12号			△4.6×1.3	△3.0×1.0	2号墳測量
	13号			△4.4×1.8	△3.6×1.2	3号墳測量
	14号			△3.3×1.3	△3.4×1.0	4号墳測量
	15号		△石敷	0.8×1.0		△5号墳発掘 告
老松町	1号			中央部 △5.0×1.3 (1.5)		熊田種次氏 志
苦楽園	1号		粘土床	5.95×1.2		文化財資料 木
	2号		夕	5.5 ×1.25		夕
	5号		夕	5.6 ×1.08		五番町5、7、 調査概報
	7号			△3.2 ×1.14		夕
	8号			△5.4 ×1.14		夕
剣谷	1号		石敷	2.0 ×1.5		文化財調査 第4集

表76 八十塚群集墳構成一覧表

支群名	古墳名	石室 形態模式	床面	規 模		埋 葬		須 惠 器						土 師 器			鉄 器			装 身 具			外部施設	時 期	石室開口方位	石材種類	石材使用法	報 告 書			
				玄 室	羨 道	棺 棺	追 葬	坏 身	坏 盖	高 坏	隨	壺	長頸壺	器 台	平 瓶	提 瓶	皿	坏	蓋	釘	刀	刀子	耳環	小玉	管 玉						
朝日ヶ丘	1号		粘土床	3.4×1.9	2.7×1.3	木棺	△有			3										○		○	ガラス 1			△無	6.C.後	南東	割石	横	芦屋市文化財調査報告、第4集
	2号		石敷	7.0×1.9		木棺	△有	4	1	3				1						○			金 1			△無	6.C.後	夕	夕	夕	夕
岩ヶ平	A号		夕	4.5×1.5	3.7×1.5	木棺 陶棺	有	6	8	6	1							1		○	○	○	銀 3			無	6.C.末	夕	自然石	横・縦	夕
	B号		夕	5.1×1.8		木棺	夕	6	3	2				1						○		○	銀 1	ガラス 1		△無	7.C.前	南西	割石	横	夕
	C号		夕	3.7×1.8	5.3×1.2	夕	夕	2	3	5	1	3	1						1	○	○		銀 6	滑石 1	1	無	7.C.前	南東	夕	夕	夕
	E号		粘土床	3.5×1.6	3.9×1.0	夕	無	6	9	3				1	1					○	○		△金 2			無	6.C.後	夕	夕	夕	芦屋市文化財調査報告・第5集
	12号			△4.6×1.3	△3.0×1.0																						南西	夕	夕	夕	八十塚12号墳測量調査
	13号			△4.4×1.8	△3.6×1.2																						南西	夕	夕	夕	八十塚13号墳測量調査
	14号			△3.3×1.3	△3.4×1.0																						北東	夕	夕	夕	八十塚14号墳測量調査
	15号		△石敷	0.8×1.0		△木棺														○				無			南西	夕	夕	夕	八十塚15号墳発掘調査報告
老松町	1号			中央部 △5.0×1.3 (1.5)						1					2					△金 1							夕	夕	夕	夕	芦屋市熊田種次氏探史日誌
苦楽園	1号		粘土床	5.95×1.2		木棺	有	2	2		1	1						△鉢 1		○					外区列石	6.C.末	南東	夕	夕	西宮市文化財資料3号	
	2号		夕	5.5×1.25		木棺	夕	2	8	2		1					1			○			金 2			夕	6.C.末	夕	夕	夕	夕
	5号		夕	5.6×1.08		木棺	無	4	5										○			金 1			夕	7.C.初	南西	夕	夕	夕	苦楽園五番町5.7、8号墳調査概報
	7号			△3.2×1.14																						夕	夕	夕	夕	夕	
	8号			△5.4×1.14													1		○						夕	夕	夕	夕	夕		
剣谷	1号		石敷	2.0×1.5		木棺		1	1								1			○				△無	7.C.中	南	夕	夕	芦屋市文化財調査報告・第4集		

第四章 歴史時代

1 研究史

条里制 歴史時代の芦屋に関する記録は政情の変化を示すものと紀行的記録に代表される。一般的には交通上すぐれた立地の故に通過・中継地点として注目されていたらしい。しかし開発が進んでいた地域であることは考古学上の遺物からも認定されるところであり、⁽¹⁾ 菅原郡条里も施行されており、吉井良尚・落合重信の考証が知られている。山津波その他の地貌の変動で、現在では市域内で条里遺制の痕跡は遺存しない。

仏教文化 仏教文化とその遺跡を代表するのは芦屋廃寺址であるが、近世には⁽⁴⁾ 摂津志・元禄五年寺社御改委細

帳⁽⁵⁾・摂津名所図会⁽⁶⁾・摂陽群談⁽⁷⁾などで若干の考証がおこなわれ、いずれも行基による開基を推定している。その後、明治四十一年（一九〇八）七月に神戸史談会の手で西

山町西ノ坊の地域を発掘調査したことが本格的な研究の第一歩となり、福原潛次郎・柄木順作⁽⁸⁾・田沢金吾⁽⁹⁾・藤沢一夫らの考証・研究が展開された。その後、昭和三十一年の芦屋市史本篇と昭和三十二年の史料篇で一応の集成がなされたが、昭和四十二年に遺跡推定地の全域発掘調査を実施することにより、芦屋廢寺址の全貌が明らかにされ、奈良時代前期より近世まで継続して遺構と遺物が存在することが判明した。⁽¹⁰⁾

また打出觀音堂に安置されている木造十一面觀音立像について⁽¹¹⁾ は武藤誠の考証がある。

阿保親王 宮廷貴族の関係については阿保親王と在原業平が代表として取上げられている。阿保山親王寺縁起・龜祖阿保親王尊廟竹園之伝記をはじめ近世以降の地誌類には必ず記録されている。しかし阿保親王墓に関する調査では長州藩が村田清風に命じて考證調査をした成果が最も精緻なものであった。

総合研究 地元での芦屋市域全般にわたる郷土史的な研究は精道小学校訓導であった松田直一（博忠）の「芦屋誌」にはじまるといつてよい。昭和初年のことである。前述の近世地誌類のほかに、近代に入つて作成された「芦屋村誌」・「三条村誌」・「津知村誌」（何れも明治十七年作成）などの段階を経て、学問的成果にもとづく昭和三十一年の芦屋市史本篇が誕生する。これは周辺都市の市史編纂事業の先駆的役割を果す業績でもあった。

- (1) 芦屋市文化財調査報告第七集 村川行弘「芦屋廃寺址」昭和四十五年三月
- (2) 兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告第十一輯 吉井良尚「武庫郡の条里」昭和九年

- (3) 落合重信「条里制」吉川弘文館 昭和四十二年
- (4) 並河誠所「摂津志」享保十九年
- (5) 元禄五年十月十一日 猿丸吉左エ門藏
- (6) 秋里篤島「菟原郡」寛政八年
- (7) 岡田侯志撰「元禄十四年」
- (8) 福原潛次郎「芦屋の里」明治四十年
- (9) 柄木順作「塙通山庄故事」昭和十一年
- (10) 田沢金吾「法恩寺と古瓦」郊外生活第二編第三号昭和十一年
- (11) 藤沢一夫「摂河泉古瓦様式分類の一試企」東京考古学会「打出觀音堂の十一面觀音像」昭和十一年
- (12) 芦屋市文化財調査報告第七集 村川行弘「芦屋廃寺址」昭和四十五年
- (13) 兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告第十三輯 武藤誠「打出觀音堂の十一面觀音像」昭和十一年
- (14) 福原養鏡・兵庫名所記・日本輿地通志・播磨名所巡覧図絵・葦の浦風・葦屋の浦風・阿保山親王寺縁起・芦屋の里・打出史話・西摂大觀・武庫郡誌・武庫の川千鳥などが著名である。
- (15) 山口県文書館蔵「阿保親王御廟詔議」（毛利家文書）
- (16) 「芦屋市史」年表 昭和二十八年 「芦屋市史」史料篇第一 昭和三十年 「芦屋市史」本篇 昭和三十一年 「芦屋市史」史料篇第二 昭和三十二年 「新修芦屋市史」本篇 昭和四十六年

2 芦屋廃寺址

A 遺跡の概要

地理的環境 芦屋廃寺址は芦屋市西山町一三四番地に所在し、旧摂津国菟原郡芦屋村西ノ坊の地域である。秩父古生層風化土層を代表とする六甲山系の南面する小山塊が急傾斜して沖積平野に接続する山麓線・すなわち傾斜転換線上の標高三四一三〇メートルの位置に立地している。地盤調査では、六甲山系の南斜面の扇状地性の冲積段丘で、地表部の表土層（約四〇センチ）を除いては花崗岩の風化によつて生成された真砂土から成りたつており、主として粗粒の砂であるが、なかには砾の混入している部分もみられるとしている。

寺址の伝承 元禄五年（一六九二）十月十一日の「寺社御改委細帳」に最もくわしいが、塩通山法恩寺と称した寺院で、行基の開基であり、在原業平が伽藍を建立し、

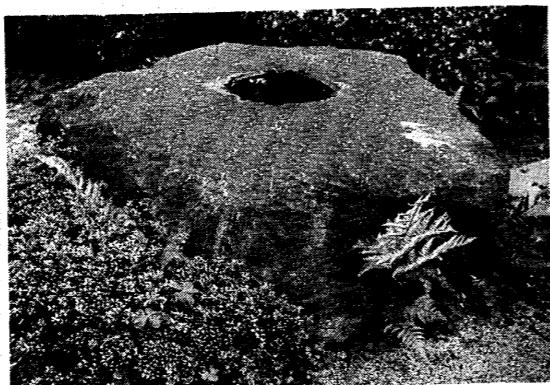


写真120 芦屋廃寺址塔心礎

平が調査した際には、「摂津名所図会」所収の薬師堂址を確認し、遺存した礎石を東塔礎石と推定した。⁽⁶⁾その後、昭和四十二年にマンション造成がなされることになったため、昭和四十二年十月より四十三年八月まで三次にわたり、芦屋市文化財調査報告書第七集昭和四十五年⁽⁷⁾たって全域の発掘調査がなされた。

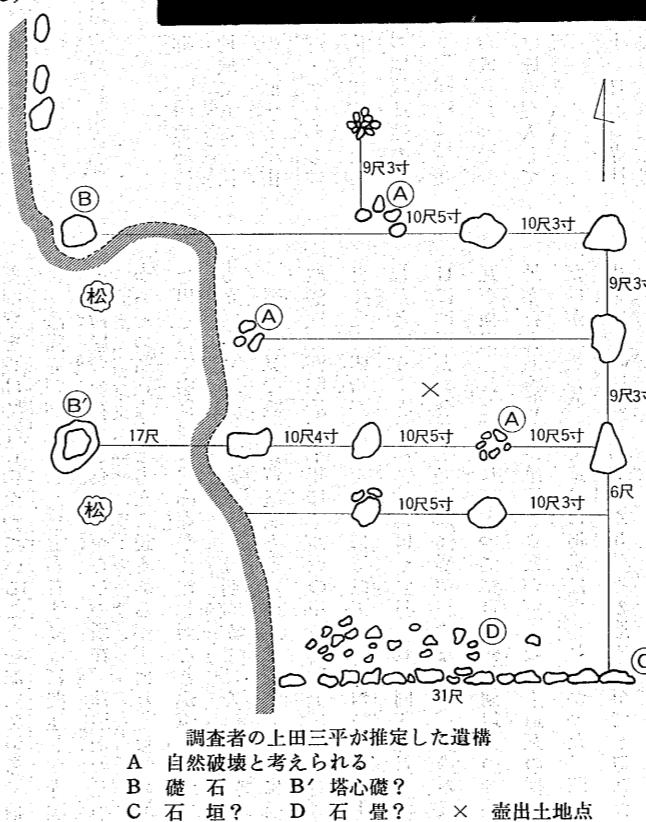
礎 石 現在は猿丸吉左エ門の所有で、径一三〇センチ、高さ約五〇センチのほぼ五角形の自然石面上の中央部に径三一センチ、深さ一六センチの枘孔を設けた奈良時代前期の形式を示すものである。おそらく創建当初の塔心礎と考えられる。伝承では枘孔内にたまつた水を「イボ落し」に使っていたという。

- (1) 東建地質調査KK 「地盤調査報告書」 稲葉隆一担当 昭和四十二年八月
- (2) 天平十九年二月十一日 「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」など
- (3) 草屋藏・摂津国菟原郡草屋郷・倉司草屋君・倉部草屋倉人・草屋漢人(太田亮「日本上代における社会組織の研究」一〇四二頁)
- (4) 延喜式二十八兵部・諸国駅伝馬・摂津国駅など
- (5) 文明五年「北野社領諸国所々目録」
- (6) 昭和十一年六月十六日 魚澄惣五郎宛書翰(武藤誠蔵)
- (7) 「芦屋市文化財調査報告書」第七集 昭和四十五年

写真119 昭和11年の調査地域
(藤沢一夫撮影)



図186 昭和11年当時の薬師堂跡の実測図
(武藤誠記録による)



B 発掘調査

発掘調査の概要 第一次調査では遺跡地の北半部を七本のトレンチで調査した。部分的に整然とした土層を保つてゐるトレンチもあつたが大半は攪拌層で、遺物も各時期のものが混在してゐた。土師器・須恵器・瓦器・黒色土器・瓦釘・瓦・開元通宝・猿の面などのほか、土師器の併せ口式小甕棺も検出された（A地区）。

第一次調査は南半部薬師堂址地区を中心に十本のトレ



写真121 B 拡大地区焼面

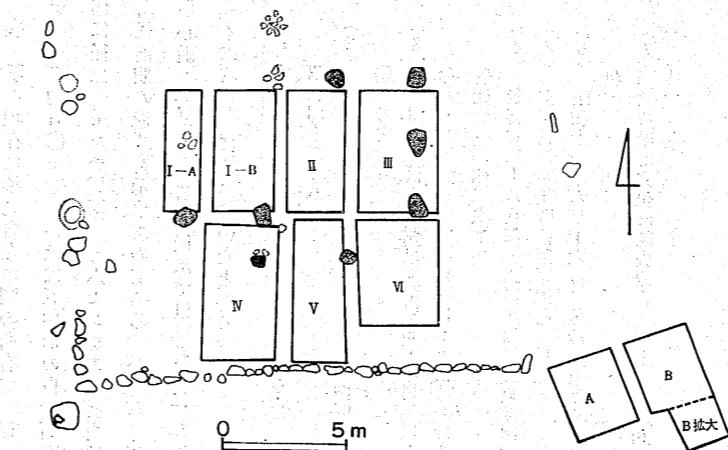


図187 薬師堂址・C地区トレンチ実測図

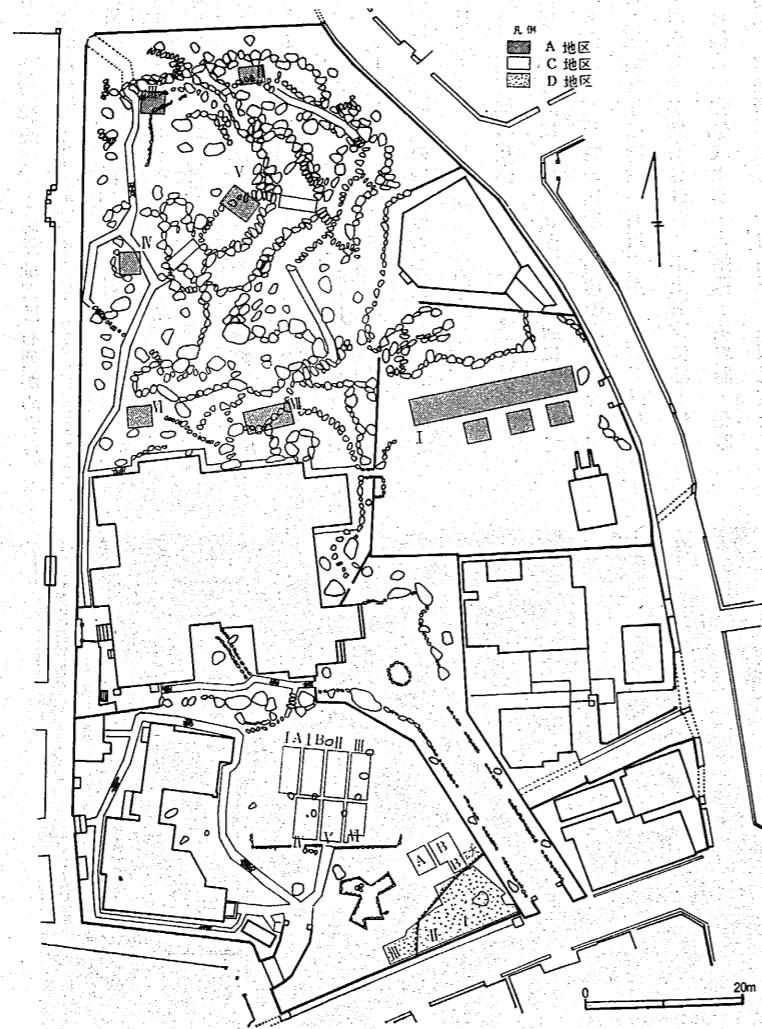


図188 全域実測図と調査場所

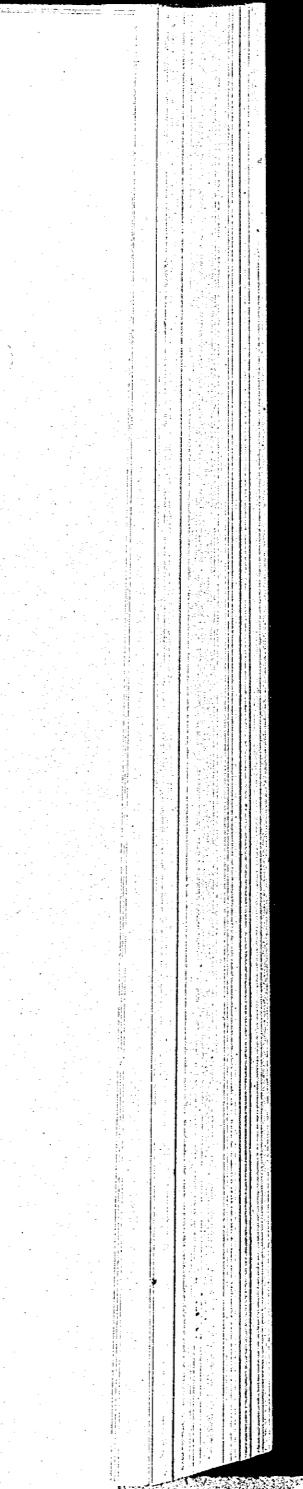


写真122 D 地区の瓦層
ンチを入れた。この調査で、薬師堂址には石列がめぐらされ、東西三間・南北二間の建物が存在したことを示す八個の礎石が検出された。土層は礎伴されていたが、第V様式の弥生式土器・サヌカイト片・土師器・須恵器・瓦などが検出された。

注目されるのはB拡大トレンチで、鎌倉・室町期の瓦層が焼面とともに遺存し、漆喰塗りの白壁片や木炭とともに検出され、何らかの建物が西南の方向から東北の方に向に向けて焼失した痕跡を推測することが可能であった。時期的には瓦林政頼の鷹尾城の合戦と関係があるかも知れない焼層である(C地区) (写真121)。

第三次調査は南辺部の瓦が密集する地域を対象とした。この結果、部分的に多量の瓦が同一平面に密集して散布する地域があり、建物の崩壊と関連のある状況が知られた。また南端部には中世の石垣列があり、平行して近世の東川用水路址が検出された。出土遺物には多量の瓦のほか第III様式の弥生式土器・土師器・須恵器・瓦器・土錘・石錘・飯蛸壺形土器・蛤刃石斧・皇宋元宝など

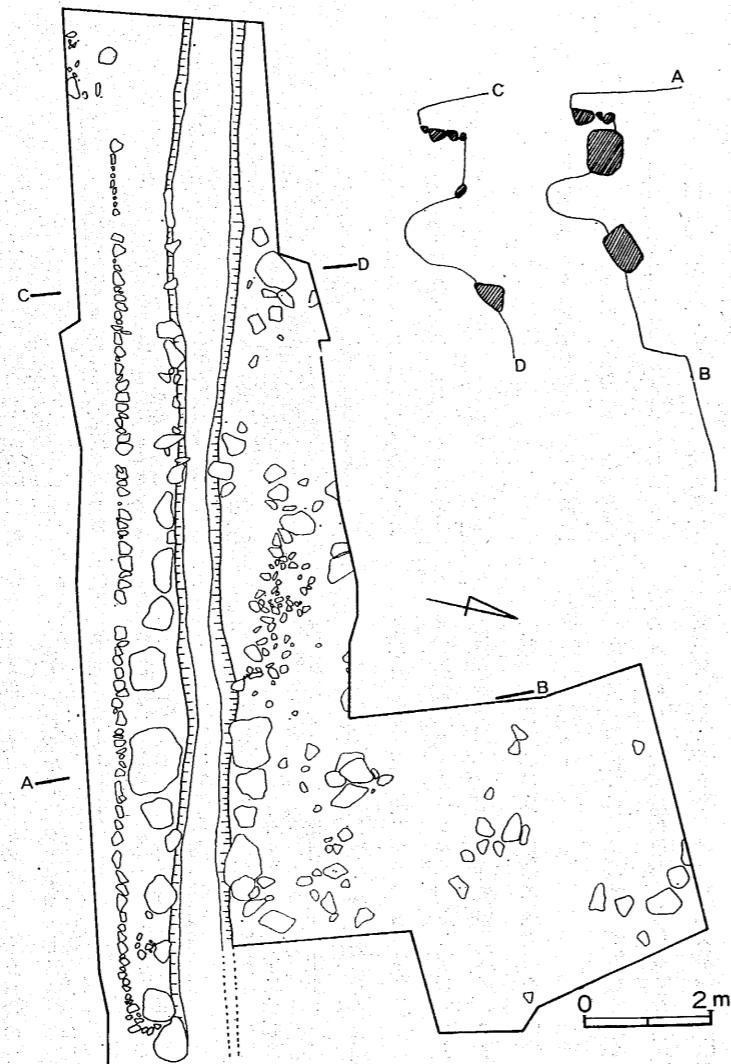


図189 中世石垣列(左)と東川用水路址(右)

表77 芦屋廃寺址出土瓦個数表

記号	面付瓦	丸瓦	平瓦	その他	計	備考	
						(個)	(個)
第一次調査	I ト レ	0	4	14	0	18	
	II ト レ	0	0	6	0	6	
	III ト レ	1	1	13	0	15	
	IV ト レ	0	4	11	0	15	
	IVとVの間	0	3	21	0	24	
	V ト レ	1	10	78	0	89	
	VI ト レ	0	0	2	0	2	
	不明	0	0	6	0	6	
	第1次調査合計	2	22	151	0	175	
	AYC-A	8	37	252	0	299	
第二次調査	AYC-B①	13	32	274	0	319	計 面付瓦21、丸瓦60、平瓦506 合計 585
	AYC-B②	8	28	232	0	268	
	AYC-IV①	8	35	169	0	212	計 面付瓦19、丸瓦100、平瓦486 合計 605
	AYC-IV②	6	28	183	0	217	
	AYC-IV③	5	37	134	0	176	
	AYC-V①	1	4	130	0	135	計 面付瓦6、丸瓦26、平瓦269、合計 301
	AYC-V②	5	22	139	1	167	
	AYC-VI①	3	36	239	0	276	計 面付瓦11、丸瓦62、平瓦416 合計 489
	AYC-VI②	6	24	156	0	186	
	AYC-VI③	2	2	21	0	25	
第三次調査	第2次調査合計	65	285	1,929	1	2,280	
	AYD-I①	2	42	151	0	195	計 面付瓦45、丸瓦141、平瓦921、他4
	AYD-I②	13	39	259	2	313	
	AYD-I③	15	26	309	1	351	合計 1,111
	AYD-I④	15	34	202	1	252	
	AYD-II①	19	25	255	0	299	計 面付瓦60、丸瓦127、平瓦1,191、他12
	AYD-II②	8	17	185	5	215	
	AYD-II③	7	18	158	0	183	合計 1,390
	AYD-II④	12	25	237	2	276	
	AYD-II⑤	6	23	222	2	253	
	AYD-II⑥	8	19	134	3	164	
不 明	AYD-III①	10	14	152	0	176	計 面付瓦17、丸瓦44、平瓦372、他2 合計 435
	AYD-III②	7	30	220	2	259	
	不明①	7	28	186	0	221	計 面付瓦15、丸瓦47、平瓦435 合計 497
	不明②	8	19	249	0	276	
総合計	第3次調査合計	137	359	2,919	18	3,433	
	総合計	204	666	4,999	19	5,888	

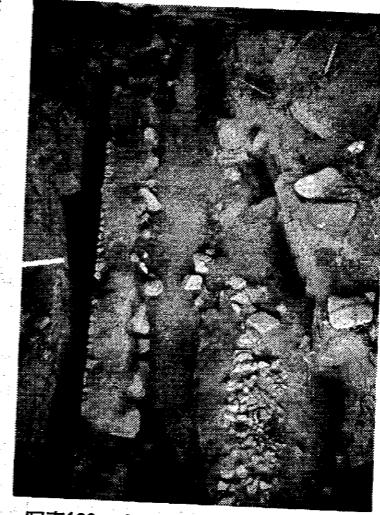


写真123 中世の石垣列と東川用水路

資料を伴った生活址をのこし、奈良時代の寺院址さらに関連した日常生活用の土器類・土窯類をのこしている。

C 出土遺物

以上のように芦屋廃寺址の全域調査によつて、当地域が弥生時代第Ⅲ様式の時期以来の生活の場であったこと、このことは会下山に代表される高地集落の住人とその直下の山麓住人が同時期に存在したことなどを示す提供した。ついで古墳時代にも漁業を営んだことを示す

土師質壺 昭和十年の造成工事中に薬師堂址の地域で表土下一メートルの擾伴土層から出土した。径一七・二センチの口縁部内側に割り込みをもち、口縁部は短かくくびれて径一五・四センチ、胴部最大径は二四・四センチ、全高二八・六センチの円形丸底壺である。全面に叩き目を残すが、口縁部と口縁部は無文で総体的に灰褐色を呈し、部分的に黒褐色の焼成である。蔵骨器としての用途も考えられる。

遺瓦 遺物はC・D地区に密集しているが、各時期の瓦の散布状況には特色がみられる。軒丸瓦は複弁花文系三種・細弁花文系二種・重圓文系四種・巴文系十種に分類され、軒平瓦は唐草文系十一種・重弧文系四種・波

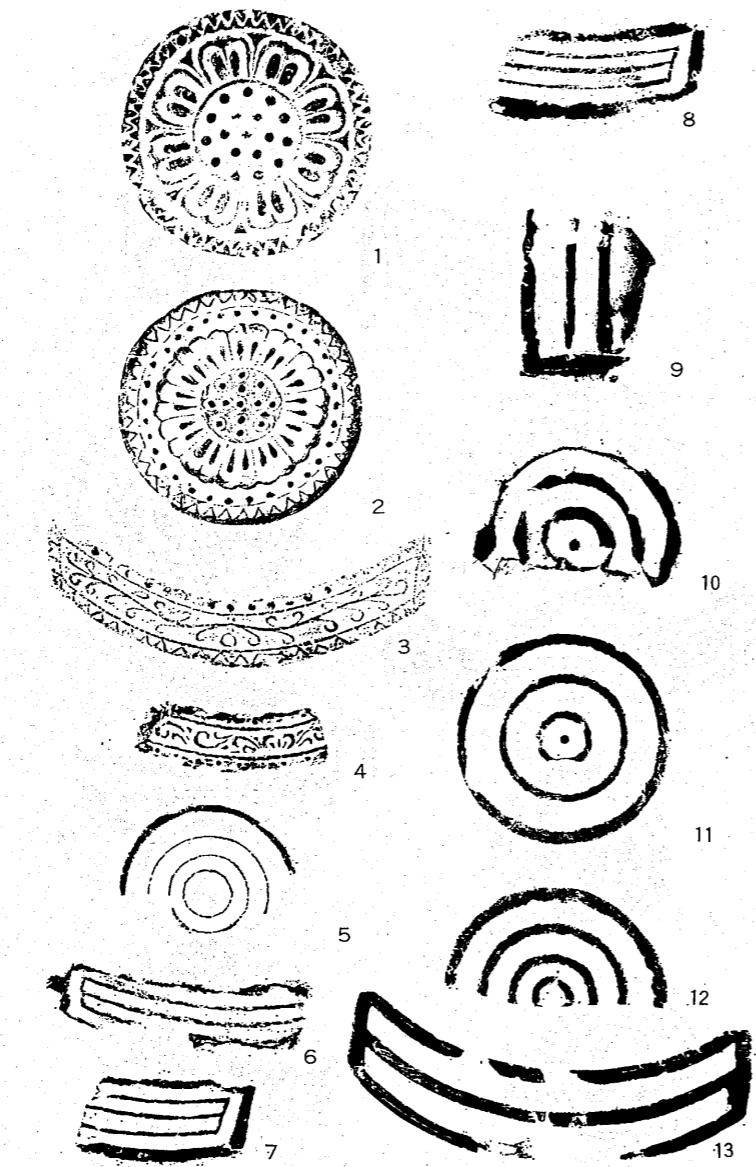


図191 出土瓦の拓本

2 芦屋廃寺址

- 465 -

文系二種・連珠文系一種・その他鬼瓦三種・火舍香炉・雁振り・各種の壇に分類される。創建当初は埴築基壇をもつた寺院であったことが想定される。

発掘調査によつて出土した遺瓦の集計は表77のとおりであり、遺瓦の時期と種類は表78のように奈良時代前期から近世まで続続しており、阪神間における遺瓦の一標

瓦の種類	軒丸瓦	軒平瓦	鬼瓦
奈良前期(白鳳)	○	△	
藤原宮期	○	○	
平城宮期		○	
後期難波宮期Ⅰ	○	○	○
後期難波宮期Ⅱ	○	○	
奈良末～平安初	○	○	
平安前期	○	○	
藤原期Ⅰ	○	△	
藤原期Ⅱ	○	△	
藤原期Ⅲ	○	△	
藤原期Ⅳ	○	△	
鎌倉期Ⅰ	○	○	○
鎌倉期Ⅱ	○	○	○
室町期Ⅰ	○	○	
室町期Ⅱ	○	○	
室町中期		○	
室町以降		○	
江戸期	○	○	

表78 遺瓦の時期と種類

式を示している(遺瓦の分類は藤沢一夫の協力をうけた)。

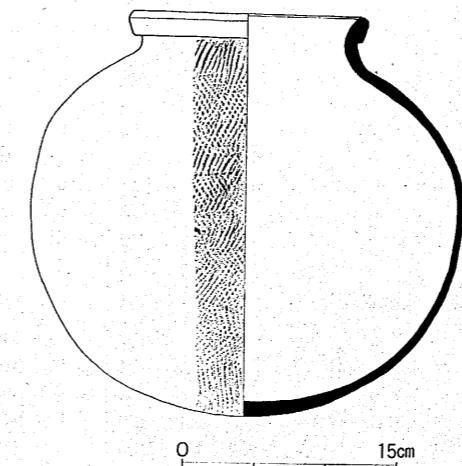


図190 土師質壺実測図

- 464 -

第4章 歴史時代

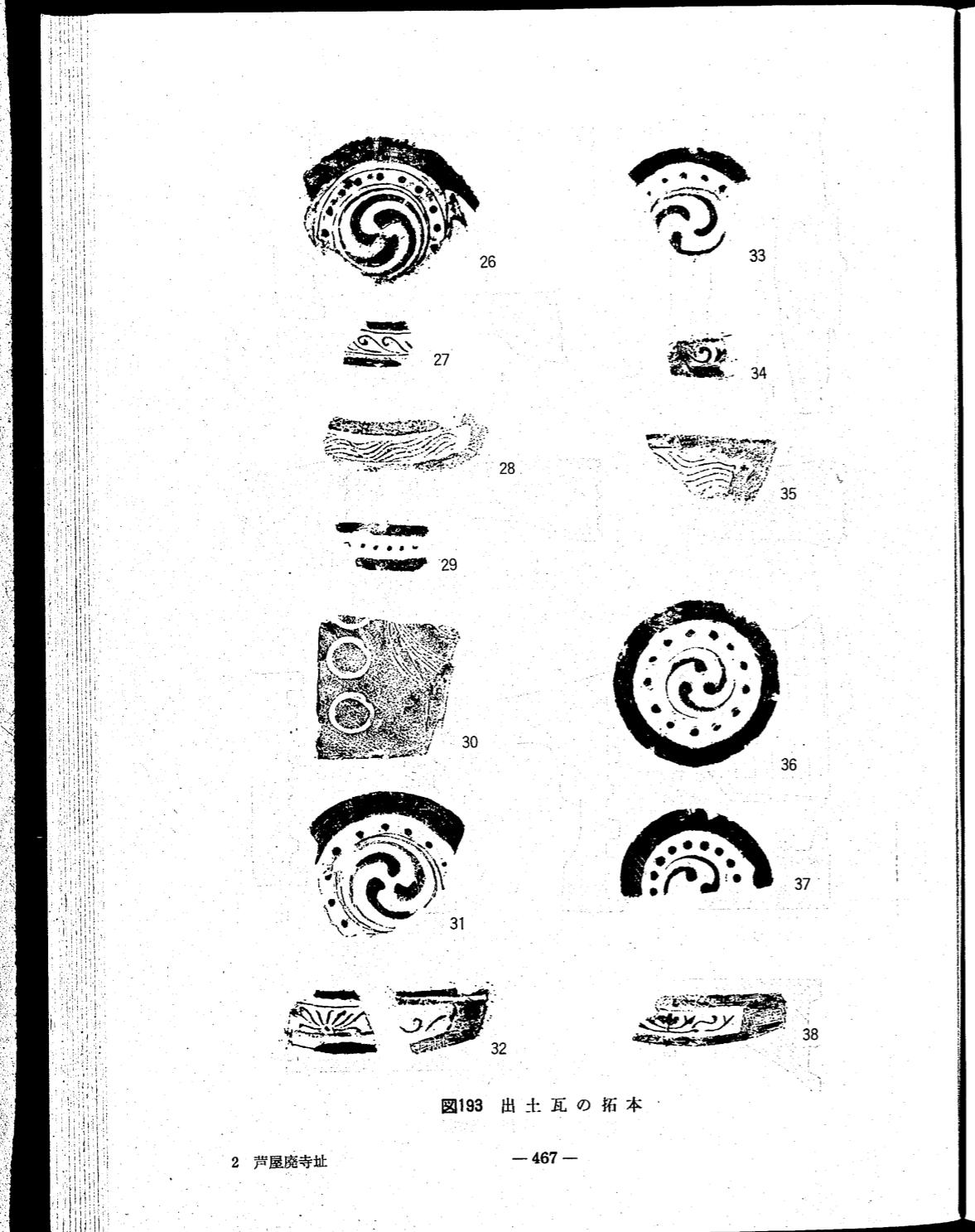


図193 出土瓦の拓本

2 芦屋廃寺址

- 467 -

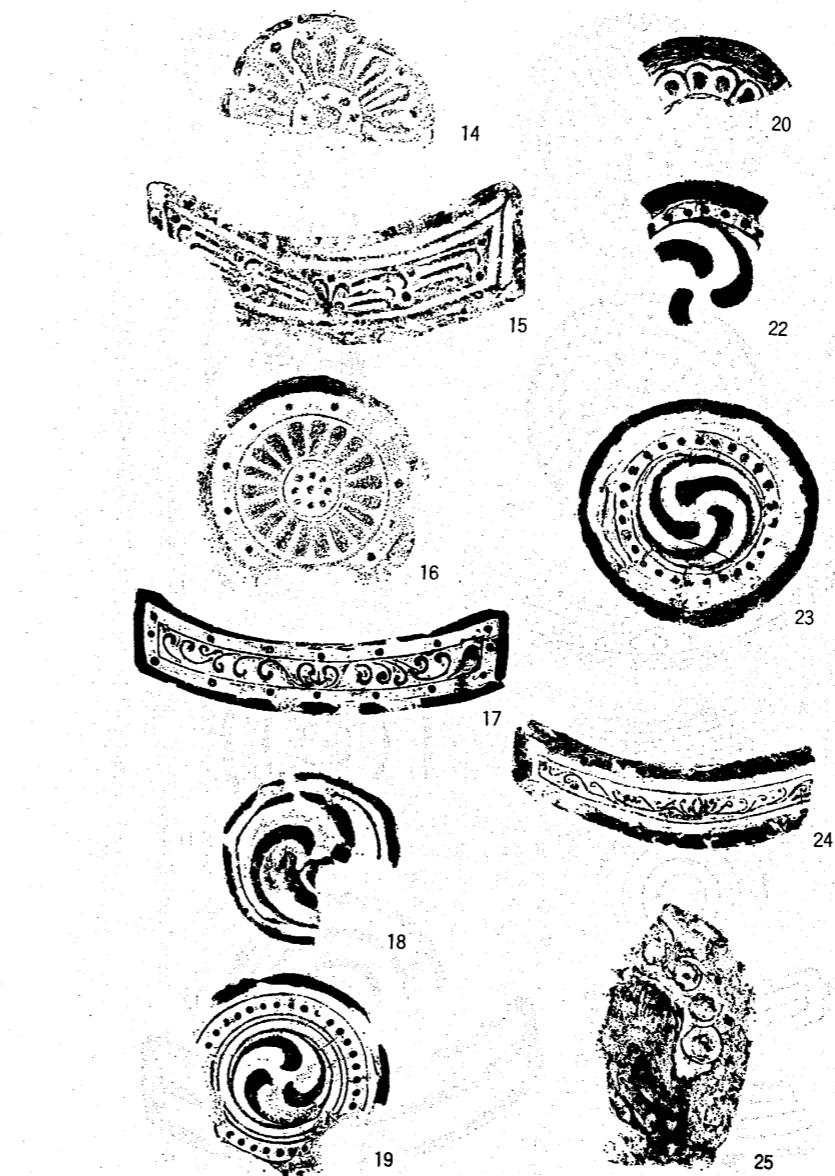


図192 出土瓦の拓本

第4章 歴史時代

- 466 -

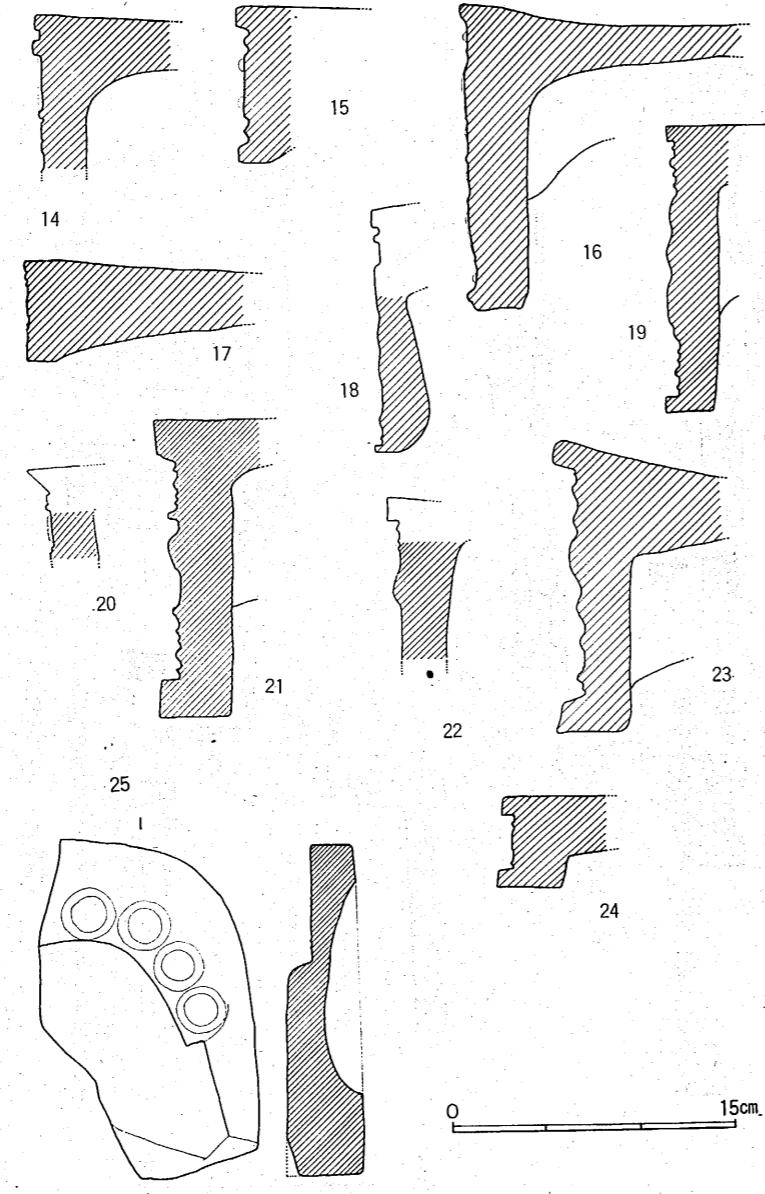


図195 出土瓦実測図

2 芦屋塙寺址

— 469 —

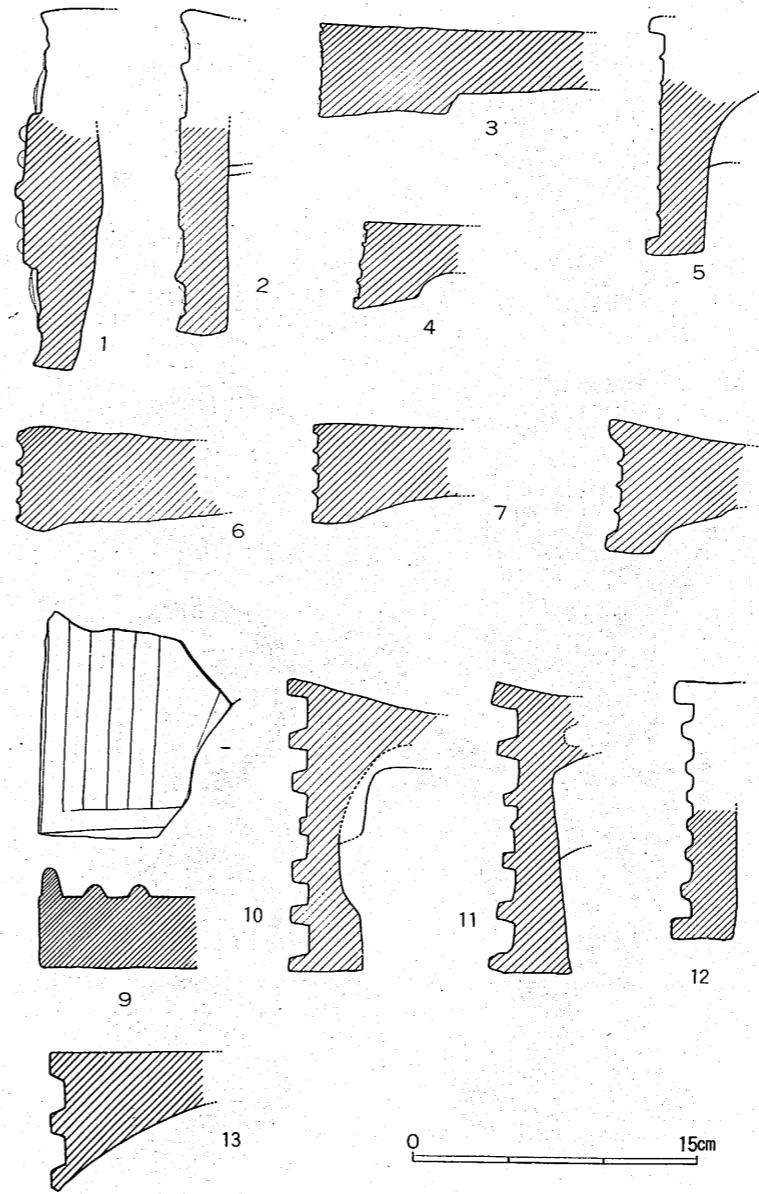


図194 出土瓦実測図

第4章 歴史時代

— 468 —

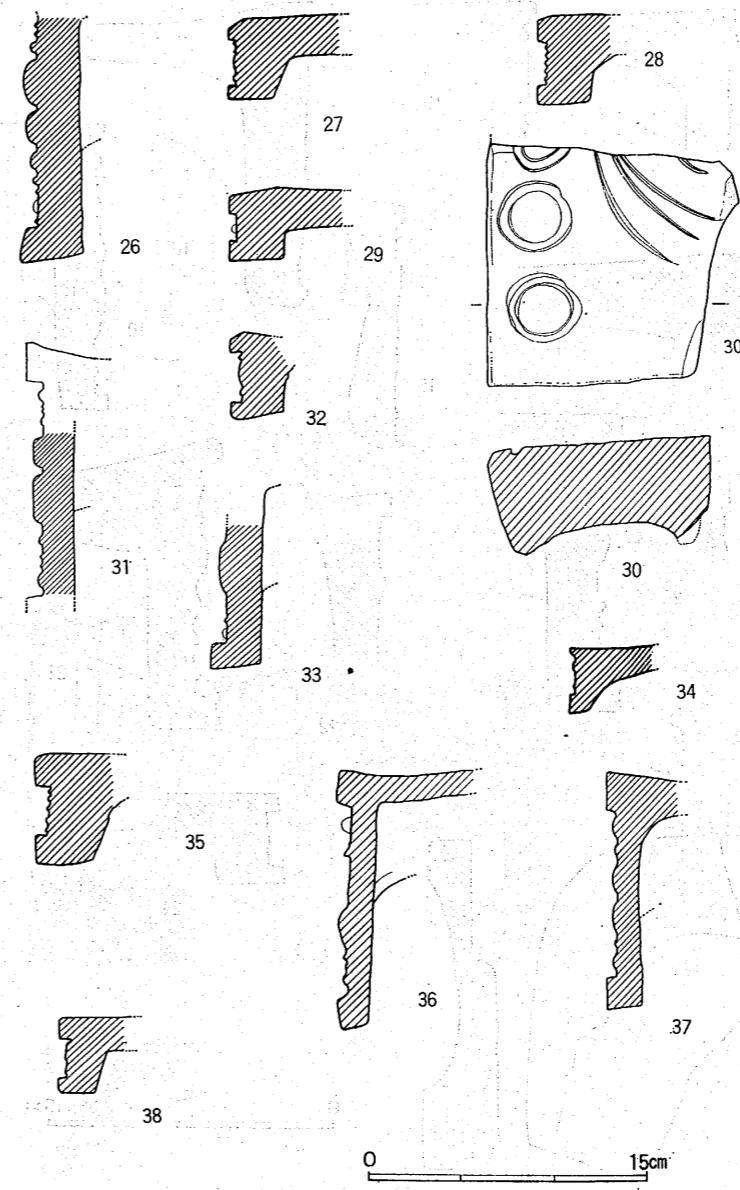


図196 出土瓦実測図

- 470 -

第4章 歴史時代

鋸歯文縁珠文帶複弁花文式軒丸瓦 ②

面高六・九センチ。C—I地区出土。

重弧文式軒平瓦 ⑧

面高六・四センチ。柄木採集品にあり。

面径一七・四センチ、縁部厚さ三・七センチ、中房の径五・八センチ、蓮子一・四・八。C—I地区出土。

D—I地区出土。

唐草文軒平瓦 ③

唐草文軒平瓦 ④

面高五・一センチ。柄木採集品にあり。

〈平城宮期〉

唐草文軒平瓦 ⑤

面高五・一センチ。柄木採集品にあり。平城京でも古い段階のものである。

〈後期難波宮期 I〉

重圈文軒丸瓦 ⑩

面高一五・六センチ、縁部厚さ四・七センチ、中央に一粒の蓮子。柄木採集品にあり。

C—I地区出土。

重弧文式軒丸瓦 ⑥

面高六・八センチ。C—I地区出土。

重弧文式軒平瓦 ⑦

面高七・四センチ。D—I地区出土。

〈奈良末—平安初期〉

- 2 芦屋廃寺址
- 471 -

- 平縁珠文帶劍状花文軒丸瓦 ⑭
面径一五・八センチ、縁部厚さ一・九センチ、径四・六センチの四んだ中房内に一・五・八の蓮子をもつ。柄木採集品にあり。
- 唐草文軒平瓦 ⑮
面高八・七センチ、面幅三〇・二センチ。C地区、D—I地区、猿丸採集品にあり。
- 〈平安前期〉
平縁珠文帶單弁花文式軒丸瓦 ⑯
面径一五・七センチ、縁部厚さ三・一センチ。採集品には完形品あり。C地区出土。
- 唐草文軒平瓦 ⑰
面高五・五センチ、面幅一七センチ。C—I地区より完形品出土。
- 〈藤原期 I〉
平縁巴文軒丸瓦 ⑱
面径一三・二センチ、縁部厚さ二・九センチ。C—I地区より出土。
- 〈藤原期 II〉
平縁珠文帶重圈巴文軒丸瓦 ⑲
面径一五・二センチ、縁部厚さ一・四センチ。D—I地区より出土。
- 〈藤原期 III〉
複弁花文式軒丸瓦 ⑳
面径一五・三センチ、縁部厚さ二・九センチ。D—I地区より出土。
- 〈藤原期 IV〉
平縁珠文帶巴文軒丸瓦 ㉑
面径一六・二センチ、縁部厚さ二・九センチ。D—I地区より出土。
- 〈鎌倉期 I〉
平縁圈文珠文帶巴文軒丸瓦 ㉒
面径一四・八センチ、縁部厚さ一・六センチ。C地区より出土。
- 〈鎌倉期 II〉
平縁圈文珠文帶巴文軒丸瓦 ㉓
面径一六・四センチ、縁部厚さ三・二センチ。猿丸採集品にあり。
- 徑二・七センチの押型円文をもつ。C地区出土。
- 唐草文軒平瓦 ㉔
面高五・三センチ、面幅一七センチ。D—I地区瓦
散布層から出土。
- 鬼瓦 ㉕
面径一五・四センチ、縁部厚さ三・八センチ。D—I地区より出土。
- 〈鎌倉期 II〉
平縁重圈珠文帶巴文軒丸瓦 ㉖
面径一五・四センチと四・八センチをはかる同形式のものがある。D—I地区出土。
- 唐草文軒平瓦 ㉗
面高四・四センチ。D—I地区より出土。
- 波狀文式軒平瓦 ㉘
面高五・四センチと四・八センチをはかる同形式のものがある。D—I地区出土。
- 連珠文式軒平瓦 ㉙
面高四センチ。D—I地区出土。
- 鬼瓦 ㉚
面高四センチ。D—I地区出土。
- 〈江戸期〉

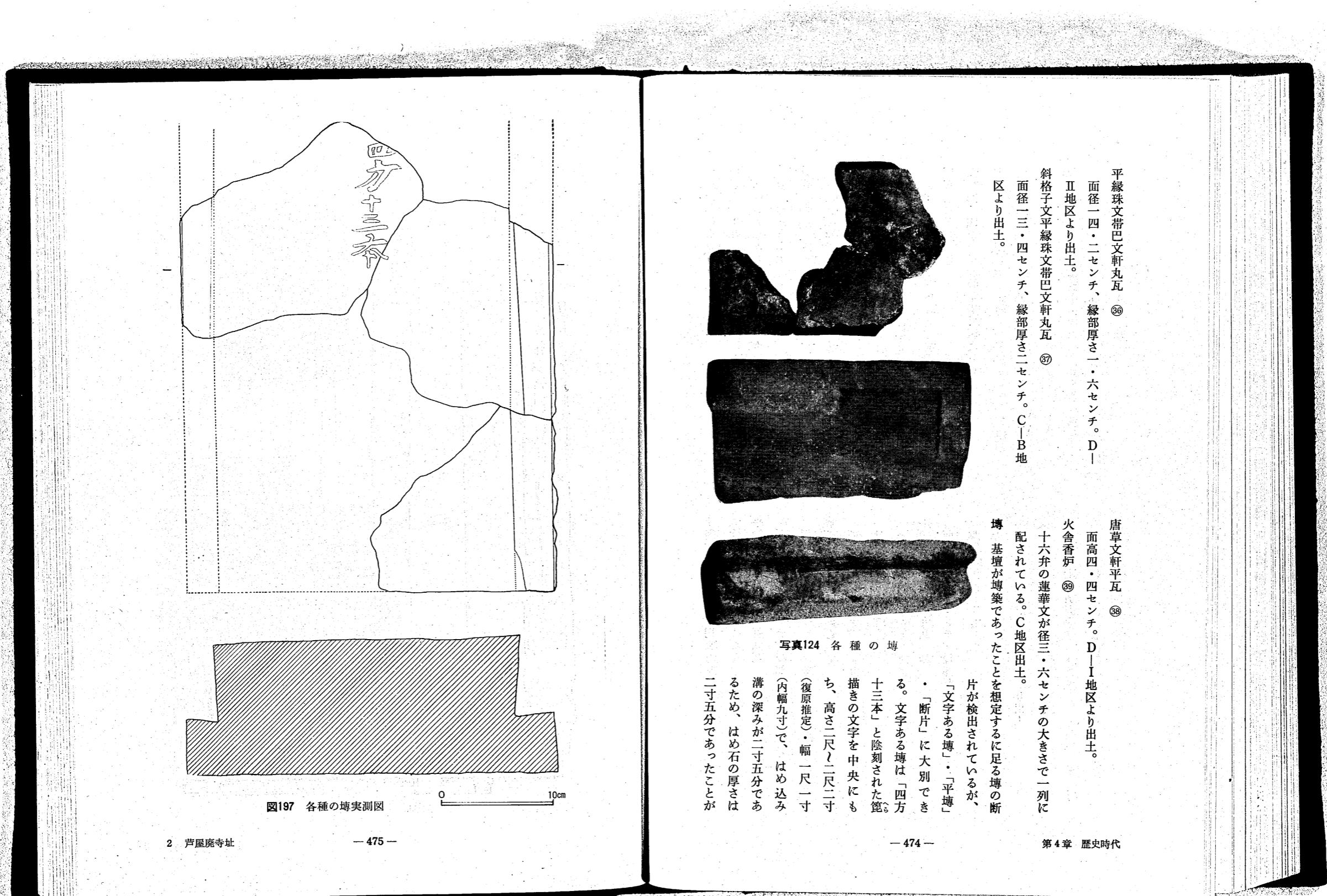


図197 各種の壇実測図

平縁珠文帯巴文軒丸瓦 ⑥

面径一四・二センチ、縁部厚さ一・六センチ。D—I
II地区より出土。

唐草文軒平瓦 ⑧

面高四・四センチ。D—I地区より出土。

火舍香炉 ⑨

十六弁の蓮華文が徑三・六センチの大きさで一列に

配されている。C地区出土。

壇 基壇が壇築であったことを想定するに足る壇の断

片が検出されているが、「文字ある壇」・「平壇」
・「断片」に大別でき

る。文字ある壇は「四方
十三本」と陰刻された箇
描きの文字を中央にも
ち、高さ二尺と二尺二寸
(復原推定)・幅一尺一寸
(内幅九寸)で、はめ込み
溝の深みが二寸五分であ
るため、はめ石の厚さは
二寸五分であったことが

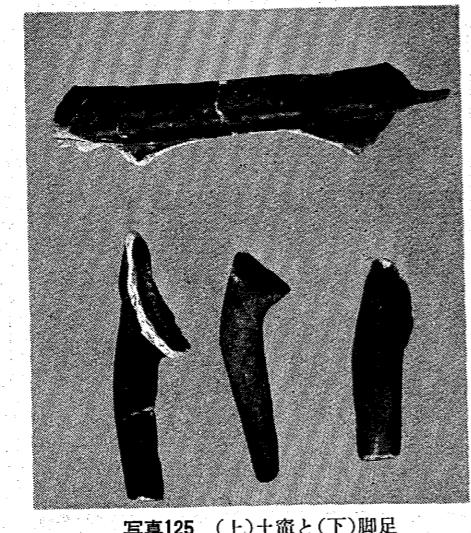


写真125 (上)土竈と(下)脚足

2 萩屋廃寺址

- 477 -

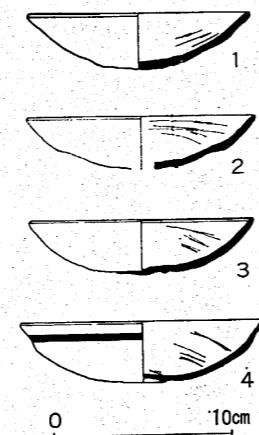


図200 瓦器碗の実測図

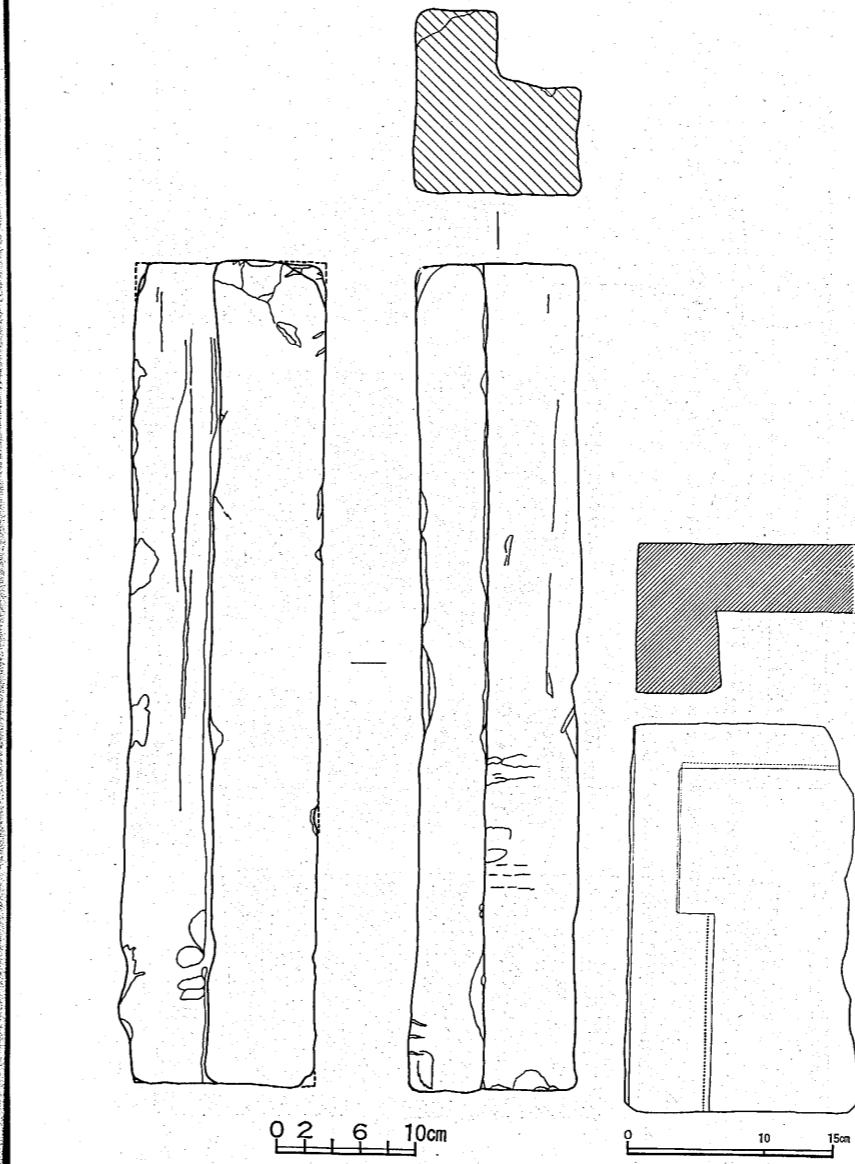


図198 各種の堀実測図

- 476 -

第4章 歴史時代

瓦 器 量は多いがすべて破片である。塊形土器と鼎形土器(土竈類)が主である。



図199 文字刻塙拓影

分る。おそらく四方位に十三本の束石を配し、隅の束石は四個で、一方(南方)に階段を想定すれば、一應南北二間・東西三間の基壇を復原想定することは可能である。平塙は一边が約一尺で、くり込みがあり、おそらく須弥壇の隅石で正方形であったと推定される。天平尺の一尺四方と推定してよからう。断片には、はめ込み用・受け支え用、あるいは溝状用途を考えさせるものもある。何れも須弥壇・基壇関係のものであろう。塙の時期は創建期と考えてよい。C地区に主として散布していた。

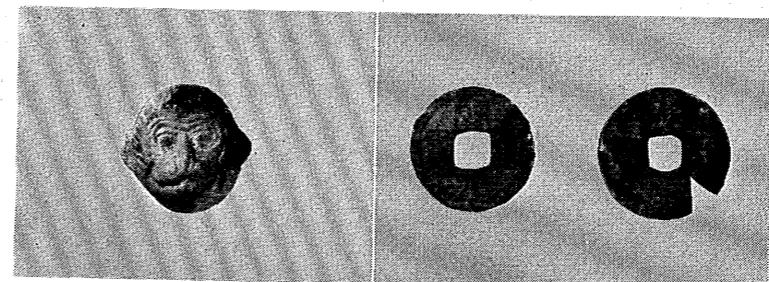
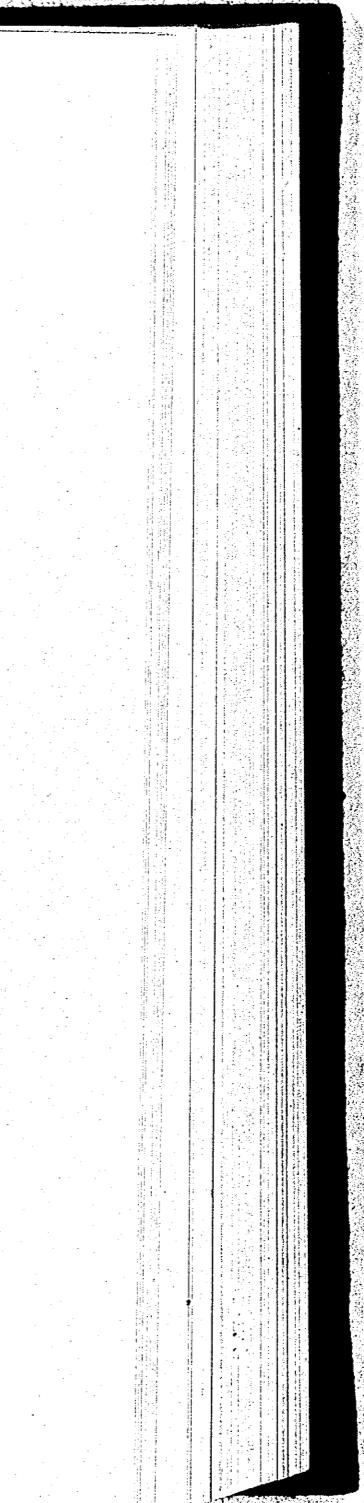


写真126 面子・古錢（左、開元通寶・右、皇宋元宝）

（塊1・2）
底部から口縁部にかけて指圧による凹凸があり、底部は箆整形。内面には箆描きの粗い暗文がある。
胎土は堅緻で焼成は黒灰色を呈す。口径は1が一二・四センチ、2が一二・七センチ。

（塊3）
底部に細い粘土をはりつけた高台をもつてゐるが、底部中央は高台よりもわずかに突出する。内面は箆描きの粗い暗文が

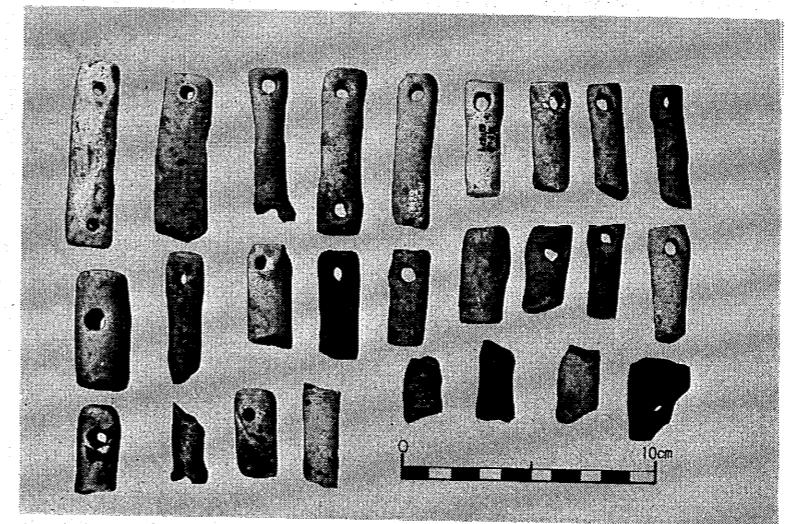


写真127 土錐

第4章 歴史時代

一のものもある。中央の影響をうけたものもあれば、地域的特色を示すものもある。同時に全く同一の型による瓦が広範囲に分布している実情を示してゐる。古代から近世に至る遺瓦が出土していることは、阪神間の遺瓦編年の上で標式的な意義をもつものといつてもよからう。遺構の主体は調査地域南端から以南と推定されるが、現在は市街地となり確認は困難な状況である。

（塊4）
底部にわずかに高台がつく。内面には粗い箆描き暗文がある。胎土は砂粒を含むが薄く仕上げられ焼成は黒灰色を呈す。口径は一二・七五センチ。
その他 破片であるが黒色土器・小形方形の印状圧痕を付した土師質土器片・土師質小壺のほか、瓦釘・開元通宝・皇宋元宝などの古錢・猿の面子（彩色・長さ二センチ・厚さ一センチ）さらにこの地域の住民の生活実態を知る手掛りともなる各時期にわたる土錐類などがある。

以上が調査概要であるが、奈良時代前期以来、近世まで継続存在した寺院址であったことが推定される。遺瓦は当寺址独自のものもあれば、周辺の猪名寺廃寺址・若王寺廃寺址（尼崎市）、伊丹廃寺址（伊丹市）、新免廃寺址（豊中市）、四天王寺・難波宮址（大阪市）などにみられるものもあり、さらに河内の舟橋や播磨の見野と同